

人情本代表作集

全


松葉屋内
染之助

菊川英山筆「娘風俗」


風流五節花鳥合
英山筆

近代日本文學大系 第二十一卷目次

小三金五郎 假名文章娘節用 …… [illegible]—四二
清談若緑 …… 四三—一九四
教外俗文 娘消息 …… 一九五—二九一
春色 景情 娘太平記操早引 …… [illegible]
辰巳 清談 梅の春 …… [illegible]
閑情末摘花 …… [illegible]—[illegible]

解題……文學博士　笹川種郎……卷頭一—二〇

目次終

解題

人情本の起原と變遷

文學博士 笹川種郎

敵討物は寛政九年頃よりそろ〳〵見え始め、其の派の元祖南仙笑楚滿人は、此の歳に『敵討姥捨山』三冊を著し、同十年には同じ人の『敵討柳下貞婦』三冊、式亭三馬の『富士[illegible]東海道女敵討』三冊出で、同十一年には十返舍一九の『殿下茶屋聚仇討』三冊、『敵討住吉詣』二冊、楚滿人の『敵討沖津白浪』あり、同十二年には楚滿人の『娘敵討故郷錦』三冊あり、享和元年二年三年を經て、次第に流行し、文化に入りては、黄表紙の作風一變して、敵討物全盛の世となり、山東京傳も曲亭馬琴も筆を這種の著作に染むることとなつた。馬琴が其の著すところの『敵討三人長兵衛』に、『金々先生榮花夢より草雙紙に滑稽をつくしたること二十餘年、中頃一變して不洒落となり、今又一變してゑいじめとなる、黒繻子の帶がすたると思へば、又流行り、長羽織が流行

るを思へば、又すたる、草雙紙の流行も又其の如し、是れから後は、大昔の金時化物にならふも知れぬ、御油斷なさるな」と致したのを見ても、時代の趨勢を知るに足りる。三馬の如きは、憤慨して「一頃、御江戸の名物たる戲作の道も、既に澆季に及んだり、衆人皆敵討の稗史に醉へり、吾獨り醒めたり」と云ふに至つたが、滔々たる大勢は又如何ともする能はず、文化三年の如きは殆んど敵討物獨占の狀態であつた、其の體裁も亦追々合卷物となつて來たのである。此の敵討物流行の境上で、最も活躍したものは、實に楚満人で、其の著にかゝる敵討物は數多くあつた。楚満人、通稱は楠彥太郎、南仙笑と稱し、志満房、又楠人、待名齋今也と號した。芝宇田川町に住し、手跡指南を業としたともいひ、又書肆とも、板木師とも、醫師とも、轎師ともある「作者部類」には「滑稽の才なしといへども、こも古き作者にて、安永中より文化に至れり、初めよりをさをさ若き中の作のみに、世の評判も果敢々々しからざりしに、文化に至りて、敵討の臭草紙の流行により、時好に稱ひて折々にあたり作あり、そが中に敵討三組盃（五冊豐廣畫、和泉屋市兵衞板）でも婦幼に賞玩せらる、生涯著す所の草ざうし三百餘種ありと覺ゆ」と云つてゐる。其の著作の重なるものに、

敵討三味線由來　敵討姥捨山　敵討沖津白浪　娘敵討扇鎭面

敵討布袋利生記	敵討梅之接	盛衰武者修行話	盛衰太鼓倉弟之讐討
敵討松寄木	敵討時鳥友	敵討巖間顯尾神	敵討安積車
昔討碪打手	妻之復仇千疋牛	敵討水滸蜀紅錦	敵討龍田山女白浪
敵討蜻蜓復	敵討梅四郎兵衛	復讐破枝川	貞報妹脊扇
親敵擊由鞋	敵討三人娘	敵討叢酒屋	敵討義誠囊
敵討島鶴幸助行	敵討三童忠孝貞	敵討奥州千貫橋	仇討手討新著麥
敵討鏡鶴首娘	敵討松の雪	敵討蘇生娘	敵討遠森淺
敵討碓氷澪			

等がある。

彼は文化四年三月九日、享年五十九歳にて歿した。芝西久保心光院に葬り、法號を只相文樂居士と稱した。彼はまたく遺金五兩あつたから、友人どもが打集ひて葬儀を營んだと云ふことである。敵討物の流行は遂に文化五年、石川雅望をして、『敵討記乎誤』の黄表紙を綴りて、洒落のめすに至らしめたが、もう敵討物は漸く全盛期を通り越したのである。

一方には寛政享和の交より、讀本がそろそろ流行し始め、曲亭馬琴は、享和三年に『月氷奇緣』に

九卷を、文化元年に『富士淺間三國一夜物語』八卷、『復讐稚枝鳩』五卷を、同二年には『四天王勦盜錄』十卷、『椿說弓張月』前編六卷を、山東京傳は、此の年『櫻姬全傳曙草紙』五卷を著し、『水滸傳』『西遊記』の飜譯も此の頃に刊行せられ、馬琴、京傳を初めとして、振鷺亭、感和亭鬼武、石川雅望、蒲闇月、柳亭種彦の徒は爭ひて讀本を著述した。

義理人情のいきさつはあつて、中には滑稽じみたものもありとはいへ、多くは殺伐なる血腥き敵討物と、歷史を取扱つた讀本とが流行した反動として、男女の戀愛を主とした軟か味のある小說を渴望する讀者の要求のあつたことは、又自然の數である。寶曆頃からして起つた洒落本は、明和より安永に入りて流行を極め、天明寬政の際に其の全盛期となつた。江戶文藝中の粹を鍾めたもので、短篇ではあつたが寫生の妙を窮め、通で、おつで、頗る善く穿つたものであつた。黃表紙の如く、ふざけた、輕い可笑味のあるものとは違つて、世態人情の琴線に觸れた氣の利いたものであつた。然し洒落本が發達すると、專ら材を花明柳暗の巷に求めることとなり、全く大通のものとしてしまつたのである。蓋し江戶文化の最高潮を象徵したものと云つてよからう。

しかし洒落本は一種の通な寫生があつたから、硬派の敵討物、讀本に對する軟派物としては、通人ならぬ一般讀者には物足らなくあつた。人情本は此の要求に應じて作り出されたもので、洒

落本の長篇とも見られる。けれど人情本は洒落本の如く、氣の利いたものではなくして、寧ろ頗る野暮臭いものであつた。蓋し洒落本は京傳、三馬の如き文藻ありたる人々の手に成つたが、人情本の作家は、これに比して遙かに下つてゐる。

人情本の先驅は、やはり十返舍一九で、文政二年に、『清談峯の初花』初篇、同六年に『風聲艶話所縁の藤浪』前後編を公にしてゐる。同三年には一筆庵可候（溪齋英泉）が『人世榮情松操物語』六卷を著し、同四年には鼻山人の『生死流轉玉散袖』五卷が刊行され、瀧亭鯉丈の『明烏後正夢』初篇三卷が公にせられ、同五年には、鼻山人の『玉菊全傳花街鑑』二卷の出づるあり、翌六年には同じ人の『尾上伊太八契情意味張月』、志滿山人（歌川國信）の『兒女美談標の一葉』三卷の刊行せらるゝあり、七年に入りては、後の爲永春水なる二世楚滿人の『凌霜便談菊廼井草紙』十二卷、『錦の帶屋雪白木屋軒並娘八丈』十二卷、『縮妻常古手屋』、鼻山人の『傾城此糸蘭蝶記』初二篇、丁川調布の『秋夕奇貞霧籬物語』三卷等多くの人情本が現はれた。其の初めに於ては、洒落本とも差別なく、讀本とも區別のつかぬものさへありて、云はゞ人情本への過渡期の作品であつたが、是に至りて、次第に人情本の特色を發揮することとなつた。

人情本は男女間の紅涙を主とし、市井に於ける色慾のいきさつ、それにからまる義理人情を描

いたもので、藝娼妓、幇間、茶屋女、女房、娘等を環りて、遊蕩兒や通人や、町家の堅氣者、番頭、無頼漢等を配し、其の間に生じた關係を描寫したのである。然し其の觀察は多くは鋭利ならず、奇警ならず、深刻ならず、文章も變化に乏しく、趣味は千篇一律に墮して、其のうち二三篇を讀まば、他は類推すべきものである。浮世草子、八文字屋本に及ばず、洒落本、黄表紙、讀本に比して頗る遜色があり、江戸文藝中、最も劣つたものと云つても、決して苛酷な評ではあるまい。浮世草紙に井原西鶴あり、八文字屋本に、江島屋其碩あり、黄表紙に戀川春町、喜三二、芝全交あり、洒落本に山東京傳、式亭三馬あり、中本の滑稽本に十返舍一九あり、讀本に曲亭馬琴あり、草雙紙に柳亭種彦ありたるが如き、文藻の優れた作家が人情本に缺けてゐたと云ふのは、其の最も大なる原因である。爲永春水の如きは、人情本作家の代表者と稱せられてゐるが、固より名の實に過ぎた片々たる小才に過ぎない。人情本唯一の傑作は春水の春色梅曆や其の他の爲永の諸篇でなくして、寧ろ曲山人の娘節用である。人情本をして重からしむるものは、此の一娘節用であることを思へば、頗る人情本の落莫たるを思はざるを得ない。

然し人情本が文學史上に於ける效果は、江戸より明治にかけての連鎖と云ふ點にある。洒落本から明治小說へ移るには餘りに距離が遠かつた。人情本があつて其の間に橋梁を架してゐる。讀

本が時代物で、理想的であつたに反して、人情本は現代物で、寫實的であつた。飽くまでも現代に卽して、寫實の長篇を綴つたと云ふ點は、人情本の決して棄つべからざる所以である。よし機智はなく、深刻はなく、多くは常套手段の結構に出でゐるとは雖も、新しい別天地を開いたところに、其の價値はあつた。但し一言にしてつくせば、人情本は頽廢したる江戸文化の產物であつたが、次の時代へ移るべき津梁と云ふべきものである。

人情本の作家としては、初期からかけて鼻山人があつた。「近世物之本江戸作者部類」には、東里山人の條に、「麻布に居宅せる御家人(御勘定付御普請役)實名を忘れたり、文化四五年の頃、和泉屋市兵衛に請うて、初めて臭草紙(當時合巻に行はる)を印行せられしより、年毎に此の人の作出たり、然れども拙著なり、あたり作なし、其の作のさま南北と相似たることあり、前輩の舊作を剽竊して作れるもの多かり」とあるが、此の東里山人は卽ち鼻山人の別號である。「活東子の「戲作者小傳」には云ふ、「東里山人、九陽亭と號し、又鼻山人と號す。麻布三軒家に住す、公の典事たり、通稱を細川浪次郎といふ、[illegible] 細斷印章あり、俗に京傳鼻といふ、山東庵(京傳)が門人なり。著述「妲妓美談廓の花」、「契情肝粒志」此の外數多あり、畧す」活東子云、吾師無物老人話に浪次郎晩年漂泊して、是切通しにて傳授屋といひ　、奇方妙術などを小さき紙に記して賣れり、

すも流離して曝書舗となり、供に相鄰りて活計せしが、後に江戸橋四日市の小店に移りてより聲聞せざれば其の淵瀨を知らず云々」と。安政六年九月、七十四歲を以て歿した。人情本の外、洒落本、草雙紙等著すところ少くない。其のうち重なるものを掲ぐる。

生死法輪玉散里　　玉菊全傳花街鑑　　尾上伊太八貞操全傳契情意味張月　　風俗粹好傳
西域此糸蘭蝶記　　浮世猪之助若名屋若草仇比戀浮橋　　契情肝粒志　　珍說豹の巻
永閑記聞郭雛草　　時人寿綱江戸花誌　　新意氣地發端郭意氣地　　曼羅屋玉樓示傳艶氣物語
[illegible]餘興北里通　　傾城胸中極秘傳　　松瀬美談紫草子　　人間萬事開心意氣
郭[illegible]建二編角書未曾可の月　　同三篇郭中餘情由佳里の月　　津田藤お玉ヶ池
妙摩記　　青山光澤春色合鏡　　四季隣聲恩愛二葉草　　和說假名論語
風流脂鬘綾　　紅紫積談綾花志　　春色郭の鶯　　郭か、ぶ
春色美談根引の松　　妙智力　　珍色奇談さゝめごと　　春錦貞鑑實の花
雲可言　　傾城腹の卷　　仇枕春の寝覺　　賢女全傳千代物語
山本山谷容錄　　おそめ久松艶の油屋　　まさきのいろ花物語

東山人には「由佳里の月」「未曾可の月」の如き洒落本もあり、「江戸花誌」の如き滑稽本もあつ

たから、其の人情本には洒落本を加味し、若しくは讀本を調味したものが多かつた。しかし『作者部類』に指斥した如く、他人の作を剽竊する癖があつた。其の最も甚しいのは、十返舍一九の『諸用附會案文』を全部丸拔し、『浮世滑稽附會案文』と改題して出板したが如きである。これをしも人情本作家の雄なるものの一に數へるのであるから、人情本作家の貧弱なることは推して知るべきである。

爲永春水は別に春水集に述べてあるから、此にはこれを省く。曲山人は、司馬山人とも云ひ、筑波仙橘、三文舍自樂などの別號がある。文を善くし、又書にも畫にも長じてゐた。但し不幸にして早世したと云ふことである。著すところに、

人情其儘女大學　小三金五郎假名文章娘節用　教外俗文娘消息　娘太平記操早引　初篇

清談若緑

等あるが、其のうち最も傑れたものは娘節用である。

人情本の多作家としては、松亭金水を擧げねばならぬ。金水、名は定保、通稱を中村源八と云ひ、初めは神田大和町に住居して手跡の師であつたが、中頃淺草寺中にあり、後には小傳馬町三丁目北新道に住し、また本郷附木店にも移り住した。別號を積翠道人と云ひ、春水の人情本を淨

寫し、遂に自ら著作に從事するに至つたのである。書道を谷金川に就いて學んだから、金の一字と、春水の一字とを取りて金水と題した。其の著すところに、

戀の花染	其俤寒[illegible]復讐	同後篇戀の宇喜身	比翼連理花[illegible]志満台
雨園女兒郭の花笠	春宵多佳年の花	伊達模様錦[illegible]褄	縁結娘色の絲
閑情末摘花	風月花情錦の魚	浮世人情濱千鳥	四時遊覽花暦
春花いろは藏	鶯塚千代の初聲	假名文章曾我の昔語	毬唄三代娘
花筐拾遺の月	伊賀古跡豪傑譚	春色淀の曙	女寶語教
貞女庭訓花廼清智多美	貞操園の朝顏	貞操美濃松の花	[illegible]嵯峨野の假寢

等があり、曲山人の『娘太平記操早引』の一篇を補綴し、三篇以下を續修し、一筆庵可候の『朧月花の栞』二篇以下を續作してゐる。文久二年六十六歳にて歿した。其の門に梅亭金鵞、竹葉舍金瓶等があつた。

此の他の作家としては十返舍一九、柳亭種彦のやうな著名の文人以外に、『傾城買二筋道』の洒落本を以て知られてゐる梅暮里谷峨あり、敵討物の楚満人あり、『八笑人』等滑稽本作家の瀧亭鯉丈あり、浮世畫師溪齋英泉即ち一筆庵可候あり、俳優瀬川路考、岩井粂三郎あり、遊女玉樓花[illegible]

あり、浮世畫師墨川亭雪麿あり。玉川亭調布あり、驛亭駒人あり、一九の門人十字亭三九あり、浮世山人あり、笠亭仙果あり、賞垣琴彥あり、平亭銀鷄あり、岳亭定岡あり、喜久平山人、花街櫻山人、寛江舍蔦丸があつた。

人情本の插畫を描いたものは、溪齋英泉や曲山人やが自著自畫たるを除いて、里見八犬傳の插畫家であつた柳川重信あり、歌川國直あり、貞齋泉晁、泉壽あり、歌川國芳あり、春川英笑あり歌川景年あり、菱川政信あり、歌川直秀、歌川國平、歌川貞廣あり、米花齋英之、花園光宜、咲鳥齋主人等があつた。國芳は浮世繪末期に於ける豪快なる畫家で、風景畫に於ては、北齋、廣重等と別趣の觀察と腕前とを有してゐた。重信は北齋門下で、忠實に其の師法を守つた畫家であつた。溪齋英泉は菊川英山の門人で、廣重と合作の木曾街道六十九次の内二十三枚を畫いて、世名が高い。其の門人に貞齋泉晁と泉壽があつた。貞秀、貞廣は國貞の門下で、貞秀は多く鳥瞰式の風景を描いてゐる。然し、國芳が美人畫に獨得の筆法を用ゐ、重信が北齋風に人物畫を描いてゐる以外には、英泉の美人畫も、どこやらにぎこちなく、其の他の諸氏はいづれも江戸末期の浮世繪畫家たるに外ならない。江戸文藝の插畫としては、人情本が後れて出て、頽廢的氣分が漂つてゐると同じく、其の插繪にも見るべきものが更にない。本篇には浮世繪の大家として極めて品の

いい高雅な美人畫を描いた鳥文齋榮之の遊女圖と、末期ではあつたが、菊川流と云へる一流を開いた菊川英山の娘風俗とを卷頭に掲げて置いた。英山の美人畫はこれを全盛期の畫家に比すれば遜色あるが、其の特色となる所は、輕か味のあつて、どことなくあどけない點である。此の特色からしても、彼の娘風俗を描いたものは、最も善く適してゐる。

人情本の作家に深刻なる觀察と、燃犀なる筆致を有する名人の出なかつた事は、江戸文藝の爲に惜しむべきことであつた。春水の如きは「狂訓亭主人曰く」と署して、卑猥なる敍事の後に、道德めいたことを云ふを常とした。要するに世間の非難を恐れての遁辭に過ぎないが、斯うした迷路を作らねばならぬほど、彼は世人の好奇心を挑發せんとしたのであつた。人情本作家が多く春本に筆を執つてゐるのを見ても、彼等の藝術心は極めて低き幼稚なものであつたのである。御伽草紙より浮世草子、黄表紙、洒落本、草雙紙、合卷、中本、讀本に至るまで、其の作家の數は極めて多く、中には、ちとばかりの才筆に速作を敢てしたものもあるが、これを概するに、人情本の作者ほど無學に、創作力の乏しく、剽竊を平氣にやつてゐるものは少なからう。人情本の元祖と稱する春水が最も善く之を代表してゐる。彼の著作が歡迎せられたのは、要するに當時の淺薄な婦女子や遊蕩兒を相手にしたからである。鼻山人や松亭金水其の他の作家に至つては殆んど

云ふに足らない。

遮莫れ彼等は微力ながらも、大膽であつた。現代の世相を捉へて、寫實的にこれを描かんとした功は甚だ沒すべからざるものがある。これ從前の讀書界に企てられなかつた試みであつた。否敢て試みられなかつたではない、洒落本が旣に一步人情本に轉化せんとする機運は旣に熟してゐたのであつた。例へば、娼婦と遊客と情夫との三角關係を描き、情夫が女の己れにぞつこんなのに乘じ、詭計を以て金の才覺を餘儀なくせしめる。偶〻贔屓の遊客の登樓したのを機會とし、妓も亦詭計を以て客に金の無心を吹きかけて、これをせしめる。遊客の懷から出た金子は情夫の手に入つたのである。情夫はこれを懷にして、晨朝匆々樓を辭して其の夥間と一杯の祝酒を汲み、醉ひのまぎれに再び他樓に登ると云ふを以て一編の終りとしてゐる。然し此の洒落本は、これでは片鱗を描いたに過ぎないから、別に題を設けて、其の後譚をものする。斯くして題は異なるも、數篇連續する趣向であるから、これを合はすと、一篇の人情本と異ならない。人情本は必ずしも單獨に起つたものではなく、斯かる洒落本の變形したものである。して見れば人情本は鼻山人の發意でもなく、春水の案出したものでもないが、此の機運を隆昌ならしめて、一派を作つたところに其の功を認めねばならぬ。人情本は江戶末期に衰へたが、餘勢は明治に涉りて、明治小

流への連鎖となつてゐるところに又其の價値がある。

天保十三年の水野越前守忠邦が極端なる風俗取締の改革は文藝に及んで爬羅剔抉する所があつた。人情本が打撃を受けたのは當然である。春水は處罰せられて手鎖を申附けられ、版元七名は賣得金を沒收せられ、各〻過料五貫文づゝを課せられ、版木は取上げられて削られ、書物は燒き捨てられた。これよりして後は一々檢閲を受けることとなつたので、一時多數に制作せられた人情本の出版も全く晨星の如き觀となつた。然し此の嚴しい取締がなかつても、人情本は既に其の全盛期を過ぎて下り坂であつたから、決して其の隆盛は望まれなくなつたのである。春水は大した作家ではなかつたが、彼の逼息とともに人情本が凋落したのを見ると、彼も亦一方の雄なりと稱することが出來る。とにかく彼は人情本の代表作家であり、此の人の向背に依りて人情本が浮沈したのである。よし曲山人に一二の稱すべき作品がありとするも、其の勢力に於ては、到底春水の比ではない。況んや鼻山人、松亭金水其の他の群作家に於てをや。

春水が人情本作家として文壇に翺翔してゐたうちは、人情本も賑やかであつたが、彼が嚴罰を受けるとともに意氣沮喪してより、人情本は全くあるかなきかの姿となつた。「娘節用」を其の儘飜刻して「小三金五郎 小金の花」と題し、厚顏にも第二世爲永春水の名で刊行してゐるやうな、風上

にも置けぬ作家のあるを思ふと、人情本の末路も悲しむべきである。然し斯かる翻刻は從來とても人情本作家が往々平氣でやつてゐたところを見ると、彼等の何等藝術的良心を有せざる事が明白である。それほど人情本作家には下らないものが多かつたのである。名作の乏しいのも亦當然と云はねばならぬ。

小さん金五郎 假名文章娘節用

前編三卷、後編三卷、三編三卷、併せて三編九卷である。曲山人の作で、初二編は天保二年、三編は同五年の出版にかゝる。小三の切なる思ひと、義理を立てつらぬく心意氣とを寫して、華やかなうちに、寂しみがあり、人をして涙を催さしむる感傷的小說である。特に金之介と云ふ子役を用ゐて、頑是なき行動と片言交りの言葉とを其の中に綴つて、哀れさは一しほ勝つてゐる。

樹々に、木々の落葉を雨と見つ、冬をば告ぐる寂しさに、心も空も時雨月、訪ふ人もなき草の戶へ、友さそひ來て音なふは、水鷄にあらぬ小雀の、ちゝ、ちゝと鳴く聲を、聞くにつけても哀れ添ふ。

とある。三編下卷第九回以後は卒讀に堪へざらしむるものがある。蓋し人情本中の白眉で、此の

作家の老手なるを思はしめる。

清談若緑

娘節用の續編にして、金五郎の一子金之介とお政との戀物語である。全部十二卷、曲山人の作に成る。一説に爲永春水の作なりとあるが、其の確證はない。刊行年月は明らかでない。娘節用に比しては、ひどく見劣りせられる。殊にお政が觀世音菩薩の功力によりて、佐重の誘惑を遁れて熱海から、情人の許に歸る趣向などは、甚だ淺薄で、幼稚な、子供だましの結構である。或は他人の作と云ふのが事實かも知れぬ。娘節用では初二編とも、江戸曲山人緝とあり、三編には江戸三文舍自樂補述と記してあるに、此の編では東都曲山人著編若しくは編著、著と記してある。續娘節用の插畫が曲山人の自畫で、歌川國直の摸寫であり、『娘太平記操早引』の插畫が曲山人の自畫であるにもかゝはらず、此の書の插畫は一鵬齋芳藤の手に成つてゐる。尤も「教外俗文娘消息」は柳川重信の畫であるから、必ずしも插畫を以て云々すべきではないが、此の書の作者に就いては猶研究すべき餘地がある。然し天保三年には、春水得意の春色梅暦も出てゐる事であるから、賣名のかれが、曲山人の名に匿れて此の書を著すが如きことは萬々ない。唯疑ふべきは、春水以

外に誰か曲山人の名に依つて、此の續編を著したものがありはせぬかの一事である。

教外俗文 娘消息

初編三巻、二編三巻は曲山人の著すところで、天保七年の刊行にかゝる。曲山人の歿年は明らかでないが、天保七八年の交かと思はれる。第三編より第六編までは爲永春水が續作してゐる。

此の書は大工の徳兵衛と裏店の娘お初との戀愛關係にからまつて、お初に戀してゐる旦那の惣兵衛や娼妓上りのおふさ、待合の女房お仲などを配して、職人風の色戀を寫したところに、他に見られぬ輕妙さがある。一寸三馬の浮世風呂に似通つた面影もあつて、どこかにさつぱりした點がある。春の浮々した艶つぽい愛情や、秋の寂しい實意の深い色戀でなくして、夏向きのあつさりした、とんだ氣のいいもので、人情本中には異色の作である。此の書は從來復刻されて居らぬ。

盛衰榮枯 娘太平記操早引

初編三巻は曲山人の作、二編上巻は同人の遺稿にして、中巻以下は松亭金水の作にかゝる。二編の初めに金水は序して、吾が友なる曲山人、別名(またのな)を三文舍自樂といふ、性來筆道に巧にして文

を能くし、畫を能くし、且世間の人情に渉りて、常に流行の書を著し、其の名をさ〳〵聞えたりしに、惜しい哉彼をして、その志を果すに至らず、顏回が才ありといへども、不幸短命なるが如く、こゝに操の早引てふは、阿娜なる色に身を崩して、貞烈なる淨家を捐て、慈仁ある父を思はず、放蕩惰弱の息子の傳記に、色に溺るゝ世の弱冠（わかうど）を戒めんとする一端ならむ」と云ひ、第三輯に敍して、「こゝに筑波仙橘子は、文筆の道に賢くして、弱冠より文字を能くせり、されば其の譽れ四方にきこえて、書賈千里の遠きを厭はず、競ひて書をこひ上梓（おかた）にす、また其の暇ある時は、戯墨を好んで和漢の故事、或は今樣の振を取合はして、兒戯の冊子を綴るものから、人もて是れを珍奇となし、やゝ其の名も香しく、或時は文含自樂といひ、或は司馬山人、曲山人等の數號を標して、人情世態の浮世冊子は自ら書いて、その奇實大方ならざる畸人なりしが、嗚呼惜しいかな、不幸にして、早く黄泉の客となる。然るに此の草子も初輯より第二輯の半ばに至るに、思ひきや遺稿とならんとは。」と云つてゐるが、曲山人の事實は此の序以外に何等所見がない。

此の書は紫兵衛と云ふ裸兒と貞婦お千代とに配するに淫婦お玉を以てしたもので、曲山人の趣向はどう云ふ譯であつたか固よりそれと知る由もないが、片端を第二輯上卷に現はした髮結傳吉なるものは、金水の手に依つて甚しく活動し、初めは極惡無道であつたが、末には後悔して善人

となると云ふ趣向である。其の間に於けるお千代の貞節を濃く叙してゐるが、一體に下劣で、卑猥で、人情本の缺點を遺憾なく發揮し、甚だ不愉快なる讀物である。しかも其の趣向も讀本氣ひで、寫實を隔たることが遠い。お千代の惡夢一段の如きは春本作家の常套手段、唾棄すべきものである。初編三卷二編三卷は、いづれも天保八年、三編四編各六卷は同十年上梓せられてゐる。

辰巳清談 梅之春

爲永春水の作で、初編三卷は天保九年、二三四編九卷は同十年刊行せられた。序は式亭三馬の借物、それを補綴して、右の序言は、今より二十餘年以前なりける戊寅春中旬、右葉の誌の序文に故人本了亭三馬先生の記されし妙章なるが、其の頭書の珍重せられ、これを玩ばぬはなかりしが、此の程ははや其の冊子も世に絶えて尋ねすゐ人もなくなりければ、本意なき事に思ひたりしが、友人溪齋英泉子も同じ心にありしかば、或時のはなし草に、其の冊子を出して予に先哲の勝れたる筆ありけるにぞ、いよ〳〵式亭を追慕の餘り、此の梅の春の作意にゆかりもあれば、顯て前の序の代りとはなすものならし、筆をつなぐ四方の春宵を得たがへして必ずしも故人の文を損ひたりとなそしり給ひそ、古今を論ぜず、異類を選ばず、他の文章がゆかしさにかかる所

篤かな事なれば、宥し給へと願ふにこそと言ふに至りては、思はず微笑をさそはれる。桐之助に對するお綱、お八重、七三郎に對する丈八、条吉、あゝ相も變らぬやゝこしい、こんがらかつた戀愛關係のことどもかな。人情本の千篇一律の代表作。

閑情末摘花

松亭金水の作、初編三巻は、天保十年、二編三編六巻は同十一年、四五兩編は同十二年刊行せられた。むかし〳〵の狂歌に、世に寄する月といふ題に、よく〳〵見ればひとりぞと思ふ武藏野の、くさきをわけて出づる月影と詠じたりしは、往昔の野原であつしその樣を思ひやりたるものであらう。と巻頭の書き出しが既に此の樣な、下卑た醜惡文字であるから、全く鼻持ちがならぬ。尤も此の書は其の割に他の人情本ほど挑發的な卑猥ではないが、結構もつまらなく、文章も極めて平凡だ。元來松亭金水なるものが、何等推稱に値せぬ戲作文士の一人であるから、これに對して傑作を求むるのが既に見當違ひと云はねばならぬ。

小さん金五郎 假名文章娘節用

そも／＼、男女のなからひは、八百萬の神達の、出雲の御社に羣れ集ひて、結ぶえにしの樣々なる、竈の前の三介が、相模出生のおさん殿と、物置の出合の國訛、片言交りの口說事、寡婦と養子の芋田樂、喰はぬは損者のびん〳〵る隱居が、むしろやぶりの女狂ひ、あるは帶屋の長右衞門が、老實をして箱入の、お半の壷へ、らひ込み、浮名を桂川に流せしも、皆ことこと〳〵く緣なるべし。こゝにあらはす一部の冊子は、いかなる人の筆に綴りけん、小金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、書肆のもて來て、補ひてよと、需めにしたがひ、をこがましくも、いさゝかこれに筆を加へて、櫻木に壽くこととはなりぬ。

文政拾四年辛卯孟陽

江戸　曲山人しるす

小さん金五郎 假名文章娘節用 前編上卷

江戸 曲山人補綴

ほつたん

太刀は大山石尊の、さゝげ物に納まれば、長刀は浅草の、草履にその名を止めたり。弓は矢場のおねさんが、活業の助となれる静けき御代の事になん。こゝに斯波家の藩中に、有名東文字之進といへる者あり。二人の男子ありけるが、兄は文之丞と云ひ、弟は文次郎と喚びなして、両人ともに文武の道を、常に勵みて勤めしが、兄文之丞はいつしかに、奥勤めの御側女中玉章と云へる、容貌よき女と人知れず、契りをこめて語らひしが、日にまし互に思ひ慕ひて、忍び〳〵の密話に、玉章はいつか只ならぬ、懐妊の身となりけるにぞ、この事今にも現はれなば、とても添ふ事なり難しと、思へば二人密かに語らひ、ある夜館を忍び出で、少しのしるべを便りにして、難波をさして上りつゝ、彼地此方とさまよひて、思はしからぬ月日を送れば、この地に在りても要なき事と、それより京都へ赴きて、三筋町の邊に

ふに、さゝやかなる家を借りて、學文觀法の指南をしつ、月日をこゝにおくりしが、もとより其の技に勝れたれば、わづかのうちに、弟子のあまた付いて繁昌しければ、おのづから金銀の融通もよければ、此とゝの金を人に貸しなどして、その利を取りて不足なく、暮す中に月滿ちて、妻はやす〳〵と玉の如き、男子を產み出しければ、名を金五郎とよびなして、蝶よ花よと育つるうち、滿つれば缺くる世のならひ、妻は產後肥立たぬ上に、あしき風を引きそへて、醫藥手を盡すと云へども、その驗更になく、つひに無常の風にさそはれ、冥途の旅に赴きぬ。文之丞はたゞひとり思ふ妻に別れて、今更に悲しみやる方なしといへども、いかんともすべきやうなければ、泣く〳〵野邊の送りをなし、跡ねんごろに弔ひけり。斯かりしほどに幼兒を、乳なくては育てがたしと、乳母をかゝへ養育させ、只金五郎を手の中の、玉の如くにいとほしみて、光陰の過つをかぞへけり。こゝに又數珠屋町に、古鐵買の六兵衞とて、夫婦かすかに暮す者あり。年ごろ子の無かりしかば、つねに是れを深くなげき、神佛に祈りし績、その信心の通じたりけん、妻は今年四十歳にあまりて、初めて女子を儲けしかば、夫婦の喜び大かたならず、名をいはうてお鶴と呼び、いつくしみ育つるうち、妻はふたゝび姙身になりて、又の年また女子を產みぬ　しかるに今度は產生の惡しかりしにや、四十の上の年子の事故、おのづから、身心おとろへ衰弱せさるにや、惡血さへもおりかねて、あと腹のしきりにかぶり、その

なやみの堪へ難きと、心の疲れに養生かなはず、つひに空しくなりにけり。こゝにおいて六兵衞は、子なきを神や佛に祈り、二人まで子をまうけしに、今はた思ひがけもなく、妻は子を捨て亡き人の、數に入りたる身の當惑に、歎くより外なかりしを、近所の者にいさめられ、まづ亡骸は取り納めても、納まりかねし胸のうちに、とつおいつ思ひつゝくれば、貧しき暮しに男の手一つ、いかにして二人の子をば、育てんやうもなかりし故、心を鬼とも蛇ともなし、藪へなと子を捨てんかと、思ふまでに苦しみて、一日々々と暮しけり。さるを假名家文之丞は傳へ聞きて、おのが身に引きくらべては、捨て置きがたく、今不自由なく暮す故、當歳の子を貰ひうけて育てなば、その親の手も少しは輕くなりもやせんと、人もてこの事を云ひやりて、娘を貰ひうけ、名をお綱と名づけ、また纔許の金を六兵衞に送り、嫡なる息を依ひたまへと、情ある深切に、六兵衞はいたく喜び、其が行末ふかく悪み、これより後、恵まれし金を少々お綱に添へて、さる實へ里につかはし、あぢきなき世を送りけり。されば又た吾妻なる、假名家が家には文之丞が、不義なして家出せしかば、文守之雅は怒りつ悩みて、一旦閉かしは除しといへども、世間のおもはくに、への聞え、親の名を出す不行の罪、打捨てもおかれねば、これ等の趣を官へ達し、文之丞を勘當なし、弟文次郎に家督を讓り、嫁を迎へて是れに娶合はせ、その身は隱居し、名を白翁と改めて暮すうち、文次郎夫婦の中に、一人の女兒を儲

けけり。是れにつけても文字之進は、文之丞の事をいふしは、何かにつけても案じ、思ひ出しつゝ、ほのかに聞くに、今は花洛に住み馴れて、男子持ちて不足なく、暮すと人の風便のみ、案じの胸も安まりて、つく〴〵は文之丞が子を、文次郎が娘に娶合はせ、家をゆづらば血すぢも絶えずと、心に思ひゐたりけり。

第一回

さればこゝに関守なくて、文之丞が一子金五郎は、今年十七歳、お亀は十五の春となりしが、二人ともに天性の美男美女にして、華洛広しといへども、たぐひ稀なる容貌は、宵と暁の明星くらべ、労いすまさ自風情なり。文之丞はこのとしごろ、古郷を離れ遠き都に、世を送るそのうちも、一二人あて子をまうけ、何不足なき身のうへにも、十年あまり過ぎしころ、鎌倉の家をぬけ出でて、父のところへ便のまへ、なくなくはいとゞなつかしく、子を持つて知る親の恩、報じがたきを口惜しく、思ふものから身へ見せず、主家の掟を破りつゝ、妻と不義して出奔せしかば、今にも詫びの叶ひなば、再び主家へ立帰る、事もあらんと寸本を、かれ是れ思ひ合はすにぞ、早くより金五郎には、文学武術を教へしに、もとよりかしこき生れ性、一を聞いて萬を知る、文武の道に長けたれば、朋輩もなく上達し

て、今ははや金五郎は、武士の道くらからず、殊に和歌、連俳、茶の湯、挿花のたゞひまで、人なみなみよりは勝れたる、よき壮士とはなりにけり。お艶もまた世に珍らしき、蘭閨の生まれにて、文よみ歌よみ手習ふ道は更なり、物たち縫針の技藝に勝れ、琴三味せんの調べさへ、いと美しく何にまれ、女子の道にくらからず、その生立ちも頼もしく、人もうらやむばかりなれば、文之丞は何とぞして、古郷の父に勘當わびて、子どもの顔を見せまほしと、人を頼みてつど／＼に、父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も、總領の文之丞が、身のいたづらから家出して、今は花洛に僑居に、文學武藝を師範して、不自由なく暮す上に、孫まで出来しと聞きつるか、いかなるさまに生ひ立つや、逢ひまほしと思ふ折から、人づてにて文之丞より、わび言をいひ入れければ、白翁は、嬉しさひとかたならねど、いつたんは昔へ勘當と、披露せし身をたやすくは、許すもならざれば、その中首尾を見つくろひ、詫びねがひて聞入れをさせん、文通のみは苦しからず、又孫の金五郎は、罪なき身に不幸ひに、文次郎に男子なければ、迎へをつかはしこなたへ引取れ、いく／＼は假名家の家名を、相續さするほどに、支度をとゝのへ待つべしと、返事に委細を聞くよりも、文之丞は大いに喜び、わが身の出入は叶はずとも、倅を本家へ遣はすは、このうへもなき事なりと、金五郎を近くまねき、鎌倉の事くはしく語り、日ならず迎への来るをまちて、鎌倉表へくだるべし、と聞いて金五郎は今更に、思ひがけなく本家を

暫くは、身の末よしと云ひながら、一人の親をのこしおき、そのうへ子どもの時よりして、行末をたのみに夫婦そして、胸に思ひしお蔭にも、別れん事の心憂く、いまだ性はかはさねど、何かに心おくそこまで、なくうちとけて稽かふは、中なるものを打捨てて、行く事にやとさすがまた、おぼこ育ちの心には、當惑するなら事なからお親もこの事聞きしより、心細さの案じごと、とやせんかくやと思ふうち、鎌倉より三五郎を、迎への人の着きしかば、今は別れとなりけるかと、人目の關の忍び泣き、ふさぐは女子の常ながら、いとゞに胸も結ぼほれ、部屋に屏風を立てまはし、衣引被ぎ打臥して、涙のひまなくくらしけり。折から障子引きあけて、立て廻したる屏風のはしを、折り返してはひる金五郎、「おかめ、けふはどうだ、やつぱり氣色が悪いのか。」トいふ聲におかめは目を見開き、「ハイ、いゑ/\何事も案じませぬと、心ぼそくて氣がふさいで、いつも頭痛が致します。」トほろりと落すひとしづく「おはれた今度鎌倉の本家へ、おいらが別れて行くものだから、それでふさぐと云ふのだらう。マア/\何はともあれ、けふは雨でもあつたかいに、こんなに立てこめたり引被つては、猶のぼせて悪いから、ちつと庭でもながめな。」トびやうぶを片よせ夜著とりのけ、丸などのしやうじをあける。「ハイ/\」「まァおかめ、つよく頭痛がするなら、なんぞ藥でもやらうか。」「ハイありがたうございます。あんまり氣がふさいで、頭が重くてなりませんから、今しがた置藥をのみましたが。」「さうか、あんまりつまらぬ事

なくよく思つて、ほんたうの病氣が出るとわりいから、今日はちやうど天氣はよし、芝居でも行つて見ればいいに」おかみ「いゝえ、わたくしは、芝居も見たくはござりません」金「ハテ困つたものだ。行つて見ればいいがのう」團藏だの璃寛だの、國五郎なんぞが大ひやうばんで、それに東からのぼつて來てゐる、路考の門弟の路之助が、又新作のはやりうたで、舞臺でうたつて、三絃の手があるが、いつ見てもまことに妙だよ」おかみ「さやうでございますとネ、アノいつそやあなたと御一緒に、浪花へ參りましたとき、濱芝居で見ました評判のよい、紀伊國屋はどう致しましたネ」金「路之助が、今は東都へ歸つてゐ、ますます評判がよくつて、去年の春向町の芝居で、刈萱の狂言をしたさうだが、近年にねえ大あたりで、それからなんでも當りつゞけて、町も屋しきも紀の／＼と、[illegible]女子供が、ひいきするよと上方まで、もつぱらの評判よう」おかみ「そのひいきのあい紀の國屋にも、まさつたお方がまた東へお下り遊ばしたら、マアどんなでござりませう」金「紀の國屋よりいい男とは、そりやアどこの人だ」おかみ「どこのお人か御存じでありながら、目もとから口元まで、音羽やに紀の國屋を、一ツにしたよりよい御容貌と、學文のけいこにお出でなさる、あなたさんが常不[illegible]、さういつておほめなさいますよ」金「あなたのこつたから、ごつほり解せねえ」おかみ「わかりませんかえ、あなたの事さ」ト にっこり笑ひ、顔をかくす、金「何をいふかと思つたら、おいらが顔の棚おろしか、いいかげんにおしなる

もんだ」「ほんにねえ本當でございますよ。それだから私は、一倍苦勞になりまして、いろ／＼な事お案じ申した、誰がいつはいになりますよ」「又なんのこつたな、をかしくもねえ、戯談はじやうだんだな、ほんにあんまり案じなさんな。迎へと一緒にあしたの朝、鎌倉へたつて行つても、落ちついたら早速に、お前を迎へによこすから、ちつとの中だ、待つてゐな」「しかし末始終は、親父がおめへとおいらを段々夫婦にすると兼ての料簡、なれども今までついしかに、親の目を忍んだり、なまめいた事もしねえから、そこがおめへの料簡一ッで、もしおいらに遠ざかつて、呼びによこすが待遠なら、縁づくともどうなりと、それはマア勝手次第」「あなたもマア東へ行くから、いやになつた時分だらう。のうおまへ、いやでござんすはいな、いゝえ、なんのいやでございませう。心にもない事ばつかり。たとへばこの樣な所でも、あなたが呼んで下さいますなら、私は嬉しうございますが、あなたは東へお出でなされしたら、あちらの女中は上人品で、まことに意氣だと申しますに、私の樣なものは、とてもまあ、お捨てなさるは知れてをりますもの、末々の事を考へますと、寝ても夜の目もあひませぬ。そのうへ思ひ切るには、お側さへ見ぬその中に、三年あとにお果てなされ、跡に殘るは姉さんと一人、里に行つてお出でなされば、いつぞや逢うて名告りあひ、便りになつたりなられたり、致しませうと存じましたに、そのおやさん／＼、里親に、だまされて浮河竹に、お流れなさるといふ事ゆゑ、今は東にも姉

にも、力に思ふはおとつさんばかり。末を頼みしあなたにまで、思ひがけないこん度のお別れ、心細い身になりました。」トいひつゝなみだをそでにのごへば、金五郎もこがこゝろねを思ひやりつゝ、むねなでおろし、「なんのこつたな。そんなに末の末までを、案じるから氣がふさぐ。なるほど兩親に早く別れ、姉さんにも生き別れでは、心細いもつともだが、人間は老少不定、定めないのが世の習ひ、命ばかりは神佛の、力づくにもゆかぬのは、みな定まれる身の宿世、それをくよ／＼氣にしても、役にもたゝぬ事ぢやアねえか。又たとへ別れ／＼に、遠く隔つて行けばとて、おめへに此の家をゆづりでもすると、ぜひ聟をとらねばならぬが、さういふ時は、マアどうする心だ。」おかね「そりやモウあなたがおつしやらずとも、海より山より御恩の深い、おとつさんのおつしやる事を、背く心はございませんが、この事ばかりは背きます。たとひ娘供のお許しをうけずとも、あなたをのけて餘の人に、添ひます心はございません。あなたが東へお下り遊ばして、問ひ音信もございませんと、わたくしはその時は、とても生きては居りません。死ぬる心でございます。」金「馬鹿な事を云ひなさ。それはほんの短氣といふもの、死ぬくれるなら何も苦勞をするには當らず、添ひたいと思へばこそ、いろ／＼に氣をもむぢやアねえか。ほんに悪い事はいはねえから、少しのうち辛抱して、便りをするのを待つてゐな。コレサおかめ、なぜそんなに泣きなさる、子供かなんぞの様に。別れて一生あはぬといふ事ぢやアなし、ちつと氣をしつかりもちな。」トいはる

なほお亀は、うれしさかなしさやるせなく、「あなたがそんなに事をわけて、優しくおつしやつて下さるほど、猶悲しくなりますわ。向ふて見れば見ます程、しきりに心細くなりまして、あなたがお宿にお出で遊ばすうち、いつそ死んでしまひたくなりました」ト金五郎のむなさきにとりつき、なげく心をくみいりて、金「エヽ、おめへもマア心のよわい。なんぞといふと死ぬ〳〵と、訳もないその繰言。マァよく物をつもつて見な。こんな事をいふと年寄めくが、今世の中が静かだからよけれ、昔の乱世の時で見な、なんぼおいらの様なおとなしい者でも、武士の種だから、通りところへ、是非出なけりやアならねえ。よしか、出れば敵の首を取るか、こつちの首を取られるか、一ツに一ツ命がけ、親を捨て子を捨てて、戦場へ出るは武士のならひよ。昔と今と比べて見な、まことに楽なこの世の中、そんな危い狂言もなく、武士の身に取つては本意なやなけれど、實に今は極楽世界。こゝの道理を考へると、三年や五年違ふかつても、昔にすれば三ともいへど、そこがやつぱり自己勝手で、十分でも不足に思ふは、人情のあたりまへ。それだから必ずとも、きな〳〵思はず時節を待ちなよ。短気を出したそのあとでは、後悔してもはじまらねえから、心を大きく持つがいいよ」トとしわかなれど金五郎、事をわけて、ときさとすをりから下女来り、さかしき言葉に「若旦那さまえ、旦那さまがちよつと入らつしやいましと言ふに金五郎は、「ハイ〳〵」ト、おかめの部屋を出でてゆく。父文之丞は一間の内に、煙草くゆらしなど居る。金五郎はしとやかに、父の傍にかしこまる。「ヤ、金五

郎か。さてさう鎌倉へ下るのも明日なれば、旅の調度を、落ちなく用意するがよいぞや。それにつけてもくどくと、いひきかすまでもなけれど、獅子はわが子を谷へ投げ、其の生立を見て安堵して手ばなすと云。焼野の雉子夜の鶴、子故に迷ふは親の常、鳥獣でさへその様なるを、況いて人間は猶さらに、子を見る事親に如かず、たとひ高貴搢紳の後裔、賤側の漁る下ざままで、子を思ふのは同じ事。もはやそちらも十八なれば、案じる程の事はないが、かういうては異なものなれど、人なみ〳〵より文武の道も、すぐれたといふではないが、これほどのやうな人中へ、出してもまんざら恥かしくもなし、といふておのが智にほこり、業に慢じて多くの人を、眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ッには祖父さまを大事にかけ、われにかはりて孝行してくれ。二ッには藤次郎は、義父といへども其方が伯には、いはずと知れた血すぢの叔父の為、するぶんともに心にそむかず、これまた孝行にやならぬぞ。また鎌倉は繁華の土地の為、人氣が郁と進ふから、よく風俗をのみこんで仲間のつきあひその外も、仕儀によつてはりつぱきなるなど、物事萬うちばにして、花にさそはれ月に浮れて、女郎買なども二度に一度は、律されたけれど行くがよいわさ。さりながら傾城傾國の喩へもあれば、あながちすら深くははまらぬやう、心にこゝろを戒しておかねぞ。只忠孝に心を掛まさば、その身の末もあしからねど、兎角に酒色は迷ひやすく、昔より名将勇士も、色に迷ひ酒に溺れて、大切の身を亡ぼす例も、

まゝある事ゆゑ、この道は深く耽らずつゝしめよ。こゝが常言の、恥をいはねば理が知れぬといふ通り、早い聞ばこの己が、若氣の至りといひながら、無分別な心から、親を捨て故郷を離れ、家出なして暫しが中は、住居も定めずさ迷ひしが、親の身では不孝な子でも、憎し罰あたれとは思はぬにや、こゝに住居をさだめてから、仕合と不自由なく、暑さ寒さの難儀もせず、人なみ／＼に世をおくる、今この暮しも淡なの、目かけ者の望みはなけれど、不孝の罪なりやどのやうに、今更悔んでもあとへはかへらず。こゝの道理をよく辨へて、女色その外あしき事には、遠ざかるやうにするがよい。今度そなたが、わが本家へ貰はれ行きて、御主君へ事ふる事はいとめでたく、我が身の喜びこの上なし。又お竈は小さい時より、それにこの家を譲りなば、妻合はして夫婦にしようと、おもうては居たれども、本家へ行かば何として、わが手で育てし娘でも、氏素性といひ弟の手まへ、卑しい娘は妻にはなるまいし殊にかたゐの、婚をさせたといふ中ではなし、それを彼の地へ下した上、おかめには婿取つて、この家をゆづらば我は又、外に樂しみ望みもなければ、必ずともに今の教訓、忘れてはならぬぞや」ト我身のことと世の事を、まじへてさとす言の葉の、はじめ終りを金五郎、つぶさに聞きて胸にたゝみ、ありがたなみだと別れの涙、日に浮めてつきのみこみ、「だん／＼と事をわけて、お心深き御教訓、きつと骨身にこたへましてゝ、ありがたうござります。もとより愚かな私なれど、心の及びますだけは、忠孝二ツ

お勵みますと、あなたもずゐぶんお身の上を、御大切に御養生なされ、おすこやかにお暮しなされて下さりまし」ト しとやかなる あいさつに、文「イヤそれはかへつて、おかゝもそこと同じやうに、小さい時から共に育あつて、兄弟同様に暮したから、今別れるも惜しからうが、これも定まる約束事、無分別の出ぬやうに、よく／＼暇乞したがよい」トすいもあまいも嚙みわけた、言葉をしほに金五郎は、父の前を退きて、おのが部屋へ入り、翌日出立の事なれば、何くれ彼くれそれ／＼に、旅の準備を落ちもなく、とゝのへて夕餉をしまひ、楊枝を使ひながらおかの部屋へそつと來り、金「どうだお鹿、ちつとは氣色が直つたか」かの「ハイなんだかどうも寒氣がつゞけて、やつぱり頭痛が致します。アノあなたにはどうでもあしたの朝、お立ち遊ばすのでござりますかえ」金「さうさ、モウ迎へが來て居るから、どうも延されもしねへのさ。それだからおいらの顏を、見るのも今夜限りのこと、忘れぬための見納めに、能く見て置かうと思つて來たよ」ト笑ひながら顏を見れば、おかのは氣はづかしさに顏をあかめ、かの「又そんな嘘をいつてあり、それはほんの氣やすめでござりませう」金「さうさ、いつもおいらの言ふことは嘘さう。どうでモウ明日から、居ねえのだから、本當にやァしねえ筈だ。さつきおとつさんが言ひなすつた事を、おめへも大かた聞いたらうが、おいらが行つたその跡では、おかめに許嫁をとつてやつて、この家を讓るとおつしやつたよ。のう、もしその婿が色男なら、首つたけにはまりこんで、おいらのや

うな者は、うしろむきで唾だらう。」おかゝ「なんの〳〵もつたいない、夢にもそんな心は持ちません。たとひ業平さんが生まれかはつて參りましても、私はあなたに見かへる心は、爪の垢ほどもござりませんヨ。」金「いいかげんな事をいふ、見かへる心は富士の山ほどあるだらう。」おかめ「ナウ〳〵あなたはなぜそのやうに、わたくしが申す事を、お疑ひ遊ばします。」金「うたぐりやアしねえけれど、嘘らしい言ひやうだから。さそれが信實なことなら、必ず短氣を出さねえで、たよりをするのを俟つてゐるなよ。」と背なさすればお龜は嬉しく、おかめ「私はどのやうにも、俟つてゐる氣でござりますから、どうぞ〳〵とお便りを、早くなすつて下さりまし。」と互につきぬ名殘の涙、いとしかはいもまだ知らぬ、明けのからすの泣く〳〵も、お龜は金五郎が支度する、かたへに持ちものなど取り揃へるうち、用意ことごとく整ひしかば、いざ出立とすゝめくるゝ、金五郎は流石にも、跡に心の殘れども、せんかたなければ氣を取り直し、父とおかめに別れをつげて、迎への者ともろ共に、心つよくも旅立つを、今が名殘と父之丞、おかめも共に門邊まで、送り出でつゝ金五郎の、影見ゆるまで見送れば、あなたも見かへる別れの辻、互に胸の憂世端に、かくれて姿はみえずなりぬ。

小三金五郎假名文章娘節用前編上卷　終

小さん金五郎 假名文章娘節用 前編中巻

江戸 曲山人 補綴

第二回

在然程に、お竹は金五郎が鎌倉へ下りし後は、いとゞ心も結ぼれて、兎角浮きたつ事もなく、今日や便りのありもやせん、あすや音信あらんかと、あだに過つ日を指をり算へ、一日々々と暮すうち、早くも半年あまりも過ぬるに、彌生の末になりにけり。されどもいかなる事にやありけん、金五郎の方より音信の、文さへ来ねばひとしほに、お竹のみは思ひいやましにて、ほのかに聞けば鎌倉には、お菊といへる娘ありて、ひそ／＼は金五郎に、娶合はする約束なる由、きいて猶さら胸つぶれ、さうとは知らずうか／＼と、便りの文を樂しみに、待ちし心の愚かさよ、殊に妹背のかたらひも、せぬ中なればなか／＼に、いつの世にかは添ふ事ならず、といふも今更よそほかの、男持つ氣はさら／＼なし、今は口頭の樂しみの、かひさへ泣いて暮すのかと、思へば千々に胸苦しく、あるにもあられぬせつなさ

な、父文之丞にもかたられず、ひとり心をいためしが、唯その事のみ思ふものから、うつら／＼と牀病の、朝な夕なの食事さへ、ろく／＼すゝまずうち臥しぬれど、もとより病む心なければ、あぢきなき世とうちかこち、一日二日と送れども、夜の目もあはさで案じ事、行末こしかた思うてみれば、よくよく薄き生まれにて、親にはおくれ姉には別れ、便りさへなき身の因果、心の願ひも叶はねば、生きながらへても樂しからず、いつそ淵川へ身を沈めて、果てなん事こそましならめと、戀に心も亂れ髪、なであぐる氣もなか／＼に、泣きしづみたる閨の戸を、更けゆく夜半の風ならで、ほと／＼とうち叩き「おかめ／＼」とよぶ聲に、驚かされて立ちあがり、そつと戸を開けうかゞへど、人もあらねばさてはわが、心の迷ひに風の音を、もしや戀しきその人の、來給ひしとや思ひしゆゑ、あな淺ましき心かなと、わが身の程をかへりみて、又うち臥すにふたゝび三たび「おかめ／＼」といふ聲の、耳に入るこそいぶかしく、もしやと惑ひて出て見れば、影さへもなしうち臥せば、またよぶ聲のする故に、おかめは夢幻うつゝかと、そのまどひさへ解けがたく、心亂れて立つたり居たり、こは生存へても添はれねば、思ひあきらめ死ねかしと、父母の呼び給ふならん。さ、それ／＼と狂氣の、ましなき迷ひにひかされて、死する覺悟に極はしより、幸ひ誰も見しらぬ樣子と裏口より駈け出でて、いづくともなく急ぎ行きぬ。其の明けの朝お竈の居ざるを、見つけて驚く文之丞、家内の男女もおどろき

て、其處此處と搜せども、その行方知れざりければ、文之丞はつく〴〵思ふに、日頃より金五郎を、夫の如く思ひ思はれ、互に憎からぬ中なりしを、いつぞや別れしその日より、唯うつら〳〵として、東の空のみ打眺め、寢心に添はれぬ事と、思ひ餘りの噂に絶えずや、夜もあ〳〵うなされては、淵川へなど身を沈めんと、うつゝの如くにいひけるが、さては入水やなしたりけんと、舟人を出だし、邊々、落ちなく尋ね探しけれども、その死骸さへ知れざれば、今は文之丞も定業なりけんと、やう〳〵あきらめ、家出せし日を忌日として、七日々々の訪ひとむらひもねんごろに、涙ながらにいとなみつ、文之丞はこの事を、くはしく狀にしたゝめて、遠江の金五郎かたへ、人を下して知らせけり。されば又金五郎は、本家の叔父文次郎の家に、養子に貰はれ來りけるが、思ひきやお常といふて、容貌のうるはしき、娘のありしに驚きしが、今更にせんかたなく、父の教へに從ひて、養父母に孝をつくし、暮すうちも郷に殘せし、おかめの事のみ氣にかゝり、末は女夫と約束して、別れて此の地に落ち着きしなら、便りをなして呼び迎へんと、思ひし事もくひ違ひ、お常のあれば此方の父に、おかめの事をうちあけて、迎へたしとも云ひがたく、殊に實父文之丞が、おかめは素性もいやしければ、本家の嫁にはなりがたしと、云ひたる言のかれこれを、思ひ合はせば、ゆく〳〵は、とても一處と添ふ事ならず、日夜嘆息したれども、かゝる譯の不思ひきれと、言ひ遣るべきすがにて、又遠ざかりなん事なれば、

なま中たよりをするならば、思ひのたねをいやます道理、音信せぬこそ互のため、いつか忘るゝ事もあらんと、あきらめては見るものの、愛敬づきて憎からぬ、お顔を今さら餘の人の、手活けの花になす事も、いと口惜しき事なりと、日々に胸のみ苦しめけり。かかるところに實父の方より、しかじかの事により、おかめお家出し行方知れずと、いひこしければ金五郎は、驚くこと大かたならず、掌中の玉をうしなひし、心地にあきれ胸つぶれ、氣ぬけするまでまどひしが、さすが男の事なれば、やうやくに心取直し、つくづく思へば縁なきむかしと、あきらめては見るものの、もしやおかめの心がはり、我の深く思ひゐるのも、知らずに男をこしらへて、家出せしにはあらざるか、又は狭き心から、悲しき事を苦に病みて、入水などせしにやと、さまざまに思ひとりて、心に廻向したりけり。是れより後は金五郎も、おかめが死せしと思ふものから、家の娘お雪の姿も、十人なみには勝れたれど、見かへる心もなき故に、世に樂しき事もなく、面白からぬ日を過すうち、夏去り秋も文月の、中旬にいたれど暑さはさらず。ある日金五郎は、酩酊といふ友達にさそはれて、大磯の燈籠を見物せんと、打連れてたそがれより、郭へいたりなじみの茶屋、守多屋へゆきて酒宴をまうけ、歌妓牽頭をんな相手にして、ざゝめきわたつて大騒ぎ。牽頭「コウ〳〵おたこさん〳〵、コレサおたこぼう、おまへもこつちを向き給へ。ト げいしやの袖をむしやうに引ッぱる おたこ「アレ厭だヨ、よしておくれ。そんなに引つはる

と著荷弁さされるかえ、すかなえのう、一[illegible]気がつかねエ、[illegible]感心しておくれようッ。コウおたこさん、いい子だからちよつとうしろを弾いておくれ、無類飛切上極上、[illegible]声の[illegible]し[illegible]仕[illegible]らすといふ声色をつかふから」[illegible]おつな集の[illegible]ひ[illegible]てだねえ[illegible]

うた 菊はとうりのもとよりも、けいしうの袖やかをるらん、

へぼ「まねするは、エヘンノ\、エヘヘンノ、エヘンノ\、エヘ\エヘンノ、エヘン\\エヘン」[illegible]だ\[illegible]したのだ、[illegible]小間物見せを出しおや[illegible]真平[illegible]」[illegible]なぜなぜ、こりやア雑色だ」[illegible]なんのこつた。[illegible]ハ[illegible]やほ[illegible]な事を聞き給ふな。よく[illegible]て御覧じろ。[illegible]

[illegible]シ旦那、妙な事がございます。誠にどうも、どうも成に、實に妙な[illegible]ござります[illegible]い、誰をいふのだ[illegible]貴方が誠にどうも[illegible]「己」のどうした[illegible]が惚れるで羨ましいか、[illegible]いかなこ[illegible]挨拶[illegible]お前さんはお目が[illegible]よく見えますネ[illegible]實にうらめしい[illegible]このこつた[illegible]、何をいふかと思つたら、足下は目か[illegible]だつけのをしい男だが、あつたら[illegible]よく御覧じまし、顔の[illegible]あんまい[illegible]合なんどは、[illegible]三味線の[illegible]来、[illegible]鼻筋が横の方へ[illegible]と通つて、眉毛が

まつくりと鯰口の様で、鼻は獅子でもねへが赤くおくれて、口は錢湯のざくろ口だが、流し男の給金が安いかして、齒は一向に磨き上げず、匂ひのあしき事いはんかたなし。皆へこいはぬてん／＼むきむきの、寄合世帯といふ顔がまへさつす、なかなかにしいが愛敬のねへ、女線のなささうな御面相だぜ。」甘二「こう／＼貴さまは、何の遺根があつて、おれが顔の棚おろしをするのだ。鄰の寶をかぞへるやうに、人の疝氣を頭痛に病むとは、よつぽどおめへも苦勞性だぜつ」まさ「とかく男のいゝものには、それまれるのさうゐせえで。」まさ「ハヽヽヽ」甘二「へヽ、おつうとまりたがる奴だの。」まさ「ナニ、頭はおどけだが、足下世間をさらけやあねえ、いい年まうけの筋があるさ、九月になると。」甘八「なるほど／＼」まさ「ハヽよく考へて見さつし。赤顔上といひ口前といひ。」甘八「ハヽヽヽ、富でもとるといふ事かノ」まさ「ナニさ、押し出雲さ、神明の祭だからよ。」甘八「ナニナ／＼、神明のまつり、ノヤあのかね生姜かつ」まさ「いよ／＼しい事をいふかしやがる。」まさ「そんなに難非を付けて悪くいつても、是れでも女にやア憎がられねえ男だよ。」まさ「そのおはいおはいがられた事もあるめへ、その顏でやアな。」甘八「そねめ／＼、顏にやアよふはの字にやはれねと。」まさ「ソリヤたつたひとつの目に惚れるか。ソハヽヽヽヽ」たこ「なるほど／＼目八され、甘口はまことに閉口だねえ。」甘八「ナニサ／＼、こんな理も非も辨へねえ、田夫野人と論は無益だ。」まさ「ナニ、己が田夫野人なら、足下は牛蒡にんじんだ。」はつ「ハヽヽヽ」甘八「ときに

こゝ、金さんとおつしやいましたね、ちよいと一ッけんむだかあきの田のといたしませう」ト云ひ、こりやア一ッお押へだ」日八「ナニサ、そこもあれば又甚もあるさ。モシ旦那、貴に物といふことがござえますトいふ対聯は、モシ、千年屋の、へりすで、この頃まで引込んでをりましたのが、けふ突き出しの名鶴といつて、ぶつつけ心太のお職さま。その器量といつぱ、天人は羽衣をかぶつて、弁天さまは鍵を落し、撫子がお宿の出の雨も、沈なまくつて星け出すはず」ト言へ、何うぞ山の節をあがあたの」日二「嬉きには、エ、とまアこのお新様は、そちらの旦那へまで、けて置きのト、そこでまた旦那、今にまゆこゝへ貴名様まれがりますから、よくお気をつけて、軽にすべくがれてこ、ねすへこつこは世話の初まり、とはつこすこは、ちよつとはとつはではにや御をかれ、まそこつにには油をすみな、ふてえ夏なら打ちの世、どでい振りは■のうまれ、血にまかされ、こんな結構にならかれたア。ハアどんどこどん、どんどこどんッ。ア、せつねえ、いきがはずむ。アッハッハ、、い、、、エ、やかましい、よくしやべるな、そんなにさわると、大井の恋が御承知しで、膳の芥がをどり出すだらう」日八「違へございせん。酒の道楽口がきかりをいつて、天地の引物お引き出すと、吸物膳の箸が突立つて、硯ぶたの肴をおつかしやるから、エレ花物屋しきのやうだ」、、、、、旦那おどけはのけて、モシ、噂をすれば影がさすとやらね、正真正銘本家元祖、ここでたし、

外八文字でしよなり〳〵。アレ〳〵、あの提灯がそでござえます。」丹「ほんにのう、金さんおめへもよく目利をして、もし馴染で気に入つたら、今夜の花にしなさるがいい。」金五郎「おけへねえ、なんならお前ともやひにしませう。」トおどけをいふうち、千とせやのつき出し女郎まな鶴は、新造かぶろをひきつれて、いらつしやいませんとあゆみくるを、金五郎はひとみをさだめて、見れば不思議や、への　れま、「お国の姿にいきうつし、もしやそれかとつく〴〵見れば、劣りはせねどどこやらが、違ふ様には思はれても、目もと口もと愛嬌ある、品かたちのよく似たれば、胸とゞろきて心まどひ、わが身の迷ひか、酔うたる故かと、しばし見とれて詞なきを、見てとる幇間酔狂も金五郎の肩をたゝいて笑ひながら、幇「コウ金さん、おまへは此のごろひどく物案じな様子だから、いろ〳〵にすゝめても、女郎もげいしやも地者もいやだと、だゞつ子がすねるやうに、いやだ〳〵といひなすつたが、なんと今夜の花魁はどうだエ。」金「さうさネ、なか〳〵美しいネ。」幇「よつぽどきさくさふな水あらばだネ。」金「ほんとうに、さういふ理窟でもねえけれど。」幇「けれどもなんだかをかしい。あなたがお気がないでもあるめえ。」金「ハヽヽヽヽ、マアなんでもいゝから、わたしやァあの子にきめよう。」幇「それがいゝ〳〵、そんならおれも行つて、誰ぞ見立てよう。」トふたりはたいこげいしやをひきつれ、ちとせやへをどりこみ、酔狂もあひかたをさだめ、お定まりの杯事も、ほどよくきりあげ床へまはれば、幇間は「御機嫌よう。」トみな〳〵どや〳〵したにゆく。金五郎は初会の事ゆゑ、羽織は枕元にぬぎ捨てて、横になつて寝てゐる處へ、田なかの真名鶴は、藍御納戸の縮緬、襟に光琳の筐の染め出し、絆おりめん

の裏襟(うらえり)つきし、ひとへものにつゐたけの縞絆(じゆばん)、黒の紋天(もんてん)に緋(ひ)のころふくりんの、腹あはせの帯(おび)をだら
しなく結び、鼻紙(はながみ)を持ち添へて褄(つま)をとり、いそ／＼しながら金五郎がそばへ来り、顔をさしのぞいて 眞名鶴「もしえ、モウおやす
みなんしたかえ。ながい留守でさぞおさびしくなんしたろう。マア目をお覚ましなんし ト手を取られて金五郎は、ふつと目がさめ
にこり 金「オヤおいらんか、いつの間にやつて来なすつた。くたびれて来つたら、寝入つてしまつたが、[illegible]
そんなはいいが、間(ま)しぬけに起されちやア気が利かねへ。[illegible]
[illegible] いへ私(わたし)のやうなものは、[illegible]
[illegible] お気にさはつたらおゆるしなんし ト [illegible] 金五郎はさとなくきていて、[illegible] こちやア眞鶴だ ト
[illegible] にわたし、見てるる。顔「オヤなんざんすえ。ねしやアなぜそんなに顔(かほ)ばかり見なんすへ。主(ぬし)にそんなに
見(み)られえすと、恥(はづ)かしくなりいすヨ。ト にっこり わらふ 金「まことにここに不思議(ふしぎ)。[illegible]
[illegible] よく似(に)るものがあるかしら [illegible]
[illegible]
[illegible] その儘(まゝ)。[illegible]
のか、話(はな)して聞(き)かせな [illegible]
かういふ譯(わけ)さ。わたしが幼(をさな)い時分(じぶん)から、行末(ゆくすゑ)かけて[illegible]かはし、女房(にようぼ)にならうと思つたなに[illegible]

野暮な野郎だと、笑つてくんなさんな。」まな鶴「なんのマァ笑ひんせう。さんならモウぬしは御新造さんがおざりますネ。」男「ヱ、ナニサそのなはモウとつくに死んでしまつたのさ。」鶴「うそ／＼そんなにお隠しなんすことはおいらやァおつせんかえ。」男「真ぢやァなしサ、實に死んでしまつたよ。」鶴「ほんうにかへ、いりやアマアさぞお力がお落ちなんしたらうネ。」たとひまた嘘いつはりにも、徒に思はれてお出でなんした、そのお力に似たと思つておくんなんすりや、わたくしが身に取りいしちやァ、實冥加至極しうありいすよ。」男「なんの、うれしい事はありやすめえ。そりやァほんの勤めの手くだ、首はじ出けはしないだらう。」男「すりやア勿體ない、なんでいつはりを申しいせう。初會からこんな事を申しいたしたら、おさげすみなんせうか、ぬしのためなら都合してゞも、呼び申したうおざりいすが、ぬしやァ人かた通り一遍で、もうお出でなんすこつちやァおざりいすめえ。」男「そりやァみんなこつちで言ふ事、一河の流れ一樹の蔭、他生の縁があればこそ、かうしてわざ／＼来るといふもの。おめへがさういふ心なら、わたしも根限り通ふ氣だが、いい時分に突き出しちやァ恨みだよ。」鶴「さうしてマア、ぬしを突き出しいしたら、それこそ罰があたりイせう。」男「それはさうと、たとへにも、他人の空似といふけれど、どうも他人とは思はれねえが、お前はマァいつたい何處の生まれか、なじみがひに話して聞かせな。」鶴「そりやァぬしの事さんすかへ、おはなし申しも致しいせうが、身の上をあか

しいしたら、ぬしに愛想をつかされいせう。」主「さう思ふもむりもだが、いづれこの郭へ身を沈めるには、仕合がよくつて來た者はねえから、なに恥といふではなし、はなして聞かせてもいゝおやすねえか。」重「ほんにそれもさうでおすねえ、そんならお話し申しいせう。アノ私はまことに〳〵遠くの國でおざりいすよ。」主「ハテナ、それぢやア蝦夷松前か、奥州の果てからでも來たのかえ。」重「イヽエ、ホ、ばからしうおすヨ。アノ上方でおざりいすからさ。」主「アヽ、アノ上方、ハテナ本當にかへ。」重「アイ、それだから遠くだと申しいすのさ。」主「何の上方の生まれなら、遠くな事があるものか。ハテ緣といふものはおつなものだネエ。わたしもやつぱり上方ぜうろくさ。」重「オヤ嘘をおつきなんし、なんのいやアぬしなんぞが、上方だとおつせえしても、上方にやアぬしのやうな、いきなお方はおざりませんよのさ。」主「そうさ、わたしの樣な不意氣な野郎は、どこの國にあるものか。そしておめへは上方の、もし數珠屋町の邊ぢやアねえかえ。」重「エヽ、ほんにさうでおざりいすよ。よく主は知つてお出でなんすねえ、その數珠屋町の六兵衞と申しいすまづしい者のむすめ。」主「ヤ、そんならアノ數珠屋町の、吉鐵貫の六兵衞とのの、娘であつたか、アノおめへが。」ト　あきれて暫しことはなし。假名鳥は何かは知らねど、わが身の上は幼き時より、母にわかれ家まづしき故、さるかたへ里にゆきて、やう〳〵成人なしたる處、中頃にたよされて、過ぎし年この大晦の苦界に沈み、父六兵衞はそれより先に、亡き人の數に入り、たつた一人の妹

は、藁の上から情ある、お方に貰はれ育つと聞けど、つひに一度逢ひもせず、便りなき身はつねん〴〵から、雄ばかりがゆく〳〵の、力と思へどかひなきつとめ、まめで居るやらどうしたやらと、案じるこの身の素性を、語るを聞いて金左郎は、驚く事ひとかたならず、我こそそなたが妹の親の、文之進が倅なるが、幼き時より妹おかめは、我が身と共に人と成りて、いまだ枕はかはさねども、行く末は女夫の約束して、仲よく暮すその中に、われは此の地の叔父の家へ、貰はれ来りしその後にて、おかめは家出し果てたるにや、行方の知れぬその處に、今また思ひがけなくも、姉のおん身にめぐりあひしも、今宵名のりあふといふも、やつぱりつながる血すぢの縁、あやしき縁なりけりと、いわぶしほ〴〵と物語れば、ます〳〵驚く眞名鶴は、便りにせんと樂しみ待ちし、唯一人の妹まで、世になき人と聞くからに、悲しさいとゞいやまさり、しばし涙にくれにけり。かかるえにしの淺からぬ、中なれば離さまじさに、身の上の事かたり明しぬ。されども互に一ツに寢ねず、一旦金左郎も妹お龜に、女夫の約束せし事なれば、今更その血すぢの姉が、流れの身とても枕かはさずは、さすがにうしろめたく思へば、眞名鶴もまたその心の爲、すいた男と憎からねど、帶紐解いては死したる妹の、供養にならずと心に慎み、いやらしきことさへ言はず。さりながら金左郎は、この儘にもふり捨てられねば、是れよりは常の客の如く、をり〳〵眞名鶴の處へ通へど、決して枕をかはす事なく、酒肴のみでは寂さ

を語りぬ。かくてその月もくれ、八月の初めになりけるに、例の如く思ひ〳〵の、俄狂言をどりなど、さま〴〵あるその中に、額俵屋といふ茶屋の、今度かゝへの藝者の小三、品かたちといひとりなりまで、五町にまれなる容貌ゆゑ、淺間のをどりにこの小さんを、傾城奥州に仕立て、衣裳著つけも美をつくし、淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて、人の耳目をおどろかす踊ゆゑ、郭中での大評判、をりふし金五郎は、待宵の月をながめつゝ、俄を見物なすべしと、例の如く守多屋の二階にて、眞名鶴と共に酒くみかはし、今や来ると待ち居るところへ、程なく〳〵来る淺間の踊、節おもしろき太夫の淨瑠璃、

あさい心としら絲の、染めてくやしきなれ衣、ありしながらの一ッまへ、小づま揃へてしどけなく、風に柳の吹くまゝに、まかせるはずのつとめがら、ここでも、いやな客にも比翼ござ、思ふ男の山鳥の、

トかたる文句につれて踊る小さんを、金五郎は、何心なく、見ればふしぎやすぎし頃、家出をして死したるおかめに、十分違はぬ顔かたち、これは不思議とまたゝきもせず、見れば見る程違はねば、是れもわが身の迷ひかと、思ひ直して見るものゝ、外の女と思はれねば、もしや浮氣な心をいだし、男をこしらへこの郭へ、遁げて來てゐる事にやと、まはり氣すれば腹立たしく、さりとて人に問ふも異なもの、とつくり樣子を見極めんと、それとはなしに見てゐれば、幇間の[illegible]見とれつゝ、[illegible]

ずゥ、誠の本尊、おさんも明神さま〳〵〳〵、外には決してござりません、三千世界にたつた一人じや」ヨ「モウ有りがたし、誠でござります、誠お心やさしむき、節信様の大黒柱、有り難い御天上か、釈迦の再来か、三国一の無類々々。」ゑい「たいそうほめるのう、聖賢でも賞やしねえか。」日八「モシだんな、聖賢処か、けふもきのふも昨日も今日も、文玉章の数々は、マセン、あんなうつつい美婦人が、つけ文をするので下のはせやすめさ。」ゑい「ナニ日八さんきついこつたネエ。十九文やの店ですらめやうに、うぬぼれ鏡が沢山だ。」ゑい「ホヽヽヽヽ、」日八「ヘンやつかましい、妬くな〳〵。」おとこのさゝは貫のへはいいが、とかく妬くので恐れるのツ。」おさわ「オヤよしておくれ、お前のおかみさんとはちつと違ふによ。」そゝ「旦那え、アノ小三さんはネ、上方から此の頃まゐりましたさうでございますが、よく早く春の込みましたおやまでございませんか。」主「さうか、とんだ遠くから買られて来たの夫かた男と駈落でもして、其の男に売られたのだらう。」せゝ「旦那さついもの、お前さんの判断のとほの、顔とはるらしいにけて来たが、その男にたぶらかされて、泥水へしづんだのでございますッサ」ええ、よまア〳〵やアノ子がかえ、どうもさういふやうすには見えいせんねえ。」もしえ、さうだやすえつせんかえ。」主「おいらんはさういふけれど、そこが苦界の小袋と小娘、蒲鉾のならねえ世の中でのとおへを言ふさ、ナニ〳〵旦那、さういふ訳ぢやアございません、わたくしがこのあひだ御亭へあがつた時、よ

く氣をつけて見ましたが、それは〳〵起居ふるまひの物しづやかさ、音聲はさわやかにして鶯のさ
へづる如く、多辯でなく、はすはでなく、意氣でしやんとして稈がよく、鴨川の水を産湯にあびて、
京おしろいを糠袋にいれて、みがきあげた眞の美女さま二ト諸手にあるまい生まれそだちだが、嬪重の
小さんをごらうじましたかエエフウ何だかろく〳〵見なんだが、よつぽど美婦人だつたの。一體
やうでございます。まア此の頃での藝者だと申します。いい金箱をかゝへました。ト
金五郎はむねに手をおき、ナノ小さんこそ面ざしといひ、上方から來たといへば、おやまにも相違はあるまい。直
名鶴にもうち明けて、樣子を聞かんと思ひしが、いや中々うかつに語りても、體であらうしてゐるの
らは、心がはりて男がたのに、身を沈めしもはかりがたしと、さま〴〵に思案して、今宵は先かた
き用あればとて、そこ〳〵に座敷をきりあげ、直名鶴に別れて大門を出でしが、怠る文取つて返し、劇
かに額俵屋重兵衛の造へゆき、彼の小さんに口をかけて、二階へあがり酒のみながら、今や來ると目
つところに、程なく小さんは俵をしまひ、うかぬ顔にて何氣なく、二階のはしごをとん〳〵と、上り
來りて金五郎の、顔と互に顔見合はせ、ハッとばかりに驚きあわて、立たんとするを金五郎は、すそ
をとらへて目をつりあげ「コウ小さんとやら、なぜ逃げる。氣障な客だと氣に入らねへ……
いいけれど、物も云はずにそしらぬふりは、見忘れたのか見くびつたか。よもや忘れはしめえがの。

未練が殘つて來たのだらうねえ、聞く事があるから下にゐろ。ト　いはれて小さんはむねにくぎ、なんといらへんことばもなく、めんぼくなげにひれふして、只さめ〴〵となきゐたり。金五郎はなほこゑあらゝげ、「コレ、あいさつしねえは面目ねえのか。エ、そのざまはマア誰ゆゑだ。定めしかはいい男のために、心がらのこの勤め顔。よく物をつもつて見ろよ。犬猫でもそれ相應に、恩といふことは知つてゐるぞ。それになんだ、己の顔を踏みつけにするは愚かな事、わらの上から育てられた、產みの親より恩の深い、養ひ親の情を忘れ、恩を仇の犬畜生、義理ある親の名を汚し、恥をはぢとも思はぬ狸めと、よくマア面もかぶらずに、のけ〳〵と出てうせたな。いかに道路をへだつるとも、多くの人のいりこむ郭、この鎌倉にもおれが親父の、文武の弟子はいくらもあれば、この街へもしないりこむから、それに面を合はしても、恥ぢやアあるめえ恥でもなかろう。さういふ事とはつゆ知らず、親父は直な心から、神かくしにでもなつたのか、又は身をなげて死んだかと、心を盡して尋ねさせ、うらなひ八卦御鬮にも、生死の程も分らぬから、家出した日を忌日として、佛事供養も懇にするも、くはしい書狀が來たゆゑに、子供の時より一ッに育ち、馴染がひに朝な夕な、念佛申してやらうと思へど、今は養子の身の上なれば、兩親の前へも遠慮がちで、心には任せねど、合間を見ては廻向して、樒香〳〵とさい備いたのも、萬一たつしやで居るならば、身の祈禱にもならうかと、心づくしに引きかへて、性根のくさつた恩知らず、大切な親をふり捨てて、この土地へ來て泥水稼業、オ

貞女だ、節義ものだ。髪のかざりの櫛笄、はでな衣裳に浮氣なところ、長唄豊後はやり唄や、一中ぶしをうなつたり、是れ見よがしに踊を踊つて、客の機嫌をとる事の為、人も迷はう惚れもしよう。悪性ものの天上あ。モウ／＼愛想のつかし納めだ。顔を見るのもいま／＼しい。ものをいふのも是れぎりだから、勝手次第に浮氣をしなされ。」トいひすてゝ立たんとするを、小三はにしたいなわいなさに、たゞなきしづみゐたりしが、こゝぞ大事とあわてゝとりつき、小三「サヽ、そんな御尤もでござりますが、マア／＼待つて下さいまし。くはしい様子を御ぞんじないから、お腹をお立ち遊ばすも、少しも御無理はござりませんが、是れにはいろ／＼深い譯が」ト「譯もあらうし義理もあらう。けれどもそりや、聞く耳でもたねへ。エヽ、いけふてえ、はなさねえか」小三「いゝえ放しはいたしません。言ひかひのない心から、思ひもよらぬおうたがひ、死なうと覚悟極めしは、今日の今まで目にいくたび、やつぱり死なれぬ身の因果、どうなりとして今一度、あなたのお顔を見たうへにと、あまたの人の入りこむこの花街、それはつかりを楽しみに、つらい苦界に身を沈めて、恥や人めに氣もつかず」エヽ、やかましい、よしにしろ。と、いつの文句めいた、そんなせりふはをかしくねえ。流行言に道理をつけたり、間に合ひの口はこても、その手ぢやアばかされねえわ」小三「左様ではござりませうが、どうぞ情と思召して、たつた一言申すことを、お聞きなすつて下さいまし。その上にてはともかくも、殺してなりとお腹いせ、御勝手しだいになされ

ましく身をなげかけてすがりとめ、涙ながらにわびるにぞ、金五郎もさすがまた、心強くは云ふものゝ、誰ならぬ小萬の事の爲、すげなく立つても歸られねば、袖ふり拂ひ身をそむけ、銚子の酒を手酌にして、茶碗にうけてぐいと呑み、手まくらなして寢ころびゐる。

小さん金五郎假名文章娘節用前編中卷　終

小さん
金五郎
假名文章娘節用 前編下卷

江戸 曲山人 補綴

第三回

當下小さんは胸なでおろし、涙を袖にぬぐひつゝ、金五郎の傍へさしより、「只今こそ實を申しましても、一旦お疑ひを受けましたれば、誠とは思召すまいが、あなたにお別れ申してより、一日片時忘れませず、泣いては明し泣いては暮し、もう〳〵悲しい日を送るも、やがて東へ落ちついたら、呼びによこすとおつしやつた、そのおことばを力にして、今日か明日かと指をりて、まてば一日も十日の思ひ、明けても暮れてもお便りなく、一月たち二月過ぎ、三月四月と日は立てども、風のたよりのお文さへ、ないて暮して居るうちに、この春の彌生の頃、日さへ忘れはいたしません、初の八日の夜もふけて、みな家内は寝しづまつても、わたくしはめの目も合はず、これかた行くすゑをどうかうと、思ひまはせばいとゞしく、便りなき身をあなたにまで、捨てられしは世に頼みなく、いつそ死なうか果

てようかと、案じすごして居ります折から、闇の戸とん〳〵うちたゝき、お龜〳〵とあなたのお聲、さてはと嬉しく〳〵戸をあけて、見ればなんにも眞の闇、これも心の迷ひかと、また寢ますると又とんとん、おかめ〳〵とよぶ聲の、三度四たびと聞ゆるゆゑ、また出て見れば物もなし。我とわが身で合點もゆかず、途方にくるれば寺々に、ひゞく夜中の鐘の音の、あはれ無常を告げるかと、ながらへ難く胸せまり、物うき月日を送りますのも、心苦しく苦患になり、いつそ死んだがましであらうと、思へばしきりにぞく〳〵と、首すぢもとから身の毛だち、死ねよ〳〵と死神の、ついて死ぬのを勸めますゆゑ、立つても居ても落ちつかず、我を忘れてふら〳〵と、家をぬけ出で走りましたが、その後の事はさつぱり知らず、どうして身を投げしやら、賀茂河へ流れ着いたを、近所の者に引き上げられ、息ふき返して見ましたところが、顔も見知らぬこはい男が、女衒とやら人買とやらいふ男と二人で、いろ〳〵な、あだいやらしい事をいうて、抱かれて寢るか言ふ事聞くかと、いはれて怖さ恐ろしさ、いろ〳〵にわびましても、こはい目ばかり致しまして、聞き入れのない無理非道、というて身を汚すくらゐなら、舌を喰つてなと果てませうと存じましたが、身を投げてさへ助かるもの、まだ命の盡きぬ事なら、どうぞして東へ下り、あなたのお顔をもう一度、見ましたうへで死にたいものと、思うた心の通じましたか、その惡者が、いふことをきかずば、遠い大磯へ賣りこかし、金にするとやら申

します故、とても運悪く死におくれ、悪者の手に捕へられては、おとつさんのところへ直ぐすなほに
は、返す事もありますまいし、どうで憂き目を見る位なら、大磯の郭は朝暮に、人の入りこむ處とい
へば、そこへ身を沈めたなら、あなたにめぐり逢はれうかと、はかない事を便りにして、御恩の深い
おとつさんを、お見棄て申す心はなけれども、心一ッにせんかたなく、とう／＼この額田八屋へ、藝者に
賣られて參りましたが、思ひもよらずたつた今、あなたにお目にかゝりまして、あまりの事の嬉しさ
に、ものさへいはずに泣きましたは、私が前後の考へなく、不調法でござりますから、お許しなさ
れて下さりまし。殊にあなたに逢ひたいばかりに、覺悟いたしてこの苦界へ、身を沈めは沈めました
が、今さらお目にかゝりますと、まことに身の程が恥かしく、消えてもなくなりたうござります。どう
で大切のおとつさんを捨て、道ならぬことに身を墮し、御苦勞かけるあなたには、御憎しみをうけた
この身、いつまでながらへ居られませう。どうぞこの世の思ひ出には、今までのお疑ひを、お晴らし
なされて下さりまし。ト しじうなみだのうるみ聲に人のきこえをはゞかりて、詫びることばの
ねさへならぬを、聞けばますます金五郎も、いつたん嫌にはなれども、かくまでわが身
を深くおもうて、この泥水に身をしづめても、操に似たる心の潔白、苦勞さするも我の爲め、不便な
ものやと心には、おもへど底の事なれば、そのまゝ心をなれかねて、返事もせずに空寐入。小さんは
なほさ
りよつて、顔を もしあなた、これほどまで申しますのに、お聞きかはれませぬか。エ、モ、金五郎さ
しみそきな

んす、どうぞ御堪忍あそばして、お心を直してくださりまし。もしお疑ひが晴れましたら、たつた一言いつものやうに、堪忍するとやさしいお詞、お聞かせなすつて下さりまし。よ、よ。ト おがねあらはすむすめ余の、金五郎に取付きて、しばし涙にくれけるが、心つきて涙をはらひ、あたり見まはし金五郎の、側に置きたる指添を、音せぬやうに、そろりと抜くを、見るより金五郎ははねおきて、その手をしつかりおさへつけ、トコレ何をする、あぶねえわ。人おどしの刃物三昧か。トいふ顔つくづく見て、涙ぐみ、ホンニエ、お情ないそのお言葉。女子だてらに人おどしの、こはい刃物が持たれませうか。そりやあんまりでござります。なんぼあなたが男でも、お情ないねどうよくでござりませう。是れほど事をわけまして、お詫言を申しますに、たつた一言のおへんじもなく、しばらくお目にかゝらぬとて、そんなにやアわたくしが、憎くておいやになりましたか。そりやあなたでもござりませぬ。たとひ女夫のかためはせずとも、一旦あなたのお口から、戯談におつしやつたかは存じませぬが、行くすゑかけて女房にするの、二年や三年逢はなくつても、変る心はない事の、短気を出さずに便りを待てのと、人ばつかりを嬉しがらせて、わつか半年あまりのあひだに、さうお心の変りますは、あんまり聞えぬあなたのお心、どうでそのやうにおきらひなされば、何の楽しみ今日が日から、むだに命をながらへませう。わたくしがなきあとで、せめて一遍の御回向なと、申した事がないやの。私、とてもそれも叶ひますまい。これもみんな約束事、いたし方もござりませ

ぬ」ト はだしを見すましましたるを、金五郎は指添もきこゆ 金はやまつた事して後悔するな。それ程に深く思つてゐるならば、生きながらへて後の世まで、人の物笑ひにならぬ様に、にごりの名をもとゞまけ、生きわかれた其身の緒に、めぐりあうて名告りあひ、古郷に殘したわが親父に、孝行せうとは思はぬか。殊にそなたの身のうへは、此家へ賣られて来たこともある、わがものならぬ主人の體、なりや今こゝで死んで見ると、主人も難儀このおれも、のがれぬ市で難儀をするわ。死は一旦にしてなし易く、生はかたしといふところへ、心づかぬか、コレ小さん。」ト いふにそ、そんならあなたお親ひが、聞わけましたと申しますのか。そりや本當でござりますかえ。」ト いひながら、なに心ばへつくものか。」ト 、嬉しうござります。」それでちつと氣が落ち付きました。」ト たがひに心はとけながら、金五郎も男のいぢ、なにぶんここにはゐられねば、又酒者を いひつけて、傾城帮間を呼びにやると、程なく皆々どや／＼と来る。帮間「ヘイ旦那、其の後は、別以来、とんと見参つかまつりませぬ。」金「ほんに目八公、さつき逢つたまんまだつけの。」目八「ハイ、さうでありましたつけが、ハイ、太鼓もおもしろくじやり、目八公それおやつ、先刻以来とはとんでものう。」目「ハイ、旦那、お顔なかすつたと存じましたが、またここの穴へお這入りなさいましたネ。ハイ、、、、、小さんさん、是れはおはやう、さゝおくたびれなすつたらう。」ト あいさつするに、小さんはけどられじとなみだをかくし 小三「アイ、やうやう今しまひましたヨ。まことに／＼暑くつて、ひつくり汗になりましたよ。」ト いひまぎらせど、と に胸の

をきまられねば、さしうつむいてふさぎこむ。金「ときにおいらんはまだ御入内がございませんね。モシ旦那、やつがれがちよと、敕使に立ちませうか。」トいふに金五郎笑ひながら「ナアニ、足下の足を勞するまでもなしさ。ちつと見かけた由があるから、おいらんの處へ敕使もたてず御内意もしねえのよ。」おまた「ナア／＼旦那はおいらんに、かたい約束がなすつたぢやアありませんかえ。それにやアそんな事を。」金「ナニサ、今に樣子がわかりませうから、眞名鶴も呼びにやるのさ。まア／＼そんな事は扠置きとして、諸事消だ、唄へ唄へ。」トぎよいにしたがふげいしやの長唄、

さうした黄菊としらぎくの、おなじつとめの其の中に、外の客しのは捨小船。

トうたひはやして囃はしく、しだいに銚子の數もかさなれば、はやことくぜりのはやり唄、上はかたうたで騒ぎ立つれど、とかく少三はうき／＼せず。目八は小三の肩をたゝき、目八「コレ女房ども、なぜマアそのやうに鬱いでゐるのう。ちと浮々しやいのう。コヨ成田屋。」小三「エヽモウ嫌だヨ。おふざけでないよ。」目八「コレなぜそんなに、ひんしやんひんするのだ。人目が多くて恥かしいか。さうか／＼。ハテさて初心な子ではあるぞ。おまへとわたしの其の中は、知らねえものは、ネエもし旦那。」金「大きにさ。」目八「年たこの子は目が高いだきうで、なんぼ馴染のねえおれでも、ちつとかそつとは何とか彼とか、のうおとわこ。」小三「さやうさねえ、今日はどうかおしだきうで、まことにふさいでお出でなさるか、こりや

ァ何か譯がありませう。」トけどつた様子の口ぶりに、金左郎はわざとまぎらし、金「さうヨ、大かた色男が、侍つてゐるのをこつ
ちへ呼んだで、それできつく鬱塞いだらう。どうで己が樣なのつへらぼんは、女にやァ縁遠いから、
兄弟分になるつもりだ。ちひせえもんだがやァ面倒だから、キァノ〳〵是れへついでくんな。」ト大きなのみに酒
をつがせ、のみに懸ると小三はおさへて、「モシあなた、それではあんまり過ぎますぞえ。」金「なぜ、酒がすぎちやァわる
いのか。」小三「わるいと申すぢやァござりませんが、あんまりあがるとお身の毒、わたしがすけてあげ
ませう。是れもやつぱり勤めの一ツ、みなさん笑つておくんなさんなよ。」トぐつとのみほし、ほりといきをつく。金「
ヨ濱々、ありがたし。玉藻前の再來か。これらがほんの、よしこの〳〵。」日八「モシ旦那、わたくし
が目の悪いせゐか、小三さんはどうも、おいらんに似てるなさるぢやァござりませんか。」トいはれて金左郎
は嬉しさうにきつくり、金左郎「ナニ小三がか、どれ〳〵。」ト見ながら、小三の顔をさしのぞけば、小三はうれし
さ恥かしさに、はなぢみでて顔をかくす。「ほんにのう、足下の目のせゐでもねえ、己にもさう見えるやつヨ。他
人の空似とやらだ。のう小三。」トいはるゝたびに小「どうでございますか、私なんざァ。」日「ィャ、
なんだかむしやうに醉ひがまはつた。ヲイ〳〵小三、水を一杯もつて來てくんな。」トいはれてうわふすだ、小
三は下へおりて行く。日「モシ旦那もし、こなたぬきでお迷ひなさるな。それやァ近ごろあなたでも御ぞんじありません
たか一ツ嘘だとおもひなさう。モシだんな、およつとやァいけません。モシ旦那、これはしたり、こゝおよつ

たまうな」日八「そんならもうそろ〳〵軍勢は、この陣を退かう。のうおとわさん」トいひさうされし。」トいふところへ、小三は茶碗に水を汲みきたり、小三「オヤ、だんなはおよつたかえ。」日八「さやうさ、あんまりあがりつけたから、よつとおよるがようごさんすやせう。そんなら小三さんおのみなりと。」ト しかし旦那と小三さんとうしながひおやすみ、猫に鰹節泣く子に乳で、よつとあぶねへものだネエ。」小三「ヲヤいやな。おせんも今に下へ往くがねえ」トいつておとわさん、はゞかりのながら、枕と掻巻をちよつと下へさういつておさんなさいな。」おとわ「アイ〳〵合點でございます。」トみな〳〵下へ引きちがへて下女、かいまきと枕を持ち來り、「そんならもし枕をおしてしまうかえ。」ト金五郎は、いふ時に小三の膝をそつとつく。小三は心を得ぬ顔で、「ヲヤ何だ私が今、お起し申して上げるから、そこへ置いていつておくれ。」下女「アイといひながらしこまりました」ト下女は枕をおいて行く。金五郎は目を開いて、あたりを見廻しまくらを取つて「ハイ、これぢや、まだ夜目に由良といふ計略だ。」小三「もつとこつちへおよんな」ト小三の手をとり引きよせる金「また誰か参りますよ。」小三「お前さん人のこつたから、そんな野暮な者が居るものか。但しはいやか、嬉しくねえか」金「あなたのお心からつけまして、嬉しい事はうれしいが、思ふにつけてまた一ツ、心がゝりが出來ましたませんヤ〳〵、何が」金「そのはお嬢に不義理だ」小三「嬢は人の事より貴方のことさ。聞けば千年屋の賢名鶴さんは情を賣るか、動かのなかに引きかへて、わ

わたくしは又座敷ばかりの、はかない歌妓の身のうへ故、たとひどのやうな譯あつても、彈妓は抱への女郎衆には、勝たれぬが郭のならはし。それ故たまさか中お目にかゝつても、今日より末はどのやうな、つらい憂目を見ませうか。知らねば知らぬで心はすめど、あなたと眞名鶴さんとの譯もあれば、やつはり胸をもやすたね。悋氣は女子の嗜みなれど、流石女の淺はかに、よい貌ばかりしては居られず、どのよな事であなたのお名まで、出るやうな事でもありませうかと、今からそれがさきだつ苦勞、思へば悲しうござります。」「なんのこつたな、これやアをかしい。そんな苦勞を今からすると、天井で鼠が笑ふによ。この郭の立だといつても、思ひ込んだが男の意氣地、郭の掟をやぶつて見せう。といふはまことの意氣張づく。だから眞名鶴とおれが中も、深い馴染であらうかと、一寸聞いても腹が立つ筈。幸頭歌妓もくはしい事は、目に顏に出さぬから、惚れて通ふと思つてゐれど、これにやア深い樣子があるのヨ。といふ譯は外でもねえが、おめへが家出をした事を、知らせの状にがつかりして、この世に望みも絶えたから、ながらへて居ようとも思はなんだが、又よく／＼考へて見ると、實に死んだが牡癡であるか、又は外にまよひかはした、男があつて迯げたのか、取りとめた事も分らぬのに、己ばかり心中立てるも、あんまり愚痴な案盤で、末代人の物笑ひ、殊に上州の親父をはじめ、此の地の親父や養母に、苦勞をかけるは不孝と、心で心を取直しても、おめへの事が忘られねえから、他

の女にや心もうつらず、一日々々と暮すうち、友達にさそはれて、いや／＼燈籠を見物に、來た日が丁度眞名鶴の、突き出しの日でとり／＼に、美しいと評判するゆゑ、もしや少しも似てゐるかと、見れば迷ひかそなたにその儘、ハテ似た者もあるものと、客になつてよそながら、聞けばやつはり都といふから、心ゆかしく懷かしく、初會の晩から打解けて、互に身の上明した處、似たのも道理、お鶴といつて、甲にやられた六兵衛殿の、總領娘と聞いてびつくり、妹のお鶴は斯う／＼と、話せばお鶴も共に驚き、泣きつかこちつ哀れな話で、一つに寢るは扨おいて、妹のそなたに心中立て、帶紐とかぬこすがの氣性、おれとても又おめへの生死が、知れぬからとてその姉の、眞名鶴を抱いても寢られず、といふて見捨てるも本意でねえから、妹のよしみに客になつて、末ながく力にならうと、約束をして通ふゆゑ、深い樣子のある事を、誰一人知る者もなく、今日まで義理で遊びに來たのョ、ところが今度額重で、かゝへの藝者の小三といふが、淺間の踊を踊るといふが、郭中での隨一と、とりどりに評判するを、守多屋の二階で眞名鶴と共に、見ればそなたに違はねば、どういふ事でこの郭へ、遠路を隔てて來てゐるかと、不審に思へば幇間共が、男のために身を賣つたの、男と逃げたのなんの彼のと、いふを聞いてはこの胸が、はりさくばかりに腹が立つて、心の腐つた女の事、ふりむいて見るもいま／＼しいと、あきらめて見ても兄妹のこと故、やつはり迷ふ心の愚癡から、なんでも會者を

糺したうへ、ともかくもしようと思つて、みんなに知らせず歸つたふりで、取つてかへしてこゝへ来て、見ればそなたに逢ひはねえが、顔を見るより物をも云はずに、逃けるから猶腹が立つて、今の樣にいつたのも、なんと無理ぢやァあるめえがの。かう心がとけるからは、眞名鶴を爰へ呼んで、姉妹の名のりをさせてやるぜ。」トきいて小まは大きにおどろき、「エ、そんならァノ眞名鶴さんは、わたくしの姉さんでござりましたかえ。アノ姉さんで。」ト「さうヨ、正眞正銘のお前の姉よ。」「ヘエ、そりやァ嬉しうござります。さうとは微塵もぞんじませんで、淺い女の心から、いろ／＼愚痴な恨みごとは、もつたいないとも、恥かしいとも、又嬉しいもやま／＼なれど、なんの因果でこのやうに、姉妹ふたりが揃ひもそろつて、つらい勤めの流れの身、はかないなかで名のりあひ、つもるはなしのうき事も、亡き兩親が草葉のかげから、御聞きなすつたら、うかばれますまい。同じ勤めのその中でも、騙されしとは云ひながら、眞名鶴さんは親のため、苦界に沈むも恥でもない。それに引きかへわたくしは、いたづら事の心から、御恩の深いおとつさんを、郡に殘して此の勤め、我が身でわが身の愛想もこそもつき果てて恥かしい、面目もない身でござります。」「ムヽなるほど夫れももつともだが、ハテ何事もみんな約束、どうするものか、仕方がねえわな。そんな事を苦にやまねえで、ひさしぶりだから浮き／＼して、ちつとにつこりして見せな。一體のろけるやうだが、眞名鶴とお前と、よく似てるが、なら

べて見たら父いちだん、おめへの方が美しからう。」小三「ホヽヽヽ、そんな事をおつしやるけれど、姉さんとおまへさんは、どうも知れませんヨ。」トにつこりわらつてよりかゝる。主「こいつァをかしい。姉さんとおれがどうしたと。」小三「ハテ、ホヽヽヽヽ、どうもなさりはしますまいが、私はどうも。」主「なんのこつた、寝たらうといふことか。」小三「ハイ。」主「ハテお前も疑ぶかい。今もくどくいふ通り、小さい時からひとつに育つて、あんまりかはいがられもしなんだが、憎がられもしねえ中だに、おめへをすて真名鶴に、見かへる心があるものか。」小三「それでも戀は思案の外、をとこの心は秋の空とやら、お疑ひようすではございませんが、アノ芝居でもいたします、お半長右衛門を見るやうに、思案の外の不義いたづら、長右衛門は年といひ、お絹といふおかみさんのある身分で、ひとり娘のおはんをば、身おもにさせたいたづら者。」主「コウ／＼なにをいふ、そりやァほんの狂言だ。よし又實說の事にもしろ、なんのおれが水くさい、そんな心をもつものかな。朱にまじはれば赤くなると、おめへも僅かな間泥水を呑んだら、たいそう手も見え足もはえたの。そウいい加減にやきもちをやいて、久しぶりだから、もつとこつちらへ寄んねえヨ。」ト…………。小三「私はモウ、餘り嬉しくつて、夢ぢやァないかと思ひますヨ。」主「へン、夢なら大方、はやく覺めればいいと思ふだらう。」小三「又そんな憎いことをヨ。夢ならどうぞ、いつまでも覺めずにをれば、ようございます。」主「うそ／＼。そし

てモシ夢ならどうする氣だ。」小三「どうもいたしませんが、お側にゐて。」金「それから。」小三「オホ
ホ、、、いやでございますヨ。」金「○○○○○○かいやか。」小三「どうだか存じません。」ト顔をあかくしてうつむく。
金「ナニ知らねえ事があるものか、○○○○○○○○御存じだらう。○○○○○○○○○○○……」
心もうちとけて、契りそめたる湯帷子、○○○○○○○。かくて是れより金五郎は、千年屋へ
人を走らせ、眞名鶴を招き寄せて、小三に對面させしかば、眞名鶴も始めにおどろき、生まれて初め
て姉妹の、まみで逢うたるよろこびに、嬉しさあまる悲しさは、身儘にならぬ勤めと朝め、あぢきな
き世と打ちかこち、泣きつ笑ひつ夜とともに、かたみに憂さを語りける。かくまで小三と金五郎は、
あさからぬ中なるゆゑ、眞名鶴は小三のこと、よふまではなけれども、千蔭に八千世もよかけて、不
便と思ひあはれみて、お情かけて下されかしと、いとねんごろに頼みける。さても金五郎は、小三と
契りを込めしより、互につのる戀中に、一日逢はねば氣に懸かり、二日も顏を見ぬ時は、心もすまず苦
になるまで、一と夜も缺かさず通ひけり。頃しも師走の半ばにて、今は木すゑの花とちり、雪をいとは
い岡上、雪見の船をさへつけ、連れをはなれて金五郎は、ひとりよび仲町に來たりしが、例の傾城屋へ入りて來
れば、それと見るより若い者、これは田部、だいぶお遅う。この大雪に、よい御機嫌で。今晩の
るいも頭の夜も、通ひくるわの大門をか、、、、、あゝおぼふ寒くなつて、けんな氣だしよ。」トへつくと

のとほり飲み込んだらうの。」ト　ヂツト合點承知之助、たゞし今夜らはしつかりおあつたまんなせいまし。サアお二階へ。」ト　案内に金五郎は、はしごとんとん　奥の小座しきへうちとほれば、娘分のおきく、ぼんをもちきたりて、茶煙草。オヤ金さん、よくいらつしやいました。お珍らしいものが澤山ふりましたねえ。」金「さうサ、それだから一ぱい寒いの。」きく「よくこの、マアお寒いに、貴方もよつほど小三さんにやア御信仰でございますネ。」金「御推察の通りさ。しかしおめへなんぞも容貌はよし、氣めへといひ、しん心をする男が多からう。」きく「ほんに、マアおかしく申しておくんなさい。なんの私のやうな者を、つめつてくれる人もございませんヨ。」金「さうよくいふぜ。しつぽりと、しんねこではまぐりのお吸物をしめてる人が、のうお菊さん。」きく「オホヽヽヽヽ。あんな、憎らしい事を、小さんさんにいつつけますよ。」金「ハヽヽ、コウお菊さん、お前に獻上しようと思つて、持つて來た物があつたつけ。」ト　ふところから、本ぐつかふかく、わんきくかくしを出してやる。きく「オヤすやおよしなされればよいに、毎度どうもお氣の毒さまで。」金「なんの、マアだまつて取つて置きなナ。お前のすきな、紀の國やのだから。」きく「誠に有り難うございます。ほんに鈍菊がた、源之助のでございますネ。どうも誠に風といひ、甲と云ひ、いつそ、好いた形でございますヨ。」金「ヲウときに、小三は都合は能いかの。どこぞ、座敷へ出てるのかえ。」きく「イ、エ、なんでございますヨ、晝方から口がかゝりましたが、なんだか氣色が惡いとやらで、みんなお座敷を斷つて、引きこんでる

なさいますよ。」三「さうか、どうしたの。又れいの癪だらう。」きん「イヽエ二癪ではありますまいが、大かた此の雪に、あたんなすつたので、ありませう。小三さんの氣色のわるいは、おまへさんの、お藥が、いつも、よくきゝますから、早く知らせて參りませう。」三「何のかんのと、嬉しがらせるのか。おめへもよつぽどきざるものだよ。」ト煙管でしりをちよいとたゝく　きん「オホヽヽヽ、有りがたうござりますよ。」ト　おきんは立つて下へ行く。程なく小三は、ぐつたりと、梯子をあがつて出で來るすがたは、何かなやましげに顏色さへも常ならず、あをひ髮なる島田髷、鬢のおくれ毛寢みだれしを、黄楊の小櫛にかきあげつゝ、重き頭にもにつこりと、笑ひを含むあいきやうは、俗に所謂いのお取り、男ごろしといふべけれ。金五郎は、行火へあたり、寢ころびてゐる側へ、小三はよりそひ、さしうつむくを、差覗きつゝ　金「どうした、ひどくふさぐのう。雪の寒さにあたつたか、風でも引きやアしねへかの。」三「ナニ風もおつとは引きましたが、そればかりではありません。」金「ナニ、夫れぢやアいつもの持病の癪かの。」三「持病や癪の二日醉なら、ふさいでゐるてもあなたのお顏、見れば直るは常の事、そんなことではござりません。」金「ハテおつなことをいふもんだの。さうしてまアどういふことだ。」三「なにあなただかいつそ苦になつて、人にも言はれぬ心の苦勞。」金「ナニ、人にいはれぬ苦勞が出來たハテナ、ハヽヽヽ、それぢやアおまへかた、おなじみの客が身うけをするといふ事かの。」三「なにあなたの事、そんなことがまアなんでござりますものか。」金「なんだとは

小三「アノ、是れでございます。」トはらへゆびをさして恥かしさうにかほをふくする 金「ハヽア、そんなら、とまつたのか。アノ夜食のかたまりが出来たといふのか。」小三「ハイ、それだからモウ、まことに苦労でなりません。」金「なんの事かと思つたに、どうでかういふなかだもの、子の出来るのは覺悟のうへ、なにも苦にする事はねえ。さうしてとまつたのは、いつからだ。」小三「モウ三月程になりますヨ。」金「そりやア大そうはやかつたの。しかし身重になるからは、いつまで勤めもなるめえから、追付け奈になつたらどうなりと、重兵衛に懸け合つて、つがふして勤めをひかせるから、必ずあんじることはねえヨ。マア〳〵何はともかくも、實をむすぶ目出たいことだ。心祝ひにこれからわつさり、みんなをよんで酒とせう。」小三「とは言ふもののこれからは、一ばいあなたに御苦労を、かけませうかとそれが今から。」金「苦労になるとは金ばかりの苦労、つまらぬ事を案じ立てして、煩つてくれちやア、いかねえぜ。サア〳〵酒だ。」トこれよりいつもの幇間藝者、大ぜいあげて大騒ぎ、酒筵にときをうつしけん。

小さん
金五郎
假名文章娘節用前編下卷　終

娘節用二編叙

いろは引の節用集は、日用の御重寶にて、士農工商が朝暮の、引書、乾坤時候草木器財、何でも選採十三門、部分に四聲の畫引入らず、和かいのが當世と、書いていたゐ假名まじり、無用とこじつけし、俗でいいとか通意だとか、茶かして掃の香的に、洒落を版元實と心得、二編は今些色氣澤山、戀といふ字の通意から、寄せての五冊物、初編の筆についで、いやといはれぬ義理と讀草誰、欲かれぬものは新趣向、遂ら五日百の魂胆も、穿りの具合にせ、帶の心意氣を集せし、小三金五郎が偕老の、その約言のひそ〳〵と、枕に寄る仲の話に、これぞものにもよらうかと、書肆の擔せし稿本へ、書きつぎし如くに補綴の、序に朱墨の筆の末に、口繪の前を汚すといふ

江戸　三文舍主人戲題

小さん金五郎 **假名文章娘節用** 後編上巻

江戸　曲山人補綴

第四回

こゝに又、千歳屋の眞名鶴は、妹の小さんに名のりあひてより、力になりつなられつして、いとむつましく萬の事を語らひて暮せしが、かねてつき出しの時分より、さる有徳の商賈の、隱居が深くなじみ來つ、何くれとなく深切に、よく世話をなしたりしが、其の年の暮眞名鶴に、かの隱居に請け出され、向島の邊に樂々と、世をおくる身となりにける。されば月日の過つこと速かにて、明くる二月のころには、小さんははや五月になりしかば、座敷へ出れば夜も更ける、又は無理なる酒も呑む故、身のためにあしかるべしと、金五郎は額風呂のあるじにかけ合ひ、もとの手付の金を遣はして、近きうちには請け出す程に、夜の座敷へ出さぬやうにと、たのみにあるじ重兵衛も、さすがはすゐな男ゆゑ、早速に承知して、いと深切にいたはりけり。かくて金五郎は、小さんを身請の金とゝのへんと、

さまゞゝに思案したりしが、もとより大金の事なれば、養父文次郎へ、うち明けていふべきやうもなかりし故、いかにやせんと左や右に、ひとり胸のみ苦しめしが、やう／＼に思案をめぐらして、京師の父文之丞かたへ、ひそかに言ひ送りけるは、この程二條の小鍛冶宗近の銘作にて、大小の揃ひものあり、殊に燒刃世にすぐれし、わざものにて其の價は、一包との事なるが、もとより兩刀は武士のたしなみ、何とぞ是れを手に入れたきまゝ、内々にて右の金子、御かし被下候やうにと、ひたすらに懇望の文面ゆゑ、文之丞もいと秘藏なる、一人の子の望みなれば、いつはりなりとは露しらず、まことゝと思へばわが子ながら、よき心がけ末頼もしく、本家を繼げども、兩親のあるゆゑ萬事身まゝにもならで、心に任せぬがち、さこそあらんと子を思ふ、なさけある親心に、故なく百金の金をとゝのへ、爲替にて、ひそかに金五郎のかたへ送りけり。扨も金五郎はけいしやの小さんが、唯ならぬ身となりしより、猶さらに可愛さいやまし、はやく勤めをひかせんと、思へども身請の金とゝのはねば、是非なくみやこの父のかたへ、刀もとむる金なりとて、いつはりて書状を送りしかど、かの地で金とゝのふや、それさへ的にならざれば、とにかくに心安からず、みやこの便りを侍つうちに、しだい／＼に月かさなりて、小さんははやこの月が臨月になりしかば、額侯屋の重兵衛夫婦も、深切なる心から、慾をはなれて、小さんをいたはり、殊に金五郎の親もとも、豐かなることを知るゆゑに、手付の金を取り

しのゐにて、殘りの金はうけ取らねど、さらに危なことゝもなく、産の手當を何くれと、のこるかたなくまめだちて、安産をこそ祈りける。金五郎はかくまでも、額重夫婦の深切の、ひとかたならねば少しもはやく、身請の金を渡したく、思へどそれも自由ならず、ひとり胸をぞ苦しめける。はや月みちて小さんは、玉のやうなる男子を産みしかば、金五郎はさらなり、額重夫婦も、喜ぶこと大かたならず、その名を金之助と名づけしが、兩親に似て美しければ、金五郎は日ごろにまして、小三金之助の愛にひかされ、とかくそは〳〵、氣もおちつかず、内に居ることはまれにして、額重へのみ行くものから、白翁は總領の、文之丞が不身持にて、大かたならぬ苦勞をしつれば、祕藏孫の金五郎、いたづら者になりもやせんかと、はら〳〵思ひゐたりしに、近きころは外を内、内を外と居つゞけるも、ほど〳〵の樣は若ものゝ、ならひとさのみ咎めもせず、打捨ておきけるに、漸々につのるゆゑ、かくては身の爲惡しかるべしと、思うてある日わが居間に、孫娘のお雪に琴を彈かせ、煙草くゆらし聞き居たるが、きせるをはたいて（おゆきにむいて）「コリヤお雪よ、モウ琴もよいにしやれ。この頃は大ぶん上達したが、ずゐぶん身にしみてならうたがよい。わしもおのしが琴をきいて、大きにうさをはらしました。年がよるとおつなもので、外に何も樂しみがないから、お念佛でも申したり、おのしが琴や三味線を聞くのが、何よりよい慰みだわやい。イヤそれはさうと、アノ金五郎は内にゐるのかの」ト問はれてお雪は琴のつめを、はづしながらにこやかに、「イヽエお

兄さんは、お部屋にお出であそばしました。なんご御用でござりますか。」貞「イヽ、さしたる用もないけれど、私が今茶を入れるから、ちよと話しに来いと呼んで来やれ。」ゆき「ハイ／＼かしこまりました。お呼び申して参りませう。」ト果なにかよを出でて行く。引きちがへて金左郎は、いより白翁の居間に来れば、「ナ、金左郎か。サア／＼もつとこつち、来て、茶が出来たからひとつ呑みやれ。茶菓子はさいはひ御前から頂戴したのをとつてある。」トいつこゝはらふまゝいきに、金左郎、茶を飲みつゝよきやうはなしつゝいて、貞「コレ金左郎、おぬしも今が血氣のさかり、老人のいふことは面白うあるまいが、よくよう聞きやれ。おつなもので、子を思ふは親の常で、賢い賤しいの差別はないもの、さきだつていつの頃でかあつたか、上方から状が来た時、あちらは一統風がはやると、さういうてよこしたら、やつぱりおぬしを案じるゆゑ、氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親、又兄弟とても外にはなし、もちろん文之丞がおぬしまでも、隠してはゐるなれど、お龜とやらいふ容貌よき娘を、親類かたに貰うて育てあげ、互に兄弟のやうにして、憎からぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたら、またまぎれにもならうけれど、それとても行方知れず、生死の程もわからぬと、サ、ちらりとおりや聞いたぞや。何をいうてもこちらのお雪は、まだ一向の子どもなり、内にゐても面白くあるまいが、今では文之丞もおぬしをば、こちらへ貰ひうけてからは、お龜も居ぬに不承しないに、思ふはコレ、そちばかりおやかから、わるい耳を聞かせぬやうに、せいやなら

ぬが若いうちは、利發な者でも些とゝは、身にあやまりの出來るもの。もつともはや遊びなどは、あん／＼の得手勝手ゆゑ、暑さ寒さも何とも思ふまいが、また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが、風でもひきそへねばよいが。夜が更けてかへらねば、寢てゐてもろく／＼ねられず、人の足音のするたび／＼に、歸つたか／＼、門をしめたで這入られぬのかと、引立耳をして聽いてゐるぞや。すゐぶん折節は付きあひなどで、遊びにも行くがよしサ。若いうちの事なれば、なんでもするなでは無いけれど、此の頃はあまりに過ぎたぞや。それがつのると、はて／＼は、モウどうなつてもまゝの川と、身の納まりもつかぬやうに、なるものだから、たま／＼は、内にゐてみんなの氣も、ちつとは休めるやうにしやれ。このくらゐな事はいはずとも、承知してゐるであらうが、勞らぬやうにしたがよい。トかたいやうでもどこやらにかどのとれたる兄あたま、撫でゝことばやはらかき意見に金五郎は一言半句の、かへす言葉もなかりしが、ヤだん／＼の御意見心魂に徹しまして、申し上げることばも御座りません。これまで種々に御苦勞を、かけましたは、重々身のあやまり、お許しなされてくださりまし。トあやまり入りたるをりからに、おゆきはまたも出で來ゆき「モシ、おあにいさまへ、ヤノ上がたからお使がまゐりましたヨ。ト聞くより金五郎は待ちかねたる、たよりにとびたつ嬉しさを、知られじと胸におしかくし、ドウ／＼上がたから人が來たかえ。トいふに白翁も聞き耳たて、「ナニ、なんだかや。上がたから便りがあるか。今も今とてうはさをした處、早う金五郎行つ

て見やれ。」トすゝむることばに金五郎はいそ〳〵として玄關に立ち出で、使に逢うて狀うけ取り、ひらきて見れば、刀をうりたる金一包は、使の者に、持たせつかはし候へば、あらためてうけ取り申すべしと、こま〳〵といひ送りつ、猶其の書狀の封じの奥より、隱居自翁への書簡も出でしかば、その狀は自翁のところへ差出し、かの一封の金をうけ取り、おのが部屋に入りて返書をしたゝめ、使の者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば、飛びたつばかりに喜びて、すぐに懷中し、立ち出でんとして、中の間を見れば、お雪は一人一心に、人形の著物を縫ひ居るすがたは、今年十四になりけれど、いまだ內端にしてあどけなく、容貌かたちも美しく、心だてさへ優しければ、小さんに比べては勝なるべし。金「コウお雪坊、それはこのあひだの人形に、著せる著物か。」ト問はれておゆきははにかみを含み、雪「ハイ、あなたに頂きました、人形のでござります。」金「それはいゝの、おれは今出て行くから、おとつさんやおつかさんがお聞きなすつたら、今仲間から呼びに來て、參りましたと、いい子だからさういつてくんなよ。」トいへばお雪は笑ひながら、雪「ハイ〳〵、かしこまりました。」金「なぜそんなに笑ふのだ。」雪「それでも、お仲間へお出であそばしたと申しましても、おかへりがお遲いと、うそだとお思ひ遊ばしませう。」金「なにさ、あとでは又どうでも、言ひやうがあるから、いゝわな。案じずにさういひなよ。」雪「ハイ、さやうならお早く、お歸り遊ばしまし。」トいふに金五郎は出てゆく。引違ひておゆきの乳母は立ち出でて、乳「おぢやうさん、何を遊ば

しますヿ〔ゆき〕「これかえ、これは此のおあにいさんに、いたゞいた、人形の著物だよ。」〔うば〕「もういいかげんに、ねゝ様いぢりも遊ばしまし。いつまでもそのやうに、ねゝ様ばかりかはいがつて、どうしたものでございます。今に若旦那さまの奥さまに、おなりあそばすお年でから。」〔ゆき〕「オヤ、乳母はいやな事をお云ひだよ。あれはおあにいさんだものを、そんな事はなりません。さうしてもう何處にか、奥さまがお出でだよ。」〔うば〕「それだからあのやうに、お内にとては片時も、お出であそばす容はなく、それといふもおまへさまが、もうちつとおとならしく遊ばせばよいに、ほんのねゝさまで、若旦那のお狂ひを遊ばすを、知らぬ顔でお出で遊ばすから、私はもうじれつたくつてなりません」ト云はれてお雪は氣の毒さうに顔をあかめて俯いて、〔ゆき〕「それでもオノおあにいさんは、おおいさんや皆さんに、まことにお心づかひ遊ばすから、おかはいさうだものね、ちつとは御保養のお遊びをあそばしてもよいではないかえ。」〔うば〕「それは又離れた事。あなたはお家のお嬢さま、若旦那さまはお血すぢでも、御養子でございますもの、お心づかひ遊ばす筈を」ト主思ひの口喧しさ、〔おゆきはにこ〳〵笑ひながら〕「オヤ〳〵、そんな事をいふと叱られるよ。上がたの伯父さんの、まことのお宿は是だから、おとつさんよりお兄さんが、大切だとつねゞゝから、おつかさんがおつしやつたよ。」ト子ども心にも金五郎を、大事にするぞいぢらし。さても金五郎は、一昨夜の金をたづさへて、雅が如くに額係屋へ

主りて、おゐじ東兵衛に逢うて、小さんの身の代をわたして、これまでひとかたならず、世話になりしが厚く報い、それよりたゞちに青柳橋のほとりなる、久米川といふ、料理屋の裏に家を求め、造作までも綺麗にして、この家に小さん金之助をひきとり、乳母をかゝへ婢女をおきて住まはせけるに、小さんは故なく、産後すら／＼肥立つものから、小さんはつく／＼行くすゑを、考へ見れば金五郎も、養子の身にて、この身をはじめ、金之助や乳母下女まで、はぐゝまんこと大ていならず、所詮わが身はおちぶれて、一旦郭の藝者して、人にも顔を見知られたれば、今さら斷うして暮すとも、誰知らぬものもなければ、女の手業にはかゞ／＼しき事も出來ねば、またもとの藝者となれば馴れし事ゆゑ、さのみに氣はねもそれぬわざ、三筋の絲の世わたりも、藝は身を助くると、たとへのふしも金五郎が、せめては心やすめなりと、思へば金五郎へ我が胸を、うちあけてものがたれば、今更一旦うけ出せし小さんをふたゝび客へ出さんは、人の思はく世のそしりも、口惜しくは思へども、萬事心に任せぬゆゑ、詮方なくて承け引きければ、小三は是れより又もとの、かへり花さく藝妓となりて、客の相手に出でしかば、容貌もすぐれ、座もちもうなれば、引く手あまたにいよ／＼はやり、内に居る間はなかりけり。頃しも霜月の末つかた、小さんは金之助をかき抱き、その身もこたつへ横になり、出もせぬ乳をふくませて、ねんねころ／＼と鼻唄を、うたうて寢かしつけてゐる。そのかたはらに乳母のおちゝは、

火鉢に煮花をこしらへながら、金之助の頭巾を縫つてゐる。かかるところへ金五郎は、しやうじをあけて入りきたるを、小さんは見て顔をあげ「すヤ入らつしやいましたか、さぞお寒うござりましたらう。」金「さうよ、なんだかひどく冷えるのうぼうずめは又ひる寝か。」トいひながらはおりを脱ですに、火燵へあたりて寝ころべば、小さんは片手にて煙草をすひつけ、金五郎に出しながら、小「もしおまへさんエ、アノ郭から、最中のもらつたのがありますが、アノお子さんにあげましては悪うございますかえ。」金「ナニ悪くもねえが、あんな大きな者にやるよりは、取つておいて坊にやるがいい。」小「それでもこの子には、あんまり甘くつて悪うございます。ほんに甘露梅もありましたから一緒にして、おおいさんの處へでもあげませうかね。」金「ばかァいひねえ。石部金吉鐵かぶとといふ堅い内へ、花街から貰つた物が出されるものかな。」トいはれて小さんに心づき、小「オホ、、、ほんにさうでありましたね。それはさうと、アノ、お子さんは、さぞお美しくおなりなさいましたらうねえ。」金「さうさ、まんざらではねえけれど、まだ一向のねゝだまなり、どこかの人と比べては、とても及ばねえは論なしよ。」トいひの先で小さんの顔をながめよいと突く。小さんは笑ひながら、小「またそんな憎らしい事を。それでもたゞなといふものは、子持になると色氣もなくなり、つまらぬものでありますねえ。」金「違へねえ。色氣がなくつても、汁氣があれば澤山だ。のうばゝア。」ト聲をかくればばうばもふをだし、うば「オホ、、、ほんに左様でございますか。私の様になつてはいけませんが、御新造さんなどはこれからが肝心でございます。」小「す

さいやよ。それでもおつなもので、子供にかまけると、いくぢなくぢゝむさくつて、わが身ながら婆じみたと思ふやうだよ。それだから座敷へ出ても、お客がみんなわたしの事を、子もち山姥だなんりといふから、わたしもそれをやつはり通して、かういふ唄をうたつてやるよ。

わかい時は二度はない、有頂天までのぼりつめて、親に苦労をかけるはばかよ。子をもつて知る親の恩ほど深いものはないわいな。たとへ金銀で、富士の山つむとも、子にや易へられぬ。ほんに世の中に、子ほどかはゆいものはない。

と唄ふゆゑ、中にはむねきなお客は、てめへのやうな者にやア、ろくな子は出来やアしめえ。子といふものは腹をひつても、できるのなんのと、おろす人があるから、わたしもまたまけぬ気で、味噌なあげるおやァないけれど、かはいい人と大骨を折つて拵へた子だから、出来合ひの子とはちつと違ひますといひますから、色気がなくつていいといつて、呼んでくださるからをかしいのサ。「へヽ」とんだからくりの云ひたてだ。ほんに此の頃ぢやア、めつさう口が達者になつたよ。道理で己も言ひまくられる」トいかついゝ寝てゐる金之助が、耳をひき鼻をつまむ故、金之助は顔をしかめながら目をさます。小三「アレまたそんな悪戯ばつかり」とう〳〵起して、おしまひなすつた。せつかくよく寝かしつけましたものを」金「いいわな、あんまりひゐる寝

をすると、夜になつて目をさますから、やかましくつて、寐られねえ。」小三「おまへさんではあるまいし。」金「ナゼ〳〵。」小三「なぜもよくできました。あなたはいつでも午時までゞおよつてはお起きなすつて、背ッぱりをなさるものを。」金「ナニノ、むりに起しても、もう寐あきた時分だから、アレ機嫌のいい事を見な。己が顔を見ちやァ、にこ〳〵笑ふぜ。いい子か〳〵、いい坊ちやんだぞ。」ト金之助み顔を撫でて、「こりや、おつかァのやうに、うは氣になつちやァいかねえぞ。」小三「オヤ、けしからねえ。私より貴方に似たら、親に世話ばかりやかせませう。」トいひながらだいどころのかたを向いて、「お竹や、何をしてゐるよ。アノお坊が起きたから、ちつと抱いておくれよ。」下女「ハイ〳〵。サア〳〵坊さんお出でなさいまし。」小三「アノお乳母どん、わたしやァ今お坊さんをつれ申して、惠迴院へ行つて遊ばせ申すから、アノ齒入屋が來たら、ながしの下駄の齒を入れさせておくんなさいよ。」うば「アイ〳〵、それはいいが、お泣きなすつたら早くお歸りよ。お怪我をさせ申さねえ樣におしよ。」下女「アイ。そんなら行つて參りませう。」トお竹はそとへ出て行く。ひき違へて女かみゆひ、洗ひがみのおたぼが來るを見て、小三「オヤおたぼさん、丁度よい間だよ。サアおあがり。坊を今あそびに出したから、この間にちよつと結つておくれな。」たぼ「それは丁度ようございますね。オヤ、旦那お出でなさいまし。この間は間ちがひまして、さつぱりお目にかゝりませんね。」金「ほんにサウサ。なんだか急に寒くなつたね。モウこんなに火燵と首つぴきをする樣になつちやァいけねえの。[illegible]

ヤおよへさん、そんなことをおつしやるが、こたつといふものは能いもので、此の間のたのしみがありますよ、ねエ小三さん」〔小三〕「なんだねエおたぼさん、おつなことをお云ひでない、人の鼻をこするやうな」〔多〕「私らアそんな事はきらひサ」〔小三〕「おたぼさん、お前も餘程好物案だね」成程鳥渡いおやつくには、まんざら惡くねエやつさ、冬の……は火燵で出來るやつがいくらもあるものさ」〔小三〕「もし、をかしくもない、そんナはなしはもうおよしなさい、氣障でありますわね」〔多〕サアおたぼさん、今に煮花ができるから、その中結つておくれなねえ」ト　これよりおたぼは、小三の髪をゆひながら、〔たぼ〕「小三さん、昨日はアノ、どこへお出でなすつたえ」〔小三〕「きのふかえ、昨日は舟で西の町へ行つたわね」〔たぼ〕「それだからいつもより髪がだいなしになつたのサ」〔旦〕「さうさ、昨日は舟へ行つたから髪がこはれたと、そいつはちよと怪しい」〔たぼ〕「すさ／＼、旦那が何かおつしやるよ」〔小三〕「又おやきがはじまりさ、珍らしくもございません」〔旦〕「これがやけねえでどうするものか、番人のねえ生簀だもの、どんな人が釣るか、知れやアしねえ」〔小三〕「すさ、とんだ魚がうけるもんだ」〔旦〕「たとひどんな釣人があつて、餌をどん／＼まけばとて、曲つた針にやア、かゝりませんよ」〔旦〕「禪りながらわたくしは」〔金〕「ハン、とんだ所で力むやつよ」〔たぼ〕「おかえが足留をするやうに」〔トかふかつてゐるうちおへをされないしたなか〕〔小三〕「ばアやア、お茶はまだ出來ねかえ」〔ばア〕「ハイ、やう／＼できました」〔小三〕「そんなら一ツあげよう」ト　金五郎のはつほをとりて、おたぼにもついで出す〔たぼ〕「是れははゞかりさま」〔金〕「おかま

ひなさいますな。ほんに旦那え、このごろに顔みせはどうでござります」ト「わたしも此の間からさう言つてゐるのさ。小三も見てえといふから、一緒にお出でな、四五日のうちに」ト「それはありがたうございます。楽しみにいたして居りますよ」トいふところへ、ねかいちう入り来り、くめ川の「モシ小三さんえ、このだうのお留守居衆が、今方行くから目をかけて置いてくれろ、といつて御出なりましたよ」ト小三「すやさうか。え、けふはお店の衆がやくそくもあるが、こつちは夜が更けるから断つて、おまへの方へ参らうよ」「ええ、そんならいゝはさ、御案内を致しませう」トわかいものはたちかへる。ト小三「ドレ、わたしも参りませう。さやうなら小三さん、又明日。」トあいさつして、髪ゆひおたぼは帰りけり。

小三金五郎
仮名文章娘節用後編上巻 終

小さん金五郎 假名文章娘節用 後編中卷

江戸　曲山人補綴

第五回

小三は柔川より口がかゝりし故、鏡臺取り出し身じまひの、紅粉おしろいも深くはせず、ちよつと化粧ひして櫛笄、前さし一本うしろへは、銀の細打ばかりさして、いきな粧飾のいやみなし。金五郎は手枕して、火燵にあたり寐いりし樣子に、小さんは戸棚よりかいまきを出しそつとかけて、枕をあてがひ、そこらをかたづけ金五郎の、羽織をたゝんで戸棚へしまひ、火鉢のそばへすわり、煙草を一ふくのみ、そばにある淨るり本を手にとりあげ、讀みながら乳母とはなし、小三コウばアやよ、こんな事を言つたらまた、つまらぬ事と笑ふだらうがの、水のながれと人の行末程、定めないものはないよ。この淨るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ、よく似てゐるが若しひよつと、浮世の義理にからめられ、どんな別れにならうも知れず。マアさうなつたらどうしようと、外に苦勞はないけれ

と、それはつかわが案じられて、人の知らぬ胸をいためるよ」ト身の行末をくりかへし、涙ありたおとすしづく、乳母はそれが涙打ちかへして、「ますけど、またしても〳〵、そんな役にたたぬ事を、おつしやるものではござりません。その三かづの身のうへは、それはほんの實作もの、今時流行だのなんのかのと、芝居でしやれ本ではあるまいし、どうしてそんな事がありますものか。たはいもない事ばつかり。」トいひまぎらせど共涙、小一郎れにこう言へばそんなものの、作り物とは知りつゝも、身につまされて聞いても、やつぱり女の淺はかい。金坊といふ子までのあるものを、御本妻にはならぬまでも、末のとげ迄あひとけようと、思ふはないでなんにもうしもの事があつたなら、それはまたこの胸のこと、どうしよう、案じまいとしてすはないなかにへ本用より、つい氣休めにでもつくはずや。行つて來る内も氣をやすめて置くれ、ほんにアノ坊が歸つて、私が留守さつたら、又おとつさんをいぢるだらうから、媒酌にうゐすから、あすみやつすだましておくれ。わたしがむかへるに、何でもはたて實を來るから、そして若旦那がお目がさめたら、大方お茶漬をあがりたからうから、給仕でも取つておくれ」ト萬事に氣くばりお嫁になつて女勝手たきさよ、あくまでもやれがけ私で、大事にかける心から、案じすゝ出てあとに、ひとくに、内の事のみ案じいるれど、節のといふ字は是非なし、いやな客にも逢けんとる、心の中をつくづくと、思ふあなたくてかうした所は、たゞさ二階の…に呼ばれ、他事なく緒下この所も、いふも文來る顔を下…、ただひ

く客もうらゝかな、彌生なかばの事なるが、金五郎は仲間の者にさそはれて、向が岡の花見もどりのほの暗に、そろ／＼舟にうちのりて、青柳橋まで來りしが、こゝより上りて金五郎は、人々にわかれて、可助といふ供の男を引きつれて、粂川の前へ來れば、乳母は金之助をいだきつゝ、かくと見るより遠くから、うば「ヲヤ／＼、おばうさん、ソレ、お父さんが入らつしやいましたよ。」金「ヲヽ、坊か、ばゞァにだつこしていゝのう。おつかァは内にかえ。」うば「ハイ、お宿でござります。サァおばうさん、おとつさんにおじぎはえ。ヘイ御機げんようと。ホヽ、イエ／＼、おとつさんにだつこはなりませんさ。もうまつくになりますから、お寢んねがようござります。」金「金坊や、おとつさんはおつかさんのとこへ行つてお乳をのむよ。あばく／＼だよ。」トいふに金之助は顔を見て「おとつちやん、いや／＼。おつかちやんのおゝ、いや／＼。」うば「オヽ、さやう／＼、おつかさんのお乳はお坊さんの。お父さんのではござりませんねえ。お父さんは御きげん故、おじらしなすつていけません。」金「ハヽヽヽヽ、坊やのばかやばいやこと」トからかひながら内へゆき、見れば小さんは、今座敷よりの歸りしまゝ、三味線箱によりかゝり、物思はしげなる顔つきに、金五郎はそばへより、「小さん、どうぞしたのか、おつな顔をしてゐるのう。」トいはれて小さんはにつこり笑ひながら、「イヽえ、どうもいたしませんが、今座敷から歸りましたのサ。そしてあなたは、どこのお歸りでござります。」金「ナニ、今日か、拙者は今日仲間の者の付きあひにて、よんどころなく向島へ御遊覽と出かけ

て、鯛七へおしかけた處が、女子どもが大勢出て、ソレお手をとれ足を取れと、めつたむしやうにそやしたて、それからなんでも大きなかもの、ごいへまさへの唄へやら囃けや、

じれて迷うて、まようてじれて、くぜつも痴話も屏風の外へ、ほうり出したる一つ夜着はやしさつさおせ／＼、堀までつけろ」あとは野となれ山となれ、林となつたら寝てかへろ」目ふつたら居つゞけだ」などと唄ふからたまらねえ」「ト道理こそ、こいつはきつい御機嫌。それはさうと、あなたは京を御立ちの時、おとつさんのおつしやつた事を、覺えて御出で遊ばしますかえ」「ト是れはまた異なつたお尋ねへ、親父の教へを守ればこそ、外の女に目もふらず、たつた一人を守つてゐるから、何もハヤお案じなさる事はござなく候……、、、、その思召しなら嬉しいけれど、今では日かげのこの身ゆゑ、おまへさんや皆さんが、このやうな事とは御存じなく、只あなたがわがまゝで、放蕩を遊ばす事と、思召すでござりませうから、お宿のお首尾もおだいじの上、あんまり御酒をあがりますと、あなたのお爲になりますまいかと、それが苦勞でなりません。」ト思ひにあまるし心に籠ると思はねど、一杯きげんの金五郎、「ア、百も承知二百もがつてん、お爲ごかしのその意見、聞きたくもねえ、耳がけがれる。酒をのまれまわりがありますしい、あなたのお爲になりますまいへ、酒が呑まうがのむまいが、己が口だから勝手たにしろ、大きにお世話お茶でもあがれ」「ト、そんな理くつらしい意見

をいふのは、おほかた外におつりきな、面白えはなしでもあるからだらう。「小「イヤ、久しいものでありますよ。「金「ホンニ、久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて、早く帰さうと思ふのだな。よし／＼、そんなに邪魔になるなら、帰つてやらう、とめるな。「ト　じれるかんしやくはひふきへきせるをポン／＼八ツあたり。小芳はいつもの事と思ひ、わざとすました顔をして「小「お腹が立つならどうでもなさい、たまに／＼はお早くお帰りなさるも、御孝行でございませう。「金「イヤ、何だか風が變つたやうだ。「ト、雨が降らねばよいが、「トさからはぬ小芳金左郎は　煙管をしまひ立ちあがり「金「ホンニ、御孝行でございませう。お孝々でお茶づけが聞いてあきれらァ。雨が降らうが降るめえが、帰るに西も左もいるものか。「トむりなくせつも酒のわざ、我儘氣まゝのいひちらし、だれつ、うちへ帰りけり。乳母はこの時金之助をつれて、帰りかゝれど、金左郎が不機嫌のゆゑに、次の間にてあそばせて居たりしが、やう／＼此方へ出で來り、「うば「御新造さまえ、今日はおとつさまの御機げんが、お悪うございましたねえ。なんのお腹だちであのやうに、お怒りなすつたのでございますえ。「トいへば小よしはわらひながら「小「さうさねえ、いつでもあゝだわな。御酒をあがるとなんだの彼だのと、わたしに無理ばつかりおつしやるのさ。たまには早くお歸し申さないと、あなたもいろ／＼譯あるお身のゆゑ、おやどの御首尾が大事だからさ。お内では心づかひもなさるだらうし、私にはわがまゝの、いひところだとお思ひなすつて、いつでも／＼あの通り。それに此のごろでは日にまして、だん／＼御酒が上るから、

まことに苦労でならないよ。わたしは誰とふけれども、つねから御気性を知つてゐる故、御酒をあかつて御きげんの時は、その気でゐるからよいけれど、やつぱりお常さんにもあの通りに、無理ばつかりおつしやるかと、陰ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情なさの、いとしと思ふならば、つれなく言ひてかへし申すも、浮世の義理やら。ついには、お身のためを思ふ心、心にもない事などを、いひ出すまでの胸の切なさ、すゐりやうしてくださいまし。」誠に〳〵此御新造と目をしばたゝき、傍へにもいふ通り、一ッ時は又こゝと、礼をいうても従その浮世、お前の事はこゝのまゝまるもの、いわく御苦労あそばすも、因縁とやらでござりませう。」丁度おなしなかほ、いつの間にやら、十五才の若殿、ちよつと気をつけてくれた……、今春殿が……一寸の時間にどうぞいとしたことで……日那はたちまち、そいつはせしをじれつたくおもひて早く立戻らなせつたら、一寸つも近所でこそ……たのを見とゝ……、せつかく、くみたてかんして、日那の御好きな、白らが……住処で持つてゐるうちに……、さうすと、それは〳〵よく丸めしい事に、肴をつけておいてくれた。嬉しい。何なにしろ日那のお帰り下さつたらおやじはしまいませず、ことはこの此の鰻のものと、日那へのこゝろざしだから、早いて参りませうと、肴を置いていつたら金五郎は、酒がいはする顔ばかり、腹からも紛れ上がらなさ、お

ここに辛くあたりちらして帰りしが、根もなきくぜつの事なれば、又あはねば気になるゆゑ、四五日たちて暮すぐるころ、小三のもとへいたりしに、小三は留守にて乳母ばかり、針仕事をしてゐたりしが、「オヤ若旦那さま、此のごろはまことにノヽお遠々しうござりますネ」わか「さうサ、此の間はちつと用が多くつて、さつぱり出られねえやつよ」うば「アノ、あなたがいつそこのあひだ、お腹をお立ち遊ばして、お帰りなすつたから御新造さまが、まことにお案じなすつてお出でなさります」わか「ハ、、、、さうだつたかの。おれはさつぱり知らなんだ。アノ、今日はどこぞへ行つたか」うば「ハイ、今日は鮫洲に、なんとやらの会がござりまして」わか「フウ、坊はどうした。」うば「お坊さんは今、お付がどこへかおつれ申してまゐりました」わか「さうか。おれを忘れはしねえかのう」うば「オヤ、とんだ事をおつしやいましな。三日や四日お出でなさらぬとて、おわすれなさるものでございませうか。今朝なども、いつそおとつちやんノヽと、あなたの事をおつしやいました」わか「ハ、、ア、子供といふものは、どうも憎くねえものだの。アノ、この間来たとき、ちつと頭にふき出がしたやうだつけが、そんなに殖えもしねえかえ」うば「ハイ、お頭のでござりますかえ。そのやうに殖えもなさりません。それはさうと若旦那さまえ、こんな事は申すまでもござりませんが、御新造さまが明けても暮れても、あなたの事のみお案じなすつて、それはノヽ御苦労のやすまる間とてはござりませんから、その御心根を思ひやつて、

あなたもどうぞ、あんまりお氣をおもませ遊ばさねへやうに、なさつて下さりまし」金「イヤ、モウお
れとても、惜しと思ふ小ごではなし、殊に手まで出來たのに、少しにおれが手だすけと、いやな座敷
の勤めをするのは、なみ大ていの女だではなか/\及ばぬ心だと思へば、一日片時も勤めさせ
る氣はねへが、是らにおれもの是非もなく、苦勞をさせるが可愛さうだ」ト[illegible]はもう涙にくれけり。
折から簗川のわかいもの清介、料理ばん佐介入り來り、「へイ旦那、このあひだは」ト云ひつゝ清介に佐
介公か。サアあがんねえっ」兩人「へイ御めんなせえ」ト ふたりながら[illegible]來り、清「もし旦那、此の間はねから入ら
つしやいませんねへ。きつい御見かぎり、外に何だか、おもしろい世界でも出來ましたかへ」金「とんだ
事をいふ。おもしろい世界どころか、いつも眞面目でさえねえやつよ。ちつと面白い世界へ、案内し
て貰ひてえのう。」清「是れはまた迷惑千萬。ハヽヽヽ。」佐介「旦那、この間も、あなたがお出でなす
つたのを見とゞけまして、[illegible]
ましたのさ」金「ハヽヽさうだつたか。そいつは殘念だつけの。しかしその心意氣が[illegible]
んなら今さら[illegible]
はしくならいにけり。金五郎はとこの間の[illegible]金「なんと清公や佐介公なんぞは、いつも/\忙がしい[illegible]、
ない所へ行くじまはあるめへのう」[illegible]もし、おつなもので、是れでもおるざ[illegible]

にやァ、相應に謀計もいたしますのサ。ます女に逢はうといふ晩にやァ、内を都合してはやくきりあげ、おたしなみの濃衣裳を引つかけの、親方の目をしのび足、こそ〳〵〳〵とぬけがけの、道足出して閘を鼠へおしかけ、みな四ッ限も目にかけず、たゞきおこして上りの天神、リアそれからが口説のこんたん、おもしろ猫の腹つゞみ。」ト のりうきはなす座敷をしまひ歸り來る、小さんのあとより箱まはしの仁介三味せん箱を背負ひ、おやうさんを片手に引つさげ、供をして來る、小三は上へあがりながら、仁介どん、大きに御苦勞。そんならまた明日來ておくれ。」ト おびにはさみし金を出し、紙にちよいとひねつて、「サア是れで一つ呑んでお寢よ。」ト ゑせは有まけしいたゞきて、仁介「へイ〳〵、これは有り難うございます。さやうなら明日。へイお休みなさいまし。」ト 三味線箱をおき、歸り行く。小三は金五郎のそばへすわり、小三「オヤ、よくお出でなすつて下さいました。此の間はなぜ、さつぱりお出でなさいませんえ。」ト 顏を見て嬉しさうに笑ふ。金「ヘン、あんまりよくも來ねえのよ。來るなといふから來ずに居れば、又恨むのか、呆れるのう。四五日おれが來なかつたら、煩さくなくつて好かつたらう。あんまり邪魔にされるから、呼びによこすまでふつつりとも、來めえと思つてあきらめて居たが、逢はずに行んではおやァなくつて、逢はずに居ると氣になるから、顏が見たさについうか〳〵、やつぱり逢つて又こゝへ。」小三「ほんにやばからしい、なんでありますえ。清どんや仁介どんが聞いてゐるのに、そんな事をさ。」金「ハテ、人が聞いても大事ないてのう。コウ小三、こんな馬

鹿にやア誰がしたらう。おれも生まれつき是れ程の、阿房ではなかつたつけのう。佐介公。楊貴妃や玉もの前の例もあるから、さのみ恥かしいとも思はねえの。「作蔵」こりやア、旦那のが御尤もだ。惚れてもりきむのは野暮の至りサ。小三さんはやつはりおほこ気がぬけませんね。「旦」なんの／＼、お侯こ處か、ほらが變じて古狸とはなりにけりだ。ア、化かされる／＼と、知りつゝやつぱり化かされるは、おれが一生のあやまりだ。「小三」ヤ、よろしく申しておくんなさい。貴方こそわたしを、お化かしなすつたのでございます。「旦」そりやア又なぜだ。「小三」それでも、唄にもうたふ通り、心からとて古郷をはなれ、知らぬ此の地で苦勞するとは、よくわたしの身の上に、かなつた唄でございますよ。

佐介「てシ、」ト小声でうたふ

苦勞するのもおまはんをたより、それに邪見な事ばかり

佐介「旦那、小三さんの心は、此のうたの文句のとほりでございますよ。ねえ小三さん、一ッ心意氣が承りたうもんでございます。「小三」何だね、をかしくもない。娘子供ぢやアあるまいし、心意氣なんぞはいやだねえ。「佐介」そんな事をおいひなさらずと、ちよつと一ッおやんなせえ。「小三」ドレ、どゝいつどい／＼、なだべこ、ちやら／＼、どんぶり鉢アういた／＼。」金「ア、やかましい、何をいふのだ。」

佐介「ハア、、サア／＼小三さん、サア一ッ」ト いはれて小三はぜひなく／＼、かたはらにある三味せんを手にとり、林

うたゝまじなき中はほれたが恨み、ほれる苦勞もせまいもの、

三八「妙だ〳〵〳〵〳〵」ト一トモウ是れでかんにんしておくれ」ト、おつなものでの、おれも實は上がたぜえろくだが、都といへば聞えがいいが、上がたぜえろく、上がた猿といはれては、一句もねえのさ。一體その上がたにも、お前さんの樣な通人があるやうだから、東ッ子は一句も出ません。

合體は旦那が悪いのさ。お前さんがあんまり罪がいいから、やはたら断うしたうき目はさせまいと、小三さんがこれ〳〵で、氣がもめるでござえますよう」トふたゝび何かはえるまねする

ゆ、それより〳〵清公、今の阿多福の物語の二段目狂言を語さねえか。後學のために聞きてえのう」

清「モウ三ら踊は話しますめえ」三「なぜ」清「小三樣に叱られますの」ト三「清どん何だ、面白い話かえ」三「なに、わつちが色の戀話さ」ト云ふところへ、宮川の小女、「清介どん、佐介どん、お客があるよ」

作「アイ〳〵、そいつは断うしては居られねえ」三「小三、そこにある紙入を清公にやつてくんなせえ。そして此の一ッ提げは、佐介、貴公に讓つてやらう」ト二人に投げてやる　兩人「ハイ、是れは有り難うござります」ト二人ながら出て行く。三「……、醉つた〳〵、今日はどうした訳か誠に醉つた」ト其の儘そこへ打倒れ、

小三「お竹や、もうこゝを片づけておくれよ」竹「ハイ〳〵、もう直しうござりますか」三「いゝ、いいのさ。乳母や、今夜は若旦那は、よつ程お醉ひなさつたさうだ」い「いえ、そんなにお過し遊ばした樣

子でもございませんが、いつたい御酒がお弱いから「ハイさやうサ、ご酒あがりはなさらなんだが、近頃はよくあがるよ」ト三「さやうでござりますか。若旦那さまもお宿では、萬事思召すやうにもいかず、お心づかひも遊ばしますから、ちつとのまゝ御酒をあがらすれば、お氣の晴れやうがござりますまい」ほんにお坊さんもよくおよつたから、若旦那のお膝をのべまでうかがふ」ト三「そんなら其の子を、わたしが抱いて居ようから、お膝をとつて上げておくれ」ト金之助を抱きあげるにぞ、乳母はこの内、六疊の座しきへ、牀をとり夜著を出して、うそをシ、若旦那さま、もうおよりまし」トいひければ、金「ハイ、イヤ、いい心もちだぞ」ト立上りて上下着を脱ぎ、下着ばかりになりて、牀へ入り「ドレ、おつかアも寝ねえか、坊主はおれが抱いて寝よう」ト三「あなたが抱いておよつたら、それこそ潰しておしまひなさるだらう」金「いいわな、潰しても己の子だから、だれも何ともいひ人はねえ。萬一おれが潰したら、又いいのをこしらへるわな」ト金之助の手をとり引張る。三「すきな事をおつしやるよ。もし、およしなさい、そんなに引張ると目を覺しますよ。起しちや惡うござります」金「ナニ起しやアしねえ。ちよつと貸してくれな」トむりに金之助をだきとりて「エ、よく寝る坊主だぞ。コレ、ちつと目をさまして遊ばねえか。ここへ来い、、、」トくすぐりさうにするに三「アレ、およしなさいと云ふのに。寝る先へたつて起しちやアいけませんよ。」金「ハ、ハ、、、そんなら乳母の處へ行つてねろ」ト言ふ目をさまし、泣き出すと、おつかア邪魔になるだらう

だに一ト寢たまゝうばの乳母は金之助をかき抱きて、次の間へ入りてうち臥しける。
手へわたせしに、

小さん
金五郎　假名文章娘節用後編中卷　終

小さん金五郎 假名文章娘節用 後編下卷

江戸 曲山人 補綴

第六回

小三は乳母や下女を臥さしめ、行燈の側につくねんと、ひとり何やら物案じの、顔うち眺めながら、金五郎「コウ小三、何をしてゐるのだ。なぜ寝ねえ。又持病でも發つたか。」ト問はれて小三「イ、エ、持病ではありませんが、つくづく思ひまはしますと、あなたのことが苦勞になつて。」金「なぜ、おれがどうしたと。」小三「もとより御好きでもなかつた御酒を、此の頃のやうにあがりますから、しみじみそれがわたくしは。」金「ムヽ、分つた。おれがあんまり酒を呑んだり、身もちが悪いから、行末こしかたを思ひまはすと、つまらねえものだと愛想がつきて、それが苦勞になるのだらう。ヱヽ、さうだらうさうだらう。厭になつたら厭だといへ。おれも男だ、切れてやるわ。」小三「いゝえ、そんな無理をおつしやるから、それが苦勞で片時も、氣の休む間はござりません。ほかたお前のお[illegible]なたにも、やつぱり御

無理をおつしやりませうが、それでは悪うござります。」金「なんの事た、をかしくもねえ。そんなつまらねえ事を案じずと、コレもう寝ねえか。寝るがいい。」ト手をのばしてひきよせる。小まへ「アレ、まだ着ものを着かへませんよ。」金「いいわな、○○○○それでも大事ねえ。」ト いひつゝ帯をとけば、嬉しげに○○○○○、○○○○○○○寄り添うて、顔見あはせて互に目につこり。金「コレ小まへ、そなたもかねて知る通り、心にそまぬお幸の事、とやかく内で云ふ故に、のつぴきならぬ義理づめで、しぶしぶ請けはうけたれど、松に操は見かへられぬ、そなたに勝つた花があらうか。必ずそれを苦にしねえがいい。しかし親を捨て、両刀を捨てて、矢立をさして町人にならうとおもへば、一も二もねえ心やすい世界だのう。」小まへ「ナア、それがいやさに苦労になります。只あなたが全うに、お宿のお首尾のよいやうに、お幸さんともお中よく、爺さまに御安堵させて、わたくしをも見捨ててさへ下さらねば、どのやうな切ない暮しをしても、かなしいとひは致しません。」ト 真實見えし女のまことを、金左郎もおもひやりて、金「おれもその實心を見ぬいたゆゑ世間晴れて、内へ入れてえと思ふけれど、なにをいつても養子の悲しさ。昔の身ならいさくさなしに、おつけえはれてた婦だが、かへつて今の身の上が、思ひ廻せばつまらねえ」ト 愚痴なくりごとくりかへせば「ア、おれとした事が、つい胸に思つてゐるゆゑ、女のやうな愚痴ばつかり、儘になるのもならぬのも、みんな約束、仕方がねえ。これも浮世だ、どうなるものか。のう小まへ、其へ違へつて、又いい夢

でも結ばうことゝ、ぐつと引寄せ、ひとつよぎ、いかなる事や契るらん。在斯程に、隱居白翁は、金五郎が日にまし放蕩募りて、家にとては居らざる故、養父文次郎はじめ家内のものに、一ぱい氣がねを爲たりしが、お雪もはや、十五にもなりたれば、金五郎と婚禮を結ばんには、少しは足も止らんと、頻りに是れをすゝめしかば、金五郎は心ならずも、婚禮はしつれども、お雪はまだ年もゆかず、殊に手のなきおぼこ氣なれば、とにかく面白からぬ故、さま〴〵こしらへ騙しては、小さんが許へのみ通ふものから、早くも二とせばかり立てども、猶不身持の止まざりければ、隱居白翁は是れを愁へ、文次郎夫婦もお雪の仕かたの、悪しきゆゑに金五郎が、内に居つかぬと口にはいはねど、心には叱責れど我が子の可愛さに、金五郎に愛想もつきたれ、我あるうちは善し悪しとも、金五郎の爲を思へども、いくばくもなく吾が齢ひははてにし後はいかならんと、老いの心を痛めつゝ、思ひ餘りて、手を廻し、小さんの名所聞きたゞし、心の中をさぐりしうへ、理を說きて緣切らせ、事に由らば金を出し、支度して何方へなりとも、片付けやらんと思案しつゝ、金五郎が當番にて、詰所へ出でて留守の日に、小三が許へこそ尋ね行きぬ。頃しも文月上旬、小三ははでな中形の、ゆかたに藤色の裏とりかけ、黒繻子の帯しどけなくしめ、洗ひ髮をうしろへつけ、緣側へ出て金之助の、腹がけを縫うて居たりけるに、折から表に人ありて、頼む頼むと案内を乞ふに、小三は「ハイ〳〵」といひつゝ、立ち出づれば隱居白翁「卒爾ながら小三どのの、お宿は爰かこ

ござりまするかな。」小三「ハイ、その小三は私でござりますが、あなたはつひに見なれぬお方、どちらからお出でなされました。」白翁「ハア、そんなら此方さまが小三どのか。わしはこなさまに、ちと内々話があつて、わざ／＼来ました。ゆるさつしやれ。」ト上へあがれば、いぶかしながら、小三「何はともあれそこは端ぢや、マア／＼こちらへお通りなさいまし。」ト奥へ通せば座になほりて、白翁「こなさまの名はかねてより、聞いては居れど逢ふは初めて。わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが、今日わざ／＼来ましたのも、外の事ではござらぬが、アノ、孫の金五郎めが事。イヤもう、見るかげもないあの様な者を、ようマア可愛がつてやつて下さる、真身にとつては嬉しいとも、かたじけないとも、礼は詞に尽きませぬ、その深切な心を見込んで、ちと頼みたい事がござる。」ト聞くより小三は胸に釘、はつと心に当惑し、いやではまんと思ひしが、今さら驚く事にもあらず、かねての覚悟はこゝぞと思ひ、胸なでおろし気をとり直し、茶煙草盆を出しつゝ、しとやかに手をつかへ、小三「ほんにわたくしも、若旦那さまのお話にて、つねづねから、御噂を承りましたあなたの事、お目にかゝりますは始めてでござりますけれど、真身の親に訪はれた心、お嬉しうござります。ようマアお出で遊ばしました。」トいふかほつくづ／＼打ちまもり、白翁「イヤ、あまりよくも整らぬでもなア、物ごしといひ取りまはし、容貌まで高位の、奥方としても恥かしからぬ、人に勝れた生まれつき、いかなる人の身の果てか、見れば見る程美しい。マア、若い者の迷ふはむりもか

いゝこなさんを内へ入れたなら、孫めが尻も落ちつくであらうけれど、上への聞こえ世間の思はく、義理と人目の遁れかたなく、頼みといふは爰の事、知つてるかは知らねども、金五郎はわしがためには、惣領むすこの一人孫、世が世であるなら、無理わがまゝも為次第だが、だん／＼深い様子があつて、あれが親は家出なし、其の身が今での家督、その養子となりし金五郎、あかの他人といふではなけれど、養子と名のつく悲しさは、思ふに任せぬ世間の人目、家の娘のお雪といへるを、娶合はさねばならぬ故、金五郎もふしようながら、やう／＼此のこの婚禮しても、お雪はまだ子供同然で、面白くないから片時も、内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふではないが、世間の人にほめられて、それ程の事ゆゑ、まへ殺さぬ気性でもなかつたが、今に夜どまりはさせはせまい、女房ばかりのすまひ同様。それは誰故こなさんの為、わしが命のあらうちは、内外の者もわしに免じて、金五郎が悪いとは言はねども、見られる通りわしも老人、今をも知れぬ身のうへなれば、我がなき後は金五郎の、身のためにならぬ事もあらうかと、案じ過ごせば夜の間も、寝られず、苦労で命も縮まるやうだわな。こんな事云うたら、鬼とも蛇とも、無慈悲情のない心と思はつしやらうが、眞實あれが憎くうなければ、内の嫁の身の中に、子どもの一人も出来るまで、遠ざかつて貰ひたい。さすれば世間の思はくもよし、又子どもでも出来てからは、こなさんを内へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で、こなたを

内へ呼ぶと言は、部屋住みの事ゆゑ世間へもはゞかり、こゝへかくまつて合點して、暫しの内を辛抱して、思ひきつて見て下され。もしその内が待遠なら、こなさんの心に叶ふやうな、身の爲によい所を見たて、この爺が支度して、縁付けて進ぜませう。さうすりや此方の身も落ちつき、多くの人の機嫌もつまた撰るにも及ばず、せめてはわしが寢心、氣樂にして進ぜたいこゝろトものやはらかに事をわけ、のつぴきならぬ義理ゆゑあれ、積みにいやとはいはれねば、いつそわが身の成行を、うち明けんとは思ひしが、今さら素性を明しなば、見さげられもし殊にまた、金五郎の爲惡しからんトおもひ定めてかほをあげ、小三「だん／＼のお頼みうけたまはり、何と申さんやうもなく、大事の／＼若旦那さまを、人にわるく言はせたり、あなたがへいろ／＼な、御苦勞をかけましたも、みんな私がいたらぬから、つくつた罪でござります。お歎しなされて下さいまし。それをマア、憎いとも思召さず、氣樂にさせてやりたいと、かへつて憐しいそのお言葉、もつたいないとも有りがたいとも、申さうやうはござりませぬ。さりながら私は、たとひ外にどのやうな、けつこうな所がござりませうとも、樂しみ望みはござりませぬ。只若旦那さまゆゑなら苦勞、おためになります事ならば、たとへこがれて死ぬまでも、ふつつり思ひ切りませうトいひもなみだうるみ聲、わつとばかりに泣きあげて、正體もなく泣きゐたる、心のうちぞいぢらしき。白翁もとだみもによろこび「ヤレ／＼マア、よく思ひ切つて下さつた。かたじけないぞや小三どの。その悲しさを見るびなみだ、

がいやさに、今日行つて頼まうか、明日行つて云はうかと、一日々々と見合はせても、どうで云ひ出さねば果てしがつかねば、心を鬼にしてわざ／＼来たが、さぞ憎からうが是れも身の為、浮世の義理のぜんかたさ。老いの身に後生は願はず、縁切に来た罪つくり、わしが胸の切なさも、すゐりやうして下されよ。この事とくと承知なら、けふあすと云ふでもない。心まかせにいつなりと、こなたの身にも怪我のないやう、手ぎはよくやつてくだされ。」ト云ひつゝ立出ながら、「今夜五郎とは縁切つても、わしはやつぱり孫嫁の心、この後なんぞ不自由あらば、必ず／＼遠慮なう、なんなりとそう言うしてこさつしやれ。こなさんの身の落ち付くまでは、いつまでも私が貢ぎます。」ト他人ともたぬ白翁が、やさしき言葉に嬉しさ余り、悲しさやるせなさまゝに、とかくのいらへさへもせず、唯うつ臥して泣き居たる、その心根の不便さを、思ひやりつゝ白翁も、老いのなみだにかきくれしが、心弱くて叶はじと、思ひ直してかへりける。小さんはもとよりお平の事を、聞いてゐるための末々に、中を裂かれんは必定なり、もし縁切らるゝ事とならば、生きて居たとてかひなき身の、別れてつらき目を逢らんより、死して苦患をまぬかれんと、こゝに覚悟をきはめしも、せまき女子の心から、噫呼是非もなき事にこそ。斯かりしほどに乳母のお乳は、最前よりの一伍一什を、次の間にて聞くものから、小主の胸の切なさを、さこそと思ひやる程に、己も共に胸のうち、はりさくばかりの苦しさに、こらへて忍び泣きゐた

るが、今はなか／＼、怺へかねて、わつとばかりに走り出で、小三のそばへ坐りながら、うは「もしあなた、とんだ事になりましたねえ。あのやうにまア易しく、おいそれと、お請合ひなすつたは、どういふお心か合點がまゐりません。おばうさんのあることを、なぜ打明けてかう／＼だと、おつしやらぬのでござります。子までなしたる戀仲と、お聞きなすつたらお祖父さまも、無理に切れろとはおつしやるまいに、いま若旦那と御縁を斷つて、どうなさる思召しでござります。お坊さんが可愛くはござりませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マアどういふお心でござりますエ」ト聞かとすれば金之助や小三を、人事と思ふ程、心を付けるこは意見、乳母はよくこそありたけれ。小三はなみだの顔をあげ、「ほんにそなたのいふ通り、子まである者を離れる事、切ないとも悲しいとも、胸の中ははりさくやうで、その苦しさは察してくれうが。それの不念はうのある事を、うち明けようと思うたが、男の子は緣切らるゝ時、男親に附くがならひ、なま中な事いひ出して、あの子までもが引きとられては、若旦那も下までなれば、なほなは御苦勞が増すでもあらうし、一つには又わたしも、あの子を手ばなしては寂しからうし、それ目にまし寂しからうと、未練らしいが言ひ出されも、やつぱり在の爲ばかり。又若旦那と縁切つても、われもやはりことのやうな、男があらうと二人とは、馴染をかさねる氣はないから、いつかいつまでも今の通りに、暮らして暮すつもり、そなたもやつぱり今までの通りに、金坊の世話をしてくれまし

トいふもなみだのあとやさき、乳母も目をこすりながら、ゥ「まことにあなたのお心の中を、推量致せば致すほど、
わたくしの胸もはりさくやう。なる程お父さんのあの事で、おかくしなすつたは深いお心、たとひ
今日が日御縁がきれても、一生別れきりといふではなし、ほんの人目や浮世の義理と、お祖父さまの
先刻のお言葉、わしの御辛抱でござりませう。又お坊さんの事はおつしやるまでもなく、ほんにマア
とお離れなさすつたもの、なんで他人と思ひませう。もつたいないが私が、産み申したお子だと存
じますもの。たとひどのやうな苦労をいたしても、お育て申す気でござりますから、もつともお案じ
なさいますな。しかし是れから若旦那の、お手がきれたら猶あなたには、いろいろ御苦労遊ばすだらう
と、それがおいたはしうござります。」トほろりとおとすたのなみだ。小「ミヽ、若衣の顔を出には、一わたし
も今度の縁切が、一生の身の大事だから、只何事も神任せ、悪い事をしたのでもなし、天道さま
も見とほし故、今日はけふ、明日はあすと、その日の風に任するばかり。一つはつまつたその時は、
又外に思案もあらうから、それを案じてくれなさんな。今にも若旦那がお帰りでなすつても、必ずやさ
い顔をしないで、今お祖父さんのお出でなすつた事も、お知らせ申してやらぬがよい」ゥ「それは
呑みこんで居りますが、なんぼお祖父さまのお頼みで、お家の為や若旦那の、お為とは申しながら、
常にかはつてあなたの気づよさ、お思ひきりのよいことといふものは、なんぼう見事でござりますから、

どうも合點が參りませぬに」（トいはれて小三は死する覺悟をさとられじと、わざとまぎらす顔付）「イエ/\、なに、今日もやう/\で持病の癪が、どうやら頭痛もするやうな」（トまぎらしを取つてよこになる）乳母はせんかたなく/\、次の間へたつて行きて、金之助の浴衣仕立、縫ふもなみだではかどらじ　小三はしばし氣をやすめんと、横に寢ねても眠られず、只歎きのみとゞめきて、とやせんかくやとさま/\に、思ひなやみし折からに、隣なる家にて若者ども、二三人にて聲高に、浮世ばなしのいろ/\なる、中にこんないはれる、●「コウ八さん、きのふ、己がなかうどになつた、つとめあがりの女を見たか」▲「イヽヤ見たくもねえ、二十三四のいゝ女だつけ。あれがどうした、女でもまとこしたか」■「ばかアいひねえ、アノ女で此の間大騒動があつたアな」▲「ハテナ、又浮氣でもしたのか」■「どうして/\、浮氣たくらゐならよいけれど、首をくゝつて往生したとさ」▲「ムヽ、違つたか」■「イヤもう/\とんだ事をやらかしたのさ。そのやア、マアどういふ譯だ」■「聞きねえ、アノ女はの、前に深川の女郎だつたが、さる所の息子に惚れて惚れて惚れぬいて、互に心を明し合つて、末は女夫だ、夫婦にならうと約束をしたが、聞きねえ、その息子が親へ、内にやアの、いゝ嫁があるんださ、それを何でも否がつて、また女房は持たねえからと、隣付合ひ/\だまかしたが、それでかしまい、それからお前、相當に金もはのもいゝうんだから、親父の金をせびん盗んで、身請をして己が長屋へ連れて來て、囲つて置いての、女房にた事か間

しの、から、手におえねえから、親父はおほおこりで、上がたへやるの、田舎へやるのと、大もんちやくたこした處があの女は、女郎に似合はぬよく出來た者で、嫁が出されたり、親父がおこつたのを聞くと、サア氣をもんで〳〵、息子が不埒とはいふものの、嫁を出したの内がもあるも、みんな私があやまりと、ひどく嫁に氣がねをして、生きてるちやァ、両方八方、丸くいかねえと思つたさうで、たうとう書置をして、首をくゝつて死んでしまつたから、嫁も歸るし、息子もそれから、しかたがねえから穏順しくなつたが、なんとその女郎は、よつぽど氣があつたもので難がいいに、第一、貞女といふなだ。」〽「ほんに女のかゞみだのう。水滸傳一百八人の中に、どうかありさうな豪傑な女だの。」なるほど女は魔のもので、外面如菩薩内心如夜叉とかなんとか、佛さまがいはしつた通り、顏は美しくつても、肝魂の恐ろしいのがあるものだ。しかしあの女もその息子の、一旦恩になつたから、男の爲や何かを思つて、死んだのはあつぱれ名が殘るが、をしいかな首をくゝつたからおしまひだ。とても死ぬならいさぎよく、身を投げるもいふうだから、剃刀で咽をぐつとやると、鏡山の尾上とさて、がうさに利いてゐるぜ。」〽「さうよのう。そこがやつぱり氣がよわいから、剃刀でやつたら痛からうと思つて、縊つたのだらうが、見つともなかつた。」〽「さうだらう〳〵。それおやゝ、やつぱりその息子の、面よごしでわらは才覺だの。ほんに死ぬのもよつぽどあんべえものだ。何にしても恐ろしや〳〵。」ト

[illegible]なる小三が[illegible]し、[illegible]、世の中にも似た事があればあるもの、今の話のやうでは、此の身[illegible]に似たのも辻占か。あきらめられもせぬ中を、心に思はぬ愛想づかしが、どうして、なんと言はれよう。死ぬる今際に若旦那に、お腹をお立たせ申しては、後の世までの心がゝり、ひとつ蓮もおぼつかなし。[illegible]、なんとせう[illegible]」と[illegible] 金之助は娘女のお竹と、いつかた[illegible]行つて遊びゐたるが、[illegible]に白[illegible]が立ち歸るときゝ、すれ違ひて歸り來しが、子どもごゝろにも小三や乳母が、なにやら歎くやうす[illegible]、[illegible]して、又門口にたち出でし、[illegible]して居る折から、金五郎が來るを見て、よろこびて内へ 金之助「おつかアちやん、おとつちやんがお出でだよ。」おつか[illegible]出たりはひつたりするうちに、金五郎は入り來るのみ、小三は顔をしかめつゝ、起きあがりて右の手にて、むなぐらをきつくおさへながら[illegible]お出でなさいましたか」と言つたばかりうつむいて詞なし。金五郎「どうした、[illegible]した顔つきだの氣色でも悪いのか。」[illegible]いつにかやさしき詞に、小三ははいとばかり胸さすり、[illegible]込む顔を、[illegible]、心[illegible]、[illegible]たる事をいひかねて、なほ申たい事を申出すは、[illegible]、又金五郎に[illegible]と、[illegible]した[illegible]し、[illegible]して、ふさいでならぬに、いろいろな事[illegible]心[illegible]、それ[illegible]い顔色も[illegible]、金之助[illegible]

なみだをほろりとおとし、小三「アイ、もういゝよ。」金五郎「なんの、氣色がわるさうなら、髮をあらはなけりやアいいに。」金之助「おとつちやん、今ね、よしよのおぢいしやん來て、坊にはおかつたよ。」金五郎「ニ、おぢいさんが來た。そりや何所のおぢいさんだ。」ト問はれて小三ははつとばかり騎とゞかくたまらさぬ顔で、小三「ナニサ、なんでござりますよ、矢劒塲の御隱居さんが、御出でなすつたのでござりますが、この子は見るとこはがつて、どうもなりませんこ（ナホ、、、こート）わらひにまぎらす心の中、さこそ苦しくも悲しかるべし。金五郎「おとつちやん、お土產あるかえ。」金五郎「ホイ、しまつた、ツイ今日は忘れて來た。その代りばゝアと行つて、何ぞいい物をとつて來な。」金之助「アイチヤリ、ばゝァ行かうよう（せたける故に次の間より立出づる乳母もなみだ顏、）うば「サア、お坊さん、參りませう。」ト（金之助をいだき、出てゆくそぶりをつくづくと見てふしぎな顏）金五郎「なんだ、こんな/\にをかしな顏をして、どうもおれにやア合點がいかねえ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。コレ、なぜおれを隔てるのだ。そりやア分らねえと言ふものだぜ。」小三「エ、、何も込み入つた事もござりませんから、あなたを隔ては致しませんが、餘りうつ/\として居りましたから、つい色々な事を案じ過して、互にこしかた行末を話して、果ては淚をこぼし、ふさいでなりませぬからとつく/\と、少し氣を變へたのでござります。が、わたくしよりはあなたのお顏、いつにない色の悪さ、お心持でもお悪いはござりませぬか。」金五郎「イヤ、おれのはこりやア持前だから、時々ふさいだが直になほるよ。」ト（口にはいへど心には、）何く

れかくれさま〴〵男気の、それと知らさぬ胸の中、言はぬはいふに彌増して、猶さら辛きものぞかし。
の、[illegible]
小「あなたもちつとお気晴しに、御酒でもおあがんなさいませんかェ。」金「いや〳〵酒よりはマア、ちよつと寝ようよ。今晩けふは番だから、どうも来られねえ処だつけが、昨日もちよとゝひも来ねえから、又案じるだらうと、気になつて、それでやう〳〵ぬけて来たのよ。ひと寝入りやつたら帰るだらう。」ト[illegible]小さん、實に人のいつ迄は、どうなるものか知れねえものだの。今頃斯うして居ることは、お前は夢にも気がつかねえよ。末をかけて夫婦だと、互に思ひ思はれたに、お雪といふ邪魔が這入つて、苦労をさせる切なさ辛さ。それ故にこそ祖父さんや両親へ、一個気がねをすると云ふも、[illegible]うるさい世の中だのう。」小「其の様にいつて、お雪さんの事を兎や角とおつしやるが、お雪さんは大事の〳〵、お家のお娘でございますから、可愛がつてあげて下さいまし。さうで私は日陰の身故、どうなつても宜しうございますから、あなたにあちこちお気を使つて、必ず頼うて下さいますな。それが私は苦労でなりません」と、暫し涙にくれ六つの、鐘の鳴るまで[illegible]と、金五郎はこゝに打諾しける。是れより小さん、金五郎に、愛想づかしいふや否や、[illegible]を見て[illegible]し

小さん
金五郎
假名文章娘節用後編下巻　終

器の古きを愛づるのは、ひねつた茶人の一癖にして、旨き物を食したがるは、小児と意地のきたな連中、詩人を祀て日のたきは、放蕩家の病なるべし。[illegible]と[illegible]のあたらしきを、妙で奇説の咎あらなく、――サンヤと蘭語で賛言は、戯作通の評的、評判よし野の花より高く、部数は春の山ほどに、貴らん事を欲するは、言はなどしらき鈍客の欲情、活業源よりの忠義、速いが勝の新版は、夕河岸の魚を競ふに齊しく、近来頻節用の、刻なく新市は、近きにあれば降文でも、日に六つと出たるに、早く早くと書肆より、使をおこして居催促、花の下に見物されし、賓市の書を起きたかね、筆を執りて漸くはかり、有りの儘に記すになん。

甲午の孟春

三文舎主人

小さん金五郎 假名文章娘節用 三編上卷

江戸　三文舍自樂補述

第七回

生者必滅會者定離は、浮世のならひと悟つたる、言も今は身の上に、思ひあたりし憂き事と、小三は涙にこたへたる、人に知られぬ心勞も、かねての覺悟と云ひながら、さすが女のやる瀬なく、浮氣を捨てて眞實に、二世を三世と契りたる、かはらぬ中の金五郎の、爲とは云へど今更に、義理といふ字にせまられて、縁を切らんはなかなかに、身を裂かるゝより苦しくて、何とせん術と案じれば、案じるほど猶物思ひ、まさる苦勞を獨り中に、置きどころさへ泣きの涙、心の鬼に責つとても、道に缺けたる愛想づかしに、云ふに云はれぬ恩愛と、執着の絆斷ち難く、ふつ〳〵思ひ觸れしが、左にも右にも末かけて、結はれぬあだなき縁の絲、なまじひなき事いひ出して、臨終に惜しくさけんには、女子は罪の深き身に、罪重なりていつの世に、罪滅ぼさん樣はなし、うすき縁に前の世の、因果と思ひ定

あれば、人は世に身をうらむ、よしなき罪はなきものなと、あおきなき世を悟れども、心細さのいとゞしく、いとけなきのある子を捨てゝ、いとしい男のためながら、暗き冥土へ旅立たんは、よく〳〵罪の深さ事と、又くりかへす迷ひの闇に、ひとり胸の念苦しみつゝ、年ごろ日頃の辛労が、つもり〳〵てこの頃は、うきたたる気の結ぼれて、食事も日々に細るものから、面もかたちも痩せがれて、うつらうつらと気を悩むも、ことわりすぎて哀れなり。かかりし程に金五郎は、案じる事大かたならず、醫者よと立さわぎ、心を配り気をつけて、いたはり優しくするゝにつけ、小三はいとゞその情の、あつきを思ひ深かるや、思ひつゞけ考ふれば、いかに義理でも操でも、いとし可愛の夫と子を、捨てゝ死ぬべきやうもなく、いつその事に自省が、識きつくしてくれと頼みたる、事をうちあけ金五郎に、話して相談したならば、どうかかうかとすまんせんに、心もみだれ気もみだれて、病はます〳〵重るのみ、醫者も匙をなげるほどなるのみ、頭痛と胸の痛みいたみに、輪のやすまるひまもなき、金五郎は勤めの身なれども、案じる事ひとかたならず、日毎々々に訪ひ来るが、今日も例のごとく入りきたりて、

金「これはこれは小三のそれに〳〵とさわぐを、待ちあぐんだ金五郎「どうだ小三、けふはちつとも快い方か。ネ」問はれて

こちらすまいならなくて、余念もなくあそびゐる。

小三はくるしき中にも、金五郎のかほを見るよりなやましき二にこりからず、小三「ハイ、やつぱりけふも同じことで、どうもふさいでなりません。金「ム、ゴウか、困つたものだ。薬は毎日欠かさず服用して呑むやうにたてつけて呑まし

てくんなヨ」ト うしろを向けば、うばは「ハイ、なんたけ精出してお呑ませ申して、はやくお快くしてあげたいと存じますが、今度のお醫者のお薬は、えこと上に上りにくいさうで、なつかいどうもはかどりません」まさ「そりやァわるいのう。どうで薬は呑みにくいから、誰しもすゝんで呑むものはねえが、そんなに無精だやアどうもいかねえ。それにあの醫者におけしたから、ねつからはかゞしく無えやうだから、なんなら醫者を取替へるが宜からう」いさ「イエ、あのお醫者様もお功者だから、宿へますにも及びますまい。どうでかういふ病氣といふものは、はかゞしい事はないと申しますから、お氣をもんで下さいますな。私がこのわづらひより、あなたに御苦勞かけます事かと、思ひ過しますと、もう〳〵、いつそこの儘死にましたらか、遙か優しでございませう」ト[illegible]まさ「またそんな馬鹿な事をいふヨ。なに死ぬのが優しなものか。病は氣から起るといふから、氣の持やうで早くも直り、重くもなるのに、おめへのやうに[illegible]と頼ふと、死ぬがましだ〳〵と、氣で氣を病むもんだから、ちよつとした病氣も癒りかねえのだ」いさ「それでもどうも心から、氣で氣を病む譯ではございませんが、もとより苦勞性な生まれつき故、つまらない事も氣になつて、あんまり深く案じますから」まさ「それがわるいよ。寝る目もねずに考へて、氣で氣をもんで苦勞をしても、儘にならねえことが儘になるものかネ。餘計な苦勞で命を縮めるやうなものだ。[illegible]おれの爲を思つて、人

の知られえ苦勞なんして暮れるのは、眞實嬉しいは山々だが、こんなに煩つてくれちやア、實にどうも困りきるです。是れからは然ういふ事はさつぱりとやめて、苦勞は地獄へでも捨ててしまふがいゝ。あなたはさう一口におつしやいますが、とても女は罪が深いから、苦勞は一生はなれません。苦勞より此の體が、さきへ地獄へ參りませう。ト、はかなき事を、いひ出すにぞ、金五郎もむねふさがりて、その氣の小せへのが病の原だ。老人かなんぞぢやァあるめえし、是れしきな病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけへて、向島の姉御の所へ、保養にでも行つて見るがいい。わたくしも向島の姉さんに、ひさしく逢ひませんから、この間からさうぞんじて、參りたいと存じてをりました。老少不定は世のならひ、盛りの花も散るは常、定めなき世と申しますから、あすをも知れぬわたくしが身のうへ、もしもの事があつたならば、二人と言ひさして涙せまり、金五郎のお百と金之助へ、かはる見つめる目になみだ、袖にあふれて膝のうへに、はらと落つるなみだ心に、ふしんに思ふ金之助は、のび上りて小三の顏を、つくゞゝと見て、氣に、お母、おつかちやん、なに泣くのだよ、おとつちやんお叱いか、坊おやまあ何も堪忍おくれよ。ト、いはれて小三はたまりかね、こゑをしのびつゝおさへ、を抱き上げて、金之助可愛さ餘りて切なさは、胸もはりさくばかりなる、金五郎も男心に、目にはさまん言ひ紛らせど、小三の胸をおしはかり、せまき女の心から、よしなき苦勞に取りつめて、もしもの事もあらんかと、思ひ過して胸せまれど、ことはれじとて鼻紙に、涙つゝむ[illegible]ならず、乳母のお乳

もかたはらに、二人が心を推量して、共になみだに咽びける。小三はやう〳〵なみだをぬぐひ、「この子のまたゞわんぜもなく、わたしが愚痴な心から、つまらぬ事を案じ立てして、あんまり悲しくなつた故、つい涙をこぼしたのを、旦那に叱られる事かと思ひ、あやまる心のしほらしさ。なぜ子どもといふものは、こんなにもマア可愛からう。この子の成人するにつけ、慾に限りは無い故に、いつまでもたつしやでゐる氣でも、壽命がなければそれも叶はず。もしあすが日に目を瞑つたら、さぞマア後で泣くだらうと、それが今から見らるゝやうで、死ぬ氣はさら〳〵ないけれど、とても長命のできないわたくし、遺言ではござりませんが、ひよつとマアさかさまな事で、この儘死にでも致しましたら、便り少ないこの子の身の上、他人の手にかけないやうに、どうぞ向島の姉さんの所へ、お預けなすつて下さいまし。とても日陰で育つたこの子、末始終あなたの御家督を、つがます事もなりますまいから、養子にやらねばならぬ生ひさき、今からあんまり他人の中で、いぢめられたり苦勞をさせたら、根がひよわい生まれ故、蟲もおこりでもなりませうから、外へやつて下さいますな。御新造もござりませうが、六ツか七ツにもなりましたら、手習や讀書も、教へてやつて下さいまし。また二ツにはお前さんと、御夫婦中よく、お暮しなさつて、御祖父さまはじめ御兩親へも、御苦勞をかけ申さぬやうに、御孝行になすつて下さいますれば、わたくしはたかまりやうな、佛事供養をして下さるより、思ひ殘す事もな

く、うかゞひます。あなたには子どもの時からおなじみ申して、ひとかたならぬ御恩をうけましたが、この世の縁が薄いかして、この子ができても杖かけて、添ふにそはれぬ身の因果、何のむくいでこのやうに、後生の悪い生まれかと、いくたび思ひ返しても、かへらぬ事でござりますが、これもやつぱりなの愚痴、この上のお情には、わたくしのからだは、あなたのお寺へ、どうぞ遣つて下さいまし。さうしたならあの世へ行つて、お側に居られませうかと、はかないやうでございますが、今の身にてはそれが楽しみ、お案しなすつて下さいまし。ト又もなみだともろともに、繰りかへしてご歎きける。[illegible]まだそんなつまらねえ事があらふよ。あんまりくよくよ思ふから、かつと取りのぼせたのぢやア無えかノ。この一日二日は、なんでもおれの顔さへ見ると、哀れつぽい事ばつかりいふから、おれまでどうか気色が悪くなるやうだ、愚痴な事を考へ泣てして、気でも狂ふといかねえから、ほんに気をしつかり持つがいいぜ。お雪にひどく気がねをするから、それでこんな病気が発るのだらう。あの子お雪と祝言したのは、知つてゐる通り、祖父さんや親父の気やすめの為だから、何も今更おめへを捨てる心もなし、又金坊ができたから、栄耀栄花こそさせられねえが、そんなに不自由もさせめえし、日かげ者でもなんでも、共に心さへ変らねえけりやアいいぢやアねえか。儘にならぬのが浮世だとは、唄にさへうたふから、其処を承知して、なにも時節だと、気を大きく持つて往生して居なけりやア、苦の世界が渡られるものか

なゝほんに往生するといつちやア氣がゝりだつけヘ、鶴龜々々〳〵」ト小三のこゝろをなぐさむる、ことばのはしにもいまはしき、ことのみ言ひて氣にかけるも、蟲の知らする前兆なるべし。この日は金五郎も何となく、小三の身が案じられて、歸る心もなかりしかば、看病がてらこゝに泊りて、夜もすがら沈りがちなる事のみ語して、夜更けてみな／＼打臥しける。あくる朝金五郎は、はやく起き出で仕への身なれば、立ち歸らんと身じたくするに、小三は心のつかれにや、まだ目覺さめこなたには、金之助があさおきにて、うばを相手にあそばへ來りてあそびしながら、「ばゝアや、子供と云ふものは、まことに調法なものだのう。坊やのしやべる聲で、おらア目を覺したやつさ」「さやうで御座いますかエ。どういたしてもお坊さんは、お情深なうございますから、朝がお早うございますのさ。ほんにおつかさんはまだ、お目覺がございませんネ。旦那さんエ、あなたはさぞ〳〵御苦勞でございませうか。まことにお困んなすつた事でございますネエ」「さうよ、じつに苦勞でならねえ。それになんだか氣にかゝる事ばつかりいふから、どうも案じられて安心ならねえヨ。おれは勤めの身のことゆゑ、毎日附きとほしに附いても居られず、なんでも手前ひとりが頼みだから、すゐぶん氣をつけてやつてくんな。女といふものは心の狹えものだから、ひよんな事でもしめえかと、夫れが一倍心配だ。」トいひながら金之助のあたまをおさへて、「こりや金ばうヤ、おつかアはきい／＼がわりいからの、あんまり世話をやかせずに、おとなしくして居るのだヨ。又明日來るときに、お土産をたんと買つて來てやりませ

うつ」トいへば嬉しさうにおさにとりつき、〔金〕「おとつちやん、坊おとなしくするかや、うまい物お呉えよ。明日おつかさやんさい〳〵。まだわかいかや、坊おとなしくするョ」〔金五郎〕「ア、さうだ〳〵。坊は利口者だからおとなしくするのう。そんならおとつさんはモウ帰りませう。おつかアはまだ目を覚さねえから、しづかにしなよ」トいふ声聞きつけ小三は起きいで、〔小三〕「モウおかへりなさいますか。今日は御番でありますか」〔金五〕「アヽ、この四ツだから帰らずアなるめえ。なんぞ用でもあるのか」〔小三〕「ナニやうはねえ、用と申すのでもございませんが、なんだか今朝は御帰し申すのが」トなごり惜しげなる事故、〔金〕「またそんなことを言つて、とめるのか。けふは顔ッつきがでえぶいいやうだぜ。なんにしても帰つて又出直して来よう。暫らくつとめの間をかかねえも、親父や叔父さんへの心やすめだ。マアなんでも精出して薬を呑むがいいぜ」〔小三〕「それでもあなた、今夜はお出でなさりやアしますまいね」〔金〕「大抵なら繰り合はして来る積だが、あんまり遅ければ、明日のあさは是非来るョ。それとも用でもあるなら、さういつておきねえ」〔小三〕「ほんにそれ〳〵、金ばうの背中の灸がまがつてをりましたから、どうぞ直してやつて下さいまし。そしてまだ疱瘡前でございますから、観音さまの仁王さまの股を潜らせて下さいましョ。此の頃はあつちこつちに、だいぶ疱瘡がありますさうだから。それにアノ、モウ帰り行きをいたして、浮雲くつてなりませんから、轉ばずの玉子守と、水天宮さまのお守を懸けさせてやつて下さいまし

爰らは近所に川が多うございますから、水が怖くつてなりません。」ト 萬事につけて子を案じる心のうちぞふびんなり。 金五郎「なんだな、そんな事はいつでも言はれるものを。あんまりいろ／＼な事をいふから、おれも帰るのがなかしいやうだ。マア、モウ一ぷく吞んでから帰る事とせう。」ト 男心にも猶につまされて、別れのつらさも無理ならず。小三はたばこを吸ひ付けて出しながら、 小三「袖引たばこであなたのお足を、無理にとゞめた歓妓の時分は、真の苦勞も苦になりやす、はやく身まゝになりたいと、楽しみ盡きて悲しい今の身、思へば夢のやうでございますねえ。」金五郎「さうよ、この子のできねえ時分が、ほんの色事後生楽、無理な口説にすねたり拗ねたり、つらいと思ふは逢はねえ晩、ゆうべの恨みは今夜の手くだ、面白い事も楽しみも、かんげへて見ると昔のやうだ。縮じみた言ひぐさだが、マア、年はなんでも重ねねえこつた。あの時分のやうな身のうへに、もう一度なつて見てえものだ。」ト ゆつくわいめきたるくりごとに、ふさぐ心 を子は側らで、金之助はあそびにあきれ、 金之助「おつかアちやん、坊、ばゝアと遊ぶの、モウいや／＼だよ。何ぞ旨いものおくれよう。」 小三「オヤ／＼、モウお遊びはいや／＼かエ。そんならばゝアや、お菓子でもやつておくれヨ。」うば「ハイ／＼。お坊さん、サア落雁をあげませうねエ。」 金之助「乳母、坊、落雁いや／＼だヨ。梨子食べたいよ。おつかアちやん、佛さんの梨子おくれよう。」 小三「マア佛さんの梨子かエ。坊はこの間だ、お歯が痛くなつたから、遠州の御隠居さんに御願ひ申したから、梨子は食べられないからお菓子におしよ。いゝ子だネエ坊は。」金之助「お菓子い

やいやだもの」備ちやんにあんがつて居る、梨子おくれよゥ」ト少し泣聲になる」金五郎「坊や、なぜそんなにだゝをいふ、梨子は毒だから悪い／＼。だゝをいつていびるから、おつかアの氣が悪くなるのだ。おとなしくしてお菓子をたべな、赤いうまいのがあるから。コレ坊や、なぜそんなに拇指をいぢるのだ。拇指をいぢると耳へ灸をすゑるよ」トいふと「灸いや／＼、御めんだよゥ」おとつちやん拇指いぢやあいやア、何ぞ買つておくれよゥ」ト言出す、「さうおとなしくするなら、旨い物を買つてやりませう。おとつさんはお屋敷へ歸るから、お竹に抱つこして、兩國のお橋の方へ一緒に來な。お菓子と、玩具と、そして何ぞ買つてやらうのう」ト金五郎「イヤ／＼お菓子とおもちやと、そしてかア、アノ備ちやんに上げる、花を買つておくれよゥ」トいはれて小三はむねにぎつくり、金五郎は氣にかゝれば、金五郎「この坊主は、妙な子だのう。なんだといふと備さんへ買つて上げよう／＼といふが、氣になる事をいふ坊主だぞ。さア何でもいいから一緒に來い／＼」小三「そんなら小三も大事にしなよ、殴て氣を付けてくれなよ」トいひつゝおりてさうりを抜けば、金之助はお竹にいだかれ、さきへおもてへ出てゐる」小三は さやうなら御機げんよう」まゝあなた、ちよつと金五郎のうしろより、著物のえりをなほしながら、こちらを向いてお見せなさいましッ」トいへば、金五郎はふり返りに、暇乞ひにもわかれを惜しめ金「ナゼ、己がどうぞしたか。」小三「ハイお顔に何やら塵が。」トとる手もふるへ聲震り、これはこの世の見納めかと、思へば心も消えぬばかり、ぢつと見つめる目に涙せきくる聲の切なさを、咳にまぎらす顔に袖、あて〳〵泣く目をかくすなる、心の中の四苦八苦、思ひ

やゝさへ哀れなり。金之助はわけもなく、金之助「おとつちやん早く〳〵お出でよう、坊背負つて待居るヨ。」トせたがられて金五郎も、詮かたなさに格子戸を、跨ぐはずみに門口の、石につまづきよろ〳〵、金五郎「ホイ、こいつァしまつた。」おまち「ヤ、どうなさいましたエ。」金五郎「ナニ、鼻緒を踏み切つたのヨ。ハテめんえうな。昨日買つた雪踏だから、切れる筈はねえけれど、どうも不思議ぢやァねえかのう。」トまた氣にかけて思案がほ。おまち「そんならマア、きのふお買ひなすつた、お雪踏の鼻緒が、マノ切れましたかエ。」金「フウ、こいつァどうも氣がゝりだ。」おまち「エ、ハツト胸にこたへてほつといき、「あのそんなに、お雪踏をお竹に持たせて、直しの處へおやんなさいましたら。」金「なァに、ナニ本鼻緒が一本切れたのだから、履いて行つて橋臺で直させよう。[illegible]金ぼう、一緒に來たら、」ト心ならずも出で行きける。小まちは金五郎の後影が見ゆるまで見おくりて、名殘の涙のやるせなく、止めかねしをかくては果てじと、思ひかへして食事をば、やう〳〵に食べしまひ、楊枝をつかひながら、氣の[illegible]し細く、考へて居たりしが、うばにむかひ、おまち「ばゝアや、けふは旦那もいろ〳〵御用があるさうだから、[illegible]お出でなさりもしまいし、わたしも氣分がよいから、保養がてら今ッから、向島へ行かうと思ふよ。それに此の節はモウ、花屋敷の七草もさかりだらうし、天氣はよし、金ぼうをつれて、ぶら〳〵と出かけようよ。」うば「それは宜しうございますが、おあんばいの悪いのに、遠道をお歩きなすつたら、又あとがお悪うございませうヨ。」おまち「[illegible]、爰からはそんなに遠くもないものを、ぶら〳〵と

出かけたら、氣が晴れて却つてよからうヨ　向島の姉さんも、金坊が成人したのを見たがつて連れて來い〳〵と、お文をたび〳〵およこしだから、マア何にしても出かけようヨ　ト（是れより小三は身支度して下女のお竹を内にのこし、乳母に金之助をおぶはせて、向島へと出で行きける。小三の姉眞名鶴は、富家の隱家に愛せられて、向島の洲崎村なる、秋葉の社のほとり近くの、別莊に住居して、月雪花を友としつゝ、いと樂々と暮し居けるが、この春隱居は世を去りて、なき人の數に入りしかば、本家の主人も眞名鶴の、便りなき身を哀み思ひ、殊に壯年の事なれば、いづかたへなりとも支度して、嫁入らせやらんと深切に、情厚くいひけれども、眞名鶴は今更緣付きて、榮耀を望む心もなく、勤めの身にて年久しく、つらい苦勞も爲あきたれば、たとひ不自由の暮しをするとも、世を物靜やかに送らんこそ、上もなき樂しみなれば、われは尼となり佛門に入りて、隱居をはじめ亡親の、後の世をも弔はんことゝ、生涯の願ひなりとて、ひたすらに望みける故、本家の主もその心操の、清らかなるを深く感じ、望みに任せて、別莊を眞名鶴にゆづり、その庭の中に堂を造らせ、念佛庵といふ號をつけて、佛事をいとなむ補助とし、日々の雜費は月毎におくり、不自由なく暮させければ、眞名鶴は日ごろの望みも叶ひ、その恩義の厚きを喜び、浮世をのがれし心地にて、髮を切り尼となり、名を紫雲とあらため、月々に彼の庵にて、百萬遍をいとなみつゝ、佛に仕ふるを身の業とし、行ひすまして暮しけるは、いと〳〵殊勝の事な

りけり」頃しも秋の中ばなれは、庭面に桔梗、女郎花、なでし子、藤ばかまなど、さま〴〵秋草の咲きみちたるまゝ、紫雲は御佛に參らせんと、庭下駄をはき下りたちて、花を手折りて居る折から、枝折戸の外に人音する故、ふりかへりてひとめ見るより、紫「オヤ〳〵、青柳橋の姉さんだねへ。よくマァお出でだねえ。サア〳〵こつちへお上りな。ヤレ〳〵よくお出でだ」ト 流石しんみのきやうだい中ゆゑ、喜ぶこと大方ならず。小三も姉の無事な顏を、見て嬉しさの限りなく、乳母の背中に負はれゐる、金之助を抱きおろし、手をひきて座敷へ通り、おさだまりの挨拶すみて、みやげ物などいだすとき、三「ヤレ〳〵まことに久しぶりだね。マァ御無用におしなはいよ。いに、遠方だのにお土産まで。ほんにこのあひだ人をあげた時、おまへがちつと氣色が悪いと、お返事に書いておよこしだから、どういふ様子かと、いつそもう案じくらして、ちよつと見舞に參らうと思つてゐたが、あいにく私も時候にあたつて、つい〳〵けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顏の色も悪いが、氣分はだん〳〵よいほうかエ。そして舟でもお出でのかエ。」小三「イヽエ、あるいて參りましたよ。見かけ程心もちは悪くもございませんが、唯ふさいでばかりゐて御座いますのさ。私はもウ手まへにかまけて、御無沙汰ばかり致しますから、あなたのおあんばいのお悪かつたのを、存じませんでお尋ね申しもいたしません。」三「ナニサ、私のはほんの當分の事、とやかつぽいと快いす。ほんに金ぼうよくお出でだネ。ちつと見ない中に大きくお成りだぞ。目つきも口もとも小三さんに

生だねえ。」トミ「金ばうや、手をついておばさんに、ハイ御機げんようとお辭儀をしなよ。」婆「アイアイ、よくお辭儀ができますぞ、りこうものだ。サア／＼をばさんに抱つこをおし、うまい物を御馳走するから。ナ、よく言ふことをお肯きだぞ。可愛いいねえ。」ト金之助をひざの上に、抱きあげながら寄付にむかい、婆「乳母アお出でかエ。」ハイしばらく。おたつしやでよいねえ。」乳「ハイありがたうございます。まことに御無沙汰様を致します」ヘヽヽヽ」ミ「お坊さん、お嬉しうございますかエ。お抱つこでようございますネエ。」女「この子もお前の丹精で、まことにおとなしく成人したネエ。ほんに乳より育てから上やら、この私ともどうぞ面倒見てやつておくれ。」乳「ナニネエモウ、お利口なお生まれつきで御座いますから、目からお口へぬけますやうで、よその子供衆より御合點がよく參りますのさ。」婆「ほんにさうだらうネエ。金ばうや、おとつさんは御機嫌よいかエ。」金「アイ、おとつちやんお屋敷に、お竹内に居るヨ。」婆「ヲヤ、お竹は内にゐるお積で、おとつさんはお屋敷かエ。よくわかるねえ。お常や、お煮花を早くこしらへて、ソシテ今さういつた物を取りにやつておくれかエ。」常「ハイ／＼、唯今お煮花もできますヨ。トノお菓子も、三松どんが取つて參じました。」婆「そんなら早く爰へ持つて來て、金坊に上げておくれ。そしての、鯛七へさう言つてやつて、金坊やおつかさんのお好きな、うまい魚を取つておくれヨ。」常「ハイ／＼、かしこまりました。」トにばなと菓子をもちはこぶ。ますますおおきまへなさ

いますなア。今日は御馳走をいたゞきますより、久しぶりでゆつくりと、むかし話や、うさばなしで、氣をはらすのが何より御馳走」金「ほんにさうさねえ。女といふものは久しぶりで逢つても、身の上ばなしかたんぞより、外に話は無いものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ばう、好きならたんとおあがりョ」小三「ハイ〳〵ありがたう。左様なら坊やいたゞきな。ヤア〳〵お珍らしい、お牡丹餅でございますかエ」金「アイ、富貴牡丹といふ道明寺のおはぎサ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で、兩方ながら向島の名物だから食べて御覽」小三「ほんにさやうでございますかエ。サア坊、いたゞいておたべョ。ばゝァにもお相伴させませう」金「おつかちやん、牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食べゆョ」小三「ほんに誠においしう御座いますネエ、乳母とんだよいお菓子だのう」うば「さやうで御座います。此の様なお菓子を、向島で賣りますのを、さつぱり存じませんネエ」小三「さうさ、ここお姉さんエ、これを御近所で初めましたかエ」金「アイ、直この秋葉さまの裏門の通りで、土手へ出る道さ。松花園といふ家で、ちかごろ賣り初めたが、とんと好くするネエ」小三「左様で御座います。實に美味しうございますから、坊が大悦びで、たんといたゞきます」金「それはよかつたネエ。金坊、たんとおたべョ。乳母は酒の方だから、いまにお肴が來ると、一口あげるョ」うば「イエ、御酒よりか又、このおはぎと都鳥は、結構でございます。そして手綺麗でございますから、おつ

かひ物やお土產などには、よふしう御座いますネエ。これは今にはやり出しませう。」業「さうサ、わたしの町の本屋なぞでも、人をつかはさる度毎に、いつでも買つて來いとおつしやるさうで。何處でも評判がよいからはやつて來るのサ。」か「ほんに向島も、今ぢやア都になりましたネエ。」業「此の節はおまへ、梅屋敷の七草が盛りだから、たいそう見物の人が出るヨ。それに蓮華寺の大師樣のお庭がよく出來たから、だん／＼此方も賑やかになるネ。」か「左樣でございますネエ。私も些と休みましたら、母を連れて、梅屋敷の七草から、蓮華寺の大師樣へお參り申しませう。今年は旦那も前厄でございますから、お身のうへに何事もないやうに、金ばうの行末やわたくしの、後の世の助かるやうに、よく願つて參りませう。」トほろりと涙こぼすにぞ、なんとなくあはれになり、業「ほんにおまへもわたしに似て、後生願ひだと見えるねヱ。金ばうは退屈だらうから、三松と一緒に、お庭の池の緋鯉に、お菓子でもやつてお遊び。」トいはれて金之助はいそ／＼よろこび、うばに手をひかれて庭におりたち、丁稚の三松を相手にして、池のほとりをめぐり步き、緋鯉鮒の子などおひまはし、餘念もなくぞ遊びゐる。

小さん
金五郎 假名文章娘節用三編上卷 終

江戸 二文舍自樂補述

第八回

その時紫雲は長羅宇の、煙管に多葉粉を喫ひつけて、（小三に出せば手にとりながら、）小三 ほんにお羨ましいはあなたのお身、うるさい世事の御苦勞もなく、朝夕こんな靜かなところに、浮世を捨ての氣樂なお暮し、わたくしもどうぞ三日なりとも、佛につかへて死にたいと、心に願つて居りますが、身の罪障が深いかして、それさへ叶はぬ憂き苦勞、何の因果でござりませうと、（始終なみだにむせびがち、紫雲も何となく胸せまり、）紫 なんのわたしの身の上が、羨ましいとはおまへの僻事、世に在りてこそ人は花、金ばうといふ寶を結んで、苦勞はあらうが又樂しみ、旦那も人におすぐれなすつた、發明なおかたの事、行末はそれこそ安樂だわネ。面白い事もをかしい事も、樂しみも悲しみも、知らぬこの世の世捨人が、なんの本意であるものかネ。是れも定まる因縁と、思つて居てこそ又安樂、姉妹二人が同じやうに、浮世を捨てては亡き親

たちの、菩提の爲と思はれようが、却つてそれでは不孝の罪、せめてお前は人なみに、世を過ぎてこそ兩親へ、草葉の影からお喜び、必ず／＼わたしが身を、うらやまないで金ぼうや、旦那を朝暮大切に、うき苦勞をもしんばうして、梅の榮えをたのしみに、時節を待つのが樂の種、すこしのことをきなきな思つて、あんまり苦勞ばつかりおしだと、大わづらひにでもならうも知れず、氣をきりかへて私にも、苦勞をさせておくれでない。ト しんみのことば身にしみて、うれしさあまるかなしさの、涙を袖に包みかね、袂をぬらし暫時は、詞さへ泣くばかりなり。紫雲はこれを案じわび、もしや金五郎が小三を見限り、お峯にこゝろを移せし故、胸を苦しめ氣をつかひて、このわづらひの出でしかと、おもひなすごして なきすりよせ、紫「おまへのふさいを見るにつけ、やまひの根が知れないから、どうもわたしは案じられるよ、癪や血の道でふさぐのなら、案じる程の事もないが、何やらひどく氣をいため、心の疲れのわづらひかと、見たはひが目か知らないが、思案に落ちない事でもあつて、一人で心勞してゐると、ろくな事は考へ付かず、苦勞にくらうを増すやうな、つまらぬ事を考へ出すから、だん／＼病氣は重るとも、快氣方はすくないものさ。他人は格別親身のわたし、世を捨てし身と云ひながら、苦勞な事があるならば、お前の胸を隱さずに、はなして聞かせておくれなら、女の智慧の淺はかでも、そこは膝とも談合づく、へだてぬでこそ實の姉妹。かはす嘆きがわるいにつけ、夢見の悪いや何かにつけ、おまへの事が氣にかゝり、後生

を嘆ふ妨げと、おもへど凡夫の悲しさに、浮世を捨てゝもやつぱり苦勞、心の休まる間はないわネ。ヱ
ト　誠をあらはす言葉の中に、なさけと涙をふくみたる、姉の意見のありがたさに、小三は始終なみだにくれ、胸もはりさくばかりにて、顔もえあげず居たりしが、やう／＼袖になみだをはらひ、眞實親身の御上、思召して下さればこそ、お案じなすつての段々のおことば、うれしいにつけ悲しいにつけ、なんであなたを隔てませう。この世に杖とも柱とも、力に思ふはあなたおひとり、浮世に人は澤山あれど、案じて見るとおまへさんや、わたくし程な因果者は、あんまり外にはありますまい。生まれ落ちると親に離れ、姉妹二人揃ひも揃つて、古郷をよそにはるぐと、知らぬ東へさ迷ひ來て、うき川竹の流れに沈み、苦勞にくらうを盡いたあげくに、あなたは行末たよりのお人に、早くお別れなすつた故、お若い身そらに世を捨て、附會しらぬ佛の道、それにひきかへ私は、恩と情を捨てかねし、浮世の義理にせめられて、日陰に咲きし徒花の、散りてゆく身はいとはねど、まだ撫子を手まくらに、それだけが一つの氣がゝり。「一その撫子が氣がゝりとはエ。ヱ」トとがめられて「小三ナァ、その氣がゝりとは金坊が事、とかく蟲持で病身ゆゑ、寢さても離れても苦勞になり、どうぞ丈夫に育てたいと、思ひましても、まだ何の事、何が食べたい彼が食べたいと、それは／＼目が二目、見ぬ間の食べたがり、口だけの事と一度は、食べ過ぎぬやうに氣をつけて、騙し賺せばかりんぜもなく、いや／＼をして泣きますから、つい可愛

ごにひかされて、炙でおどすより早手廻しと、ねだるお菓子をあてがひますと、又食べすぎてはお腹が痛い、痛い／＼の食傷の度毎に、蟲氣でいつもちよつとは直らず。一體ひよわい生まれたのに、わたくしの乳で育てぬから、猶病身になりますると、思へば不便がいやまして、よその丈夫の子供のやうに、折檻もしず、強くも叱らず、わんぱく育ちが増長して、手にのらぬ程のいたづら者に、なりましたせゐかして、ちとづゝ丈夫に育つやうだと思へば、旦那は又行儀が悪いの、育てがらが悪いからのと、あの子の身の爲を思つて、小言をおつしやるも無理ではないが、まだやう／＼丸三歳に、なるかならぬのふところ育ち、生まれ落ちからちやほや言つて、餘り大事に爲すぎた故、わが儘氣儘に育つ筈、今更急にせつかんしたり、泣く時あたまをはつたりして、嚴しくしたら我儘も、すこしづゝは直りませうが、唯でさへひよわい子が、それこそ驚風の蟲でも引出し、ほんたうの病身になりますだらう。可愛いいにつけ不便につけ、苦勞のやすまる隙もなく、氣で氣をつかひます故に、今の病氣もおこりましたの。是れもわたくしの氣が小さいから、せずとよい苦勞を餘計にいたして、壽命をちぢめますも心がら、とても長生はできませんが思へばまことに世の中ほど、うるさいものは御座りません。それ故にこそあなたのお身が、お羨ましうござります。ト涙ながらのかこちごと、聞くも涙の目をしばたゝき、寒がる胸をなでおろしつゝ、

主ほんにさう言へばさうでもあらう、けれどもそれはほんの一隨。はやいたとへが世の中に、子寶と

さへ云ふものを、大切な金銭よりも、子ほどまさつた寳はないと、たれしも知つた世の諺、子を持つた身に苦勞の絶えぬは、お前ばかりではあるまいし、みんな世間のならひだわね。高貴でも下賤でも、子にひかさるゝは親の常、マア見るかげもない橋の上の、むしろ畜闇に世をおくる、食ふや食はずの乞食でさへ、子を大切に可愛がり、寐る目も寐ずに育てあげても、出世の出來ぬ乞食は乞食、上を見れば方圖がないから、貧しいものを思ひやれば、さむい目も世事不自由なく、暮してゐるは安樂でネ。慾に限りのない世の中の者、十分なことも不足に思ふは、人情だから仕方もないが、おまへなんぞも日かげの身で、僅になられぬを苦におしだが、論つみ下焼けるといふ通り、十分すぎた事はないもの。人のほしがる金銀が、有り餘るほどの大家には、子を欲しがる程子が出來ず、貧乏人の子澤山や、善むと云ふことだから、金銭づくにも換へられぬは、金坊といふマア大事の子寳、よし妾腹の生まれつきで、人の知らない苦勞をするも、親と成り子となる程の、因縁づくだと諦めて、面倒な見て育てなくつては、親の役目がすまぬといふもの。マアそれだけは少しの事や、くよくよ案じて煩つては、おまへの身にも壽命の毒、彼の子の爲にもなるまいから、氣を引立てて、頼は口癖に、身を厭ふのが肝心さ。世に樂しみも何にもない、わたしが身ならうちやるこすと、金ばかりの行末を神佛に祈つて、成人させるがおまへの手柄、女の道の缺けぬといふもの。しかし子ももの中であのたがら、旦那

の爲の手助けに、身すぎ世すぎといふものゝ、人の機げん氣づまな取る、今の身での悲しき商業ぞ、ア、さぞいやだらうつらからうと、わたしが昔の身を思つても、おまへの心が察しられて、もう／＼厭らはりさくやう、何かにつけて苦が絶えぬから、ふさいで病氣のおこる實とはいふもののわたしと違ひ、おまへは身ひとつといふではなし、幾度もくどく言ふやうなれど、あんまり苦勞をかさねて、今のわづらひが大病になると、もしもの事がありもしまいが、そういふ時にはわたしはもとより、金ばうも頼りがなくなるから、どうぞこの末は娘でもかけて、娘は爲やうに爲ておくれ　ト 姉だけ一をかけて、娘を頼むむしてつけ、嘆くがありたきもかぞかし。　ま一その御意見につきまして、まうすやうではございますが、人の命はけふか今日、明日があすとて定まらぬ、世のならひのわたくしが、けふが日若しもの事があらうや、知れぬ此身のことなれば、逆さまながら御廻向を、受けます事もあらうも知れず、達者で居つてもなき後でも、親身はあなたおひとり故、何彼につけて金ばうが事を、どうぞお頼ひ申しますから、わるい事はどの様にも、お叱りなすつて下さいまし　ト すにまよふ族ひたすらに、たのむ言葉であけれなば　またなんだな、そウそんな哀れつぽい事はいつておくれでないこ　姉となり妹と生まれて来たからは、力になつたりなられたりするのは、そりやア言はないでも知れた事こ　もう／＼、そんな愚痴はやめて、金坊やつれて梅屋敷へでも行つて、ちつと氣ばらしをしてお出でこ　ト なくさめる折から金之助も、庭のあそびにあきたるにや、乳母に抱かれ座敷へ来れ

は、宗悦は抱きつあやしつして、わが子の如くに寵愛み、是れよりみなみなもろともに、橋場別荘へのかへりて、内には下女と下男を、残して小三と宗悦は連れ立ち、花川戸より蓮華寺の、大師へ詣でに出で行きしが、程なくして立ち戻り、宗悦法師々の天床と上つめて、みなくにて暇を述べたる、馳走に時を移しければ、彼の日のはや西にかたぶき、入相近くなりしかば、小三は家にかへらんと、ことなしてやなだ、と、もう今日は大きにふけて、つひにさてゆきてゆくと、身の上ばなしに話を咲かし、そこここに保養いたしました。日の暮れんにも気がつかず、書きおはなしをへして、人々に宿てありました。乳母おまへも定めしまいなら、よくこのまゝ泊らなければならないが、なにか、さまざまいろ、ましてそれに今日は遅いもなかし、内にすしたる用がなくば、またかういふよい首尾はないから、今夜ここと晩泊つてお帰りなっ。塩梅がよくなつたら、座敷へ出るやうになるまで、又出るといふ時節になつて、いつ来られるか知れないから、受持がたれにゆつくりの上、身の上ばなしを聞きながら、ゆつくり話をはなしてお出でよ。」「はい、ありがたうではございますし、然ながら名残はかはらぬうちに、泊つてまゐりたいとぞんじますが、今まゐたくし所で中のあとを、ひとつ無用に出ではならぬと思つてございますから、どうも泊らすにはなりますまい。」「まあそれにさうさね、片時の御機嫌をそこねてもならぬし、ひと晩でも家にゐないことはだめね。それならば何でお帰りな、しかし家からのおかへりは、遣りのおかげですかゝらうか」

小三「ナニ、それにも及びません。ずゐぶん歩いて參られますから。」蝶「それでもお前氣色が惡いに、往還ではくたびれるヨ。」小三「いゝエ、却つてすこしづゝ頭痛の致す時は、歩くはうが勝手でございます。」蝶「さうかネ、そんなら金ばうばかりも泊めてお出でな。のう金坊、おまへは、乳母と愛へおとまりよ。」ト いだきあぐれば うれしさうに、金「アイ、坊、をばちやんとこへ、寢ンねして、お池の龜ン子つやまいのよ。」ト ゐなかめづらしき子心に、かへるそらの なかりしかば、小三も心にあんどして、小三「ナヽ、そんなら坊はおとなしくして、おとまりヨ。はゝァのいふ事をよくきいて、だゝを言つてすねるではないヨ。アノ内に居る樣におこるとの、をばさんが、泊めて下さらないヨ。あなたが可愛がつてくださるから、直に泊らうと申しまして、おくめんが無くつてこまります。」蝶「それだからまことに可愛いのサ。人見しりをする子供は、愛想をしても泣き出すから、うつかり口もきけないが、この子のやうなにこやかな、可愛らしい子はありません。」小三「坊は誠に仕合者だよ。こんな野廣いとこへ泊めていたゞいて、おつかァよりあやかり者だの。そしてャノ坊や、おつかァが居なくなつても、たづねて泣くのではないよ。泣くとの、直に爺だよ。をばさんの所には爺がたんとありますから、おとウなしくしてお出でよ。」金「アイ、坊おとなチくすゆが、おつかちやんどこへイお出でだ。」小三「おつかさんはの、アノ内が遠ウいから、歸らないとおとつさんに叱られるよ。」トいひつゝ金之助をいだきあげ、かはいゝこの子のかほ見るも、是れがなごりか悲しやと、云はねど胸にせきあげて、顏

な見つめて目に涙、しばし言葉もなかりしが、疑はれんかと心づき、泣く目をかくし笑ひ顔にほんに子供と

いふものは、何を云つても無我夢中、後生樂なことであり升わいナト おもひきつて下へおろし、帶び直す顔つき

も、常にかはりし樣子ゆゑ、紫雲も乳母も何となく、小三の身のうへ案じられ、いへしと顔見あはせて、まア

うもわたしは今ッから、お前を歸りかへすのが、心にかゝつて氣も付かぬから、今夜は泊つて明日の

朝、はやく歸つたらよささうなものだッたのうばゝ［ゥン］さうさ日那だとて一晩位なかりのこと

譯をお話し申しましたら、お腹立もありますまいから、是非今夜はお泊んなさいましなア ト とめる言葉も耳を

「いゝえさうだけれど、今日こなたへ來る事を、日那にお話し申しませんだから、泊つてはどうも濟

まないよ。それに是非、お話し申さねばならぬ事もあるから、三味でもお請け申して、はやくいとま

はやく歸らうよ。乳母さんさうならおばうさんも、お歸りなさいますか。小三さんはかのでは、

かへし申されません。わたくしもお供いたして、嬶さん坊は明日、直に參りませう、ねえお坊ちゃん

まア、それ、坊歸るの、厭なだよ。嬶と一所の晩に泊まるヨ」まアいやだもの、と云うも何も

つた事だ。どう致したら可からうかね、まアそんなら斷ろうとまた坊と乳母はお泊りと相成て、お

つねさんは三松に久助を附けて上げようよ。それでは案じる事もあるまい」ト 默然となりしとうこ

さうなすつて下さいましなトしく〳〵それで落つきましたかトみな〳〵あん小三は紫雲と金之助に、

名残のことばが還士産と、なみだを袖にくしつゝ、小三「さやうならあなた御機げんよふう。御厄介でもござりませうが、金ばうが事をお願ひ申します。」金「ほんにナア、そんなら頼んだよ。金ばうや、おつかアはもう行くから、おとなしくして機げんよくお遊びよ。あばよ／＼だよ、おさらばよ。」ト残るかたなくつど／＼に、いとまごひして立ち出づれど、輪廻の絆にひかされて、尽きぬ名残のやる瀬なく、柴垣も乳母ともろともに、金之助の手をひき門口まで、別れを惜しみ送る身より、送らるゝ身はこの世から、くらき冥途の旅の空へ、消えゆくものと悟りしも、さすがに是非なき法の道を、受けたる身のみ御佛の、親身の姉に導きを、させて給はるものにやと、ふり歸りては目に涙、哭く音を忍ぶ親鳥の、雛に別るゝ思ひにて、氣も絶え／＼になる鐘の、無常の風にひゞき来て、耳をつらぬく入相に、驚かされて氣を取り直し、心弱くて叶はじと、別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は、今朝小三に別るゝ時、常にかはりて名残が惜しまれ、歸る心のつらかりしが、主人持つ身の儘ならねば、言葉を契りて別れしかど、その夜は夜詰の番にあたりて、出づる事さへならざるゆゑ、心ならずもとやかくと、案じわびてもせんかたなく、明くる夜遅しと待ちかねて、御殿より内へ歸りても、胸さわぎの常ならねば、食事さへせず著物を著かへ、青柳橋まで急ぎ来る、足も空に飛ぶが如く、小三の許へ来りしは、やう／＼日の出る頃なるべし。まだ人目の戸も閉てれば、さては何事もなかりきと、少しは心も落ち付きながら、戸口をとん／＼と打叩き、金「オイ／＼お竹、起きねえか、もう日があたつてるるぜ。お竹／＼。」

トうち明かれて下女はおどろき、かけ金はづして戸を開くれば、金五郎は内へとおこんで、お竹「ハイノ\、旦那さまでござりますか。オヤノ\、おほきに寐すごしました。」ト

金「坊主はどうした、まだ起きねえか。小三の病氣が惡かァなかつたか。」

お竹「ハイ、昨日は大きにおこゝろよいとつて、お坊さんをお連なすつて、向島へいらつしやいましたが、お坊さんは、乳母どんと御一所に御逗留で、お獨りであちらの男衆に、送られて昨夜お歸りなさいました。」

金「ナニ、きのふ金ばうを連れて、向島へ行つたか。よく歸つて來たのう。それもやうノ\くたびれて、まだ起きねえのだらう。」ト いひつゝ小三の寐所へ行き、屏風あけてこれを見れば、金「ヤ、、、、、」ト びつくりして、屏風に倒るゝ物音に、下女のお竹も何事にやと、かけ來りて樣子を見れば、小三は白無垢を身にまとひ、いつの間にやら自害なしけん、朱に染みて死したる體に、同じくわつと驚きて、倒れてわなノ\ふるへ居る。金五郎は狂氣のごとく、金「ヤ、小三、コリヤ死んだ。どうしたのだ。氣が違つたか。コレ小三、小三々々。」トだきおこし、呼びいけたへども、蟲の息でへたばりたるに、まだ何ぞいひたさうなれど、切れに、讀の色ぞやんをとめて、[illegible]泣聲しもなさけなし。金「よ、コレお竹、てめへが内に一所に寐ながら、小三が斯ういふ樣子があつたを、ちつとは知れさうなものだのに、知らずに殺してしまつたか、情ねへ事をしてくれた。」トぐちをいふのも、この時花川の皆い者、清助佐助もかけ來りて、驚くこと大かたならず、何はともあれ向島へ知らせんとて、佐助を雲助とこれへ走らせければ、[illegible]仰天して、金之助を連れ駕籠にうちのり、飛ぶが如くに馳せ

来りて、小三のすがたを見るよりも、あまりの事の悲しさに、夢か實か辨きかねて、涙にむせぶばかりなり。紫雲は顔に袖おしあて、聲くもらせつゝ金五郎に、小三がきのふの様子を語り、金之助の行末までを、とにかく思みて別れ路に、名殘の涙の盡きざりしも、斯ういふ覺悟をきはめし故か、情なや悲しやと、歎くかたへに書置の、ありしを乳母は うば「コレヽア御覽じまし、遺書までこんなになすつて、お果てなさるはよく／＼な事。とは申しながら、いとし盛りの、お坊さんをこの世へ捨てて、あとのなげきを思召さぬは、あんまり聞えぬおどうよく、おせまい心でござりました。」ト しじうなみだに、咽び居る。金五郎は男子ながら、共に心も消え／＼に、歎きに沈みうつとりと、夢現ともわかぬまで、惜しさやるかたなかりしが、流石さかしき生まれ故、武士の身でかへらぬ事を、くりかへして歎くこそ、人の思はくも面目なしと、やう／＼思ひあきらめて、かの遺書を手にとりあげ、ひらきて見ればこま／＼と、わが身の爲と家のためを、思ひつめての覺悟の文體、讀めばよむほど後悔の、身を切らるゝより切なさに、あきらめてもまた涙ぐむ、目をしばたゝき胸をなで、金「老少不定は世のならひ、あすをも知れぬ身の上だと、きのふ小三が言つたのが、思へば記念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを、思ひなやみて先だつ不便さ。亡き跡の事まで苦勞にして、意見まじりのこの書置、よむ身にならうとは氣がつかなんだ。いつか世に出し人なみの、樂な暮しをさせてえと、思つた事も水の泡、子供の時

からけふが日まで、可愛や一日樂もせず、日陰の身にて苦勞を爲死に、死んだ苦勞の原はといへば、おれが片時内に居ぬゆゑ、親に不孝といはせじと、その身を捨てし心根は、眞實過ぎて恨めしいこたとへ一人で死んだとて、わが手にかけしも同じ事、死なすと仕樣はあらうのに、短氣を爲たからゑんなの歎き。呀なんだか夢のやうで、かへらぬ事だが不便でならねえ。南無あみだ佛〱。」ト ゑからす [illegible]金之助は、つく〱と見にふしんに思か、「おとつちやん、」ト泣くのだえ。おつかちやん、佛ちやんになつたかよ。乳母、なぜ泣くよウ。をばちやんもお泣きかよ。坊、おつかちやんこはいよウ。」ト 共になきだすあどけなさ、紫雲もわつと泣き出し、「ほんにこの子のかしこい事、說教へねどおつかさんが、佛さんになつたとは悟ない。こんな悲しいことを見るのも、蟲が知らせたせるかして、きのふ歸すが氣にかゝり、乳母と二人でとゞめたが、あのとき歸さずばなんの事、あつたら命を捨てもせまい。歸すも約束歸る身も、みんな定まる因緣なから、薄命な妹が身の果てや。」ト くわつと聲上げ、泣くなく嘆きかなしみて、涙に聲も浮くばかり、哀れといふもあまりなり。斷くては果てしなきゆゑ、爲になれじと金五郎は、男心を取り直して、葬式をいそぎ乳母をはげまし、野邊の送りもそれこれに、七日〻〻の訪ひとむらひも、手厚く法會なしにける。かかりし程に金五郎は、みなし子金之助が母に別れて、便りなき身となりしを案じ、かねて小こゑお侍より、紫雲の許へ預けくれよと、頼みし言葉もあるゆゑに、日が立ちて金之助を、乳母もろ

ともに向島へあづけ、青柳橋の家は取りかたづけ、殘るかたなく心を配り、をり〳〵紫雲の庵を訪らひ、金之助を愛しながらも、只小三の事忘れかね、家に在る時は部屋にのみ籠り、お常にだにこの事の始末を、祕しかくして語る事なく、氣のひき立たぬも理なり。內證はじめ家内の者も、金五郎がこの頃にては、急にうつて變りし如く、夜あそびにも出でざるゆゑ、さては身持の直りしかと、喜ぶもののいつとても、何か心に案じ顏、屈託らしくふさぐのを、見るにつけ又內證は、老いの身の思ひ過しに、もし金五郎が短氣から、小三に怪我をさせしも知れず、それ故にこそふさぐのか、小三の身の上おぼつかなし、いかなる事かたづねゆき、樣子を聞きて安堵せんと、ひとりひそかに兩國の、小三が家へぞいたりける。

小さん金五郎假名文章娘節用三編中巻　終

小さん金五郎 假名文章娘節用 三編下巻

江戸 三文舎自楽補綴

第九回

暫々に木々の落葉を庭と見つゝ、今まで苦しき心に、心よ宿も時雨月、訪ふ人もなき草の庵へ、友さそひ来て音信ふに、木魂にあらぬ小雀の、ちゝよはゝよと啼く声を、聞くにつけても哀れ添ふ、若葉は小三の亡き後を、弔ふひまにも金五郎を、思ひてもまた案ぜられ、泣いては母や寺の元成、伜の増して可愛さに、涙のかわくひまもなし [illegible]をこゝまでいう見まねの子心に、内にかへりて遊ぶにも、まだ [illegible] 菊の花たを手折りて来て、仏にそなへる有様を、[illegible] んなんまいだ／＼、ぞいゝことゝ来て、[illegible] 見るにつけ聞くにつけ、乳母も若葉も倶々に、[illegible] たまうんが泣かせる口かしこ、[illegible] やがて成人したならば、[illegible]

いたいけざかりのこの子を捨てて、死んだ小三が心の中、さぞどの樣につらかつたらう。思ひやればど後生のさはり。ア、南無あみだ佛あみだ佛。」ト つまぐる數珠もしめりがち、うばもなみだの目をぬぐひ、うば「とても返らぬ繰言と、思ひ直し氣を取りなほしましても、お可愛さうな事を致しました。」ト かたるもはなすもなみだなり 金之助は退屈して、金「ばゞア、伯母ちやんとこもウいやだヨ。面白くないかや、家行かうよウ。おつかちやんへ行かうよウ。」うば「又そんな事を仰しやるかよ、お聞きわけの惡い。こゝがお坊さんのお宿で御座いますから、家へ行かう〳〵とおつしやるものでは御座いません。」金「フウ、坊の家愛でないよ、おつかちやんへ行かうよう。をばちやん、ばゝアいけないヨ。坊、家へ歸やせないよ。」紫「オ、さうかエ〳〵、惡いばゝアだぞ。ア、しかし騙しすかしても、まだぐわんぜもない子供だから、家へ歸らうといふも無理ではない。小三が座敷活業で、なんぼ傍には居ないがちでも、三日と離れた事もないのに、やがてもうたト口餘。にぎやかな所で育つた子が、こんなさむしい所へ來て、緋鯉や龜の子が相手だから、どうでも遊びにあきるはず。コレ金坊や、お前は利口者だから、をばさんの言ふことをよくお聞き。アノ、お前のおつかさんはの、それは〳〵遠ウい所へお出でだから、モウうちには誰エもお出ではないよ。それだから家へ行かう〳〵と言はずに、をばさんの所にいつまでも居るのだよ。」金「坊のおつかちやん死んだから、お寺へ行つちまつたかエ。」紫「アイ、さうサ。」金「そいだから坊の家無ち〳〵かエ。」

四「さうサ、よく分るぞ。それだからこゝが坊やの家だよ」ト　うばと二人で思ひゐる、をりから下女がかけ来り、「モシあなたへ、どこのか御隠居様が、お目にかゝりたいといつて、入らつしやいましたヨ」「さうかエ、そんならどなただか、マア庭口からお通し申しな」下女「ハイ／＼」ト　立つて庭口へまはり、しをり戸開きこなたへと通せば、杖をつきつゝ入り来るは、金五郎が祖父い白翁なり。白「ヤレ／＼よい御住居ぢや。マ、御免くだされ」ト　さしきへ通り座に直りて「さてハマアわしは金五郎が祖父で御座るが、たしかこなたさんは、小三どのゝ姉御といふ事のみ、聞きたい事、話したい事、山をあれば孫めにかくれ、わざ／＼尋ねて参つたが、おさし合ひなお客はござらぬか」ト　いふに小三はよろこびながら、なにか様子がわからねば、いんぎんに手をつかへ　小「これは／＼、何方様かと存じましたら、金五郎さんのお祖父さん、ようマアお出で遊ばした。何にも御遠慮なものは居りませんから、何なりともお心おきなく、お話しなさるが宜しうござりますこ」ト　優しき言葉に白翁は、老いの目やにをふきながら、雲の顔をうちながめ　白「ヤレ／＼、姉妹とは言ひながら、小三どのに生きうつし。おまへの顔を見るにつけ、涙がこぼれ、さきだつやうぢや。我何から申さうやら、心のうちが取込んで、前後するのも老いの癖、退屈ながら一通り、話すを聞いて下されや。その仔細といふは、知らしやつた通り、不思議な縁で金五郎と、小三どのと深うなり、たがひに思ひおもはればこそ、深切づくが苦労のたね、大概に惚れ合つてゐたならば、人の思はく世の義理にも、かゝはらずに楽しみだらうに、あんまり可愛がりいとしがられたから、孫めもその情に迷うて、うかと特の

夜泊りばかり、一ッ〳〵、年はとれども、放埒が直らぬ故、とゞのつまりが案じられて、意見はしても糠に釘、豆腐にかすがひ、きかぬが儘よと、捨てゝ置いては爲にならず。刃物も折々磨がなければ、錆付いて切れぬ道理。その錆を落すには、普通の世事の合は せ砥では、とても切れる事ではないと、推量をして見る時は、わしが心の荒砥にかけても、切らねばならぬ浮世の義理。お雪といふ孫娘と、祝言までさせたから、とても添はれぬ惡縁と、思うた故に孫めにかくれ、ァヽ、いつでかあつたけな、小三どのの家へ尋ねゆき、初めて逢うたその席で、よろこばせもせず孫めが身の上、かう〳〵いふ譯あれば、長うとは言はぬ程に、いやでもあらうが暫時が間、どうぞ縁切つて下されと、無躰なむごい頼みやば、聞いて涙にむせながら、義理と恩とを聞きわけて、ふつつり思ひ切りましようと、云はれた時の私が胸、嬉しさ餘つて不便なは、小三殿の心の中、さぞつらからう悲しかろと、おし戴かれて其なみだ。ァヽ、浮世が儘になるならば、容貌といひ利發といひ、優しい心の生まれつき、孫めと夫婦にしてやつたら、さぞ〳〵互に嬉しがろと、思つたばかりでそれも叶はず、是非も泣く〳〵歸つたが、それから後は金五郎めも、そは〳〵する様子もなく、家にばつかり居る故に、少は心が直りしかと、家内の者がよろこんで、機嫌をとるほど鬱ぎ顔、じれては部屋にとぢこもり、何か屈託なやうすを見ては、又案じるが親の常、兩親の者もお雪めも、同じやうに苦勞がれば、私もやつぱり氣にかゝり、

考へて見るほど合點がゆかず。もし金五郎が若氣の誤で、愛想づかしの腹立ちまぎれ、疵でも付けて騒動を、出來した故にふさぐかと、思つて見れば片時も、案じに胸がやすまらず、わざ〳〵、金杉橋へ尋ね行きて、見れば思ひもつかぬ人の、他家となりて勝手口も、變つた事で引越せしかと、あたりの人に尋ねしに、小三どのの知る人にや、子までなしたる身ながらも、男の爲と義理づくで、身を捨てられたあつぱれ貞女、近所の者までその當座は、皆惜しがつて泣きましたと、涙ながらの物語、聞いて突胸のわしがびつくり、悲しさ不便さやるせなく、その捨てられし子の行先、聞けば親身の姉御のところへ、引取られしと言ふことなれば、悔みも言ひたし樣子も聞きたさ、孫めが顏も、まだ見ぬ孫ではない曾孫であつた、思へば心も落ちつかぬ故、[illegible]はせてやう〳〵來ました。子までなる身と知つたなら、何のむごく緣切らせう。なまなか半包み隱されたが、今となつては恨めしい、年に不足のないわしが、長命せずばこの樣に、悲しい涙はこぼさぬもの、なんの因果で生き延びたか、思へば年が恨めしい」と、老いのなみだくり返し、愚痴になるのも道理なり。「委細もあらまし聞き取らう」、共に涙を催して、「ほんに妹が薄命は、約束事とは申しながら、子までなしても日かげ妻、一日半時人なみの、息をもつかぬ苦勞な爲死に。わたくしとても親身といふは、天にも地にも小三一人、力に思ふ甲斐もなく、杖にはなれし今の悲しみ、忘れ記念の金之助で、少しは憂さも晴れますが、まだ〳〵まことにかゝはれんまでも、

なく、明けても暮れても、母を慕ひ、泣くにつけ、すねるにつけ、達者で居たならどうかうと、思ひ出しては同じやうに、泣いて涙のかわく間は、ほんに一日もございません。」日蓮「イヤモウ、そりや言はるゝまでもない。お前の胸を推量すると、私が胸もはりさくやうで、矢も楯もたまるこつちやない。ヤ、ヤ、それは左もあれ、孫めが伜はどこに居るか、ちよつと逢ひたい、逢はせてくだされ。」乳「ほんに左様でございましたネ。金坊は奥においでかエ。乳母一寸連れておいで。」ト よびたてられて金之助は、うばよりさきへかけ来り、金「おばゝちやん、坊、おとつちやんお出でだとおもつたヤ、餘所のおぢいちやんだネ。」乳「是れはしたり、よそのお祖父様ではないヨ。是れは坊やのお祖父さんだから、手をついてお辭宜をおしよ。」日蓮「ヤレ／＼、おとなしいよい子ぢや。ドレ／＼、祖父の側へ来やれ／＼。オヽよく言ふことをきくぞ。そんならお土産をやりましよ。サア／＼手を出しやれ。オヽ、てへ／＼がよく出来たぞ。ヤレ／＼可愛い好い子おやすア。」ト やうかん一棹出してやれば、いたゞいてうれしさうに、金「おばゝちやん、コレお菓子、お祖父ちやんおくれだ。有り難うごじやいますの。」乳「すや、よいお菓子をおいたゞきだの。よく忘れずにお禮を申したぞ。よいお祖父さんを持つて、坊は仕合ものだぞ。」日「ハヽヽヽ、イヤ、この坊やを見るにつけ、初めて逢つたわしでさへ、可愛くつてならぬもの、いくらしつこく意見をしても、金五郎めが聴き居らぬも道理かエ。まして小三殿は女の事、このマアいたいけな子を措いて、飽きもあかれもせぬ中で、男

のためと身を捨てられたは、貞女ともあつぱれとも、賞めても是れが褒め過ぎれうか。しかし親身のこなさんが、身に取りてはこの誓を、鬼とも蛇とも悪魔とも、さぞまア憎いと思はつしやらうが、その言譯ではなけれども、この子を家へ引取つて、晴れて金五郎が倅と披露し、小三との亡き跡も、ねんごろに弔はせましよ。せめては夫れをたゞさめに、思ひあきらめて下されこト なみだふきつゝ、これけれ共、夫婦で暮しさ限りなく、涙ぐみとめどもなき貴おけて「忝ん／＼嬉しい思召し、何とてお禮申しませう。みんな前世の因果ゆゑ、どうも仕方もござりません。それにつけても姉妹が、身の上のあらましを、おはなし申すもお恥かしいが、わたくしどもが生立は、かやう／＼でござります。ト兄弟二人母なき故、小三が身は生まれ落ちより、父之亦に漂泊せられ、不幸の共になさけにて、親に別れをさづけられし、その悪みにて里に行きしが、早く父にも死に別れ、里親に騙されて、うき川竹に沈みし事、小三も金五郎と共に育ち、互に相想ひしに、金五郎は本家へ養子となれば、小三は便りなき身となり、こゝ、心狂ひて鴨川へ、身を沈めしが不思議にたすかり、悪者の手にわたされて、つひに同じ花街へ賣られ、藝妓となりて暮すうち、縁ありて金五郎にめぐり逢ひしより、二世を契りて深くなり、つひに子どもの出來しゆゑ、身請をされて圍はれし事、又その身も同じ頃に、さる人に請け出され、この霜町に養はれしが、便りの人に早くわかれて、頼りに離世の志願おこり、是を頼りとなりつゝ、世なのかれて暮すうち、姉が身の薄命から、浮世の表理にせまられ、浮ふ事なきものを覺悟して、心づよく

も叶ぬ果しは、みな男の罪を思ひ、撫でさすつていくこゝろざし、嫁ながらもあつぱれ貞女、只一すぢの不行跡と、我が心の中、推察してやつて下さいまし」といひつゝしほしほと、白露かゝるなみだなり。「さてさて兄弟揃ひもそろひし、貞婦といはうか、義婦といはうか。殊に小三は幼いときから、金五郎と一緒に育ち、家出して死んだと聞いた、養ひ娘のお亀であろとは、夢にも知らぬが大きなあやまり。さういふ訳のある事を、其子の身のうへ金五郎も、遠慮して人にも明さず、ひとりで苦労をして居たかと、思へば小三が心の中と、金五郎が胸の中が、不便でどうもなりませぬ」と、思ひやりつゝ話を聞かばて、一ト口に言いて物語、たゞし、はなしは涙ではいざ知らず、うばも夫の前に、金之助をねかせ、わしも自分は、泣く〱かしながらあはれなき、しやうじやうすまのあはれたても、なみだでしいるばかりなり。実にわかれて皆けば、家に帰りて金五郎の、両親はじめお雪にも、小三が成行紫雲の身の上、金之助が事までも、くはしく語りける程に、皆もろともに涙にくれて、小三を惜しまぬ者もなし。この上は少しも早く、忘れ形見の金之助を、引取つて小三の亡きあと、ねんごろに弔はんとて、金五郎にもこのよしを相談ふに、喜ぶこと限りなく、それから日をえらみ向島より、金之助を乳母もろともに呼びむかへ、お雪の子となしていつくしみ、小三は世になき数には入れども、あらためて先妻と呼び做し、法事も手厚く営ひければ、金五郎はいへば更なり、紫雲乳母も上なく喜び、家内の者も睦じに、金之助を掌中の珠と愛し、唯すこやかに成長するを、指をり数へて暮すほどに、早くも小三が百箇日に當

りければ、金五郎は寺に詣でんとて、金之助を乳母に抱かせ、供の男を引連れて、菩提所へとて出で行きける。あとにお雪は下女と共に、金五郎の居間をかたづけなどする時、下女あやまつて[illegible]を打ち[illegible]、[illegible]に、引出し[illegible]出でしまいに、[illegible]中に、女の[illegible]を見出しければ、下女はこれを手にとり「[illegible]、御新造さんえ、一寸御覧あそばせ、女中の[illegible]がここにいましたよ」と差出しお見せ、「ほんにねえ、まア、常のお女だと思つたら、書置の事とし[illegible]、こりやア小三さんの書置だよ、わるい事があつたさうだ[illegible]

[illegible]

逢ふは別れの初めとは、かねてより人の身の、定のなきに引比べ、覺悟致しをり候ひしに、やうやく唯今思ひあたり候まゝ、この世の御名殘に、一筆書き殘しまゐらせ候。まづ上や、御平らかに御くらし被遊候事こそ、此の上もなう御よろこび申し上げまゐらせ候。さてしもわが身事、いやしき賤のふせ家に生まれ、草葉の露のはかなき身を、御父君の御情にて、やう／＼人となり候御恩の程、海とも山とも詞には盡しがたく、夫れのみならず親諸までも命を繋ぎ、御恵みの淺からぬ御事、いつの世にか、報いまゐらせんやうもなく、あまつさへ一日の御恩も送らず、かへつて御辛勞のみかけまゐらせ、この身の罪のふかき御事、申し上ぐべきやうも御座なく候。えにしは神のむすばせ給ふ御事にや、もとよりいやしきわが身ながらも、君の御情にあづかりまゐらせ、ひとかたならぬお氣がねのみ遊ばしさふらふも、みな我が身ゆゑと存じ候へば、身もよもあられず、たゞ／＼つたなき身をのみ恨みなりし。御祖父さま御初めお家來さまにも、さぞ／＼わが身を御憎しみ、御うらみ遊ばし候はゞ、はてては君の御ためあしからむと、行末のこと存じつゞけ候へば、ながらへをり候ほど、つみをかさぬる思ひにて、後の世さへも空恐ろしく、又このうへにかず／＼の御苦勞かけ參らせんもはかりがたく、せめてはわが身を果し候はゞ、すこし／＼君の御心も安かるべしと、とくより覺悟はきはめ參らせ候へども、女心の淺ましく、御名殘のみ惜しまれて、けふまでながらへをり候御事、まことに

まことに御恥かしく存じなゝ。たゞ〳〵此のうへは、お雪さまと御中よう、御祖父様御はじめ御両親さまへも御孝行のほど、願ひ上げまいらせ候。二ッには萬事は、御存じの通り、まことに便りなき身のうへ、これまでは及ばずながらも、互に便りといたしゐ候へども、此後は猶々たよりなき身にてさふらへば、何とぞ御見捨てなう御めをかけ被下候やうねんじ上げまいらせ候。また金之助事はくわんぜなきわんぱく者にさふらへば、わが身なきのちは、たづねわび、泣きむづかり候はんかと、今より目に見え候やうにて、あはれながら、ふびんにぞんじ候。姉かへと申まゐらせ、さりながら、いとまごひのついでに、金之助の事も、よく〳〵頼みまゐらせ候へば、あの方へ御預け下され、西東もわかり候やうに成り候はゞ、目なし子とて、人に笑はれぬやう、すなほにひたど、よく〳〵御さとし下されたく、かへす〳〵も君の御身もち、昨今までのやうなる御こゝろにては、御たのもしく候ふ、是れより御心をいれかへ、無理なる御酒を御すごしなされず、御前に出る御酒であそばし、お雪さまにも無理なる御事御ようしなされぬやう、願ひ上げまいらせ候。なほ此のうへの御ねがひには、後の世の御事に御座候。二世とちぎる御事ははじめて、未来は一つ蓮のうてなこそ、ひとへに願ひ上げまゐらせ候。まことにたゞ今より御親しみ申しあげ、暫しの間の御別れだに、心うく存じさふらふに、かくながき御別れとなり、つかへまつる御名かういたゞき候は、いかなるおく〳〵因果にやと、涙の

かへし、まことに〳〵女名残惜しさはいはんかたなく、心も亂れてふるふて、申し上げ度き御事は、濱の眞砂の盡きせねど、明けがた近き鐘の音に、死出の山路へいそぐ、惜しき命とあ[illegible]

道しるべいさよなおへ[illegible]の身は[illegible]方にぞして

と讀み終り、お雪もおなととも に、目を泣きはらして顏見合はせ、なみだながらに「ヱヽ、モシ〳〵、よしない文を開けて見たのが、悲しさを悲しし、顏がせまつて、大きに涙をこぼしました。金五郎の迯ひもせらるゝ時、死んだとお親父さんへ小三が書置を、おほめなさる程な生まれつき、容貌は格別な事だが心だてと云ひ此の手蹟まで、美しいともいはゞ見事とも、實に賢とはいふものゝ、靑死をする故に、人にすぐれて生まれて來たのか、金五郎の爲を思ひ、お前に義理を立て通して、命を捨てさつた哀女の鑑。ほんにお雪さん、必ず徒に思ひなさんなよ。この書置はお前への爲には、實によい手本だよ。此の樣に金五郎を大事にして、道をたてゝるがかのたしなみ。金坊も疎略にしてはすまないよ。二度はないにさうでございます。わたくしが人なみに、よく〳〵氣のつかぬやうな生まれなら、このやうな事にはなりませぬに、因果な事でございましたと、しばらく人めもかまはず泣き、なみだに袖をしぼりけり、かゝる折から下女いそぎ來り、「モシ若旦那さまのお歸り」ト告ぐるに母お雪は手早く文をしまひ、泣顏かくして出で迎へば、金五郎はその顏見て、「コレお雪、どうぞしたのか。涙ぐんだ顏つきだが、ハヽア大きな形をして、又おつかさんに叱られたのかナ。イヽエ、

そんな事ではございませんが」ト あと言ひかねしが「ヤノ、金坊はどう致しましたエ」○「はゝ」ト先へ、奥へ行つた」ト きものを着替へ「ヤレ／＼草臥れたぞ。ほんにお雪、けふはの、吾妻へ参りまして、直に向島へ行つたら、梅若さんのお傳言があつたぞ。おめへに金ばうを連れて、ちつと遊びがけに来いとヨ」ト いへどもお雪はうつむいて、ハイといつたばかりゆゑ、金五郎はふしんに思ひ、「ハテ、どうもおれは、おめへの様子が分らねエが、なにをそんなに案じるのだらう」ハヽア、アヽこれだ。これやァ側だの、おれが小言の前表にあつたから、それで癪にさはつたのだの。」お雪「どう致してマァそんな事が。」金「心になけりやァどういふ訳だか、心をおかすと言つて可かせな。一生涯添うと思ふには、隔てがねでこそ夫婦といふもの」お雪「さのへだてるといふ事は、無かわたくしに隠しましたか」金「なんの事だな。こつちはそんな嘘はねえもの」雪「外の事はともかくも、小三さんの事はつかねえ」金「ハヽア、それだてえといふ事か」それ故にこそこの悲しさ。先から私に、断りなしだと、訳をお聞かせ下つたら、あなたにも御苦労をかけずにすむのに」金「なんだエ、又思ひ出したやうに。それいくら言つても仕方がねえ。未練ら大概にやめてくんなせ」雪「そりやア無理でございますが、何につけ彼につけ、つれない憎む事もなく、みんなおまへさんのおためだと、この身の損は何ともおもはず、いつも手前に金「百両だけ気になるか」ト言はれて、なほ言つかねる。ようたがひの晴れますやう、申しますが

らお腹をお立ちあそばしますなヨ、アノ、あなたの御留守のうち、お煙草盆の引出から、小三さんの遺書が出ましたゆゑ、ツイちよつと」金「見たので氣色にさはつたらう」お雪「なんぼ愚かなわたくしでも、先から深い譯あることを、知つて居つたら、どうでもいたして、あなたのお側へ小三さんを、呼びますことも出來ましたらうに、なぜ隱しては下さいました」金「ナニヲどのやうに言つたとて、とてもかへらぬ繰言だ。小三の事をかくして居たは、おれが一生のあやまりだから、堪忍してくんな。年もいかねえおめへにまで、いろいろ苦勞させたのも、みんな因緣約束事。このには言ふまでもねえが、金ぼうを可愛がつてやつてくんな。アヽ、何だかひどく鬱いで來た。お雪、おめへいゝ子だから、茶碗に一杯酒を持つて來てくんな。その中ちよつくり奥へ行つて、皆の機嫌を取つて來よう」ト彌藏をひつかけ奥へゆく。お雪は酒を持ち來れば、金五郎も部屋へかへりて、金「お雪、金坊はの、祖父さんの側に結び付いて居て、好きなねだり事をして居るぞ」お雪「左樣でございますかエ。お祖父さんにはよいお相手でございます。ハイあなた、御酒を」ト茶わんをぼんにのせさしいだせば、金「ヨツト有り難し、御苦勞だつた」ト手に取りあげていきもつかず、ぐいつと飲むゆゑ、お雪は[illegible]「イヤあなた、召上るのなら、燗めて參ればよう御座いましたネエ」金「なアに冷でもいゝ。是れで氣色が直つたやうだ」お雪「ほんにその事もあの書置に、いつそ案じて書いて有りました」金「さうだつけのう。いつでもこのぐい呑みでは、小三にひどく氣をもませたが、アヽ、今思へば是れも後悔。モウ

そのふつつり止めにする。思へば小三はおれが爲の、善知識でもあるだらう」ト何かにつけて身のおこなひを、あらためるのも小三の貞心、天に通ぜし故にこそ。あつぱれ賢女といひつべし。　是れよりして金五郎は、主君へ忠勤怠る事なく、白翁初め兩親に、孝を盡す事日にまし厚く、お雪とも中睦ましくして、金之助を愛育し、崇雲の墓も四季折々に、訪ひ詣信れて疎遠せず。忠孝信義全き故に、家内に和順の基をひらき、お雪の腹にも子を儲けて、幾千萬代疑はしく、金家富み榮えける。かかる目出たき因みによりて、金五郎が實の親、文之丞も年來の、勘氣をこの時許されしかば、京師の家には養子をなし、その身は直に東へ下り、親族眷屬に對面して、喜ぶ中に小三の身の果て、聞いて悲歎の涙にくれ、頻りに無常を觀ぜしものから、終に髮を剃り佛門に入りて、身を雲水に任せつゝ、諸國行脚に出でしとなん。

小さん金五郎　假名文章娘節用三編下卷　（大尾）

清談若緑

清談和歌琴初輯敍

南都の帝の御時に、撰まれたりし萬葉集には、三日月なもて嫋娜なる、處女の眉引に譬へられ、蛾の眉とは唐人が、美人を賞むるの形容なり。こゝに清談若菜も、皆春の景物にて、常磐の松の緑さへ、春は一しほ色増すと、古人も既に詠まれけり。是れ青陽の褒詞、如月彌生卯月立つ、時なら而もまた若葉、たれかも日々に繁り行く、それに倣ひて此の冊子、行末長く世間に、廣めさせんと作者が新案、そこで霞に引く紅の、夜明いつまし初日の出、謳來ぬ垣根の梅も、東風和暖に綻ぶる、其の春の日の門口に、立て添ふ緑松と竹、壽も千代の末掛けて、何時もかはらぬ御贔屓を、願ひ奉ると申すになん。

江戸　曲山人戯題

清談若緑巻之一

東都　曲　山　人　著　編

第　一　回

梓弓春立ちしより年月の、射るが如しと古歌にいひ、[illegible]は早く、昨日は其處に花盛と、人に[illegible]けれど、今日は[illegible]まちやかましき、[illegible]時鳥と、ともに[illegible]は、其の後お雪と仲睦ましく、次男金次郎其の妻に、[illegible]いと賑はしく榮ゆるほどに、[illegible]なるに[illegible]ら[illegible]、一を聞いては十を知る、[illegible]み其の外の、[illegible]見聴く人毎に褒めぬはなし。金五郎[illegible]

も金之介なれば、たゞ掌中の珠の如く、寵愛詞に述べがたく、末たのもしくぞ思ひける。此處に小三が隱向島の、紫雲はもとより禿髪の、若後家となりしより、たよりに思ふ娘は死して、浮世に頼みもなきものから、さいはひ近所に難儀する、女兒のありと聞きおよび、人を立ててこれをもらひ、藝など仕込むを樂しみとして、今年と暮れ來年と、過す程に此の女兒、お政は年も十餘り、六歳の春とぞなりにける。其の生まれ立ち直樸にして、縹緻は式部が源氏にいへる、若紫もこれにやは、勝るべきとおもはれて、其の品容の閑雅なるに、これを見る人たましひを、動かさぬはなかりしとぞ。これど、お政は年こそゆかね、其のこゝろさま貞實にて、戯れたる方に心を移さず、朝夕母によくつかへて、なまめけることはなかりし。ある日假名屋金之介は半日の暇を得て、久しく伯母の左右をも聞かず、殊に彌生の初めにて、堤の櫻もほろ〳〵と、咲きそめたるよし人も言へば、夫れを見がてら向島を、こゝろざして立ち出でつゝ、彼方此方と三囲や、いそがぬ道をぶら〳〵と、旅行も遠き牛島わたり、木々は染めねど秋葉の森、はや其の家の門へ來れば、手拭出して足につく、塵など拂ひおとしッゝ、主「ハイ、御免なさい。」ト、言ふ聲聞きつけ、年來紫雲に使はるゝ、お澤と云へる婢女は、年も三十七八にて、萬事如才のないをんな、澤「オヤ、若旦那さんで御座いますか。」ト、言ひながら障子を開け、澤「サア、お上り遊ばしまし。今日はまことに好いお天氣だから、萬一入らッしやるかと存じました。」

上伯母さんはお変りもないかエ。何だか種々忙がしくつて、兎角ご無沙汰致すヨ」「ハイ、何も御機嫌宜う御座います。併し生憎今日は、お寺詣から大師さま、観音さままで廻ると仰しやいました。その孫と先刻、仁介を連れておいで遊ばしました」「左様かエ、夫りや残念。併し御自身なら、お目に懸らずとも宜い。それなら皆様も嘸お待遠でいらつしやいますから、奥のかたまで行つて見て来ようご」「ヱヽン、ます、宜いおや御座いませんか。お嬢さまにいらつしやいますから、マア/\、お上り遊ばしまし。それでもまだ木母寺の方は、花も一向咲かないさうで御座いますとヱ、柳の元折から、お政は聞けば何で、ヨサヤ、兄さん、よく入らつしやいました。それはなさいまし」「私が弟子を細く申しても、何なへお入らつしやると申しやつて、お噂を遊ばしますよ、懐しい、貴嬢、お帰り遊ばせて、三浦も折角左様申しますから、マア/\、貴嬢お上り遊ばせ」「左様かエ。夫ぢやお言葉に随つて上り込れおやア、人聞が悪いと思つてエ」「ナニ、、、伯母さんも矢張、女もやア御座いませんか」「、、ホヽ、エヽ、それは左様だけれど」「マア、お前さん、他人さまアあなたがするまいし、誠に嬉しい御ばかり仰しやいますネエ」「ですが、おまへんさいましよ、貴方がけれでは丁寧過ぎて、否はおまへ御名の野や、小僧が下に咲く頃と、心動かれ國なり」「さて、嘸うお上りなすつた。貴様そのお積さまと兄南人で、寂しくつて/\。ませんね。お嬢さん、貴嬢のお仕にいたしましようネ。悲しい

宜いから、」玉「慥か其がよく見えたッけ。彼處が宜いネ。」澤「種々散らかつてをりますから。」玉「ナニ、其様な事にやァ構はねえ。ハヽヽ、お政さん、針仕事が大分よく出來るネ。感心だ。」政「いゝえ、一向出來ませんから、常住叱られます。」ト、言ひながら、其の縫物を片脇へ押付けて、政「アレ御覧なさい。此の頃は大層人が出て参りました。」玉「成程、是りやァ大勢だ。何だ、お師匠さんでもあるめエ。」澤「まァお茶を一ツ、お嬢さん、ソレ何か有つたぢやァ御座いませんか。」兼「アヽ、金花糖が。」玉「餘りおつとだねエ。」澤「まァ、たれでも宜う御座いますわ。今にまた御馳走をいたします。」玉「無理に引き上げたからにやァ、定めて御馳走は悉皆あるだらう。アハヽヽヽヽ。」澤「それはもう、當然で御座いますねエ。お嬢さん。」金「此間伯母さんに聞けば、大層琴が巧くおなりだといふ事だ。何ぞ彈いてお聞かせなさいな。」兼「ホヽヽヽ。燕杜さんが其様な噓ばつかり。ちつとも出來はしませんは。」金「何も其様なに吝しがらずと、宜いぢやァないか、ノゥお澤。」澤「左様サ。お好みなら、お彈き遊ばしましナ。」兼「たれでも出來ないものヲ。」澤「アノ、此間お貰ひ遊ばした繪を、若旦那さんにお目にお懸けなさいまし。」兼「ネヽ、誠に綺麗な繪を、お兄様から貰ひましたわ。」玉「左様か。ムヽ、成程こりやァ美しいナ。當時は錦繪も強氣によくなッた。併し左様いふと老年めくけれど、」澤「だんゝ上手におなりますネエ。」兼「此方のを御覧遊ばせ。景色をよく書きましたナ。」玉「ムヽ、成程是りやァ宜い。」

ト、二人は暫く繪に見惚れ、餘念なき體を見てお澤は莞爾をいらせ、澤「ホンニ、左様していらッしやる所は、まことに何方も劣り勝りなし。誰と云ふ一對の御夫婦様。何卒早く左様いたして、上げたいものでございます。」政「オヤ、否なお澤だノウ。」ト、顔少し赤らめて打ちもだれば、金之介も未だ了得に、戀には疎き少年なれば、同じく顔を赤くなし、何とも言はず繪を見てゐる。又たれでも此の開旦那様（紫雲の事）の仰しやいますには、年齢といひ容貌といひ、似つかはしい金之介とお政、自由になるなら夫婦にして、和合く暮させたら何様にか、嬉しからうと思はれけれど、金之介さんは當家の爲に、マア甥とはいふやうな者、母も元來本妻ではなし、此方からは言ひ出されぬ。思ふ様にはならぬものサと、何ごと申すと其のお話。貴嬢も亦何様かすると、金之介さまのやうな嬉しい、お方が、廣い世間にも澤山はおありなさい。彼様いふお方の御亭主になさるお方は、どんなマアよい月日の下で、生まれた人だらうと、一度ならず二度が三度、おつしやッたでは御座いませんか。ホヽヽ、何卒左様なりますと、數ならぬ私共まで、何様に嬉しう御座いませう。」ト、言はれて此方は羞かしさに、顔赧らむ緋櫻や、露持つ花の風情にて、差俯向けば金之介も、又言へ出でん由もなく、聞かぬ如くに繪を見てゐる。お澤は頻りに言ひ過し、年行かぬ身の二人とも、物言ふ氣も中垣の、[illegible]と、少し笑ひに紛らして、「さアゝ、なんと御馳走の準備にでも掛りませう。」ト、[illegible]、つと

立つて行く。金之介は顔を上げ、澤「お澤は誠に虛ッ吐きだネ。」政「何故で御座います。」金「夫れでもお前が言ひもしないことを、言つたなどと言ふし、また伯母さんの事も、皆あれは虛だらう。吾儕のやうな者を、伯母さんは、さア兎も角も、お前が左樣言つて吳れよう筈がない。何故といふに此の向島は、意氣な人や通人が、寄り集まつて居る處だ。吾儕等なんざア其の業中の、足下へも寄ッ付かれねえからネ。」政「そりやアどんな人が居りますか、ツイに他所へ參つたことがないから存じませんが、假令意氣な人があらうが、通な人があらうが、其樣なのは嫌ひで御座います。」金「そしてどんなのが宜いエ。」ト、お政の顔を覗き込めば、お政は莞爾、政「アレ、其樣に御覽なすッちやア否で御座います。」金「それでもお前が挨拶をしねえものナ、さア、何樣なのが好きだヨ。左樣お言ひ。」ト、擦寄り寄つて覗き込めば、お政は其のまゝ遁げもせず、政「ハイ、此樣なのが好きで御座います。」ト、思ひ切つて言ひながら、人指指で金之介が、頰の邊を些と突けば、金之介は思はずも、戰慄身に染む戀風の、やる瀬なきまで可愛くなり、抱き付かんとする處へ、ばた／＼來る婢女お澤。たれぞと二人は身を少し、離れて此方を打見れば、澤「お嬢さん、餘り何も御座いませんから、おでんを取つて參りました。冷めない中にけませう、お前樣も御一所に、召し上るが宜う御座います。」金「ナニ、左樣かネ。其樣なら直に持つてお出でな。何ぞお肴でもあると宜いが、慈母さんがお精進だから、お留守には却て

つて悪いネ」[illegible]「左様サ。不断から構はず、食べる〳〵と仰しやいますけれど。ネエ、若旦那さん、何様も可笑しなもんで御座います」[illegible]「ヤア、其様なもんだらう。然して精進物の方が、第一身體の養生にやア宜いと言ふことだ。ハヽヽヽ」[illegible]「其の代り、澤山取つて参りました」[illegible]「如何でもお澤が氣前を見せたノ。夫れでも此様なものが、近所にあつて宜いノサ」[illegible]「ナアニ、花の中はゞかりだからいけませんヨ」ト、是れより食事にかゝるなるべし。

第二回

斯くて其の後金之介と、お政は兎角隔しての、忘れやらずにはありながら、彼方此方に在るときは、目をもて知らす事すらならず、唯其の顔を見るのみを、時にとりての楽しみとし、儚なくも心を慰めて、十日餘りを過す程に、今日は殊更天氣好く、庭の櫻も満開と、咲き誇れたる花の色、四方の遊人集ひ来て、此れが門邊は市をなすほど、お政は兎角金之介が、俤のみ戀ひ焦れ、物思はし氣の有様を、母親はそれとも心は附かず、ほつ年頃の娘の児、彼の鬱症の病もや、出でなんかと案じられ、[illegible]「お政、お前は何だか此の頃は、酷くお顔付をして、元氣が落ちたが、何處ぞ鹽梅でも悪いのかエ。若し左様なら隠さずと、お醫者さんに診て貰ふがよいよ。春先は直ぐ腹の病が動くといふこつたから、早く

お菓子でも食べたが宜いヨート、言はれてお政は莞爾として、然ですネ、其樣な氣がするぢや御座いませんか、何だか嬉しく見えますかエ、母「左樣サ。何でも嬉しいやうだ。何とも無くばツ結構サ、些と氣晴しに此の頃習ひたて、琴とやらをお復習ひナ。あれはとんだ手が細かで、手琴の中では一番だノウ、澤や、其處の琴を持つて來て遣んなヨート、言はれてお澤は袋をかけた、嗜みの琴持ち出せば、母の命の否みもならず、お政はやがて、柱を掛けて、調子合はして彈き出す、折柄一叢簇然と、先を拂ひし花見の同勢、前よりは賑き眞紫垣、伸び上らねど緣先より、見れば是れなん大家の內室、又娘君にや眞先には、燃え出る許りの唐紅、同じ色なる打紐の、總は花よりまだ赤きを、結び下げたる對の箱、次に長刀その次に、結構善美を盡したる、蒔繪の乘物日覆は、是れも眞紅の花やかさ。朱の長柄傘差翳し、徐徐と練り行く其の行粧、御跡よりは檜網代や、鋲乘物さへ幾下となく、列を亂さぬ嚴めしさ。目を驚かす、ばかりなれば、紫は更なり琴彈きさして、お政も緣へ起ち出でゝ、暫時見送り、マアあれは、マア、何方さまで御座いませうネ。殊に綺麗で御座います。」母「左樣さノウ、彼の立派な事。同じ人間に生まれても、彼樣な結構な方もあり、吾々はおろか着替一つ、自由にならない者もあるワネ、ー、上を見れば方圖がないと、昔の人の言つたは感心。彼れでも亦其の御身では、不足に思召すこともあらうヨコート、語す折柄菖蒲革染の、袴をはいたる若黨が、若「頼んませうコート言ふ聲に、是れは何だと伴ばは

は御尤、お澤は其處へ驅け出でて、八「ハイ、何方かお入らッしやいました。」若「それは[illegible]中、八十島殿と言はるゝ方が、何やら御用の筋がある。此處の主人に逢ひたいとの事、[illegible]案內を、是れまで舁き入れても宜う御座るか。」と、[illegible]早[illegible]舁き入れ[illegible]代の、[illegible]人、裲の褄とり持つて、徐々上れば何事にや、[illegible]上座へとほし、紫「妾は此處の主人の尼、[illegible]て、八「オ、お前が、此の家の[illegible]へ[illegible]外でもない、[illegible]琴を彈いて[illegible]あらう[illegible]も、今[illegible]へ入らッしやると、吾儕を召して何[illegible]早う[illegible]姫君[illegible]は、[illegible]に、[illegible]

お政を呼んで、八十島に引合はせ、扨さて、段々の思召し、有り難いと申さうか、勿體ないと申さうか。お受けの言葉に困ります程。何も仔細のない事なら、忝い仰せに隨ひまして、不束ながら直樣にも、差上げますので御座いますが、仔細と申すは外でもなし、母子が斯うして居りますから、皆本店から一切仕送り、其の本店の息子の方へ、是非々々嫁に貰ひ度いと、番頭どちらからたつての掛合ひ。さやう致せば私も、金持と申す譯、是れも、早速承知の挨拶、致すべきで御座いますが、形は此のやうに大きくしても、未だ漸う十六歳。遲からお嫁入相談、何れ其の中挨拶をと、申して置いて娘にも、今日まで申し聞かさぬ程。併しながら此の節より、お館樣へ御奉公に、出すと申さば本店で、よも承知はしてくれますまい。よしや承知は致しても、それでは手前の義理も立たぬ。此處の譯をお汲みとり、宜しいやうにお斷りを、貴樣さまから願ひます。ト、母が言葉に初めて知る、思ひもよらぬ縁談に、お政は只管呆るゝのみ。八十島は頷いて、今一應、左樣した譯ならば、御奉公には出しにくからう。勿論姫君さまの御意にも、私から樣に申したとて、承知あるか否やも知れず。若し又其處に差支があつて、出されぬとなら、是非もないが、唯折々に十日二十日、乃至一月二月でも、館へ逗留に参るのみは、苦しうもあるまいから、其れも從う心得てと、御意のあつたは此處の處。何と其樣なら姫君さまの、御意の通り逗留に、上げるはなんの仔細もあるまい。願つてもない宜い御縁。ホン

ニ、此の兒が何樣なことゝ言ふに、雲雲は惚れ入り、言はしたない此の樣を、これまでの厚い御世、何で否と申しませう、御奉公と申すでなくば、何時なりと差上げます。」と、さう聞いて座敷も安堵し、ヤレ／＼、不意に押掛けて、種々お世話になりました。座頭さまもお待ち兼ね、些とも早く參らう。」と、暇乞さへそこ／＼に、供人促して表門に、ひらりと乘つて歸り行く。後見送つて、さて／＼何事が出來たかと、些との間斷も無したが、所謂お武家様な。斷ることといふは興名所の御十折。其に將軍さまの御連枝で、まことに高貴なお際だから、此れを御縁に末長く、お出入りすれば其の前にはか、親類までも皆の歳借て、お運びが來て上つたら、能く氣を附けて思ひの外だと、言はれる樣にしなさい。」と、言はれてお前は何とても、うしろめたうにもなく／＼と、與有の難い事は有い難いが、「それしか世た事もないお町の男、何樣したら宜いものか、一向様子が知れませんから。」それれはとた彼のお方が、引受けてやるだらう、只商賣向にして、知れないことは人に聞き、我慢といふ氣さへ出さねば、人の交際は出來るもの。玄関門は這入りのこと、何も構ふことはない。」斯うしてくれには左様といつてして、何彼のお方へ御申しやるには、本所から御出を、貰ひに來たと申しやりますと、此頭で御座いますか。」斯うすると、何だ、御目出た顔をしてる。」石原まで其の事を、話さうとは思つたが、左様急な事でもなし、たれことした序が有に、些と話さない事もあらうと、左計には來た日は

んだが、此の頃出た時番頭に、路で逢つたら一件に、何様で御座いますと催促故、未だとつくりと娘にも、言つて聞かさずそれ故に、御挨拶も致さぬが、他ではなし本店の事、なか／＼疎略には存じません。何れ近々御挨拶をと、言つて別れてもう五六日、左様々々捨てても措かれぬ義理合。今日は誰に其のことを、お前に言つて聞かさうと、思ふ處へ不意のお客。好い時にはよい事が、重なつてくるものだ。併し御奉公は結構と、云ふ様なものの俤の當坐、此方は一生の身の落ち着き。それと是れとは一ッにや、ならない。其處でお政、知つてのとほり、本店の息子喜太郎さんは、痘痕はあり背は低し、餘り見よい男でもない。畢竟金があればこそサ。彼が貧乏人で身なりも悪けりや、實に三文か所もない。男振ではあるけれども、何をいふにも分限帳で、五番目とは下らぬ家産、其の御新造になつて見れば、何一つ不足はなし。それはほんに諸侯の奥様より、自由が出來て、此様な辛氣な事はない。お前も定めて否とは言ふまい。直に挨拶とも思つたが、否々、併し若い身には、また種々の願ひもあるもの。親の威光で押し付けに、ならぬのは夫婦の仲。まア／＼篤り言ひ聞かしてと、思つて今日まで返事をせず、是れは此の頃急の出來事、豫て吾儕は金之介の、嫁にしたら宜からうかと、實は内々金五郎さんと、耳打をした事もあるが、爺父さん（文次郎の事也）や祖父（白翁の事）の思召しが何様あらうかと、金五郎さんも黙然には言ひ出し兼ねてまア夫れなり。胸に落ちぬと言つたは其の事。併し是れは

遠い事。差當つて本店は、何でも是非と厚い執心、夫れへ極めるが宜からうと、吾等は思ふが何様だエヽ、ト、言はれてお政は今更に、否と言はれぬ養母の義理に、金之介とて思ひ居れば、運ばすものから新枕、交はし事もなき中は、如何にあらんと危みて、とかう回答はあらざりけり。

清談若緑卷之一　終

清談若緑卷之一

清談若緑卷之二

東都　曲山人　著編

第三回

當下お雲はお政が面持、快からず見えければ、是れは定めて喜太郎が、男振の醜きを、嫌ふものにやあらんと察し、娘心の最もながら、斷りいふべき筋にもあらず。何さま勸めて承知させんと、思へばお言葉を和げ、「お政、お前は否だと思ふのか。夫りやァ若い時は私にしても、好男子を持ちたいと思ふは、當然の人情で、誰あつて悪いのを、擇り好む者はないが、其處に譯のある事さ。好いと思つてお互に、惚れたはれたも當座の中、ツイ一年經ち二年經ち、子供でも出來てみな。モウ其の時は好いも悪いも常になつて、嬉しいとも辛いとも、思はぬもの。左樣なつては内證の、善いと悪いで苦も樂もある。假令男が、業平か源氏の君のやうおやとて、内證に苦勞があつた日にやア、一向嬉しいことはない。好男子を眺めても、空つた腹は滿れぬ道理。昔からよくいふ事。お前と夫婦にな

みなさいば、手鍋提げてもと厭はぬとは、たゞ人情の至極をいふのです。それも一旦行掛まで、連つた人の
ことならば、手鍋はおろか諸共に、抽包しても厭はぬが、女の道といふ目だが、お前は在ばいふ人も
なし、見掛の違いある者があるは、無理ではないがたれは雛の、年の行かない娘だ、生まれ付とは言ふ
ものの、在藏の時から手に掛けて、思へば凡そ十二年、厳しく躾けても育てたと、是れまで育てたる面
だものを、目惚かれといふものか、縫へとつくりと答へて、女体ともそうと思ふのか、まことに困却もし
てゐるんから、その澤も、左様ではないか。と言ひ掛けられて思ひよらねど、お澤も倶に執り成して、
申しますに、御番頭が勤いとのだそうで、其方此方から種々に、仰しやッてで御座いませうが、御本店は
また名前、何しやる通りのなかもの、御本家といふ中に、また近頃はお地面も、餘程殖えたと申します
何でもあと八十萬兩も御座いますから、ご何様しても、その様なことではないます。まだ隱居さまの方は
申、吉兵衛の頭でありましたが、にわかな根を遣うたといふて、やうにいたしましたれば、なつたで、の
皆下男といえますねて、其處へ入らしもやれ立御番頭なし、旦那は諸方に目には御寧いませんで、いけ、と
やれとご他のことでいれし、お嬢さんにたれとしに通りに御座いますか、切に肥けへた
ことは、我盡らしく言はれもせず。さりとて思ふ人あれば、それを見捨て餘所外へ、嫁入るは猶とて
心に済まぬ、とやう村落ちかし兼ねて、唯一言も物言はねば、殊に又外に、心あるのか

るに、たとへ一ト夜量り難ければ、よし夫れなりに其の日に過しは、斯くてお政は千萬の、黄金の中に身を置き、よし假令榮耀に暮すとも、思はぬ人に思はれて、何の浮世の樂しみに、朝な夕なを送るべき、とは思へども義理のある、母の命のいと重く、背かば忽ち不孝の罪、九ツの世に換ふるとも、償ふ時はあるべからず、いかゞはせんと胸一ツ、とつおいつに心も決せず、たゞ其のことのみ心に、氣も結ぼれて物事の、手には付かねど其の容子を、見するもやはり不孝ごと、氣を取直して常々に、さあらぬ體にはもてなせども、思ひの中にある時は、其の色外に表はるゝ、喩へに洩れず何となく、快き樣を見しより母は、聞かまほしいと思へども、強ひて勸めて若しも又、病の種ともならんには、是れも又詮なしと、思へば其の儘是れを言はず。五六日も過す程に、八十島よりの使として、若黨婢女を連れて在人、乘物を率ゐ來り、先頃約束申せし通り、迎ひの人を差遣はす、女兒御を逗留に、上げらるゝやう姫君さまの、御意なりと次の口上。紫雲はお政に其の由言ひて、「歸宅も今度は朝歸りで、」とんだ好い都合であつた。其の調度や何や彼や、取落しのないやうに、取集めて行きなさい」と、迎ひに來る下部等には、酒など出して是れを饗應し、急いで準備も調へば、幸とて「暇乞に打寄りて」、彼の供人等に誘はれ、紫雲家の奥へぞ歸りける。斯くてお政は上様へ、出でしは實に初めてなれど、元來怜悧しき生まれなれば、馴れし昔より中々に、氣轉も利きて姫君の、一段御意に叶ひしのみか、老女八十島

を始めとし、お附の女中上下共に、皆々お政を愛で思ひ、贔屓になして疎略なく、かれ是れとする程に、お政は當て宛だたる、心の裏も和ぎて、甚染重なる女同士、憂かたき事は更になく、笑ひて暮す日の重なれば、斯くては長く此の御殿に、居ることそまされと思ひけり。此處に金之丞が弟お竿の腹なる、金次郎は今年十三、髪頭まゐりして若君の、お伽の列に召し出され、朝夕御殿にありとはいへど、此處と彼處に隔たりて、常にはお政も見る事なし。此の若君は鶴君の、御弟にてましませば、御年も漸う十一にて、表へは未だ出で給はず、然るに出でて鶴君の、御殿へ遊び給ひ、女中達を相手にして、或は目隠し雙六何くれと、戯れ遊び給ふ時、お側に居るもの[illegible]、其中の者は入る年齢にあらず、金次郎は十三なれば、差合なしとて若君の、[illegible]金次郎が、お供させることはなし。是において圖らずも、お政は戀しき其の人の、弟に逢ふは猶其の人に、逢ひたるの思ひをなしつゝ、餘所ながら言傳して、聊か心を慰めけるか、ある日金次郎は何思ひけん、聞きて[illegible]り、是れを食べて見なされ[illegible]、金次郎さん、お羨ましい[illegible]持つて來て上げようか[illegible]ろ、そして此の[illegible]しや、是れは餘り不躾だが[illegible]

へ入れて、晩にお下りの時兄さんにお届けなすッて下さらないか。多分あらばお銀さんにも、上げたいけれど、左様はないから誰にも無言で、兄さんに密と上げて下さいヨ。」銀「例でも私は兄さんの、お部屋へ寝ますから、其の時に上げませう。」政「何卒左様して下さいまし。お前様にはまた今度、何ぞよいものを上げませうネ。」ト、結には砕く處女の心、看官宜しく汲み分けて、其の切なるを察しねかし。落花に心ありけれど、流水さらに心なし。お政は人に知られじと、聲を低うし密語きて、恃むとすれど三次郎は、また情合知らぬやうなる髪、他に物など恃まるゝは、何となう心嬉しく、常より大きな聲を出して、次「然に、誰にも言ひはしません。賦せる時に之を出して、向島のお政さんが、密と上げると言ひだと、申したら宜からうネ。」ト、言ふにお政は手をもて防ぎ、政「ア、夫れで宜いから、其様な大きな聲で言ひなさんな。人様に聞えるから。」次「お頂きのお菓子を上げるのか、聞えても宜いぢやアないか。」政「夫れは随分宜いけれど、ア、モウ宜いヨ。食べてお仕舞ひなら早く奥へお出でなさい。」三「ドレ、奥へ参りませう。」ト、起ち行く後へお侍女、お政と同じ年齢なる、いづれも元氣な處女達、驟然來つて、口々に「お政さん、お羨ましう御座います。唯一日お前様の身になつたら、何様に嬉しからう。」政「オヤ、何を仰しやるのだネ、皆さんお氣でも違ひはしないか。」●「左様さ、餘り違ひて居るから、大方氣でも違ひませうヨ。」政「何だか一向解りません。何様遊ばしたので

御座いますよ。」「さうですネ、斯様で御座いますネ。お小姓の金之介さんは、好男子だと奥中の大評判。夫れだから彼の方の、紋所を附けた簪を、態々打たせる人もあり、着物に染めて着る者もある位さ。」「夫れをお前が其の弟御の、金次郎様に何か頼んで、衛と上げると云ふ日は何だか、皆さんが何様にか、羨ましがつて肖りたいの、何の彼のとお言ひだよ。」「ヘイ左様で御座いますか、御存じあるかは知りませんが、彼は私の親類で、幼稚い時から兄弟も同様にして育ちましたから、別に好男子だとも、何とも思ひは致しませんのです、、、、彼の人が其様に好男子で御座いますか、見馴れて居ては気が付きません。」△「其様にしらをお切りでないヨ。従弟同士は鴨とやら、家鴨とやらと言ひますから、大方卿もお仕こみだらう。確かに話して御聞きで。」「ネこ夫れをお言ひでないと、皆して燥ぐのさ。」「是れは、何だ騒をしいネ、まア、お静かにしてお話し。お前方の様に言ふと、岡焼餅とかいふやうで、見つともないぢやアありませんか。」「[illegible]政さん、羨ましいネ。」△「彼様な人を三日でも、良人にしたら夫れ限りに、死んでも思ひは残りませんヨ。」「、、、皆々口喧しい。各々の働きで、良人にでも情合にでも、して見る外はないぢやないか。」「併し皆さん其のことを、[illegible]の大きな声でお言ひなさるな。御存じの通り[illegible]ことは、此のお館の厳しい制禁、既にお前方も[illegible]、女中の中に不[illegible]たつて、男は切腹、女の方は[illegible]下へ下

けて一生押籠めにする、こりや怖い事ぢや」ト、責められして元気も挫け、皆々起つて奥へ行く。

第四回

世間萬事儘ならず、因つて浮世の名もありとは、昔の人も既に言へり。其の儘ならぬ所以は何ぞや、皆銘々の慾に因れり。慾だに思ひ斷つ時は、儘ならぬ事絶えてなし。然はあれども樹下石上の、敎への道に入るといふ、僧法師すら尙色慾あり。況して凡夫においてをや。此處に紫雲は其の初め、金之介が育ち振り、人並々に勝るならねど、お政をこれに娶合はせんと、金五郎には物語れど、流石に養家の義理もあり、頓にはたれも言ひ兼ねし、過ぎしある程に本店より、是非とて貰ひかけられては、否むことさへ中々に、僥倖よしと思へども、一旦假名屋へ話したる、言葉もあれば直物には、挨拶もしかねたと斷うと、思案の折柄又再び、催促うけては捨て措かれず、まづ當人の胸を聞き、其の上の計らひと、言ひ出せしが何とやら、お政は更に回答もせず、嫌ふならんと察しても、屢責め問ふべきにもあらず、気を揉む中に新吉より、迎ひ来りて此の程は、彼の奥御殿に逗留なり。はや近々に呼び戻し、意を聞きたれど、下女のお澤と物がたり、見やる向うへ、すたすたと、来るは本店の番頭にて、出入助といふ白髪老爺、小僧一人を供に連れ、「亜ハイ、御免なさい。」ト、言ひながら、づつと通れば、

まア、、是れは出久助さんか、能くお出で、、と、宗雲は顔を顰めて、、ますく、一寸お聞きんでう

い、嘴をすれば学上やら、今も申して居る処、、定めてお咳の一儀でお出でなすったでありませう。早速否やの御返事を、致す筈でありましたが、、斯波様のお邸から、彼な強い御督促で、三日にあげずお召しなさる。大きか否上と申されず、貴は実い事ん見皆ふが、病人の身の事と、延引にしてたけたすのも、、失れだから其の一儀も、此の頭取は許しましたが、了簡に事が行かない、誰、恥かしいのをうつとした、挨拶もまだ聞かぬ中、確をお召して、病上り、而も又た掃りませんで、ならうならぬ、少し、待つて居て下さいまし、、如何と思つてめに何もなけれ、何卒をと、と次第へ、はて、能へず、あた、一つ一本鉢を、にも真は何だ、失礼と、一首時も濁に剛ね、、能、随つて御安心なるしやれに任いてお節の身の、事頭しますわやゝかとか、、隠居さんお前蔵を、そんつた行灯で斯う見をと、下女不可を生に言て、不自由でやして置きますのは、、前に由来の仕る所、其の愉安で其の愉子も、、一方ではれて障だりう、在は何で見りや、、今度の一件其の住み好き、、いさうに当年と柱援なしては言ではねて、、今までの逃れ一年は、、如論其の位でとと、、お倩債に同居をさすなお前さんがアれたけれど、、許しなに廉の掟か、心あ為たと言ふのだ、、否ならそで就然たるのかて、其の一進も保しておか宜い、何故と言ふ宵うか目、一言いたので、、否なそんな用達れた相談、最低要引く、

だけ思はくが悪いネエ、左様ぢやア御座いやせんか、ト、途中で少し造酒の加減か、例に變る高調子に、主客とも何やら氣の毒顏。菊「ホンニ、左様で御座います、便々と引つかけては、旦那の御機嫌も悪い筈、併し最初から申す通り、彼も取つて漸々十六、未だ十五も同じ事で、世間の事はちつとも知らず、餘り子供で御座いますから、まア三月でも半年でも、他人の中を見せたらば、些とは人への應答位も、出來るであらうと夫れや此れやで、實はお館へ上げますが、否だから挨拶が、遅いのだと思召しては、夫れは大きな間違ひで、仰しやる通り何から何まで、御恩になる本店へ、私が請ませんせん、ちつとながら當人に、とつくり承知致させます、御挨拶も出來かねますから、明日は早速呼びにやり、申し聞かして直様に、お返事を申しませう、ホヽ、ニまア、お氣の毒ナ、夫れ程のお急ぎとも、思ひませねば大きに延引。豊「何だか知らんが若旦那が、何様だ〳〵と毎日催促、餘程惚れて御座ると見える、ハヽヽヽヽ、然し夫れも無理はない、吾等の様な老爺でさへ、實はころりと山椒味噌、一日嘗めたい氣の出るお孃、他人の空似も凧子の因縁、お前が彼様な盛りには、又一段と其の昔が、今目の前に見える様だ、ハヽヽヽヽヽ、ニト、一杯機嫌、菊「出久助さんが又お株で、嬉しがらせをお言ひなさるョ、昔の花の櫻木も、枯れては枝の折人もなし、氣樂なもんで御座います、コレ澤や、お茶は出來たか、野暮なものだが、唐饅頭の貰つたのが有つたッけ、ニ、ハイ〳〵、ニト、お湯が沸きまし

たし――まア／＼、何もおかまひなさうんす。其れより足元の明るい中、出掛けた方が餘程ましだ。また
んなら何卒一日も早く、挨拶なしてお歸んなさいまし、一寸鶴臣さまへもそこ／＼に、出久助は歸り行く。余
實はお澤に打向ひ、其後の通りだから困り切るのさ。お歳に言へば何か不足か、否さうと確めて、
聞いて居るのも忌々しいなあ。さうかと云つて他とは違ひ、それとも斷る譯にもいかず、何故なら
父に否かれたらう。其の様が氣に入らないのか、但しは他に望みがあるのか。其の左様は、私にも解
りませんが、先頃黄鶴か金之介様の、嫁にしたいと仰しやつた時、誠に宜敷く御座いまして、何と澤や本
當ならうか、何し私の様な者が、貰つては下さるまいかと、仰しやつて下されましたね、又其れ程なら
するのですまいか。いかれより他に、私の、心配には御座いましたよ。喜ん、此様な左様の方な、有
ニ左様でも無れこいまし、夫れて、有用の事は、とう／＼三郎へんにすつことになつて、一濟
たらない。其の其様に喜び出たのか。――まア／＼何れ呼び寄して、確りと聞いて見よう。一ト、たれ
より文を認め置き、翌朝仁助といふ僕を、遣はしたれど今日は奥に、お客がある故、臺所へは参らず、明日も
またお待ち、明後日は書君さまの、御誕生日のお祝ひと、種々な名書を紛へ、お使いは出さぬと断は
けれ共、是れではならぬと、今度は直ぐ下宅なれど、八十島に造れたものを、主宮家と云ひて、
靈を呼び寄して御行き、御日にて其の由を、言へれば八十島も、此子を痛むして…を通し

し、今日はお客で取込み故、後程お目に懸ります、まづ〳〵子舍にてゆる〳〵と、お政と話しなされませと、口上がてら奥の方より下るお政は夫れと見て、能うこそお出でと一禮なす、時に素其は傍へ寄り、お政を招きて聲を低め、「態々來たは他でもない、本店の縁談一條、昨夜も是非と出久助さんが、何樣に吾儕を極め付けたらう、辭し何樣もお前の腑か、確りと解らないから、まさか聞かずに返事も出來ず、猶豫に今日挨拶を言ひ延ばしたが、サテ何樣だヱ、何も我儘に否の應のと言ふ譯ではあるまいが、ト、問はれて何かもぢ〳〵なしが、「何卒私は緣付かずに、此の儘に御奉公を一生いたしたう御座います」、「ソリヤ、夫れは能いお心がけだが、夫れでは吾儕は本店の、樣々を受けて何樣ならうと、夫れには構はないと云ふのだネ、アレ勿體ない、お前さんに構はないと申すことかえ、其なかネ其樣なことを言ひなさんナ。夫れは成程御奉公も、結構で宜からうが、人にもよる時にもよるのさ、何程年がいかないとつて、餘りな不料簡だネ、仰つての通り他に子はなし、骨を折つて育てれば、何卒吾儕も死水を、取つて貰はうばつかりだが、主人持の身になつて、親の死水が自由自在に取れると思ひなさるか。勿論親の病氣といへば、何時でもお暇が、出るものと聞いては居るが、其處が主と家來なら、出ないと言つても詮方はあるまい、まア〳〵夫れはそれにもしろ、出久助さんの口上に、言はないとても其の通り、畢竟吾儕は本店の、お蔭で樂におくる身の上、其の餘徳で育つたお

前、下女婢女に使はうと、言はれても喉は立たれぬ。たれを立派な嫁にしようと、言はれるは身にとつて、ちつとも不足はないぢやないか。」トいふたらお前は何様しても、本庄の嫁になるのは否ヂヤエ。」「否と申しては御座いませんか。左らう事なら御奉公、致して居りたう御座います。」葉「イエ、たれは決してなりません。なるくらゐなら此の間、重昌様からの御意の時、直にお受けを申し上げるわ。」「然らば何様なりと、お前さんの宜いやうに。」ト宜いやうになら本庄へ、直に嫁付きなさい。」ト云ふことは言へぬ目にもの頭、伸び向いて葉と試みに、婚礼来る八十島が、今晩はく、若殿アノ頭のお客にはもの札、今仕様好いよ都合ひ合つて、お目に懸けに致しました、婚礼ばとうやら此の度の婚付、何なる義理はあるさうな。」トいつては何様と仕方ない。此の度と祝ふ上婚礼は、付くに付いて御奉公、致したいとの談合、どんなれはとれ此なは事幾、お嫁さまにもお賦上、直に此日其のやうに申したれた心持ないので、それ御前に帰ると、婚礼せねば大切と、その席で上乗ちやうど宜い潜しい事ならぬ御様にはないのか、尋ね事ならば[illegible]に上ゑか宜い。」と、お政様相こんに、何と御意ある[illegible]ト、気不付けられて[illegible]仕合の品取り揃へて、来ないではに八十島か、八上ともの序に何様日[illegible]お縫ひが富んで帰るか宜からう。二日[illegible]事あるまい。生其の話で、挿のさすれば、随分宜しう御座います。」ト、たれ[illegible]の[illegible]に種め、[illegible]中頃にも帰

近しと、紫雲は、それぐ暇乞して、向島へと歸りける、

清談若緑卷之二 終

清談若緑巻之三

東都　曲山人　著編

第五回

花と見し間も今は青葉でゝ、あの花にたゞ降る雨は、夏とは名のみ肌寒く、花の衣も更衣て、金之介は唯一人、下宿の机に打凭れ、雲立覆ふ大空を、打眺めつゝ独言、ア、今日も又、降り続いたゞ一の鄙客も鳴きさうなもんだが、誰も聞いてると言ふ話もない、夫れはさうと奥御殿へ、お政は上つて居るとの事、此の頃も金次郎に、お菓子などを持たして寄越すが、さぞ心ざし嬉しいか、彼様な子供に物を頼んで、他に知れやうが能くもない、其の事を一寸一筆、言ひ遣りたいが、其れもまた気の毒だ、此の頃阿島の家の口へも、何様か木戸で言つて居ると、僕を催促するてうため、何様なつたか知らん、明日あたりは何様か一寸、阿島へ出かけて、様子を聞かう、阿島も正直が、情色になつてゐると云ふが、なかなか、何でも構はねえやうなもんだが、聞いて居る今、余り按摩うれ

えつへト、顏を皺く其の折から、咳ばらひして入り來る爺父こ金五郎は娘のお銀に、煙草盆を提げさせて、ずつと這入つて其處へ坐り、「爺さん何だが今日は、退屈する日だノウ」「それといふが日が長いからだ」「時に「併し此間に降りましたと、世間が狹いやうで御座います」「爺さんトき、金之介や、去年の暮だつけたが、向島の伯母さんが、お政を其方の嫁にしたいと、言ひなさるから如何樣にも、混和で容貌はよし、身分はありませんが、何樣もお前さんが小三の親族だけ、「イヤそれとも言ひ出し難い、何で折が有りましたら、爺爺や祖父にも話をして、貰ふやうにしたいものだと、言つたきりで折もなく、今日までになつた處が、今朝其方は明番から、歸らねえ時伯母さんが來て、さて先頃お政の事を、内相談もしたつけが、それもまアお互に、急がぬ事と夫れ儘になつてる處が、本店から此の頭取衆つて、是非貰ひたいと番頭から度々の掛合ひ、此方へ確り極めてあれば、斷るに仔細もないが、左樣でないから義理盡でも、何分否と言はれない。夫れに就いて昨日も態々、御殿へ上つてお政を取極め、今挨拶に行きかけだから、鳥渡耳打もして置きたし、また去年の暮の相談は、僅の内輪の徒話よ、然にしてお吳んなさるやう、言はうと思つて來たといふ事、元來此方はまだ何處へも、言ひ出した譯ではなし、此方から見りやア、本店は町人でこそあれ大分限、それはお政が倖せだと、挨拶して返したが、先頃鳥渡其方が胸を、聞いた事もあつたから、それで話して聞かせるのだ、左樣思つて居たが宜い」ト、

叔父の詞に金之介は、ハイ〳〵畏まりました、ト何もなげに挨拶は、する物ながら心の裏には、聊か解せぬ今度の縁談、とは云へお政は貰はぬ娘、言ふに言はれぬ義理もあり、また不具に生へば、其の身ばかりか伯母御まで、一生の身の為と思つて左様いふ事にしたか、ハテ何にしても此こそ、[illegible]とはいひながら、心の裏では[illegible]、嫁と思つて居たものを、と、今更乍ら[illegible]べき筋ならねバ、心に悩み[illegible]何気なく、[illegible]、[illegible]お政が使に金左衛門は、立つて其の身の居間に行く、後に残る金之介は、大空を打眺め、[illegible]なる世と二度三度、溜息吐いて居たりしが、忽ち心に[illegible]し、[illegible]我から迷ふたり、男女の縁は[illegible]、思ふに往生ぬ世の諺、其の上此が[illegible]、[illegible]小姑両人、皆善人ではありながら、嫁の身では[illegible]、萬一[illegible]つた時には、[illegible]の思を受けた、伯母御にまでも苦労を掛け、それより[illegible]本懐へ、嫁入するのは[illegible]、[illegible]の、[illegible]ちや〳〵と祝言、[illegible]しきまゝに先々の、事まで思ひ廻らして、[illegible]愛折する間に日は暮れて、[illegible]けれバ何事の、[illegible]

ト刀を、捧げたる儘に驅け來り、次「ハイ兄さん、只今歸りました。」姉「オヽ、今日は些と遲かつたネ。」次「アノ、お奥にお狂言がありましたから、若樣のお供して、今までそれを見てゐました。」姉「ハ、ア、夫れやア面白かつたらう。」姉「お狂言は濟んだのか。」次「イヽエ、まだ濟みはしませんけれど、日が暮れたからお歸りと、皆さんが仰しやるから、お暇を頂いたので御座いますト、言ひツヽ、兄が袂の側へ、すり寄りて聲を低め、次「兄さん、アノお政さんがネ、これを衞と上げておくれと、お寄越しなさいました、今日のはお菓子ではないやうだ。」ト、机の上に差置く一封、金之介樣へ御存じよりとの、上書を見て眉を顰め、金「アヽ、慥かに請取つた。併し何樣も惡いこつた。」ト、言ひツヽ、四邊を見廻して、金「コウ、金次郎や、今度からお政さんが、此樣なものを頼んでも、斷つてしまひなヨ。全體此の女中衆と、物の遣り取りなんぞをする事は、お館の嚴しい御法度。併しお政さんは御奉公人ぢやアなし、殊に此方の親類だから、他の者とは違ふけれど、人の目にかゝると其の時は、お前が何のかのと言はれるから、もう取次をするのではないヨ。」ト、たしなめられて稚き心に、譽められた上褒美でも、貰はんと思ふ當が違ひ、悄然として退つて行く。偖金之介は其の文を、披いて見るに始めには、時候のことなど認めて、

扨は私事今迄に、こせうる御好誼もあらずして、斯樣のことを申さんは、烏滸とや叱りたまふべけ

れど、思ひあまりに堪へかねて、筆をはこばせ参らせ候。不束なる身に候へど、豫ては君のお傍に一生傅き申さんと、楽しみ居りし甲斐もなく、このたび穢土の本店より、迚ての縁なく、因事も、断りかねて近々に、彼處へ送り候との事、元来義理ある恩深き、母の事にて候へば、否まんやうも候はず。然りとて儚なき身ながらも、一旦思ひ詰めたる心、何所に見なして他人に、添ふことのなるべきや。とても此の身は埋木の、花さくべきに逢ひがたきとは、此の頭髪[illegible]申し候、[illegible]に必ず迎ひの人も、参るよしにて候へば、今宵の中に[illegible]、世に在る人の数に入りても、心[illegible]ふなて通さんと、片意[illegible]ながら思ひつめ、心に決し候へど、是れまで数多の年月に、大恩受けし母への不孝、よしや彌勒の世となるとも、其の[illegible]、[illegible]いと深き無間の苦悩も、君ゆゑならば何かは厭はん、さりながら只[illegible]一度、[illegible]身にて、[illegible]、[illegible]されまこ、あらんとに辨へながら、その譯をだに申さずして、身を捨てたる後の[illegible]、[illegible]は君に申すべきを、たゞ狂氣と言ひなされ、[illegible]死するが悔しさに、認め殘しまゐらせ候。あはれ[illegible]思召し出されし時に一遍の、御手向を[illegible]、[illegible]苦患も忘れ申す[illegible]
かしこ。

と、讀み終りて[illegible]にとつきり、是れはまた思ひもよらぬ、女心は[illegible]に、[illegible]いと聞いては[illegible]

ど、死ぬとは餘り短氣なこと。ハテ、何樣したらと腕を組み、暫く考へ居たりしが、ア、隠便御沙汰で、まだ御締りは付かずにあらう。然らば密と呼び出して、人知れず意見を加へ、無事に濟むやう計らふか、斯うなつては一番近道、向ふに居る事なら、其樣な不料簡をさせない樣に、手當の仕方もあらうけれど、何を言ふにも奥御殿、外の人には言はれもせず、捨て措いては今宵の處、斯う云ふ文を寄越す位で、なか／＼無事では明すまい、困つたものと今更に、逆倒しき心も打亂れ、袴引つかけ同役の所へ行くと僞つて、案内知つたる奥御殿の、庭口近く進みより、密かに樣子を窺へば、まだ狂言の最中にて、笛に太鼓にいと賑はしく、さて此の間に何樣がなと、見やる向うの緣端に、一人居るのはたしかにそれと、矢立抜き出しさら／＼と、二三行ばかり認めたる、紙へ小石を押包み、發矢と投ぐれば過たず、膝へはつたり驚き拾ふ、折節雲間の月の影、翳したそれと點頭きつゝ、庭口指して徐々と歩行み來るは是れぞ是れ、別人ならぬお政なり。

第六回

夫れと見るより金之介は、傍に忍び聲を低め、ヲイ／＼、お政さん、俺だヨト、言ふにお政は嬉しさの、飛び立つばかりに傍へ寄り、政「何でも今の書付は、お前樣に違ひあるまいと、嬉しくて其

の時に、どつきりした胸がアレ此の通り。何様して此處へ來て下すつたのだエ。一體何様して又お前

で、此處は滅多に、男の來られる所ぢやアねえが、御狂言があればこそ、實に今夜は丁度宜い間だ

時に、先刻金次郎に、持たして寄越したのは慥かに屆いたが、お前も呆れた不料簡だナ。覺悟を極めた

とは、死ぬといふ事かエ。何も私が一世かけて、約束でもしやアしめえし、勿論[illegible]冗談半分

に、[illegible]になつてまだ[illegible]の事は、言ひもしたけれど、お前も出世前の身、[illegible]一生安堵といふ

場になつて、由縁もねえ[illegible]心中立つて、死んだ處が始まらねえ。お前の眞實な心意氣は、十も

十も解つてゐる。他に何にも言ひ分はねえ[illegible]、伯母さんの言ふ通り、本町へ縁付きなせえ。縁があり

ア又お互ひに、逢ふ時があらうぢやアねえか。俺の方ぢやア、妹だと思つてゐるから、お前の方ぢやア不足でも、兄

と思つて[illegible]が宜い。たとへ本當の[illegible]になつても、其の[illegible]奇麗に別れて、兄弟分になりや

ア、[illegible]お前と俺の仲に、些とも臭えことはなしか。それで何も彼も宜いぢやアねえか。左樣

でなくて、若しも[illegible]、不慮な事があつては濟まねえ。何ぞ[illegible]、俺は思ひ切つて

此處まで來た。決して馬鹿な不案じをして[illegible]

て行かんとすれば、出引きつて[illegible]並み[illegible]お前様の[illegible]

も、其の位なことは知つてゐる[illegible]まだ其の上にも[illegible]一層思ひ返して[illegible]手前自己の心

をば、此つて見ても諦められず、たゞ一筋にお前さんの、事許りが氣になつて、本間の木の字を、聞いてこも身體が慄然するほど、たとへ是れでも何樣爲めて、行つた處が一晩も、落ち着いては居られまい。左樣して見れば益もない、恥を掻いたり人騒がしに、夫れより一層宿へも歸らず、此處で死んだら何樣した譯やら、鐵も樣子の知る人はなし、貴方毎でも逢つたらうと、言はれたばかりでツイ濟むこと、罪しお前さんにまで、左樣思はれるは遺憾しい、夢になりとも知らせたさ、夫れで行つて上げました、最早是で上百萬だら、御意見なすつて下すつても、生きてゐる氣はござりません、人が見てはお邪魔になるから、モウ／＼彼方へお出でなさい。其の代りには貴方の口から、お題目なり念佛なり何卒手向けて下さいまし。」ト、言ふも哀れな涙聲、了得にこれを聞き捨てゝ、行くに行かれぬ男氣の、諸はなしとも今一度、言はねば晴れぬ胸の中、思ひまはせば戀しさの、身に沁む許りに覺えつゝ、お政お前の樣をと云へ、聞きてしみ／＼、お前も強情だノウ、夫れ程までに死にたくば、勝手にしなといふ處を、最々くいふのもお前の爲め、思ふ故だから能く聞きな。全體女は三從といつて、親に從ひ良人に從ひ、年が老つては子に從ふと、本にも書いてある通り、只夫れを手前の我儘に、まづ第一親に從はず、夫れだつて良人にも從ふめえし、子とたりやアなほの事、左樣して見れば全然、女の道に背けた罪、何樣もお前俺だつて女房にやア持たれめえ、「エ、」ト、見上ぐる眼の中に、涙はら／＼、宵月

の、またも曇らん其の風情。如何はせんと金之介は、心一つに置き兼ねて、途方に暮れたる折こそあ
れ、⋯「此處に居るのは確かに曲者、其處動くなツ」ト、言ふ聲に、振り[illegible]向けば、各々に[illegible]を突
きたてて、前後を取卷く、[illegible]、[illegible]是れはと金之介、擦り寄り[illegible]と、[illegible]も
寄り付けず、[illegible]見れば女と唯二人、ヘン甘くやりをるな。お狂言の[illegible]、[illegible]とした[illegible]
を、引き出して濕りと、一文いらずに樂しまうとは、イヤ[illegible]、[illegible]
よしを、奥詰衆へ言ひ上げさッしやい。二人の奴等は逃さぬや[illegible]
たれ、大音聲、[illegible]て[illegible]、[illegible]と開き、[illegible]
ふ[illegible]、[illegible]、[illegible]居るとこ[illegible]
此の奥[illegible]の内は、何事[illegible]、[illegible]
其[illegible]て居[illegible]、[illegible]
らず、逃れんとすれど其の[illegible]、[illegible]其の陰なし。婢女どもは雪洞を、前後より差付け
て、[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]
何樣か、顔は常々見たやうなが、まァ兎も角も二人して、此の暗がりに[illegible]して居るは、聞かでも

しれた不義淫奔、お家の厳しい法度とは、知つてか知らずか何にしろ、表立つてはむづかしい。ことはいふものの、お政どのは、御奉公といふではなし、かれの御殿へ逗留客、作法の通りにいやとも言はれう、男は元より侍等の、成敗すべき係りもおやないか、女の方を宥免の、計らひをするからには、男許り表へ渡し、厳しくするのも不便な訳、一體お館の掟といふは、侍分と奥女中が、不義を致せば男は切腹、女は一生押込と、是れは先規の御法なれど、今日は通りの逗留客、男は只だお百姓か、如何にも下賤な者であらう、左様して見れば其の罪を、減じて何様なりと、見遁す折、お政は恟々顔を上げ、政「是れには少し様子のあること、全くもつて淫奔を、いたした訳ではござりませぬ」ト、言ふ尾に傍いて介之介も、恥かしながら晴がりへ、顔を反けて、三「お政さま、只一言其の訳を、申し上げたうござりますが。」ト、言はせも敢へず八十島が、八「、、其の言訳、聞かぬ／＼、瓜の畠へ足を入れれば、取らねど言うても人は許さぬ、縦令何様した訳あらうとも、男の来られぬ御場所といひ、二人斯うして居るからには、何を證據に不義でない、淫奔でないとは言はさぬ。彼是言譯される間、尋常では濟まぬやうになる。見れば若いに親もあらう、また祖父さまもありさうな。却つて事がむつかしく、年老までに折檻をかけ、夫れが本意でもあるまいぞや。オ、、二人の者の言譯には、彼處に丁度幸ひな、池に繋いだ／＼小舟、是れが矢張彼の岸へ、早くも渡る渡り川、出雲の舟にかたどつて、あ

らゆる罪もしも波に、流れ落せばまた何時か、常なく眞如の月を見る、時節もあらうコレ若者、能く
心得て此方へ[illegible]、心ありげ言葉の端、嫁女共に指揮して、徐々歩めば今さらに、二人は何
と惑澤の、不時の悟りに氣も轉倒、何とも思ひ分かなく、彼方に附きて小腰を屈め、行くとはなし
に池の岸、昨日の雨に水増して、[illegible]、[illegible]に入れ[illegible]
前の若葉に風わたり、氣色も凄く見えにけり、八十島二艘を指さし、八「サア、二人共今言うた、弘
誓の舟はこれ其處に、纜を解て[illegible]、二人が身の沈落、掟を立てて冥土
の旅路、[illegible]の舟の中に、[illegible]
て、簾し見れば八十島が、搗を籠めし紙包、[illegible]たも手に取らず、嫁女共は立ちかゝり、
纜を切り解けば、舟は忽ち岸邊を離れ、水のまにまに[illegible]る丶先へ、彼の八十島が指揮にや、以前の
若い四人、[illegible]、[illegible]は落葉の夜嵐に、閃く如く搖り下され、
に[illegible]富國に、[illegible]の名も[illegible]東に[illegible]、其[illegible]
[illegible]何にこゝるゝ[illegible]

清談若緑卷之三 終

清談若緑二編叙

明の謝肇淛が語にも、美人は必ず福ひなく、また多くは薄命なり、若し是れをして友達に、天年を終らしめば、人得て事蹟を知る事なしと。嗚呼昔人も亦斯く言へり、蓋し我邦の小説にも、多く美人に折磨をさしたり、さてこそ読む人哀れがり、涙を流してこそ悦ぶ。實に人情の斯く曲り、和漢古今希有事に故に作者はかかる様子を、讀るに人の腸をちぎる様に作れ、されど其中の邪の、三段程の必要利なり、此をせんとすれども生憎に、可笑しき趣向を交はるめり、然はあれども昔気質に、善を善とし悪を悪とし、拙き中にも讀む人の、密かに諫むる心を書あらしは、看観る者の用心にて、自然なる規矩あることに、能く〳〵味ひ給へと申す。

曲山人敬題

清談若緑巻之四

東都 [illegible] 著編

第七回

男を暁得して、好色の道を知れば、少艾を慕ふとかや。是れ常人の[illegible]其に假名屋の丈之介は、[illegible]に心な[illegible]しかぐ〳〵と言ふを聞き、忽ち心を[illegible]して、思ひ[illegible][illegible]歎くなしれば[illegible]つゝ掟を[illegible]、縦令此方は[illegible]下悪が、操ありとも人は許さず。彼の八十島が[illegible]、[illegible]倘思案も[illegible]々と、思へば是れも他生の縁[illegible][illegible]れば、水のまに〳〵流るゝ舟の、[illegible]

ははや白々明けて、境川岸より下り來る、舟さへ此處に著きぬれば、數多の旅人騒然と、上りて向ひの茶坊へ行き、朝餉を食らふ有樣に、二人も此處より陸へ上り、斯く人立の其の中には、若し知る人やあらんかと、窺ひ見るに見知れる者なし。然らば此處にて吾々も、朝餉を食べ其の上にて、成行きをも定めんと、やがて其處なる茶坊へ入り、まづ其の腹をば肥すものから、世間しらずの樸兒、さて是れからは何處へとて、行くべき當もあらし吹く、峯の落葉の夫れならで、行方定めぬ身の上を、兎やせん角やと語れども、頓に思案は付かざりしが、金之介はきつと考へ、年月こそは經ちぬれど、父祖さまは都にありて、手跡學問の指南され、その弟子の澤山なる、中には今に恩を忘れず、暑寒年始の折々は、訪ひ音信をする者あり。其の名も確とは覺えねど、彼處へ行きて尋ねなば、緣も由縁もない土地へ、行くより遙かに勝らんか。とは云へ彼處は百二十里、踏みも馴れざる旅の空、いと覺束なき所爲ながら、心當りは只夫れのみ。八十島殿が情の賜、今見れば五兩ある。是れを路用に一先は都へ行かんと語らふに、西も東もしらぬ齒の女兒、うしろめたさは限りもなけれど、然はとて身を置く所なし。思ふ男と諸共に、艱苦は豫て覺悟の事、何をか厭ひ申さんと、言ふによりて心を決し、其の身は綛の雨衣に、股引脚絆足袋草鞋、お政には中形の、浴衣締めて引纏はせ、菅の小笠を被らせて、全く旅人の體に打扮ち、陸地は人目もいぶせければと、舟を雇ひて打乘りつゝ、司馬浦さして漕ぎ出

でたら、斯かるべしとは夢にだに、知らなかつた筈、[illegible]また盗人な

之介は酷らねえよ。……[illegible]一晩も明かせた事はねえが、其の徳をと云ふのか。若い者は其の時と、

自ら、背の高い上に、殊に[illegible]無理もねえが、ハテ、[illegible]で宜しいものか。……何様し

たの下御前いまでう。私は一層[illegible]黙つてはゐられません。其の様に申した事には、大殿

同様の若い者と、[illegible]から行つたのだから……、[illegible]其父[illegible]の様で、日に日に、その

には、[illegible]とすれといと、[illegible]、案じられつゝ、[illegible]、[illegible]と云ふて来た

居りし[illegible]、お[illegible]様、その御[illegible]りましたのです。[illegible]、と申しても、若殿様も

私は気になつたことが御座います。若殿様申したには、また[illegible]に、お姫様の[illegible]にすたいと申されて……

で申しませんが、様の御[illegible]り通りにで、お話しも致しとまずが、まだ[illegible]様も、何か、と中で御座

これは偶然に、[illegible]之介の上達を、云ふ、[illegible]を、申されてると、僕がそれで参つて、聞いた

之介の申すには、何様も能く変つて、と言ふ[illegible]には、[illegible]一人に命じると、[illegible]

のと言はれるのに、[illegible]お宜い。とも[illegible]、[illegible]な人で云ふし、其の上[illegible]

いやうなものだけれど、只の兄弟同様と[illegible]とするのは、まあ、[illegible]親しい御[illegible]にてたうと、

居ましたでも、私に其れ程ずないで、[illegible]はならねうと云ふ位、それ位に、[illegible]之介が、[illegible]

出来ませんツ限り、モウかれ是れ此刻過ぎまで、歸りませんから、私は、眞に氣になつてなりません。」

ぬ、左樣か。ハテナ。」ト、暫時思案ありけるが、イヤ何樣もモウと堪だならず。金次郎を起して聞いて見ナ。」ト、言はれてお雪は金之介が、下屋へ到りて熟く寐ねたる、金次郎を揺り起し、仔細を聞けば云々と、如何かお吹に頼まれて、兄に届けし由を言ふ。扨はとお雪は氣もときめき、急ぎ歸つて良人に告げけるに、聞けば、聞くとて氣は安からず。然ればとて此の夜中に、如何にとも詮方なく、待てぞ生憎長き夜や、夫婦は語り明すなるべし。兎角して夜も明けければ、其の譯だに知れ難きに、他に言ふべき事にもあらず。心痛なる其の折節、親方の小使なる、何某渡士は金左郎が、平生に目をかけ置く者なるが、喘ぎ〳〵馳せ来り、「眞に申し上げますが、昨夜お饗宴の眞最中、奥庭にて若旦那に、女中は誰か向島より、逗留客と聞くなれば、お吹さまにや候べし、なにか話をして居られましたが、夜遊びが見て騒ぎたてゝ、夫れから老女の計らひで、二人共にお泉水へ、突き落したとか申す事、御女中の強い評判、御恩を受けた此方のこと、氣になつて〳〵、夜の明けるももどかしく、來りて参りました。」話は種々多いもの、若旦那は何事なく、お宿にお出でなさりますか。」ト、聞けば、此方も吃驚し、ヤレ〳〵金之介が悪魔で、女と話をしてゐたならば、泉水へおとされたとは、皆様は昨夜から、何處へ行つたか今に歸らず、夫れが眞實の事であらうか、併し御法度を破つたら、罪に有らうと

其の座で、直に左様いふ事はない筈だがト、怪しむ様に聞するお雪、おもはず流るゝ涙を拭ひ、

雪「不義はお家の制度といふに、幼い時から聞いて居るが、若い者には間々ある習ひ、夫れなんぞや情なく、其のまゝ池へ突き落すとは、餘りな殘酷い事　夫りや老女衆の計らひとか。老女といへば八十島どの、お上を嵩に非道の計ひ、何ぞ彼の子に意趣でもあつてか、ナア、何にもしろ可愛さうに、モシ左様ならばせめてのこと、死骸なりとも引取つて、弔ひもしてやりたい。是れもまア何の因果な事ぞいナア、前後分たぬ愛別離苦、金左衛門は手を拱き居たりしが、漸く頭を上げ、さて元來嶮しい御制度を、破つた身なれば夫れも餘儀なし、紫様が聞いたなら、嘸や口惜しと思して、狂氣でもせねばよいが。定かに斯うと極めこそせね、好き同士の夫婦ぞと、親と親とが心では、許す縁も末始め、當時にはまつて離縁ふ、是れも浮世の道理人情、とは云ふものの今までに、左様した仲なら何様なのと、仕様もあつたが夫れ程の、事とは知らぬ此方の油斷、向ふで氣が付きたなら、昨日は杯か、今日も明日へ、確と挨拶なしに行く筈、其の舌の根も引かぬ中、斯ういふ事では言語道斷、仕様もとなく書流であらう、親の心を子は知らず、いかい苦つたとは云ひながら、吐息つくにも言方知らず。小使衆は是で〳〵ふた筈く實正開き見し、申し上げれども、皆くあつて、夜來に、能く〳〵聞けば事と、さうまに違ひはなけれども、斯ういふ譯で向に來て、木門に突き放し、お二人共にお待には、別條な

いと申す事、まア／＼御安堵なされませ。」ト、聞いてお雪はほつと息、夫れでは無事である事かと、張り裂く胸も此の時に、すこし落ち居る其の顔を、金五郎は打見やり、金五「不便なれども二人とも、命がなくばそれまでよ。老女が情に任命しては、以來お家の掟も立たず、紫雲どのへ對しても、此の金五郎が言譯立たぬ。水門から押流されては、たゞ一條なる坂東太郎、上る處は一の江二の江、行先知れた不義者ゆゑ、引縛して突き出さねば、假名屋の家へも疵が付く。ソレ杢平準備をしやれ。中間どもにも言ひ聞かし、十手捕繩用意して、供をしろと言ひつけやれ。サアお雪衣類を出しやれ。」ト、面色變る良人の威勢、お雪は安堵の間もなく、復も驚き取縋り、雪「左樣仰しやるは御尤もなれど、さうではあるが親として、子に繩打つて出す者が、三千界に御座いませうか。假令此の家へ少々の、疵が付くとも詮方はない。初めは恨んだ八十島どの、了得老女の計らひに、恨んだ言葉も恥かしい。他人でさへも理を付けて、人を助ける情に引替へ、現在親が後追駈け、子に生恥を曝させる、邪見な事が御座いませう。まア／＼待つて下さりまし。」ト、縋る其の手を振り拂ひ、金「其方が言ふのは姑息の仁とて、只管我が子を可愛がり、義理といふ字に構はぬ仕方、女は夫れで濟みもしようが、假にも武士と云はれる此の身、義理を缺いては生甲斐なし。」ト、荒らかなる聲聞き付けて、や、先づ／＼待つた。と聲掛けつゝ、後の唐紙引開けて、此處へ立ち出る人ありけり。

第八回

扨其の人は別人ならず、大隱居の白藏なり。夫れと見るより金五郎は、暫く怒りを押靜め、其處に控ふれば白藏は、お雪の方を尻目に見やり、「扨何かの樣子は陰で聞いたが、さて／＼困た事が出來た、其方達が思はぬ心配、彼の猿男は男だけ、切れ放れた料簡で、義理の二ツを立て通し、君に二人を引據へ、お上は元來向島の、紫雲さへも潔白な、心を見せようと思ふ程に、尤も左樣すれば今日の道は、立つといふものだが、其處に譯があるから、何樣だといふに八十島との、夫迄こそあれ發明人、是の斷らずれば何樣なると、先の先まで知り拔いて、本箭の計らひを承知しながら、お庭作の下司であらうと作男け、お前はもと／＼の逆旅客、然れば武士と異な中の、不義とは格段違ふといふ、名を拵へて其の座をさらす、計らはれたはおのれの働き、男だけもと腹が立つては、なか／＼出來ぬ取捌き、それを其方が武士道を、立てると言つて邪魔へ、突き出したらば惠みある、八十島どのにも咎めが罹り、情を仇で報じる道理、また紫雲のも是れ程の事、隱して本懷へやられもせまい。左樣して見れば言譯に、尼にするか然でなくば、自害でもさせずばなるまい。可惜花の盛りを、殺すも誰かするも其方の料簡、且つ一には有る事だ。年寄りいらぬ世話と、思ふ子は知らないが、是れなりけりにし

て措けば、人の噂も七十五日、何時まで人が言ふものか。紫雲どのもさに悪からうと、出來たことなら是非もなし、本店へ此の由を、言つて仕舞へばそれで濟む。二人は定めて折檻もしようが、心からなら是非もなし。また年月が經つたなら、切るに切られぬ親子の血筋、めでたく逢はれるなりもならう。ノウお雪、自己はまア左樣おもふが、其方は何樣おや」ト、言ふ尾に付いて、「夫れはもう、仰しやる通りで御座います。金五郎が料簡は、血筋の中でも養子の身の上、若し此の家へ疵の付く、事があつては濟まないと、呉々申して居りますけれど、お庭作の下司だらうと、名も明さずにあつては見れば、其の氣遣ひもありますまい。」「何樣して夫れは大丈夫。假令少々疵の付く、事があらうと五本の指おや、アハ、、、金五郎、合點がいたか」ト、祖父が言葉。金五郎も父子の情愛、元より深き心なれども、金之介は譯ある子なり、斯程の事をそれ限りに、聞き捨てては養家へ立たぬと、思ひ込みたる故なるを、斯くの如くに諭されて、とかう言ふべき條もなく、其の意にこそは隨ひけれ。お雪は漸く安堵の思ひ。さは然りながら假初に、立ち出でしまゝ一錢の、貯へだにもあらずして、後は兎もあれ今日の日の、方便にさへも困るべし。如何はせんと胸一ッに、あまるばかりの憂き苦勞、さと思案して若黨の、盧名李平を密かに招き、心の中を話し聞え、金十五兩取り出し、先刻旦那の言はれたる、一の江とやら二の江とやら、其處で知れずば何處までも、尋ねて是れを金之介に、渡してく

れと云ふ程に、木具一切承知して、夫れより急ぎ準備を整へ、金五郎に宜きほどに、言ひ拵へて葛飾の、真間の江指して立ち出でけり。ねだの原、漕ぎ出でゝ見れば久方の、雲居にまがふ沖津波、左に遠の安房上総、右には近き八つ山の、下の邊へ来にければ、此處にてお政と金之介は、舟より上り今ははや、知る人に逢ふ氣遣もなし、馴れぬ旅路も思ふせいか、あるひは後れ先だちて、戯れながら歩行み行く。金「サアノヽ、あつと精出して歩行きなせえ。先刻安宿で道中記を買つたが、品川から川崎へ二里とある。」政「そりやかれ是れ未刻だから、川崎までしかァ行かれめエ。若し早かァ、大師河原へ廻つて拜んで行きやせう。」政「そりや大師さまへは直かエ。」金「ナニ、直處ぢやァねえ。まだ一里半か二里もあらう。」政「ヲヤ、一里だァ何の何だね。何だか私ア、もう草臥れたやうで、足が一層重くなつて来ましたわ。」金「ハヽヽヽ、弱い事を言ふぜ。今からそう足が重くなる様だァ、百三十里は覚束ねえ。□□て、まア其様にあせらずとも、是れ見ねえ、其の間にやア、山もあり坂もあり、また大井川といふ怖ろしい海の様な川もあるぜ。」政「夫れだから先刻も言ふ通り、其様にあせらくしたら形だつて、いけねえから、思入れ高くはしより上げて、然して自己が言ふ通り、草鞋を穿かねえぢやア、歩行かれねえぜ。」政「そりやア何でも穿きますがね、草鞋は何様して穿きますのだらう。」金「夫れ見ねえ。其様く言はぬ事て、自己が手傳つて穿かしてやらア。なア□□、何をしてゐるな。早く来ねえ。」金「ハイ、夫れはあんまりなく□

けて來り、吉「何だか、モウ海のはたに、汚いものがあると、狗や烏が大勢寄つて食つてゐました。彼りやァ何で御座いませう。」オ、怖い。」ト、身を竦はせる。吉「夫れだから彼樣なものを、見ねえでも宜いこつたに。」彼りやァ馬の死んだのだわな。」吉「ナヽ、まァ馬が死ぬと、お寺へやらねえで、此樣な處へ捨てしまふのかねエ、可愛さうに。」金「サァ、何樣でも宜いから一緒に來な。道草を食ふと打捨ッて、先へこつこつと行つてしまふヨ。」吉「アレサ待つてお吳んなさいナ。モヤ草履の紐が解けた。道理で痛いと思つたら、此樣な石が草履の間へ、何時の間にか這入つて居ましたヨ。憎らしい。」金「イヤ、何樣も斯樣も埓があかねエ。此樣な調子ぢやァ雨でも降ると、あとへも先へも行きやァしねえ。」ト、笑ひ半分言ふ折柄、雲突くばかりの大男、ずつと來りて、男「モシ旦那、川まで安くやりやせう。」吉「ナニ、駕籠か、まァ宜いにしよう。歩行く方が氣散じだァ。」男「左樣言はずに乘つておくんなせえな。お内室樣だか隠落だか、其處のところは知らねエが、此の美しい處女さんが、足の痛えと言ふ樣子、其處で俺等ァ木阿彌だ。ァハヽヽヽ。高くはしねえ、川まで一貫おやんなせエ。」吉「馬鹿ァ言ひねえ。乘ればと言つて、其樣に錢を出すものか。」男「サイ／＼棒組早く來いやァイ」男「ヤ、イ」ト、言ひつゝ山駕籠を、荷けて此處へ馳せ來り、男「何樣だ、旦那を乘せるのか。」男「ムヽ、此の處女さんを乘してくれとヨ。サァ乘んなせえ。」ト、駕籠突き付ける。金之介は頭振り、金「イヤ、止しやせ

うヨ。餘り高い。」ト、言ひつゝお政が袖を引き、見向きもやらず行かんとするを、一人の雲助なる客
がり、雲「コウ、お侍さん、わからねえことを言ひなさんな。棒組まで呼ばしておいて、小便をする
りかエ、サア、處で[illegible]」ト、[illegible]を開けて、お政が[illegible]へ[illegible]を掛けて乗せんとすれ
ば、お政はアレと身を逡巡り、戰慄渾身を震はして、侍までも青くなし、驚き入つたる有様なり
金之介は振向いて、[illegible]其方達は、足弱連れと見くびつて強[illegible]か、[illegible]が高いから、[illegible]
えと言ふのが、何様したんだ。」雲「これサ、其様に[illegible]なさんな、[illegible]の手を[illegible]
して、俺等を斬らうと言ふのかエ。ハハ、、、是りやア面白え。斬るならすつぱり斬られやせう。サ
ア斬んな[illegible]斬つ[illegible]
[illegible]思ひけれ[illegible]
忽に[illegible]と、[illegible]て、金「コレサ、意[illegible]
し、又[illegible]其[illegible]
此[illegible]
[illegible]
[illegible]

仕舞ひ風呂も濟み、今日の疲れも忘るゝばかり、二人は寢轉び肘枕して、政「先刻はモウ怖くつて、何様致さうかと思ひましたヨ。彼様なことが數回あつては誠に否で御座いますネエ。」金「お前よりか自己が否だア。本なんぞにもよくある傳だが、美女を連れて歩行く奴が難に遇へば、是非男が眞先へ殺されて、女は家へ連れて行かれ、心に從へと言ふ處が、強情で承知しねえと、女郎に賣つて金にされる。命は何様しても取られねえ。夫れだけ女は一割得だア。」政「私は又其様な事があれば、賣られるまで待つちやア居ません。井戸へでも川へでも、身を投げて死んでしまひます。」金「左様思つても其の場になると命が惜しくなるだらうサ。」政「イ、エ人は何様だか知りませんが、私はモウ貴郎なんぞに別れる位なら死にますわ。本田の嫁になれば樂な事は知れてゐますけれど、死なうと覺悟した位で御座いますものヲ。」金「全體夫れが不料簡。夫れから此様な事になつたア。」政「私はモウ何様な苦勞も、貴郎と一緒なら厭ひませんが、とんだ者に見込まれて、倶に御苦勞をかけるのが、誠にお氣の毒で御座いますネエ。」金「氣の毒ならば今ッから、家へ歸つてしまひナ。」政「夫れが歸れる位なら、何にも言ふ事はありません。」ト、憂きが中にも樂しさの、寢物語に小夜更けて、霎時夢をぞ結びける。

清談若緑巻之四　終

清談若緑卷之五

東都　曲山人著編

第九回

昔鎌倉繁華の時は、此の邊すべて繁昌しけるに、[illegible]此處に通ひ、和田酒盛の古事も、人の口碑に傳へたる、所もうまき馬路にて、大磯と[illegible]、小町の古跡、櫻馬場、西行法師が名高きる、鴫たつ澤も此處にあり。されば往昔に引替へて、鄙となりたれど自然人の心に[illegible]にして、[illegible]の習ひにも似もつかず、[illegible]なるもあり。爰に相州屋[illegible]右衛門といふ、[illegible]のあるじなるが、其の性質[illegible]にて、慈悲善根の心なく、[illegible]にかけては邪道なる、[illegible]されど、[illegible]の族へ、取入ることに妙を得て、金持と[illegible]、[illegible]は[illegible]ゆゑに、誰ありてこれを[illegible]、[illegible]此の家の奥座敷に、[illegible]の逗留客あり、男女の二人なるが、男は風邪の心地よりて、次第に重り、今は[illegible]、二度の床も[illegible]に臥して、[illegible]なる有様なれ、

猪右衛門は見向きもせず。其の日／＼に宿賃を、拂はぬさへ嗇々と、罵る程にてありければ、是れに使はるゝ下女婢なども、主を見まねに疎畧して、呼べど急には寄りも付かず、出で往ねかしに道行ひける。抑も是れなる二人の旅人は、彼の金之介とお政と云へり。第三日目に此處まで來つ、此の家へ宿りを求めしが、其の夜よりして熱發し、堪へがたきさまに見えければ、お政は驚きあわてゝ、介抱しつ、夜を明かし、主人に聞えて醫師など頼み、かれ是れとものすれど、傷寒とかいふものにや、後には人事も覺えぬまでに、惱みけるまゝ夜の目も寐ず、お政は涙と諸共に、介抱心を盡すものから、頓には藥の驗も見えず、病む人よりも己まづ、心地死ぬべく思へども、斷くしてはならじと心を勵まし、二十日許りも送りしが、漸くにして金之介は、熱も半ば怠りツヽ、今は命に障りあらじと、醫師も言ひ傍でも思ふ、ほどにはなれど食は進まず、枕だにも上らねば、何樣がなしてと心急き、是れの彼れのと氣を揉みて、價の貴き物も厭はず、調へては進むれど、舌乾き咽喉塞がりて、なか／＼に食べ得ず、斯くては何時か怠りて、立ち出づる日のあらんやと、千々に心を碎くのみか、初め八十兩が補にて、思ひもかけぬ五兩の金も、旅の準備に一兩あまり、夫れより此處へ來るまでに、二兩許りに失ふ程に、二十日餘りの逗留と、藥の代と彼是の、雜費に今は盡き果てゝ、只一錢の貯へなし。これも苦勞の第一にて、兎せん角せんと心をば、痛むるばかり便術なし。されはとて病む人に、成るたけこれ

を聞かせだしと、宿屋もどうも宜き樣に、煩りおちて御挨拶、今日で滿日なとそれのみを、偏に臥じ神を念じ、待つより他のことござんすネ。一日主人の幾右衞門は、縁側つたひに此處へ來り、マア何樣で御座いやす。御病人は、ハ、、、また何うもいけやせんかネ。困つたものでと言ひながら、其處に坐りておき枕に對ひ、マアたシお客さん、煩つて御座るのに、左樣申すもお氣の毒だが、モウ此の頃で七日といふもの、宿賃が入りましたんか、藥の代を上る前借が大概、宿料の方でも困りやす。何卒今日は是れまでの、勘定をしておくんなさいまし。四七十八匁に紋布が些と抜けやす。ト、言ひつゝ、懐探り、書付の勘引伸して、お客が前に差出せば、お客はすつく枕に顔、打ちたるまでに詫び煩はさ、一世の間上げたッけが、モウ後が左樣なりますかネ。此の通りの病人で、日の經つのも覺えません。如何な按摩取りては、御迷惑でありませうが、何を云ふも此の次第で、些と路用は遣しても、今日はお恥かしいが、小遣もない始末、何うしてどうしませうか、モウちつと待つておくんなさいまし。マアエ左樣なら、困つたもんだ。宿して置く旅人の事は、二日や三日は待ちもせうが、何樣か在上の御役人といふから、是れもとにかく十六里か何處の者か、來るかどうかの中間ど來ない、何樣か在上のお咎めといふが、是れのことにした十六里だ。飛脚でもお出しなさいまし。慥かな人を頼んで上げようと。言つたしは大きに有り難うございます。それにはちつと二十、後を言ひ兼ねて、しばし口ごもる折に、……むしろ胸のあいたる麁ぞれ

て、當惑にもまた餘りあり。其の時金之介は、夜着打被りて聞き居たりしが、漸く肘をつき、重き枕を擡げッ、「ナニサ御亭主、因なことで大きな厄介に成りました。勿論僅かな路用を持つて、出た譯だから此の始末で、遣ひ切つて當惑さ。如何樣にも飛脚を立てて、とり寄せりやア仔細もねえが、其處にやアちつと譯があつて、速かに左樣も行かねエ。然しながら宿賃も、拂はにやア置かれもせず、又小遣もなくちやアならず、何れ何樣かと言つた處が、旅の事で詮方がねえ。トキに御亭主、吾儕が刀は、銘はないが來國俊だと、親の代から言ひつたへ、拵へもよくはねえが、目貫は金無垢、鮫もよし、拵當にしても十兩や、其處らにやアなる刀、なんとたれを何處へか預けて、十兩許り借りてエもんだが、心當りはありますまいか」ト、諾す中さへ息だはしく、漸うに頼むを聞き、儀右衛門は病人と、お政の顔とをじろじろと見て、居たりしが思ふやう、人品と言ひ取りまはし、なかなか賤しき人とは見えず。然るを一人の供もなく、旅をするだに不思議と思ふに、此の大病に及ぶのみか、路用に盡きても飛脚を立て、宿へ知らすといふことなきは、察するに淫奔して、驅落したるに疑ひなし、さあらば二人は日かげの身、何樣したとても祟は來ず、錢はなくとも此の處女、唐土人は美人のことを、搖錢樹といふとかや 若し彼の男が此處にて死なば、搖錢樹は此方の鉢植、此處では一番情をかけて、手懐けること肝要なりと、肚の中に計畧みて、急に變りし猫撫聲、「それおやアお困んなさい

やせうこ十三吾儕が工面がよけりやア、お前様がた二人位、斯うして頰つて御座るものを、内侍三月半年でも、お世話をして上げてえが、家業だから手前骨に大きく構へて居られねえ、内證の苦艱は火の車。其処で何様も困ります。其様なら其のお刀を、今誰かに見せてやせう。と言つた処が田舎の二つ一、善いか悪いか知りやすめえが、例令何様でも侍が、魂を手放すのは吾儕等が家作を賣るのと、同じ様なものだから、誰にお頼みで仰しやる通り、十両位の上でやせう。今何う左様して、下さるのやら、寝て居ても安心だ。と、話す傍で聞く居るお政、身のなる様に打伏して、思はず湧む涙を拭ひ、然し二人がお刀は、何様お放しにくうおますが、私が差して居る此の簪は、お刀程にはなるまいけれど、七八両に出しましたもの、半分にしても両位には、払はれるで御座いませう。と云へば、それ丈で當座の凌いで、居る内にや何様か仕方もござりませう。言葉の甲か出る伊左衛門が、ヤイく、そりや其まゝにはしておけねえ。此処で仕附かふなんぞと、さ此の者は一人もないに、縦令二本差した時にでも、買手の値がある時分に明かしても、田舎で不自由で、濁らいゝすりこ一まで、たれ其れから思案が無く、矢張り刀を出すとは、言はれぬ今更他に、思ひ白けれど気遣さや、心から落ちて居ても、身を嵌へても、家の中でなければ、伊左衛門に渡して、伊左右衛門は請取つて、たゞつくりつくと見て居たりしが、成程是りや仰しやる通り、随分善い代物だ

しいこ目貫が金の三疋獅子で、緣と頭は赤銅に、波と龍の毛彫だネ」鐔は何だ扇の透し、身は知れねえが切れさうだ」其樣なら屹度、私が、お預り申しやした」ト、起つて行きしが其の日の暮方、註文通り金子十兩、持つて來て渡せば請取つて、刀はなくとも暫時は、安堵の思ひに宿賃から、藥の代も償ひッ、、投魚など取寄して、甘く仕立てて病人に、進めて見ても多くは食はず」お政も殘りで夜食を仕舞ひ、例の如く藥を煎じ、看病するまに小夜更けて、寢よとの鐘も告げわたる　今宵はわきて病お人も、快きにや苦痛もなく、よく寐入りてゐる隙に、お政は折々覗きこむ　顏の窶れ見るにつけ、親の命に從ひて、身の落着をしたならば、斯うした憂目もあるまいに、心からとて苦勞する、此い身のいかは慈しさと、命に換へし男さへ、今を限りと煩ひて、便るかたなき旅の空、心の中では我が身なれど、さこそ恨みておはすらめ、堪忍して下さりませと、聲は出さねど忍び音に、落つる淚は瀧と散り、咽せ返りてありけるが、今更幾千言つたとて、後へ返らぬ親の罰、何はともあれ一日も、早う快くして笑ひ顏、見たならば嘸な嬉しかろ。斯ういふ時は常々より、頼み參らす觀世音、助け給へと一心に、伏し拜みつゝ、行燈の、火を細くして病む人の、傍に寄り添ひ寢轉べば、日來の勞れにいぎたなく、前後も知らず熟睡せり。

第十回

實に昔の諺にも、[illegible]るはなし、[illegible]と、云ふは誠か嘘言と、思ふころ不圖目を覺し、お政は起き出て[illegible]なる、[illegible]を搔き起し、[illegible]忘れて[illegible]、[illegible]した後で此處にあると、獨言して[illegible]つゝ、[illegible]へ[illegible]して[illegible]、[illegible]何處かお目が覺めたやうす、お政は[illegible]の ませんか、昨夜は[illegible]で、よく寐着つたから、私も安堵して、今まで[illegible]ひましたよ「ム、、丈夫に[illegible]い[illegible]だ、[illegible]になつて、それに付いても[illegible]お前にも、[illegible]の毒だが、[illegible]もあるめえから、何分[illegible]して[illegible]くんなせえ、ツイしか此樣に煩つた事はねえが、生憎な[illegible]、實に[illegible]ねえ、此の位なら一層其事、死んだ方が餘程氣樂だ」ト、[illegible]ことを[illegible]に死なれて[illegible]、一緒に死なねばな[illegible]りませんよ」ト、心弱きは女子の常、ツイした事にもはらはらと、落つる涙を[illegible]、[illegible]なさいまし、[illegible]に泣くのかえ、氣の弱い、ナニ〳〵、死にはしねえから、大丈夫に思つてるナ、[illegible]にあつ[illegible]、[illegible]る事はねえ、[illegible]、ほんに[illegible]、[illegible]捨つゝ、[illegible]ましたか、[illegible]

八手を入れ、探つて見れども手には障らず。是れはと少し胸騒ぎ、猶能く探せども有ることなければ、打ち驚きて蒲團の端を、引立てて尋ぬれど、更に見えねば此の時に、色赤くなり青くなり、何様した事と病む人まで、驚きうれへ起き返り、探せどなければ二人とも、熟睡せし間に取られしならん。ここは如何にと仰天して、途方を失ふばかり。亭なにをくよくよ、宜い、探しなさんな。大方誰にか取られたのだらう。これも時節で詮方がねえ。此節抔は彼の者は、私が家の先祖から、傳はつたものだから、大事にしろと祖父さんから、譲られたのを差して出て、遊ないねえことで親を捨て、家を棄てての旅歩行、煩つて後へも先へも、詮方がねえとはいふものの、手放した其の罰で、用にも立てず其の金まで、盗まれるといふも、矢張身の罪。左様諦めて仕舞ふが宜いッサ。と、言ひさして枕を仕直し、勞れしさまを傍に見る、お政は獨り膽潰れ、何の因果と胸塞がり、鬢に押當て泣き伏したり。稍ありて思ふやう、取られたものは歎いて返らず、只此の上は何様かなして、日々の便をするが肝要。良人の爲には身を賣つて、難儀を救ひし例もあれど、病みさらぼひし其の人を、獨り置きては金ばかり、整へたりとも何かせん。何様したものと種々に、思案をすれど工夫は付かず。さはれ此のこと宿の主人に、まづ一通り話さんと、やがて主人の方へ行き、然々の由を言ひ、如何なる所爲も良人のため、厭はねば宜き様に、料簡付けてと頼みしかば、磯右衛門聞いて倶に驚き、何にしても氣の毒千萬。よく

詮議して進ぜませう。さりながら印のない、錢と金とは盗人の、なかなか直には知れぬもの。さて此の後の方便とて、他に吾儕も工夫はなけれど、大盡方の懇意に、贔屓もしたる時により、三味線引いて相手をする。女子があらば世話をしてと、恃まれた事がある、[illegible]土で云はゞまづ藝者だが、若し其の業が出來るなら、今夜からでも口はある。聊かなれど祝儀を貰へば、二人が介抱藥の代、夫れはモウ澤山だと、聞いてお政は不束なれど、習ひ覺えし琴三味線、それで間に合ふ事ならばと、頼めば主人は承知して、左樣いふ事ならばマアマア、話をしておきませうと、快よげに承諾ふ程に、お政は是れまで深窗に、養はれたることなれば、さる筋のこと話にばかり、聞いたるまでにて眼には見ず、いと覺束なき事ながら、出來ぬことやはあるべきと、自らよくよく工夫して、さて其の由を好き程に、取繕ひて物語るに、金之介はたゞ心苦しく、口惜しき事には思へども、進退既に谷りて、詮方なき時節なれば、ともかうもと言ふにまかせ、お政は急に變化姿、身に[illegible]べき力はなけれど、これも夫婦が世渡りの、綱と思へば行先は、何樣なるものかしら絞り、[illegible]の結髪も、穢れ[illegible]裏表、當座凌ぎに[illegible]ならで、咲込む花は牡丹に蝶々、番離れず末掛けて、[illegible]遂げたる[illegible]一念に、化粧は果て[illegible]を、待つ身はつらき列々備、つらつら物を思へばや、たゞ[illegible]のみ先たつなことも、實に世間の有樣は、今に始めぬ哀樂悲歡、とかくに[illegible]中にも、酒は[illegible]への[illegible]、[illegible]一席の、

酒には猪も聞くといふ。況して昔の人の、酔うた所は天上楽園、人生一期是れ程の、楽しみまたあるべしや。この相州屋が隔棟は、富貴寄とよぶ料理屋にて、かかる邊鄙にありながら、往還なれば客は絶えず。殊に此處等の豪富は、大方此處の楼にて、遊ぶを常のこととすれば、昼夜酒客の聲は絶えず。餘所の哀れはしらぬ火の、心筑紫の箏ならで、今は流行の浮世節、婀娜なる聲とまた此處に、ただただ聲に程もよく、合はせ鱚魚の吸物や、すつと澄ました上座の客は、愛に名高き新屋の佐吉、喫ふ煙管にはたはたと、落つる灰も気が付かず。お政が顔を熟々と、見やる目元に情を含み、膝を進めてぱつと摺り寄り、隹「思ひ酌だ。一ツ飲みねえ。」政「ハイ、有りがたう頂きます。併し私は御酒は一向。」隹「飲めぬといふのか。野暮めノヽ。今の浮世に酒より他の、楽しみがあるものか。俺が是れから稽古して、飲めるやうにしてあげよう。マア、一ツ受けなさい。」ト、手を持ち添へて充分注ぎ、隹「ぱつと一思ひに飲みなせえナ。」政「先刻からちつとづつでも、大いこと食べましたから、もう切なくなりました。」隹「ハヽヽヽ。弱いノヽ。それなら俺が助けてやらう。」政「アレ、無躾で御座います。」隹「處がお前の口を付けたを、飲みたいと思ふ俺が願ひ。」政「モウ有り難う御座います。お前さんは程がよくつて、女殺しとやらでおいでなさるネエ。」隹「程がよくても女は死なんテ。時に聞けば御亭主が、久しく病んで御座る相なが、モウ段々快い方かナ。」政「ハイ、有り難う御

串います、狭はお仕官いが、同役でご定のしお前も苦労であらう、在所なくて京へ旅へ出たや
て、便のおたへくまって心細いにし、ますまい。在所で御座います。それ誠に此の様な不束な身も、危うす、
お若と申すも厚面皮しいが、貴郎からお情下さる其の甘い道ですす。もう其の話は此處に居る、
女中達から能く聞いた。然しお前は日本一の貞女の鑑といはれる人だ。美い例へにいふ、天人から
つを取らうといふ顔容を持って居る、何様な者か御存ねまいが、稀な人に貞人の鑑に、嘶らいふ
事をしようといふ其の心根が有り難い。其の身になつてゐなア、何様にか嬉しからう。此様な美し
いのを女房にしたなら、果報やけで煩ふのだこと、お前よ、自己なら朝晩に拝んで居るのに、ます
ま、作事でない、能い所で可愛いさ、まことお酌をさせて貰ひました。しつくり致しませう。今ま
こ彼奴等に構ひなさんな、自己にはお前の心意気が感心だとも解らず、ふのだ。其処で退くや安ねま
か。明日の小遣ひも足しにしなさいと、既に尽つて仕舞へば、ぶ生いぶが座敷へ悩睛、返すも無理取
なも、又い餓の乾くやりと一途に、自適する事を互にゐる、家屋の中間を、き折角旦那様お下さる
物を、お蔭でいんお貰ひなさい。佐藤様は一層、御緒く、ておいでなさるか、お前へ今の十を聞き
なまって、折角のお志だから。まあ二日間さん。此の様なやうな可哀さうとの見ものまするんか。
一くここ自己不自己へ肩をかけて、若くりやとやってに取りする。評判をかけて其の土地を何か、

人も知つてる新家の佐重だ。其樣な事に引けは取らねえ。ソレ、主達にも小遣をやらう。」ト、其處に居並ぶ女共に、一々紙に捻つてやれば、皆一樣に悦びて、歡待初めに十倍し、旦那々々と喧しきまで饗應す。斯くて是れより新家の佐重は、夜晝となく繁々此處へ來りて驕りをなし、其の度毎にお政を呼びて、何彼に託け金も遣り、又其の衣裳の見苦しとて、呉服店に誂へつゝ、上から下まで切りたての、華美衣裳など贈れる程に、其の惠みを嬉しくも、思ふ物から分に過ぎ、斯くては後々身の上に、惡しき事もやあらんかと、お政は兎やかく案じられ、善きに付けても氣は安からず。さらばと言ひて受けざれば、人の惠みを仇になし、却つて後の活計の、障りにもならんかと、胸に餘れる憂き苦勞、金之介も其の後より、少しは快き樣なれど、漸う殘る白粥も、日に只一度二度にして、中々力のつくには至らず。斯くては何時まで長びくも、計り難きに此の活計を、止めては元の窮迫に、なるは眼の前如何にせんと、千々に心は碎けども、病みほうけたる其の人に、相談なさば是れも亦、心を痛め肥立の障り、取越苦勞も詮ない事、まづ今日は今日明日は明日、送る中には病も癒えて、又よき事もあるべしと、可笑しからねど笑ひ顔、客の調子をうたかたや、合はして其の日を送りけり。

清談若緑巻之五 終

清談若緑卷之六

第十一回

東齋曲山人著編

斯くて久離せる町家の佐重は、其の[illegible]を[illegible]て、[illegible]を見せ、[illegible]て、お政が心を引くといへど、元來お政は其の腸、鐵よりも綿堅く、[illegible]ければ、仇たる[illegible]にも、心ひかるゝ道はなし。然れば過分の物をもて、與ふる時は兩個も、[illegible]強ひられれば是れを受く。是れ尋常の處女に似ざるを、佐重はよく〳〵見てとりて、[illegible]對にも、挑むとも整はこ よしや何程手堅[illegible]とも、[illegible]動かぬことやあらんと、密かに是れを[illegible]ば、多くの[illegible]と、[illegible]詳しく[illegible]

今か〳〵と待つてをり。また磯右衛門は何樣がなして、事整へんと計畧めども、了得良人のある女子に、不義なせよとて勸むる事の、うしろめたさにまた勞へ、こは富貴寄のなどもて、含ませて渠等が日より、勸めさするに卽くこととなし。吾は吾にて仕方ありと、肚の裏に巧みをなし、さて富貴寄の下女の中、心利きたる中二に、少しの贈物なとして、兎角よいやうに計らひて、首尾する上は衛家の旦那が、褒美は幾干も遣るとある、骨を折りねと言ひ諭せば、慾には義をも忘るゝ婢なつすゝ、夫れは吾儕等が、請合ひましたと其の回答、手輕けれども磯右衛門は、心の中に左樣巧く、行けば宜いがと危ぶみながら、斯くて此の夜も富貴寄に、お客のあるまゝ來べしといふ、使にお政は病人の、手當なぎしつ例の通り、奧へ行きて富貴寄の、主夫婦に打對ひ、毎度〳〵有り難う今夜も新家の旦那で御座いますか……と問へば、いゝえ、今夜は何樣なすつたか、まだお出でがありませんヨ……お政……だれおや〳〵他のお客さまか、お座敷は何處で御座いますネ……直ハア、其樣なお客はなし。日を掛けては上げない話だが。ヘイ〳〵左樣で御座いますか、吾儕もまア餘忽しい……と、言ひ捨てゝ出でんとするを、呼び返されて振返り、ヘイ何か。お萬どんかエ……萬アノ、ちよつとお前樣に、話すことがありますから、此方へ來ておくんなさい……と、袖を引かれて夫れなりに、離座敷の次の間に、消えかゝりたる行燈の小暗き方に坐らせて、其の身もひつたり傍へ寄り添ひ、あのネ、他の事ぢやア

ないがネ。お前様が此の話計に、お出でなすッた其の日から、兄弟とッてもないやうに、深切に何から何まで、世話をしてお上げなさる、新家の旦那をお前様はまア何と思つてお在でだエ。」ト、聞かれて別に挨拶の、仕様もなければ莞爾して、政「何様した御縁か、お馴染もないに、彼の通りのお世話になるは、實に地獄で佛だと、朝晩拜んで居りますのサ。」萬「夫りやアお前様、眞實にかエ。」政「何じ嘘を言ひませう。また此の位の御恩になつて、左様思はないで何と致しませう。」萬「慈だ、夫れに違ひないネ。」政「何故また其様にお聞きなのだエ。誰かまた陰で吾儕が、旦那を惡く言つたとでも、申した人がありますかエ。」萬「イ、エ其様なことはありませんが、眞にお前様が旦様の恩を、有り難いとお思ひなら、些と話す事がありますからサ。」政「夫りやア左様思ふに違ひはないが、話とか云ふのは何のことだエ。」萬「夫れに就いちやア吾儕等だつて、知らない中から蔭になり、日向になつて、お前様の、世話をもして上げておいたが、夫れもお忘れぢやあるまいネ。」政「御存じの通り旅館で、西も東も知らない吾儕、今斯うしてお康で居て、勤めるのもお前方の、世話になつたお蔭だもの、何忘れますものか。」萬「慈左様なら話をいたすが、夫れぢやアよもや吾儕どもに、萬更恥をお掻かせでもあるまい。オイお千どん、此處へ來なよ。」ト、呼ぶも其の家の婢女なり、お千は何時か片陰に、來てゐたりしや其處へ出で、千「先刻からの話は聞いたヨ。其處でお政さん、實はたのネ。新家の旦那がお前様に

は、惚れて〳〵惚れ抜いて、彼の檀故なら家産を、倅に振らうが乞食をしようが、乃至死んでも厭はねへ〳〵と迄は言ふものの良人持なら、何様な女房や圍女にすることは出来ようが、只の一囘や二囘逢ふ位は當人の氣一ッで出来る事、何卒骨を折つてくれ、一生の恩に着るだと、吾儕等が様な者に、能く〳〵なれば手を下げて、お頼みなさる心意氣、並大抵のことではないと、思へば涙の溢れる程まア篤り聞きなさい、是れまで厚い御深切、義理にも否とは言ひきれまいに、言つた時には涙を流して、大磯で新家の吉重上、云はれる者が女房には、此様な弱い氣になるものかと、僕らはなつと涙を溢して、實にナア御尤もん、此處で話す様なことぢやアなかつた。｢尊左様よ〳〵。眞から惚なり、何様に遅つて居るきたなら。其れだからお政さん、吾儕どもお願ひだ。申ふと言つて上げてお呉れよ。お頼みだつて、言ひ掛けられ、お政は豫て此の様な、事もやあらんと推したる、案に違はぬ此の始末、道を立て断られには、些とも仔細なき事ながら、夫れでは今より此の話を出つけねばならず然様すれば、良人の羞恥なり離し、されば言つて身を騙さば、四重五逆の罪よりも、甚だしと云ふ顔に背き、何にも知らぬ良人の顔に、泥を塗つては死したる後も、其の罪業は消えやらず、如何はせんと此の時に、或は我の顛末寛、死ぬる今際の際しても、斷くやはあらじと歎かれて、暫時思案に暮れたるが、軈て手をさし莞爾笑ひ、政｢オヤ〳〵、まア其様な事かエ。日那もまあ物好

なの。私事をそれ程に、思召して下さるとは、まれても何様な嬉しい、又眞實にした處が、今お前がさいた言の通り、使せても清れても良いと云ふ、名のついた人のある中は、正言の女でも自由になれない、しかしそれにも構はずに、お言葉の通りになつた處が、其時は女の道に背き、且亦此の上迄では、名も知られた旅で居たから、人の女房を取つたと言はれる、立派な顔もしたるから、上ぬ迄上お話はなさいます、彼の詳人が歎くなるか、悪くなるかを仕知れず、悪くなりや御前なし、又其二代目其の時に、其時は夫婦喧嘩の實、其の上も手前何様でもあることは、言はずと知れた其です、あはゝゝゝ、お政さんたりやお前、逃口上と云ふものだ。何故と云ふのに、御人が歎くなつた、まア嬉しい、おいつた處が、先も不義理なかにも左様言ひはしたいわ。其様な事で暮したつても、左様は行かない、まア、夫の事を言ふと、旦那の心は確に鈍に、何して言ると云はれたら、又左様其に言語になつたら、忘れないとも言はれるか、其の点で入れにも此の時は、聞いて来た顔をなつて、いくらでも何でも人間の、恥を破つた心配同然、まア自然此が、御用でもして、一人ぼ二人で左右の手で、犯つて土庭に引据ゑて、此の上は御内の部ぶかりへ、はたと突き入れ其の身は下道あと此の時若の手意の中より、手を差出して縋りと、お政が袖を捕へるに、婦人の手の力に離れといはず抱き寄め其は、誰かりなかりけれと知る、お政は手一しすを取けて、土庭で仰

聞いますかえ、今も家人からお前様の思召しも聞きましたし、私はもう何様にお嬉しく思つて居りますけれど、思ふに任せぬ世間の義理、何卒お前さんも今少し気を長くしておくんなはい、チヨイト寄りき障りの口上だ、まア待てと言ふなら三年三月、何時までも待ちませうが、是れ程までに思ふものを、左様焦らしなさいと言ふのかねえ。但し胸の芋掘は否といふのか。夫れならばまた此方にも料簡が二ツ、狡猾の気に焦られて、元来お房この心には、何と答へん様もなく、口ごもる処へ力にまかせ、有無をいはせず引寄せて、その手を押へて、三住様、夫れ程思つておくんなさるなら、其のやうに何卒ともなりませう、今夜はその上体の差合ひ。何卒二三日、待つて居ておくんなはい。是非、巧く言ふ。昔の狂歌に、月の障りの空言ぞ憂きと誰やらが云うておいた、其様なことを言はねえで二三日、ソレも、其様な御座いませう。其様なら、ヨシ、其様な出来ぬ中、何様しませう」と二三頭なら仕方がねえ、夫れなら屹度此の次には、ヨイか、否とは言ひませんが、当座遁れも二日か三日、扨其の上は如何にして、遁れんものと胸苦しさ、思ふなかにものならぬかなしさ

第十二回

前にも言ひし通り、お掛り、準備を出で行く折、引違へて入り来る磯右衛門、病人の傍へ寄り、さて何

様で御座いやすネ、お嬢様は、ナニ、些し此の頃中より、お顔付も大きに快く見えやす様だ。エ、モシ、ナニ、
何も彼も種々な、お世話になつて有り難エ。ナニ此の分だから、遠からず、軽さ出る様になられまし
う。イヤモウ、一頃りの御様子だから、大きにお案じ申しやした。併し此の頃はお政さんが、夫は大概
居なさらねえから、御不自由でありませう、其の代りにや、内端が気、一つ能い事はありやせんネ、
ハヽヽ、ナニあんなことをしなさる身分のかたぢやアねえが、時世なら仕方もなく、ソレを否で
ありうが、是れも時の運で、何ぢやアありませんか。初めは何様だ、首尾能く行くかと案じやした
たが、何様お断様か、お客が出て見えやした。「お客が出て来なさえ商売は少し陽は好し
えた髪が能いといふもんだから、其なかから此なかまで、石川樓へ直に行けやすと」ナニかといふ
がお前がい、引立てがいいからの事でございやす。左様で、左様な事はねえ。」エ、ニ
左様でもありやせん、其處は流人の働きの一つに少し方のめだけれど、未だ行かなくて、また
異な風聞も受けやすし、此の商売も否いもの、エ、剛だ、左様な事とはエ、他の事でもね
エ、元流行つて煽りの槌の倉でもされなといふ容が、或る時は色気の一種、どれ程堅い女でも、
義理に迫つては心にもねエ、帯紐を解く事にもなり、左様なつて見ると人情で、ソレ情も離れ離れ
から、ツイ深くなつて仕舞ふ、人に後指を指される事な、些くする事も分かりやせん。勿論お

政さんは彼の通り貞實な氣象だから、其處に如才はねえ様子だが、何をいふにも年は行かず、豪富達が深切に、かれ是れ言へば斯うしてゐて、折檻をするよりは義理は悪くも。其方の方が一生樂で、面白いといふ料簡になんなさるめえものでもねえ。こりやアお前様極内々、確りやア知りやせんが、富貴寄の女共が、噂に聞きやア二三何様か、餘儀ねえ事が出来たも知れねえこと、言ひ掛けしが、忽ちに氣の付いたる面持して、コレさ、然しちつと流行ると、直に嫉んで譯もねえに、難癖を付けたがるのが、今時の人情さ。こゝ、必ずこんなことを、お氣に留めなすッちやいけやせん。ヤア〳〵、鳥渡お見舞に來て、とんだ長話になりやした。随分お大事になさいやし。ト、暇乞して立ち出る。後には獨り金之介、尚もお政が何の様に、誘はるゝとも仇心を、出すべき者にはあらざれど、尾羽打枯した其の上に、果しも知れぬ此の大病、些とは愛想のつきた處へ、深切ごかしに賺されて、こゝ左様いふ氣になつたのか、夫れもさら〳〵無理ではない。殊に女子は水性と、昔の人の云つたのは、何方へなりと低い方へ流されるといふ理だらうか。近い例が木曾の巴、又越後の坂額なぞは千百人にも稀な女、夫れでさへ軍が破れて、敵方の妻となつたといふ話も聞いてゐる。况して一通りの女は其の筈、大丈夫と頼みにするのは實に此方が悪いのだト、吾が身一ツを悔み居る、折柄急いで歸るお政、履物なども片付けて、ハイ唯今歸りました。何ぞ食べてお見なさッたか。お枕元へ飴や菓子も、皆寄せ

おまうしたに、[illegible]何も食べないし、[illegible]苦い藥を飲んでも、[illegible]
す。明日から藥も止さう[illegible]たれでもお前は、[illegible]せめて藥でも服らないぢや[illegible]
でもええことに念じられまする[illegible]一郎になるが宜い、[illegible]
の後、首に掛けたる[illegible]を起して喫み盡ず、[illegible]良人が伸びし代に、積る埃
の見え透く、[illegible]
なりとも、其の御恩を報はんと、世に[illegible]
とすれば、聞くも[illegible]た今宵の仕儀[illegible]
はれず、一體生れて[illegible]
る[illegible]何[illegible]心[illegible]
を擧げてお政を見たり、[illegible]
さいうと思はれぬ、其處で[illegible]
八がは死れた[illegible]固然[illegible]明日[illegible]
事し何年生[illegible]たとへ[illegible]不[illegible]
りし先頭も[illegible]

んだとて、其所に行かれるものぢやァなし。だれよりか後に残つて、香花でも手向けてくれりやァ、草葉の蔭で此事の功徳にならァ、便りがないと思はうけれど、在世なつた上は誰なりと、直に世話の仕人は出来る。男と違つて其處に氣楽さ。殊に年の若い中は、ちつとも困ることはねえ。却つて自己の居ねえ方が、立派な身分になられやうこと。愛しい可愛も息のある中、息絶のれば萬事休すと、何やらにも書いてあつたが、息が絶えては人もそれ限り、モ、ウ喋々語らねえ。料簡を出すがいいト、言ふ聲さへも節蟲の、宵夜に弱るばかりなれば、お政は是れを聞く毎に、涙は溢れしも縁や、前後も知らぬ悲歎にて、寔時雨もなかりしが、漸うに顔を上げ、マア何だとつて今夜に限つて、そんな心細いことをお聞かせなさいまし。わたしも、何やァ威様思ひの外に、長びくから氣が弱つて、種々な事をお考へなさるのかァ知らないが、老年ぢやァ有りますまいし、是れ位の病でいちよつと、死なれるものでもありますまい。モウ／＼そんな事を言はずに、ちつとも早く快くならうと精出してお藥を、お上んなさるが宜う御座います。若しまた萬一お死になら、その後は吾儕の料簡、それを彼是お思ひなさるが、やつはり違ひで御座いませう。モウ／＼そんな話は止して、アノ道中で怖かつた、話でもいたしませう。オヤおくすりは何様だしらん。煮え詰りはしないかのト、ト起して量る藥器、マァ、丁度加減が宜かつた。マァ煎じ立てを善くとも、ちつとばかりお飲みなさい。口直しには菓子の中に、有平もありまし

たッけ。」金「ア、モウ藥は服みたくねえ。」政「それだと云つてお前樣、夫れぢやァ快くなる瀨にありません。誠に子供の樣におなりだヨ。アレ夫れぢやァ零れますわね。どれ／＼服まして上げませう。」ト襟へ手をかけ抱き起し、藥を服ます介抱の其の眞實は誰人か、斯くやあらんと思ふにつけ、愈吾が身の疎ましく、存命へ難き身と知りながら、絕えもやらざる玉の緒に、繫ぎ留めたる縁とて、まだうら若き若草も、忽ち秋の風吹きて、垢に萎る、撫子の、花も甲斐なき心地して、其のまゝに打伏したり。お政は更に金之介が今の言葉の忌はしさ、昨日までも今朝までも、快くなつたらば何樣斯樣と、夫れを樂しみ語らひし、言の葉草の今更に、うら枯れたりし不思議さよ。夜々人に招かれて、傍にあらぬは豫てより、承知ながらも物不自由に、思ふにつけての此の強言葉か。死ぬと自らいふ病人に、死ぬるといふは稀なりとや、近きに快くもなるといふ、其の表裏の前表かと、心の中に吉凶を、我が身勝手に引付けて、思ひ返せど返らぬは、當家の佐重が難題を、如何はせんと其の事のみ、胸に餘りて復雲時、獨りつく／＼燈火を、眺めても尚思案は付かず、思ひの外に夜は更けたり。まづ休まんと例の如く、良人の側へ摺り倚つて、寢ようとすれど生憎に、騷ぐ鼠の音にだに、胸轟きて眠られず。聽て寅刻も過ぎなんと、[illegible]しき頃に何時となく、疲れしまゝや[illegible]間睡みけり。思ふ夫婦は[illegible]、是れも幾干のもの案じに、うつら／＼と夢となく、現ともなく幻の、[illegible]

枝に置ける露の身も、今宵消えんと思ふにぞ、妻が寝息を窺ふに、今は熟睡なしたりと見えて、鼾をかきゐ、漸うに牀の上へ起き上り、まづ掌を打合はし、不孝の此の身今此處で、命終るも天の罰、宥させ給へ父上よ、實の母も非業にて、刃に罹り給ひしとか、母子如何なる因果にて、非命に死する是れもまた、前の世からの約束かと、暫時涙に暮れけるが、斯くては果てじと傍にある、脇差を掻い取りて、抜けば玉なす氷の刃、枕元なる手拭とり、くる／＼巻きて右手に掴み、肌寛げて脇腹へ、押し當てがひて突き立てんと、心許りは逸れども、此の程久しき絶食にて、腹はさながら背に付きつゝ、凹みになりて切先屆かず、腕の力も拔け果てゝ、火箸煙管も容易くは、持つ事ならぬ程なれば、暫く刀を持つに堪へず、氣を勵ましても拳上らず、こゝは残念と歯をくひしばり、力を極めて一突きに、突き立てんとする其の弾み、刀は立たで仰向けに、倒れて後の唐紙へ、身を打付けてがた／＼と、響ける音に目覺むるお政、はつと許りに氣も轉倒、物をも言はず走り倚つて、まづ其の刀をもぎ取りたり。

作者申す。此の一條より、佐重が顛末奇談あれど、こと長くして此處に終らず、今第二編の限りに及べば、なほ編を繼ぎ卷を代へて、余ある趣向を述ぶるになん。

清談若緑卷之六　終

清談若緑三編の叙

大慈大悲観音大士の、利益は作者が申さずとも、なさく人の知る處、若有衆生多於婬欲、常念恭敬觀世音菩薩、便得離欲と說かれしは、彼の普門品を披くの人は、皆知らざる處なし。されば廣大無邊の功力、三十三身に現じ給ひ、或は婦女また童男女、何でも都合の宜い樣に、[illegible]給ふはさても重寶。斯かる利益のあるなもって、諸國に建られ安置ありし、坂東西國の巡禮も、皆觀音の靈場なり、[illegible]以て難有とまうすこと、これと誠をもってせざれば、神も佛も納受はあらず、うはの空なる縁日參りは、たゞ閑日の慰みのみ。今此の利生利益をもって、綴らんとするに丁數たらず。故に趣向は前編に讓れども、まづ其の前置の斷りを、序文に代へて申すになん。

曲山人戯題

清談若緑巻之七

東都　曲山人著編

第十三回

それ歌舞はひとり行かずと、古人の詞も故あるかな、此處にお政は若女の腕まへ、淋しさも一層通
さ、漸くに言ひ紛らして、後は右も左も今宵を、遁れて歸る良人の顔を、見れば平生とは事變り、
案じながらも其の儘に、打れて僅か間賃の暇に、道は捗しからぬ吾が身の上、伴ふの者に後れ逢ひ、
聞もうとかしく明るには、もう取つた女と世の身に、實やあらんと言ひ見れば、一體にして無縁なり、
是れにてはつと息を呑き、また金之介を當時に寄せて、其の身は其處に行き暮れて、今ここに何だとつ
て、こんな真似をなさるんで御座いますえ、急んで仕舞つて貴い様な、細しい言ひ負ひの、此
氣樓を取りませう、縦へばどんな無理をしても、何は兎に角も仰しましょうと、思ふ言ひで掃る気を、下
廻りらしく取扱ひ、吾も分らぬ生活暮、お前の手前は頼れる、可愛くなつてゐるさ、思いぢや

ニ恥かしい、所業をするも何の爲。高價い藥も快く、上げたい許りが身の願ひ。それ程思ふ吾儕を捨てて、何を不足に我が手から、死なうとは餘りな。呆れて物も言はれません。夫れとも何ぞ吾儕の身に、氣に入らない事でもあつて、面當がてらの事ならば、遠慮に入らぬ夫婦の仲、さて斯う〳〵だと胸の中を、言つて聞かせて下さいまし」ト、恨み腹立むこと雜ぜて、言ふも門邊を忍び聲、涙と共に口說かれて、金之介は今更に、何と答ふる詞さへ、中々に後悔し、濕む眼元の涙を拭ひて、「左樣立派に言はれては、何と言譯の仕樣もないが、眞にもお前にいふ通り、畢竟斯うして生きもせず、死にもせずして居る故に、お前も種々苦勞する。治つた處が日陰者、生涯人並ならぬ身は、早く死んだが一層增し。左樣した後はお前も樂と、ツイ病みほうけた愚痴から。嘸腹も立つだらうが、堪忍してくんなさえ」ト、言はれて見ればまた外に、何と言ふべき詞もなく、「ホンニ、モウ馬鹿らしい。貴公日陰であらうとも、夫れは初手から覺悟の前。左樣いふ身には誰がした、もとを糺せば吾儕から、其の言譯に死なねばならず、死ぬ位ならお互に、苦勞をするものはない。モウ〳〵そんな愚痴らしい、事を言はずと精出して、藥を服んで一日も、早く快くならうとなさいまし」「アア、誤つたあやまつた」ト、元來さうせる事さへなければ、まづ夫れまでにて問答止み、「湯せんに掛けて置いたお藥が、丁度服み加減になつてゐるわ。サア、早くお服みなさい」ト、進めて振り向く此方の襖子、はや

うつら／＼と睡る目に、ヱヽもう怪しからないョ何時の間にか、夜が明けたのも知らなんだが、モウお日様がお上りだ、夫れに雨戸も開けないで、人が何と思ふだらう」ト、言ひつゝ起つて備切り、座敷の雨戸を開ける折、縁側傳ひに入り来るは、彼の富貴爺の働き女、お萬とお千二人連れ、ヲヤ／＼お政さん、大分お寐りョ今漸う夜が明けたのかエ」「ヲヤ／＼まア、お二人お揃ひで、何處へお出でなさいました。今朝起がけ方から病人が、もといつもより不出来の方でね、雨戸も開けずに置きましたのさ」「左様かエ、夫りやアお困りョ左様いふ時に手がないから、心細くお思ひだらう若しまた一寸手がいるなら、私共の小女に左様言つて、お寄越しならすぐに来ますョ」「ちつとも遠慮はありません」「ヱヽ／＼有り難う御座いますョ長いこつたから快くつたり、悪かつたりして困りますョ」「まアく此方へお這入りなさい。いろ／＼散らして汚いけれど」「ヱヽ／＼、今日はお使ひさト、言ひつゝ、提げたる籠の、蓋は南京染付の、大鉢に鰺と鯖、數は沢山有ませぬ、是りやア、お政さん、當家の旦那が、少ないけれど夜網のお魚、船は今歸つた許り、新しいから御病人のお見舞にあげたいが、お噂ばかりで失礼の一度も、お目に懸つた事がないから、参るのも何だしたもの、お前が其の口上で、能く言つて上げて頂戴。珍らしくも何ともないが、唯新しい處が、身上、早く／＼とお言ひなさるから、大急ぎで来ましたの」「ヲヤ夫れでハお政さん、アノ旦那がまた、昼時分にやつて来るとお言ひだ お前様、

其の頃に用がなかァ、鳥渡お禮に來ておくんなさいナ。左樣しないと吾儕共が、折角屆けたのが知れないから」ト、言ふも心に一物の、ありとし知るはお政のみ。聞き果てて形をあらため、「是れはモウお前樣方、誠に御苦勞で御座いました。是れはモウ有り難うこト、一禮述べて暫時考へ、「新家の旦那の思召し、御深切に誠にモウ、有り難う御座いますが、是れはお返し申します。お前樣方も重いものを、數回御苦勞さまながら、持つて歸つてお家に、左樣仰しやッて下さいまし。折角の思召しで、新しいお魚を、澤山下さいましたけれど、今も申す通り病人は、曉方からぢつと不出來。然もなくツてさへ此の頃は、重湯も盃に一ッとは、むづかしい大病人。煮ても燒いてもお魚なんぞは、なか／＼口へ入りませぬ。左樣して見れば是れ儘に、人に遣るか然もなければ、腐らしてしまふばかり。夫れでは誠に勿體ない、此の儘お返し申したら、また何處へでもお遣ひものに、なりませうと思ひますから、何卒其の通りを宜いやうに、仰しやッて下さいまし」ト、嘸喜ばんと思ふに似ず、半ばは愛想盡しの口上。さては昨夕のはなしが、氣に當つての腹立か。忌々しやと心には、思つて居れど夫れとは言はれず、聞いてお千は頰膨らし、「ますやお政さん、異だねえ。お前のお國は出羽か越後か、そんな事は知らないが、他人が折角病人の、見舞だとッて寄越した魚、假令病人が食べられないとて、直に返すといふ法が、マア此處等にやアありませんネ。人に遣るとも腐らすとも、夫りやアお前の御勝

手次第。お氣に入らうが御贔屓にでも、遣るが宜い。何程茶屋小屋の婢女でも、得意旦那に言ひ付けられて、持つて來た其の品を返されましたと何の顏で、そんなことが言はれませう。能く考へてお見なさい。」政「ナニ、左樣言はれない事があらう、お前方は旦那から、言ひ付けられたお使だらう。使ならば口上を其の通り言ふのが役目さ。中に立つてかれ是れと、言ひなさるのは大きにお世話だ。夫りやァ成程病人が、食べられないからとつて懇意な人から、深切に見舞にくれたを、返すといふ法は吾儕等が、在所にもまアない事サ。夫のやァ人によるのけりだ。作家の旦那が良くと、心安くでもありはしまいし、今もお言ひの通り、唯一回も逢つた事のない人が、傾はうともお見舞を、くれる條もなし、又此方で貰ふ譯もありませんから、夫れで左樣言つたが何樣したエこと、潮にわたるお氣色を窺へ、言ひ放てば横の傍のお高、[illegible]何だかだれかおのやァお政さん、結構かしに來たやうに、聞こえ誠に外聞が惡いやネ。何も其樣に筋を出して、理窟を並べなさる事はない。成程其の御病人には、度もお逢ひなさらないけれど、お前と吾儕共が、二階で度々心安く、何樣かするやァ定まつた、花の外にも困るだらうと、澤山か些とか知らないが、紙に捻つて密りと、袂へおいれの事もあり、夫りやアお前、言はず語らず、先さまにも實がありやァ、また此方にも何とやらだ。其處で今日のお御見舞も、御病人とはいふものの、一つには其の看病人に、上げたい譯でもありませう。ネ、味に絡んしお

萬が口振り、お政は聞くさへ聞きよからず、膝立て直して眞向になり、政「お前の樣に左樣お言ひだと、吾儕が何樣か枕でも、つける樣に聞えるねェ。畢竟斯樣いふ不束な、身を持ちながらお前方を、お賴み申してお酌に出るも、據ない薄命、適々情のあるお客が、噂を聞いて可愛さうだと、心をつけて下さることが、無いではないがそのお方が、吾儕を自由にしようといふ底意許りの人はなし、言はば乞食に施與同然。夫れも數回辭退して、夫れでも達て言はれれば、貰つた事もありますのさ。併し夫りやアお樂なんぞの、當然だと人も言ひますゥ。何は右もあれもう是れからは、お酌にも出ませんから、左樣思つてはおく／＼なつてェ、モウ／＼否なことだ」ト、言ひつゝ其處の長煙管で、煙草燻らして居たりけり。

第十四回

其の時までは後向き、寐たか起きたかしらね共、流石武士も斯く許り、稍あつて身を起して力なき、肘を突きつゝ、枕を離れ、此方を向きて、二人を見やり、「マア／＼、お前がたは富貴寄とかいふ、邊の茶屋のお女中さん、何かの御苦勞で御座ります。先頭からして不束もの、種々お世話になりまする。承ればお聞き遊ばし、お客さまからしてお遣ひ物。ハイハヤ、ツヒに見も聞らぬ、お方ながらも御深切な、なか／＼仇

には思ひませぬ。夫れを何樣した譯だやら、お返し申すの受けぬのと、何か理窟のありさうに、申すは皆此方の鈍相、勿論今朝から吾儕が不出來、夜の目も寐ずに種々と、氣を揉んだ其の擧句、胸もむやくやしませうから、其の八つ當りと思はれますが、夫れでは何樣も濟みません。お腹も立たうが吾儕に免じて、堪忍して下さいまし。コウ〳〵お酌に出ませんと、立派に言つても出ないでは、宿賃さへも拂はれず。露命を繋ぐ綱も切れ、なか〳〵左樣は成りません。何分おたのみ申します。ト、言ひつゝお政を打見やり、モシコウ、鳥渡此處へ來な。此の女中衆は前々から、お世話になる方ぢやアねえか。心の中にどんな不足か、ある事かア知らないが、餘り大人しくねえこつた。例へば自己を知らねえとつて、不斷お前を贔屓にして、くんなさる旦那なら、見棄ちや下さるめえ物でもねえわけ。それをそんな愛想盡し、どうも自己にやア譯が分らねえ。併し夫も否に及ばぬとやら、言つた事は後へ返らず。能くお二人さんへ謝言して、先さまへは內證にして、お貰ひ申すが宜い。復自己が左樣言つたら病人の癖に無言つてるのと、叱るかア知らねえが、餘りだから據なく、口出しをするんだア。モシお二人さん、聞いて下さい。全體不斷は柔和な性質で、マア直朴な方だけれど、惡い蟲があると見えて、何樣かすると一年に、一度や二度は發りやすが、理窟を言つても分らず。何でも自己の補を張り、其の時にやア死ぬも生きるも構はねえ見幕だから、マア又始まつたと捨て措くと、仕舞にやア

治るやうだ。さて先刻は悪かつた、何卒堪忍して下さいと、言ひ出すから今度は宜いが、また重ねて気を付けて、よく慎むが宜いと叱つて置くのサ。夫れで吾儕は先刻から、いつそ困つた例の癖か、始まつたわエと思ふから、早く口出しをしたかつたが、左様自由には寝起もならず、お前方は御存じないから、気が違つたかとお思ひだらう。イヤモウ／＼気の毒だつた。ト、言ふは早速の作り言、とも知らざれば二人のなか、萬「オヤ／＼。左様で御座いますかエ。然うとは知らずお政さんが、例の気にも似合ひなさらねエ、何様した事かと實はモウ、不思議に思つて居ましたが、其處が売言葉に買言葉とやら、吾儕共もかれ是れ申して、誠にお気の毒。サアそんならお暇にして、後に気の治つた時分、また来ませう。」ト、起つて行けば、政「コウ／＼お萬さん、お帰りなら、その鉢を持つて行つておくんなさい。エヽ、ノウ／＼、そんなものは見るも否だ。」ト、言へばお萬はふり返り、萬「アヽ、持つて行きませうから、お魚をあけておくんなさい。」ト、聞いてお政は立ち上り、彼の鮮けき魚どもを、縁側へ打ちまけて、政「サア、持つて行つておくんなさい。」ト、其の様殆ど狂人の、所置振に異ならねば、腹に立てども金之介が、言諍したる病なら、挪揄ふとも詮はなし。こんな所に長居をすれば、段々腹の立つ事許り。サア／＼行かうと鉢を提げ、二人は早々帰り行く。後見送つて金之介、顔を顰めて吐息つき、金「二人に餘り気の毒だから、自己が早速の作り言、納得さして帰したが、サテ、其の仕打は何様した

譯だ。何ぞ自己が氣にいらねえのか。また其方に譯があるか。實に狂人同然だ。假令此の上胸なんぞに、出ねえといふ料簡でも、さて其處が世間の交會。今の樣に言つて見ると、ツイ喧嘩にでもなりさうなこ人が聞いても大人しくねえ、女だと外やア言はねえぜ。定めて彼樣に言ふからにやア、お前の胸にきつとした、譯のあることつたらうから、自己も此の通り煩つて、種々心配もして居る身の上、何事もつゝみ隱さず、言ツて聞かしたが宜いぢやねえか。ト、言ふも漸う息切れて、ぽつたり轉げるを手早く押へ、嗟ア、アレ危い。夫れだから餘り、氣をお揉みなさんなと、言つた處が左樣もいかず、善いにつけ惡いにつけ、病氣の障りになる事許り、誠に浮世はモウノヽ否だ。倂しお前樣の作り言、何樣かすると吾儕の蟲が、不意に發つて其の時には、狂人の樣になるとは、能く言つて下さッた。たりやア成程どんな譯があらうとも胸に收めて、他人は他人の交會を、しないけりやア濟まないと、隨分承知して居ますけれど。餘りと云へば情らしいこト、言ひかけて泣き伏すにぞ。金之介は不審顔。金「まア、此處で泣かずとも、譯を言ふが宜いぢやアねえか。餘りとは何樣したこつた。」ト、問ひ詰められて顏を上げ、お「全體お前樣にこんな事は、夢にも知らせまいと思つたけれど、女のツイした淺はかから、斯うなつて見れば隱し立すりや、かへつて疑ひを受けるから、正直に言ひますが。ト、豫て新家の佐重が戀慕、倂し時々餘計な物も貰つて時の間に合はしたが、今は却つて責めとなり、延引な

らぬ昨夜の手詰め、漸う遁れ此の上は、何樣して其處を切り拔けようと胸にも餘る一苦勞、歸つて見れば顏付も、何樣か例の樣でない。何ぞ讒言した人でも、あるかと思へど聞かれもせず、心ならずも曉方に、唯一寐入りの其の間に、身體も縮む刃物三昧、思ふに畢竟相談の、上とは言へど每日每晚、男を相手の稼ぎ故、脇から見れば浮氣でも、發したらうとの疑ひに、斯ういふ事にも成つたるか。されば明日より是れを止め、假令飢ゑても、凍えても皆時節と諦めて、手に掛る物ある中は、賣食にして其の上は、夫婦野に立ち袖乞を、するとも今更是非もなし。アノ淨瑠璃でも聞いてゐる、九十九の兒女初花も、其の良人の勝五郎も、元は立派なお侍の、果てでも運が惡ければ、躄車の非人とまで、なり下つても立て通す、心の操が女の鑑、左樣ぢや〳〵と胸の中、大方覺悟した處へ、其の新家の佐重から、見舞と云つて寄越した魚、使の二人も一ツ穴、陷れんと計畧む奴等、憎さも憎しと愛想盡しな、口に出任せ言ひ立てて、こははしたなきごと、然ては蔑み給ひけめ、とは言ふもののたれ儘では、果てしも付かぬ物爭ひを、脇から程能く言ひ譯いて、下された故吏の二人も、たれを其の座の起ち際に、歸つたのみか癇癪の、所爲と思へば憎みも薄し。萬一此の上交會ふ事が、あつても其處の程が宜いことと、一伍一什を物語れば、金之介は具に聞き、ふム、たれで譯が分つた。如何さま無體の仕打だが、歌妓活計する身にやア、そんなことは幾干もある。其處を巧く切り拔けて、面白可笑

しくするのが上手、其れを其様に苦にするなァ、まだ／＼お前が至らねえのだ。成程是れたア引いて仕舞つて、乞食に成らうがかまはねえと、言つて見りやア理窟はねえが、だれにも矢張責任がある。自己は斯様して煩つて、足腰は自由に立たず、若えなと見る時やア、宿無し奴等が仕舞つて、慰ますにやア措かねえとサ。是りやア如何さま左様だらう。左様して見りやア个の苦勞に、百層倍か千層倍か、其の時こそは死ぬより他、實に仕方はない身となる。其處等を能ッく考へて、國に歸るよりのものなら七ッ八ッで濟む樣に、すんだ各働きサ。否かるものを斯樣言ふと、思ひ通りとなねえ樣だが、何樣か工夫の付け樣も、ありさうなもんだなア。まァなんにしろもゥ少し、辛抱してくれねえか。自己もモウ二十日も經つたら、徐々歩行ける程にやアなるだらう。また左樣なれば其の時に、しやうもあらう。一ト、かれ是れを、言はれて見れば行末の、覺束なさに胸迫り、たゞ涙のみなりけり。

清談若緑巻之七終

清談若綠卷之八

東都曲山人編著

第十五回

叢蘭茂らんとすると雖も、秋風之を破るとかや。お政は未だ二十にも、足らぬ處女にありながら、心怜悧しく實をば、立て通さんとの氣象故、艱苦に送る月と日も、是れぞ前世の約束か、身の薄命と兼てより、覺悟をすれば憂しともせず、朝な夕なに病む人を、看病りながらの片手業、うき川竹の流れの身に、少し勝るか劣るかの、差別もいさやしら樫の、堅き心といへばえに、浮氣を鬻ぐ酌取り女、もし疑ひも受けんかと、良人の氣さへ料り兼ねる、其の折柄に佐重が手詰め、心一ツに置き兼ねて、末は野となれ山腰の、垣ほにはへる青葛、返らぬ事を繰り返す、處女心ぞ不便なれ。暫くありて涙を拭ひ、「吾儕は何にも知らないから、そりゃア否だ此の位なら、乞食をしてもと思ひましたが、聞いて見れば、又其處に、折檻な事がありますねえ、仰しやる通り最う些と、辛抱をしませうヨ。夫れだか

らお前樣も、能く精出して藥も服り、又我慢してお飯も、澤山あがつてお言ひの通り、二十日も經つたら徐々と、歩行けるやうにお成んなさい。左樣さへなれば今までに、苦勞をした甲斐もあり、何樣なにうれしう御座いませう」「なんでも一度は是非快くなつて、此の恩返しをせにやアならねえ。斯うして夜晝寢てばかり居て、種々に考へると、唯お前が可哀さうで、實に氣の毒でならねえから、何樣も氣が揉める」「何だねえ、今以て、其樣な他人がましい事を仰しやる。何で氣の毒がありませう。それやアお互で御座います。マア／＼、其樣な水ッ臭い、料簡をお出しなさんな。たゞわアお前樣他人同志の、言種で御座います。お前樣だつて、昔はおなじことや、昔日御樣で不自由なく、居られる身體を斯うなつての。其樣なことを言ひ立てましたら、何時までも甲斐はしません。それ／＼たれは言ひッこなしさ。オヤまた熱が出て來ました。先刻から寢たり起きたり、冒の邊が冷えたからでありませう。能く引被けておいでなさいよ」。夜着引着せて蔽き付け、寢衣を引きずで離れなれた。それに引替へ、お萬とお千は、何か胸々咳きながら、暗へ入れば最早の格子、今日も亦との約束も、叶ひ寢ねてお疾くに來の。「モーイヤ、二人共御苦勞をなさ、何樣だ、家の魚を造つてくれたか、今朝は何樣な顏をして居れエ」。「モーいえ、彼のやア、聞けましたが、イヤハヤ、大失敗、吉備もお千も、立場で失つて困りました」「左たのやア、又何樣しに端へ……何樣した山が全然狂ひ、一、二……お聞きなさい

持つて行つて御口上を言ひますと、此様な物を貰ふ譯はない。持つて行つて返しておくれと、寄つても付かれねえ挨拶サ。」佐「ハヽア左様か、腹ァ立つてか。」萬「大方左様で御座いませうが、ノウお千さん、彼の時は、ホンニ敲き毆つてやらうかと思つた。」千「左様さ、夫れでもお前の氣で、能く辛抱して居たヨ。實にまた餘りだものヲ。何様な地藏様でも觀音様でも、堪ッちやァ居られねえ。」佐「マア何だか異りきだが、終から薩張りやァ解らねえ。能く靜かに始めつから、譯を話して聞かせねエ」ト、言はれてお萬は聲を低め、一伍一什を斯う〳〵と、ありの儘に物語りて、萬「これ〳〵、彼様な狂人は、お前様仕してお仕舞ひなさい。合のねえ國からでも來やァしめえし。併し夫れでも病人が、切なさうだけれど起き返つて、譯を言つたり謝罪つたり、するものだから吾儕共も、些と氣を取直して歸らうとすると、彼の魚を縁側へぶんまけてサ。何程惡い蟲の癇癪が、病だとつてあんまりだ。彼様なやつは、些と氣に入らねえ事でもあつたら、咽喉笛に喰らひ付くか、又寢首でも掻き兼ねはしねえ」ト、口から出任せに罵るを聞けど、佐吉は眼を塞ぎ腕組して、物をも言はず白く居りしが、吐息して眼を開き、佐「成程話を聞いて見りやァ恩も知らず義理も知らず、人間の皮を被つた畜生同然の仕打だが、イヤ其處に又譯もあらうよ、自己が長え間、抱寢こそせね隨分贔屓にして種々と、話し合つた事もあるが、年のいかねえにしちやァなか〳〵怜悧で、然して實もある生まれサ、夫れだから何様かして下

に入れてえと種々するが、ハテ何様も行かねえかな。昔も斯ういふ話がある。器量の美い、姿が二人あつたとサ。其處で自己のやうな物好が、二人ともすびいて見たが、一人は直に承知したれど、モウ一人は何様にしても、なか／＼承知する氣色なし。其處で其の亭主が死んで、二人とも何様かしにやァならねえといふ時になつて、其の承知しねえ方を抱へたとサ。其處で心安い人が言ふにやァ、彼はお前大骨を折つても、一向承知せず憎かろうが、夫れを今になつて抱へるたア、何様いふんだと聞いたれば、ハテナ此方の物にしちやァ、正しある者だと堅く守つて、他のいふ事を聞かねえのが、頼もしいと言つたといふことさ。お前も是れまで何様に言つても、承知しねえのは正しある者だと、堅く守る律義な料簡、其處を何様かして手に入れりやァ、心の變る氣遣いなしと、見込んで骨を折つたのだァ。今日の仕打も憎い様だが、良人の前へ義理立、明に見せようとするんだらう。見ればたれほどに、憎いまでの事もねえ。よし／＼何様で左様いふ仕儀ならやァ、なか／＼急にやァ行くめえけれど、始終は自己が手に入れて見せよう。何でも情合は根較べ、辛抱が肝心か、勝つに違へはねえものだ。ハヽヽヽ。」ト、故事來歴まで引出して、腹を立つる様子もなければ、二人は呆れ、「何程根較べでも辛抱でも、内儀様は否だねえ。夫れより他に幾干も、女の兒に勝つたのがあるぢやァ御座いませんか。」「イヤサ、其處が相縁奇縁、お前方は左様思つても、又自己が目から見りやァ、他に勝

つたのはよ〻ねエ〳〵、何樣いふものか寐ても覺めても、些とも忘れる間はなし。是れも何かの因果だらう〳〵。小首傾けてなか〳〵に、思ひ切るべき樣にも見えず。お萬お千も心の中には、呆れるものから語りだし、餘り惡く言うたならば、却つて吾々憎みを受け、黄金の蔓を失ふなりと、まづ宜い樣に會釋ひて、「其樣なら是れから復行つて、糺めて何樣か相變らず、御座敷へ出る樣に、能く言つて參りませうかね。」「其樣なら何卒左樣してくんな。」良人の前おや〻些と差合だが、若し又宜い間があつたなら、さア是れから佐重さんは、構はないとお言ひだから、心配なしに出て來なと、能く左樣言つてくれなせエ。」と、頼まれて點頭く二人、また隣へと出で行く。お政は左せん斯くせんと、思ひ惱みて氣苦勞は、病の障りと知りながら、誰に語らん人なければ、良人が枕の傍に寄り、ねエもうこんなことなら此の活計を、止めて工夫があるならば、何樣な賤しい水吹女の、業も更々厭はぬ料簡。さて何樣したらと言ひ掛けられ、他には更に思案もなし、先刻も呉々言ふ通り、好んでするではなけれど、今から馴れぬ水吹業、晝賤を切らしたとて、今の四半分にもならず、些とは苦しく舍たと思ふ、事もあらうが其の代り、和かい着物をきて、重い物には三味線ばかり、夫れで何樣やら斯樣やらなれば、これに越した事はないこセウ新家の佐重とやらも、先刻の話を聞いたから、まア當分は何とも言ふまい又其の中に快くなれば、何時までそんな事をさせよう。セウ些との間と辛抱して、くれるが宜いと良

人の言葉、如何さま外に仕方もなし。夫れなら左樣と相談の、折柄來るお萬とお千、先の樣子に引代へて、何にも言はず笑ひ顔、「吾儕どもの家の衆も、何で腹をお立ちだか、精しいことは知らないが、折角お客にお馴染も、段々殖える其の端で、止さうとは餘り短氣。そこまた困ることでもあるなら、共に氣を付けて上げようから、相變らずお座敷を、勤めておくれと皆が言ひます。何卒氣を直して晩からでも、出ておくんなさいといふ。さはあらずと此方より、言はんと思ふ折なれば、お政は程能く言譯なし、日が掛らば何時にても、行くべしと約束し、二人の女は歸り行く。夫れに付けても佐重がことのみ、たゞ氣に掛りて止み難ければ、日來念ずる觀音を、一心不亂に伏し拜み、何卒佐重の大難を、除け給はれと、毎朝巳刻まで、鹽斷してぞ祈りける

第十六回

其の話説は休題。是れよりまた錦之介と、お政が居らずなりし翌朝、老女八十島が計らひにて、泉水より突き流し、坂東太郎へ出でしと聞き、お雪はこれを歎して、若黨を使にたて、向島へ此の事を、些とも早く知らせなんと、文細々と認めて、僕に急ぎ遣りけるにぞ、紫雲は驚き何事ありて、斯く早朝に使の來しと、封を解く間ももどかしく、披いて見れば斯樣々々と、記せし次第を書いてあ

りヽ夫れに就きては金五郎が、参りて相談すべきなれど、其のことによつて出兼ねしまゝ、まづ取敢へずお知らせ申すと、讀みも終らず驚くのみか、胸は轟き手足は萎えて、人心地さへあらぬまで、途方に暮れたるありさまなり。下女のお澤はそれとも知らず、勝手元に居たりしが、茶を入れんとて奥へ來り、紫雲が常にあらざる顔、一目見るより打驚き、「御隠居様、何様なさいました。假名家様から早いお使、モシまた彼方に御病人様でも、あらツしやるので御座いますか。」紫「ナニ、其様な事じやァないが、ゆうべお政と金之介が、お狂言に紛れ奥庭で、何か話をして居た處を、目つかつて大變に、なららうとしたを八十島さんが、能く捌いて兩方に、疵もつかず濟んだは宜いが、お泉水から舟に乗せ、利根川へ突き流したとサ。夫れでは大方兩人とも、命に別條はあるまいけれど、吾儕は其方も知つてる通り、本店へきつとした、返事をしたのが昨日の朝、大方今日はァノ出久助が、結納の日を極めようとつて、今にも來るかと思はれるが、左様したらマァ何と言はう。假令此の文を證據に見せて、實に斯様だと言つたところが、疑ひ深いァノ出久助、たりやァお前方が言ひ合はした、狂言だと言ふだらう。また夫れ程に言はないところが、何程吾儕が女だとつて、是れまで段々ひきしろひ、漸く昨日極つた縁談、またこんなことが出來たと、何の面下げて言はれよう。シテ見れば吾儕も共に、影を隠すか、然でなきやァ、死んで心の潔白を、明すより他はないコトヽ、了得平生は男勝りと賞めら

れたりし紫雲なれど、いま差當る不意の變、何となすべき思案もつかず、たゞ戰慄と我にもあらで、胴震へするばかり。お澤は暫時考へて、澤「まア何にいたせ、大變で御座いますネ。しかしお二人さんのお身の上に、別條がなければ何より重疊。其處で貴方は斷ゝ遊ばしまし。モウ御膳も出來ましたから、隨分急いで召上つて、出久助さんの來ないうち、假名家でも、入らしツて、お後の事から何も彼も、御相談遊ばして、事によつたらお泊りに、なつても構ひは御座いません。其のお留守に出久助さんが、參りましたら私が、宜い樣に申しまして、何樣で長い事はいけませんが、マア五日や六日は催促に來ない樣に、それは私が巧くやりますよ。夫れだからお案じなく、寛りと御相談遊ばしまし。また五七日も延びます中には、善い御工夫も付きませう」ト、流石は年さへ四十に近く、紫雲に久しく使はれて、內外萬事を知り拔きて、かくは圓滑に言ふたれば、紫雲はいとゞたのもしきことに思ひて、紫「夫れぢやァ左樣しようかノウ。併しなんぼ此の節の、一介遁れでも、あんまり滅法界なことを言つて、後で困る樣な事は、如才もあるまいが、氣をつけて騙しておくれヨ」澤「エヽ、エヽ、それとも後々の、障りになる樣な事は申しません。其の代り御酒とお肴を、些とばかり取りますョ」紫「マア、夫りやァ原岩へでも、言ひ付けて取んなせエ。其樣なら私ははやく行かう」澤「ハイ、御膳が出來ましたから、一膳召上つて入らしやい。」紫「なんだか胸が一杯で、御膳も食べる氣はないから、ひよつ

と又吉御爺が來ると惡いから早く行かうヨ」ト、支度もそこ〳〵假名家より、使の男を供に連れ、道をはやめて急ぎ行く。お澤は主人を出しやり、紫雲が不斷著其の他の、取散らし物片付けたれど、膳は其のまゝ其處にあり。其の身も未だ朝飯前、とは言へかれ是れ閒入りて、大方九ツ半頃なりし、案に違はず番頭出久助、喘ぎ〳〵て入り來り、其の樣子を見て、出「アヽ、隱居たァ云ひながら、朝何時まで寢て居る、だこ見りやァ何樣か朝飯前。サテ〳〵樂な身の上だぞ。自己なんざァ今朝起きて、問屋衆を、一軒歩いて宅へ歸り、夫れから飯を喰つて出て來たんだ。ハヽヽヽ。丁度積ると、半日振り用が違はァ。さても夫りやァ左樣と、隱居さんは雪隱へでも行つたのか。」澤「イヽヤ、番頭さん、下にお出でなさいよ。此處にお茶も汲んで置きましたに、何をうろ〳〵なさいます。」出「ナツト左樣か、有り難し。お前の所ぢやァいつも〳〵、大層好い茶を入れるノウ。自己も隨分茶は好きだが、其の高さにやァ呆れ返る。何時も六文目の茶は二十文目か、贔屓分で、ナァ四文目ヨ。其の上稱が辛エから、袋まで小さくしたぞ。ハヽヽヽ。」澤「實に餘りで御座いますネ。」出「これサ、隱居さんは何處へ行つたヨ。今日は千秋萬歲の、目出度なゝとおめでたい事に就いて來たんだァ。」澤「ヲヤ〳〵夫れぢやァお嬢樣がお極りになりましたか。」出「まだ知らねえか。昨日の朝、悉皆極つたァ。夫れに就いて旦那は急つ込み、今朝早く行つて結納の日を、取極めて來いとの事、夫れでわざ〳〵來たんだァ。」澤「オヤ〳〵、左樣

で御座いますか、夫れはモウおめでたう御座いまア。時しも一番頭さん、夫れにしちやア、若當つ

困つた事がありますヨ」「エ何だ〳〵、困つたことたア」「サ、昨日急に御隱居さんは、お誘はれなさ

いましてネ、榎の島から、鎌倉金澤、事に由つたら箱根の湯へ、ずつと廻りかたら入らうと云ふて、皆さんに

なさいましたネ。左樣して見ると、マア當分、お歸りは御座いませんか、箱根へお廻りなさいます所なら、

七日か八日はお掛んなさいませう」「エヽ、[illegible]だ事た、イヤ困し塩だらう、一寸お目に」を

掛いだ[illegible]、マア何でお申しませう」「夫れでもお顏、默い出て、直ぐ濟む事でありませう」「夫れ、

言はれてお澤は氣がつけど、其處は役年增女の巧者、「ヘ、夫れならお爾樣、陰膳を据ゑて居りますで

御座いますネ」、早速の氣轉も實らしく、「夫れでいゝ、何處でも宜いが、何れさ[illegible]の

相談にも行かうといふと、お出でなせと云ふ中、なかに、其の中に榎の島出立と、隱居人を旅に

した、仕打がおやアあるのですか、どんな何樣も苦ありかねエ、早くと歸つて旦那にさう言つて、[illegible]の

腹立で、何とか御しやりやア榎の島へ、早飛脚を立つて呼び返さうが、顏色かはつて憤るにか、

るを、お澤は傍へずつと寄り、「マアしと、其樣なことを仰しやりますれまだ御座いませんか、今日や明日は待

れたつて、左樣してまつて居て見りやア、間違が出來はありませんわネ、何樣か其處にお前さんが、番

み込んで旦那のはうは、宜いやうにしてくださいましナア……、何樣して左樣はならねえ

第一自己が濟みやせん。」ト、憤りきつたる其の折柄、使「ハイ、お誂へで御座ります。」ト、原岩から して肴と酒、燗さへすぐに程が宜し。お澤は驅け出し請取つて、澤「マア、一ツお上んなさい。」ト、出したる猪口を拂ひ除け、出「ナニ酒を飲みにやァ來ねえ。然して此處の奉公人に酒を振舞はれる筋はねえ、サア〳〵除きナ。」ト、なほ起ちかゝるを、しつかり押へて、澤「ナニ、是れは吾儕が御馳走ぢやァありません。ひよつとしたら番頭さんが、お出でかも知れないから、若しお出でなら朝でも晩でも、一ツ上げておかへし申せと、言ひ付けられて居ますからサ。まア、ともかくも手にお取んなさい。御婚禮に滯るノ、歸るノ戻るノと言ふ事は、縁起が悪いぢやァありませんか。」ト、言はれて、出「ホンニ左樣だッけ。其樣ならめでたく。ノウお澤どん。」澤「左樣サ、それがおめでたい。かさね〲のお歡び、重ねて三ッは牀杯、四ッ夜なかのお樂しみ、五ッ出雲の神樣が、六ッ結びし縁の絲、七ッ仲好く八千代まで、共に白髪や九十九髪、十は疾うから聟さまが、惚れた嫁御の愛らしく、暮し盛りの婀娜娘。サア出久助さん、いま言つた數程お飲みなさらぬと、折角結んだ色絲が、ツイ解けようも知れません。サア〳〵〳〵。」ト強ひられて、煽り付けたる朝の酒、頻りに廻りて、出「アヽ、宜い〳〵自己も一緒に鎌倉へ出掛けりやァ宜かつたッけ。勿論紫雲は世捨人、世事に構はぬ處が氣に入つた。旦那の方へは何とか言つて、五日や十日は待たせて置かうサ。何樣するものか。」ト、出久助が、舌も廻ら

は好い機嫌、お暇は得たりと云へば勸めて、其の夕暮に歸しけり。

清談若緑卷之八 終

清談若緑卷之九

東都　曲山人　著編

第十七回

紫雲は急ぎ假名家へ行き、互に顔を見合はせても、無事を歡ぶ暇もなく、紫「サテ凶なことお互に、體が潰れし物がいはれぬ。お前の方では金之介を、何様なさる思召し。此様な事なら何の様にも、仕方は幾干もあつたらうに、左様いふ譯とは一點知らず、既に昨日も驅け寄つて、申した通り本店へ、立派に挨拶した口も、まだ乾かないに此の始末。マア差當つて言譯の、仕やう模様もありません。マア何様したら宜からう」ト、吐息吻くのみせん方知らず　金五郎は點頭いて、「エヽお前の難儀も察し入る。先づ男で武士なら、扨々申し譯もない仕儀、今更一言も御座らぬが、草を分けても當人を、尋ね出して首に致し、進上いたす拙者が心底。御不承ながら夫れまでの、猶豫をお恃み申しますと、云つたら先でも極めたといふ條、まだ結納さへ贈らぬ中、確かに女房といふではなし。其様なら首で請取

りますうと、言ふ譯には出來ませんから、成行ないは是非がない、と言つた許りで仔細はないが、何
いふにもお前はな、今彼様して楽に暮すも、皆店のお蔭と云へば、彼何様も困る譯サ。左様かと云つ
て隠したとて、何時斷様といふ當もなし。言ひ難いこうだが其の事を、有體に言つてしまふサ。其處で
彼是本店風を、吹かして權識を言ふならば、其の時男等が出て意見をし、當人を能く排合つて、両方
してしまひませう。我等なでは部屋住なから、召し出されて勤める者が上、其の夜は植木作りだと
八十島殿が計らつても、身體がなければ其の儘捕められず、唯一人家出して、行くも知れずと届ければ、
別に仔細もあるまい、と、今朝重役の衆も言はれる。近い中其の積りに、話つてしまひませう。
口では言へど身おれた下に、苦悩を苦薬にて、捨てし小判の道連に、點一つ涙を落し、義理あるこ
だと格別に、心を付ける言葉が眞實、さつ人跡に生れて、此の家の跡を取らるると、思ひし事も
水の泡、心からとは云ひながら、世間師のかの娘見、元來少しの貯へなく、今より直に何處へ、すん
より他に思案もあらじ、と思へばいとゞ不便さに、思はず涙を、人に見せじと堪へしが、當
さへも盡く吹きかけ、お常は殊更倫々と、夫れは成程尤もだと、只打見れば幸ひに、
草木を分けての苦勞は青と、云ふ身にもなりますまいが、兩人共に世間見ず、何様して其の日を送
うと、いふ荊棘もありますまい。さうして見れば大小や、身の廻りのあるうちは、賣食にもしませう

けれど　夫れさへ十日か二十日の間、夫れから後は乞食より、外に仕方はありますまい。心がらだと云ふものの、是れが初手から覺悟して、致した事なら是非もないが、思ふに左樣ではない樣子、嘸今頃は後悔して、二人で泣いて居りませう。ならう事なら人に人を、掛けても何卒尋ねあて、連れて戻つて人知れず、置く譯にはなりますまいか。」雪「ハテ馬鹿ないふ内證で、其樣な事が出來るものか、植木作りと八十島殿が、名をつけたつてお姉女始め、押足輕小奴まで、掛り合つたものは皆知つて、惡事千里と世の喩へ、誰知らぬ者はない。假令天地が轉倒かへり、雪の中で櫻が咲くとも、なか／＼左樣なる事ではない。成程難儀も艱難も、しようけれど自業自得、釋迦や達摩が出たとつて、救ひ樣かあるものか。彼等が事は論にも及ばず。たゞ氣の毒なは白翁樣、モウ行く先もないお老人に、こんな事をお聞かせ申し、日頃からして金や／＼と、實の孫とてもなく、可愛がつて下さッた、其の恩返しに情ない。」ト、半ば言ひ掛けはら／＼と、落す瞼の溜雫、さすが父子の情態と、他所の見る眼も哀れなり。折柄奥の小使が「金五郎さま召します。」ト、臺所より呼ばはる聲、お雪は出でて、雪「承知したヨ。今直にお出でなさる。」ト、挨拶聞いて立歸る。金五郎は衣服を改め、金「其樣なら姉樣、行つて來ますが、事に由つたら遲くならうが、マア何にしろ今夜は此方へ、泊つてお出でなさるが宜い。また能く相談しませう。」ト、急いで御殿へ出で行けば、後にはお雪と差向ひ、返らぬことを繰り返す、

愚蔵より他の言葉もなし、其の時お雪は四邊を見廻し、實は今朝蘆名杢平といふ、若黨に言ひ付けて、些とばかりの路用を持たせ、船の著くのは、一の江とやら、二の江とやら聞きましたから、早く行つたら逢はれようから、いそいで行つて逢つたなら、金之介に渡して呉れろと、内證で使を出しましたが、首尾よく何卒逢へば宜いと、又夫れが苦勞になります。しかし逢つても逢はないでも、今夜遅くか明日の朝は、はやく歸つて來ませうから、左樣して見れば便宜も知れます。マア何にしてもお歸りで、其の番頭が來て見れば、誠に困る譯だから、今夜は此處にお泊んなさい。」葉「其樣ならどうか左樣しませう。」ト、其の夜は假名屋へ泊りしが、杢左郎も御用があるとて、其の夜は奥へ泊りになり、お雪と二人終夜、熟睡もならずで種々と、苦勞話に夜は明けたり。斯くして朝飯などしまひツヽ、はや巳刻前とも思ふ頃、向島のお澤が來れり。葉は見て、早速、澤さん、大層早く、能く來たノ、何ぞ急用でも出來たか。」澤「イエ〜何も急用と、申すでは御座いませんが、嘸貴女が彼の事を、御苦勞に遊ばすだらうと、存じて鳥渡參りました。」葉「左樣か、マア此方へ上んな。なにかえ、アノ番頭が來たか。」澤「昨日貴女がお出かけなさると、間もなく參つたから、斯樣々々と申したら、夫りやア怪しからない、早飛脚を立てるの何のと申しましたが、其の中お酒が參つたから、厭だと言ふのを強ひ付けて、飲ませましたら段々醉つて、しまひにやア自己が呑み込んで、五日や七日は延さうと、うけ合つ

て歸りましたら、其れだから、マア五六日は、何とも申す事がやア御座いません。此方の御相談は、何樣れりましたか存じませんか、お宿へお歸り遊ばしても、些とも構ひは御座いません。何なら今からお歸りなさいませ。お供をして歸りませう。」善「左樣かえ、其れやア一介遊れ。能くやつてくれたノウ。」ト、言ふ折柄、お雪も出て來り、雪「まア、お澤よくお出で。マア因な事で、お前方まで苦勞を掛けて氣の毒だネ。」澤「ヘイ、サモ私共は右も左も、皆樣が何の樣な、お心持で入らッしやるかと、誠にお氣の毒樣で御座います。」雪「ナニ、姉樣、使に遣つた人が、只今歸りましたが、急いでまゐつて船着から、所々方々を尋ねましたが、其りやア誠に煙程の、心當りも御座いませんから、詮方なしに歸りましたと、彼も誠に力を落して、先を案じて居りますのサ。」善「左樣かえ、其れおやア詮方がない。其の便宜も知れたれば、吾儕はマア歸りませう。昨日金五郎樣と話した通り、若し切は詰つたら、其の通りにしませうヨ。」ト、暇乞して歸りしが、朝な夕なに思ひは絶えず。然りながら彼の出久助は、お澤が言ふを誠としたりや。一向何の沙汰さへなければ、心ならずも送る日數の、早七八日となりぬれば、金五郎がいふ通り、此方より言ひ出すが、却つて倍しか今更に、言ふも誠に面なき所爲と、女心に思案も決せず、左や右思ふ其の所へ、出久助は、つひに見馴れぬ、男を一人引連れて、のツノ\、と入り來り、出「ハイ、お澤殿、此間は御馳走。ヤア隱居樣もかへつた時分と、考へて出て來たテ、ハイ、

言ひつゝ通れば今俄の樣に覺えて、紫雲は徜り、紫「オヽ出久助さん、此の間もお出でだッたさうだが私は。」ト、言はせも敢へず、出「コウ隱居々々、そんな言譯は聞きたくねえ。此の間のお澤が口上、何樣も實と思はれねえ。何故と言ふのに其の前日に、態々事を極めに來ながら、直に榎の島金澤たア餘りな鬮籤。こいつ何でも當人に、仔細がなくッちや叶はねえと、コレ此處へ同道したは、斯波樣の奧へ古くから、お出入をしなさる人、まづ其の樣子を探つて見ようと、お願ひ申して此の四五日、段段探つてくんなすッたら、イヤ大それた一件だア。其處で遠方氣の毒だが、證據の爲に來て貰つた何と覺えがありやせう。」ト、肘打張つて出久助が、憤り切つたる有樣に、何んと回答もなかりけり。

第十八回

其の時紫雲は顏を上げ、紫「斯波樣の奧御殿で、精しくお聞きとあつて見れば、隱し立てすりやア却へて罪、有の樣はお聞きの通り。夫れで吾儕も當惑して、實は此の頃親類へ、相談歩きもしましたが、誠に何ともし方なし。若しも在所が知れようかと、近在近寄へ人を出し。」出「オット隱居、皆まで言ふまい。聞けば金之介といふ和郎は、お前の爲には實の孫、左樣して見りやア、お政とは、血筋こそなけれ從兄同士、夫れぢやア、今まで行つたり來たり、大方往來もしたらうから、疾うから左樣いふ

情合になつたは、お前方も皆承知の上、居所が知れねえもねえもんだ。假令居所が知れたつて、引戻してそつくりと、その野郎めが喰ひ餘りを、旦那の新婦にしられるものか。イク馬鹿〳〵しい評定だ。足りやァお前様大きに御苦勞、モシかれ是れと虚を言ふなら、其所で一番お前様が、聞き糺しておくんなすつた、證據にと思ひやしたが、分つて見りやァ證據も入らねえ、サア早く歸りませう。」ト、起ちにかゝるを紫雲は止めて、「夫れに就いちやァ出久助様、お前に些と相談が。」「エ、イヤ〳〵、相談も糸瓜も入らねえ。斯うなつた日にやァ何を言ふもんか。」ト、袖振り拂つて兩人は、喘ぎ〳〵と歸り行く、後にお澤は此の間の、介道れも却つて仇と、思へばいとゞ氣の毒がり、いかなる女の猿智慧と、詫ぶれば紫雲は何様なるも、皆時節で誰が悪い、誰が善いといふこともないと、諦めたりし言葉數、多くは言はず悟れりけり。斯くて其の翌日の朝、本店よりの状使、支配人兩人の名前で、紫雲様との表書なれば、投呼びにでも寄越したかと、思ひながら封押切れば、這回の事圖らぬ珍事、夫れに就いて主人の御意に、見捨て難き好誼をもつて、今まで多分の賄ひを送りて、樂に住ませし處、お敵ある其の身の親族に、添はせんとの巧みを以て、言ひ合はせの計らひは、恩を恩とも思はぬ事、男女の縁は自由ならず、結び難き縁あらば、其の由申して明白になすべきを、然はなくて、取極めまでして噂斥するとは、かへすがへすも怪しき仕方、さる上は其の別莊に、たゞ一時も置く事ならねど、夫れで

は格別折檻と察し、今日より三日猶豫はすべし。第三日めの夕暮には、のこらず明けて引取り候へ。其の節改め請取として、手代二人を遣はすべし。かれ是れ未練の事なき樣、呉々申し通すとの、文體を見て驚けども、胸押沈めてさもあらん、是れ程の間たがはずやは、實に此の身の油斷から、斯ういふ事になつたのは、言譯もなき事ながら、かの出久助が言葉の端、今又是れなる文體にも、團子騎れ合ひ相談づくと、察しらるるが殘念至極。然りとて左樣では御座らぬと、言つた處が男は媒、疑はれるも無理でなし。されど夢にも知らぬこと、此の證さへ立つたらば、死んでも殘り惜しくはない。如何にも多くの此の年月、斯樣して樂にして居たも、皆本店の御恩とは、常々忘れる間はなけれど、斯樣いふ事になり行つては、恩も惠みも辨へぬ、畜生なりと云はれても、返す詞はなき悔しさと、たゞ夫れのみを思ひ惱みて、それより食も進まぬ程、唯茫然と塞ぎ居る。お澤もこれを聞くからに、困つた事と捜首も、己が力に及ばねば、主人の指揮を待つて居る。紫雲は如何なる心にや、其の日限りさへ僅かに三日、人を雇うて片付けても、容易く間には合ふまいと、思へばかの事なるに、其の翌日もまた其の儘、お澤は一人氣が揉めて、何樣した事と合點にゆかねど、催促するも何とやら、主人の心を憚りて、見合はす中に其の日も暮れたり。殊に今日は朝より、雨しと〳〵と降り出して、いとゞ寂しさいや増る、お澤は紫雲が傍へ進み、主從とお前でも捨りませう。この頃はお前樣も、種

種御苦勞遊ばして、嘸お氣も鬱ぎませうし。又お肩も張りませう。例の按摩さんも何樣かして、此の四五日は參りません。サア出しあそばせ」ト、兩手を肩に引掛けて、力を籠めの素人按摩、「一向利きはすまい」「イヽエ、何樣して能く利くヨ。見掛は力もなささうだが、大層に力があるノウ」「嘸ましい」「オヤマア、力は御座いません。手桶の水を提げますのでさへ、隨分骨が折れますものヲ」「ほゝ、さう其はナア、骨を知つてるのか。何樣してノ」「ハイ、呼んで歩く小僧按摩さんでは、目やすしない。トキニ澤や、不思議な縁で、もう五六年にもなるだらうノ。吾儕の樣な我儘者に、朝に晩にお叱られても、ツイしか惡い顏もせず。此の頃こそあれ十三四の頃、お政も隨分強者で、何ぞといふと泣て咳し、其方も餘程困つた樣子。知らないではないけれど、幼稚時から甘やかして、育てた癖とツイたれなり、奉公人の身に取つては、何樣に否か知れないのも、騙したり賺したり、種々に面倒を見て惡い事は吾儕に隱し、善い事は言ひ立てて、興をさせる樣にする、其の後前の勘辨が、なか〳〵出來る物でない。それといふのも律義から、主な大事と思ふ一途、まだ年だつても四十に足らず、何樣か一生業さうな、所があつたら及ばずながら世話をしてと、常々から、思つて居たに縁もなし。在住する中此の騷ぎ、愈明日の晩方には、此處を退かずばなるまいから、手道具でも些と片付けてと、思つて見たがイヤ〳〵、道具位は何樣でも宜いが、まづ肝腎の身を入れる、一疊敷の當もなし。歸り

たいふではないけれど、今まで斯うして居た者が、まさかに小梅や中の鄕の、裏屋に住んで後の人は斯うだと人に後指、指される此の身は儘にもしろ、先の旦那の恥にもなり、また吾儕も何の樣だ惡いことでもした樣に、言ひ立てられる再度の恥、所帶道具を始めとして、長持箪笥の内の物、皆吾儕のとはいふものの、畢竟是れも本所から、惠みを受けて持つたる品、左樣して見れば吾儕の物に、茶碗一つもない道理、其處で明日手代衆が、見えたら吾儕も一緒に、讓り合ひをする積り。其れに就いちや其方を始め、仕動にも暇をやり、只一人で居ないでは、都合の惡い事があるから、其の積りで朝御膳でも食べたら、宿へ下つてくんなと、其處で何ぞと思ふけれど、近頃髮を摘んでから、色物はなし帶は狹し、何樣も似合はしい物が拂底。まづこれ等は差當つて、重寶にもなろうかと、三ッ四ッ出して置いた。其れに是れは少ないけれど、半途に出されて困らうと、小遣の心持だ」と、言ひつゝ件の品引寄せ、お澤に遣ればお澤は驚き、其是れは存じもよりませぬ。貴女も此の後のお居住から、アレ車力の人足のと、目に見えぬお物いりのあります處で、お金まで何樣して是れが頂かれませう。殊に立派なこの小袖、私風情が晴着にも善過ぎて、却つて困ります。ナゼ暇出の思召し、何樣いふ事か存じませんが、假令私が居つたとて、格別お邪魔にもなりますまい。今まで一人の奉公人を、お使ひ遊ばしたは皆承知。何樣も貴女の御しやり方が、私の氣には濟めません。假令お暇下さるとも、貴

女の御身が斯様なつたと、申す處まで承らねば、是れ限り宿へは下られません。若し明日お談じ合ひあ、お聞き申して悪いのなら、お手代衆が御座つたら、濟むまで外に居りませう。」ト、道理を詰めたる對應。されどお澤がある時は、わが料簡の妨げと、思へば是非とも出してやらんと、少し貌を改めて、紫「コレ澤、能く聞きや。不断なら、心安立は女の主從、互に我儘言ふ事も、あらうかなれど知つての譯、吾儕も是れから一生の、浮沈に拘はる身の大事、夫れ故斯様と言ふをも用ゐず、主の心に反くなら、七生までの勘當と、昔の人ならいふ處も、一季半季の奉公人、氣にいらないから出て行けと、言つたら其方は何とする。」澤「夫れはお主に從ふ御家來、少しも違背は致しませんが、何様あつても明日一日は、お置きなすッて下さいまし。」ト、その問答は果てざりけり。畢竟是れは何故ぞ、次の卷にて精しく分る。

清談若緑卷之九　終

清談若緑滿尾紋

さて此の冊子は三篇の、煙草休みも早過ぎて、節をあやどる四番草、能く精を出す作男に、自ら汚れど方寸の、土地の荒地か肥料が足らぬか、趣向に何様かある嫁でも、行き詰つたり引き摺つたり、我さへ心に満足せねど、書き換へたりとて同じ畑の、其は実殻咄なり、さんざと叱りたまふらん、こは然りながら数年来、お馴染甲斐に捨てられず、曲山人と名に呼べど、つひに曲つた事せねば、され其處からも此處からも、老爺さん居るかと世間の、御贔屓御愛顧を力に替て、面の皮さへ厚くなり、年にも恥ぢず書綴りし、事さへ拙き出来ども、今流行の目の前には、及ばぬことの皆さんなれば、見許し給へと希ふのみ

曲山人戯題

清談若緑卷之十

東都　曲山人著編

第十九回

その人の性は銘々に、天より稟くる所にして、貴賤貧富は人間の世界、賢愚邪正は尊卑によらず。されば其の身貴くして、かへつて佞奸邪智なる者あり。或はその身賤しと雖も、賢智聰明は少なけれど、正路にして其の心潔白なるは鮮なからず。故に忠臣孝子も亦天稟の所爲にして、敎へてなるべき者にあらず。此處にお澤は主人なる、紫雲の樣子何となく、心に懸るもの故に、今まで永き年月に、曾て言葉を返せしことなく直朴なりしも、此の時に、主人が言ふをも聞き入れず、主より暇の出た身を以て、此處に居るのは何とやら、蔑にする道理に當り、心に快からねども、かりそめながら五六年、勤めてさのみ越度なきに、世間の人も皆知つたり。假令主人の言葉に背き、明日一日居たらんとて、何か不忠となるべきと、心を据ゑて紫雲に向ひ、「假令何と仰しやいましても、何樣も此の儘

に私は、宿に下ることは出來ません。只今も申す通り、明日御本店からお人が參り、其のお片の付きますまでは、何處へも參じません。若し其のお邪魔なら、畑の隅に居るなりと、また物置の脇に居るとも、たゞやお指揮に任せませう。ト、思ひ切つたる面魂は、なか／＼例のお澤ならずと思ひ込んだる氣色なれば、紫雲も今は權威を以て、退くる事ならじと思ひ、忽ちに笑ひを含みて、紫「アノやア澤が仰山らしく開き直つて言ふ事は、大方吾儕が何樣かするかと、案じての事だらうから、なかなか他には思ひもせぬ。復本店から來たとしても、邪魔になる譯もないが、吾儕一人で居る方が、いつと都合も宜いやうだから、どうぞ暇をやつたもの、宿へ下りやれと言つたのサ。併し吾儕のやうな者でも、主人と思へば案じ過し、大事に掛けて左樣言ひやる、志は嬉しいヨ。ト、言はれてお澤は恐れ入り、其う仰しやいますと何とやら、お氣の毒に思ひますが、實に貴女のお身の上、何樣な事がと此の頃中から、忘れる間は御座いませんのに、切迫詰つた明日となつて、宿へさがれと仰しやるから、何だか何樣も氣になりまして、彼是申し御機嫌に、障りましたら御免遊ばせ。只改めてお願ひ申すは、他の事でも御座いません。是れから假令何方へ、お宿替を遊ばさうとも、お一人では入らつしやれず、お人がなくてはなりますまいが、何卒なるべくは此のまゝに、お使ひ遊ばして下さるなら、有り難う御座います。紫「それは段々嬉しい深切。併し此處を追ひ出されては、なか／＼人を使ふ處か、

悪くしたらば月代ひにでもと、云つた處が此樣な頭、誰も抱へてくれ人もあるまい。さうしてみれば知つての通り、朝晩念ずる觀音樣、お堂の前の圓座に坐り、往來の人に合力受けて、其の信心を忘れずば、若い時から我知らず、作つた罪も消えようと、まア、左樣する積りだから、左樣思つて居てくんなせエ、種々果敢ない話して、何だか氣持が變になつた。何はともあれ、お酒があるなら、些と酌つ付けて與んなせエ」「ハイ/\、ほんに私も、一向氣がつきませなんだが、先刻のお肴とお燒つかが、其儘殘つて居りましたツけ。」斯樣いふ時のお氣晴しと、ドレ/\、お燗を付けませうと、言ふ間程なく湧る湯に、早出來たりと持ち出せば、紫雲は一人で三ツ四ツ、重ねて猪口を老婆に差し、「サア/\、お前も一ツ飲みな。二人斯樣して酒盛を、するのも今夜限りになるか、行く先は知れぬ身の上。」「ノウ、互に左樣ではないか。」「ア、何だか貴女の仰しやる事が、甚く氣に掛りますねエ。假令御一緒に居りませんとて、御恩になつた私なら、毎日の樣にお尋ね申して、御用をたして上げますから、そんな心細い樣な事は、何卒仰しやつて下さいますな。」「マア、/\、/\、ほんに左樣だノウ。何だか、胸がむやむやすると、つい愚痴を言ひ出すのさ。ドレ、も一ツ食べようかノ。」ト、其後暫く酒盛に、興を催して快く休みたのしが明けの朝、紫雲はお澤を打招き、「昨夜あれから寐つかれないで、種々爲の考へたが、假名屋の方へ先達し、鳥渡左樣は言つて置いたが、愈今日此處を明けると、急度も言つてや

らないから、定めて案じて居るだらう。何を言ふも繋がる縁、是れから世話にもなり勝ちだから、今朝鳥渡其の事を、知らしてやらうと大畧と、口上書はして置いたが、モウ仁助は宿へ下るし、他に使にやる者がない。お前其處をしまつたら、大儀ながら一走り、此の文箱を届けてくんな。然してお雪樣が聞いたなら、知つての譯を話してくんなと」ト、言ひつけられて胸の中、昨夜からの樣子といひ、言葉の端の忌々しさ。何でも此の身を遠ざけようと、工夫なさるも猶氣に掛る、行かぬに如かじと思案して、「ハイ／＼、何の造作もない。直に行つては參りませうが、マア／＼、夫れは何や彼や、濟んでの後に遊ばしませんか。常々からして假名屋樣の、御夫婦ながら貴女のお氣は、知り拔いて入らッしやる。假令今朝ほどお知らせがないとて、少しも等閑だと、思召す事ちやア御座いません。殊に此の頃今日の事も、御承知でございますから、大方今に旦那樣か、御新造樣かお二人に、お一人はお出でなさらうと、私は存じてをります。折角參つて出違つては、何の役にも立ちますまい。」ト、聞いて紫雲は膝立て直し、「ホヽヽヽ、其方は發明者、吾儕等が樣な愚鈍な主を、持つたは其方が薄命、嘸齒痒くも思はうが、是れも縁なら仕方なし。サテ其の主人が愚鈍だから、言ひ付ける事一々に、夫れは斯樣せい左樣せいと、言つても宜いといふ事が、何の書物に出て居るか。定めて其方は知つてるよう。知つてゐるなら今此處で、話を聞くも、此の身の一得。さア／＼、聞かう。」ト、面色も、少し

愛りて見えければ、お澤は其處へ平伏して、澤「是れは〳〵、勿體ない。何で私が主樣にお指揮を申しませう。唯今朝程は何となく、お側を離れて參るのが、否で〳〵なりませんから、ツイお心安立てに、左樣申したので御座います。サア〳〵、今直に參りますから、何卒御免遊ばしまし。」ト、只管に詫びられて、紫雲も少し氣の毒にや、葉「ナニ、其の樣に詫言をせずとも宜いが、何樣も夫れでは義理が惡いと、思ふから賴むのを、右の左のと言ふ物だから、ツイ吾儕も心安立て、此言を言つて氣の毒だつた。其樣なら何卒一走り、行つて來てくんなさい。」澤「ハイ〳〵、只今參じます。」ト、子舍へ這入つて帶締め直し、濡手拭で顏押拭ひ、澤「其樣なら此の御狀箱を、置いて參れば宜う御座いますか。」葉「左樣サ、何ならお二人の中、中の文を見たいだらうから、然してお前たへんなさい。」澤「ハイ〳〵、左樣致しませう。」ト、其の儘用では出でたれど、思ひ廻せば紫雲が樣子、何分心に濟まざれば、行つた振して暫時隱れお文を置いて來ましたと、僞り言うて置かうかと、裏手の方へ廻りしが、イヤ〳〵大事のお主樣を、騙すと云ふは勿體ない。彼れ程までに信じやるもの、お届け申さにや濟まぬ譯、彼れの是れのと思ふのも、矢張此の身が氣の迷ひ、何事もあらはせまい。兎角する中時刻も延びる。思ひきつて行つて來ようと、自問自答に胸押靜め、既に表へ出でたれども、何時に變らぬ後髮、引かるる心地に五足六足、行つては其處に立ち止り、氣を取直してまた步む、[illegible]の首に[illegible]る、心は

後へ身は先へ、隅田川堤を五六町、喘ぎ／＼て行きにける。

第二十回

箕雲はお澤が出で行く、後影を見送つて、ふとした縁から五六年、使ふとはいふものゝ、何もごしれたる恩を着てか、いはゞ一季の奉公人にも、彼様いふ實義の者がある。今日此の頃の此の身の様子、何か怪しく見えるから、萬一迫つた事でもあるかと、案じる故に何様がなして、傍を離れず居ようと云ふ、實意は能く知りながら、夫れでは何様もならぬこそあれ、身の一分がたゝぬ故、腹を立つたしかつたり、心にもない強言葉、何々例と違ふから、道より歸つては來はせぬか。併し彼れだけ言つたから、大方先へ行くであらう。實にお澤が志、決して忘れは置かぬぞえと、獨言して眼に浮む、涙を袖に押拭ひ、彼れ是れする間に人が來りや、思ふことも皆無になる。覺悟に覺悟を極めた身で、今更何を手間どらう。左様ぢや／＼と言ひながら、佛間に入りて手早くも、かねて用意の白小袖、着替へて其處に押直り、鈴打鳴らし念珠押揉み、身には覺えぬ事ながら、本店よりの疑ひに、此處を追はれて今更に、何處に住居が出來ませう。恥を晒した其の上で、骨になるまで無實の罪、義理を知らない鼬猫と、後指を指されうより、今は浮世に用なき體、死んで心の潔白を、人々にも知らせたさ

疊に此邊にも遺書を、いたして自害致します。其の心根を憐ござ、哀れと思召すならば、未来は何卒安養の、浄土とやらへお導き、修羅の苦患の助かるやう、偏に願ひ上げますると、一心不亂に看經し、やがて其處なる短刀おつ取り、挟くより早く咽喉笛へ、突き立てんとする其の所へ、山紙はへつたと蹴破りて、躍り入りたる金五郎、ものをも言はず短刀を、先づうばひ取りて傍に投げ捨て、ヤ、早まるまい〳〵。如何にも心の潔白を、見せようとてのこの自害、まつ一通りは尤もに、聞えけれど左樣でない。何故といふに未熟で、是れに附子が合ひはせず、騙れ合つてした事だとは、理非も分らぬ我侭氣儘、低い所へ水溜ると、皆への通りの其の仕打、仕樣に由つたら皆何の否へて、主人を始め番頭にも、能く其の譯を言つて聞かせ、納得させうと思ふけれど、人樣も一緒を擬すまい、又宿屋其の人達の、お前は世話になる身分、常し引くといふ事當、何樣かして相馬にも、花を持たして此の始末を、付けたいと思ふから、この頭顛をすれば、まづ宜い思案も出ないもの、まづ〳〵、今日は明け渡しの、日限にもなつた事、また請取りに来た人に、斷りして一理窟と、云ふではないが若かに、言つて聞かして分らすには、また其の折の分別と、來掛る跡に向ふから、息せき來る澤右衞門、ハテ何事の出来たかと、聞けばうら〳〵申す譯、據なく其後に、出は出ましたが、萬一、内な事でもありやせぬかと、氣が急かれて、まゐりまする。早く其の文御覽にと、聞いては其儘も氣に

急かれ、封じ解く間ももどかしく、讀めば今度の言譯なさに、命を捨てるとある文體、是りや大變と驅けて來て、見れば危いその所、マアノ\、無事で互に重疊。心の狭いは女の持質、左樣思ふも尤もらしいが、死ぬとは大い思ひ切り、よく篤りと考へれば、なかノ\左樣は死なれぬ義理。」ト、言葉の半ばに引取つて、「其男の廣い料簡では、また何樣だか知りませんが、今度の事は其の前日に、約束をした舌の根も、乾かぬ間に男と一所に、驅落したと知られては、親類緣者の服を除けて、其の言譯がありませうか。夫れに男は吾儕が娚、承知の上と私を、他にしても疑ひます。夫れも全く他人らくなら、まだ結納も受けぬ前、お氣の毒だと厚面皮しく、言つてもゐようが本店には、此の年來の恩が十分、何樣して此の儘居られませう。斯うして助けて下さつたは、嬉しいやうで情ない。何卒死なして下さいまし。」ト、思ひ詰めたる一徹心。金五郎は押へたる、手も放さずに顏差覗き、「イヤ、何樣して死なせはしない。今お前のいふ處、何樣か道理の樣だけれど、其處が即ち料簡の、狭いといふのだ何にしても、大分逆上せて居る樣子。コレお澤や、冷水を一杯汲んで來て下せえ。」ト、水取り寄して紫雲に飲ませ、「まア、篤りと後前を、考へて見るが宜い。假令其樣なら本店へ、全く義理が濟まないにもしろ、夫れがためにお前が死ねば、お政は立派な親殺しサ。假令手を下して殺さずとも、其の言譯は五厘もない。左樣して見れば金之介も、姨を殺した道理にあたつて、二人ともに大罪人。

逆上たものはある。いかにも多年の恩を忘れて、我儘氣隨は憎い奴。とはいふものゝ若氣の誤り、銘々の身にも覺えのある事。例へば一度の過りは、また改める時もあつて、後々目出たく再會する、折もあらうが、お前が死んでは、遁れがたない二人は、實に天下の罪人と、するのを不便と思ひなさらぬか。勿論不所存な不埒者に、慈悲を加へる譯もないが、此方が死んで向うが罪人。夫れで只木店へ、ア、氣の毒な事をしたと、當座に思はせるばかりの事。餘り出來た譯でもあるまい。其處で吾儕が止めるのだ。ト、噛んで含める金五郎が、意見に心落ちついてや、苦笑ひして打點頭き、ア、實に吾儕の一途の料簡、唯木店へ濟まないと、思ふばかりで命まで、捨てようとしましたが、今段々の御意見を、聞いて一は左樣で御座いますネ。お政とても腹こそ痛めね、年來母子となつたは勿論、常々かけして孝行者、誠に優しくしてくれた、事を思ふと實につい、此上も憎い事はありません。殊に金之介に妹の只一人の忘れ記念、子より可愛く思ふもの、今斯樣なつても忘れずで、何方の果てにも居てくれと日暮案じて居ます位。その二人が罪人と、なると聞いては何の樣な、事があるとも死にはしません。左樣思つて下さいまし。金ハテ左樣譯が分つて見れば、吾儕も大きに安堵した。ト夫れから白無垢を、著替へて居たが宜からう。ト、言ふ折柄へ驟然と、案内諸共襖次の、出るのも待たで奥へ通るは、本店の番頭出久助、後に引添ふ手代二人、其處へ坐るも坐らぬに、出久助は大音揚げ、金五郎を

尻目にかけ、「些ナウ、隱居さん、其の形は」イヤ、是りやア譯が分らぬ。今日は全體がたひしと、車力なら輕子やら、定めて煤掃同樣な、騷ぎであらうと思ひの外、來て見れば寂寥閑、臺所の擂古木一本、外してないは是りや不思議。何かこれには孔明もどきの、謀計もある事か。油斷するなと手代衆にも、氣をつけて來て見れば、北國にあるとかいふ、雪女郎の樣な形、其の上彼處にアレ輝々と、光る物を投げ出して、是れは何樣した理窟だエ。其處でまア、お前の方に、何のやうな込みやりがあらうとも、だから吾儕等の知らねえこつたが、此の頃支配人衆から、今日までに、明けて何方へでも立退けと、言つて寄越したは承知だらう。其の請取りに來た吾儕等、サア／＼建具疊から、雪隱小窓の障子まで、改めて請取りやせうか。」某「是れは、皆樣遠い所を、誠に御苦勞で御座います。お澤や、お茶を上げないか、なんだ手前までが狼狽して、誠に困つたものだノウ。さて今番頭さんの仰しやる通り、皆承知でをりますが、それには些と私の、不束ながら料簡が、御座いまして此の通り、端片も片付けず此の儘お渡し申す積りに、覺悟致して居りましたが、實に女の淺はかから、又左樣も參りませず、今となつては寄閑とばかり、尚お憎しみも掛りませうが、全く左樣した譯でもなし。此處に居るのは斷波さまの御藩中、假名屋金五郎と申しまして、私の爲には緣の兄、委細の譯は此の人から、お聞きなさすッて下さいまし。」些「ヘエ、此のお方と掛合ふのかエ。其りやア大方十日とか、三

十日とかの日延べだらうが、なかなか左様はいきやせん。是れが一通りや二通りの、譯合なら兎も角も、言はずとも御前は承知だらうが、夫れに就いちやア此の出久助が、足を運んだも十遍や、二十遍ぢやききかねえこつた。それほどまでに氣を揉まして、揚句の果てにほんとにふられて、何様な氣の善い地藏でも、無言ッちやア居られねエ。何も斯波樣の藩中に、此上も掛合ひはねエ、約束通りにして仕舞ひなせえ、ノウ若衆。」ト、見返るなり、金五郎は暫し無言なりしが、やがて「一通りは其の筈なれど、とかくそれには種々な、譯があるから其のことは、一應申すばかりのこと、まアまア靜かにお聞きなせエ。」ト、言はれて了得出久助も、手代も其處につい居たり。

清談若緑卷之十 終

清談若緑卷之十一

東都曲山人著編

第二十一回

其の時金五郎は進み出で、貌を改めて二人に向ひ、「扨拙者は斯波家の藩中、假名屋金五郎と申して、紫雲が由縁の者故に、今回のこと如何相なつたか、今日是れへ參つた處、御覽の通りの爲體、既に自害をいたさうといふ、危い所をまづ止めて、容子を聞けば、コレ此處に、委しい遺書これを見てト、申すによつて一覽いたせば、まづ一通りは道理にも、あたるかなれど人一人、命を捨てるは容易ならず。今に番頭どのが御座つたなら、拙者が申したいこともあり、夫れでも紫雲が罪として、なほむつかしく言はれるなら、また其の時の思案としよう。まア／＼、刃物を此方へ寄越せと、捥ぎとつて投り出し、まだ鞘へ收める間もなく、尾籠の段は用捨あれ。さて此處にある遺書の譯を、篤り御覽なせえ。」ト、差付けられて出久助が、おづ／＼と請取つて、之を披いて手代と二人、再度三度讀み返

し、咄ム、、成程此の遺書、立派に縁組を取極めて、其の翌日に女兒が轉落、おやの身として其の位な、事を知らない譯はなし。さうして見れば隙でもあり、他へ遣らうとした處が、本店からたつての所望、今さら否とも言ひ兼ねて、まづ美しく挨拶し、一句に斷様だと言れは、仔細はねえと、頼んだ仕事。左様蔑にしられては、一分が立たぬによつて、三日かぎりに此の隱居所を、明けて退けとは言極もつ其の通りにすべきなれど、左様して見れば母子其々、言ひ合はしたと何處までも、悪名消えぬ其の悔しさ、女兒が不埒を知らぬのは、親の忠なれども年寄り、恩を忘れて本店へ、義理に迫つて其の證據、命を捨てる心の誠を、お察しなされと申す文體、く、成程尤もなれど、心底は斷様もあらうが、主人は何處か何處までも、母子相談に遣つたといふ其の上は、明けて退け、直で云ふに其の事を、知らねえといふがあるものかと、一途の腹立ち、それ故に、その曲げた上は仰にせるで、此處を明けて立退けと、申した儀で御座ります。遺書通り本當か、死んだ事か、夫を以て、知らぬであつたか氣の毒なと、夫りやア發明もいたしませうが、いつもながら其の娘の、何處までも解けますまい。併し貴郎がお止めなすッて、止まつたものをサァまた、死ねと申す譯にもなりますまい。何でも主人の申す通り、今日中に此の家を、立退きなされば夫で濟む。何も死んだ者を責めたとて、後の後まで苦厄介を、掛けるにも及ばぬ事サ。假令母子が言ひ合はした、狂事にもしろ何もこれ、盗み騙りをしたでは

なし、なんにも死ぬにやァ及ばねエ。サア／＼、だれより些とも早く、片付けて退くのが肝腎。貴郎様も手傳つて、夜具蒲團でもお包みなされ。どれ／＼、吾儕等も手傳ひませう。ト、手拭出して頭に冠り、尻端折つて立掛れば、コレまア、待らなせエ、番頭さん、成程それやア委細構はず、立退いたら宜からうけれど、今もお前が言ひなさる、主人は何處が何處までも、言ひ合はすと思つて居ると、其の一條が濟まないから、紫雲は既に死ぬ覺悟、是れが戯輕へ出戯に、命を捨てお事が濟もうか、分らないにも程がある。それやア此處を立退く分は、茶漬食ふより易い事だが、それぢやア何様も義が濟まねえぞ、女ながらも義を立て抜くを、何程仁義を辨へぬ、町人でも餘りだ、たんなら斯様せう、御主人とお前方が連判して、決して押子言ひ合はして、恥をかかした譯ではない、これ／＼左様はおもはねえと、委しく書いた證文を、紫雲が名宛でお遣んなさる、左様すりやア其の詮議がないから、一時の間にも片づけて吾儕が方へ引取りませう。ト、言はれもあへず出久助に、何かと打突ひ、ヤア成程お侍といふ者は、仁とやら義とやらを、能く辨へて御座るかして、手前勝手も能く言はれるワア積つても御覧じろ、度々申すも諄けれど、此の隠居に出し抜かれ、恥の搔き上げしたうへで、謝り證文同様な、書付を出すといふが、まア御當地にやアありますめエ。其樣なに權々済んだことを、言つて人に困らせずとも、紫雲どのの身にとれば、本店は主人同然、假令些との誤りが、ないにも致せ

其の主人の、氣に叶はないことがあれば、追ひ拂はれても詮方なし。モシ、左樣ぢやァ御座りませんか。ハテ夫れは如何にも其の通りぢや。[illegible]見れば是非もない[illegible]、其處に譯が有つて見れば、其の黒白を分けねば[illegible]何樣もならぬ[illegible]其の通り言ひなさるなら、其の譯を言つて聞かさう。お前は[illegible]知つての通り、紫雲が娘で[illegible]、儂はれえ身分ながら、其の[illegible]は拙者が[illegible]之介と申す者。部屋住ながら召し出されて、斯波家の近習を勤めをろうへ、若年なれど一人前、其の侍が主人を捨て、親を捨てて逐電すれば、輕くて[illegible]召上げれば、[illegible]をも言ひ付かる、武士の[illegible]、能く聞いて[illegible]、[illegible]の者の口に上る始末、そ れは何樣も當人の、不[illegible]なれば是非もない[illegible]は勿論、紫雲も[illegible]を知つて居らう[illegible]今度の事本當に、鼻をあかして恥掻かせうと、[illegible]一命にも、[illegible]る大事を承知の上で、[illegible]者が御座らうか。左樣して見れば一向に、紫雲は知らぬに違ひなかつた。[illegible]の事故、言ふ人がない故に、主人を始め相談づくだの、言ひ合はせたのと言つて、今日に至つた仕儀。[illegible]聞き知つたら、[illegible]は晴れたであらう。不所存な[illegible]を分けた、[illegible]の事を御前方に、[illegible]ら親かしてに、言はずに[illegible]は何時までも、事が明かに[illegible]、拙者が[illegible]を推量つて、主人へ委しく通じて下せえ。夫れで紫雲の證明さへ、立つた事なら[illegible]にもあれ、[illegible]は易いこ

と云ふ事を、聞いて出久助天窓を掻き、「ハイ、左様で御座いますか。お武家方と云ふ者は、むづかしう御座いますネ。町人風情は氣楽な者、兒女は愚か他人の女房を、連れて逃げても人が掛つて、當人同士の話さへ、片づけば野面の龜の子、人に由つちやア手柄のやうに、思ふ輩も御座ります。左様して見りやア御子息様は、滅多に顔は出されませんネ。イヤハヤ怖い一件、左様して見りやア紫雲さんが、實に知れねえと、言ひなさるに嘘はねえ。ハテ宜う御座ります此の出久助が、委細疾く呑込みました。ト、言ひつゝ手代を見返りて、「其様ならナア其の事を、旦那に委しくお話し申して、其の疑ひさへ晴れたなら、夫れおやア斯様しようとか彼様しようとか、お指揮もあるだらう。ドレ一ト走り行つて来よう。ト、手代を促し起ち上がる。長の方に人音して、「出久助、來るにやア、及ばねえ。ト、言ふ聲聞いて、「ハテ彼の聲は旦那の聲色、誰だかしらん。ト、障子を開ければ、主人の福見屋、二三人の供を連れ、「自己も餘りの悔しさに、何様いふ形で立退くかと、ぶら〳〵此處へ來て見れば、寂寞として引越の、様子もないはサテ不思議と、徐々這入つて庭口から、内の話を聽く處、今假名屋様とやらが、仰しやる處を聞いて見りやア、如何さま紫雲が所爲でなし、全く當人同士のこと。左様して見りやア科もねえ、紫雲を追ひ出す譯もなし。全體何様いふ事があつても、一生見捨てず不自由なく、してやつてくれろとは、老爺さんの遺言だから、假令今度の一件が、よしや巧んだ事

にもしろ、追ひ出して構はねえおやァ、草葉の陰の佛へ對して、些と濟まねエとは思つたが、自己も業が湧いたから、其方達へ言ひ付けたが、左樣した事譯が分つて見りやァ、何も喧を立つものだこ、言ふ聲聞いて驅け出す紫雲、まア職業に衝突いて、言ふことに申し譯も御座いませんが、併しも言はさず引取つて、モウ〳〵、何も言ふことなし。聞けばなんだお前に、死なうと覺悟の其の內打捨てゝ置けねエ事だつた。そんな斯樣なりや、自己がもに、些とも氣付ねエに困つて、お前も不思議に思ひなさい。モン〳〵闕かない一件で、お前も大分苦勞したなア。而し此處へ來た序に、御安心のため、假名屋樣にも、鳥渡お目にかゝらうぢやアないか、言ひつゝ、巳れは金五郎と、娘を奧の部屋に待たせ

第二十二回

程なく入り來る福見屋は、金五郎を見て一禮なし、聞ア貴方は兼て承りました、假名屋で、間違ひまして初めてお目にかゝります左樣でござります。お前は福見屋さん、一體お前が此の年來、種々の世話になりります事、お國の旁で前より、存じておりますお噂を、夫の彼是と取り紛れ、御無沙汰に打過ぎ、今更面目も御座りませんに、モシ〳〵、何と致しまして、亡夫在世の節の世話をいたすは、亡夫よりの申し付け、決してお禮のお言葉に、及びませんに事で御座ります。さア何は兎も角、今回は私が、氣通

お申しても夫れ故に、紫雲どのはいふに及ばず、貴君方にも大い御苦勞、ハテ福見屋といふ奴は、手前勝手の分らぬ奴と、思召したで御座りませうが、是れがふとした處から、斯樣なりましてお氣の毒。イヤハヤ夫れに就いて紫雲どのが、何樣か命を捨てるの覺悟。若し萬一其の樣なことがあつたら何の道に、後悔しても及ばぬ處を、折能く貴君のお出でがあつて、無難に濟みましたは、私が、身にとつりましても大僥倖。危いことで御座りました　サテ當人に只今も、能く〳〵申して置きましたが、實に一旦の腹立紛れ、難題がましい事までも、申したが事譯が、分つて見れば何がさて、何時まで根葉に思ひませう、此のことを能く貴君からも、仰せ含め下さツて、是れまでの通り相變らず、いたす樣に存じます」たゞ餘所ながら承る、貴君さまの御心配。是りやわたくしが腹立なんぞの、譯とは全然違ひまして、假令御武家さまだとて、恩愛は同じこと、御心中察し入りまする。」ト、言はれて此方も面目なく、額を撫でて、金「イヤ、其の樣なこと誰に限らず、他人の耳に入れたくないから、種々申し宥めても、主命守る番頭どの、なか〳〵承知いたさぬゆゑ、餘儀なく明す倅が身の上。しかしながら身から出た、錆なら何樣も證方はない」と、苦笑ひして居る間に、紫雲は茶を出し、菓子を出し、安堵の思ひに氣も輕く、愛想すれば下女のお澤も、共に心に歡びて、胸の痞も下るべし。福見屋は暫くありて、福「サテ私も是れからまた、種々用事も御座りますれば、まづお暇を頂きませう。そんな

らば紫雲さん、今も喫々言ふ通り、必ず氣に持ちなさんな。ナア出久助も一緒に來やれ」ト、皆それぞれに挨拶して、騒然と歸り行く。後見送りし金五郎は、紫雲に向ひ莞爾笑ひ、「未だ年は若いけれど、町人ながらも大家の主人、なか〳〵以て發明だ。マア、何にしろ事が分つて、お互に安心した。お澤も嘸喜ぶだらう。」 澤「誠に〳〵何樣なりますかと、宜い苦勞を致しましたが、是れでは定めて旦那樣の、お胸もさつぱりとなさりませう。 扨此の上のお願ひには、何卒是れまでの樣に、私しをお使ひなさつて下さいまし。」 金「ハ、丈夫ぢやア勿論さ。貴樣の樣な貞義な者が、又と二人あるものか。今までと違ひお政は居ず、能く氣をつけて下せえ。ノウ姉樣、何れあるめえに。」ト、、、お澤かさず、曉つたかして吾儕が身に、付纏つて居ようとするには、實に困つたから、心にもない事を言つたり叱つたり、嘸異しいとおもつたらうノウ。まア何にしろ過ぎさつた、話となつて見りやア宜いか、唯目出度氣になるのは、金之介が身の上さ、世間知らずと云つたって、まさかだりやア男の兒だ。牛にも馬にも蹈まれはしまいが、旅他國へ出るに若い女を、連れては誠に苦勞なものと、人に聞いた事もあり、何樣で日蔭の身とはなると、達者で何處に居るといふ、噂でも聞かない中は、食物も美味しくない。」ト、子得血筋の案じは格別、同じ思ひの金五郎、愚痴をば口に出さねど、心の中の憂き苦勞、語るに言葉もなかるべし。 折柄此處へ持ち來り、「ハイ、お客さまから御進物」ト、言ひつゝ、

肴五種六種、岡持より出し並ぶれば、お澤は出でて不審顔、「是りやァお前間違ひぢやァないかエ。何も吾儕共から、誂へた覺えはないがネ。」「ナニ、間違ひは御座いません、今旦那が五六人の、お供を連れてお出でなすッて、紫雲さんへ是れ〳〵を上げてくれろと、此方のお名まで仰しやりました。」「オヤ〳〵、夫れぢやァ本町の旦那様からの、お遣ひものかネ。モシ旦那様、是りやァ、何様致しませうこト、言へば紫雲は聞いて、「夫れぢやァ旦那に違ひはないが、お氣の毒サ、併し是れは金五郎樣へ、上げてくれろと仰しやるのだらうこヤア、請取つて置きなせエこト、言ふ中男に持たせて、返事も待たで歸り行く、こト、夫れりやァ何にしろ氣の毒だ。此方でこそ初見參に、酒でも出さうといふ處、右の場合で夫れも届かず、併し折角寄越しなすッたを、返されもしめえから、冷めねえ中に頂戴するサ。」ト、お澤や、其樣ならお燗を付けなこト、是れより霎時酒盛に、憂さを慰むとにはあらねど、酒は憂への玉箒、少しは氣さへ晴れやかに、酌み交して其の夕暮に、金五郎は歸りけり。扨此の話柄は休題て夫れよりお政は何となく、面伏せなる心地はすれど、良人の諫め身の浮き沈み、默止し難くて富貴寄より、迎ひの掛る度毎に、藥何くれ留守の中、物不自由にあらぬ樣、心を付けて立ち出でつゝ、鬱ぐ胸さへ押靜めて、面白からぬも高笑ひ、三絃取つてきり〳〵と、合はす三筋の音色さへ、一に傳坊二には野暮、三は其の音も高圓の、葛城山にあらねども、夜の契りを挑むなる、十人十色の生

醉客、千差萬別それ〳〵に、調子を合はす憂き苦勞。夫れより後に轉家の佐重ゑ、以前に變らず通ひ來て、酒飮み遊び其の度毎に、必ずお政を招けども、何思ひけん其の後は、絶えて色めく言葉は出さず、唯普通れたる洒落のみにて、今は忘れべき所もあらねど、其の度毎に一歩二歩、時に應じ、祝儀の花、是れを辭まん樣さへなければ、押頂きて例の如、帶の間へ挿挾み、持つて歸れば入用の、嵩むにつけて中々に、貯へ持つべき力はあらねど、思ひよらざる惠みにて、時の間缺かぬ是れのみは、佐重の恩ぞと思ふものゝ、又此の後が案じられ、蔭には絶えぬ苦勞ぞや、良人にはは病人の、障りとならんとたゞ日暮に、願ふは大悲觀音薩埵、何卒無事にならしめ給へと、密かに起きて水を浴み、斯る事さへ多かりけり。今日は晴いと云ふは降りて、寂しき儘に病む人の、傍に寄り添ひ御なかの、品をなして進むる食事。金之介は此の程より、思ひの外に快く、年若ゆゑか進みもよくて、今は飯さへ輕く盛り、二杯も食べる程にして、一日增に力付き、廁へ一人行かるゝまでに、快くなりければ、また人が歡びかたならず、早く共とも歩行ける樣に、ならば嬉しき事ならんと、又それのみを待たれけり。斯かる折柄當寄より、迎ひが掛れば此の際ゆゑに、今日はお客もあるまいと、化粧もせで有るものを、序悪しと思へども、今活計にする身には、詮方なくて起上り、俄に立つた鏡臺に、向ひて鬢の亂れしを、搔き上げながら獨語、「今日は嬉の點だから、憂い事すんだ朝の中、來てくれる

かた様したら、一風呂這入つてずつとでも、化粧せうと釣らされて、モウ日中前になつてから、お菜拵へ何や彼で、其の身其の儘。ア、此の頭おやア、お座敷へ些と出難い、左様かと云つて今ツから、呼びに遣つて結つちやア遅し、誠に困らせる髪結だノウ。ト、じれる所へ来るお千、上何だ、髪結さんが来ないとエ。何様も彼の人は等閑いから、吾儕等のも時々ならすヨ。ドレ吾儕が宜い様に、撮み付けて上げようト、櫛をお出し。上左様かエ、夫りやア有り難う。ト、開けば御新人様も此の頃は、大層快いといふ噂。お前様の丹誠が届いて、ホンニ、嬉しからう。ト、上ア、實に有り難い。此の分ならやア近々に、餘程快くなりませうヨ。ト、話す其の中髪も済み、化粧さへもそこ／＼に、着物着替へてお千と共に、富貴寄へと出でて行く。

清談若緑巻之十一

清談若緑巻之十二

東都　曲山人著編

第二十三回

お政は富貴寄の二階へ上り、障子を開けて、「オヤ、何方かと存じたら、新家の旦那さ」「何故何故、自己ぢやァ悪いか。此の通り雨が降るのに、足も酒も泥にして、半道あまり否がられに、来る自義もねえもんだ。」「ヲヤ、まア旦那も通り気だねエ。露が容易のを言ひますが、實は今日も心の中で、「今日辺はお見えなさらないか、今日と此様に雨が降るから、旦那お出ではあるまいと、思つた處へ旦那が掛つて、間もなくお手紙が来ましたから、お客様は何方だらうと、聞いても家の娘は言ひませんのノサ。」「誠に憎いぢやァありませんか。」作「夫りやァお前自己だと言つたら、復急に癪でも起すかと、それで知らねえと言つたのだらう。ハヽヽヽ。」政「アレ、また其の眼は邪推して下さいまし」と、言ひつゝ火入に手を翳して、政「ニ、皆な気が利かねえノウ。煙草の火も何にもない、ヨ。彼様に大勢居

ながらして」ト、掌をチョン／＼と打鳴らせば、ハイ引と答へて來る小女、政「コウ／＼、能く發つた火をそつくり埋けて來な。然して御酒かお肴の、お誂へがあるだらう。大そう手間が取れるノウ。」佐「ナニ／＼、今日は鳴物なし、酒も些とばかり飲んで、唯話としようと思つて、夫れで靜かに飯を主にして、出せと言ひ付けて置いたァな。」政「ヲヤ／＼、左樣で御座いますか。併し雨は降るし寂しいから、何ぞ賑やかに、彈きませうぢやァ御座いませんか。」佐「ナニ、夫れよりか話が宜いノヨ。」ト、言ふ中お千は廣蓋を、掌へ載して持ち出し、千「今日はネお政さん、三絃なしのお話だとサ。其の積りでお肴も御膳に宜い樣にしましたヨ。」佐「それで宜い／＼。併し自己と對身ぢやァ、直話が理に落ちるから、お萬も此處へ呼んでくんな。」千「ハイ、今化粧をして居りましたから、直に參ります。しかし旦那、夫れにしても、マア一口上りましナ。」佐「飲むとも／＼、何事にも酒氣がなくッちやァノウ。」千「お祭が渡りませんかネ。オホヽヽヽ。」佐「サア、政坊、一ツ飲みなヨ。」政「ヲット、ちります。」萬「また散ると言へば此の間まで彼處の萩が、誠に盛りでありましたッけが、皆散つて仕舞ひましたネ。」道理で朝晩は冷つく樣になりました。」ト、言ふ折お萬も出で來り、萬「なんだお政さん、月日の經つを早いやうに思ふのかエ。年をとつて御覽、まだ早いわ。十五六の時分にや、お正月やお節句が、誠に待遠で／＼、もウ幾許寢ると正月だらうと、夫ればつかりが苦になつたが、今ぢやァ何卒正

月なんざァ、一生なくッても宜いと思ふわ。種々氣が揉めるから、一生無だ／＼、此正月は滅多に來ねえ。其の中にやァ宜い風が、吹いて來めえものでもねえわサ。コウ／＼、夫れといへば今日皆に、話といふなァ他でもねえ。全體皆い中にしたかつたが、何樣せお政が行くめえかと、今まで實は見合はしたが、聞けば親人も大分快くつて、一人で雪隠へも行かれるさうだ。それで左樣なりやァ大丈夫だから、何と三日の中假して、熱海の湯へ行かうと思ふが、それについちやァお政は勿論、お前方二人と、事に寄つたら、下の內儀さんも連れて行きてえ。他の者は仔細もあるめえが、お政坊、何樣だ行かねえかエ。左樣サ、噂に聞いた許り、ついに見たことは御座いませんから、行きたいもいきたいが、下、日纏ゐを引うとつて、それでお前、御病人に夜の通りではなし案じはないが、お前が留守ぢやァ、雑傍の事に、不自由だらうから、それではお前、行つて來る中、ソレ彼の噂でもあるから、それく氣が付くから、お前よりやァ結句宜いので、、、、其左樣な人がありますから、それを頼むとして、是非お前行きなせえ。其りやァ遠くで謂にはありますまい、聞いた樣なことでありますが第一箇根でも湯は近いが、その湯宿に寝轉んで居て、顔で海の端も見えるし、また箱根の方へ行つてぶら／＼と、生きた魚の選り取り、それから湯の湧く時が奇妙稀代。日本國にとても、二つとある所ぢやアねえ。時を限つてコポ／＼／＼と、たりやァ噴き出す所だ。マア試にゆかうぢやアねえか。一所に行くと極

あなさまァ。「イヤお前が若しお止めになると、丸然お止めになるかも知れない。下の内儀樣なんぞも、一里行きたいと此の間から、樂しみにしてお出でなさるし、また私共どもは勿論さ。ノウお萬さん」「眞實に夫ばかりやァいかれない。ネ、お政樣、お出でヨ」ト、勸められては斷りかねども、兎に角と言ひ兼ねて、無言つて居れば萬家の佐吉、膝を此方へ進ましても、何も其樣に久しく掛りやアしねへヨ、斷うと、往きが二日、歸りが二日、彼方に先づ、四五日としてざつと九日、十日と思やア譯はねへ。男の足なら、一日路だが、何樣遊山だからぶら〳〵と、二日掛りおやア樂なものサ。前後を引いて中七日ト、行くと極めなせへ。其處で病人になりやア、此の娘からァ、言ひ難いかも知れねへから、お前が二人で行つて、篤りと言つて見な」「萬吉「夫りやア承知して居ります。夫れなら今鳥渡行つて、金さんに頼んでこよう」ト、お政が返事も聞き切らず、二人は出で行く跡に、了得お政も義理づくめ、達て否とも言はれねど、此の頃貴めを免れて、少し安堵の其の間もなく、品を替へたる男の手管、旅他國へ出されなば、如何にあらんと夫れのみを、案じられて心も落ちるが、何卒して遁れんと、思へど先に詮なし。佐重は莞爾〳〵お政が顔を見て、萬「何だネ、その迷惑らしさ。何も鬱ぐ事はねへ、取つて食はうと言ひはしめえし」「夫れは左樣で御座いますが、お前樣が眞實に、言つて下さる事なれば聞かず、お金はお頂いたり、又今度も其樣な事で、お物入りを掛けますのが、何樣もお氣の毒でな

りません。」佐「ハヽヽ、詰らねえ。夫りやァ此方の物好だものヲ。何にも遠慮な事アねえ。其様な事を思はねえで、出掛けたら元氣を出して、些と面白く遊ばうぜ。」ト、言ふ中歸り來る二人、萬千「金さんに左様申したら、夫りやァ大きにお世話さま、モヽ吾儕もずつと快いから、雇ひの人も入りませんが、遠くへ行つては案じませうから、其の姨さんとやら賴んでおくんなさりやア、夫れでもう御座います、ト、大呑み込みの御挨拶。シテ見りやア、モシ旦那、ちつとも仔細は御座いませんヨ。佐「左様か、夫りやあ重疊だ。イヤ燗が臺なし冷めた。ちつと熱くして來てくんな。」ト、夫れより何など食ひ仕舞ひ、佐重は我が家へ歸り行く。お政はいとゞ氣は落ち著かねど、良人は少しも仔細なげに、言ふに從つて行くと極め、夫れに就いても觀音薩埵の、功力を以て事もなく、歸り來るやう夫れよりは、猶一心の誠を籠めて、旦暮これを念じけり。斯くて一日二日を過ぎて、愈々出立なすべしと、富貴寄よりお千お萬も、日々に來りて何くれと、痒い所へ手の屆くと、諺にも云ふ世話の仕振り、お政が胸にはいとゞしく、心置かるゝ思ひなり。扨その日は朝まだきより、良人金之介に別れを告げ、雇ひの人は云ふに及ばず、旅宿夫婦其の他へも、能く懇に後を賴み、皆々一度に出で立ちて、小田原まで東海道、夫れより熱海の道に掛れば、山坂多くまた海邊、道に難所もありながら、見下す伊豆の海原や、沖の小島に波打寄せ、漁る舟の往き還り、眼前へ及ばぬ白帆の影も、沖より出でて浪に入る。

思ひなき身にあるならば、争でか樂しからざらん。扨熱海なる湯宿に著きて、佐重は更に惜氣なく、金銀をまき散らせば、宿にはこよなき大盡客と、其の歡待も大方ならず、漁の魚は朝夕に、何くれとなく持ち込みて、日毎の酒盛絶え間なく、實に世界の歡樂は、此處に極まる心地なり。佐重は元是れ斯許りの、企てしうちも他ならず。何卒お政が心を取り、手に入れんと思ふの外なし。されば日暮其の折好きに、寛ぶ處にお政は宵より、強ひ付けられて酒を過し、其の座にも堪らずして、傍に有る小座敷あり、燈火もあらず暗けれど、隱れるには僥倖と、密かに此處に逃げ來り、手枕なしてありける所へ、徐々と來る人の氣勢は、誰ぞと見れば眞の暗、躊躇ふ中に傍へ寄り、ひしと抱くは佐重なり。逃げんとすれど逃がしはせず。處女娘で何ぞの様に、聲さへも立て兼ねて、少時慄き居たりけり。

第二十四回

再説お政は今宵の仕儀、網に掛りし魚ならずば、籠に盛られし鳥に似て、はや遁るべき道はなけれど、一寸伸びれば尋延びると、譬へにさへもいふなれば、遁れ果つべき様はなくとも、一まづ此處を遁れて見ばやと、忽ち顔を和げて、政「お前様が先頃から、此様な者を彼是と、言つて下さるお志は、嬉しいけれど男は悪性、打解けさせて笑はれうかと、思ひますからツイ鳥渡、好いお返事もいたしま

せんが、是れ程までにお言ひなはるのは、よもや譃でもありますまいから、今日といふ今日心を極めて、お言ひの通りになりませう。」ト、半ばも聞かず莞爾々々と、佐「何樣して左樣云ふ氣になつた。疑ふにも程がある。幾度となく反ね付けられても、なほ懲りもせず右の左のと、お前のお蔭で氣を揉むのを、笑ふ積りとはとんだ間違ひ、自由になるなら此の胸を、唐竹割にして見せてえ。」政「モウ吾儕が斯樣言ふからにやァ、後で否とは言ひません。鳥渡下の手水場へ、行つてくる中お前樣は、此處に待つてておくんなはい。」佐「左りやァ、何時までも待つてるようが、巧く瞞して其れなりぢやァ、今度はモウ合點しねえぜ。」政「アレまた其樣な事をお言ひだ。彼方と違つて何所へでも、逃る所はあるまいし、何で瞞しますものか。」佐「其樣なら早く行つて來な。」ト、捕へたる手を放されて、お政は構に盛られたる、鰻が川へ放されたる、心地になり早々駈け出し、下の座敷の隅の方、建て置く屏風の陰に入り、扨まづ一旦遁れても、是れから後は何樣しようと、胸に思案も置き餘り、只朦朧と萬事を覺えず、其の儘其處に蹲み居る。佐重は暫時待ち侘びて、今か／＼と氣を焦燥る。折柄足の音さへも、しと／＼として來る人を、見れば是れなんお政にて、暗がりなれば能くこそ見えね、笑みを含みて、政「佐重樣、眞實かェ。私やァ、何樣も譃らしくッて、まだ何樣も疑ひますョ。」佐「ハテサ諄い、馬鹿を言ふぜ。ほんたうでねえものが、是れ程までに氣を揉むものかッ。其れぢやァ斯樣せう此の胸倉

に、路用の手當が二朱金で、七十五兩入れてあるが、之を悉皆預けよう。若し自己が浮氣なら、返すにやア及ばねえ。假令明日から乞食をしても、お前故なら厭やアしねえ。」ト、出す胴卷の重みはづつしり、ホヽヽヽ。何もお前樣、今夜これを預つたッて、譃か誠か何が知れませう。併し夫れ程にお言ひなはるから、預つて置きますヨ。」ト、取れば佐重は頷いて、「金は愚か命でも、呉れろと言ふなら惜しくはねえ。是れ程思ふ自己が眞實、疑ぐるたア情ねえ。」トいひつゝそこへ肘枕、頃も葉月の袷衣、片敷く袖の移香も、身に染み〳〵と嬉しくて、如何なる夢をや結びけん。其儘其處に熟睡して、前後も知らでありけるが、遙かに鷄の聲やらん。耳に聞えて起きんとすれども、まだ彷彿と夢現の、境もわかである所へ、端嚴美麗の氣高き女、眼にあり〳〵と遮りて、「佐重能く聞けわれは是れ、日金の觀音大士なり。汝お政が色香に惑ひ、比少なき貞節の、人に操を破らせんとす。其の罪憎むに絶えたれど、彼も亦汝が爲に露命を繋ぎ、良人の療養快く、なしたる因緣、こゝを以てさのみ咎めず。但し今宵に迫りし難題、救はんとしてお政に代り、その情慾は果さしたればお政は其の儘神通をもて、良人の傍へ行かしめたり、此處に居らぬを驚くべからず。斯くのみ言はば疑ひ思はん。證據といふは宵に預けし、路用の胴卷金諸共、則ち日金の觀音の厨子を開かば彼處にあらん。こゝをもて疑ひはらせよ。吾經文にも見えたる如く、三十三身に現ずる神通、今宵は婦女と現じたり。」と聞くかと思へば

眼は覺めて、見れば如何にもお政は居ず、付き添ひ來りし者どもは、豫て樣子を知るからに、邪魔にならんと推量し、皆其の儘に臥したれど、此の時各々起き出でて、佐重が不思議の話を聞き、唯只管に呆るゝばかり。さらば日金に立ち越えてと、駕籠を飛ばして行きて見るに、示現に違はず觀音大士の、お手に掛けたる胴卷に、金の多寡さへ違はねば、佐重はもとより人々も、お政が信心勇猛を感ずるのみか、觀音薩埵の、利益を尊く思ひけり。されど佐重はお政の居らぬを、さすが心に掛るから、其の日熱海を發足なし、各々早駕籠に打乘りて、飛ぶが如くに立歸る。斯くてお政は其の夜さり、餘りのことに胸迫りて、其處に跪みてあるまでは、覺えたりしが其の儘に、寐たる心地のさし許り、夜明けの風の冷やかに、襟を通せば轉寢をせしならんと、驚き覺め、見れば此處なん良人の傍、まだ目が覺めぬか夢ならんと、幾度見ても違ひなし。身形は熱海にありし儘、昨夕飲みたる酒の香も、胸に殘りてありければ、狐狸に魅されしかと、更に不審は晴れやらず、其の折間の唐紙を、すらりと開けて立ち出でる杢平、是れまた夢かとびつくり仰天、不覺に齒の根も浮くばかり。其の時盧名杢平は手をつかへて一禮なし。杢「サテ私は一昨日の、夕方此處へ參りまして、若旦那さまにお目に掛り、御病氣のこと夫れに就き、貴孃が種々御苦勞も、とつくり承知いたしました。イヤ其の翌日御新造ごまが、御案じなされて、一の江まで、お行方索ねて參りましたが、夫れもお目に懸らぬ筈、漸う今度

で分りました。まづ〳〵貴孃は御機嫌よう。若旦那さまの御病氣も、はや六七分の御全快。モウ案じは御座りません。承れば四五日あと、熱海へお出でなされたと、若旦那さまのお話。昨晩何の御沙汰もなく、何時お歸りになりました」ト、話の中に金之介、目をさまして恟りし、金「イヤ、お政、何樣したのだ。昨夜も杢平と種々の、話しでモウ、子刻時分寐たが、夫れまで沙汰もなし、皆一所に歸つたのか」ト、問はるゝ此の身も合點行かず。有りしがまゝを委しく話して、不思議々々と云ふ許り。さて金之介はお政に向ひ、今度杢平が探して來たも、皆慈母さんのお計らひ。此の頃御家中の衆が榎の島へ、行くとて此處を通つた時、遠くでお前を見かけたから、家へ歸つてその話を、お聞きなさると慈母さんが、其處に居るに違ひない、はやく行つて二人とも、連れて來てくれとお金まで、渡して此處へ杢平を、つかはすッたといふ話。お上の方も左樣長く、捨て措かれる譯ではないが、御家老衆の勘辨で、まァもうちつと待つが宜い。若し居所が知れたなら、別段科のない譯だから、表向は病氣にして、家へ歸せば仔細はないと、内々御沙汰もあつたといふ。マァ有りがたいことではないか。左樣して見れば些とも早く、歸つたが宜からうと、是れ此處にお文もある。マァ篤くりと見なせえ」ト、出すを受取り讀み下し、何から何まで有り難さに、涙を拭ふ間もなし。政「夫れに就いて一旦は、母も難儀をしたとのこと、不孝の子さへ憎しとも、思召されず是れまでに、御恩を下さる勿體な

いゝ一ト泣くより外に言葉なし。さて金之介は、宿の主人に頼みて質に入れたりし、大小さへも請け戻し、さらば徐々立支度と、常に變りし忙しさに、其の日も暮に及ぶ頃、飄然歸る佐重が一運、お政が此處にあるを見て先づは各々安堵なし、夫れ懺悔には両重左遊の、罪さへ消えると聞くなれば、今より心を改むる、驗と佐重は其の夜の事、ありし次第を物語れば、聞く人奇妙の思ひをなし、お政が此處へ歸りしも、觀音薩埵の御計らひと、皆感涙に咽びけり。斯くて佐重は餞として、金二千疋を主人に贈り、是れより長く出入りをなしとぞ。斯くて金之介お政の二人は、未だに夢の覺めざる心地に、歡ぶ事限りもなく、嬉しきまゝに精ごゝへ、八九分通りは恵りて、夫れより第三日めに、此處を立ち出でまづ向島の、紫雲の方に到り著き、夫れより内々館に歸り全快の後改めて、お政と婚禮を取結び、男女あまたの子を設けて、めでたき春を迎へしとなん。

清談若緑巻之十二 大尾

教外俗文

娘消息

諫鼓苔深くして、鷄は米屋の臼の上に、太平の代をお結構と囀り、腹鼓打つて萬歳を謠ふ狸の睾丸の伸び〳〵と、長閑けき御代の稱賞、かかる目出度き世の中なれば、自由自在に事足りて、道に饑渇の愁へもなく、腹が空つたらよしの椀、會席料理を掌おとして、四文屋あれば百膳あり、二八のぶつかけ急雨を凌ぎ、藥食の鰻の蒲燒皿にさら〳〵と茶漬店等、無性者には數へ難し。されば子供の弄具にも、ピイ〳〵ガラ〳〵風車、蝶々止れや何でも彼でも、選取見取の安賣店まで、何時も賣る品繁昌は、子供衆の氣に入る豆や、花咲く春の新版も矢張り玩具の部類にて、陳文漢文俗解し、切拔文章の唐臭く、高慢臭き敎訓學問博物めかすは憎まれ口、可愛がられて子供衆の御贔屓請けるが早手まはし、どうせ誤謬の假名違ひ、誰だらけの片言まじり、年々歳々雷神門、飛んだり跳ねたり變つたる、ちよつぴりひねたる趣向もがなと、机に向つて頭技の、首を捻らして案ずるに、蓼食ふ蟲も好き好きの世の流行る其の儘に、生の物を生で賣たば、五分でも透かぬと氣はつけど、下手の横好き山猿にて、三本足らぬ人眞似は、藝なし猿の三文舍、三文程な智慧をふるつて、思案に餘れば是は困ると、妙奇てれつな趣向もなければ、詮方つきて筆をとり、此の本何か一巻の積とも御高覽の上御評判よく、悪い所も悪口の、いたづら書きは御免々々と、自己勝手な註へたて、あたりの儘の一ふつ付書き、子供衆ドッと賞めたり〳〵。

墨濱の漁夫

三文舍自樂戲題

教外俗文 娘消息初編上之卷

江戸　三文舍自樂戯作

第一回

御利生を玆に移せし不動尊、成田の旅宿遠場町、何時も參詣絶間なく、身に諸々の願事も、家内安全長久を護らせ給ふ靈驗は、月々日々にあらたなり。

今日は五月の御縁日、常に賑りてにぎはしく、手遊籠細工小道具屋十三文の選取店、甘酒麥湯氷水錫の附焼鮨天麩羅大道狭しと立ち並びて、互に競ふ商ひは皆御利益の餘澤にて、此處に算盤の早業をひろげて日用の御重寶此の上なしとパチ／＼鳴らす男あれば、編笠を被りて流行唄をどうまん聲にうなる讀賣あり、或は損品速繼の金漆賣る親爺あれば、鬮を當り鼠を使ひて景物を出す一寸野郎あり、小銅八錢の聲色にも、往來の人足を止めて恰も蟻の集まるが如く、がや／＼と賣めりや／＼と笑ふに、かかる草集の其の中を、押し分けへし分け二人の娘　一人は年の頃十六にて名はお初とて色白く目鼻だちよき愛嬌た

つぶり派手な浴衣に前垂掛け尺巾の帶をしどけなく結び下げ、藝妓まがひの意氣な作り。今一人は十四五にて野暮なこしらへの出來合の容貌、尤も緣遠き縮れつ毛、彼方此方を素見しながら、雨ぐりの下駄の聲カラ／＼、おべこ「オイ、いちゝ、アレお初さんマァお待ちな、下駄を引つくら返して足を痛めたから。」お初「オヤさうかえ、そりやお氣の毒、餘りお前がそゝつてお歩きだからサ。」おべこ「オヤ異な事をお云ひだね、お前ぢやあるまいし、それだがこの雨ぐりは全體引つくら返つていかないよ、石なんぞへ蹈掛けると直樣引つくら返るからいけやしねえ。」お初「何だねエおべこさん、てん／＼の穿き樣が悪いから足を痛めるのだよ。」ト云ひながら此方を向いて「オヤ／＼お吉さん處の小母樣、アレ聾だねえ、小母樣と云ふに小母樣何處へお出でだよ小母さァん。」三十五六の女房四歳許りの子を背負ひ呼びかけられし故ふり返りて女房「オヤ誰だと思つたらお初樣か、騷々しい呼びやうだねエ。」お初「それだつても何程呼んでも知らない顔しておいでだもの。」女房「オヤさうぢやないけれど、人込みで聞きつけなんだよ。そしてお前は不動樣へか。」お初「ア、お前もかエ。」女房「さうさ、唯一人かエ。」お初「ナァニこのおべこさんとサ。」女房「ホンニおべこさん、だまつておいでだから知らねえ人だと思つた、お前ひさしく何處へ行つてお出でだね。」おべこ「ハイ親類内へ行つて泊りましたよ。」お初「小母樣お吉さんは内においでか。」女房「ナァニ昨日姉が來たら直尻へついて泊りに行つたョ。」お初「ほんにかえ、それぢやまた二三日逗留だらうネエ。」女房「さうさ、內にゐると騷々し

くつてならねえから居ねえ方が靜かでいいのさ、お前もうお參りか。」お初「オヤ松さんは背中で睡眠おしだ、いい氣なもんだネエ。」女房「さうかエ、ほんにのう、ごしやうらくな子だ、お初樣ちつと遊びにお出でな。」お初「あり難う、お吉さんがお歸りなら。」女房「そんなら宜しく、おべそさんおツ母ァに宜しくよ」兩人「ハイ左樣なら。」ト別れる。お初「おべそさんちよいと〳〵、アレ彼方の持遊屋に立つてゐる娘をお見ナ、大層つくつてゐるネエ。」おべそ「ホンニ氣障な風だネ、アノ出來の惡いおかめの面と云ふ顏だネエ。」お初「さうさネエ、オヤちよいと〳〵あの人を御覽、後付はひどく粋な男だヨ、早く行つて顏を見てやらうぢやないか。」おべそ「一脈だヨおよしな、お前は誠に浮氣だネエ、彼の男に云ひつけるよ。」お初「オヤいいよ、浮氣でも顏を見たつて惚れやしまいし、お前こそ芝翫の處へ遊びに行きたいの、秀調に扇を書いて貰ひたいの、ヤレ紀の國屋なら命もやりたい、成田屋に口說かれたら嬉しからう、音羽屋に手を握られたらゾツとするだらう、何のかのとお云ひだつけ。」おべそ「おや嘘、何のあれやほんの戲談だワネ。」お初「それ御覽、戲談でさへ其の位だもの、本當ならどんなだらう、私なんざァさう云ッちやァ何だけれど彼の人より外に、美男だ惚れたと思ふ人は一人もないよ。」おべそ「オヤきついこつたネエ、大層おのろけだよ。」お初「のろけないでさ、オヤおべそさん今の男をお見、アレアレ家臺店でなにか食べてるよ、オヤ鰯の附燒だよ、色氣がないネエ、アレお見、此方を向きさう

だよ。」おべそ「ホンニ此方を、オヤ〳〵此方を向きは向いたが厭な顔だよ、形は粋で氣が利いてるても顔は不粋でいやだねえ、あれでも色が出來るかねえお初さん。」お初「そりやア何とも云へないのさ、中にやアひねッた女なんどは、にやけなくつていいとか何とか云つて、惚れる者があるまいものでもないのさネエ。」おべそ「さうさねえそれだが私なんざアあんな男は眞平だよ、（是れはきつい自惚れなり。）何程こんなお多福に生まれついても云はば女の切れつ端だから、一生に一度は繪に畫いた業平樣の樣な男を持ちたいと思つてゐるよ。」お初「それだから不動樣へお頼み申しにお出でか。」おべそ「オヤきつい先くゞりだねえ、お前なんざア羨ましいよ、成田屋と梅幸を一ッにしたやうな彼の人と出來てお出でだから。」お初「いいよ、其樣に輕薄に煽てゝお呉れでない、どうで私やこんないたづら者だから。」おべそ「アレサさう云つたのぢやアないワネ、餘ッ程お前は何だねえ。」お初「ナニ何だとえ。」おべそ「何でもないから何でもないワネ。」兩人「オホヽヽヽ。」お初「それでもお前は染物屋の紺さんの處へお嫁においでの筈ぢやなかッたかえ。」おべそ「彼處かエ、止しにしたよ。」お初「ナゼエ、内も勝手がいいさうだのに、紺樣も滿更な息子ぢやないぜ、少し目つきが紀の國屋といふ所があつて隨分意氣な。」おべそ「イヤ〳〵何の紀の國やどころかえ、不美男と云ふ程ぢやないけれどあんな男は私は嫌ひさ、それに第一家業が嫌だワネ、年百年中紺臭くつて、一ッ夜著へ這入つたら嘸紺臭からうと思つて。」お初「オヤ〳〵きつい先

案じだネ、それぢやァお前は何家業がいいのだえ。」おべそ「私かエ、何も格別家業に望みこそみはないけれどアァ臭ひのする家業は嫌ひさ。」お初「ヲャ／＼臭ひのする家業とはをかしいネ、そんならヤァ漆屋だの薬屋だの髪結だの酒屋だのと云ふ商賣はいけないネ。」おべそ「それもさうだがネ私は何がよからうと思ふよ、アノ兩國の。」お初「ムヽ何かエ、幾世餅かエ。」おべそ「ナアにそんな野暮なものぢやァないワネ。」お初「そんなら漫八か逢のしか、青柳でもあるまいネ。」おべそ「アレお前も鐵の付け處が惡いネエ何だワネ、アレソレエ四ツ目屋だワネサ、、、。」お初「ヲャ／＼そりやアあの長命丸を賣る内だネ」おべそ「アヽ、彼處にはネ宮守の黒燒だの何彼がたんとあると云ふから」お初「ヲャ／＼嫌だねえ、さうしてマァ宮守の黒燒がたんとあつたら何におしだ。」おべそ「さうするとネ、私や好いた男に引ふり掛けてたんと色男を拵へるワ。」お初「ヲャ／＼誠に浮氣だねえ、ヲャおべそ樣彼處に艶色が出てるるよ、早くおいでァレ誰か使つてるるよ、粂三ださうだよ。」ト二人は急ぎ足に、大勢取卷きて艶色を聞いてゐる傍へ立寄り、おべそ「ヲャほんに粂三と成田屋の掛合だね、いいねエ誠にどうも、アレあそこの處がア、いい、どうもひどくいいねエ誠に上手だよ。」お初「さうさネ、アレあの成田屋の聲が誠にいいねエ、ヲャそれ行燈をぶゥと鳴らす處が。」おべそ「ア、誠に生だよ、アレ粂三の愁への處をお見、出た樣だヨ、いいねエアレ成田屋のいい事と云つたら彼處は睨む處だ、ア、いい誠にどうも。」ト無上にやたらと譽める故かたはらに聞いてゐる男ふり返り、「エ、よ

く饒舌る娘だ、ちつと靜かにしな、騷々しくつて聞えやしねえ。」トぶつ〱小言を云ふ。おべそはとがめられても猶へらず口の小さな聲にて、おべそ「お初さんお聞きか、不景氣な人だネエ、自分一人で買ひ切ッた聲色ぢやあるめえし、矢張り傳坊の癖えして御大層を云ふネエ、いいからいいつて賞めるのだ、いめえましい野郎だ。」お初「コレサおべそさん、そんな事をお云ひでないよ、きこえると惡いから、あんな奴にかまつても始まらないワネ。」おべそ「さうだねえ、氣障な奴だと云つちやァない。そんならもう行かうぢやァないか。」お初「マアお待ちな、今に音羽屋と紀の國屋を使ふさうだ、もう一枚聞いたら參らう。」トいふ時拍子木の音「カチ〱〱カカチ」おべそ「オヤもう五ッだよ。」お初「それぢやァ參らうねえ。」ト二人は三丁許り來りお初「おべそさん私は些と寄る處があるからお氣の毒だがお前は先へ行つてお呉れでないか。」おべそ「さうかェ手間がとれないなら一緒にまゐらう。」お初「なァに餘ッ程手間取るから、遲くなるとをばさんが又お案じだと惡いよ。」おべそ「さうさねえ、それぢやァ私は先へ行くよ。」お初「ア、そんならおべそさんをばさんによろしく。」おべそ「アイお初さん誠に有り難うよ。」お初「オヤ私こそだよ。」兩人「そんならお休みよ。」ト互に別れるお初は此處より横丁へ曲り待合と書きし懸行燈のある水茶屋の門口よりお初「お仲さん今晩は。」ト內へ這入る。三十許りの意氣な年增うちは使ひ乍ら洒落本を讀みてゐたるがお仲「オヤ誰方かと思つたらお初さん、サアこつちへお出でな。」お初「有り難う、今夜は誠に暑いぢやァないかねえ。」お仲「さうさねえ風がねつからないせえか、むし暑くつて堪らないョ。お初さん何かェ、不動樣へお詣

りか、マァ此方へお上りな。」お初「ア、長さん處のおべそさんと一緒に詣つてネ、それから此處へ来たのさ。」ト上へあがつてだらしなく坐る。お仲「きつい御信心だネ、大方色男と早く一緒になります樣にとお祈りだらう。」お初「オヤ嫌よ、又そんな事を、アノお仲さん十さんは今夜はお留守だネ。」お仲「ナニ内の人かヱ、アア内ぢやァ今夜は無盡でね閑田まで行つたよ。」お初「さうかヱ、それぢやァお前は寂しからう。」お仲「何のお前、小言を云はれないでいいのさ。其の代り、お初さん内で留守だとお前はなぶられなくつてよからう、お前の顔さへ見ると彼の男がどうしたの斯うしたのとじらすから、お氣の毒でならないよ。」お初「なんのお前戯談だからよいはネエ、ほんにお仲さん忘れないうちさう云つておくがネ、アノどうぞ仙女香を二包許り賣つてお呉れナ、お錢は明日持つて来るから。」お仲「さうかえ、今日ネ、京橋から白粉の来たてだから丁度よかつたネ。」お初「オヤそりやァ嬉しい、アノお前の處ぢやァ仙女香が大層賣れるネエ。」お仲「其のはずさ、いい女が賣るからどうしても違ふのさ。」お初「オヤ氣が付かなんだよ。アノお仲さん、私の顔はどういふもんだか、他の白粉はさつぱりのらないがネ、仙女香許りは奇妙だよ、どんなによくのるだらう、此の間もにきびがちつと出来たからネ、此の白粉をつけたらちつきなほつたよ、どうしてもものが好いものだから付けた後の心持がよくつて、どうかこんなお多福でも、美女に成つたかと思ふやうだよ。」お仲「フウいいお多福のふりをして、そりやァお前どうしたつ

て外の白粉とは製法が違ふッサ。」お初「さうだらうねえ、道理で利きがいい筈だ。それはさうとまだ來ないかエ。」お仲「ナニ彼の人かエ、今しかたお出でだッたけがお前がまだお出でゞないから、何か買物があるとつて出てお出でだよ。」お初「さうかエ、またどこぞへはまり込みァしまいかねえ、何だか誠に苦勞でならないよ。」お仲「なァにそりやァ氣遣ひなしさ、アノ德樣も常不斷斯うお云ひだよ、アノお前知つてお出でだつけネ。」お初「いんエ、知らないよ、何と云つたエ。」お仲「アノなんだッサ、アノ緣と云ふものは異なもので、お初さんの裏へ一寸仕事に行つたのが緣となつて、合間小間の無駄話や、戲談口をきく度に、をかしくなくつても笑ひかけたり、どうか向うでも滿更でもないかして異な目づかひで知らせるから、此方も矢張り自惚れで、もしや俺に氣があるのかと、自分考へで押し強く、小當りに口裏を引いて、當つてみたら嫌とも云はず、早速承知の幕明で、ついしつぽりぬれたのが、一番目の發端で、それから色々法を書いたり、趣向を案じて逢はれる樣に成つたけれど、あの子に一度馴染んでから、外の女は振り向くもいやに成つたと云ふは、誠にどうも不思議だが、よく〳〵深い緣だらう、なんの彼のとお云ひだからネ他に浮氣はない樣子だよ、男が口へ出して賞める位の女は、どうにも斯うにも、可愛くつて〳〵、ならないからだョ、さうしてみるとお前は誠に感心だねえ年若だが。」お初「サヤ先刻から聞いてゐれば、お仲さんお前マァ何程私の樣な者だつても、そんなに

上げたり下げたりしておなぶりでない、誠にお前も口惡だネエ」お仲「アレ嘘だとお思ひなら德さんがお出での時聞いてお見、その證據はソレお前も知つてお出でだらう、アノ北郭の姿海老の花房とか云ふ女郎に、久しく馴染んでお通ひだつたけが、お前と譯が出來てから、すつぱり切れておしまひだもの、それだからお前も浮氣な色事はおしでない、其の中にやアどこかどう話合が付いて、夫婦になられるのは何にも譯はない今の間だワネ」お糸「それだがネお仲樣、私ア德さん故ならどんな辛い目も厭はない氣だがネ、お前も知つておいでだが、アノ内のおッ母アがあの通りの氣前だから、どうも六ケしからうと思ふよ、いつか中もソレお妾に出ろの何のと云つたを、私がもう／＼じぶをくつて／＼とう／＼止めてしまッた位だから、又今にいい事でもあると直斯うしろのあゝしろのと云ふから、誠にどうも怖れるねえ、それだから一層私は德さんと相談して、二人して當分どこぞへ行つて居ようかとも思ふよ。」お仲「何さそりや惡いよ、おッ母樣だつてタッタ一人子のお前だもの、憎くつて爰や角云ふのぢやアないワネ、親と云ふ者は皆子供に樂をさせようと思つて大家のお妾に出したがつたり、又はいい旦那の圍ひ者にさせるのも、マア云はば慾のやうだがつまらない男にでもくつ付いて、一枚宛も著てゐた著物をはがれる許りでなく、擧句の果てには、遠くの苦界へでも賣りこくられると、其の身もつまらないが、親は折角掛らうと思つた玉を引つさらはれて、喰ふや喰はずになるのは幾許も

あるからネ、それでいい所へ賣り付けたがるのさ、矢張り子が可愛いからだワネ。」お初「ほんにさう云へばそんなものさネ、それだけれど私はたとへどんないい暮しをしても、好かねえ人の世話になる事は嫌だと思ふよ、中にや向う裏のお杉さんの樣なのもあるがネ親も親だがあの子もあの子だねえ。マァつまらないぢやァないか、あんな二本棒の世話になるとは、ソレお前も知ッておいでだらう、アノ色の黑いおばた面のでつぷりした人さ、いやぢやァないか、よくマァお杉さんもあんな人の云ふことをお聞きだと思ふと、あの子の顏を見る度ごとにをかしくつてならないよ、さうしてネ何だッサ、たま／＼來るのならいいけれど少將と同じ事で、毎晩々々通ひ詰めると呆れるねえ。」お仲「さうだとねえ、根のいい人だと見えるョ、あの子も可愛相に、その爲かして顏の色が惡いやうだョ、お前もそれだから大概に精出してお置き、過ぎると惡いから。」お初「オヤ氣が付かなんだ、宜しく申してお吳れそれ許りは大丈夫さ、しみ／＼と落付いて、逢はれる身の上ぢやァなし、其の事は決してお心遣ひは御無用さねえオホヽヽヽ。」お仲「然し互に好いた同志で惡で蠅を追ふ樣になりや、其れこそ誠に本望だらうね。」お初「そりやお前の云ふだけ野暮だよ。」「何が野暮だ、野暮たァお前俺が事か。」トすつとはひるは大工德兵衞、年は二十五六にして苦味走つた嫌味なしの色男、娘も年增も好く風なり、髮は水髮なれども小髷にて下卑ぬ頭、大型の浴衣に平絎の帶、煙草入は古渡りの金皮に、御大層な銀鎖は付けず、火打道具を入れ

し印傳の胴亂を小付にしたる一ッ提げ、根付は辨慶と小町と睨め競の細工物、肩へ掛けたる芥子絞はいづれ切り立ての手拭なるべし。お初「マァびつくりしたよ誰だと思つて。」德兵衞「ヘンしらをきるの、誰だと思ふかァつがもねえか呆れるぜ。」お仲「オホヽヽほんに德さん今お歸りか、どこまでお出でだ。」德「ナニヨ葭町まで行つて來たのス、コウお仲さんお土産を買つて來たから皆一緒にげび藏とやらかさう、サアお初坊お前も食ひな。」ト懷より竹の皮包を出す。お初「オヤ金たがの鮨だネよく氣がお付きだ、奇特な事だ。」德「惡く洒落らァ默つて食べねえ、こりあ何ヨ此間誂へて置いたお前の簪のあの代を持つて行つたら四百文つりをよこしたから、葭町へ廻つて來たのよ。」お初「さうかえそれぢやァもう簪は出來たかエ、さぞ暑かつたらうねえ。」トうちはで德兵衞をいそいそとあふぐ。德「明日の晝時分までに出來ると云ふから、明日の晩取つて來てやらう。」お初「さうかえ、嬉しいねえ。」トにつこり笑ふ。お仲「オヤお初さん、昨日お話の簪の事かエ。」お初「アヽあの事さ、お前も一本お誂へな、どんなに意氣な風だらう。」お仲「さうかエ、私も事に依ッたらこしらへよう。」德「それはいいがサァ食べねえな、口許り利いてゐるからかたでいかねえ、大方俺が來ねえうちに先刻から饒舌り續けだらう。」お初「オヤ譃ばつかり、トヽそんなに饒舌るものかネお仲さん。」お仲「さうさほんに德さんお前の噂ばつかりで、外の話は薩張り無しさ、きついものさネ、ほんに影ののろけが聞かせたいョ。」德「なんの又お仲さんまでが甘く喰はせやすョ、それでもお初坊何

だぜ、今彼處でお吉さんのおつ母ァに會つたが、お初さんとおべそさんに逢つたと云つたが、又あのおべそ坊は碌でもねえ面をして、美女ぶつて高慢ちきな口許り利くから、二人ながら口まめ同志で、どんなに饒舌りながら歩いたかしれやしねえ。」お初「すヤいいョそれぢやァお前ァノお吉さんのお母さんにお逢ひか、そんならどこぞで逢ひさうなものだつけネ。」直「逢はねえ筈よ、お前は無上にそゝつて歩くから、すれ違つても知れやしめえ。」お初「すヤ譃を、そりやお前の事だよ、私ァほんの信心一三昧だもの、お前こそどこの縁日でも參るのぢやァない、ひやかすのだよ、それだからついしか三文と云ふお賽錢をお上げの事はありやしまい。」直「何の悪く洒落らァ、お前こそ浮氣信心だ、その證據にやァ今夜は都合して早く來て呉れろと云ふもんだから、俺ァ先刻から來て久しく待つたぜ、待つても待つても來ねえから、馬鹿な面して待つても居られず、それから葭町へ行つて來たのに、お前は不動樣をだしに使つてさんざつ腹ひやかして、漸う今しがた來たのだらう。」お初「すヤ勿體ねえ、どうして私が不動樣をだしに使ふものかネ。」直「使はねえならなぜ早く來ねえ、さう云ふ情なしだァ。」お初「左樣さ私ァ情無しさ、どうでお前のやうな浮氣者に惚れる位だから、情無しは知れてゐるのさ。」直「何を聞いた風なこと。」お初「これさどう云ふものだエ、寄ると直ぐにいぢり合ひだ、もう夫婦喧嘩もうるさいねえホ、、、、ほんに本直の取つたのがあつたから、仲直りに一口おあがりな。」直「そいつ

あゝよかんべ、そんならちよつぴり刺身でも取つて来よう」丹「何さいいにアノ卵があるからあれを生の儘がよいと割つて醤油を少し落してはどうだらう、第一根の薬だよ」米「ナニ遣へねえ、そんならさうしよう、コウお前もちよつぴり飲まねえか」丹「マア、お前がおあがりなら」米「そんなら徳さん二階へ持つて参らうか」丹「なんの否がいいわな、マア／＼お仲さん此處へ来なせへ、三人寄れば文殊の智慧だ、是れから年中一の富に當る樣な事を智慧袋から探し出さう」仲「誠に慾が深いネエ」丹「知れた事よ、慾と色の二道へな者があるものか、のうお仲さん」仲「それやアほんに違ひなしさ、サア／＼るゝ樣しにお初あなせ」丹「さうかそんなら」ト猪口を下に取る 仲「私がお酌をしよう」丹「まットあります／＼、つめてえ／＼、こりやお仲さんひやしておいたのか、どうしても通りだのこ」ト猪口を下へ置く 丹「どれほどんなにつめたいえ」ト飲みかけて酒を下に置き飲みてコリヤ先か 丹「こいつア趣がいい、人の呑んでるのをひつたくるたア、そんなに待遠なら外の者で始めればいいのに」丹「なにさうぢやアないかネちつとは呑ましてもいいぢやアないかエ」仲「何の事だ珍らしさうに、呑み掛けたものをこれ見よがしに人のゐる處でわざと呑むのは、まだ本當の色にならねえうちの事だアな、第一昔時代の仕うちで野暮つてえのうお仲さん」丹「ほんにさア、然し私も覺えがあるが、年のいかないうちと云ふものは、男と異つて女の氣では、惚れた男の呑みかけは、酒でもお茶でも煙草でも、どうも呑みたくつて

ならないものさ。」徳「ヘンお前までが同じ様に、うまく云ふものだぜ。」トこれより三人、さしつおさへつ無駄口利きながら呑んでゐる。お初「もう／＼私ァ何だか一ツのぼせて來たに、呑まないと云ふにお前が無理にお呑ませだから誠に醉つた。」ト胸のあたりを團扇であふぐ、徳兵衛は少しほろ醉ひにて、徳「なんの醉つたもすさまじい、ちよ、猪口にちいつと許りなめたつて、ジョ上戸の様な口を利く事はねえ。」お初「それはいいが徳さんもういいかげんにお呑みな、追付けもう四ツだよ。」徳「ナゼ／＼四ツ打ちや呑めねえものか、なゝ何かまふものか、遲くなつたら泊つて行きァスタイ。」お初「そりや何時までおあがりでもいいけれどネ、私歸らなくつちやならないから。」徳「ム、さうか、お前歸るか、エ、そんならばと、ウ、俺が路次まで送つて行かう。」お初「それだけれどもまだ歸られないワネ。」徳「なぜ／＼今歸りたいと云つたぢやァねえか。」お初「さう云つたがネ、まだお前忘れた事があるからさ。」徳「ナ、何よ、ム、何か簪か、簪ァ明日の晩取つて來てやらあな。」お初「なァに其の事ぢやァないよ、ソレ何さ、お前醉つたものだからお忘れだネ。」徳「ナニ醉ふもんか、憚りながら、ゲーブウ生醉本性異はずにて候以上月日ツ、この外になにも忘れた事は御座なく候か。」お初「アレ何だネ、お呆けでない、忘れない事があるものかね、ソレあの彼の事だわネ。」徳「ソレァノ彼の事つてハテナァ何だ知らん。」お初「エ、なぜ其様にお呆けだヨ、かの事とはかの事だわネ、もうじれツたい。」ト膝頭をふつつり抓る。徳「ア、痛え、何もつめられる罪は作らねえ氣だが。」お仲「オ

ホ、、、德さんどうおしだ、正をお付けな、お初さんが彼のことゝはソレなんだよ六月の十五日さ。」德「ナニ六月の十五日、フゥ三月ならば梅若だの、ハテナァ佛の口ぢやァなかつたか。」お初「オヤ白をお切りでない、六月の十五日とはネ、アノソレお祭と云ふ謎だわねえ。」德「フ、判つた／＼ソレ彼の事とかけて何と解く、即ち六月十五日、其の心はお祭の番附、こいつァ面白え、アハ、、、、、コウお仲さん俺が音頭の取り様が上手だから、此の子のキヤリはどんなだらう、八町四方へひゞくやうだぜ。」お初「ソレもう讒許り、いつ私が、誠に憎らしい口だねえ。」德「左樣々々誠に憎い口で御座りやす、何なら酒屋へ行つて呑口と取替へて參りませうか。」お初「いゝよ何とでもお云ひ、お前の樣な天の邪鬼にはとても叶はないから。」ト云ふ時でホンとつき出す鐘と共に拍子木の音「カチ／＼カチ／＼」德「そりやこそ知らせの木が這入つた、さあお初さん一緒に來な、是れからだんまりの幕明きだ。」ト手を取つて左にニツコリ お初「もし德さん、だんまりの次の幕は愁歎場で、お初さんをたつぷりお泣かせだらうねえ。」德「へゝゝわけへねえ澤山だ。」ト二階の梯子を登る音「トン／＼／＼」

教外俗文 娘消息初編上之卷（終）

教外俗文 娘消息初編中之卷

江戸 三文舍自樂戲作

第二回

家賃の滞りに店立を喰つて、ォツト先刻承知の介と、大屋さんの顔と溝板を蹈付けにする不實者あれば、九尺二間の火打箱を寓宅と高慢る賣卜者は、通り町の定鋪に、面の皮を曝し三番叟あり。杵屋と呼ばるゝ三絃の師匠へ這入り込む壯者は、娘の容貌に法蓮華經、宗旨違ひを祖師流のは、義太夫好きの道心坊、隱れん坊や鬼渡し子供の騷ぐをぐり〳〵と、岩永もどきで呵るのは偏屈親爺の八釜屋、神信心の佛嫌ひは自ら五平と通稱して、被ぎ人を名に表はせり。向うの娘が面被り、踊りの稽古が始まると、惡口を利くお辯婦は、人の疳氣を頭痛病み亭主を尻に引摺り女房、女髪結洗濯屋、按摩針醫に日雇取り、商客職人入りまじり、家數も多き大長屋、實に裏店ぞ姦しき。路地の方より草履下駄の音はたばたと驅け來る芥子坊主、

竹松「おッ母ァやあ表へあめやが來たから買つて呉んねえよう、おッ母ァやァ。」　母親「エヽ、やかましい

餓鬼だぞ、何でも日がな一日食ふ事許し考へて、鼻の下の乾く間がねえ、意地きたなあ、今しがたお晝飯をしまつたに、〔モウ〕ねだり事かうるせえこつた、〔おッ母ア〕は今洗濯物で手が塞がつてるから、其處の煙草盆の錢を四文持つて行け、〔モウ晩まで〕買食はならねえぞ。」〔竹坊〕「ヲヽソノ四文ぢや嫌だア、八文くんねえヨウ。」〔母親〕「エヽよく色々の事をぬかすぞ、毎日〳〵買食をする錢許しでも何程だか知れやしねえ、昨夜も父が大小言をいつた、もう明日からは無駄遣は遣はせねえぞ、十二文やるから早く持つて表へ行つて遊べ。」〔竹坊〕「アヽおッ母ア、サア錢ア貰たいけえ事あるのう。」〔母親〕「知れた事よ有つてもいい、そりや買物をする錢だ。」〔竹坊〕「そうか何を買ふんだ、俺が買つて來てやらうか。」〔母親〕「又きにお世話よ、そんな小癪な口を利かねえで早く行つて遊べ、そして惡戯して皆と喧嘩すると聞かねえぞ。」〔竹坊〕「それでも吉さんや太郎ぼうが昨日打擲けたの、天水桶の水を掛けるもの、俺も打擲けてやらアに。」〔母親〕「馬鹿あそれが惡い、そんな惡戯する時ア遠くへ退いてゐるもんだ、叶ひもしねえ癖にまけねえ氣でもいつでもしめへは泣きつ面だ。」〔竹坊〕「ナニ泣きつ面でもいいやナア。」〔母親〕「又そんな口答へを、情を強くすると父にさう云ふぞ。」〔竹坊〕「ナニ父に云付けちや嫌だア。」ト錢を持ち駈け出さうとする時、向うの内より五十餘りの中婆樣〔お釜〕「オヤ〳〵竹さん〳〵、いい子だからネ小母さんのお使に行つてお呉れ、御褒美を上げるから。」〔母親〕「サア竹坊、お向うのお初さんの小母さんが頼まれてくれと、よくお聞き申して行つて

あげな。」ト呼びかへされてたち戻り、竹松「アイ小母さんなんだえ。」お吞「アノネ後生だから横町の仕出屋へ行つてネ、今誂へた物を早く寄越して呉れとさう云つてお呉れいい子だから、サア是れがお使の駄賃だよ。」ト二十四文許りやる。嬉しさうに頂いて母の方を向き　竹松「おつ母ァから、小母さんがやらうと。」母親「オヤ／＼いいの、お前さんお止しなされぱいいにお氣の毒な、竹や頂いたかエ、そして有り難う御座いますとお禮を云ふもんだよ、早く行つて來てあげな。」お吞「アノ竹さん、その序にどうぞ湯屋にお初がゐるだらうからお客があるから早く歸れとさう云つてお呉れ。」竹松「アイ。」ト表へ驅けて行く。母親「ほんにお客さんでございますか。」お吞「ハイサ生憎あの子が娘の事なり。湯へ行くと、出違つてお出でなすつたから用があつても外へ出られませんワナ、ほんにお洗濯をなさるのかエ。」母親「ハイあんまり内の者の浴衣が汗ばみましたからざぶ／＼とふり出しますのさ、暑いうちは著肌は薄くつてよう御座いますが、このモウ汗で汚れるには弱りますのさ、其れにお前樣私の内なんぞは、とり分け汗つかきだから、人一倍著物が早く汚れますのさ。」お吞「それでもお前男と云ふ者は、暑けりやァ裸にでも肌をぬいでもゐられるが、女はどうも私共のやうな婆になつても、そんな行狀は出來ないものさ。」母親「左樣さ、どうしても女は一割損でございますのさ、オホ、、、オヤ大分嫌な雲が出て來たが、夕立でもしなけりやァいいが。」お吞「ほんに餘りむし暑いから、一降り來るかも知れません、マァお靜かに。」母親「ハイ有り難

う。」ト互に言葉切れる折柄、仕出屋の若い者岡持を提げて入り来り、男「モシお神さんお誂へはお前さんかエ。」女房「いゝエ、そりやア
私の處ぢやアねえツイお向うだよ。」男「さうかネ。」ト向うの家へ這入り　男「ハイ大きに遅なはりました。」ト色々肴を
出す　お蚕「アイこりやア大きにお世話。」ト直に膳蓋へ載せる　仕出屋の男は立ちかへる。引違へて娘のお初、駒下駄
の音からノヽにて湯上り姿の美しく、左褄にて浴衣をかゝへ内の敷居をまたげながら　お初「オヤ、遅かつたぞ、オヤお
つ母ァ、大層うまさうな物をお取りだの、アノ竹さんにお客があるとさう云つてお寄越しだが、誰が
來たのだ。」お蚕「お前今けへつたか、誠に今日の湯は長かつたのう、また何處ぞへ寄りやしねえか。」
お初「アレなかアしなおッ母アだのう、人の云ふ事は挨拶もしねえで、何ぞと云ふと何處へ寄つたの長
へ湯だのとお云ひだが、経行に成つて門左日逗入らずになつた者を、たまノヽの湯だから長いのはあた
り前だよ、小桶に半分程し垢が出たものを。」お蚕「いゝよアそんな事ア、立つて見てゐるとお前が
出來たかちよつと見てくんな。」お初「アレおッ母アは小言許りお云ひだが、さうしてマア誰か來たの
だといふのによウ。」お蚕「コレサマア静かな譯で云ひなヨ二階にゐなさるからアノ何よ、ソレ此の間ち
よつとお客様が云ひ込んで呉れた、ノ、ソレいつだかお前を芝居でちよつと見なすつてから、何だと
云ふかの旦那だッサ。」トひそ〳〵云へばお初も同じく小聲になり　お初「ノウさうかえ、又鼻聲　いやだのう、おいらが得心もしねえ
のに、誰が連れて來たのだのう、人の世話になる位なら飯焚奉公に出る方がましだヨ、をかしな事が

無くつてさへ、他所へ行くと何だの彼だのと、色々な事を云はれるのに、是れからはマアどんなに云はれるか知れやアしねえモウ嫌だのう、友達の前へも外聞が悪くつて、いつそ死んでしまひてえよおッ母ア、のう何とか斷りやうはあるまいかのう。」お吞「エ、此の子は又そんな馬鹿を云ふよ、今に成つて斷りが云はれるものかナ。」お初「それだッても嫌だのう、友達は猶の事たが、知らねえ人にまで後指をさされるだらうと思ふのに、おッ母ァは誠に胴慾だのう。」お吞「ナニ胴慾なものか、皆お前の爲にするのだ。」お初「何の俺は樂な身に成らずといいから、人に氣障な事を云はれねえ方がいいよ、アノどゝ逸の唄にもあるが、這へば立て立てば歩めと育てた親が、今更轉べた胴慾なと唄ふものを。」お吞「エ、又そんな流行唄ア引きべつウして、利口めえた事を云ふが、どゝ逸等は作へ物だから、どんな理窟でも付けられる筈よ、是れが正立つた義太夫等にあるなら格別今時の流行唄は、手前勝手な事ばつかしで、何の事アねえ悪態もく態を習ふのだ、馬鹿々々しい、そんな氣の弱え事を云つていけるものか、何をするも身過ぎ世過ぎだ、友達が何と云はうが、世間の人が笑はうが、一向平氣孫左衛門で、お構ひなしでゐるがいいわサ、どうで世間の人は口が悪いから、ちつと首でも上るものを、それんでどうめへた、かうめへたといふのは今初まつた事ぢやアなし、それが恐くつてこの世が送れるものかよ、お前に得心させねえから腹ア立つのは無理やねえが、どうで江戸ッ子は氣が高えから、好い

た男に添ふのと違つて、嫌な人に身をまかせるのは、そりやァいやのは知れてゐるわな、それだから假令どんなに惡口解を云つたつても得心する事ちやァあんめえとおくみさんが云ふから、それで出しぬけを食はしたのよ、おいらだつても若え時の覺えがあるから、お前に後指をさゝせるやうな事はしたかァねえが、其處がそれ身過ぎ世過ぎだ、父つァんが達者であるなら、好いた男を婿に取つて、孫の顏を見る氣だが、何と云ふも今の身ぢやァ、そんな贅澤は云つても初まらず、心に思はねえ事をさするのも、皆因果だと諦めてくんな、今に成つて意見がましい事を云ふのぢやァねえけれどの、こりやァほんのたとへだが、子の身に取つちや親程大事なものはねえから、親に孝行して誠實を盡いた者は昔から幾程もあるが、その大事な親を打捨つて何程好いた男でも、一緒に逃けるなんて事と云ふ不埒きよな事があるものか、マアその時ァ隱れたは宜いが、乞食をしても添ひ遂けるとか何とか云ふけれど、後へ殘しとく親に苦勞をかける罰が覿面で、見る影も無え樣に成つた時分に、漸う目が覺めて、エ、勿體な、親の云ふ通りにどうなのかうなのしたら、こんな苦いめはしめえにと、後悔をする者は何程もあるから、何でも親の云ふ事を聞いて苦勞せへかけなけりやァ、行末はいいに極したものだ、是れが何も一生お前を人の世話にして置かうと云ふ氣ぢやァなし、ほんの當分の事だわな、その内にやァいい風でも吹くだらうから、其の時こそ好いた男があるなら命に替へても持たせるから、

どうぞ俺に苦勞をかけねえ樣にしてくんなよ、お初何も無理な事は云ひはしねえ、時代だと諦めて時節を待つてゐてくんな。」トお爲ごかしの氣安めも、のッ引きならぬ言葉の鎹、五分さへ隙かぬをつくづくとお初は聞いて今更に、云ひほぐすべき答へさへ、泣くに泣かれぬ苦しさの、胸の曇りを身仕舞の、鏡に寫す淚の顏、ぢつと見詰めて又淚、隱す袂の綻びが、もし戀中の辻占かと、思ひ過しの母の謎、常に變りし一言が、身に染み／＼と行末を、案じてみれば大切の、親の言葉も背かれず、許しをうけぬ浮氣に、手前勝手の女夫中、とは云へ操を破りては、契りをこめし德兵衞に、言譯もなき女の道、立てれば母に孝立たず、兎やせん角と樣々に、一人心を紅葉ばの、いつか浮名の立田川、流れの身にも變りなき、人の眺めとなるならば、貧苦に勝る辛苦心、それも慕しい男の爲に、沈む苦界は厭はねど、義理と恩とに操を捨てて、仇に枕を交しなば、女冥利の怖ろしと、思ひ惱みて鬱ぎゐる。

お吞「ほんにうか／＼口を利く内、お燗が滅法通り過ぎた。そんならお初ャお化粧をしたら早く二階へ來なせえよ。」ト母がニコ／＼、酒肴を二階へ運ぶ後影見送りホツト溜息をつく、をり、鄰にワャ／＼と話し聲やら笑ひ聲聞く耳立てに一人ごと お初「オヤ鄰の市さんの處で德さんの聲がする樣だが、いつでも鄰へは來なさらねえに、德さんぢやァねえか知らん。ハテナ私が心の迷ひの爲か、アレあの笑ひ聲がどうも德さんに誠に生だ、アレ／＼違へねえ本當の德さんだ。此の頃は誠に都合が惡くつて久しく逢はねえから、聲を聞くと身慄ひの出る程逢ひたくつてならねえ。ど

うそちよつと逢ひたいものだ」ト「ナニこんな事や何か話して金に仕かへ付けて貰ひたいもんだね、お
ツ母さおかんなにさばけねえ氣だから、誠に困るのう、畢竟だと云ふのに何處のお店者が連れて來て、
この[illegible]だと云つちやアねえ、ちよつと呼び出して逢はうか、何だか[illegible]さんの身を聞いたら、いつと
もうのぼせて來た、お母さが二階から下りねえ內、ちよつくり此方で話をしようよ」ト一人ごと云ひながら[illegible]
[illegible]出すつて下流し出し、[illegible]下げて[illegible]「お網さん、まだ化粧をしてゐるのかえ、早いこつたなあ、早く來なさいよ」
ト[illegible]「[illegible]お母さは誠にしはしないのう、今行くと云ふのにじれつてえよう」
ト[illegible]何が其樣にじれつてえね」「まあ、お前の[illegible]氣持がな、[illegible]
て人死に行きなつ」[illegible]がしこまりましたト[illegible]皆の引合ひまで寄へ
近づきになり、[illegible]母さん、
そんなら明後日から初めて寄くんなせえまし」[illegible]さうしやす[illegible]仕事も今日限
つて手が引きやすから、明日一日骨休めをさせて、明後日から掛りやせう」[illegible]
云ふのだ、[illegible]
ト爲は[illegible]
前か[illegible]

うこ「お氣障と云へば誰のおッ母アがおつな聲で唸り出したり。」おい玉「ほんにネエ、お初さんのおッ母アは酒に醉ふとおつきどこ、逸をお唄ひだが、誠にどうも氣になるネエ德さん。」玉「ナニお初さん處に客でもあるのかネ。」おい玉「さうサ先刻何だか見なれない人が來た樣だつけ、ほんに德さんお前樣うかいお初さんを於てお出でださうだが、うまい事をおしだネエ。」玉「ナニあんまりうまくもねえが、本當に逢ひに來てゐるかネ。」おい玉「これ德兵衞さんおめへさんも强氣にお初さんにのぼせて耳が遠くなんなすつたネ、アリヤあの笑へ聲が客の聲だに、何でもおッ母アが如在ねえから、いい旦那を引込んだと見えるネ。」德「さうかい姉さん。」（手分子方居候出逢人る人まで内の女房を指し に姉さん姉御と呼ぶは皆かゝる輩の習はしなり）おい玉「さればそれも知れねえのさ、然しお初さんがあゝ云ふ氣性だから、たとへ不自由で難え身にならうと、人の世話になるのは嫌ひの様子だよ。」德「それ其樣に姉さんはさう云ひなはるが、そこが慾と德だアな、慾とも欲合慾と德だから、どうかおッ母アと云し合へをして、旨く言じ付けたかも知れやアしねえ、ネエ德樣さうおやアねエかへ。」おいまこれおやアお初さんに水を向ける樣だつけナハヽヽヽ。」玉「ナニいいのサ、どうであんな浮氣な奴だもの、根性骨のきたねへのは初手つから見拔いてゐらア、懐中の暖けえ野郎の傍に付くのサ、おいらが持前だアな、道理こそ此の頃おうやア。」おい玉「ヤ德さん强氣に急腹だネエ、まことあの子だつてそんな事もありもしめえに、女だのなんのと口汚くお云ひでない、聞えると氣の毒だ

かしこ「何のかまふもんかな、女だから内だ、野郎だか、野郎と云ふのだ、聞いてこた、聞いてこれ
ばりだせ」ト傍にある茶碗を振つて「サ、おねさん達のおいてきこえる。」トいふうちぞや嬉しさうある、そんな
大きな物でぇ」「サア、いいもの、ねえか、茶碗であはつてやつてみる申さん、茶だつて酔ぞと内は酔ま
のある物だア、くさいめえもんか」「ネ、おけへねえ、女房やけやもる者も、つい酔つて
んぜうしたのだ、さんざにこほれへつてに飲まれはなと」「そこにそれだつて女房のおまへ好きな若い衆
かおしたらと思つてサア」「なんのいゝかげんな気休めを、此の頃ぢやア其の若衆はおめえまで
までおがれの若衆をつりたのがてえ」「あちいゝは辛い種出だ、外に表旦人を作るのはまつかうの化粧
の違へ通つておきに若衆をとつちけ、こんな事をいうやうのあける様で人聞きが悪いぢやアねえか、話の
つたよと出来てやら、花屋がにすゝきはりと手を切れてサ、手前様にならとか何とか、頭に薄る時しながら
て、死ぬ死なうと云ふ中になつたのを、嫌つてる通り嫌ひと云ひやがつたから、若衆に惚つて
あると思つたに、家の宿ほと相談つくで、何処かの野郎を引込んだと言へばねえ、新らしい噂のあ
ならねえだから、此の間つから人を頼んでねえよ」「もお仲さんの處へ来てくれろと、使をよこしつて
遣したに届かねえ事であるめえに、うんだとも何とも云つて寄越しやがらねえ」「といふことさういう
こんな事だと思つてゐた、確いたら聴いたと叫ぬやうなればいいに、俺も男だア、一切れてやる

わ、いめえましいお多福女めヱ」 ○徳「これさ徳さん、お前にも似合はねえ、此處でそんな事を云つたつても始まらねえ宗體ぢやァねえかネ、第一近所鄰へ聞えても外聞も悪からうぢやァねえか、男らしくもねえ」ト しかられる背負の兵衛は酒が廻り しも持前の癖がこうじ夢中ツ面に 徳「市さんお前の處で何もぶう／＼を云ふ理窟もねえがの、あんまり胸つくそが悪いから、ツイ大きな聲をしたのはわつちが悪かつたから堪忍しなせえ、いいえ断うなりやァ倦れかぶれだ、鄰へ行つてお袋に逢つて、是だらうが非だらうが、あのお多福をもらはになくつちやァ、腹の蟲がをさまらねえ、何だあのすべた女め、人の氣も知らねえで、聞いて呆れがしにどゝ逢たんそを弾きちらかして面白くねえ」 ○徳「マァいいわね、料簡おしな、満更お初さんがお前の顔を踏みつけにしたと云ふぢやァなし、其處にやァ何かな譯もあるだらうし」 ○市「なあんの踏み付にしねえ事があるものか、譯があるならある様に断う／＼だと云つたがいいわさ、来てゐる野郎にどんな奴だか知らねえが、あの女ア貰ひに行つたら、何とか彼とか吐すだらうが、痩せても枯れても大工の徳さんだア、俺が面で俺がこせへた色を、どこの馬の骨か知らねえ奴にむざ／＼くれてつまるもんか」 ○徳「これさマア徳さん、其様に大きな聲をせずとも静かに云つても判るわネエ」 ○市「此る折相惚の二人が互に顔の様にて行司に ○徳「儘にならぬを得心づくで諦れりや逢はれぬ事もあるこ」 ○市「儘にならぬを得心づくだ、へゝ、誰が諦れらア、こちが働きがあるならとどんな都合しても逢はれねえと云ふ事があるもの

ガイに 一ト口で云ふ樣に萬事がゆけば誰が苦勞をするものか」ト、惚れた娼妓(しようこ)に苦勞させんナ」ト、松は浮氣で聞く心算」又「ニ苦勞をするも大きにおせい、惡く洒落やがる、ほんによ、うぬが心は、手鍋提げたり味噌こし持つて豆腐買ふより主の爽、と云ふのたわ、人の樣に付いて[illegible]にくるまつて懐中手(ふところで)で暮さうなんぞと云ふ、そんな泥水(どろみづ)へ臭え根性な奴ア、面を見るも嫌になつたア、うぬが方で切れようと云はねえでも、此方(こつち)から切れてやらア」ト「そりやアわつちもない事、付目をつけて切れるお前は一寸かいな。」ト「何だ俺が嫌なもうぬア縁うなりだア、こりやいい〳〵、あまめ、洒落(しやれ)た事をぬかしやアがなア」ト又一ツ茶碗に手酌について一息もつかずぐつとのむ。「腹がたつならどうなとさんせ、己(おれ)にかまはぬ此のからだ」ト [illegible]ア、どうなとさんせとは何だ、今に天井見せてやらア、その時後悔(こうくわい)しやアがるな」ト[illegible]人、何故そんなに愚痴をお云ひだ、唄の文句を上つこに取つて、腹をたてゝも袖きるなわな、殊に當人來てゐるぢやか、何だかえしれも知れねえのに、輕蔑をおこすのは野暮らしいねえ」ト「これたつてお前あんまりだアな、こんな野暮(やぼ)にや誰がしたらう、皆(みんな)お前の甘(あま)つたれた、いめえましい[illegible]だアな」ト「イヽエまれ付いたる蟲(むし)やお多福さ笑ふお前の氣が知れねえ」ト又アレあの通りだらう聞いてくんねえ、人を何でも[illegible]にしやアがるかえ、[illegible]の蟲が得心しねえや」ト一人事にせかれて頭さへ見すに譯を聞く[illegible]「何だ、又そんな氣休めをぬかしやアがる、彼(あいつ)がしいらも[illegible]しいわ

正「今となつて其の手を食ふものか、これどうしても打捨つちやア置けねえ、料簡を聞いた上で仕様があるぞ。ト立上つて奥へ行かうとする。与吉「徳さんお前さんどこへ行きなさる気だえ。正「どこへ行くものか、奥へ行つて、お多福の了簡を聞いて来る気よ。与吉「それぢやアお前さんどうしても、奥さま、わつちが云ふまでもねえけれど、親分も随分無えなさるに、姉さんもそれぞれ云ふだらうが、今切つて行かうたア御料簡違へだらう。正「何な筈もあるへた、善か悪かぶつつかつた上、いやでもうなさるに表向でお初を貰つてかゝアにするのだ。与吉「ナアニサ徳さんどうしたものだえ、何時も師匠のお前でもねえに、今日に限つて我を通すは、江戸ッ児にも似合はねえ、もつたア通り者にもなれねえ。ト出かゝる所へ待合の女、門口より差覗き、お蔦「おいそさん今日は、誠に老りますねえ、もし徳さん実にお用ですか、さうとは知らず私アまた彼方此方を尋ねたよ、もしお前におつ母さんが何だかお前に用があるといつて、先刻から探しておいでだから、私と一緒に来ておいでよ。正「ナニおつ母が呼びに来たと、ムヽ、何の用かねえ。お蔦「それ所ぢやねえ今此方に、アレこれおいやでねえ徳さん、おつ母アが待つてゐなさるは大方仕事の理窟だらう、そんな愚痴を云はねえで、早く内へ行きなさるがいい。正「そんなら何だつて手前ア女を打捨つて置けるものかえ。与吉「徳さん何だえ其様だのなんのと、喧嘩でもしたのかえ。正「そのナニサお神さん、お初さんの理窟だがね、ちつと癪に障る事があつたから、駄々を云つて大騒ぎさ、そ

おと謂て例の事だに、人の云ふ事を云聞かせといわ[illegible]、[illegible]なけれや何にも[illegible]ない

大概[illegible]の[illegible]に[illegible]、こんな事[illegible]いい[illegible]、[illegible]の事[illegible]

んなるんなら私に[illegible]て、[illegible]しねえから」[illegible]に[illegible]んを[illegible]行れと、[illegible]

つもり事だ[illegible]、[illegible]な[illegible]、[illegible]

[illegible]ないて[illegible]、[illegible]しに[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]んだよ、[illegible]

途は[illegible]にるると[illegible]に、[illegible]が[illegible]と、[illegible]

入た、[illegible]と思ふから色になつたや[illegible]なもの、[illegible]

下もたくはねえ、[illegible]の事[illegible]」[illegible]

じるをにないわえ、[illegible]にしやくしないから、[illegible]

め[illegible]、[illegible]そんなら[illegible]んだよ、[illegible]

らおと[illegible]、市さんちつとお出でなさい。」ト二人は表へ出に行く。市五郎は酔ひ倒れ[illegible]

いそうん、[illegible]、[illegible]は[illegible]

痛[illegible]、[illegible]、[illegible]それでね、[illegible]たかつてよつと

逢はうと思つてネ、流しの所まで出るとおッ母アに呼ばれたから、もう／＼焦れッたくつて／＼どうせうかと思つたよ、徳さんが大層お怒りだから、私の胸はかう／＼だと、話したいにも仕様はなし、出鱈目によしこので、云ひたい事を唄つたが、お初さんと一緒におかへりだネエ」よね「さうさ、それによつぽど酒が過ぎたから亭主と二人で口を酸くして止めたけれど、何でもお前の處へ行つて、おッ母アに逢つてお前を貰はうと駄々をふつて困り切つたよ、ソシテ内へお出での客は、始終世話でもしなさいと云ふ癇癪かえ」[illegible]「[illegible]ア、それもネ、私ア嫌だから、にやふやに挨拶うして得心もしないのに、お初さんとおッ母アが連れて來たわネ、それだけども來てゐる人は餘ッ程の年で結構人らしいからどうかお云ひだけもするけれど、徳さんの氣ぢやア何でも私が心でも變つた樣に、疑惑をお起しだから誠に苦勞でならないよ」よね「さうさ、それだから私も色々さう云つたのさ、何もお初さんの氣で好んでする事ぢやアあるまいし、其處にや何か譯もあるだらうからと、しつくどく云つたけれど一向いつこくなをお云ひでお通じなしさ」お初「それにアノ久しく逢はないから今日も湯のかへりにネ、わよつくらお神さんの處へ寄つたら、此の間つから二度許り、人をたのんで呼びにやつたに、私が顔を出さないと云つて、徳さんが腹をお立つたとお云ひだが、間を悪くおッ母アのゐる時でも人が來たと見えて、私ア一向知らないのさ、それにおッ母アが此の頃ぢやア誠にやかましく云つて、湯へ行くより外に

人、おや外へ出さないから、どうも逢はうと云ふ首尾がなくて、氣ばかりもめるわネエ。」トひそ〳〵話す
「お初やア早く來なナ、長え手水だのう。」ト呼ばれてびつくり お初「エ、又呼ぶのかのう、じれつてえ。」
ト なにを云ふもはのうち、鼻唄にまたいと耳元で、「もうやア煙管ウ引。」 お初「エ、びつくらした。」

教外俗文 娘消息初編中之卷 終

教外俗文 娘消息初編下之巻

江戸　三文舎自楽戯作

第三回

頭の雪の佃女呑と、白髪染の文を書は、門に掛たる取次の、招牌に偽りなく效能を現はし、掛行燈に待合と書きしは、百放者が主意の一法、千客萬来大々叶と、懸賣つて書くも茶店の習はし、豪態を覗ふお福の顔は、性かくしの大小に付けて、はこくものの愛嬌よく、客を招くは袖引煙草、喉が渇けば細縁なく、波を出す煎茶の出端色は、甘くも薄く、陽氣を催す、世話かたき人を思ふ茶文、輕薄共しの定門にて、渡世をするな商は、働き者と言はつへし。見世の商頭を勤むなり樟はふり廻って[illegible]。ヨシヤ、[illegible]んがネ、此の間つから彼の車富で、いつも気[illegible]でお出でだが、どうかお利さんを呼び出して、[illegible]を聞く事は出来まいかネエ、あの子のおッ母、もとおッさん（お利の父をさして云ふ）が死なってから、なり手ッで暮すのは骨が折れるから、旦那を作へ、こちらも無理もないが、あの子が徳さんに喰付いてゐるからヤァ、

[illegible]

つやうに、雨だあと云ふ事でなくつおやすいかねえテ。「まあさうさねエ、何にしても徳さんがお出

[illegible]

顔つきが悪いねえ。」重「大方この二三日のひどい暑いのでちッと暑さにお負けだらう、定斎でも上げればいいに」鶴「ナァニ暑さにも負けもしねえが、此の間の一件のむしやくしやで胸ッ糞が悪くつてこてられねえから、いつそあのすべた女へ面當に、未練らしいが姿海老の花房の處へ行つて、元木に勝る末木なしだとやらかして、燃えッ杭に寢返を打たうと思つて馴染の茶屋へ行つた處がの、聞いてくんねえ大しくじりよ、花房ァの此の春櫻の時分に、何處かの客に請出されて、樂な身になつたと云ふから、こいつァ詰らねえの上なしだ、折角馴染んだ女郎をば、あの女のお初故に身を切れて、今更あの女の心が腐つたから面當に古い色にくつ付いて、色揚をしようと思つた處が、こいつも請出されの跡の祭で、あべこべを食つたいゝえましさ、業腹でノヽたまらねえから、やけのやん八で遊ぶ氣で、どんな奴でもいいから見立てて呉れと云つたら、イヤハヤ怖ろしい賣婦を出されたから、俺ァ誠にがつかりしたっ」お仲「なぜえ、どんな不美女な女郎だつたエ」鶴「ナァニ面は浦里十把一からげと云ふのおやァねえかの。」重「フウそれおや何かネ、牀まけの古狸かネ」鶴「違へねえそれだノヽイヤモウ嫌ら深いの何のとあんな女郎は初めて買つたが、あんなのにもおそれるぜ。」重「ハヽヽヽそいつァ面白かつたらう。」鶴「なんの面白え處かうんざりしたっ ほんに常談はのけて、俺ァ女縁が薄いか知らんて」お仲「まァ女縁が薄いもよく出來たよ、餘り男が美過ぎるからネ、とかく女に長持ちがしないものサ、

どうしても惚れる女が多いから、古い色は見飽めかし、新しい色に乗り取つてかゝるから、女の思ひが付いて仕つて気々もむ様な事が出来るのさ。夫に、背く云ふぜ、そんな事アどうでもいいが、お初坊の理窟は判らねえかの。▲それさ、その事を今も亭主と云ふ事で、お初さんのおッ母さんが甚くやかましくいつて、なかく一人ぢやア外出もさせない位だから、どうも法の言ひやうがないと色々に考へてゐる処さ。■さうか、何もあの女ならねアなし、いゝ気の毒もねえが、今までで人にも色だとか何とか云はれたものを、親の前ではとにかく、世間に身を任せて、とゝ違でも弾いて騒ぎやがるのを見たり聞いたりして、側のつゐに打捨つておけるものかえ。仲間の手前も口が悪いから、鈍いとか腑甲斐がねえとか何とか彼とか云はれるやうで、取極め一節が付けられねえ事と節によりやアあの女を生かしちやア置けねえ理窟だ。それもやアねえが、心が変つたと言つてやうに、嫌なら嫌と理道を明けて、是れが厭うだと言ひ立てりやア、俺も男だ。潔くさらりと身を引いて手を引く事ア云はねえス、すつぱり見事に切れてやるが、おらア一もし堪忍も仕てやらねえ。強情だア。それだから彼女が内へ踏み込んで、お袋とあの女と三人膝でわかれるともさう迄も勝手次第ようと云ふのに、お前方が色々止めるもんだから、今と量へしまするると余り馬鹿なあらしいぢやアあるめえか。今ここを此儘に食ひついて居ても大工てゐるの、親父も人にも立てられて大工仲間

で天狗と云はれた棟梁株の目利きだッたが、親父の氣性ぁ十分ー働きのねえ俺だけれど、水道の水を産湯に浴びたと云ッちやァ長兵衛の文句で厨む様だが、お膝元で産まれた江戸ッ兒だから、何もむつかしい節を云つて手切れの金を取らうなんぞと、けちな根性は出しやァしねえわな、趣意をつけて譯が立つのやァ石頭でも云ひ草ァ云はねえのだ　　其そりやァお前のおたひの通り、譯が立ちやァ面も打つから云ひ分もないけれど、何事の縺れと云ふ物は悪くこぢらかると、斬るとか突くとか、刃物で騒動の出來勝手なものさ、それだから斯うお前がお絹さんの内へ自身に行つて膝詰で談じ付けても、お内の母のお一人は評判の一徹だから、意地づくかしてぶちまけるのは、目に見えてゐる事だもの、さうして見るとのつ引きならずッて怪我人も出來るはね、そこを深く案じるから、出來ない辛抱の蟲を殺してもらうちッとこらへてゐておくれ、悪いやうにァしないからねェ　エモシ、さうおやァないかネエ　まあさうよ堪忍袋の緒を斷つて云ふなと、お前は心からだから是非もないが、おつ母さんの苦勞は何樣だらう、ねえとつさんに早く別れなすつたから、お前を育てあげる苦勞と云ふものは、なみやーしい事だやァなかつたね、その丹誠でお前は人になんなすつたが、異なもんで壯年でも仲間中で徳兵衛さん徳兵衛さんと受けのいいのも、亡くなんなすつたお父さんの光と云つちやァ不調法だが、お前の器量で人が使ふと思つちやァ濟まねえよ、實に親のお蔭だと、有り難く思はなくつちやァならない

めす、このやうに私が云はねえでも百も承知してゐなさいますが、おとつさんが遺言のうちに意見を遺く
して、人の爲に骨を折つて置きなすつたから、お網さんの番頭市さんを頼み、島寧をさせてお商ひ事を
一通(ひととほ)りの息子(むすこ)とは思はないのう、それだから今度の一件だんても、島寧面倒見てつ樣にして、人に笑
はれねえ樣にして上げてくと、色々に工夫をしてゐるが、おかゝさんに苦勞をさせたくねえからさ。
さうは云ふものゝ此の壯年(としわか)の中は、一つ氣違(けちげ)へつと打折(ぶつた)ると、元の短氣(たんき)を出したくなるが、あれが不了簡(ふれうけん)の
上なしだ。皆へにも短氣(たんき)は損氣(そんき)と云ふから、矢張(やつぱり)始終(しじう)さうまれ、堪忍(かんにん)するのが當世(たうせい)さ。と云ふ評判
小便利を聞けて何ひなさい、有今日は宜のとう、おかみさん達利の事をたつたといふさうだ、小言が、意見
聞いたのもあるんだ、小言と云ふ事を聞いて來ましたな。其の事をいひなさい、今日(こんのじ)、まつの
さうよ、忘れずに持つて來なよ。お前さんも、忘れたら明日でもさういふ事さ。さうさ、馬鹿な
事を、明日でいいなれるのに頼むものか、馬鹿なや、おまへ、そこの事は、さうするなら氣を
ゐるふのだ。」と云つて氣を揉つたのもさねえ、其の言を聞いて頭をさげつたのだ。」と云ふ
かしいでございますよ。ええ、何だ、道理で食いと思つた、お前はもうさう、人の言で意見を
するものがあるものか、ええ、と云つて出るの離れるのなさるな。と云つて、惡く言ふ
ゐよ口巧者(がうしや)な御用だのう。ほんに御用と云へば思ひ出した、子を頼んでさうきいたと初めて合點へ文を

やつて御覧な」徳「なんの無駄だァ、紙費、筆費文をやつたつてどうなるもんか。」お伸「何さ私の云ふ事を聞いて、文をやつて返事をお聞きよ、外の人を頼んぢやァ覺束ないが、この子なら氣遣ひもあるまい、毎日お初さんの裏へ行くからネ。」徳「それだつてお前、文をやるのは何だかこけ／＼してゐるぢやァねえかのう重さん。」重藏「なんの癡漢な事がありやせう、是れが互に切れた後で、未練でやると云ふ譯ぢやァなし、與にからんだ義理詰めで、遠ざかつた樣なものだから、恥にも外聞にもならねえのさ。」徳「成程、さう云つてみれやそんなものかイ、そんなら、マア無駄だと思つてさら／＼と一筆書いてやらうか。」お伸「アヽそれがいいのさ、何もむづかしい事ぢやァなし、ドレ一寸書いておやりな」ト口紅の卷紙と硯箱を出しながら「オヤ／＼あの御用は今まで爰にゐたと思つたら、何時の間にかどつかへ行つた、あの子がゐなくつちやァ始まらねえ。」ト駒下駄を穿き門口へ出てお伸「オヤ何處へ行つたと思つたら、又飴細工の買食か、よく鼻の下を働く子だのう、コウ／＼御用どん／＼お前に大事な用を云付けるから、飴を食つてしまつたら頼まれてくんなよ。」ト云ひ捨て内へ這入りお伸「徳さん、どう云ふ鹽梅にお書きだ、何でも判りのいい樣に書いておやりよ。」徳「さうよ、たゞ、ぢや捗らねえから、口で云ふ通りにやらかした、そしてお前彼娘の處へやる文だもの、山々御恨めしく存じ候だの、御心もじの程も判りかね、なんぞと御丁寧に書いてやつちやァうまくねえから、斯う云ふ口振に書いたァな、マア聞いてくんねえ。始め

は讀まねえでも知れた事と、ヲヽ、爰から左、ドレ、此の間から度々人を頼み待合たで来ても、ナニ、あるとも

うなつてやつたのに顔出しもしねへ、うんだとも、濡れたとも行衛に文を付ける様に返事のへ一寸もし

ねえのは、いやに成つたか隠れたか、仲とは人にしやくにはれたが、ねつから[illegible]わけ……料らず、希

有なことだと思ひの外、花魁なら一つ穴の中、寝るなら一つ夜着の中と、[illegible]

様中のあつたはえ人の[illegible]に付いて床に寝もして[illegible]のやうとは、[illegible]だ[illegible]、又[illegible]に、

[illegible]の[illegible]すたで仕方がねえ、一番[illegible]に取つたナニ、今更[illegible]と[illegible]に、

とてもその儘ではアア置かれねえから[illegible]を[illegible]て[illegible]、[illegible]あるも、ねえ[illegible]

[illegible]を待ち人の[illegible]して。とやかく[illegible]、と[illegible]、あたまの[illegible]二[illegible]

をさしい[illegible]らん。[illegible]

らはマア[illegible]れでとして、[illegible]と[illegible]して[illegible]すたいが、[illegible]

引剣い[illegible]やら[illegible]

[illegible]くるのかえ[illegible]に[illegible]たら、[illegible]

[illegible]の[illegible]なすつた[illegible]、[illegible]

[illegible]、やアまた[illegible]のい[illegible]はで[illegible]の色だけ、[illegible]かしいこ[illegible]、[illegible]

い、ニ「馬鹿め何を笑やアがる、色をするのがをかしいものか手前の樣な番頭さんを好きだからよ」かまやア、あらこ二度の番頭さんも時々部屋に行くのよ、それだから見世を引いて勘定仕舞ふと、番頭さんが湯屋に行くから、その後で皆寄つて、天麩羅だの蕎麦だの鮓だの澤山買つて食ふからさんなに旨かろう。○ニ「義理を云ふ事許り考へてゐる調市だぞ、手前こんなに喰ふ事許り云つてゐる奴買へないつていふ義理がねえぜ」○おかなんの[illegible]にいけるもんか、面白くもねえ、ここいらで一遍へ行て まアやア逸へて仕合よ 手前が行つて先で買ふものか」○初の[illegible]ねえと云ふ事はないか、全て[illegible]出しやア買はれるか、買つてくつてくれねえ」○そんなくれよ」○それだつてまだ朝の宵だから金にたたねえ」○ますます、この手をもう油斷がならねえと、[illegible]冗談を云はずにお初さんの處へ行つて來なヨ」○ヤイ調市、駄賃をやるからちやと行つて來てくれ、本當に」○そうか駄賃を呉れるなら何處までも行つて來よう。○それならナ、此の文を持つて行つてナ、俺のとお初さんにやるだ、よしか、そして直に返事を書いてお呉んなせえと云つて、返事を貰つて來てくれるよ。サア是れで菓子でも買つて食ひな。○ト一文を[illegible]、○[illegible]いつて有り難う。これおやッ澤山買食が出來るナ、駄賃せへ貰やア外の用に足すといいこの[illegible]明日もよかろうかネ」○ハエ、べらぼう棒め文をたいな馬鹿な云ふよ。本當に内證だから、そウつとお初さんに渡

[illegible]

を持つて來てもらやアよかつた、何もないが徳さんに一口なげようねえ。」重「さうよ、手前ちよいと

[illegible]

承知だが、コウお仲さん、煮肴はいゝにしねえ、俺が南一はすむから鰻を取つて食はうぢやアねへか。

「なに何だね、お止しな無駄な事だよ。」「なアに無駄なもんか、俺ア土用鰻を食ひそくなつたから丁度今日は誂へ向きだ。」「そんならかネそれぢやア私もお相伴をするよ、そんならちつとのうち気を付けておくれ。」ト云ひながら仕度をして、是れより程なく鰻も来り、両人は指向ひにて興で鰻を食ひながら、お互の評な評判で、徳さんも一昨日お前さんが来なさつて一緒に食べたら帰らうと云ふ、又さん一構さ、な気障を云ふよ。それぢやアいゝが、そこまでの御用の返事を持つて来さうなもんだ、又どこぞで逢んでもやアがるかネ。」「マア何だねまアさうさねへ、あの子にも困るよネヘ、徳さんこんな事を云つたら、又悪体のだと云ひだらうが、アノいつだつけかお初さんが断りを云ひだつけよ、ヱ、あれはコウ、さ、いつかの不動様の晩だつけ、ツイ四ツ半時分に二人でお帰りだつけネ、あの時ネお前はまだ来ない中さ、色々な話をした後でさ、お初さんのお云ひには、アノ私なんぞはどんな楽な身にならうとも、嫌な人の世話になる事は我慢にも嫌だが、兎角お母さんが彼しろの断うしろのと色々な事を云ふけれど、強情を張つて逃げてばつかりゐるも徳さんと夫婦になりたいからの事、それにまアお彩さんなんぞは見た許りでも虫唾の走るやうないやな人に身を任せてお出でだが、もう／＼私なんぞは身ぶるひの出る程嫌な事だと顔を顰めてお話しだつけ、あの口ぶりではさうして／＼自分から好んでお前に切

れて樂をしようたんぞと云ふ事は、決してあるまいと思ふのさ（言をお前わけへの言をひつかけて）ヲヤ〳〵

置かア、に爺云ふお茶つぴいと云ふ者は、口から出放題を云ふもんだ。餘計なお世話、七人の子を持つて

も女にや肌を許すなと云ふおやアねえか、況して主ある身だもの、色になつたとは云ふまいし、[illegible]

た邪推と云ふおやアなしか、あんな薄情な奴の口で云つた事が何になるもんかね、笑ひかけて食つ

たら衷情に曾、ねつた（[illegible]）[illegible]ト少し下向、ト少女をよ

こすにや及ばねえと云つたよ（[illegible]）[illegible]とつてゐる[illegible]、嘘さう

だ、[illegible]、いやひだ、のうお内儀さん、[illegible]だぜ[illegible]、嘘に

下卑藏だらう、それなに食ひたけりや、お相伴させるから早く[illegible]、大きに御苦勞だつた、[illegible]

許りするよ、むしやう〳〵と食ひな（[illegible]）[illegible]

定まりだ、ヲ、御女下さり升し上げやうか、[illegible]、[illegible]御違ひなく、[illegible]

す打過ぎし、是、數々の御恨み、何とも[illegible]に存じ上げ升[illegible]、[illegible]

つて[illegible]に書いてよこしたのを、[illegible]、[illegible]

それでいつものやうに[illegible]、[illegible]

も、色々と行末の事を、思ひ廻し候へば、親のあるさへ[illegible]、[illegible]

言ってしまったな御事と、今にては馬鹿らしく思ひますか」「ハヽヽ[illegible]な事が書いてあるには[illegible]
[illegible]ねえ知らなかつた今にては馬鹿らしく思ひたか[illegible]本當にお前はたれえ、[illegible]その先
[illegible]て御覧な」「エヽ、斯様に申上げ候ては定めし御腹立ちまさん[illegible]と存じ候へども、御前様
[illegible]ていで[illegible]待ては、[illegible]身に成り候はんかと思ひ續け候へ共、[illegible]にいやになり
[illegible]」「フウト。」讀み下すうち顔色變りは　タヽたび〳〵呼びに御遣はし被成候へども、[illegible]
顔出しも致し不申候。此方心は[illegible]と定め候よ[illegible]是れまでの御縁と御諦め被成、此の後[illegible]途中に
[illegible]顔を見るとも御言葉も御かけ被下まじく候様[illegible]「[illegible]フウ[illegible]心が變
[illegible]呼びにやつた[illegible]持つて來[illegible]
[illegible]こんな[illegible]浮氣[illegible]、どの[illegible]
[illegible]御大切な[illegible]
[illegible]から[illegible]てゐら[illegible]、途中にて[illegible]も御言葉も[illegible]
御かけ下さるまじく[illegible]代りに[illegible]、途で逢つても[illegible]
ツ[illegible]」[illegible]びり〳〵と引き裂く故[illegible]「コレ[illegible]お前も[illegible]
[illegible]合點[illegible]に[illegible]

に、假令あの子のおッ母ァが無理往生に書かせても、なか〳〵こんな愛想盡しは自分の手ぢやァ書けさうもないのに、僞筆かと思へばあの子の手なり、どうも實に不思議だねヱと、一旦は何の不思議も絲瓜もあるものか、斯う云ふ事だらうと思つたから、何でも斷の返事を引剝うと云ふのを、お前がそれこれと止めるから仕方なしに今日まで堪へてゐたが、實際だァ自慢しいの權高だァな、サッサ其樣に操をお立ちでない、後に何と書いてあるか知れないのに、自分の操を護るに及ぶもんか、今になりャ彼女が根性は知れてるよ、四分の胴引が叫したのに、しらを遁すにやァ及ばねえと云つたァ、此の返事が何だからだ、まだ年もいかねえ嬢に大金をしやにかけやァかつて其はうと云ふ料簡だらう、うぬらに笑はれてつまるもんか、一生涯無にはならぬ、身請したつて始まらねえから手前で鼻ッぷつかいて、其で目ざさくまで出して仕舞にしなくッちやァ腹が癒まねえと、たつみあがりにつッ立つた是へお伸はあわてゝとりつき「マア〳〵徳さん、待つておくれ、そりやァお前さん、あんまり短氣だ、此事の文の愛想づかしで、堪忍ならないのはもだがさうして、あの子の一存で、夢にもこんな事が書かれるものかネ、よしんば心が變つたにしろ、あの子の體へ疵をつけると、お前が亭主で云ふ通り、お前におッ母さんがどんなにいやァ苦勞をおしだか知れやしない、詛か大事でないのかえ、おッ母さんはいらないのかマア氣を落ち付けて思案をおしよ、お前の意見も其の大事も皆なも承知合點して

も、心で心が取直されねえ。その断うなつちやア破れかぶれだ。止めてくれるは嬉しいが、おらア却つて恨みに思ふぜ。跡で厄介はかけねえから打捨らかしておいてくんねえ」ト ふり切つて行かうとする故、お仲は此處ぞ大事と力一ぱい引つき、 仲「エ、もうお前も情ない、おつ母さんに難儀をかけるのを承知でするとに胴慾な、なんぼ他人の私でも是れが見捨てて置かれるものか、お前の命を私が預り私の命をお前に預けて、此の意氣張りを立てようから暫との間辛抱して。」 貞「嬉だアノ〳〵芝居の色事ぢやアあるめえし、預け引きがなるもんか、マア離しねえお仲さん、怪我アすると悪いから。」 仲「嫌い、エどうして離されよう、怪我を縛つて止められるものか、是れ程私が頼むのに、どうしてもお前に聞かない氣かえ、聞かざアとうも仕方がない、中へ這入つた私ら夫婦がおッ母さんへの言譯にやア坊主になつて謝るから、お前にどうとも勝手におしよ。」ト 仲兵衛を其處へ突きたふし、手早く鏡臺よりかみそりを取り出し結ひ髪の根元よりぶつつり切らうとする處に仲兵衛はあれこれ其の手を押へ 貞「お仲さん誤つた、お前に髪を切らしちやア、おらア生きちやアゐられねえ、意見につくから待つてくんねえ、畜生女を存分にすりやアお前達の面が潰れるから、モウ〳〵どうも仕方がねえ、罪も報いも無え者を笑はせるより俺一人、馬鹿だと人が云ふなら云へ、笑はれようがどうせうが、人の噂に七十五日だコウお仲さん、彼奴が事はすつぱりと、おもひ切つて未練は出さねえ、どうぞ堪忍してくんねえ。」ト 初めに變りし分別に、お仲は剃刀下におき、ホッと一息胸を撫で、 仲「嬉しやマア〳〵うれしいこつたぞ、お前がさうおとなしく、意見に付

いて短氣を起しておくれなら私が斯う言つた樣だ、その代りにやアお初さんを命に代へても趣意を立
けて、過ぐお早くお貰ひなされまし」「あなんの別れのやうなお話も嫌だ、本當に心を疲らしくんなへ
そんな事に氣を遣ひなさるねえで、安心してくんなせえまし」「それだにそれでこそ眞の江戸ッ子、なんにも
云はずに爭んでゐるよ、内の人にも聞かせたい、娘さん、喜ぶだらうよ」「男の神さん念晴らしに祝
盃しだと思つて一杯呑まうか」「それがよからう、お初にも盃を祝作さつけて」「オヽ
醉に起き合ひな盃だ、、、、、、」「祝ひに是を祝ひませうぞ」
コツコウ引。」

教外俗文 娘消息初編下之卷 終

自序

富には多賦を施するといへども、下に[illegible]一[illegible]、[illegible]込[illegible]に[illegible]
[illegible]の[illegible]戯作者に、旨とはすれど胸の中に、和漢の書籍の上にし[illegible]、[illegible]中[illegible]の[illegible]かの[illegible]
て、[illegible]の[illegible]に[illegible]ければ、[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]、[illegible]分しの[illegible]て、[illegible]に[illegible]論に[illegible]、一部[illegible]
[illegible]て、やう[illegible]と[illegible]につけ[illegible]、[illegible]書[illegible]の[illegible]
[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]

[illegible] 三文舎自笑 識

教外俗文 娘消息三編上之卷

江戸　三文舍自樂戲作

第四回

[illegible]下に[illegible]笠の片日陰、あゆみて先へ行く人の、後姿を追ひかけて、「モシ其處へ[illegible]小倉屋の旦那ぢやア御座いませんか。」と聲かけられて、[illegible]徳兵衛か。この[illegible]へイ有り難う御座います。[illegible]

ちの一向指しないショウ。サア〳〵かばに一緒にツト徳兵衛ひき連れ、先に立つ。旦「旦那お傘を私が持ちませう。旦「ナニおさ其處だから、持たずともいい。時に徳兵衛、何ぞおつりやせ、話でもねえか。」徳「イエもうからつきりつまりません、ほんに旦那、段々あなたに拝借致しましたが、ふいにつたりで、お返し申しも致しませんに、又今度にもおふくろが参つて、御無理な事を御頼み申しましたに毎度ありがたう御座います。どうも誠に何とも彼とも、ネ手もおづ〳〵して後へさがる。旦「ナニ都合が悪ふやす、どうも仕方がねえやつ。若い中は兎角つきあひ其の外に物入りがおほいから、何の借金が出来るのだ。俺は内外の事を知つてゐるから、些とも心遣ひなしにするがいい。出来ず遣へにやア及ばれねえ。ナニ二十の金なら、いつでも間に合はしてやるから、外の出入場を不義理にして、しくじらねえ様にするがいい。コレ、なぜ其様に後へさがつて歩く、一緒に歩かつしナ、話が途切れてどうもふくれねえ。徳「實に旦那、私もネ、親父が死去つてからといふものは、カラきつい馬鹿を盡して、おふくろには苦勞をかけるし、あなたの御意見も度々ながら、心では氣がついてゐても、ツイ交際や無理酒を呑み過ぎては、向う見ずに當もなくつて遊びに行つては、三日も四日も居つづけに借金を背負つては出入場の、番頭さんや若旦那に、内證で借りたも四五十兩、壁にする氣は御座いませんが、不義理だらけで得意場も、大しくじりで今おもやア後悔い、つまらない事をいたしました。旦「

三「そうだらう」と思つてゐた、未だ／＼目が醒めて、後悔するにやア、餘程間があるだらう」と[illegible]イ、
ェ實は、この話は、馬鹿を盡したのを悔みましたて、[illegible]を[illegible]でございます、[illegible]
ア嘘にしても、いゝ心がけだ、其の背賦が遂げればいいが、まアこの街道へ曲りくして二十四の角迄に
横町へ這入ると田畑お宮の道で御座いますか」まアこの街道の中ほどまでたゞし、食ひに來た
らう[illegible]このつたに[illegible]と所へえらうしていまさア、と言つた[illegible]
あれは[illegible]へ、さんねこた事でしたとしたか、[illegible]としたゞ、いひつゝ歩いて行け
ば、酒亭の[illegible]に[illegible]の小門の柱に、[illegible]の[illegible]と、みえたる酒を出す家の、入口に立寄ると
よりて、[illegible]宿直衛にもつし、[illegible]か、さ[illegible]たから、[illegible]くていと言ふ、すれば、女房ト
好きせ[illegible]よくえらつしやいました[illegible]二階へ案内するお客様の追從[illegible]
ひ、[illegible]で[illegible]二人は梯子を上つて、廣い座敷に[illegible]座を[illegible]
誂へてゐる酒肴、[illegible]持つて來た、所で、差しつ差されつ、娘分が酌取にて、獻いつ酢いて
始たる酒[illegible]、[illegible]風が吹く[illegible]とまいいつと[illegible]
うし[illegible]、[illegible]の[illegible]に取り附けたと思つて、今日は色男の連
れ[illegible]に[illegible]持つ[illegible]若い[illegible]

前はれはどうか見申したやうでありますヨ」ト徳兵衛を見てにつこり笑ふ。徳「見申したやうだアね。嬉しくねえね。おいらアお前のやうな姉さんの為なら、一つねえ命を惜しまねえ気だ」娘分「すヤ／＼けしからねえ強い事でありますヨ。旦那エ、このお方はどういふでかかりましたつけネ。」徳「されば□。何でも突き当つたら、左へ曲つて、辻番で聞くとすぐ知れらア。」米「又そんなはゞからしい事をいふといつちやアねえ。」トなか／＼きいろい声を米「おれは憎くつてならねえ、かはいいと思ふ人があるだらうぜ。」娘分「オヤ気がつかない、どうだか知りませんヨ。」徳「知らざア一寸おちかづきに。」ト猪口をさせば、「おやおと戴き、「マア旦那エ、いたゞいてもようございませうかねえ。」米「よさうかねえお憎いなア。どうでも勝手になさいまし。」米「ホヽ、きつい愛想尽しな、おふさんに言つ付けますヨ。」徳「言つ付けてもようございますツ、酌は俺がしてやらう。」娘分「オヤどういたさう御勿體ない。ヘイありますノ／＼「旦那エ、一昨日は何方へ入らつしやいましたエ。」米「フウ一昨日かえ。裏のを連れて、船で向島へのしたのヨ。」娘分「ヘエ向島へ。お楽しみでございましたネ。大七でございましたか。」米「さうヨなぜお前へ一緒に来なんだ。」娘分「それでも宿が取り込んでをりましたから、まことに惜しい事をいたしましたねえ。」米「又二三日の中に出かけるから、其の時はお前も徳兵衛も、是非一緒に行きねえな。」娘分「すヤ嬉しいねえ。」徳「お前より私やア猶うれしい。」娘分「なぜエ。」徳「なぜなものか。大抵祭

しねえナ、さういふ宿屋は滅多にねえから。」亭「ナニいい加減な気安めばつかり」ト猪口を請えして
手のひらへのせ、亭「へイ旦那、失礼ながら。」丹「チョット押へはどうだらう。」総分「又そんな事をお
つしやいますヨ。折角あげましたものを。」丹「ナニ今日はまようぼうのだ」ト猪口を受けて半分のみ「ア、[illegible]しくつ
て飛んだいいぞ。時に徳兵衛、なんと女房を持つ気はねえか。」亭「[illegible]から棒を冗談と思ひ、「随分持つ
気はございますが、女房になる奴があるものですかネ。」[illegible]
はんの様な者を貰ふ女があると、ほんに女の[illegible]があるまいか。」丹「ああ、さう嬉しがらせる。
まだ小僧ッ子だと思つては、[illegible]を止めるが、何にも[illegible]を承知すかいかねえ。お
どける除けてつかい徳兵衛、いつまでも十九や二十歳でもあるまいし、女房を持つて身を堅めてよ、それ
ゐに安堵させる気なら、世話をしてもいいが、気に入るか入らないか[illegible]気はないかい。[illegible]行
り嬉うございますが、面倒の道具のひつつくんだから。」丹「それはどうでもしてやらうな。」[illegible]
お貰つては、今までの様にのんきにはいられめえ。[illegible]
大きに無理な話がある。[illegible]
ねえ。膝を抱いて寝るよりや、隣合はせとか何とかいはゐると、おふくろの[illegible]
ひの道も語つてやると、二日も三日も三人ながら[illegible]、旦那が出来ると主[illegible]で、こつこいと二つ[illegible]

るから、萬事につけて違ふものサ。」「ほんにそれや、違へございませんね。なまなか交際をしますから、喧嘩の仲直りだの寄合だのは、円子堀の内か池上へ供に行つても、すぐさまには歸つた例やァありませんのさ。」「夫だから交際はうるさうございますよ。」「時にお粂坊、裏のおかみさんがもう〳〵呼んでいたなサ。」「ヱヽサ、おふくろで御座いますが、ホンノ乏しい顔に在りましては、たゞ〳〵待ちあぐねまう此の肴だつて冬の取れから、二番目の忠次に料理人が働いてもらつてこゝろんな〇」「タゞ〳〵畏まりました。ト一寸と階下の階子をトン〳〵と、幾の惣は十八九、二十歳までとは思はれぬ、故人違ひな面影に、又よく似て氣だかき一人の婦人、殊に甚兵衛と夫婦に、其の高名の絵も、地味で元氣な持前の、愛嬌えくぼの京團扇口に當てても目元から、ほんとう程の愛敬は、素顔の雪の富士額、眼もとは猶は涼やかに、そござふれと衣裳も緒は糠さ、いと穏かな風情なり。甚兵衛に添へしものと宿の諸ひながら、につこの笑ひ、「お前はいつの間にかお出でなすつたね。正午時分に来ると仰しやつたから、甘い物を拵へて、お待ち申したのに、なぜお待ちなさいませんね。」ト云つゝ、じろりと徳兵衛を、流し目に見る、ふりの、膝へ背けし横顔に、ぞつとする嬋娟しさ、色好みなる徳兵衛は、心もそゞろにときめきて、くつせし膝もおのづから、直す衣紋も汗じみし、鼻の頭をも手拭で、扇ぎ立てるといふものかは。甚兵衛うしろへ身を反らして、全體のよつて寄る氣だつけが、伴があるか

ら寄らねえで、すぐこゝへ來たのさ。」[illegible]の話はそれで[illegible]についたツけ。

手の前だけは、[illegible]一本の鐵の手の來り、[illegible]して、大きに驚いたんじやありません[illegible]お前も確かに[illegible]

で、[illegible]、お前さんの名人の名[illegible]ましたこと[illegible]

きました」「然うですか、[illegible]の門だか何だかん」大方屋敷[illegible]

のだ[illegible]、[illegible]二明[illegible]出て、

ところの内へ行つた處へ、[illegible]を相手に[illegible]

中にこゝへ出て來[illegible]特別[illegible]をいつて來[illegible]、私[illegible]

「おまに[illegible]ましたか」[illegible]

[illegible]

から、徳兵衛の側へすり寄つて、ふさ「お懐かしい徳兵衛さん。よもやお忘れなんすまいに、知らない顔は情ない、胴慾でございますヨ。」ト膝に取り付き怨むにも、訛りのぬけぬ郭言、徳兵衛驚き突き退けて、德「エ、吃驚した。途方もねえ悪戯も程があらア。近づきでもねえに、胴慾なんぞと、旦那にこんな所を見られたら、痛くねえ腹を探られらア。顔に似合はねえ悪い洒落だ。」トむきになる顔うちながめ、涙うかめる目の中に、情を含みてまた寄り添ひ、ふさ「それはあんまり情ない、氣強い許りが男かエ。なんぼ外に面白い、お樂しみがあるにもしろ、二年三年なじんだ顔を、お忘れなんすとは餘りな、一層死んでしまひたい。」ト身を顫はせて忍び泣き。徳兵衛つくづく顔を見て、德「フゥさうだいやす姿海老屋の花房に違へはねえが、勤めの時分の太りがちが、痩せて變つた細面、素人風ゆゑ見違へたア。」ふさ「こんなに痩せたも主のせゐ、苦勞に苦勞をするものを、むごい心の徳兵衛さん。」德「おれが方から切れたから、怨まれるのも無理はねえ。シタが根ツから解せねえのは、此の春どこかへ身請をされたと噂に聞いたが、小倉屋の旦那の世話になつてゐる樣子。こいつアどうも變ちきだわえ。」ト首をひねつて思案顔。おふさは涙と胸を押へて、ふさ「一旦切れたに又こゝで、二年ぶりにて懐かしい、お顔を見たる嬉しさに、恥も人目も外聞も、厭はぬ程に氣を揉むを、未練らしいと笑はれても、さけすまれても構はぬと、此方でばつかりおもつても、ふり捨てられては仕方がない。一層旦那にお暇を貰つ

て、今日から尼になりたいと、愚痴を並べて嘖ち泣き、まアちよつと聞いちやアかはいさうで、真実な
みだが零れるやうだが、今でもぬけねへ勤めの手管、又ばかまうとは押しが強く、巧く臣端をたらし
込んで、お念仏とか、お題目とか、出家入の人に頼まれて、嘘ゑ、女郎の出来る身で、何か不足で陰
のねえ、俺をよもやにかけるのだ、昔は昔もうかもやア、その事は言はれえ浮氣でもねえ、いつか何時
までだらしなく、女にのろけてつきる物か、こちの身のをすまねへとわけへ、俺を頼みで情ら無
情ないおかと泣きながら、胸にすがる涙顔、よくこれに騙され、貞女作になりたい戯めかし
ても、浮氣と言はれさまへないほどでものかをすまねへ、今の口説に涙出でて、お染吉になつても操は
操、一旦ほんに二世かけて、誓ひたにしろ切つたら、引摺りとおちらもたいとて、他のおかなに
肌ふれねば、たとへ御様を書きたいで、何ほど下がお目にかかつても、言訳にも見つてるるものに、何
の手管があるものせう、浮氣か實はなるほどでも、惚れるものだにしおやぞとて、それに懸うつります
か、ドせさき込むほど出る涙に、いつかのなか言葉の、誠でてあるけれど、其その日本のお勤めの
勤だ、何の切れてしまうた俺に、涙を流してなんあるものか、自然と顔を出し、話用するかいに、
抱いて寝ねえで、情で得心するものか、誰にも大暖味でみなで、二本さしの侍気質を取る手にやア、い
かねへぞ、俺が方から突き出した、其の返報に抱きしめて、有途になる旦那場で、しそこのさうとい

ふ腹だらう。あゝかん辨慶その手は義經。こんな所に長居は恐れだ。旦那が待つておゐでなさらうねエ、ト怖い事〳〵、ト立ち上れば、又取り付き、ふさ「モウ〳〵憎いその惡體が、何の因果か可愛くつて、嫌はれる程思ひが增すよ。辛いが嬉しい戀の路、うき許りにはあるまいに、なぜ思ひが晴れないねえ。御恩になつた旦那でも、さう斷うなつてはかへられない、厭でもどうぞ連れて逃げて、勤めに出すとも殺すとも、どうとも勝手にしておくれ、トとり縋る手を振りはらひ、ふさ「馬鹿アいへ、くらぼうめ。連れて逃げりやア騷動だ、殺せやア俺が身にかゝはらア。そんなあぶねえ狂言が、親のある身で出來るものかエ、ふさ「エ、そんなら是程言譯しても、まだ其嘘だから厭だといふのだ、執拗い女だ、うんざりだ。ト手ひどくいはれし埋り兼ね、顏色かへてはた〳〵と、はじでへかゝるを引留め、ふさ「顏ッつきを違へて何處へ行くのだ。ふさ「何處へとは情ない。うるさい女と嫌はれて、どうして生きてゐられませう。立てた操も水の泡、死んで疑ひはらしたい。ト思ひつめたる覺悟の體、不便にも又かはゆくなりて、疑ひはれたコレお房、何の操を捨てませう。死んでくれちやア悔みだぜ。ト優しい言葉の笑ひ顏に嬉しい紛れに身を震はせ、ふさ「エヽそんなら今のを聞きわけて、旦那は切れぬふさでも女房かへ。ト聞いて嫣然ゑくぼへ袖、ふさ「オヤ又そんな嘘ばつかり。ふさ「なぜ女房になる氣はねえか。ふさ「なりたいけれど、お内儀様にはお初さんといふおかたが。ふさ「旦那の彼奴はもう切れたア。ト紙入かくしのおて

んざに、いつまで未練な事するものか。とはいふものゝ、大事の[illegible]の手前の花の名前だから、どうぞして
女房にや[illegible]れて、マア／＼何は兎も角も、顔に似しあれたのう。仲[illegible]りに一杯やるから、[illegible]
ちに来なさい。これ[illegible]かけば、ひつた宿の[illegible]、一げんにお[illegible]これはどうしたれえ、宵を取
りにお出でだつけか。一[illegible]、手を叩いて見ようか。[illegible]来ないか、ようございますよ。
「ようございますが[illegible]、雑[illegible]も[illegible]一[illegible]
これおいらに直してもらつて、すつぽり素人になつ[illegible]、口の下から出なさつ[illegible]
[illegible]んに[illegible]と云ふのを[illegible]つたっけ、[illegible]も素人と云ふ[illegible]
しかし素人じゃねへのは、お床[illegible]、こんたんだ。[illegible]悪口[illegible]目は[illegible]
心意気がいい[illegible]
お御所[illegible]一御[illegible]ないでまつた[illegible]。[illegible]所をおいらが[illegible]
いておくれ[illegible]
段、[illegible]冗談ばつかり。冗談ばつかい[illegible]毛[illegible]それや[illegible]
なおう。俺一人置き去りか。[illegible]
：お宿の御用が済まないかゝうだヨ。[illegible]お宿の御用も[illegible]、此方の御用も[illegible]

ふさ「ヲヤ御用とはえ。」徳「御用ござんすか、拝みんす、○○様の○○○ョ。」ト手を取つて引き寄せる。
ふさ「ヲヤ何だねえ。」徳「いやでも○は解くだらう。」ふさ「どうでも好きになりますョ。」ト、言葉の途切るゝ後から、「不義者見附けた。動きやアがるな。」ト襖蹴開けて小倉屋惣兵衛、眼をむき出して二人が襟首ひつ摑みて、引きすゑられ、手むかひたらぬ徳兵衛おふさ、一言半句も出でばこそ、夢なら醒めよと震へるのみ。惣「ヤイ此奴等ア、昼日中大それた事をしやアがるな。いけツぷてえ恩知らず奴。おちよつくり内へ行つて来る中、意地のきたねえ撮み食ひ、尻の早えのきびら野郎だ。ばつとしやアつとしろい。つて見ろ、四ツは愚か八ツにするぞ。お条坊〱、言ひつけた物を持つて来さつし。早く〱。」ト大聲にどなれば、「ヘエーイ」引、唯今。」ト下の返事に気を揉むお房、土の如くに顔色の、変つた離儀と胴震ひ。女心に引きかへて、身のあやまりに徳兵衛は、覚悟きはめて投首の、驚く気色はなかりけり。登る階子もばたくさと、娘分が何那な聲に、娘分「千秋萬歳地引の鯛をたてまつる。」ト尺餘の鯛の濱焼に、添へて持ち出す蛤の、吸物二人が前に置く。これはとあきれる徳兵衛お房。惣兵衛言葉を改めて、惣「今のはほんの掟の戯言。おふさ徳兵衛改めて、祝言させる杯は、俺がとり持つ仲人役、その介添はお条ばう。サア酌をしてやんねえ。」ト打つて變りし此の場の有様。喜ぶお房に徳兵衛は、胸撫で下して不審顔。徳「なにか様子は解りませんが、お心あり気な旦那のお言葉、密通したのを咎めず

に、取持役だの介添だのと、[illegible]徳兵衞なぞそんな野暮をいふのだ。いい年をして此の俺が、何でお房を慰まう。貞女は俺が言はずとも、胸の中で操を立て、他の客に肌觸れぬは、お主が心に覺えのあること、それにまた可哀さうに、他に顏色が出來たって、切れる事があるものか、女郎に稀な志が、どうも不便でならねえから、おぬしが切れた其の後に、[illegible]らしいが客になり、相手に折々通つて、心の中を試した上で、見どころあるから身請して、此の館の奧に住まはせ、夫婦には及ばぬが、心の中でやつぱりおれが娘、名もお房と改めさせたが、明けても暮れてもおぬしが事を、思ひ續けてくよ〳〵と、晝寢をしてもうなされては、徳兵衞さんがと[illegible]所を、寢言をいふのも可哀さうに、素人從へるも無理でねえ。おぬしが身性も[illegible]頭では、早くさつぱり[illegible]に、途中で逢つたを連れて來て、お房をここへ呼び寄せて、内から向うを來させるに、二人を殘して下に行き、裏梯子から次の間へ、忍んで樣子を聞くとも知らず、お房を[illegible]徳兵衞は、[illegible]言つても流石の江戸っ兒、おぬしは命も惜しまずに、操を立てぬ志、口では[illegible]られねえ。内祝言の一ト[illegible]、お[illegible]ぞうに耳打して、こしらへさせたお蛤も、目出度と云ふことで[illegible]、遠慮はねえ、是れからは晴れて夫婦だ。[illegible]お房[illegible]嬉しいか。[illegible]何か何まで根拔けて、[illegible]好き[illegible]氣に、[illegible]お房徳兵衞も、有りがた[illegible]

見えたへ、お気をつけう、一寸ハイお片附に致しませう」「ほんにいふにいはれぬ旦那のお言葉、御恩と情は一生涯わすれぬお房が、こゝろは思ひくれれや、それで俺は本望だ」「ハイどうでも旦那は通人だヨ」ネエお二人さんではいと、今日から晴れてお喜び」「どうぞ私もあやかりたいヨ」「ハイよしさ、お前に取持てやるよ」「ヤア下へお開きとせう」「それでは餘り十分過ぎて」「ナニお恥かしうございますれ、お嬉しさ涙にて言ひ顔。」「ヤイもう大阪屋に生れめ」「ドレお房の背中をそつと叩き、「サアもうお絲はう一階におやしよ。手を取る階子の下の口で、是是れからお前と道行だぞ」「ヤア旦那、嬉であります」「二階へは通はれては仕方がねえ、こいつは閉口〳〵」ト下るはしごを、トン〳〵〳〵と子供が大きな聲で「蝙蝠来い、山椒食はしよ、柳の下で水飲ましよ」

教訓娘消息二編上之卷　終

教外俗文 娘消息二編中之巻

江戸 三文舎自楽戯作

第五回

[illegible]

お前張物をしたり荒神様のお棚を掃いたり、何だか彼だか用が多くつて、もう〳〵するよ。これだもの年が寄る筈だ。」お初「ナニサ姉さんはあんな事を。三十振袖、四十島田といひますのに。」女房「ナアニ三十を越しちやアもういかないよ。お前等が楽しみだ。併し私も娘の時分があつたツけ、ア、もう一度白歯になつて見てえものだ。さうしたら、又みんなが、浮気者だと云ふだらうかエ。アハ、、ハ、、こましやべり散らして踊る後へ、引きちがへて友達のおべそ、表の方よりせい〳〵いつて駈け込む。お初「オヤおべそさん何うおしだ。」おべそ「ナニサ今ネ、生酔が私を見て追つかけたから、何様に怖かつたらう。忌々しい奴だ。ネヱお初つアん、をば様は。」お初「今日は余所へ行つたよ。私ばかりサ、マア此方へお出でな。」ト娘のきはへ連れて来り、お初「おべそさん此の頃ぢやアもういけないヨ、おつかアが喧しくつてネ、どつこへも一人ぢやア出さないから。」おべそ「さうさねえ、せめて落語でも聞きに行かれる様だといいがねえ。」お初「どうして〳〵、湯へも一人ぢやア出さないものを。」おべそ「それぢやアお仲さんの所へも、ちよく〳〵は行かれないね。」お初「アイ、ちよく〳〵どころかエ、いつにも此の頃ぢやア行かないよ。それだからもうじれつたくつて、気色が悪くつてならないわね。」おべそ「さうだらうねえ。アノお初つアん、徳さんがお内儀様をお貰ひだが、お前は承知で知らないふりかえ。」お初「オヤおべそ様、嘘ばつかり。」おべそ「アレ嘘だと。をかしいねえ、まだお知りでないか。」お初「何の、嘘を

お吐きな、お前笑つてお出でだもの、欺すのだらう」「ナニ二人に欺すらうかねえ、否なら行つてお神
様にお聞き。私やア昨日ちよいと見たが、何様にもう宜しいだらうと、ネ、そればかりやア木富に
かヱ、ソウ云ふ三木富の處りと、お嫁に来たのだよのを、また年老顔だがネ、あの姉だとて、母も何だか
ら御大儀に遣おやりでないで、ほんの寄かにして置つたが、年頃も程が延びやア十八も彼是二十歳に
やアよだからまいと思ふよ。そんな商でも、愛嬌があつて、仮令四角に生れた面でも丸う見えて様
な容色だよ。何様に可愛らしいだらう」「熱心にかけましく、そればかり腕の見ぬ。そうしたも
のと気が揉めて、のぼせてじれて居るが見物、と、それよりも日様にはのないでもいいけれど、ネ、そうで
その縁にならなかは、あの娘は今お嫁ではないのか、先達て鼻の持ち物もあつたけれど、其だつても嫌な
かしいが、お前方やがをの人に、逢つてみたと仰たけれども、何うも娘に、云はないよしないけれど、それか
聞しものにされちや、気味だから、成たと逢ひ成たねえと、マア云ひ遣をしたよ、其あの、
お前の罵だと思つて居人の世話にお成なさいだから、何心でも辛抱と思ひ切れたのも守まないかとに
マ馬鹿々々しいとをおいけないと、何のつけに肝心か、そ渡れの呼出があるものかネエ、ネ、そうです、お
ひしだけれど、私の下北に来かけに、お娘さんの處へ寄つてね、お前が嫁ンとの處へ、愛想づかしに
文やるよからネ、それで勘弁しつ、無理な事を、お内儀様にお詫びさいと話なのでござい、それだ

から私も、お前が承知かと思つたから、「何でございます」と私がそんな事を、真顔になつてお騙しでないよ
ネ、そりや知らしつたんだらうよ、よく聴るねえ、誰かお倚さんに聞いてお見な、そんなら私は
知らなくつて逢はせないかネ。どうも不思議だねえ、お前が承知でもしないなら、まだ大事な
ものだから、なんにも知らせずに通して置きたいと思ふから、今まで気がつかずにいたが、お前さん
が聞いて逢はしてくれるのでも、お前も知つての事ですもねいか。何だかうんとじれつたいねえ
こちら、それからそんなお袖つてんだ。ニ、私はつまらない。其様な事でなけりや、今いふた其様事
言らないけれど、お前さんは聞けば惜しいから、聞いて見たい気がしれねえ。己で、さがないでいきて
なものか、此うと忘れちやない事だいつも、無実を言ふ訳はない。まだ行つて聞いて来なくつて居ら
お出しておしれよ。其んなに嘘ぢや難有くて、なぜだかにしてやるの事をきづ忘れた
出ないさへ知れないから逃げたに、一日もおかけなかつた出るなりも、今度なくつては又出られず、
何時かへつて来るかも知れないから、お前さんの御處へ行きたいにも、うつかり出る事もしたら
ないさうだし、どうもかうもならないかねえ。それは何だか気を持たせて、矢張見捨てて置いてある
まア一寸ご覧つてんで、それではないか、おつかさんは何處へお出でだか知らないが、帰るのに間がある
なら、私に留守をさせておけるから、其の中お袖さんの處へ聞きに行つて、ちよつとの様子を聞いて来ね

出て[illegible]、[illegible]、[illegible]顔をあげておくれよ
鐘は[illegible]来たから、[illegible]、眼と鼻の間に廓のある[illegible]、いつ
までも[illegible]なされまいよ。[illegible]帯とか紐とか[illegible]
の[illegible]浄瑠璃で、[illegible]、[illegible]と節さ
[illegible]三味線[illegible]いつて[illegible]、[illegible]いつても
[illegible]ないといふやうな[illegible]で目を[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]、[illegible]
の[illegible]、[illegible]、二階に行
[illegible]「[illegible]にもかしいぢやないか、[illegible]
[illegible]、この[illegible]、[illegible]
[illegible]、のろしく[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]

兵太郎遊びなんぞよ。」「エ、默つてゐろイ、大きにお世話だ。のう兵太郎、威勢のいい狂言をしようぢやアねえか。鬼ケ嶽に秋津島がいいぜ。」「フウそんなら俺が成駒屋で、鬼ケ島になるぜ。」「何のお前は、三津五郎の秋津島になんねえ。」「イヤ／＼秋津島は草履で打たれるから、おらア厭だ。」「打たれてもいいやな。なんねえな。」「厭だといふのに、をかアしな。」「をかしかア笑へ、鼻つたらし奴。」「鼻つたらしにかまやアがるな、ひつかり奴。」「ひつかりがどうした。待ちやアがれ。」「わアい、ざまア見ろイ、犬の糞にすべつて、轉びやアがつたイ。わアい／＼。」ト騒ぎ行くは、ねき町近所の中通り、一間の荒き格子戸の上の小壁に、成田講の札をはじめ、釣船請次が疫病除、熊谷稲荷の盗賊除など貼り付けて、入口の柱には、大工徳兵衛といふ標札を出し、三寸角の出格子から、中庭まで見通しの住居と共にきまじめの、母のお霜は中の間に、眠氣ざましの山本山、土瓶で煮花の香よく、仲むつまじき姑が、茶碗に汲んで隔てなき、嫁をいたはる馳走振、次の小座敷へ持ち行きて、お霜「サアサアお房、煮花を入れたから一杯飲みな。オ、もう髪も大概できたの。丸髷も餘り大きいのは不恰好で見にくい物だが、お前のは飛んだ好いた風だ。」ト中の間へ立ち戻りて、煙草くゆらす勝手口、「みすや針は宜しう。長崎針は宜しう。」ト哀れな聲を聞きつけて、お霜「ほんに、お房たしか針がなかつたと言つたつけの。オイ／＼針よ。」ト呼び込めば、針賣婆は小腰をかゞめ、勝手口から入りながら、「へ

ィ御覧あそばしまし、お針の御用でござりますか、よい木綿縞も御座りますト背中に負ひし小風呂敷、おろす姿も見すぼらしき、針目色紙ひとへもの、腰うちかけて疊みまゝ、出せばお霜は手に取りて、「ムヽヲヽマア／＼一服のぐあひ、針の高直といふものは、通りがかりのを撰るから、どうも持のあかないものだ」ト彼の方を向いて「お房や、細針ばかりでよかつたかの」「嬢さましまつたら來て見なさい」「ハイ／＼漸うしましたが、唯今そこへ參じます」ト襷をはづして出で來り、細工はこゝでふきながら「モシおつかさんヱ、今日のは出來が悪いかも知れませんヨ。いつもよりか、少し根が下つたかと思ひますヨ」「ドレ／＼其方へ向いて見せな。ヲヽこりや能く出來たよ、結構結構」仕立屋さん見て、「ほんにお娘子様でござりますか、御器用によく縫ひなさるネ、まことに羨しく出來ました」「ナニサ針屋のおばさん、世辭がよいから笑ひなさるな」顔を見合はせ、「イエサヤ／＼お前は針妙のお綺麗さんおやゝないか」ト聞かれて顔く細工の名も御存じ、さう申しますればどうやらあなたもこのあひだお忘れかね、花房だネヘ」「嬢さま、ほんにさうだよ／＼」トシン／＼やさ飛んだ事だ。私はもうとんとお見それ申しましたよ。安田町からお出でなすつた時分と違つて、さつぱり見違へたお顔だから、外のお方かと存じました。さしづめ御師匠様の御娘子でございましたネ」「其過ぎた事は後にして、お前もかはつた今の活業。どうしてさういふ事をお始めだへ」ト二人が顔を見て取

る時節、〇〇／＼お房、そんなら此の小屋様は、お前が元のお馴染か。」ト「ハイ私が勤めし時分、内のお針をしてをりましたが、今日は誠に久しぶりで。」おしも「そんなら／＼こつちへお上り、そこは余り端近だから。」「ハイ／＼それでは御免あそばせ。」ト草履を脱ぎて足をふき、上へ上りてお房におかひ、「誠にもう私も、お目に懸るもお恥かしい、御覧の通りの形りで、こんな渡世を致しまする、不仕合故仕方なく。」ト少し涙ぐむ。房「それはマアどういふ事だエ、何がそんなに不仕合でエ。」「ハイお屋敷に居ました時は、歳蘭様にも（お房の事をいふ）いろ／＼御恩になりましたが、御存じの通り、お暇の時分は、可なりに連合を過しまして、人なみ外れて寒い目を、致した事も御座りませんが、内の人が果れてから、腰が抜けての難渋に、介抱人も外になし、私の手一つで看病すれば、身仕事もならない故、致す閑もなく借金の中で薬代にさしつかへでは、向うや隣でちよつとの借りも二両三両、貧乏には相見たがひ、ひどい工面をしてなりと、返してくれとせがまれます、其の言訳に盡き果てて、姿繪を屋の親方に、借りて濟ませば其の金を、又返さねば親方へ、おのづと閾も高くなり、不義理を知りつつ出這入りも、ツイ仕そびれて、一月たち、二月三月と日が經つ中、たうとう薬のきき目もなく、宿が亡くなりましても、親類縁者のない悲しさに、どうやら斯うやら長屋の衆の、お世話で寺へさしになひ、投げ込み同然に弔ひました、跡の始末も碌々おなく、砂利場の住居も出來かねて、本庄邊の極

事足へ、御座すといふ名ばかりで、大殿の木屋を見る度に、きたない家を借りましたが、幸ひ瘧は
お気の毒か急に目がかすくなつて、かすんで出来ぬ仕事、じれつたくなる年の上に、またたく間に[illegible]
前から、纏ひついたる[illegible]、食ふや食はずのはかない命の上に、何と因果でございませう。[illegible]
さ耳を澄ますの、涙に暮れて居ります。お腹も困り果てた、まことに苦労と申す程[illegible]、しかもその
世の中は、訴訟すら不景気で、どうした苦労は致しても、この事ばかりはどうしても出来ぬ、少し暮らしにも困
らずとして、ひとりで下の町まで、やつと帰つて来たのでございますが、わたくし共は、宿にも困つて居り
としてものは、一人の目撃者[illegible]、それはもう苦労致しましたが、人はそれぞれ八通りといつて、またま
ただ御前も見れたところ、さんざんに身の上のことを申しましたが、[illegible]こそいかない
[illegible]
目に浮かぶ[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

房「アイ〳〵」とは言へど母のまへ、恥かしさうに口へ袖。おしゆん「そんならお前も、私の伜の徳兵衛を御存じかえ。」針賣「ハイ、一しきりは一階中でも、花房さまは羨ましいと、浮名のたつほど大評判、女郎衆も澤山ございますが、好いたお方に添ふものは、萬が一つでございますのさ。ア、おふくろ樣はお仕合だ、女郎衆の中で花房樣ほど、好いお氣前のかたはございません。それに浮氣がお嫌ひで、勤めの身ながら徳兵衛さんに、操を立てなすつた故、内證の不機嫌おりき殿のやり手小言はおろか折檻も、お堪へなすつた代りには、今でこそお仕合、深い御縁でございませうよ。」おしゆん「左樣さ、わたしも一頃は、徳兵衛が放蕩で夜も晝も、内へとつては寄りつかず、家業の間もかけるから、氣立ての好い者ならば、女郎でも藝者でも内へ入れてやりたいと、心には思つてゐても、今の暮しでは自由にならず、どうぞ放蕩の直る樣にと、もつたいないが神樣や佛樣へ、參るたびにお願ひ申したお蔭やら、出入場の旦那樣が、こつそり此の子を身請なすつて、氣だての好いのを御自慢で、徳兵衛の爲に下すつたの で、私の安堵が喜び、旦那樣がない時は、互に思ふばつかりで、儘にならない世の中を、未だに恨んでゐるだらうよ、いうお房「眞にほんに左樣でございます。私はもう旦那樣の御恩を、朝晩心の中で拜んでをりますヨ」ト話す折柄小倉屋惣兵衛、「どうだおつかア、好い天氣だの」ト縄簾を上げて内へ這入る。おしゆん「オヤ〳〵旦那樣、よく入らつしやいました。サア〳〵此方へ。お房や其のお茶は

もう赤くなつたから、〔[illegible]〕香煎のお湯でも上げな。「イヱもう構ひなさんな。お前どうだ、忙がしいかの。」「實父なおさん、[illegible]物兵衛に出し、ハイ有り難うございます。貴方今日は何か、」「アヽ近所へ用があつて來たからおよつくり樣子を見に來たのさ。」「さうだつて[illegible]手も揃ましたかのう。」「ハイもう[illegible]な事それでござりますから、よく氣が付いて世話をしてくれます故、私はもう誠に御隱居樣になりました。」「フヽそれでなくつてはいかねえのう。したが肝心の旦那殿と仲をよくしなくつてはいかねえぜ。」「ト[illegible]又こんな事を一寸いふだけ野暮なの。」[illegible]葉を見て、「[illegible]このおばさんは何處の人だ。」「[illegible]今あなたにお話し申さうと存じました處で、このおばさんに此[illegible]お前は、お房が[illegible]に[illegible]、[illegible]御亭主にもなくなられまして、今では此樣に獨身で、絲や針の世渡をなさると、身の上話に、私も、この子も大きに泣きましたが、[illegible]總領[illegible]、それで[illegible]しぶりで、お房に逢つて互の身の上、話し合つたといふ譯かの。」「さうしてお前、息子さんでもあるか[illegible]、[illegible]針賣お絲。「ハイ窶でもござりましたら、此樣に憂き目は致しますまい。」「子供はたつた[illegible]、[illegible]て持つた子だから、[illegible]

ト［判読不能］ふて、さ貧苦の悲しさ、泣く／＼心を鬼にして、捨てられた子より捨てる身は、せつないとも、苦しいとも、他人の知らぬ此の胸の中、年の寄るほど思ひ出しては、寝ざめの悪い娘が身の上、何処にどうして居りますか、今日まで何にも存じませぬ、何たる事でござりませう。と涙に咽ぶも道理なり。黙つてゐると、お前の娘は今、八つの時捨てたは因果な身の上、たとへ今日まで逢はずとも、いつか一度は捨てた子に、何処でか知らぬが逢つて、世に出る事があるものだから、マア／＼力を落さずに、時節の来るのを待つがいゝ、併し明日が日往来で、その子に逢はねえものでもねえ。よく芝居でもするやつだが、また逢ふ時のしるしに、捨てる時に守か何か、証拠がなくつちや判らねえ。［判読不能］昔の話でござりますが、別に守袋もござりませんが、よく色事に誰命と、腕の奥へ名をほる事に、大きな黒子がありましたと、三ツ並んでござりますので、今まで此処に尋ねますが、それも今では消えましたか、外に目印もござりません。［判読不能］ト、黒子だから、消える事もやがてねえ。これが顔とか手足とかなら、何の事故見つともねえと、抜いて貰ふのもいでもねえが、腕の奥だから有るだらうよ。こいつは面白え尋ね物だ。それぢやアちよつくら行つて来よう。併し相模のおばアさんも、ひとり身おやゝ難儀だらう。ちつと私の処へも来なせえ。おつき看板の河岸通りで、小倉屋といふ材木商売、時分どきなら遠慮なく、いつでも寄つて茶漬を食つて、足を休めて行きなせえ。ト云ひつゝ、二歩余

ニ取り出し、小菊の紙へ一寸ひねつて、[illegible]しつけたが、[illegible]懐中に[illegible]して
お[illegible]渡せば[illegible]帯に挟みて、[illegible]これは[illegible]事、どう致してそんな事を。」婆「ハテ堅くろ
しい取つて置きな、[illegible]志だ、[illegible]嬉しく[illegible]「それだと申して[illegible]
[illegible]近づきだ[illegible]下へおいて[illegible]、[illegible]
つて[illegible]ハ[illegible]近所[illegible]帰つたのじやと[illegible]来い[illegible]
ハ[illegible]
た事ばつ[illegible]だんな様[illegible]ござい[illegible]
更[illegible]の中に[illegible]
[illegible]帰りたの、跡へ[illegible]四方の[illegible]、[illegible]手紙[illegible]門口、[illegible]
[illegible]ますか[illegible]四方[illegible]小僧さん[illegible]今しがた[illegible]お出[illegible]つて[illegible]、何ぞ用[illegible]
[illegible]帰[illegible]つたが、[illegible]手紙[illegible]
[illegible]何処[illegible]
まつか[illegible]いますエ。」おしも「フウ[illegible]
[illegible]に此間隔つ[illegible]無尽の事だ[illegible]小僧さん[illegible]篤[illegible]帰つ

て行つておくれ。」小僧「アイ來た合點だ。何ならお内儀さん、その手紙の返事は、節句前まで待つて上げよう。」おしも「すや戯言ばつかりいふ子だのう。ソレ〳〵袂から梨子が落ちたヨ。」小僧「こいつァ大しくじり。大事の物を無くす處だッけ。」ト梨子を拾つて袂へ入れる。と、毎日修業七ツ坊主、「なァんまァいだァあんぶゥ引。」

教外俗文 娘消息二編中之卷 終

教外俗文 娘消息二編下之巻

江戸　三文舎自樂戯作

第六回

お醫者さんでも草津の湯でも、惚れた病は癒らぬとは、浮氣から出た詞でも、眞實を含みたる、情
むに足らぬ心意氣、高貴でも下賤でも、戀にかはらぬ教への外、儘ならぬのを承知しても、惚れてもい
つか儘ならぬ、身を交うらぬ相手勝手、縁を結ぶ神さんも、聞きのがし、と昔日ほとした、とがの語りに
義理づくで、切れしも未練の起るのは、是れ情事の一寸なるか。情合の巻の小説家に、お仲は、ある時節
目をかけりなさら、とし毎ひに、お細さん、そんなにお泣きでないよ、歎ずるならお目出度さんなお
おはつなどは日まいおう、
貰ひのは、一存した譯でもないずうとう私もまだ見もしないけれど、郭でなし、讀家でもあつた花町で
んだといふ事だから、一通りの譯ではなからうね。嘘さんとさへつけの庭へお出でなさいかね、
どういふ事だか詳しい樣子はまだ知らないが、さうした今にお出でだらうから、お前の事も打明けて、ど

うか相談もつけられはしめへ、頭痛がするといふが、餘り氣をお揉みだから逆上せたのだらう。順氣散でも上げようかねエ「有難う。何だか胸がどきどきして、ソシテ逆上せて來たよ。」傳「さうかエ、マア氣を落ちつけて此の間をかまはず須原屋の順氣散を出して、眼をまはさずと、全體まアお前が德さん處へ、文の返事にいろいろ愛想盡しを書いておよこしだから、それでこんな事が起つたのだよ。あれやアお前どういふ料簡だらう。」と茶うけに出した枝豆を、一つぶづゝ莢をはじきて、前齒でほつりほつり食つてゐる「何その事を今内でね、おべこさんもさうお云ひだが、私やア夢にも知らない事だよ。何のわけに私のはうから、愛想づかしをするものかね。」傳「ドヽあれをお知りでないえ、お前の手で書いて置いて」「何ですレまだこんな事をおいひだ、書いた覺えもないものに、それやアまア何時の事だえ」傳「ハテどうも不思議だねえ、アノ今月の月初まりさ。マア出して目にかけよう、論より證據が早い」といひつゝ鏡臺の抽斗から出しいろいろの文がらを取り出し、傳「サア、お初これよく御覽、何ぞの役に立つだらうと、大事に私が藏つて置いたヨコトト一枚々々切れ口を、合はせて並べた文の反古、見るよりお初はびつくりし、且すやくく、これや私の手おやアないよ。よく似せてあるけれどねえ、誰がマアこんな事を書いて、德さんに腹を立たせたねえ。私やアちつとも知らないものを。さうして誰が持つて來たえ」傳「ほんにそれは不思議だねえ、此間もこの處で德さんが、ごたごたいた擧

伯だからお前の處へやるといつて、こゝで何でも反古へ何か書いて、使にはやく〳〵と四方の御用に持たせてやつて、直ぐに取つた此の返事サ。まさか外へは持つてくまいに、お前でなくつて誰が書いたネ。」ト眉に皺よせ不審顔。お初も「これは面妖と、二度も三度もくり返して、文を讀む內ふつと氣がつき　初「オ、さうだ〳〵判つたョ、やつぱり氣がつかなんだ。アノ私の手とおつかァとよく酷く流儀が似てゐるから、おつかァが書いたに違ひはないよ。大方四方の小僧さんが、私のゐない處へ行つて、おつかァの手へ渡したのだらう。ヱヽ憎いおつかァだねえ。こんな事を文に書いて置いて知らん顔は餘りだ。」トおろ〳〵涙に文がらを、見てくやしがる娘氣の、齒がみをするも無理ならず。傳「それで漸う判つたョ。おつかさんの僞筆とは、私やァ一向氣がつかなんだ。お前を人の世話にするのに、蟲が付いてゐちやァよくないから、德さんの手を切らせようといふ狂言をおつかァがお書きのだ。いはゞ邪見の樣だけれど、考へて見ると無理でもないよ。天にも地にも、唯一人のかゝり娘のお前だから、ひよんな事でもあつた時には後へも先へも行かないから、ひどくやかましくお言ひのだが、親の心子しらずとやらでお前の身に取つちやア、儘にならぬをもう〳〵じれつたいと思ふ筈さ。實お前が心が變つて、この文をおよこしだらうと一圖に德樣は思ひなすつて、腹たち紛れの癇癪に、切るとか突くとかお怒りのを、漸う私が預つこバ、何といつても男だけ、未練を殘さぬ面當に、するとか何と

かいふ心で、お内儀さんをお貰ひのだらう。何にしろ手紙を上げたから、今にも徳様がお出でたら、お前の心に曇りのないのは、私がまた證人になつて、どうか譯をつけるわね。」ト話す折から店先へ、來る徳兵衛を葭戸越、目ばやく見つけてお仲立ち出で、仲「オヤ徳さんよくお出でだ。此の頃ぢやァ強いお見限りだネ、なんぼ内にお樂しみが出來たつてもさ。」徳「もう皮肉な厭味をいふぜ。實にこの頃は用が多くつて遊んでゐる閑がねえもの。」仲「色まはりで忙がしいかエ。」徳「あたぼうよ、色男にやァ生まれねえ事た。何處へ行つても怨まれるから。」仲「オヤもうおたれか、受賃には何をお奢りだ。」徳「吉兵衛の天ぷらか。」仲「巧く合はせる物だねえ。」徳「そんな事ァマァ二番目として、今何か用がある樣に重さんの處から手紙よこしたが、何の用だネ。」仲「あれやァ私が書いて上げたのだが、マア何の用でもいいからお上りな。立つてゐちやァ話が出來ないわね、サアマァ此方へお出でといふに。」ト袖を引いて奥へ入れるに、お初は今更言譯を何と云はんと胸塞がり、泣き俯きてゐる姿を徳兵衛見るよりつつと立つて、徳「何だお仲さん、用があるといふから態々來たのに、人をつけにした面白くもねえ。未練も大概程があらァ、馬鹿々々しい。」ト歸りかゝるを、お仲は急に引留めて、仲「アレサ徳さんマアお待ちな。色々譯のある事たから、此の子の胸も聞いておくれよ。其樣に一徹を言はないで、マア〳〵下にお出でといふのに。」徳「止しねえなお仲さん、今となつて譯も糸瓜も入るもんかな。子供が飯事

の喧嘩ぢやァあるめえし、泣きッ顔が見られるもんかヱト力な詞に嫉氣の、お初はわつと泣き出し、
母「チエイくやしいねえお仲さん。何もそんなに悪體をいはれる程、悪い事をした覺えもないもんだ
いに、そんなに憎けれやァどうでもおし。打つとも殺すともしておくれヨト徳兵衛に身をすりつけて
くやし涙の泣聲を、猶はら立おて突き飛ばし、「何だこの女ッちよは、殺して呉れやァとつくに殺
さア、いままで生かして置く氣づかやァねえが、お仲さんが止めたからこそ、ゆるして置きア、付上つ
て、さまァ御託をはきやァがる。切れ〳〵來なんぞを盗む程なら野郎に男が違はア。この餓小い
やらしい事を叫しやァがると、横すつぽうをはりのめすぞ。マア〳〵徳さんもそういふもんだ。巳
細評を聞きもしないで切りはりかゝり江戸ッ子かえ。あれはお前が嘘んだってさ、人のいふ事をマアお
聞きな。音羽屋のお祭佐七ぢやァあるまいし、ネエお初さん、可哀さうにさ。身をいとうしたと、お
仲さんお前までが向うづらへ廻つて、俺の揚足を取る積りだの。一ッ馬鹿ておいひな、子供ぢやアあ
るまいし、向うづらへ廻つてどうなるものかネ。この子の明りが立てたいから、こんなに骨を折るのだ
ヨ。マア其様に突ッ立つてゐずと、此の女もとつくり御覧といふのに無理に其處へ引すゑる。
口の中でぶつくさいひながら、「何だこれやァ何時さこしたまれぬおやァねえかだかで
とつくりお見な。お初さんの底心を聞き抜いてゐるのはおれだ。この女の事はよ、かわりに、とうから目鼻が行

ゐないから、疲れた其の鹽梅で、寝ていたに、今日といふ今日はお前さんに話して聞いて悔つた樣で、その譯といふは斷う〳〵この事、文の手蹟はよく似ても、お初の賊の僞筆にて、二人が戀中離さんと、巧んし事の始まりは、四方の小僧が過つて、奥より文を賊の手へ、渡して奴に事の始末、疑ひはなき僞ものと、お初に代わせて詫しく話し、歸つたが疑ひが晴れないなら、四方の御用を呼んで來て、お初さんの手へ渡したが、おつかさんの手から返事を取つてから、聞けばそれにて念晴らし、機嫌を直してお紺さんが、心に曇りのない事を、推量なしておくれ。可愛さうにここの子の心にもなつてはなつてゐ見た、大抵なしい事ちやない。ちつと身に引かけて徳兵衛の、心を案ずる女房の内儀、流石年増の物數を、よく言はれど今更に、目に角立てし腹立ちの、顔もやはらぐ徳兵衛は、暫く詞もなかりしが、ようたと斯くて、間違へにしろ、たつた此の文一枚から、既に命もいらぬ樣に、傷を付けたり付けられたり、大騷動を起さうとしたのは、お仲さんお前が止めたばつかりで、お互に其の體には別條はねえといふもの、親のある身で大それた、人の娘を我が物に、思つて色をしてゐるのは、全體此方が惡かつた、何も氣安めをいふのぢやアねえが、お互に、婿を取つた嫁を取つた真面目であれやア、おめへにまで苦勞をかけもしめえもの、お仲さん、分別らしくいふにも當らねえが、俺だつて此の子だけで、一難でも一人といふものだから、どうして傷になやアならねえ筈だ。いつまで

もくつ付いてゐた[illegible]、始末のつかねえ身の上だから、此の一件を
[illegible]髭を付けねえのが見つけえもの
だ[illegible]
つけ[illegible]何もかも、みんなさ
[illegible]にして、是れからほんの深切づく、及ばずながら力になつて、[illegible]
[illegible]のうお仲さん、ごうおやアねえか。ト衒めの臆氣に顯もつかず、愛
つた言葉のきれはなれ、よき男にもなる氣かと、末頼もしく思はれて、[illegible]
[illegible]お仲さん、[illegible]さばけのよい德さんの言葉、切ッつは
ッつのなかつたのは、お互に誠に仕合。さういふ事でも有つた[illegible]
[illegible]
といふのかえ。一德「そいつは悪い合點だのう。コウよく聞きなよ[illegible]
[illegible]

から、是れからすぐに兩國まで行くから、跡で此の子の納得するやう、とつくり言ひ聞かしてやつてくんねえ。」トいひ捨てて店へ出る。重「そんなら徳さん又お出でよ。」ト云ツゝ重さんによくいつてくんねえ。イヤ忘れた事がある、お仲さん一寸顏を貸しな。」仲「アイ何だヱ。」ト來るを、立つて徳兵衛何かひそひそと耳こすりして出でて行く。お仲は奥へたち戻りて、仲「サア〳〵お初さん、もう趣意がたつたから、泣かずにお茶漬でもお上りなネ。」お初は顏へあてた袖を取り、初「何で趣意がたつものかね、何ぼ徳さんが悪しい内儀さんをお貰ひだつて、餘りな貧なしだ。」顏へ氣が付かないのか、めつけものだの幸ひだの、出世前の體だのと、そんな事をいふ位なら、初手ッから嫁つておくれならいいに、腹さんだ丶人を嬲つて置いて、おつかァに苦勞をかけねえがいいと、お爲ごかしの意見ばつかり。こんなお情愛い私だから、心までが浮氣かと、思はれたのがくやしい。」ト泣くのをお仲は慰めて、仲「もつともだがお初さん、それはお前の心のひがみ、何で徳さんが、お爲ごかしや氣休めをお言ひなものかね。今も歸りながら小さな聲で、この頃かゝァを貰つたのも、出入場の旦那の世話といひ、おふくろの心やすめだから、必ず悪く思はねえやうに、お前によく言ひ聞かしてくれろと、くれ〴〵言つてお歸りのは、やつぱりお前を案じてだよ。成るは厭なり思ふはならずで、ほんたうに儘にならないものさ。」トわり口說きをいふ處へ、表から店へ驅け込む娘　おべそ「オヤ皆お留守かえ。」トそこらきよろ〳〵見

通すな格子の内から見て取るお仲「何だよおべそさん、誰をお連れだ。」ト云ふ「ヲヤ與にお出でか。アノお初つァんもお出でだらうね。」トつか／＼と上つて與を覗き「ヲヤお初つァん何をしてお出でだ。おつき行つて來るとおいひで、大層人をお待たせだね。それやァいいがお初つァん、お前のおつかさんがお歸りで、何様に小言をいつてお出でだらう。何處へも行くなといつて置いたに、たまたま人がよそへ出るといい幸ひにして遊びに出る。なぜあんなに浮氣だらう、それだからもう片時でも内にゐる事がならねへ。年がよつたら、後生願ひをして親に孝行すると思つてゐたに、大きなおへこだ。成人する程世話がやけて、ほんに／＼一年中氣の安まる間がなくつて、しよう／＼事にくさ／＼する。これぢやァ長生をする處か、ほんに壽命が縮みあがるのだトいふのがわいたから、わつちやすまことに氣の毒だつた」ト息をつかずに喋りつける「マア／＼さうかえ。それぢやァお初さん、マア／＼早くお歸りよ。お夜食をあげようと思つたが、遅くなると御迷惑だから、マア／＼ちつとも早くお歸り。又間のいい晴をつくりお出でな。」與といふ字にや勝てねへから、無理な事でも辛抱して返答返しをおしでないよ」ト角の立たないやうな挨拶に、與吉がまより背の寒さ、お仲の言葉は嬉しくてら、すまぬ心の先も兼ねて、「それにつけてもお仲さん、是非今のお話しでもやァ濟みませぬねえ」と何ささうい、ふ譯でもないが、又どうか嘘をしてよびをつけるから、マア／＼何にでも直す上ニ今歸

るがネ、何だかもう内へ行くのが、厭で〳〵なりやァしない。おつかァは何故あんなだらうネ、自分だつても若い中は、人より餘計に男ぐるひをしたと人に話しながら、餘りといへば思ひやりがないから、もう〳〵まことにじれつたいねえ。」ト氣を揉みながら、降りる途端に履物を引つかへす。初「ア、痛いぞ、足を泥だらけにした。」おなべ「お初つァん其處まで一緒に参らう。」初「そこまでといはずに私の處へお出でな、」おなべ「いや〳〵をばさんが怒つてお出でだもの。」ト二人は一緒に表へ出る。小さな子供が二三人「おきんちやん又明日よ。」「アイヨおいらァ内イ歸いよ。蛙がなくかや、おいらァ内イ歸いよウ引。」

○燈ともし頃の火を打つ音カッチ〳〵〳〵。お初は行燈のきはに突つ伏して泣いてゐる。母のおかみは煙管を持ちて疊を叩き立て、小言をいふを、隣づからに寄るもの市右衛門が女房おいさ、芥子しぼりの手拭で額の汗をふきながら、なだめてゐる。おいさ「コレサおつかァ、マァ其樣にお叱りでないよ。お前の留守にお初つァんが内をあけたのもわるからうが、何か急な用があればこそ、おべそさんを賴んでお出でのだらう。まんざら内を空あけにして、遊びに出たといふぢやァなし、わつちが謝るから堪忍おしよ。お前はいつでも此の子の事を、ヤレ氣が利かねえの、意氣地がねえの、ずるいの迂つたのとお叱りだが、餘所の娘ッ子と比べると、いくら親孝行だか知れないヨ。」おのべ「何さ、お前そんなに褒めておくんなさるな、幾つになつても世話ばつかり燒かせて、どこが孝行といはれるものだ。二階に旦那が來

てござるから、私も小言は言ひたくはないが、打捨て置くと、野方圖もなくいい事にして付けあがりますわな、何でも親のいふ事は、どうあつた斯うあつたと、直ぐすなほにした例がないわさ。其母御の處へ姉えを見たがいい。家内中でいつも早起で、水も汲むし米もとぐし、洗濯でも張物でも、おふくろに點を打たれる樣な、不器用な事はとんとしないわ。もつと器量こそ惡いが、それは〱甲斐甲斐しいといつちやアねへ」ト言ふに「おつかアまでそんな事を引き出しないで、もう小言をおいひでない。これおつかア共でも親があるか、餘りがやがやといはれると却つてむかつ腹になるもんだから、ツイ目當へをする氣になるわな。」ト言ふに、何でお前、つまらないへまな事をいつた事はありません。大概の事は默つてゐても、目に餘るから小面倒で、叱られるより叱る身が、天窓じれつたいわな」ト灰吹を煙管で叩きたてるついでに「そんなにおつかア今日はもう、何にもいはないでおしとさな、お初つあんもそのよいからお泣きでない」ト諭し「あれ二十やつておさしなさいよ」こつちのいふ事はつかりいつて、お茶さ上げたんだ、お夜食でもおあがんなさいな」ト、これのがたう。さうしちやゐるねない、もう自分で歸る時分だから、お初つあんではないか、涙してゐて叱られるとつまらないから、その二十ちたにでごうきねえ噺し中つて、あれお起りなさい、又私が悪口に行きますッす、、、と言つて違へねえ、その時はおつかア、を掴むよ」ト、異熱言ひつゝ二階へはしごそのさく〱と、下へ降りるは小倉屋

惣兵衛「お初坊歸つたか。おつかァ何を叱るのだ、野暮らしい。小言をいひなさんな。」母おやは怨に「へ、、、、、イエ餘り情が強うございますから、ちつとばかり、いざこざを申しました。お小用でございますか。」惣「アイ、おつかァ誂へた物はまだ來ねえかの。」「ハイもう持つて參る時分でございます。」トいふ折から鰻屋の若いもの、「ヘイお誂へはあなたでございますか。」「アイ此方だよ、さつきから大待ち兼ねた。」「左樣でございますか、お客が立て込んでをりましたから、大きに遅なはりました。」ト鰻を置いてそこ〳〵に歸る。小用場から出で來る惣兵衛「漸う持つて來たか、サアお初坊二階へ來て食ひねえ。」ト先へ上れば、詮方なくお初はしぶ〳〵顏を直して二階へ上る。その後より母は鰻と燗徳利、袴の儘に突き出して、下へおりれば差向ひ、惣兵衛は酒お初は飯、飲み食ひの中は兎に角に、互に言葉は途切れがち。惣「コウお初坊、其樣に飯ばかり食はねえで、ちよつと一口飲みはどうだ。」初「私やァ嫌、逆上せてなりませんから。」惣「どうもいかねえのう、些とゝ飲めるといいのに。ア、一人で飲んだら甚く醉つた。」ト單衣の袖を腕まくりして、楊枝を使ひながら、惣「お初ばう、もつと此方へ寄んな、お前おつかァの留守に今日何處へ行つた。大方色男の顏を見に行つたらうの。」ト星を指されてはつとばかり、突胸をかくして笑ひ顏、初「ナヤ戲言ばつかり、私やァそんな者はありませんよ。」惣「イヨお隱しなさるな、存じてをりますッ。色の生つ白い、薄のろけた

大工の徳兵衛とおつくり合つて、死なば死なうと約束したまで、とつくに俺は知つてゐるぜ」ト言はれてもまだ白を切り、「ヲヤお前さんは好い加減な噂を。わたくしが其の徳さんとやらと、色だのなんのといはれたのは、それはいつか中の事でございますが、みんな人の悪口で、覚えもない噂だものヲ」「覚えのねえ噂ならば、おつかアが承知の上だのに、何故おれのいふことを聞かねえのだ。實のおつかアをだまくらかして、惚れた男にのろけても、先おつかアもそれ程に思はねえせ」ト言はれ「三ツ先ちやアそれ程に思はないから、何の惚れてのろけませう。何すきなお前様がおはす有るまいし」「なんで俺が物すきだ」ア「それだつても私の様なつまらないものをつらまへて、そんな事をおつしやるから」「言ヤアまこんなにぢゞいになつても、まことに色は思案の外だヨ。二股野郎のいふ口調だが、お前故ならばほんたうに、命の捨賣もする氣だと、前は徳兵衛と譯がなければ、おれがいふ事をきくもんだ」「さうすれば死なねばならぬか、おつかアまで浮名に立たせ、ようございます、うんといひませう」「誰が手をのばして引寄せようとする、その手を拂ひ、「ヲヤ止しなさい、わたくしや厭でございますから」「厭味な事にきつい嫌ひ、男は立物でございますよ」「そのお立物も女しい台詞だ。厭味な事を言つても、惚れた男にやア執拗からう、それが嘘ならおめかの様にこんな物でもしやつしめた」ト懐中から出す文の反故、「ちよつとお見せな」いふ、ト差出す手先をつかんで、と言つていさうはさせ

ん、先刻遠くから御覧じろ。ソレお初殿德印より、中の文句が曖昧だの、遠ざかつて逢はねえのは嫌になつたか飽きたのかと、恨みな事を書いた文、德兵衛の手に違へねえぜ。」初「ほんに其の手は德さんの書いたのに違ひはありませんが、いゝやお見せなさいといふのに。」德「それやこそ男は嫌へだの、斷物だのと云つたのでも、この妻王樹で化を見出した、いゝや恐ろしい妲妃だの、色でねえとは言はせねえ、一日こうどうも隱されませんが、どうして德さん、其の文が、德「俺が手へ這入つた所謂因縁、ちよつと話して聞かせうか。いつだつけかお前の留守に、おかつアと俺と座敷へで酒を飲んでゐた處へ、門の丁稚が持つて來て、お初さんへと出す文を、おつかアは俺が聞いたと思つて、周章て一寸隱すを無理に取つて見た上で、俺が着圖をして、おつかアに書かせた返事の切れ文、よつぽど巧く僞せたらう。その僞筆を一杯くつて德兵衛めは大癇癪、業腹がつて面當に、此間かゝアを持たをつたも、みんなこつちで仕組んだ段取。それといふのもお初ばう、お前に色があるのを承知で惚れてもうんと言はねえから、一番故人南北の筆を借りて書いた狂言。こんなに憂身をやつすのも、可愛いお前故だと思やア、のうお初ばう、まんざら憎くもあるめえの。ト しなだれかゝるをつき退けて、初「もう／＼厭でございます、なんぼしがない身の上でも、金で自由になりません。お内儀さんをお貰ひでも、厭になつて捨てられても、心意氣の好いた德さんに、惚れて帶紐ときましたから、尼になつて暮すと

も、外の男は見るもいや、面の憎い女と思つて、けがにも可愛がつて下さいますな」トいひつゝ連合の
つやもなく、横に俯く淚顏、常にも增して可愛らしく、これはけしからん愛嬌顏しだ、それなやア徳
兵衛が、嗔アを持つても、やつぱり心中立てするが、そいつは餘り野暮つてエぜ、そんなむかし氣
質をいはずと、意氣な挨拶をしてくんねえな、なぜこんなに可愛からう、これたところが下品だ」ト
べつたりすり寄り、手を掛けるを、おやア、もう執拗いまアしたすい」ト補を拂へば其の途端に、惡寒
の火を打消して、座敷は忽ち眞闇、「こいつは粹び、すッ消えたと」[illegible]眼だよ、氣障だね
え」ト飛びのいて階子をば[illegible]　　折から夜商人の聲「茹卵や卵[illegible]、枝豆や茹豆[illegible]」

教外俗文娘消息二編下之卷 終

盛衰榮枯娘太平記操早引

何がしと呼ばるゝ、[illegible]先生、[illegible]して、[illegible]の孔子の聲色を遣ひ、[illegible]に[illegible]構へて[illegible]らしく、四角な文字の故事來歴、肽を敲いて辯論しても、[illegible]百、都合一貫三百の、[illegible]して唐人の、[illegible]心地するとは、能く解し難き故なるべし。却つて[illegible]太夫[illegible]には、[illegible]ては、[illegible]に[illegible]等しとは、作者も些とは上戸口、我が田へ引ける水[illegible]の[illegible]、[illegible]無理なる地口のせつな屁、漢土[illegible]此の[illegible]の、[illegible]ることの如し。[illegible]思ふ、[illegible]ばかりの盲蛇、物に[illegible]

あられても、知らぬで通すが作者の食癖、食つたり飲んだり、酒足る群集の其の中では、何時でも恥をカキクケコ、五音も揃はぬ無體の杜撰、人の誹りも絲瓜の皮、面の皮より猶厚き、御贔屓連の大評判、益々願ひ奉るとは、矢張り慾の皮羽織、厚かましくも序するといふ。

隅田川翫月庵の窓下に筆を採つて

三文舎主人戯題

盛衰
榮枯 娘太平記操早引 初編巻之上

江戸 曲山人 戯作

第一回

吾妻なる八百八町八百萬、商物賣ぐ問屋町、八百里を商先に、朝市ははや商し果てゝ、晝市は夜の賑ひ、掃き取る折から朝湯より、歸る村は息子の幾兵衛、粹の浴衣に素袷の字はげてる〱褄お帯、日和下駄さへおとなしき、優氣な姿に洒落た髷は、必ず心を惹まするなるべし、朝市の賑ひは當面し、立若旦那さん、今朝つた文字な御髪じまいしたネ、十七八の、色白の顔をして、見たかへ、たた見たい、おやゝ向うの新道の稽古所の娘だ、たしかお糸とか云つたつけ、天神様なら、嬉しく御じで御座いますネ、何と若旦那さん、あの位な器量の娘は、二人とあるまいと存じますが、其方なんぞは、な吹ゝな頭痛じやお買ひなすつて、お嬢さまも御前なましようが、外にもめんなか御座いましょうかネっ一まっすか、手前は、大勢の子を育てるなか、時々齒藥でも貰ふと見えるのたっ」「まへ、エ、私が

綺麗な若樂ぶりだから、近付でもなくつても、何かァ買つて呉れますのさ。」隼「八ヽ、悪くしやれやアがる。ほんに此の頃、彼方此方で專ら評判する程あつて、美しい事はどうも餘程凄いの。其の癖、何時でも化粧なしの素顏だけ憎いよ、今も湯屋で見たが、其の膚なんぞの嬋妍な事といふものは、皆湯に居た者が、噂とりどりで、誠に可笑しかツたツけ。」芋「へヱ、そんなら、貴方ァあの裸體の處を御覽じましたか。それぢやァどうも堪りませんだらう。」隼「莫迦ァ云ふな。堪つても堪らなくつても如何なるものか、それに醋く淫蕩だといふから、初まらねえの。」芋「そりやァ、何故で御座います。淫婦だけ奇妙おやァ御座いませんか、堅い娘なら出來にくいが、下地は好きなり御意はよし、それこそ金魚鉢の中の鮒を捕めへる樣なもので、何の造作ァ御座いますまい。それに今、此の前を通りたが、ら、斷う言ひましたよ、今湯に居なすつた息子さんの内は此處ださうだの。ヤレ意氣な風だの、何の彼のと、一所に連れだつて行つた、十二の娘と話しながら參りましたから。」隼「ナニ、本當にさう云つたか。マヽ譃を吐く奴だ。どうしてァノ娘が、そんな事を言ふものか。そりやァ手前が出放題だらう。コレ主人を僞ると罰が當るぞ。」芋「ナヽノヽ、譃ぢやァ御座いません。どうして、私が譃を吐きませう。そんなら譃か本當か、あの娘の處へ行つて聞いて來て上げませう。」隼「エ、篦棒め。そんな事を聞きに行く白痴があるものか。コレ餘りべらべら饒舌つて、お千代にそんな事を云ふぢやァ

みえぞ□□上ずッ、ほんにさうだッけ。こんな事がお千代さんに知れたら、それこそ大変□□すッと

ことんだ。ほんに飯の口をきいて居て、ご三殿に頼まれた事を、尋様と忘れて居た。ドレ鍛冶屋へ行

つて、頭痛の湯でも貰つて来ませうか。一寸帳に書いて行く。与兵衛は、見送りながら内へ這入れば、跡のお千代

は、奥より出て来る優姿、愛敬付きし笑顔の靨、「ヲヤ、お帰りなさいましたか、唯お暑う御座の

ましたらう。わのお変様か、貴方のお帰りをお待ちなすつて居ましたといいますよ。一寸貴方、□□様か又が

観音様へでも行くのだらう。それにお千代、俺は直にお前を貰ふのだから、所帯をして置いてくれたい□

よ「ハイ、お隣家に頼んで置きましたよ。」□□□□□□、お前に早く別れたいから、

世帯持ちて遣かよく行くのに、世話をやかせ者が出来ると、きつと世帯にあきるのだよ□□□、貴方で御

座いますよ、そんな事はつまり、それだから、□□何で御座いませうね、ひよつとして何所でも出来ま

したら、私の様な者は、一層早く身が置けませう□□口まであよ」「貴方お嬉しさう。それたなら、今の内に

隠居して、思ふさま花を見るがいい、□□それでも、私の様な者は、何ら他所でも、旧の□□が

致しませんから、旧でも寵る方が好んで御座いませう、、、」「へエ、乙なお洒落の御意だ

進へねえの)真中で、もう一寸と端を行くと、誰へでも酷いるだらうエー、無法口まじりに 忽ち入れば、お千代は振向の

奴へ行くに入の道ひで出て来る主人半六、待下を差覗き、□□□□お千代、俺下前刷の中、一寸

觀音樣へ參つて來るから、後を能う氣を付けてくりやれ。今日はそれに四萬六千日だから、後には嘸人が出るであらう。大方繁兵衛も、夕方から參詣するだらうから、おぬしも一緒に行つたがよい。そして燈籠でも見て來やれ。」ト優しき舅の粹な言葉に、お千代は嬉しさ限りなく、ちよ「ハイ、それは有り難う御座りますが、若旦那樣が、お嫌だと仰しやるで御座いませう。」生「何の〳〵、俺が嫁で賞めるぢやないが、器量と云ひ素直といひ、お主の樣な者を連れて步いて見やれ、それは〳〵、見る者が賞めたつて、羨ましがる位ぢやわ。アハヽヽヽ。どりや、そんなら行て來よう。」ト嫁を勞はる慈悲心、信心參りぞ頼もしき。お千代は後を見送りつゝ、奧の一間へ入りにける。藝が身を助ける上に天性の、美貌で人を誑かし、今妲妃と渾名せられて、三絃の指南をもて世渡りとし、お玉と呼ばるゝ美人あり、年は二八の花の蕾、綻び懸る風情ありて、見やる目元に愛を含めば、達磨も坐禪の膝を崩し、涎を流して踊り狂はん。唇元の靨には、如何な鬼でも閻王でも、色目使ひて禪の破るゝほどに見惚れなん。眼元で殺し口元で、ころりと人を誑すとは、これ此の娘を云ふなるべし。お玉に一人の母親あり。年六十に近くして名を捨鉢のお熊と呼ばれ、其の性いと慾深く、又貪りて飽く事を知らず。爲になる人には媚び諂ふ事、乞食が物を乞ふ如く、人中善惡の差別なく、甚だ多辯の老婆なり。されば、お玉は三絃を教へるにも、娘子供の面倒なるを嫌ひ、息子店者の融通よき、屋敷衆の惚けるを欺し、傳法肌の壯夫が、切れはなれ好きを引つ込む。人に自惚なき者はなければ、

薄く三味線の音の手に、程よく口先に調子を合はすさへ、殊に惜みにきと耳に聞き留めて、聴者は其聲に誘
け語、日夜を別たず哀のに来る。霖雨の雨の夜の更る事は、如何で昨夜も成ぬ可き。あまりにこれを常
の事として、如何程日途するゝと雖も、愚情を費って、遂にこの世の金銭に等しく、金を費する病情は
斯の妻々の根性なるべし。かかる人に生まれしものから、己と隠する心ありて、如何有風流し男の
りとも、眼下に見下して、我を蓄して更ふ事なく、一生といふ物をもって、明に慕を隔れしかと
よ、未だ夫と定むるものなく、己が心に思ふ稀なる、稀れし世に逢はざりしが、世にも有る男子はな
きものぞと、人にも語り心の中にも、深くこれを念へ居たるが、彼の人の性質の繁り實面を、過ぎし頃よ
り見初めて、見る度ゝに心を傾けし、世を捨てて、心のたけを心にて遂ぐるとしけるが、繋気
衛も亦情の道は能く明らめて居らねど、むかしの若気なる性質なれば、此気を傍に無く、既に
五千代と共には長く側から下絵まして、偉なれば、夜は一途に思ひとも、もして不圧のたよりをもち
お互かに心を遣して、遂のし如く情き、又ちとて、其の間にて奔はせし物と、お国に終りた
まで、それなく情なき人と、思ひきれしとなければ、思ひも定め忘れむとすれども、俺に続かるな
れ、日をに心を消しけりの、朝はといふ事に聞き、誰なきを心がかんとあまりは其の道に出でゝ、
今は我と彼の体に離れたる、我この手の上に、心のたけをいとどしく、あの気がけかしんたゞ、今日は殺者
に面様と共に、その元に悩みを持ち、物の上で保つなり。

樣の四萬六千日だッけね。」ト言ふに、お玉が母親は勝手元に食ひ仕舞ひし膳椀を洗ひながら、母「お、ほんに左樣だつたのう。七月の十日、さうともく。暑い事は暑いけれど、天氣はよし、艀船も人も出るだらうよ。」玉「左樣ではねえ。俺も船で行き度いもんだ。歩いて行くのおやァ氣がないけれどノゥおつかァ。」母「左樣よ。此の暑さで歩いて行つちやァ、眼ッから面白かァねえ。あのお店の京さんなんぞか、行きさうなもんだノゥ。」玉「いやノゝ、あの人となら眞平だ。店者でも、あんな厭な人といふ者ァありやァしないよ。オヤ誰か表の格子から覗いて居るよ。誰だえ覗くのは、八さんか。オヤ八さんでもないの。オヽ、傳さんだ。コウ覗きやァ四文だよ。此所は女湯ぢやァないよ傳さん。」傳「左樣か俺ァ湯屋だと思つた。とんだ門違へだッけ。アハヽヽヽヽ。をばさん、今日は滅法暑いねえ。」母「左樣さ。どうも最う堪らねえな、暑くつて。マア立つて居ずと、上つて話しなナ。」玉「今に傳さん、辻番の親仁が通れと云ふよ。」傳「違へねえ。能く云ふ奴だの。」ト表の格子を開けて入るは、此所ら邊の廻りの髮結、どんなことでも鵜呑の傳吉、此の土地に久しく居ると見え、其の言葉甚だ横柄なり。勿論三味線の弟子にはあらず、唯毎日入り來りて、無駄口ばかり話すと見えたり。玉「お前今日は閑か。四萬六千日だのに忙がしさうなものだ。」傳「何の、朝ッから立てつけてやッつけたもの。晝中にやァ些と休まねえぢやァ續かねえよ、がつかりして。」玉「さうか。朝ッから續けてやつたら、此の暑さぢやァがつかり

する筈さのみ。大きな腰がふら〳〵すんだらう、餘りつゝこやるのは毒だとよ。ホヽヽヽ」丹「ハ
ハヽヽこいつァ可笑しくつて善い。朝からやつ付けたの、腰がふら〳〵するのと云つたから、密で聞
いたら仕事たァ思はねえで妙をかしからうよ。彼の事だと思つてノウ小梅さん。ホヽヽヽヽ、ほ
んにさうさの」戯作者といふものは、ちよつと云ふ事も下からの様で、をかしくつてならね
えよ。ホヽヽヽヽ、ヽ傳さん、お前此間頼んだ鋏刀は、出来ねえかの。出たら持つて来てくんなせへ」
傳「ヲヽさうだつけ、昨日の忘れたよ。ゆうだつに頼れるのを斯けて置いた。直と揃つて来ませう」丹「何時で
もこんな事ばつかり云つて、今度忘れると聞かないよ」丹「ヲイ止ねた。もう忘れやァしねえ。コウお
玉さん、お前どうぞしたか、大分顔の色が悪いぜ。大方小腹が空きやァしねえか」玉「ヲヤさうかえ。けふは此
の頃は、鬱と苦勞な事がある故か、何だか塞いでならないよ。それだから御飯も禄に食べられな
いわな」丹「ヲヤ、ふさぎ、ノイ〳〵。何か見て喰たいか、それでも五六杯、お飯ァ食べるだらう」玉「澤
山だ。よしておくれ、信州ぢやァあるまいし。コウ傳さん、お前の心は私やァそつくり知つて居るか
ら云ふがの、コウ、何と金づくでも行かねえ事は、何うしたら好からう」傳「ナニ、そんな事
屈か知らねえが今時の浮世界に、金づくで出来ねえといふ事があるものかな。ノウ小花さん」花「ほ
んに左様さ。この子が又何を云ふか、詰らねえ事ばつかり。地獄の沙汰も金次第さの」一作「なにお

つかァは譯も知らないで、そんな事ぢやァないよ。」母「何の事か發張解らねえ。ハ、、、、。ほんに晩の仕掛をするのだが米屋へ行つて來るのを薩張り忘れた。俺ァ鳥渡行つて來るから、氣をつけて呉んな。傳さん、お前も話しておいで。」ト勝手を片付け仕舞ひ、板の間を雑巾で拭く。玉「そんならおつかァ、お前その序に、アノ三味線が出來たか聞いて來てお呉れな。」母「ナ、さうだッけのう、アノ張替ももう出來たらう。久しい事だのう。誠に彼の三絃屋は狡辨いよ。外よりやァ上手だからやるものの、何時張替にやつても、つひしか早く、拵えてくれた例はねえ。催促に行く度に、やれ日和が悪いの辷つたの轉んだのと、もうもう、埒があかねえッちやァねえ。その癖、お直段は高直だ。」玉「いいやね、其の代り外で張らせたよりは音〆もよし、皮の離れねえのか奇妙だよ。」母「なんの、お前は内にばつかり居るからいいが、俺ァ根ッから宜かァねえ。彼處の前を通る度毎に、催促するのも恰好が悪いから、三度に一度は廻り道をして、彼處の前を通らねえ様にするわな。莫迦々々しい事た。錢ヨヲ出して足ヨヲ擂子木にしてお蔭で駒下駄の歯が餘程減つたやつよ。アハ、、、。どりや、其様なら行つて來よう。」ト流し下駄を足に突つ掛け、勝手口から表へ出る。傳「コウお玉さん、あゝして見ると、母御も餘程口まめだのう。」玉「さうよ。それだから、何時でも、つい言ひ合つてならねえよ。それは左様と今云つたこととの。」傳「ナット待ちな。大概お前の胸の中は、聞かずとも承知の介だ。大方八百半の息子さんの事だらう。」ト云はれてお玉は胸にぎツくり、心にそれと合點きて、

且お前よく知つておいでだのう。何處で誰でもあつたかよ」「ハヽ、そこが鶴吉の傳吉だアな。どんな事でも御存じねえと云ふこたア滅多あんめえ。――斯うだらう、手短にいやア、惚れたんだらう。」「マア、マアそんなものさ。」「ハヽ、こんな事をいふと、耶らしいやうだがネ、今まで思やア、惚れたの好いたのと思つた事は幾人あつたか、此間から幾何いふ事だか、マア此の半さんと云ふ紫兵衛さんとかを見る度毎に、どうもかうも口で言はれない、窮屈な氣になつて、命も何にも要らなくなつて、一遍でもいいから、心の丈を打明けて言ひ度いと思ひ込んでも、まうか心易いこともない人に、とんだ浮かれしくつてもだはれもせず。もう、何でも縁あつて此の頃だらア、幾さんの事で顔に出して言はせ詮方のない陽氣しいから、何でも、私やア夜詣をしいつたが、先達とれでもしやアしまいかと思ふよ。」「アヽ、強氣に惚れもたが込んだネ。ヨツ、連成寺の清姫を眼の當るこ、大蛇に成つてやアいるねえぞ。」「ヨウ、シヤ、彌歳おやアといふだれだア、お前の心の底を聞いたに、是非と取持つて貰はうと思つて居ても、お前の来る時は何時でも他の者が来て居るから、面ン倒くつて云ひ出さなんだが、ト云つて此の事ばつかりは、何程可愛い顔でも明ゝ云はれぬ。一人氣で惚るんで居たけれこの中で私が一生のお願ひだから、どうぞ世話をしてもと言を拵つて、此の戀を叶へておくれでないか。その代りにやア、骨折賃とお禮がいくらになるのだ、どうか、否かはないのね。」ネエ、どうだネ

嬢さん御機嫌次第でどうか工夫が無えでもねえけれど、此間文も遣つたぢやァねえか。」玉「さうさ、繁さんの所のお三どんに、漸う心易くなつて、鼻薬をやつて、文は届けて貰つたけれど、封も切らずに返されたが、餘り情知らずぢやァないか。其の又情知らずの男に、矢張り惚れて思ひ切られないといふのは、餘程野暮な事だがね。これがほんの因果とやらだらう。」「そんな事をいふと自慢の樣だが、好々の人さんに袖褄を引かれ、こんなお多福だけれど贔屓にされて、マア女の一人前だもの、あつかましく附文するのも、よく〳〵の事でなくツちやァ出来まいぢやァないか。其の文を見もしないで、没義道に突き戻されたを、それなりに手を空しく引込んぢやァ、人に知られた時外聞が悪いから、そこでお前を頼むのさ。かう打明けて話すから、是非ともお前の働きで、どうか法を書いて、取持つてお呉れ。私が一生のお頼みだから。ヨ、傳さん、今まで人に手を下げた事はない私だけれど、此の事ばつかりは此の通り拜むから、よう傳さん。」ト兩手を合ましてをがむにぞ、傳吉頭を掻き〳〵。傳「成程、外の者ぢやァなし、それ程思ひ込んで頼みなはるから、どうか取持つてえもんだけれど。ハテ、ちつと困つたもんだ。といふのは外ぢやァねえがの、ソレお前の知つてる通り、繁さんも今ぢやァ獨身ぢやァなし、お千代さんといふ嫁があるだけ、どうも鹽梅しきが悪いぢやァねえか。」玉「サア、そこだわね、お内儀様のあるのを知りつゝ惚れても、何もそのお千代様を追ひ出して、私が這入らうといふ氣ぢやァなし。思ひ込んだ

「私の病、縦令一度でも二度でも、[illegible]いにひつたりと心と心を明し合ひ、目でいはれぬおもしろい夢を結んだ其の後は、[illegible]に成りと[illegible]ふ心だわね。何も彼も根こそぎ引付いて、添ひ遂げようといふ気があつて[illegible]、こうで主のある者に仕掛ける縁は思ふ様には行かぬは承知、胸の痞へと上気をば、引下げて[illegible]、兇悪な事にやすいかねる事、何れ色恋といふものは、気儘にしねえぢや、出来ねえもんだつて、[illegible]にいかない様なら、[illegible]」[illegible]は幾程もあるけれど、短兵急にやらうと云つちやア、些とむづかしいやう。それに、アノ娘さんも、随分道楽をしたものだが、[illegible]ゆふがた[illegible]、縁さんとお千代さんと、観音様へ行くと云つて[illegible]支度をして[illegible]か[illegible]本に[illegible]に育てまいか、一所に[illegible]、何うか添うか、気やうがあるから。そして、別に[illegible]かなア。[illegible]外にやア[illegible]だッけ。フウト、斯うだからと、お千代さんが一度に

から、彼處の旦那も行くめえしと、魚吉ら山へ行つたから行けねえと、ヽヽ、あるゝヽヽ、奇々妙々、妙智力といふ事がある。」玉「すヤノヽ、そりやァまあ、どんな事だえ。妙智力とは、はやく云つてお聞かせ。」傳「ソレ、外の事でもねえが、お前も知つてるアノ猪闘の豆八の」玉「アヽ、アノ色の黒い鴈喰の豆八さんかえ。」傳「左様さく。鴈喰の豆八が、一所に行くと云ふ事だから、彼奴を頼んだらどうだらう。アノ男も、隨分格別に慾張つて居るから、金次第で働くだらうヨ。」玉「ヲヤオヤ、左様かえ。そんなら豆八さんを味方につけて、談じつけて見ようかねえ。」傳「それが好いノヽ。そんなら、一寸馳けて行つて呼んで來よう。」玉「それおやァ、なほ奇妙だねえ。そんなら御苦勞だがら。」傳「それだが、あの何だらうの、母御にやァ隱密だらう。」玉「さうさ。出來た後なら構はないが、マァ祕密と隱して置かうよ。」傳「フゝ、そんなら行つて來よう。」と、鬢盥を片隅へ片付けて、一目散に馳けて行く。

盛衰榮枯娘太平記操早引初編巻之上　終

盛衰榮枯 娘太平記操早引 初編卷之中

第二回

かくてお玉は、傳吉に件の由を頼みし、後にそは〳〵と、はしより件と思案をしつゝ、時の間程なく歸り來る鶴作の傳吉、斯う〳〵とお玉さん、件の郎が事と違つて來たぜ、役者に少々具合が出來て、ニ十一ト〳〵、どうしたのだえ、郎八さんが、どうとしたのか、ニ十ヤアさ、郎八さやアねえお千代さんかの、厚化にでも申つたそうで、無い道がないとてさ、どうかお龍も往かになるような鹽梅式だッてことサ〳〵、それは郎いねえ、それだやア、郎太郎に鎌倉さア、一番頭が、何して太郎兵衛でもねえ、古に一つ、狗肉手無といふ一郎手があるので、郎の郎頭が一作の郎を食ふつて、町内中惣をたれたつても、孔明が五合の酒をかッくらつて、十八町小便をたれようが、どうしてどうして、郎へも云い付く事がやアねえ、トテア〳〵、なんの事たえ、しつかりせうたの、そうもんだのと、何ぼ七月で、どんな品も、お定ひて、雪ン中ぢゃ、そうさやねえ、中兵に孔明だア、唐の軍師よ、軍師だとか、郎られねえの、そうよ、滅法郎な智者のあるんだが、郎の郎に少々吐ふのだといひ

ふ事よ」玉「オヤ〳〵、左様か。お前大層物識だね。そして何かえ、その張良様の謀計にはどんな事だえ」伝「リア爰だての、この謀計をやらかす時ア、大づけぢやアねえか、一點張で外れッこのねえ大丈夫だが、なか〳〵逆臣にやア出来ねえネ」玉「何故え、マア何でも能いから、早く鳥渡云つてお聞かせな。焦れッたくッてならないよ」伝「どうしてノ〳〵、第一、丸印べくだから手重いよ」玉「其りやアお前、先刻も云つた通り、爰の事ならどうでも都合するから、マア譯を早く聞かしておくれよ」伝「サア、その妙計といふのはノ、貧乏伊勢屋の呑太郎のヲ、アノ人とお前は、餘り交際つた事はあるめえが、そりやアごく酒好で面白え男よ。繁さんが遊びに行きなはる時ア、何日でも末社で行くから、豆八にお前の事を吹ッ込んで、金をマア握らせるだノ。よしか、さうして味方に引き入れて、アノ呑太郎を豆八に誘き出させて、委細構はず、二人を繁さん所へ押し掛けさせるさ。よしか、さうして豆八に思ふ様説き付けさせて、否でも應でも口車で、繁さんを船へそびくのだ。何でもつり出しせえすりやアしめたもんだ。そこで爰が肝心だ。ちよいと耳を出しな」ト、摺り寄つて耳に口 伝「それ、かう〳〵するわの、よしか。それ斯うするから斯ういふと、ソレ最う袋子の兎だらう〳〵。よしか、是れぢやアよもや外れッ子はありやアしめえ」ト、暫時べちや〳〵耳語けば、お玉は聞いて莞爾喜び 玉「ほんに、夫れぢやア間違ひなしだよ。左様さへ行けば、誠にもう〳〵本望だよ。そんならお前、豆八さんの處へ

行つて、うまく歌ひ込んでおくれな、私の口から頼んでも可笑しいから。それにしても、此市を先へ遣らなくてもやれいぢやないか、ても何様やつたら宜からうよ、兎もて此と言り遣るがいゝわなう。まく行つたら文様で懸をするといふかね、上方様さねえ、それらはて言うしようと、繁昌の下の押入の、まへに行り錠をあけ、箪笥の抽出より帯を出し、脇にくるノ＼と巻いて、上まてそんなら、是が宜うまくいつてあくれ、まあ、歩いてはあるまいかねえ、勝吉が手に渡せば、拾兼り離して、国「まアこ、歩いたら宜か、[illegible]にて、お前好い様にして、早く首尾を聞かせておくれよ国「そんなら、こいつを行つて[illegible]、早く[illegible]して[illegible]。[illegible]小事もて居るから、とうとうと、勝手に行い[illegible]。[illegible]ぞえます、百も合点、[illegible]、商事商事に[illegible]にあるから、[illegible]にしてくんなせい、紙包を[illegible]に押て行く後姿見送つて、おつとまゝの吐息と、よろに膝をたて八つの鐘、ホッと一息（

第 三 回

代官半手掛手代の[illegible]の[illegible]八、[illegible]と[illegible]も[illegible]にも[illegible]まする。[illegible]にお[illegible]病で、色の白い綺麗な[illegible]で、[illegible]八さんと[illegible]しやうとお方は[illegible]座[illegible]ませんか[illegible]に、[illegible]は[illegible]に[illegible]

じッと居たりしが、裏返し見て、ふッと噴飯し、「キヤ／＼、お名は存じて居りますが、京八さんと仰しやるお方は、森蔵の様な顔ッ付きで、色の黒いお方で御座りますよ」「ホヽヽヽ」兵「おきやアがれ、澤山だ。コウお三どん、お前此處の家へ来た時分は、旦那様ア飯食らはッせえ。膳拵へしてえかア。ア、ニまだ腹が空らねえか。すんだら、あんでも太え料理をこかッせえ。おつき腹が空るもんだ」「ハ、何の彼のと遣らかしたッけが、此の頃おやア、もう水道の水が染み込んだものだから、ハイ／＼、言葉詞は斷物にしたのよ」「オヤ、止しておくんなさい。お飯焚こそいたせ、何時そんなへえ／＼、諸事なア。爰に京八さんは口が悪いよ」兵「左様さ、男は誠に美男だが、惜しい事に些と口が悪いが、十分にやアいかねえものさの。コウ無駄口は無駄口。繁さんはお宿にか」三「ハイ、おいでなさいますが、お千代さんが、お氣分がお悪いから」兵「さうだといふ。夫れで態々出かけて来た。何にしても、お目にかゝらう。上つても可からうかの」三「ハイ、旦那様はお内で御座いますから、早くお上んなさいまし。若旦那様は、アノお二階で御座いますよ」兵「オツト合點。オイ／＼吞太さん、サアサア、お出でなせえ」ト呼ばれて出で来る吞太郎、吞「ハイ御免なせえ。お二階へ参るのか」兵「サア御一緒にお出でなせえ」ト、二階の梯子をトン／＼／＼。繁兵衛は、お千代が暑さに中りて苦しみし故、介抱しながら、本を讀みて居たりしが、それを見るより膝を直して、繁「これはお揃ひで。サア／＼、此方へすッと、

此方が風が入ります。其處は日が近くつて暑い、呑太郎さん、此の所へお出下なさい。五黙ならば御免つこト、おいら〳〵坐を占め、直にお定まりの挨拶済みて、其の時に、もし、奥方が御機嫌と承りましたが、さぞ御心配、これ迄御苦労と聞き及んで、お見舞かた〴〵わざ〳〵お出で、少しはお快いかで御座いますか一寸それは近頃御深切に、ツて大きに快いはうでね、それこそもしたる事でもありませんが、矢張り自分に帰てなれたので、お千代、皆がお陰で、ちつと起きて居ても宜いので、今はれてお千代は若い者、よくお世話で[illegible]、拵へ折節お[illegible]で私は安心致しましたが、是に追て一寸宜しう御座いましたよ。イエ、在家で御座いましたが、それはまれな事、ニえ、[illegible]とても、それから折角入り訳うして、新しいの[illegible]も、口ではお喜びに成りません、時に又、それから何うお存じますか、大概は御達者に、貴方のお心ではない、見せる通り御存じか、私が尋ねますと、貴方に言われる(?)、我々は[illegible]ない、私にならうと思ふ御都合で、お話で云ふ事だから、貴君は下げ、お前さんのお身代、お千代も云ふ、観音様を下さいましたが、貴方が貴方の為にもお千代は少し寝ないと云ふ事は、ですぞ宜いから、それに何ふか気に解しました、貴方の観音様でも、あなたの御信心で、御参りなされて

から、何か障りな事でも出來て、一度でも參り損ると、氣に懸りますゝ實に違へ御座いませんのさ、私も今日は是非參る氣で、ぶら／＼出かけますと、この豆八さんに、ふつと逢ひましたら、繁さんのお内儀さんが、斯う／＼だと言ひましたから、取り敢へずお案じ申してまゐりました。どうで私が、是れから參詣致しますから、お前さん方の代參に、よく拜んで來てあげませう。」呑「呑さん、お前一人で參んなさるなら、私が一所に行きやせう。お千代さんの平癒を祈りながら、旦那の代參は私がしよう。直に出掛けようか。」繁「何さん／＼。さう貴公達ばかり勞しちやァ、却つて私が氣が濟まねえこそんなら斯うしやせう。お千代、お前先刻から見ると、餘程宜いから、もう氣遣へもあるめえに依つて、船でそろ／＼出掛けてみなせえ。今日は、丁度風もなし、船もそんなに搖れもしめえ。内に居るよりやァ行く方が好からう。」ちよ「ハイ／＼、有り難う御座います。私も參りたい事は參りたいが、もしひよつと船の中で、先刻の樣にさしこみますと、却つて御苦勞をかけますから、私はマア止しに致しませう。其の代り、貴郎は何卒皆さんと御一緒にお參んなすつて、私の分もお拜みなすつて下さいまし。」繁「それもさうだが、お前をば内へ殘して行つちやァ、矢張りどうも案じられるよ。」ちよ「ナニ、決してお案じなすつて下さいますな。お父樣もおいでなさるしお三も居りますから、氣遣ひは御座いません。それに、大きに心持も快くなりましたから、私の事はお案じなさらずに、御ゆるりと

お参りなさるが宜しう御座ります。」「ヤ、成程、お千代さんの仰しやるのが尤もだ。」「いかさま、鶴中で強くお悪くつてはしやうがなし。」「ママお快い方だから、そんな事はあるまいと存じますが、萬が一あつた時はと、深くお心の付きましたは流石々々。」「遠き慮りなき時は、必ず近き憂へあり。」「イヤシ旦那奥方の御子が宿の通りなり、貴方が相ひけて體を隠して、鸚鵡返しに様子を漏らし、大悪の事のわが夫を、速かに平穏なさしめ給へと、いつも、一念込めて御祈りなされまし。」「まゝ存じん、そんなものおやアりますのえか。」「お道へなし。」「こりやア足下の頑言が通り、是非なく〱はん御参詣なさい。」「お千代さんも、左様すれば御喜びだ。」「いかさま。」「公達の勇に従ひ、それなら今から同伴しようか。」「お千代、これおやアつて来るからよ、按摩でも呼んで揉んで貰ひな。」「そして、何ぞ食べてえ物があるならの、屋敷にでも瓜弁にでも言ひ付けて、取つて貰ふが可いよ。」「ヤ、有り難う。ア、貴方、お召物を三に出させませうか。」「皆、ヤ、俺が出すから可いよ。気色の悪い時はやれこれと、気を遣ひなさんな。」ト、帯りながら着物を着替へ、衣紋を引繕ける。是れを貴が宜しいなら、貴を出陣と致しませう。」ト、大方に御出、それならお千代行つて来るぞ。」「ア、をと繕出して存ぶな。早く帰つて来るから。」「是然しお千代さん、お頼んまうす。」「ト、は宜しう御座ります。左様ならお静かに。」ト、一寸言ひ、出かけうとす。二人は下へ出で、表へ出る。出で

て、料理の萬前へ至り、屋根船に打乘り、色々酒肴を取り入れて、鶯音へと棹しぬ。尤も三味線なしの眞面目な酒落にて、豆八が無駄口は酒に乘じて聲高く、船中大いに興を催し、金醉ひに入るなるべし。豆「旦那、モシ、つかねえ事て御座いますが、此の頃評判の妃后を御覧じましたか。」金「ウゥ、妃后とは、アノ何か、お玉とか云ふ」豆「ウゥ、左樣々々。あの娘は實にモシ天性の美女、玉顏常に粉黛を用ゐず。素顏に愛敬の艶をかけ、眼元の色氣は冷々として、見る者忽ち心を蕩かし、口元の笑は莞爾として、視る人千金に換へんといふ。當世男殺しとは、是れこの婦人を謂ひつ可しさネ。」金「ソヤ、ちげへねえ。稀世の奇女とも云ひてえの。」豆「何故々々、あんな美しい娘を鬼女とは。何處か鬼と見えますね。」金「何さ、鬼の事ぢやァねえ。世に珍らかな婦人だと云ふ事よ。然し、淫蕩家だといふ事だの。」豆「どうして／＼。それはほんの僻事さね。私しも懇意で御座いますが、そこにはちつと譯あり、甘露糖といふ來歴を、ちよッぴり撮んで話說しませう。そも／＼彼の美婦人を、淫婦だの好色だのと評しますが、原來容貌といひ、技藝といひ、貴方が今仰しやる通り、世に珍らかな婦人だから、分限者が座敷へ呼んでも、マァ委細なしに澤山祝儀をやりの、酒酣になつて、彼何うだと口說くどころが、一向不承知。勿論あの位な美婦だから、自分の心に思ふ樣な男がないから、身も任せず、座敷へ出ても、足許を見て、轉んだ事もなけりや、轉ばした事もなしさ。けれども、人は尾に尾

をつけてこゝ源兵衛さん聞かんしたか。アノ町の助兵衛がな、近い頃、えらい評判のお主たら何たらいふ男子やうな婦人にな、えらう惚れくさつてな、金を大分捨てたげな。けれどもな、一向靡かんさかい、まつと／＼金づくで口説かんしたが相談は出来ぬ。たうとう費ひ過したさかい、上方へ附け上せになりくさつたが、あの女は、何でも獣おやあれ。人化かして金取るといふ事ぢや、何の彼のと云ひますが、矢張り彼の子の悪いのぢやないが、ぇテ咄者や屋敷の衆は、嫌く金で自惚けて盡いて、遊詰りもしねえに、自分の好から勝手に金を遣つて置いちや、嫌ればかたの欺されたのと、女郎が賣女を賣ふ様に、初から惑るゝ料簡違へさ。のう杢さん左様ぢやァねえか。」杢「ナァニそりやァ可いが、ちつと盃を傾けよう。」足下は話に實が入ると、何時までもしやべつて居るから、聞いて居ても、口が酸くなる。」男「ほんに左様だつけ。然らば御杯を頂戴なせえ。」ト、一ツ乾して、是れより又々、さいつおさへつ、無駄を云ひ／＼酒宴の間に、何時しか船はあいよ橋の川岸へ着く故、皆々は此處より上りて、觀音へ參詣し、太公望にてちよッぴりしやれ、黄昏近くなるまゝに、いざとて再び船に打乗り、元來し方へ棹す處、この船に少し後れて、同じく一艘の家根船來りしが、艫の方の町人、小舷につかまり、顔差出して此方へ向ひ、男「モシ／＼、その船においでなさるなア、杢さんぢやァ御座いませんかえ。モシ杢ざ四八さんも御一所だね。」ト呼びかけるを、杢「エ、、誰だと思つたら傳公か。」さァ

旦那、髮結の傳が呼んで居ります。」繁「オヽ、ほんにの、傳吉、觀音様か。足下が來るなら、一緒に連れて來りやァ可かつた。」豆「傳印なら、俺も知る人だ。オイ傳吉々々、誰と一緒だ。オヤ美い姉さんが見えるの。其方へ行かうか、傳吉。」傳「オヤ呑さんだね。こいつァ妙だ。皆お近付の顔だ。ちつと此方へお出でなせえ。然し、お前さん方の方にやァ美味え物がありやせう。何なら其方へ行きやせうか。」繁「フウ、些と此方へ來さッし、然しお連れが有つちやァ。」なりて、少し小聲に繁「コウ豆八、連れは誰だい。中が薄ッ暗くつて分らねえ。」豆「どれ〳〵、見届けませう。」ト、無上に首を長くして後の船を差覗き、豆「オヤ、知らねえ女中衆だと思つたら、お玉さんだね。ノウ傳公、さうだらう。モシお玉さん恨みだねえ。素知らねえ顔は情ねえネ。知らねえ者だとばつかり思つた。」玉「オヤ豆八さん、左様おやァないがネ。堪忍しておくんなさい、私が悪かつたから。アノちつと此方へお出でナ。」豆「其方へお出でよい、此方へお出でナだ。モシお玉さん、こゝで逢ふのは優曇華の、花待ち得たるお前のお顔、モシ有り難やまとや、濱村屋、そつち退けのお玉大明神様さま〳〵〳〵、いざ〳〵、此の船へ、御乘り移り候へ。ハヽ引ボン〳〵。イヨ引。」玉「オホヽヽヽ。アノ豆八さん、其方へ參つてもよう御座いますかえ。」豆「いいの位か。そしてお前の方の船は、先へお歸し、サア〳〵、傳公も此方へ來給へ來給へ。」ト、無上に急り立てる。お玉は船頭の虎に向ひ、玉「アノ虎さん、それぢやァお前、どうぞ先

へ歸つておくれ。どうで父親が歸りに寄るから。ナニサ、そんなら私が一寸先へ歸りやすよ。ヨイ
ト、さうしておくれ。大きに御苦勞だつたネ。そんならまいりますよ。媒介の女房に宜しくよ。あばよで傳
さん、お前も此方へお出で。ト 〽簡を此方の船へ乗り移る ヲヤ、怖かつた。誠に足がふるへました。ナノ、何方
も御免なさいましよ。トいふうち、傳吉と長吉の舟は、一緒の漕ぎ、静かに中洲をさして行く。

寄進 榮花 娘太平記操早引初編巻之中 終

盛裏業楷娘太平記操早引　初編巻之下

第四回

扨も繁兵衛は過ぎし頃、お玉の方より文を送られて、其の返事さへせざりしが、諸事如才なき通人なれば、態と素知らぬ顔をして、手に持ちし猪口を濯まして、繁「モシお玉さんとやら、よく觀音様へお參りだネ。今まで折節お見かけ申して、お名も豫て聞いては居たが、一座するのは今日が初めて、こりやア頂くのだが、持ち合はせだから、憚りながら一つ獻げるよ。」トさされてお玉は莞爾笑ひ、玉「オヤ左様で御座いますか。ほんに間違ひまして、未だお近付にもなりませんに、今日は、マア不思議な御縁で。」ト後を残して、玉「豆八様の御引合はせやら、左様なら頂きますよ。」ト嬉しさうに一つ乾して、玉「呑さん、お久しぶりでありますから、上げますよ。」呑「ヤ、これはお珍らしいお方のお杯だから、早速頂戴といふ處だがまう一つお押へさ。」玉「オヤ／＼、もうお苛めなさるかえ。厭だネエ。左様なら豆八さん、ちよつとお合。」呑「サツト奇妙。過刻からお合を待つて居たのの天神様ス。ちよつとお酌を。お次におたのは皆さん御存じ相の山。繁さん呑さん傳吉さん、お笑ひならば笑はんせ。お酒はどんどと飲み次第、お燗

は代り目丁度好し、此でも看板食ひ、お刺身なりとも前の割なりとも、又は大平鉢の物でも、御勝手次第に御用意ますりや。事に最早で、かういふ打ち寛ぎ、飲んでくれまい、酔つぱらいやす。む合だ。さうか來た、これより飲んでもらはう、こいつ[illegible]へ一寸、[illegible]やましい。大きた錢だぞ　鶴の道樂が大蛇の[illegible]寸法だ。それ、それ、寄八さん、[illegible]好いさ。たよこそ、何をしくつて好いと、心勝大りの文句のやうだな。一寸、それが世話といふ。何でもしるまいね寄八さんに、宵大の宮が[illegible]、舟[illegible]、寄平御馴染の[illegible]われわれに當業し[illegible]目をつけて飲ませ[illegible]に[illegible]を[illegible]雲に[illegible]ばれ、心得なで、とゆゑ[illegible]簡單にいへば、これを先[illegible]で取り出して、さらさら、すつぽんと大と來い。[illegible]でも其[illegible]は、宜くない、[illegible]が[illegible]すれ[illegible]だ、[illegible]に取り[illegible]、三日も[illegible]て、[illegible]の[illegible]に聞きとれねえ」ヘイ、當時田を嫁入だね、「なんだい、はあ[illegible]の[illegible]だぞ、[illegible]のと二合けいふも、俗語は何るんだ、[illegible]れた人は[illegible]語[illegible]、[illegible]一[illegible]ねて、熱い燗で下げ[illegible]に燗と兼ね、宿るまでも、一合でも二合でも[illegible]まで、[illegible]れたる、小網町の[illegible]は[illegible]上げた[illegible]、それ、これはいかな、四目までも、職人のすよの人は飲む[illegible]しと、賢人が[illegible]かれ[illegible]、[illegible]ゝて[illegible]一[illegible]体穴の、[illegible]さうさう、[illegible]に、醸造にやす[illegible]れると、[illegible]寒くして[illegible]いれ[illegible]

ハ[illegible]ほんに[illegible]、嫌な空合になつて來た、ごろ〳〵が來なけりやアいゝが。」[illegible]ヤ、左様でねえ。[illegible]で御座いますね。[illegible]光りますよ、彼方の方で[illegible]怖いねえ。」[illegible]それぢやア、お前は雷は嫌ひかえ。」[illegible]「ハイ、誠に嫌ひで御座ります。ごろ〳〵といふと、縮み上りますよ。」豆「大層弱蟲だネ。かう大勢居るから、何も恐れるにやア當らねえ。それに雷公等は、私共の仲間内だ。ハテ何故といつて見なせえ、[illegible]地の[illegible]率頭持だもの[illegible]ハ、、、、[illegible]何の事だ[illegible]ネ、、、[illegible]豆八さん、お前は、誠に大邪魔だね[illegible]雷様の鳴りさうな時に、戯談にも其様な事をいふもんぢやアないよ[illegible]アレ遠くの方でごろ〳〵鳴るよ。」豆「何の構ふ事はねえわナ[illegible]かういふ時は、[illegible]もんだ。傳公、呑さん、サア〳〵騒ぎやせう〳〵。ア、かういふ事なら、猫を一疋持つて來て、何ぞ[illegible]、俗等の心耳を澄ましてやりたかつた。ネエモシ旦那[illegible]今日等は三味線を[illegible]つかせるのはどツとしねえよ。四邊が三絃の寄合だもの、ごつたになつて撥ツから[illegible]ねえ[illegible][illegible]、[illegible]それから[illegible]酒にでもしよう[illegible]モウ青空、如何だらう、一降來るでうか[illegible]左様さね[illegible]何れ降りませうが、未だ急に降りやアしますめえ。」豆「フウ、それぢやア[illegible]明日か、明後日降るのだノ。」[illegible]「ヘン、まさか左様でもありますめえ。」[illegible]「ホイ、そいつは大張兵[illegible]太郎だ。」[illegible]「豆八さん、お前は[illegible]に元氣だね[illegible]私やア何だか氣色が悪くなつて來たよ[illegible]

氣色が。そいつァお仕舞へだ。何ぞに中んなすつたのぢやァねえか。」 玉「どうだかネ。いつそ胸先がしく／＼するよ。アイタ、、、。」 豊「そりやァ困つた物だ。矢張り暑さの所爲で、持病でも發んなすつたのだらう。何にしても悪いのう。」 玉「マアイタ／＼。もう何うせう。段々痛んで來た。未だ内までは間があるかネ。」 豊「どうして未だ／＼。内までは餘程ありやす。」 玉「さうかネ。ア、痛た。ア、どうもかうも堪らない。ア、イタ／＼／＼。」 呑「こりやァ大變だ。マア細帯で、さし込む所を緊りやアるがいい。」 繁「どれ／＼マア薬でも服みなさるがいい。ヲ、何だか暗え筈だい。豆八、蠟燭の心を切んねえ。」ト 素人の業をたづねる 豆「ハイ／＼。」ト承知し、蠟燭が短うなつてかくなつた。」 繁「ヤ吉公、蠟燭の替へる蠟燭は何處にある。」 吉「ナニ蠟燭かえ。其處等にやァ御座えませんかえ。ヲ、それ／＼内へ出して置いて、ツイ忘れて來ました。」 繁「エ、埒もねえ。そいつはたまらねえ。旦那、薬はありましたか。」 豊「待てよ、何時でも入れて置くがの、晝間お千代が氣絶けた時、出したッ切り入れなんだと見えた。ナ、無え／＼。」 玉「エ、情ないものだ。」 豊「誰ぞ持ち合はせはねえかの。」 玉「かう見た處が、誰なも御存知なお方、御所持なさる様なお顔付でもねえ。」 繁「藪醫者ぢやァねえ。困つた物だ。」 玉「アイタ、イタ、、、。」 獨に倒れて、頻りに苦しむ。 繁「ナニ豆八、薬を買ひにやるにも、船中おやァいけねえから、此處等へ船を著けさせようか。」 豊「左様さ。それより外に妙計はなし。」 繁「ナニ、ト、吉公。爰は何處だ

い。雄馬屋川岸の邊か。」吉「エヽ左樣さ。丁度雄馬屋川岸でござえます。着けませうか。」箕「アヽ着けて下ッし。コヽ何が善からう。矢張り練り熊がよからうの。誰が行つて來てくれる。」吉「私が行きやせう。序に直此の近所に、懇意な上手な醫者があるから、何なら連れて來やせうか。」箕「そりやお頼だ。醫者が來りやア、もうもねえ。そんなら何卒御苦勞ながら、コヽ傳公、此處も一所に行くが可からう此上も早いがいい。」傳「エヽ、さうしやせう。」ト、尻引ッからげて、身繕ふ中、吉「アイ、當りやすまい。」ト、待をさして、瓶を着けるに、二人は飛ぶが如くに走り行く。おはまは、苦しむ故、箕兵衞は頃八と、代る〴〵背中を撫で、膝をさすりて介抱する。箕「アヽ苦しい〳〵。ア、イタヽヽ。さアヽアイ、どうも堪らないよアヽ頃八さん、かうせつなくつては、どうも家へ行かれさうもないからネ、アヽイタヽヽ、コレアノ鳩尾に癪積があるからネ、其處まで行きたいからネ、アノ、アヽモつないヽ」ト、顏をしかめ、嘆息をつき、玉「どうぞ駕籠を、番頭さんにでも頼んでお貰ひ申したいね。アイタヽヽ。」箕「ハア、そりやアモウ造作もないが、モシ旦那、頼みませうかネ。」箕「左樣さのう。然し駕籠だやア、搖られて惡からうかネ。」吉「ハイ、イエどうで、徐々やつて貰ひますから、何卒お願ひ申します。」箕「よし〳〵。そんなら、コウ吉公、御苦勞ながらちよつと、駕籠を然うだつて來てくれねえ。」吉「エイ、畏まりやした。」然し物日で御座えますから、あればよう御座えますが、無

けりやあ何處ぞで捕めえて來やせう。」ト、舟を繫ぎ棒杭へつなぎ、足早に走り行く。五「どうだね、矢張同じやうかね。」ト「ハイ、どうもいけません。アヽイタヽヽヽ。」豊「また提灯が暗くなつた。どう云ふものだらう。點け替へたか、豆八。」豆「イヽエ、古今に左樣云ひましたら、蠟燭を忘れましたッさ。」箆棒な奴だやァねえか。おや箆棒といへば、今吉公に蠟燭を賴みやァよかつた。エヽ、箆棒な事をしたぞ。こいつァ斯うしちやァ置けねえ。消えると大變だ。それに大分ごあついて來ましたネ。ドレ一寸行つて買つて來ませう。矢張り私が忘れる奴さ。」「さうか。そんなら早く行つて買つて來ねえ。エヽ、又吞つくゝも傳吉も、埒があかねえのゥ。序に其邊等に居るだらうから、早く來いと云つてくんねえ。」「ハイ、ホツト吞み込み承知の介。そんなら一寸行つて來ます。」ト、急いで出で行けども、未だ一人も歸り來らず。お千代は苦しき息をつきながら、「ちやアと胸痛りますよ。アイタヽヽヽ。貴方御免なすつて下さいましよ。つひにない癪で御苦勞かけますねえ、私は病身でしかも御座いませんが、貴方は、折角お樂しみにお出でなすつたのに、とんだ御厄介で、アイタヽヽヽ。誠にお氣の毒さまで御座います。どうぞ憚りさまながら、爰の所を強くおして下さいまし。」豊「あなたの〳〵。此樣な時は心遣ひはしなさんな。ドレ〳〵、此處らか。恐ろしい動悸だネヽ。どうぞ雷が強くならねばいいが、大分光が強くなつて來た。ほんに今日は、癪に緣がある日だと見えて、晝間もお千代の癪で肝を潰し

た奴さ」ソレ〳〵、かうか〳〵ト、力限り抑へるうち、段々強く差込みしと見え、歯を喰ひしばりて、うんとばかり仰氣に反る故、案兵衛は驚き、案「ヤア〳〵、こりやァ大變だ。エ、どいつもく〳〵埒のあかねえ奴等だ。エ、醫者を買つて來るとも、藥を連れて來るともすればいい。こんな文間の悪い時やすありやァしねえ」ト お玉の耳へ口を寄せて 案「コレ〳〵お玉さん、氣を緊り持ちなさい。お玉さァん。エ、情ねえ、お通じなしだ。お玉さァん〳〵。ア、何にしても困つたものだ。誠にどうも仕様がねえ。又豆八まで、何を手間取るか、番太郎で蝋燭は賣りさうなものだに、忌々しい奴等だ。コレお玉さん、氣がつかねえか。お玉さァん」ト、呼べど答へもなかりしに、案兵衛は困り果て、四邊を見廻し、杯に汲ましの水を猪口に掬ひ上げて、案「マア〳〵、藥の代りに、此の水でも飲まして見よう」ト、お玉の口へ入れんとすれども、歯を喰ひしばりて、一向入らず。如何はせんと途方に暮れしが、きつと心に思案して、掬ひし水を我が口に含み、お玉をぐつと抱きあげて、口から口に口移しに入るれば、不思議や、ごつくりと咽を通りし様子ゆゑ、案「お玉さァん、氣をたしかに持ちなさえ。お玉さァん〳〵」ト、幾聲となく呼び立つれば、お玉は忽ち見を見ひらき、案兵衛の顔を見て莞爾笑ひ、玉「案さん、堪忍して下さいましよ。今のはみんな虚で御座いますよ」ト、云はれて案兵衛は吃驚し、案「エ、」ト、後へ身をそらせ、餘りのことに呆れ果て、顔を見つめて居たりしが、案「ツ

ソ、そんなら今のやうに氣を引きつけても、皆樣が傍にゐて、思込む程に、お互にこゝで、且〻
[illegible]なさるは御尤も、お噂もお立ちなさいませうが、私が胸の中を、どうぞ聞いて下さいまし。
こんな事を申しましたら、浮かましい奴だと思召しませうが、恥かしい事ながら、日外より貴方のお
姿、ふつとお見初め申しましてから、明けても暮れても其の事が目につき、夢に見る程忘れかね、包む
に餘る胸の中の切ない事を、二度までも文に書いて上げましたを、マア、お情ない、封も切らず、其の儘
お返しなさいましたは、お嫌ひなさんすのかなれど、御無理とは思ひませぬが、貴方もまだ情愛を御存
じないではあるまいし、儘になるならぬは浮世の習ひ、叶ふとか叶はぬとか、たとへ出來ない御返事
でも、下さいましたら私も、たゞそれで心のあきらめもしませうに、默つて切ない御事で御座いませうか、いはぬは言
ふに増すとやら、御返事さへ下さらぬ故に、こうして貴方を忘れかね、それでは一夜添をに、お目に懸つ
て胸の中を、お知らせ申す便りもと、最前様子を見て居りましたが、其の儘やるべき、貴方に逢ふ
甚には言でも、皆な樣に語りますから、ほんに手紙の文で、せめて御返事のふつと思ひ付、切な
て仰つた首尾の最期、こんな切ないおもひをして、心の丈をお知らせ申すも、何の為でありませうか、私の
器量と思召してござうか、叶に何れも御座いますか、其だけ申す氣はなけれど、譯ない、今の身、卑
しはせぬ不察しなすつて、無理ない御返事下さいまして、如何な恵る日中、御返事は此を頼と思ひ、

くまで思ふ志、一通りにては飜さまじと、欺すに手なしと言葉を和げ、與「成程、私の樣な二才野郎を、實にも惚れてくんなさるは、嬉しくなくつてどうするものか。したが、お前も知つての通り、お千代といふ厄介もあり、生中な事しだしても、兎ても末は遂げもしまいし、お互に苦勞を求めるばかりで、誹られたり笑はれたりしては、恥かしくもありをかしくもなし。尤もお前の志を、中々徒にやァ思はねえ、浮世の義理や何や彼や、儘にならぬが譬への通り、こゝの道理を聞きわけて、いふまでもねえが、縁なき昔と諦めてくんなさらにやァ恨みだよ。コウ合點がいつたか、お玉さん」トいふ顔を熟々打眺め、ほろりとお玉は眼に涙、玉「御尤もで御座ります。貴方の仰しやるお言葉に、少しも無理は御座いません。すつぱりと斷念めました」與「ムゥ、そんなら、今云つた事を聞き分けてか」玉「ハイ、ちつとも未練は殘しません」「おさらばで御座います」と、云ふより早く、川の中へ飛び込まんとする故、狼狽て引留め、與「エヽ、滅相な、どうする氣だ。斷念めたと云ふから安心したら、途方もねえ、マア身を投げようとはどういふ心だ、お玉さん、怪しからねえ事をするものだ」ト、留められて泣き聲震はし、玉「どういふ氣だとはお情ない。心のありたけ恥かしい事を、貴方にお聞かせ申したのに、お千代さんに義理立して、厭と仰しやるのは御無理もなし。貴方の口から仰しやるまいが、戸の立てられぬ人の口、若し、此の事を誰ぞ聞いて、一人いひ二人云ひして、お玉は、はじかれ

たとか、恥を掻いたとか評判されては、どの面曝して人と交際が出来ませう。その生恥を曝すより、死んで苦労を助かる心、お留めなさるは却つてお恨み、未練は微塵も残しません」と、振り放して、又死なんず有様に、繁兵衛は猶々抱き留め、繁「エ、、お前もマア聞譯のねえ。私に未練が残らずば、世間に男はいくらもあり、そんな小さな料簡を止めて、私の意見について呉んな。左様すれば、こんな安ほッてえ野郎よりやア、立派な男を私が探して、末始終お前の為になるやうな「ト いふをも聞かず、おたまは 玉「イエ/\/\、たとへ何様に仰しやつても、外に望みは御座いません。お前さんに嫌はれて、何楽しみが御座りませう。南無阿弥陀仏」ト覚悟を決め、止めてもとまらぬ繭色故、繁兵衛も流石当木にあらねば、斯くまで慕ふ志、不便と思へば襟元から、ぞつと吹き込む恋風に、心もそゞろにときめきて、末始終は兎も角も、かかる美人を此の儘に、捨ておく男のあるべきと、忽ち変る心の中、惚れ初めしが禍ひの、初めとなりしぞ是非もなし。繁「それ程までに思ひ詰めて、惚れ込んで呉れた志、どうして受けずに居られようか。お前の心の済む様に、マア左も右もしようから、必ず短気はしなさんな」玉「エ、、そんならマア聞き届けて、思ひを晴らして下さいますか。アヽ、嬉しいと言はせて置いて、お笑ひなさるお心ぢやア御座いませんかえ」繁「エ、、お前も疑へ深い。こんな実しい私と差向ひの船の中、釈迦でも捨てておかれるものか。今の言葉が真実なら、命にかけても殺しやアしね

「…こ　オヤ、大分よく鳴つて来たぞこ」玉「そんならいよ／＼、今夜から二世も三世もかはらぬ夫婦」葉「エ、それぢやアヽ、どうやらお千代の前へ。」玉「義理がたたぬと仰しやるなら、私は矢張り身を投けて。」葉「エヽ、義理も編瓜もいらねえから、マア落ち着いて互の胸を。」葉「晴らすは貴方のお情許り。」トレ大層光りましたこ」ト、紫兵衛にひつたりひつたり。途端の拍子に提灯の、明りは消えてしんの闇。折しもはいの／＼雨の音。ピカ／＼／＼／＼、ゴロ／＼／＼。玉「ソリヤこそ。よく鳴つて来た」是れこそほんに二人が縁を結ぶの雷さま。」玉「マア、うれしい」ト大地もふる／＼声、音もきびしいおかちあふ、ふた人は夢中で「くはばら／＼。」

盛衰
葉枯娘太平記操早引初編巻之下　終

盛衰榮枯 娘太平記操早引二編序

吾が友なる曲山人、別名を三文舍自樂といふ。性來作道に巧みにして、文を能くし畫を能くす。且つ世間の人情に渉りて、常に流行の書を著し、其の名をいと〳〵聞えたりしに、惜しいかな沒故して、其の志を果すに至らず。顏囘が上なりと雖も、不幸短命なるが如し。こゝに此の早引てふは、軟弱なる色に身を崩して、直烈たる通家を損て、慈心ある父を思はず、放蕩惰弱の息子の遺記は、色に溺るる世の弱冠を、戒めんとする一端ならん。去るを此の稿半ば殘りて、全部の趣向を知らずと雖も、只戲作者の用心は、結尾に至りて善を善とし、惡を惡とするの外に出でねど、販元是の請ふに任せ、遺稿の不足を補ひて、まづ全本とはなしたれど、遺稿は即ち目前に譲て、時好に適ひし作もあらん、されど故人の筆の文、今更改む可きにあらねば、其の儘にして擱筆みつ。己も婉嫺なる道に疎く、色のいろはの味ひ知らず、夢にも知らざる野暮傀儡、大方かうであらうかと、當推量の著述なれば、看官推し給へと願ふになん。

于時天保八の年睦月の空晴れて、黄鳥の初音かすかに聞きながら

松亭の窗下に誌す

盛衰 榮枯 娘太平記操早引 二編卷之上

江戸　曲山人著

第四回

世に美なる婦人をさして狐といひ、古狸と呼ぶも、能く人を誑かす故に、如此渾名するものなるべし、されば八百屋紫兵衛は、お玉が奸計とは一點知らず、切なる心とのみ思ひて、いつもなく夢を結びしが、如何なる事を契りけん、情かはらぬ妻のお千代にも、ましてかはゆさいとしさに、心はさらに夢みし如く、これより物事手につかず、唯お玉と床を共にし、比翼の鳥、連理の枝、偕老同穴の語らひの外に、樂しみなしと契るも口から、元より發明の性質なりしが、親に孝を盡す事を忘れ、妻を愛づる心もなく、お玉親子の氣に入りし家を訪ね、多くの金の費えも厭はず、造作を綺麗びやかに爲し、こゝにお玉を引取りて、心利きたる下女を抱へ、何不足なき樣にして、爰を家とし、日夜を別たず酒色にのみ溺れしは、嗚呼是非もなき事なりかし、かかりし程に紫兵衛は、内に臥す夜は稀なる故、お

千代もうぞ／＼これを知りて、父半六の耳に入らば、如何はせんと思ひ過ぎれ、心を痛むる事大方ならず。折にふれ事によそへて諫めんとすれど、流石又心弱く、言ひも出さず人知らぬ、胸を苦しめける。頃しも秋の菊月の中旬、後の月見の支度とて、八百半が臺所に、お千代は下女と調市を相手に、團子を圓めながら、お三に向ひて、千代「アの三や、私やア此の間から、お前の云ふことを虚だと許りおもつて居たに、此の頃の若旦那の御樣子と云ひ、私が何を申しても、薩張お氣に入らないかして、癇癪ばかりお起しなさるヨ。そしてあのお玉さんとやらも、器量といひ藝はよし、私の樣な田舎者と違つて、口は輕し如才はなし。ほんにお氣に入る筈だのう。」お三「サヤ／＼お千代さん、何で御座いますえ。あんな娘を其樣にお賞めなさる事が御座いませうか。顔こそ美しくつて、私の樣なお多福では御座いませんが、どうして、貴女なんぞと、比べ物になりますものか。まあ第一こゝが惡う御座います」ト己れが胸へ指をさし、お三「それに貴女と違つて、髪は結へずか、針仕事と云つたら、綻び處か雜巾を一ツさす便を知らず、食事拵ひたら、團子を一つ丸め得ずさ。其の癖美味好みで、酒は鱈腹呑みますとさ。マア左樣いふ莫連娘に、どうしてお引ッかゝんなさいましたか。若旦那樣も若旦那樣で御座いますねえ。人は美貌より唯心とか何とかで、顔ばつかり美しくつても、胸に惡を有つて居ちやア、何にもなりやア致しません。莫迦々々しい。あんな利いた風な娘は、私なんざア、強う嫌ひで御座い

ますよ」ト、面に資が入り、手に持ちし團子、押し潰したり、引き延したり捻くり廻す障高話に、お千代はそれに氣をかねて、「ちよいとしこや、そんな大きな聲をしてゝ、お前さんの事を惡く思ひでたら、若旦那樣がお眼をお覺しなさつて、お耳へ入ると惡いから」「なアにそんな宜しう御座いますよ、貴女がお氣が善いものだから、若旦那樣は、好きな事をなさり次第だ、私なんざア側で歯がゆくてならねえよせん」「ノウ若松さん、まアのう、左樣まア」「イヤお千代さんに、此間の晩ね、あのお庭の空の端を通りましたらね、若旦那さんとお網さんが、と仲樣で、お二人一緒で歩いてござつて、そしてお話し聲で、「おやくてやノ〜言つて居るさかなるよ、お前樣の事を言つてると、何だか餘り噺が聞こえてならねえから、そこらで草むらで馬の草履を見付けて、叩きつけてやらうと思つてましたよ、顔を傷つけてなるをいよしてねえ、わんでーノノと言ひながら、一目散に逃げ出してきたが、惜しくつてならなかつたんだ」「おとよ、遠慮なく、ですぎた事をして、若しかすると若旦那樣が知つたら、如何するのだえ、其方の爲にはお主ちやァないかえ」「すねえ、そりやさうですけれども、あんまりのはぢめに呆れてしまひます、お眼が覺めたかと、お手が鳴るのでしたらと、お呼びなさいますよ、團子も最う出來ましたから、貴女はお早く彼方へお出でなさいまし」「まだ御内」お千代は手を洗ひ、そこそこにして、座敷へ行き、お書齋、お呼びなさいましたか」

でなさいました處か、先刻から一百五六十手を叩いた。」ちよ「オヤ／＼、譃ばつかり仰しやいます。」峯「さうして、手前何をして居るのだ。」ちよ「ハイ、今迄團子を丸めて居りました。」峯「何團子をか。まだ拵へて仕舞はねえのか、縦棒に埒があかねえぞ　大方丸めるよりは、喋る方へ念が入るから、今日の團子は瞳だらけで格別に味が善からう。」ちよ「又、そんな悪口を仰しやいます。」峯「それはいいが、お父さんは未だ歸んなさらねえか。」ちよ「ハイ未だで御座います。」峯「そんなら、俺は今から一寸出るから、お歸んなすつたら、何とでも云つて置いて呉んな。」ちよ「ハイ、それでも何方へお出でなさいますか。もし御用でもあつた時は。」峯「ナニ、ツイ其處だと云つて置きねえ。」ちよ「それでもマア、何方で御座います。」峯「ナゼ、何處でも可いぢやァねえか。」ちよ「貴郎はさう被仰いますが、どんな御用があるまいものでもなし。」峯「いゝと云ふ事よ。いけしつこい。そんな小むつかしい事をいふなら、頼みやアしねえ。俺が足で、俺が好きな所へ行くのに、いさもくさもあるものか。」ト、少し癇癪にて着物を着替へ立ち出でんとする故、お千代は引留め、ちよ「マア／＼、お待ちなすつて下さいまし。貴郎のお出でなさる處は、委しくお聞き申さずとも、お玉さんの所とは、以前から存じて居りますが、悋氣は女の嗜み故、御意見を申す心はなけれど、貴郎がお玉さんの色香にひかされ、元より深くも飲らぬ御酒を、お過しなさるばかりでなく、お身持の悪いを、お父さんも誠に御苦勞に遊ばして、この間から

二度三度、私に仰しやいますは、俺が口から半兵衛に云うては、却つて其處に角が立つ故、折を見て其方の口から、よく意見をしてくりやれト、仰しやる度に、私しの、胸の中の苦しさは、どの樣で御座りませう。お父樣のお言葉では御座りますが、生まれついての無口な私、貴方に向つて何とマア、御意見申す樣もないけれど、申さなければお父樣へ濟まず、貴方のお爲にもならぬかと、心には思つてをりますが、口へ出して申しましたら、定めて、お玉さんを嫉むのかと思召しませうし、そら／＼左樣では御座いませぬ。假令お玉さんの其の外に、お心に叶つた女中があるなら、二人でも三人でもお呼びなすつて、御本妻にもお妾にも、お心次第になさいましても、決して悋氣は致しませんが、アノお玉さんに限つては、お父樣のお氣に入らず、お身のお爲にならぬ故、お聞き入れのない事を知りつゝ申すも、矢張り貴郎の。」ト、云ひ切らぬ内にかに潤む、聲つまり、やかましい、百も承知だ。生まれついた無口もすさまじい、能く御器用にお喋んなさるぞ。隨分折角の思召しで、御深切の御意見だから、聞く氣だが、今日は忙がしくもあり、まア此の頭にひまの時、耳の中をよく掃除して、ゆつくりと聞いてやらう。」ト、木で鼻くゝる情なさ、お千代は猶も泣きつゝ、「さぞお氣の立つのも、御用のあるのも、御無理とは存じませんが、貴郎は可愛いお玉さんの事故、お心は付きますまいが、世間の人の噂にも、心立ての能くない生まれと、尾に尾を付けては申すものの、人並ならぬお玉さんの氣質、十二分の時から

多くの男に肌を觸れたいたづら者。それを御承知か存じませんか、とても末始終、貴郎のお爲になります事では御座りますまい。それ故お父様も御苦勞になすつて、私に否や角仰しやるも、皆貴郎を思召すから、私は假令下女にしたになりましても、少しも厭ひは致しませぬが、お玉さんばかり女ではなし。女郎でも藝者でも、心立さへ善いものなら、それをお内へお呼びなすつて、お父さんのお氣のやすまるやうに、どうぞ左樣して下さいまし。左樣致すと私も」丁「好いと云ふ事ヨ。承知だよ」おとよ「誠に安心致しますし。」丁「好いよ。解つて居るヨ。好いといふのに、默らねえか。」丁「よく積つて見な。素人のお玉でさへ、内へ入れる處かえ、彼奴故に此とばかりの金を使つたのを、親父は目玉をむきみにしてか、手前は角をはやして居るか、どうして女郎や藝者なんぞを、飯焚女を抱へるやうに、さうツイ一寸内へ入れられる位なら、いさもくさもあるものか。コウ、こゝをよく聞きな。手前に愛想が盡きて云ふのぢやァねえがの、今時の代世界にヨ、唯一人の女房に御機嫌をとつてサ、かう爲さいませんか。ヘエ左樣仕りませう、アノ芝居が見度う御座います、ヘイ御覽じまし。物見御遊山御勝手次第、落語、うつし繪、八人藝、此處へもお供をいたしませう。何の彼のと御諂ひ通りになる樣な、うんのろな野郎があるものか。又手前のやうな貞實な女も少ねえの。亭主はお好き、密夫お嫌ひだから、石部金吉の嫁になると丁度よかつたッけ。勿論女房は家の道具、色事は世界の樂

しみだものか、たとへ浮氣者でもいたづらものでも、そこに頓着があるものか。浮氣合點尊偽承知で惚れ込んだのは俺が物好き。それとも俺がお主に惚れたのが、あなたのお心に叶はねたら、それはは
や是非がないので、お内へお歸んなさるとも、どうとも斯うとも御勝手次第、まアとつくりと分別をして御覧じろ。これは大きにおやかましう。又其の内御意得ましよう。ドレ行つて來ようか、トヽ、あくまで茶かして出でて行く。跡にお千代は悲しさ苦さ、堪へかねたる溜め涙、わつと計りに泣き伏して、夫の心の變りし事と、わが身の因果を案じ過して、淚の留めとてなかりける。

第五回

木綿幸は二間ならぬ二間口、日あたりもよき南向、中窓のある次構に間口付けし小庭から、飛石傳ひの出入口、内やゆかしき住居は、是れぞ八百屋幸兵衞が、お玉と契る比翼樓、互に中の睦まじさは額の文字に現はれたり。お玉は次の六疊の間に寝轉びながら、晴合手は我の寛へ舌の先八なれ、何時も變らぬ高鼾に、おべッかをいふ舌の先、ヲヤおまへさん、いつぞや四萬六千日の晩の段取は、モウどうも妙でありやしたね。何さんが冒者を連れて來るといつたのと、船衆の吉公が、付け替へる蠟燭を忘れて來たのは、計畫んだ外の運間だが、どうも稀代にまくり組はまゝやりした。故人南北が中

を加へたかと怪しまれて、實にもう感心さ。」上「左様さねえ。あの時の又雷様も、餘程氣が利いて居たよ。あれで幕切が大きによかつたッけ。」三「そこが大笑ひさ。お前さんの方は夢中で、雷様がキッかけに、ドレドロ怨いとか何とか云つて、噛り付きの甘い狂言だけれど、此方は又おい〳〵聲し合はした酒興へ落ち着きの、娑婆構はず腕を傾けの、各自一盃醉ひに乘じて、唄ふやら踊るやらさ、ドヽ面白んで踊るばかりさ。處でカチ〳〵と拍子木を聞いて、座中面々見合はせの、ふつと氣がついて、こゝだんまりの幕も切れたらう。サア來い、奴原シテ來いなと、尻引ッからげの、面を掛け出さうとした處が、俄雨車軸をながし、雷電ごろ〳〵ひつしやりだから、是れはと互に顏見合はせても、仕方がねえから評議區々。處が髮結の傳吉が、何時の間に何處から見付けて來たか、莫蓙の切れをやつと持つて來た談、各自皆赤裸となり、着物を一つにし、褌までは外して、かの莫蓙へ包み、四人抱手をぶら〳〵ぶらさげて驅け出す處が、どれも〳〵、名ある名作だから、手もなく三本足が歩く様で、ヤ、モ、をかしかつた何のと、神武以來ない可笑しさね。」一「ほんに〳〵此の間も傳さんが、其の話で、どんなに笑つたらう。ほんに見たかつたね。」ト、言ひつゝ、煙草を喫ひ付けさうにして、三「ヲヤ火が消えた。すこしお猫子や火を一ツおくれ。」ト女中「ハイ〳〵。」ト立つて來り、火入れに火を入れる。三「アノ、そして序にお茶を一ツくんな。そしての、二階の花活へ薄を入れて、床の間へ置い

て呉んな。今におつかアが歸つて來て、おむすびやおかうと思ひやすから」トハイ〳〵ト、囃子も一緒にあけて置きませうか」ト左樣をいふ、序にあけて置いても好からう、アノ喜八さん、お前アノ囃子はどうだえ、一つおたべでないか」「イヤ、モウ三平さ。晝間寫でしこたまやらかした。そしてナニは、御母公樣は何か八御來儀だね」ヱヽイヤ、大請合の儀んだね。御母公樣に今寺町へお出で遊ばした。モヽヽヽハ、ヽヽ、それはさうと、世界はもうお出でなさのすうなモノだか。」ト左樣されて、早く來ると御しやつたツけ。大分今日はお遲い。大かお家でお千代さんといちやついてでもおいでなさるだらうよ」ト漏ひたし、思ひやられやす。斯し此の頃は、そんな果を心しもなくしさ、さお待たすやヽお玉さんといふ御娘貴が出來たから、持ちふるしには何うしても遠卿が罪いのさ」エヽヤ氣がねなんだ。宜しく申しておくれ」ト「ヘイ〳〵、お屋敷は卿日にかなさ。戯さ、お母のおうつのは御座ませんかツサ」「ヘヽヽヽ、ヽヽ、」ハおうつのには、家をもけます00さ」ト「へ、澤山だよ」せうもないねヱ、ヤッハ、ヽヽ」ト、無駄をいふ時入り來るは、紫兵衞と吉五郎なり、兩人は見ぬより門で逢ふ、六段目の勘平といふ見えにて、コレこれは〳〵、御兩所ともに、見苦しき茅屋へ、ようこそのお入來」と、四段目な顏で手をつけば、吉太郎も見かたる顏で、「イヤ、見れば案外に、世界の樣子もない樣だから」ト言ひやう、ヤれと遲速は内證事。お構ひ申しは致しません。御勝手次第に、いざ先づ彼方

へ、ーヨ音羽屋ア引ツ」隼「おきやアがれ、何の態だ」二人「アハヽヽヽ」豆「旦那、モシ大層お待たせなすツたネ。私やア先刻から、ヤ、待つたの候の權八小紫は、モウお牀へ廻りましたよ」隼「なんの事た、くだらねえよ」豆「ナイ、又失策つた」玉「オヤ、よくお出でなすつて下さいました。お前さん何故お遅う御座いましたえ」隼「ナニ、早く来る積りだつけが、山の神が御託宣をあげたから、それで大きに遅くなつた」玉「オヤ、山の神とはお千代さんの事で御座いますかえ。其様に悪く仰しやるのと言ツ付けますよ」隼「大事ねえのさ。此の頃はお千代めが、どうも老人めいた口を利くから、頻に嫌ツてならねえのよ。マア〳〵二階へ天上しよう。サア呑さんも豆八も、来ねえ〳〵」ト二階の梯子をトン〳〵上ハイ〳〵〳〵。お山晴天で御座いッ、掛念佛でのほつて昇りよう。なア こまアいだアんぶゥ引」ト怒鳴りながら梯子を上る。隼「エ、騒々しい、静かにしねえか。兎角この病人にも困る。浪言が止まねえ内は、本復はしめえぞ」豆「ナニサツト、おやまの針の療治も古いかツ、おやまだいてねて、あたぼかいまふりの、明日はぶんながしの、居残りとやらかしてえネ」隼「いゝよ、尤もだよ、諸事俺が胸にあるヨ。なんでも此の難症は般若湯 酒のでなけりやア治し難いの。ヨト、手をおよん〳〵と叩けば、ハイ引」とお玉は上り来り、玉「モシお前さん、アノ奇観亭からお誂へ物だと申して、種々お肴を持つてまゐりましたヨ」隼「さうか。来掛けに左様言つて置いたからだ。そいつ大待ちかねヨ。早く持つて来な」玉「モ

シ[illegible]シ、お臣さん聞なバ、つと暖簡にやつて欲しいね。ナツト云ふだけ野暮かッ。云はずと[illegible]の事だッけ。」「オホ、、、。能くさう口が廻るねえ。」臣「其の筈さネ。腹が減りや、目が廻るから、酒が入れしえから口が廻るのさ。」臣「すァ、澤山だね。」「ャ下へ行く。是れから間も出来、種々の肴を取り寄へてお臣さ中に打交りの大酒盛と云ふ程に、彈くやら、謳ふやら、踊るやら、日も暮れて月も峯に[illegible]むにぞ、鐵一人[illegible]として、皆を[illegible]に[illegible]、[illegible]其々[illegible]に起きす。[illegible]を紛の[illegible]八谷太郎、ひ[illegible]に[illegible]、[illegible]高い[illegible]入り来るは、彼の髪結の鵜呑の傳吉、傳「[illegible]、剛結に[illegible]。」[illegible]臣さん、[illegible]、丸で通でたこの蛸の様だネ。」臣「トホ、、、。[illegible]悪口を[illegible]。」[illegible]目の[illegible]、お前、こなおつと早く来ると好かつたよ。殊に大乱筆だッけ。」傳「[illegible]の腹が[illegible]。」旦那も早く、お出でなすッたかえ。[illegible]お出でなすッた[illegible]さうだと[illegible]それ、其の事について話有れ[illegible]、殺気[illegible]、音高[illegible][illegible]悪い。[illegible]下へお出で。」傳「さうかネ。そんならァ一杯やつて行きやうか。」[illegible]茶碗を[illegible]の手に持ち、[illegible]持ち、[illegible]見[illegible]一[illegible]、[illegible]も誰し。旦那のお吸物を頂戴ッ。[illegible]冷め[illegible]。冷めこい所が来た[illegible]一[illegible]何だ[illegible]

湯焼か　こいつ奇妙。併し大分かれたの不動だつ　お玉さん、お前マア先へお出でなせえ。私やアモウ一ツお銭つけだに　車オヤノヽ、お前冷えたらうに　今お燗を爲直してあげようと　車六ナに是れでよしこのさ、やり取りなしの、ぐいぐい呑みのぐい仕舞ひ、一斤々々の青ッきり。無理な口舌に茶碗酒。蒲東でねえ奴さこけ、一人茶碗で引掛ける　お玉は、晰を早く聞き度く、心のうちにもどかしく思へど、左様も言はれねば、焦れツてえョの思入れにて、先へ階子を下りて行けば、傳吉は残飲を、つッつき散らして呑み仕舞ひ、跡より階子を下りて行く。

盛衰操早娘太平記操早引二編巻之上　終

娘太平記操早引　二編巻之中

東都　曲山人　松亭金水　合作

第七回

折から隣は行燈の、側に寄せの口取や、刺身皿まで引寄せて、飯を食へて居たりしが、伊吉を見て「伊さん、お前たア遅かつた、仕事をしまつて、直に来ると言つたのに、まア待佗た、早く来よう
と思つたッけが、ちよいと親分の處へ顔を出したら、友達が大勢居やアがつて、無理無體に引きずり
上げて、食へもしねえ淺料理の、あつかましくもねえ騒ぎで、直ぐ側に囲ひやアがつたが、仕方ねえ
とは思ひながら、香のかゝるも腹立しくて、ほきかに半途で止められねえから、ヤツトうまく抜けて
らけへしたやつよ」親分が重宝だから、つまらねえ其処で滅法おそまきに引き出て八九たの事と
「ヤア、其れはいゝから、此方へお出でゝト、一間の内へ招き入れ、小聲に成つて、「伊さん、
話のあるとは、何ういふ事だえ。「マアそれが、何ういふ事だか、俺の先刻旦那の處へ行つて、見世で

瓜助といふ男の髪を結つて居やしたつけ。すると、見世の二階が粂さん等の座敷で、何かお千代様と聲がするから、こいつ晝日中いちやつくのか、畜生めと、耳を澄まして聞いて居ると。「モさそのつけたらうネエ」「ナニさうでなし〳〵。」すると、お千代さんが少しうるみ聲で御意見さ。「モシあなた私は知るまいと思召しませうが、お玉さんにお惚れなすつた事はよう〳〵存じて居ります。アノお玉さんは、それは〳〵、心立の悪いいたづらもの。それを御存じなく、お通ひなすつては、末始終のお爲にもなりませぬ。第一お父さんへの御不孝で御座りますとか何とか云ふと、旦那がぐつと癪に障つて、「可いわ、俺が好きで惚れたのだ。女房は家の道具、情事は世界の楽しみだ。今時、唯一人の女房にこびついて、御機嫌をとるやうな、うんのろがあるものか、馬鹿な面な。誰だと思ふ、ア、つがもねえと、成田屋といふ思入れで、委細構はずお出掛けなすつたら、跡にお千代さんが一人鬱々で、餘程愁歎があつた様子サ。「エ、オヤ〳〵、左様かえ。それぢやア私の事を、果を味噌に言つて焼き付けたんだねえ。何の利いた風な女だ。千住か何處かの郷在者の醜をして、粂さんの嫁にならうとは、鐵面皮しい女だ。何でも私を邪魔にして、言ひてえ三昧を並べ立つて中を裂かうといふ氣だらうが、全體根性が曲つて居るヨ。男といふ者は女房の外に働き次第で、二人でも三人でも女を拵へるのは當然だのに、嫉妬をやくのは氣が知れねえ。第一あんな田舎者だもの、縦へ粂さんでなくツても、誰がごツこん可

愛がつて、こびついて居るやうな、男雛木があるものか。私も女の切れではしたもの、一旦縁で馴染んだからは、ちよつとやそつとの事で切れるもんだねえ。あつちに惚れた神様があるなら、此方にも大神宮様がおあるわな。ノウ傳さん、さうぢやないかえ」「そりやア、左様さ違ひねえ道理だ」とうとう、そして、此の意地を通してやりてえものう。情ない物だねえ。さうしたら首尾よく」「左様さ、男同志の喧嘩ぢやなし。そんな事ならいだから、詳の仕様にして遣りやあいゝ。どうにか宜い事がありさうなものだの」ト、小首を傾け、暫時考へしが、忽ち手を拍つて、「そりやア宜い事を思ひついたよ。斯う言ふ趣向さ」「其りや、どういふ事だえ」「成程妹背の事だ」とはだ話もしないに、先刻のな」「其当時隼人にやられたけりや、流行に凪れ、大方さうして貰ふい事だ」「其うし断うさ。一寸耳を貸しな」ト、耳に口寄せ暫時囁き、「ぢやアと言ふ狂言だが日外もお前の骨折で、私が思ひを遂げたのだから、今度も否でもあらうが、是非ないこうに働いてお呉れな」「何のお安い事」と、いつそ嫉妬ましい位、それが本当ならおかしな事、これさ、聲が高いわね。音羽屋の十八番だ」「何にも謂はずと宜しい。諸事鵜の傳言だ。其の代り借金でつたい、古い事」「それは言はずと野暮だ」「そこでかお先の先の化粧」

すもなち。雪「ナニモウ四ツだ。私やア直に歸りやせう」ト立ち上る。二階で無上に手が鳴る。雪「ハ
ハイ、旦那がお目醒めと見える。お眼に懸ると遅くなるから、宜しく申して、お呉んなせえ」玉「左様
かえ。そんなら必ず頼んだよ」雪「アイ」ト、表へ出で行く。お玉は階子をトン／＼上る。雪「お玉
か、ア、酔つたぞ。アノ水を一杯呉んなせえ」玉「ハイ。オヤお眼が覺めましたネ」ト水を汲ん來りて、
玉「ノ棗さん、お前さんもお寢らないかえ。彼方へお床もとつて置きましたよ」雪「フウ左様か、
寢よう／＼。アヽひどく酔つた。ヤエモ引。豆八や呑さんは、起こすと可いか」玉「ハイ、爰へ寢か
して置いても宜う御座いませう」雪「フウ、それもさうかえ。そんなら寢所へ行きやんせうか」玉「さ
あお出でなさいまし。アノ私が脊負つて上げませうか」雪「なんの、惡くしやれらア、力もねえ癖
に」玉「ナンノ脊負はして御覽なさいよ。オヤ重たい。其様に上から押しなすッちやアいや／＼」
雪「重てえ筈だよ。張子ぢやアねえもの。ソレ斯うか。フウ、なか／＼力があるの。コウお前の乳は乳
袋が小せえのう。お千代のはお前のよりやア、餘程大きいぜ」玉「オヤ、左様で御座いますかネ。乳
の大きいのはすけべゑだとネ」雪「へヽ甘く言ふの。小せえのは猶すけべゑだらう」玉「オヤ宜う御座い
ますヨ。貴方に似てすけべゑさネ」雪「呆れもしねえの。イヤ又此の〇〇〇の〇〇〇〇とした處は、
どうも千金換へられねえ。畜生め」玉「アレサ擽つたい。悪いじやうだんばッかりなさるよ」ト、上

お狂ひなさるこへはひろ」隼「ヤア、どうだいと御輿を揚て、それからと」馬「ナニお前さん、アノ小用にまだお出でなさいませんネ」隼「ア、お前の〇〇〇、ひよどり込み気だからの」馬「ナニ、ア、憎い口だねえ。」隼「さうよ、憎い口もなけりやア、かはいがられる口も知れねえのさ」馬「マア戯談はやめにして、サア小用にお出でなさいましよ」隼「ハイ／＼、左様ならお供を致しませう」ト連立つてこうつばへ行く」隼「ナア、お前は雪隠へ這入んな。俺は小便所へやらかすから」馬「サア、私や後でもようございます」隼「ヱ、野暮な事を云ふの。一所に連れて一所にするのが当時流行だ」「ほんに左様さねえ」ト、雪隠へはいれば、集兵衛は小便をしながら」隼「イヨ、えらい音だの。お玉どうしたもんだ無礼な、人の鼻のさきで、プウと屁を放るとは、顔に似合はねえ色気なしだぜ」馬「オヤ／＼嫌だよ。お前さんがお屁をなすつて置いて人にお塗けなさるよ」隼「ナニ浮気虫がいいね」隼「ナニ蟲がよかァねえ音がいいのだ。しかし、一河の流れ一樹の陰、一つ雪隠で屁を嗅ぎ合ふも、前の世からの因縁だらうヨ」馬「ヲヤ、、、、よんだ處へ理窟をおつけなさつたねえ。お前さんのは、ほんの利屈といふのだ」隼「お玉やアおれ理屈だ」、むだをおいひなさんなへ」隼「モシ今は頃は、無お千代さんが、案じてお在でなさるだらうネ」隼「マア、そんな事をいつて、寧ろするヨ」れるぞ」馬「ナニそれでも、お前さんと駈落しかつたのに、口で云ふ悪口が逆へつたから、無怨んで御

在でだらうと思ふと、怖くつてなりませんよ」粂「果敢ない。そんなやぼッてえ事は言ひッこなし。面白くもねえ。勿論此の頃おやす、親父がやかましく云ふさうでの、お千代も何だの彼だのと、意見めいた事を云ふけれど、なんの構ふ事があるものか。まかり違やアこちとら出す分の事だ」土蔵でこそそんな立派な口をお利きなさるが、お千代さんが優しい聲で、モシ貴郎え、サアお休みなさいまし、お煙草を一ぷく上げませうかえ、何ぞとお待遇振がありますと、お前さんはおきに、バタバタにおなんなさるだらう。それにお千代さんは大層手がお有りだといふ事だから」粂「何の嘘を吐くぜ。手があるの足があるのと言つたつても、山出しの郷在者だもの。カラ面白くねえの。石佛を抱いて寝るやうなものよ」千「ヲヤ〳〵、乙う仰しやるネエ。田舎者といふものはネ、根が丈夫で強いといふから、真に思ひやられますヨ」粂「よく其様な厭味を云ふぜ。お前にも似合はねえ。然しお千代はおかげでなくとこの嫁でも内儀さんでも、手がなくつて面白くねえに歸して居るぜ。なぜと云つて見な。ツイ女房のあるものが女郎買ひをお止めますか。孫のある隠居が妾狂ひをしたりよ。地者と賣婦と云ふ名の變りばかりで、手のあると無いのは實にをかしいヨ。何も女に變つた理窟もねえが、素人に小町の様な女ばかりもなく、賣女に好色な女ばかりもねえかの。どうも誠に不思議なものよの」千「ホンニ〳〵、何で御座いますネ。不測だの何のと、地者でも賣女でも、何も變つた事はあるまいが、珍らしいと珍ら

しくないので、変つた様に思はれませうヨ。ノマア裏店の子供が、或は外の魚が好で、上菓子屋の子が美い菓子よりも、駄菓子を好いて食べる様なもので、鼻に付いては悪味いとやら、そして銭も貴ひ立ての初物の中に、格別に珍らしいものだから、放蕩な亭主も、其の当座は内に居つかり居ませうが、毎日食べると鼻について、段々珍らしくなくなつて、それに毎日毎晩で、御肌が足りるから、どうしても倦き勝手で御座いますのさ。」室「違へねえ、おれも左様だらう、女郎を買つてもまはしの多い晩なんざアは、落ちついて話も出来ねえから、いつそ潮汁を喰ひたくなつて、ひもじい目をする事も幾度もあるから、格別に風味がいいと云ふやつだ。ほんに断食をこころみたものヨ。内で喰へた物は味くなくつて、銭を出して買つた物は味さうなもので、女房も餘所の間に買はれただけに、第一信仰がねえから、面白くねえ筈だ。其処で見ると、何でも腹一面食ふのは悪いネ。御馳走されるに食つて居る事だ。」主「左様さ腹一盃でござりますとさ。一体左様は腹も身の内だとそれから食べ過ぎに審を取りませう。ヤアそんなに〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇とみえいと〇〇〇〇〇〇〇〇ナニお前の手で取の算をると主「そんな事をお言ひなさるが、おッつけ飽きたら、ふい向いても御覧なさるまい。ヱヽ、そんなに大食をするものか、ソレ腹も身の中だ。」まアきつと、其の口で言はれては溜まらねえ。」〇〇〇〇〇寄りそへば天井で鼠。「ホヽヽヽヽヽ」

第八回

唄「うらめしや、うす雪のわが縁、うらむまじや、むかしは情ありしを」コロリン、シヤンときこゆるは、たゞ垣一重隣なる、娘が琴を浚ふ聲。もの思ふ身は殊更に、耳にさはりて其方を振向き、お千代はしばし物あんじ、思ひかねてや眼にうるむ、涙を拭いて溜息を、つくづく思ふ身の果敢なさ。「ヱヽ又今夜もお歸りがないと見える。ホンニ左様いふと悋氣の様に聞えるけれど、とんだ狐に魅されて、末はどうなる事おやら。殊に此の頃はお爺さんもよう御存じで、口へこそお出しなさらね、強うお案じなさる御容子。ハテ何うしたら好からう。」ト、問ふも答ふも唯一人、小舍の中に肘枕、勞れた儘にとろとろと、眠るともなき二更の頃、何方よりかは忍びけん、十露盤絞りの手拭に、顔を裹みし大の男こそろりそろりと引開くる、襖に寄添ひお千代が寢顔、篤と見て莞爾と笑ひ、行燈ふつと吹き消して冠りし手拭かなぐり捨て、お千代が側へ徐々と、寄れどお千代はいぎたなく、知らぬを幸ひ彼の漢士は、お千代がかけたる掻巻を卷り○○○○○○、○○○○○○○、○○○○○引寄せれば、當下お千代は心づき、目を覺しても眞の闇。主を誰とは知らねども、三重四重縮りよふき、手舍へ他人の来べきかは、繁兵衛ならんと思ふにも、何時歸つたか夫れさへも、知らで寐たりし氣の毒

さこに、まだ目の醒ぬ振をして、容子を見れば、彼の漢土は物をも云はずお千代が寝かれとする

にぞ、漸うに今目の覚めた振をなし、「イヤ」と云ひつゝ身を背け、「ヲヽ若旦那様で御座いますか、

大方今夜もお出のはなかろうと、油断をして寝入るまゝ、[illegible]を致しました。どうぞ御免あそばし

ましよ」ト、云へど答へもあらずして、暫引程く其の手闘の終兵衛にあらざれば、お千代はハッと仰

天なし、蹴打物をまた起きんとするを、漢土は押と押へ、お千代が口に手をあてゝ小声になり、「アヽこ

レコレお千代様、私だよく、見ない夫様に肝を潰しなさんな事はない、今日までさぞお心いたり私が

身の[illegible]、お前も余り大人気ない。」ト、言ふ聲されと心に肯頷き、お千代は漸く胸を押へ、片手で前

を引合はせ、「[illegible]身でも人事も知れたら、良れ名を着せても構はうとは不埒ナ人だ。お前は

誰だナア名をお云ひ。若旦那かと油断して済の事に、トヽまア嫌な人だの」すつこと、突き放されても慕

まお漢土、漢土「太え奴と云はお情なえ。私やア鬘語の傳言ナ。日頃からしてお前様を、慕ふて恋の

眼付や、[illegible]振まで、[illegible]て未だ[illegible]るだに[illegible]。此上は[illegible]の[illegible]、死ぬ[illegible]

て、[illegible]とお月様、とても叶はぬ事だと、諦めて見ても[illegible]、[illegible]の[illegible]

ん故なれば、私の身に[illegible]されても、嫌ひはあるまいに[illegible]、今夜、若旦那は[illegible]で、

しつかりお寝しなさい。明日の朝まではお起きなさらぬと、見込んで[illegible]、[illegible]見たもの

見えかけもねえ私等風情。定めてサイと速かに、得心なしてもお呉れなさるめえ、何にも知らずんや、サヽと、寐て居なさるこそ天の與へ、真暗にして半兵衛さんの、贋役をして抱いて〇て、左樣して跡で聞きうと、思つたばかりでお前さんに、二つとない生命を潰させたな、私が粗相。堪忍してお呉んなせえ。其處でこのお千代さん、幾度なつても同じ事だが、實に死ぬ程思ひ拔いた、此の傳吉を不便だと思つて、どうぞ私が願ひを、コレエ、滅相な傳吉さん、お前それは本氣かえ。ヲヽ能く積つてお見なさい。斯うして朝夕心易く、出入りもしなさりながら、そんな事があつて見ちやア世間へも濟みますまい。殊に私は申さずとものの事だが、半兵衛といふ良人のある身、少しの間斯うして居ても、人の疑ひをうけて濟みません。サア早くお歸んなさい。ト腹立ち紛れに突き飛ばすその手をおさへこ、是サ、ヲツト危い〳〵。短氣な事をおしでない。もしお千代樣、お前樣は顏にも似合はねえ強情だねえ。そんな事は聞かずとも、百も承知、百も合點。若し顯はれた其の時にやア、お前樣の料簡次第で、逃げるといふなら逃げませうし、共に死なうといひなさるなら、二つとねえ命でも更に惜しいとは思ひやせん。是れ程までに思ひ詰めた、此の傳吉を突き出さうとは、そりやア酷いぜ、コレ〳〵ハナヽお前樣も、餘りな情知らずだネ。ト、力任せに引寄せて、羽二重よりも和かき、お千代が頬へ傳吉が苦みばしりし青髭を、擦り付ければ今は堪らず、お千代はあれよと身を踊らせ、此方へ除かんと

する道なく、群がり集ひし黒雲の、帶をしつゝと傳吉が、抱へて其處へ引寄せ、お千代と今は一[illegible]
間へ、かよわき女子なりとも、手籠にされし無念さを、[illegible]と、必死の力を出して、手を放さんとも
がけども、男の力にかなひがたく、聲ふりたてて下女下男を、呼ばんとすれど不思議や、聲はつま
りて咽喉出でず。これは口惜しき[illegible]の、[illegible]散る秋の夜嵐や、時雨にぬれて[illegible]るゝ、七顛八倒あせれど
身を、なほ傳吉はしづかりと、抱きすくめて水淺さの○○○を引けば四苦八苦、花をとへし[illegible]
さうはさせじと居つても、程でもかなはぬ女の力、つひにお千代は傳吉が、自由にされて[illegible]
に我から許さねど、身を汚されし悔しさに、歯を噛みしめて惘然たり。傳吉はお千代を抱きおこし、顔
を見つめて、莞爾と笑ひ、傳「どうだお千代さん、これ程までに思ふ傳吉、金輪際[illegible]
く[illegible]へて御覧じろ、[illegible]兵衛さんも[illegible]な良人、[illegible]居ないが、[illegible]心根が推量で
やすねしか、これ程美しい女房を、此の夜の長いに唯一人、内へ寝かして自分ばかり、[illegible]
織、十里四方へ鳴り響いた、淫奔女に欺まされて、大切な金銭を、湯水の様に[illegible]
つて居なさるとは、第一自分の[illegible]
か。それを又正直に、一人貞女を立て通し、留守をして居るといふ、[illegible]
[illegible]氣のある女なら、亭主が[illegible]色[illegible]

窟をつけて今頃までにやア、○たの二人や三人、拵へねえといふ様な、野暮堅いをんなはありやせん。長え浮世に短え命さ、何を樂しみに生きてゐるのか。お前様も生れかはア、其の氣になつて傳吉を、可愛がつて○○○○なせえ。見かけこそは憎體なれ、榮兵衛樣より實があらアな」ト、と目を細くして抱きしめる。お千代は五月蠅さ腹立たしさに、涙を拭ふ潤み聲、千代「お前が實い榮兵衛樣が、不實か邪慳か知らないが、親の許した眞の良人例へ何のよに嫌はれても、何のそれを辛いとも、怨へとも思ひませう、唯悲しいはお前の無理、得心もせぬ者を捉へてしよう／＼に○○○○、人の○○○を汚さして、エゝ憎らしい傳吉さん。お父さんも今宵はお留守、おさんや何かも店二階、遠いと云つても一つ宅に寢て居る者を呼び起し、どうかして腹を醫ようと思うても聲は出ず、體はお前に押へられ手込にされたが口惜しい」ト、又もや涙はら／＼と、泣き伏すを傳吉が、嘲笑うて打眺め、傳「やう／＼思ひははらしたけれど、得心づくでうち解け○○○○○にやア曲がない。どうで一度おや左樣に行くめえ。また明日の晩來やうから、酒でも買つて待つて居な。ドレ歸らう」ト側にある、手拭とつて身を起し、戀をとして出て行く。お千代はほつと吐く息も、鷹場の雉子の雀歩みのかれし、心地に跡を見送りつゝ、背に指に吹きつけて、しまりをば能くさせたのに、何處から這入つて來たか知らん。怖い事やと身を慄はし、氣のせゐかして○○の、ひやゝかなるも氣味わるく、淨水に行かんと行燈を、點けて

うつすら蠟燭の、心の汗さへ胸先に、流れてふつと目を開けば、これ轉寢の夢にして、あたりは深と更け渡り、つゞれさせてふ鳴く蟲の、枕に近く聞えたり。餘りの事に茫然と、お千代は暫時合點ゆかず、見れば四邊に人氣もなく、碎れたりしと思ひしに、髮さへしやんと元の儘、そんなら夢であつたかと、ア、嬉しやと悦んで、立てば餘りに身も悶えしか、寢卷帶さへ湯具さへ、とけて落ちるに我ながら、ハツト驚き不審しく、兎角夢とは思はれねど、人に云ふ可き事ならねば、その儘にして一日過ぎ、二日過ぎつる其の中に、かの傳吉は朝夕に、來れど例日に變りなく　仕事仕舞うて歸りゆく。お千代は傳吉が顏見る度に、思ひ出すこそ怖ろしく、元來内氣の性質、あれ程の事なれば、なかなか生きては居られまい、と危い事と人知れず、物思ふ身の後先に、無實にうき名立田の、顏に紅葉の爭ひなく、引き出すべき前後に、思ひ合して哀れなり

娘太平記操早引二編卷之中　終

盛賞業佶 娘太平記操早引 二編卷之下

第九回

あふ坂の夕告鳥にあらばこそ、君が往來をなく〳〵も、美面も心も何一ッ、不足はあらぬ八百繁が妻のお千代は過ぎし世の、罪か障りか兎に角に、穩かならぬ胸のうち、悋氣はせねど良人が身持、朝な夕なに氣に懸り、親の手前も汲みかねて、濕りがちなる袖口も、朽ちて斷離れん思ひなり。今日は親父も繁兵衞も、宿には居れど繁兵衞は、昨夜の酒の持ち越しか、色青ざめて部屋のうち、蒲團かつぎて一寢入、漸うに目がさめて、「ヱヽウ〳〵お千代、ア、何處へ往つた。チット間があると、勝手道入りなして、またや何かを相手に、また碌な事は喋舌らねえ。オイ〳〵、お千代〳〵。」千代「ハイ〳〵「ヤお目が覺めましたネ。あなたマア、いつそお色が惡う御座いますヨ。何處かお氣持が惡かァ御座いませんか。」繁「ム、氣持も惡い筈ヨ。些と保養をしようと思つて內をあけりやァ、また內でもそれそれに保養を初めらァ。左樣云ふと手前勝手の樣だけれど、男は働き次第で、妾側女は勿論、圍ひ者をしようが、妓女を買はうが構ひはねえが、良人が左樣だからと言つて、女房にまで始められちや

ト堪らねえ。「ヘイ、ナニ、何で御座いますとネ。可笑しな事を仰しやいますね。私は何も致しは致しませんよ。一寸致しは致しませんが、唯させました計りか。ハヽヽヽヽ、ヘイ何だか、こう云ふ解らない事を仰しやるヨ。私やア、どうも否で御座います。モシ何を致したので御座います。左様仰しやいまし。エヽもシ何で御座いますよ。エヽ、ヘイ、やかましい、それより、ア湯を一ツくれ。そして其處の抽斗に、萬金丹があるから取つてくれ。ト、、、苦しい。どうも苦る暑さと、今日の暑さに一ヘイ、また其んなに仰しやらないでも宜う御座いますのに。全體この頃までに云ひ出した御病を、一寸や、かましい。また役にも立たない御意見か。ヘヽ、これまでやア御自分が天窓の眠をお通りなさいますヨ、言ひたかろ。萬金丹を口へ入れ、湯をやつと一口呑みしか、其處へ吐き出して、熱ツ、熱い〳〵、手前に湯の早く暑いうちや、熱けりや熱いと言で断りやアいい。此の頃何かうは〳〵して居やがる。昨ふもこれ、日に逢はせない。忌々しい畜生だ。剛情な奴だと云ふのに、醫者をよぶとどこに往つて來る様な、気の利かねえと云んだらうねえもんだ。それとも其の事に釣りたる其代に拠けて逃る様め、イどうでお茶さんの様にやア、行き届きませんと、言はんとせしが、ここでぞこれ、夜の病なねと、突れ、湯を拭で拭き、ヘイ、御免なさいまし。アい新しいお茶を持て來るや、お母をなさいましたか。こうせうか、アヽ、是が元になつて、死んだ御親父に…

て、此の位な事ぢやァ死ぬ氣遣ひはねえから氣の毒だッ。」千代「貴郎はマア、遂にもないよく色々な事を仰しやいますね、何だか私はいつそ氣になります。誰ぞが何とか申しましたのかえ。尤も私の樣な足らはない者で御座いますから、萬事お氣には入りますまいが。」ト、云ひかけて涙ぐむ。其の時繁兵衛はむつくりと起き上り、お千代が髷を摑みて引き倒し、繁「汝、知るめえと思つて、何だ空涙ァ流しやァがるな。ナニ私のやうな足らはない者だから、氣に入るめえとは能く云つた。いゝ足らはざァ足らはねえやうにナ、良人を守つて居ろエ。俺が氣保養に、一日と二日泊つて來りやァ、汝も內で色の戀のと、ふざけやァがらァ。コレ手前何ぞといふと、ヤレ本も讀んだの、躾方も習つたのと、御大層な事を云ひやァがるが、何處の何の書物に、密夫をしろと書いてあつた。エヽ、ふざけ／＼しいな、あまだァ。」ト、口に任して罵るのみか、腹立ちまぎれの握り拳に、三ッ四ッ打たれて髷は解け、櫛笄もばら／＼と、落ちる涙の留め度なく、お千代は良人が手を抑へて、千代「アレサ、まァ何で御座いますエヽお氣に入らない事があつて、打ち叩かるるは厭ひませんが、密夫をしたなどと、仰しやるのが解りません。定めて私を憎む人か、有る事無い事お前さんに、申した故では御座いませうか、どうしてまあ怖ろしい、假令貴郎が三十日、乃至百日半年の、お留守を致して居ればとて、その樣な事が出來ませう。是ればつかりは疑ひを、どうぞ晴らして下さいまし。」ト、云はせも敢へぬに繁兵衛

は目をむき出して聲を張立て、ヱヽほんに盗人たけ〴〵しいとは手前の事だ。立派な證據を押へられて居ても、まだつべこべと利口らしい事を云ふのかエ。千代「オヤ、立派な證據とは何で御座いますエ、身に覺えもない事に、證據のあらう理は御座いません。何でも貴郎の御しやる事を、背くまいとは存じますが、是ればつかりはだれなりに、ハイと申しては居られません。こんな證據が御座いますか、ドレ、お見せなすつて下さいまし。豐「ヱヽ、見せねえで何うするものか、ハテ云ふもの〵大事な證據、手前の手にやア渡されねえ。俺がいち〳〵讀んで聞かせる。耳をほじつて待つて居ろ、ト、立ち上つて出す手函のうち、とり出す一通繁兵衛にさら〳〵と押開き、

此のほどは、思ひ寄らずお目もじ致し、ゆる〳〵と御語らひ申し候事、誠に〳〵御嬉しく、それより後は猶更に、其の移り香のたちやらず、お姿の目にちらつきて、何事も手につかず、朝夕こがれなきにいよ〳〵其のふし御語らひの如く、不圖した事が縁となり、一日枕をかはせしからは、二世の夫をも捨小舟、此の身は心中立て通して、よしや火の中水の中、虎伏す野邊の果てまでも、離れまいとのお言葉は、よもや嘘ではあるまいと、たゞそればつかりを樂しみに、思へど立派な主あるお方、どうした風の吹き廻しで、もしお心が變つたならと、それのみ案じる胸のうち。

千代「オヤまあ、そりやア何の事で御座いますえ。そして其の文は、誰からたれに遣つたので御座

いますヿ粂ハ、、、、、とぼけるな。コリヤアむじつの傳吉から、手前の所へ寄越した文ヨ。まだまだ面白ゑ忘れましない事が、くど〳〵と書いてある。さあ是れからが肝心肝文、ふか〳〵も御察し下さるべく候。我々風情の身とちがひ、少しも御不自由なき身を捨てての御深切、命にかへても忘れやらず存じ〳〵。

粂ハ、、是れから先にまだ、大變な言ひ草があるが、そりやア又後編の事にしよう。まづ是ればかりで、其の細首をばつたりと、やらかす罪は澤山だア。併し俺アそんな野暮は云はねえ。これから傳吉を呼びに遣り、手前を綺麗に呉れてやるから、有り難えと思ふがいいヿ千代ハどうも私にやァ附張合點がまゐりません。アノ傳吉とやら云ふ人は、内へ來る髪結さん、折ふし顔を見るばかりで、終しか口を利きもせず、況して色だの戀だのとは、そりやア何かの間違ひでヿ粂ハ間違ひも事によらア。これ此の文の表を見ろ、お千代様へ、ひつじよりと、此の通り書いてある。羊といふは傳吉が渾名、サア是れでも言譯があるかヿ千代ハ、、言譯は御座います。覺えのないのが何より證據ヿ粂エ、、ふて〳〵しい此の女あま。まだしら〳〵と言ひ抜けるかえヿ何ぼ手前根性を据ゑて、鷺を烏と言はうとしても、大事な文を寝所の下へ、忘れて置いたが運のつきだアヿサア有りやうに云ふならよし、言はずば此方に仕方があるヿト、若氣に逸る繁兵衛が、側にありあふ匕首を、逆手に取りて白眼みつ

けれバ、お千代は落つる涙を押へ、「千代」お前さんもまア怪しからない。嘘か真事か碌々に、解りもしない其の先に、私をお殺しなさるお気かえ。たとへ首を斬らるゝか、怖いからとて覚えもない、不義淫奔の罪をまア、かうして此の身に着けられませう。是れ程云ふのをお聞き入れなく、どう有つても殺すとならば、どうとも貴郎の御勝手次第。と、魂迄抛ちたる女の金、良人の顔を見つめつゝ、猶も涙の潜然と、心の内に思ふては、少しも違はぬこの事を、丈夫が武蔵に責めらるゝを目の前に、日暮しさは、何に喩へんやうはなけれど、思へばこの項垂に、見たる夢こそ正夢にて、なき名を流す種とはなりしか。然はいへいまだ下紐の、関は許さぬものなると、斯う訓れ〳〵し夫を、送るべき譯はなし。是れには定めて仔細あらんと、思ふものから差しあたり、名立の証據に良人が腹立ち、何と云ひ解く術もなく、呆れ果てたるばかりなり。

第十回

折から来る宰の傳吉、主人の留守を聞いて、御免なせえまし、是れはしたり、若旦那とお千代さん、口説最中とも知らず、ハ、、、、、不躾千萬。モシ、又た後に参じませうと、往かんとするを繁兵衛が、マア〳〵傳吉なに、丁度能い處へ来た、ちとお前に頼む事があるが、なんで

ございます。」傳「サア其處へ坐らッせえ。何だとは太い男だ。日頃から目をかけて、贔屓にしてやる俺が面へ、よく泥を塗つたナ。大方夢にも知るめえと、思ふだらうが悪事千里、天道様が許さねえ。お千代と貴様が不義淫奔の、尻が破れたぞ覺悟をしろ。葵下坂二ッ胴、物の見事にすつぱりとやらかす筈だが、コレ傳吉、そりやアずんど昔の事で、今ぢやアそんな事は流行らねえ。お前も江戸ッ子の切れッぱしだ。野暮な事は言はねえヨ。綺麗にお千代を貴様に呉れよう。其の代りにやアこの町内へは足踏みさせられねえぜ。」傳「ハイ／＼／＼。これは旦那、イヤ嘸お腹も立ちませう。不斷御恩になるお前さんの、お顔を汚す氣は御座えませんが、ハテ其處が思案の外、面目次第も御座りませんが、今の様に仰しやつて下されば、漸う胸も落ち着いて、地獄で佛と申さうか、是れが誠に命の親。」サアお千代さん是れからア、世間晴れてのお前と夫婦。一ッ竈破鍋にも、此のとぢ蓋が腕ッきり、稼いで食はせる案じなさんな。ヤレ／＼それで落ちついた。」ト、胸を撫で／＼平氣な顔。お千代は聞いてびつくりし、千代「ヲヤまあお前は、氣が違ひはしないかえ。私が何時お前と、そんな事をしました。先刻からして旦那の腹立ち、知らぬと言つても聞き入れなく、困つた處へお前が來たから、是れで譃が立たうかと、嬉しく思へば何だとえ、噺を一ッした事もないものを、私と情合でもある様に、旦那さんに謝つたり、さあ是れからは表晴れての、夫婦とは何の事だえ。」ト、厭な事／＼。アノ人は何で

も氣が違つて居るさうだ。芋松は居ないか、ドレ〳〵瓜助や〳〵、ヲヤ〳〵髪結さんか、其方へ連れて行つて與んなさい。ヱヽ氣味の惡い二度とこれ〳〵〳〵お千代さん、なんぼ旦那の前だと云つても、そんなに無情く言つて與れずとも好いぢやアないかえ。此の中も紫兵衛さんは彼の所へ泊りの晩に、私が來たら〳〵よく來た、旦那は毎日毎晩お醫者様とお藥しみ、此方も生きた人間だ。好いた男な〇〇して、樂しまなくツちやア命が續かねえと言ひなすつて、私が來るや否や、しかもこの下谷で、ソレ彼の晴方までつ〇〇して、可愛いの戀しいのと、此の鼻面か食ひ付いたの、嘗めたのしたのをお忘れかえ。ハヽヽヽ今のお若さに物覺えが惡いねえ。しかも其の時小遣に困ると云つたら、お前が云ふにやア、金といつちやア手元にないが、困るなら是れを借さうと、目の付いたこし[illegible]、然も鼈甲の揷櫛かね、出して貸してくれたぢやアねえか。それも忘れて此の傳吉が、盗んだ何ごとと云ひなさんな。其れから直に質に置いてと思つたけれど、可愛らしいお前の深切、[illegible]て見りや、餘の無惡で、惜しい中でも持つて居るこトヽ、懐中から出す、煙草入の、底を探つて、ヲヤ、こゝに、有つた〳〵こト、取り出せば、紫兵衛は見て、いよ〳〵急き立て、睨めるお千代は氣も狂亂、これ何から何まで、どうして見ても合點のいかぬ事ばつかり、何の邪推か知らないが、それぢやお前は、旦那さんと言ひ合はして、私の身に難を付け、妾の色を追ひ出さうとして、惡道の嫌な企みつとか、何といふ相談だらうねえ。

左樣なら左樣と、明々地に言つてお吳れなら好い。たとへ私が何の樣に、思つたとて是非もない事。親父さんへもお話し申して、どうでも旦那のお心の、濟むやうに致しませうわ。ト、云はせもあへず繁兵衞は、いとゞ逆立つ眼を瞠り、繁「言はせて置けばべら〳〵と、途方もねえ事を言ひやアがらア。汝が密夫をした罪を消さうと思つて、何だ、言ひ合はして事をするたア、ふてえ事をいふ女だ。人が勘辨すりやア圖に乘るのか。こんな奴は見せしめの爲に、息の根を留めてやらう。ト、すツくと立つてお千代が襟首捕へんとする處を、半「ヤレ待て、繁兵衞。樣子は聞いた。ト、一間を出づる親父の半六、左に數珠を爪ぐりて、半「コリヤ繁兵衞、其の腹立ちは尤も至極。成程お主の言ふ通り、顏に似合はぬ太え女だ。イヤまた、其處に居る傳吉殿も、まはり場の嫁を侫戲んで、イケしやア〳〵として居るとは、これも又膽のよい人。そこで似たものは夫婦とやら、すつぱり綺麗に吳れてやらうと、良人からして暇の出たもの、サア連れて往かうといふも無理ではないが、良人は暇をくれたにもしろ、私も一旦お千代とは、親子の緣を組んだもの。まだ肝心の此の親父から、暇をやらぬ女兒なら、左樣自由自在にもなるまい。ナ傳吉殿、左樣ではないか。今日から後は私が女兒、まア〳〵私が方へ引取つて、容子に寄つたら近々に、貴樣の方へ嫁入らすも、この親父が胸にある。お千代來やれ。」と手を取れば、お千代は秦山の思はくを、思ひ兼ねつゝ立ち難ぬるを、半六頻りに引き立てて、奥の間へこそ

人のこけれ、あと見送りて桑兵衛が、いまだ怒りも解けやらず、苦み切つたる有様に、傳吉は手持なく、こそ／＼として迯げ出し、表へ出れば完備と、一人心に點頭きて、やがて街道へ走り行く。それからわたは湯上りの、まだ露たる、鬢の髮、荒櫛にて搔き下げたるが、五「おつかあや、おめへ今度京橋の方へ往つたなら、忘れずに仙女香を買つて來てお呉れ。どうも他の白粉は私にや付けにくくつてならないわ。そしてお前も黑油の、美玄香と云ふのを買つて付けな、髮がなにかの噂になつて、見つともないわな、ソノ油を付けて御覽、直黑くよく艶が出まるし、兩々の[illegible]けて、あんた湯をぐつと[illegible]樣かね。おれも矢やいて、旦那衆とともにうか、ハ、、、、ハ、、旦那でもとるかいいのかナ。そのかあ、今は首尾にとつても拾いねえのか。ハ、、、、、一向には、よく馬鹿ァいふのう。おれが今更どうなるものか、ハ、、、、。そこに[illegible]、此方へ入れて、眼ましいまア、己りゃ傳さんか、ここに上んな、ヘヽ、それを[illegible]の黑油を付けて居いて、旦那を取らうといふ噂だが、何とお前、せめて世間にして與れる氣にはなるまい。あるとき、これからも其のかはりにや方へ、月々に隣へ、小遣ひ遣れや[illegible]たゝハ、、、、。」傳さんへ、もう稀ちやけないと、其の事を洒落してお呉れや[illegible]そりやァ憚りながら諸事鵜呑の傳吉だ、まつかりうまくやりやんした」ト、右樣です[illegible]」

傳「ナァちよつと此方へ。」ト、お玉が袖を引いて、二階の上り口の二疊へ行き、こそ／＼と在りし次第をはなし、傳「ム、ト贋文の計畧から、その騒動を伺ひ、時分はよしとしけ込んで、何處までも俺が密夫をしたに違へねえと、踏ん反つた處なんざァ、まるで高麗屋か海老藏の仕打だらう。すでの事に、アノ美しいお千代さんの手を引いて、出る處だつたが、爺父さんが邪々をいれて、其處ははづれやした。しかし繁兵衛さんは、實に私が密夫だと思つて居るから、ナァ以來、顏は合はせにくい譯に成りやした。」玉「ム、左樣かえ。甘くやつたね。それだやァ繁さんもお千代さんに、大概は愛想がつきたねえ。」傳「ヘヽ、つきた處か、すんでの事に、鼻の先か小鬢でも、ちよんぎられようとしたから。」玉「まアさ、左樣かえ、可笑しかつたらうねえ。」傳「馬鹿ァ言ひねえ。俺が其の片相手だもの。可笑しい處か、飛沫が恐ろしいやァ。」玉「ホンニ左樣だねえ、傳さん、まことにモウ有りがたうヨ。ナァ、これまでにしておくれなら、九分通りお千代さんも、親家へ返されるだらうネ。」傳「そりやァあたりめえだが、爺さんが何ういふ料簡だか知れねえ。トは言ふものの、私がもう一遍惡者になりや、何でも彼でも邪が非でも、お千代さんを貰はねえけりやァならねえと、言つて寢込みやさァ。左樣して見ねえ、爺さんが無けなしの齒をぎり／＼噛んでも詮方がねえ。たとへ嘘でも實でも、此方の體を切つに掛けてある日にやァ、女を引きとるか、手切の金をとるか、何方か、此方かしねえぢやァ置かねえの

ヨ「エ、ムヽ、それは左様だが。斯う言つちやァ可笑しいが、先はお前、女牧の身上だらう。誰かそ
事を、蹄や角と云ふと名が出るから、其處へ付け込んでこねりやァ、何うでもなるだらうわねェ。其
の時にやァ、また私も繁さんの方へ、太鼓の聞きやうがあるから、何でもお前が損のいくやうにはしな
いヨ。」傳「マァ、そりやァ後日の狂言よ。何とお玉樣、是れまでにした骨折代に、チット貸して呉れ
な。」慾にかけるんぢやァねェが、他の者に出來た事だ。お前も其處を汲みわけて呉れねェこつちやァ、
可笑しくねえ。」玉「お堅い事だがね、今日は生憎文なしだよ。私が又彼處の宅へ來こむやうにて
もなつてお見、そりやァお前、しつかりと濟ませるぜ。」傳「コウお玉樣、それ等ァお前の非道い道
ふだらうぜ。彼處の宅へ來り込むなァ、何時の事だかまだ當はねえ。それまで俺を上げつて居られる
ものか。馬鹿アいはねェで、貸與、聞に合はしてくんねえ。」玉「そして、お前もマァ無理な人だネ
無いものを證がないわね。」傳「そんなら、何ぞ質草でも貸しねえナ。」玉「アレ、お前も分つてい
何も私が、禮をしまいとも言ふのぢやァあるまいし、ホンニ些とお待ちナ。」傳「、、可笑しくも
ねえ。俺にさんざ骨を折らせて、三兩や一兩の端金に、絲目をつける位なら、借り手と云ふ閑情
ます。其の代り今ツから、八百半が所へ行つて、今日の仕打は、みんなお玉に頼まれた狂言だと、此
ヘ後へ言つてしまはァ。馬鹿々々しい。」と、立上るを、お玉は周章て引き留め、「マア、、靜にねェ

傳さんだノウ。誰も遣らないとは云はないよ」傳「ナニ入りやせん」私も男だ。入らねえと言ひ出し
おやア入りません。」ト、振りもぎつて驅け出さんとするを、お玉が引きとむる。折から表に人の音、
ぐはら／＼ト叩く格子戸の、音に愕り傳吉が、ちらりと見れば其の姿、繁兵衛ならんと思ふにぞ、物
をも言はず裏口より、足を早めて立歸る。

娘太平記操早引二編卷之下　終

娘太平記第三輯叙

夭壽貮はず、身を修めてもて時を俟つは、命を立つる所以なりと、孟子の格言はさる事ながら、聰明叡智に生まれても、短命なれば本意を得遂げず。ここに東里仙鶴子は、文字の道に賢くして、聯句より文字を能くせり。されば其の誉れ四方に聞えて、書賈十里の遠きを厭はず、競ひて書を乞ひ上梓にす。また其の暇ある時は、戯作を好んで和漢の故事、或は今様の振を取合はして、兒戯の冊子を綴るものから、人もて是れを珍奇となし、良其の名も香しく、或る時は一文字百楽といひ、或は司馬山人、曲山人著の數篇を著はし、人情世態の浮世冊子は、自ら書きて其の重寶大方ならざる奇人なりしが、嗚呼惜しい哉不幸にして、早く黄泉の客となる。然るに此の草子も闕編あり、弟子輩の手には至るに、思ひきや遺稿とならんとは。されば書肆其の戯心を惑じ、上梓せん事を思へども、未だ全部に至らねば、余に其の事を委ねたり。爾來予も又知己なれば、其の儘に措かんは本意なく、故人の意面はいさ知らねど、斯うもあらう歟との推量に書き繼ぎたりしが、御存知ます自他の幸、草葉の陰の歎びも、思ひやられて有り難く、這回はますく精を入れ、既に發市の時に至りて、何ぞ序文と書肆が需めに、と云ふ來歷を書いつけて、御高覧を願ふまゝ書くるになむ。

己亥の盛夏

松亭主人題

娘太平記操早引　三編巻之上

東都　松亭金水　編次

第十一回

「諂うては靡かぬ枝ぞ雪の竹」とは古人の秀吟にして、實に人情をたとへて、よく言ひ顯へたり。雪降りに竹へ積りて、其の竹の折れんとするにぞ、枝も竹をうち、積れる雪を拂ひて、竹の無事ならん事を祷すとなり。人の親の心是れに同じ、子の悪しきを見て、これを打懲すは、一旦は子の悪きにはあらず、其の悪を改め善に移して、其の子の一生を安穏に送らせ、人にも貴めさせ、かつ又親も安堵せんとの心にして、これ、慈悲の寛大なる道なれば、人の子たる者は、其の親の慈悲を顧みに思はず、若し打懲らさるゝ事ありとも、親を怨まずして身の行ひを愼みて、悪しきを改め善に進むべきに、然はなくして、その親を怨み怒り、其の下向ふに至りて、ますます放蕩をなし、終には親を捨てて他所へ行き、其の身の氣儘をなして、親の苦勞を顧みぬものあり。これ等の類は論ずるに人な

れ心は獸に等しと云はんか、江湖上の雅女革男、よく此の理を鑑みて、人倫の道にそむき給ふな

さても八百屋の半六は、お千代を連れて奥へ入り、數珠を傍にさし置いて、火鉢の傍にどつかと坐して、はらりと落す涙を拭ひ、「エヽコレお千代、いまさら改めて云ふでもないが、其方を嫁に貰つてからは、夫婦のなかも睦い樣子で、繁兵衛も取りしまり、商ひに精出す故、私も大きに安堵して、店の事には少しも構はず、念佛三昧に這入つて、たゞ後生一遍三昧、人にも樂な身の上おやと、羨まれたも昨日今日、マア何樣いふ因果なやら、此の頃繁兵衛めが不身持千萬、私が云ふのは造作もないが、それでは逆意しもせうかと、子の心をも遠慮して、其方に折々云ひ含め、意見させれば嫉妬と、心得るかして一向聽かず、猶々募る放蕩は、この親父が眼にも餘れど、サテ其處が親馬鹿で、まさかあれしきの事に勘當もされず、と云うて捨てても置かれまいかと、平氣な顔はして居ても、心の内では取つ置いつ種々思案をして居る處へ、其方が不義とやら淫奔とやらを、したと云つての今日の騷ぎは、疾うから聞いては居たけれど、他の事とも違ふ譯、滅多に口出しも出來ないと、陰に居て容子を聞けば、アノ髮結の傳吉めが、たんと手柄でも仕たやうに、開き直つて眞向に、違ひないと手前え、名乘るは倅を馬鹿にするのか、然もなければ是れには必定、仔細があらうと聞いて居るうち、倅はます／＼腹を立つて、其方を傳吉に遣らうといふ、切迫詰つた容子を聞き兼ね、仲へ這入つて引分けたは、後には

[illegible]十と親の威光。ヤアそれまでいはしたものの、どうも其方の腹が知れぬ。日頃からの立振舞、な
かなかそんな淫乱な事を、しようとは思はねえが、其處がどうも思案の外で、賢いも賤いも戀の道は
かりは、思はず心の迷ふもの、萬一また[illegible]と、女の取り違ひもした事か、有つて見れば捨てられぬ
わけ、とはいふものの[illegible]か、種々不義を仕掛るにまつて、終に[illegible]しい其方まで、[illegible]になる
は道理。シテがお千代、其處が女の悲しさで、良人が斯ういふ不埒をすれど、私も斯う[illegible]と
ぶつて見れば世上には、[illegible]
にたらぬは浮世のならひ、其處を能くわきまへて、[illegible]を堪忍して[illegible]、踏み外さぬを貞女といふ
ござえ、左様いうたら、[illegible]
も日頃知つてる通り、[illegible]
きと・きたる言葉の端、お千代は更に[illegible]
たに違ひない。連れて行かうと[illegible]、夫れゆゑにこそ物[illegible]、[illegible]
にまでも違はれ、[illegible]
細[illegible]は[illegible]
漂ふ[illegible]

寄せて、ただ段々のお詞は、一々能ウ〳〵聞き解けました　貴方のお疑ひ遊ばすのは、ちつとも御無理は御座いませんが、なんぼ私が不束でも、それはよく〳〵辨へて居ります。たとへば五人七人の、妾をお使ひなさらうとも、または藝者や圍ひ者、餘所の娘御と懇をなされませうとも、悋氣嫉妬はなの嗜み、然しそれ故、身上の破滅にでもなります譯なら、意見いたすは格別の事、畢竟申さば私の、お守の仕ようが届かないから、他外へ出てお氣ばらしをなさるであらうと、それを苦勞に致すくらゐなら、なか〳〵怨みに思ひますの、腹を立つのと申すことは、一點ほども御座りません、また傳吉と情合がある、證據の文と若旦那が、讀んでお聞かせなすつたのは、夢にも知らぬ無理難題、さういふ事お解りませんと、申した處が、傳吉が、何の事やら其處へ來て、密夫をしたに違ひないと、申して見れば猶の事、若旦那のお腹だち、御尤もとも御無理とも、いふに云はれぬ私が、胸の中をとつくりと、酌みわけて下さいまし、ト、いふも涙の露時雨、鼻詰らせて聲うるむ、半六は點頭いて、「左なる程、左樣で有らうとは思つたけれど、傳吉が彼樣云つて見れば、横合から左樣ではあるまいと口も出されず、嘘か誠を眞直に、糺さうといへばあのときに、私も一緒に腹を立つて、不義姪淫をした奴等、繁兵衛は赦すとも、この老父が合點ならぬ、兩個共に繩をかけて、知縣所へ曳き出さうと、言つたら怖れて嘘だといふか、夫れでもまた強情を云ひ通さば、是非に及ばず其方と兩個に繩を掛けて、

曳き出さねば言ひ出した甲斐もなし。左様しては其方も不便、また外聞もよくないと、ヤァ何かなし
に引き分けたは、俺がなにも些とばかり、料簡のある事だ。夫れならいよ／＼其方の身に、ちつとも
覚えはない事だノ　千代「それはもう今日の、天道様をかけて御座いませんが、彼の傳吉が私に、
何ご意趣でもありますのか、影も形もない譃を吐いて、困らせるのが誠にもう、口惜しくってなりま
せんワイナ、ト、云ひ掛けて歯を切り、又もやわッと平伏せば、ミツァレヤお千代、其様に泣くまい。其の
身さへ清浄なら、証の立つ時節はあるわい。然しながら不義者と、名の立つた嫁を宅へも置かれ
まい。筋道の付く間、姉（といふは半六が妹にて、長谷の観音の地内に茶なしつゝへ、こゝに独居して暮しゐると知るべし）の所に居るがよい。不肖ながら此
の父爺が、萬事呑み込んで居るからは、其方の悪いやうにもせまい。悴の恥にもならぬやうに、其方
は幾許もある。マァ早く顔でも直して、なくってならぬ立場の、手元の物を取り揃へ、マァ／＼暫
く行つて居るが宜い。姉はまた知つての通り、俺と違つて左様なから、酸いも甘いも承知して居る通りの
者。悪くする事ではないから、ちつとも心配なしに、閑な時には奥山の裏田圃か墨水か、慰所には
皆近し。帰つて保養になるであらう　ドリャ丁稚に云付けて、駕籠でも頼まう　ト、立ちゆく泰山
の後影、見送るお千代が拭ひあへぬ、涙を押へて伏し拝み、良人が邪慳に心替へて、情も深き泰山
の御詞、些とも早うわけが立ち、元の通りに納まらば、死んで未来の其の先の、先の世までも忘れま

御念と、口には云はねど心にて、念ずるもまた殊勝なり。

かくて駕籠屋も來りければ、お千代は手道具などとり集め、泣く〳〵桑山に暇をこひ、何かの事を細々と、頼み置いて立ち出でつ、利徳も大慈の圓通菩薩が、男と聞くさへ頼もしき、地内の姑が方にゆき、暫しは忍ぶ世の中の、憂きも辛きも時節ぞと、發明めてもなほ味氣なき、身の成る果てを喞つなるべし

「骸骨の上を粧うて花見かな」とは、皆人の知る鬼貫が、悟りの道の一句はあれど、それを悟らぬゝ浮世の樂しみ、悟つて見れば東西もなし、紋兵衛は先刻より、お玉と兩個差向ひ、遣つたり取つたりの合ひの押へと、何の風情もなき酒宴に、いたく酔ひしが、傍にある湯のみを取つて、「紫「コウお玉一杯酌いでくんな「玉「ヱ、それでお止りかえ お止しなはいナねえ お前樣はマア何樣か被成だらうで、終になく澤山お上りだヨ、又後で苦しいから、モウよしにおしなはいナ「紫「ナニサ、好いから酌いでくんなヨ「ト、お玉の前へ湯飲茶椀を突きつければ、お玉はグイと引ッたくり、「玉「猪口におしなはいヨ、莫迦らしい、こんな物で飲むと、あくどいわねえ「ヱ、繁さん、お前樣何ぞ私が氣にいらない事でも仕たのかえ「紫「ハ、、、、何故「玉「何故もないもんだネ、先刻から種々に引絡んで物をお云ひで、そして例と違つて、何だかどうも腹でも立つてお在でのやうだもの「何も開き直つて

眞面目に云ふのぢやァないかネ。私の不足いふのは、元來承知してお在でながらに、何の事たかァ知らないか、これが惡かァ惡いと、打付けて云つてお吳んなはいナ。それぢやァお前樣も、私の思ふ半分でもなくッて、爰に他人がましい仕打だと思ふョ。」筆「オヤ異な事を云ふのう。お前に於て唯の五厘でも惡い事はなし、又俺も何の氣もつかねえが、そりやァつい心易だてで我儘も言つたらう。若し氣に當つた事が有つたら堪忍しねえ、もうそんな事を言ひ出す時分だらう」小「あれサ、モウ何でも好いわな。筆さん何だとえ、そんな事を言ひ出す時分とは何の事で御座います。此方の事ョ。」筆「外の事たァ違ふまいが、何樣も聞捨てにやァなりません。先刻からの仕打といひ又左樣お言ひなはるのを見ちやァ、誰ぞしやくつた人でも有つて、私の氣が變つたとでも思つてお在でのかえ、左樣思はれちやァ埋らないねえ。噓なら阿母にでも誰にでも聞いて御覽なはい。お前樣の來ない節にやァ何だか惰鬱として、物事が手に付かなくッて、折節詮方に、此の兒は何を漂ゆして居るョ、氣拔けでもしたのかと叱られる事は每事あるのヘ、其の位に思つて居るものを、お前樣もあんまりおなさけないかネ。左右お千代樣に此樣にいはれ、その中に氣にお成のだから、何かに付けて氣揉くなる樣な事をお言ひだらう、私も思ひ切つて斯うなつたからにやァ、死んでも離れは仕ないものを左樣思つて、お吳んなはいナ、筆兵衞さんを見れば、又始まつ

たモウそのお千代〳〵は止しにして貰へてえ。何ぞといふと面白くもねえ。」玉「左樣サ、又どうせ內室樣の樣に面白くはないのサ。」竹「エ、この女ア彼樣云へば斯樣云ふと、能くつべこべと喋舌るなア總身に口が開いて居るさうだ。」玉「アイ私やア惡婆だから喋舌りますヨ、どうせ世間知らずのお孃樣が花嫁に來たのとは違ふのサ。」竹「チヨツ忌々しい篦棒だ。人の氣も知りやアがらねえでヿト波波酌んだる猪口の酒を、お玉が膝へ投げ付ける。是れは如何なる故ぞといふに、お千代が事の胸にありて未だ其の怒り解けやらず。お玉は既に其の由を、推量すれども素知らぬ體にて詞の中に刃を含み男の心を曳かん爲、或は嫉妬の趣をなして男を薄かす手管の魂膽、實に曲者と知られたり。

第十二回

其の時お玉は頰を膨らし、眼を䁈と見開きて、紫兵衞を白眼付けッ、玉「オヤ馬鹿〳〵しい。戲弄けてお呉れでない、斯う見えても、此のお玉さんは、そんな權柄で行くのぢやァないわ。惡いことが有るならば、幾許でも謝りますァ、夫婦喧嘩や口舌の餘汁を、此方へ當られちやァ迷惑だネ。それほど厭なら男らしく、綺麗に厭だといつてお覽。なんの人ヲ、不景氣なヿト、云ひつゝ膝の酒を拭く折から表の戸を、ガラリと開けて入り來る幇間の豆八、豆「ハ、、、、ヿト、まづ可笑しくもなきに空

笑ひをして、豆「コリヤア、御夫婦水入らずのお酒宴、處へ馬渡豆八が、お邪魔に罷り出雲の國、大社の神様にも、彈き出されて此の年月、膝を抱寝の鰥夫か、前もあつたものおやアございやせんか、餘りお伸が宵は待つ、そして怨みて曉まで、日官は絶えぬ間のうち、アッハ、、、、こんな洒落もねえもんだ ハ、、、、」玉「豆公は、いつも〳〵元氣だねへ、マア一ツ飲みなさい」豆「ホンニお前の樣に氣を持つて居たら、苦勞がなくツて宜からうねえ。」玉「その代り今申す通り、女には蹈豆、番太郎の店先に、ごろついて居ようといふのだ。ハ、、、、ドレヒトツ頂かう。」トいふ折、繁兵衛はへいと立つて雪隱へ行く、豆八は聲をひそめて、豆「今日は、旦那は何處か被成つたのかネ」玉は點頭き、小僧になりて、玉「チツト、宅に揉合があるからサ」豆「フム左樣かネ。斷うと、今ッから何處ぞへ曳き出して何樣だらう」玉「お前勸めてお見」豆「ナニ先刻から何だか氣むづかしいわ、夫れだから繁公も、何處へか逃げて仕舞つたヨ」豆「ハ、、、、、左樣かネ。終に無い事だネ、話す處へたお蹊ゐ、繁兵衛が前へ猪口を置いて、繁「まア御返盃、時に旦那、俄の踏り目かとんだ能いと云ひますか、いまいましいお供をいたしたいネ」お玉「お玉さんも御同伴に、ねもお玉さん」玉「左樣サ宜からう。然し旦那が、何だか今日は浮々なさらねえで、そして何か腹を立つてお出でのやうだから、私が一ツ酒を飲んでも甘くねえいわ」お前何卒旦那の氣を直させてお呉れなツ」玉「ハ、、、、左樣かネ、何ういふ仔細か知らないが、イ

や全くお玉さんの僻みだらう　どうも此の旦那に限ッちやァ、其様に野暮に腹を立つたり、又酔つて管を捲くなんぞといふ事は、爪の垢ほどもないお方だもの。夫れともまたお玉さんが、ほかに情儀な事でも仕なすつたかァ知らないが、近頃は旦那に首ッきりと云ふもんだから、夫れもあるまいし」玉「アレサ、いやな豆さんだねえ。そんな事を臆にも出してお哭れでない。誠に百几帳面だわ。」豆「ットそれだから、ありはしまいといふのサ。又そんな筋合ひが有つて御覧じろ。ねえ旦那、かく申す私はじめお味方を申して、直に攻め落しますヨ。其処等は決してお案じなせえますなヨ。此の嬢とは（お玉をさしていふ）が尿だ糞だといふ時分からしての馴染といふは、ノウお玉さん、俺ばかりだらう。そりやァ[illegible]根[illegible]の抜いて、幾歳の時に初花が咲いて、幾歳の時にソレ何様したといふ事まで、そりやァ産みの慈母よりやァ、精しく知つて居るから、私に逢つちやァ一言もなしさ。ハヽヽヽ」豆「左様いふと豆公老年の懐鋤めくぜ」玉「ところが、老いては倍々壮んなるべしと、漢の唐人が云つた通り、年々歳々に若やぎます」豆「そりやァ宜いが、幾歳の時に初花が咲いて、夫れから幾歳の時に何様したか其処を聞きてえネ」玉「其処は彼の講釈師が、肝心の所へ行くと、後は明晩と云つて客を引くやうな理で。」玉「アレ豆さん、善い加減にお喋舌り。何も私の一代記を並べ立てないでも能いわネ」豆「アハヽヽヽ。十九や二十で一代記もねえもんだ。四半代記位な処だ。ハヽヽヽ」玉「イヤ、其の僕か

四半代までも、難有た頼事来然が有るといふものだから堪らねえ[illegible]お見んなはい。親もない者を、寄つて集つて何のこの[illegible]ないよ。私や[illegible]氣がかさいから、旦那に云はれると逆上ませて、氣がちがひさうになるわ」米「ハ、、、、、左樣だらう。根が遠女と云ふものだから。その遠女と云ふ[illegible]、今時の遠女は油断がならねえ。一向に世話でもあるめえ。[illegible]米「そりや左樣さ、[illegible]に出来るもんぢやねえ。[illegible]といふものは、[illegible]、商売柄[illegible]たかの[illegible]ではねえ。[illegible]ハ、、、、、こりや可笑しい。ナニお前を冷評したつて、[illegible]」米「[illegible]だらう」米「ハ、、、、、どうも成らねえ、[illegible]か御不興となる、[illegible]二チ二チ、お前は[illegible]のでないけれど、先刻から旦那に存分[illegible]から、是れから[illegible]苛め返して上げなくツちやア。」米「女が[illegible]」米「[illegible]」米「エ、、モ囂しい。何とでもお言ひ、どうせお前の口には[illegible]、此方は[illegible]飲む方が宜いわ」米「[illegible]、お玉は手弱で[illegible]」[illegible]しけ、此と此方へも[illegible]宜いかね[illegible]、[illegible]を[illegible]つた[illegible]には、[illegible]其の

猪口を取り返さんとするを取らせず、取らう遣らじと取つ付き引つ付き、坐相撲に異ならず。お玉は負けじと力を入れに、押せば此方も倒されじと、押し合ふ途端にばつたりと、兩個一所に倒るれば、透かさず豆八押入より、蒲團を出して引被せ、豆「サア、仲直りは濟んだ〳〵。仲人の役、御祝儀はしつかり頂かにやァなりません」ト、押へ付ければ、玉「ア、苦しい、豆さん鳥渡起しておくれヨ。アレサ息が詰るわネ。」豆「そんなら、是れから些とでも、痴話喧嘩をしッこなしだヨ」玉「モウ〳〵謝つた謝つた」豆「そんなら起してあげやせう」ト、蒲團を捲れば起き上る。お玉は鬢を撫であげながら、玉「お前は能ク〳〵ふざけるよ。髪を臺なしにしたわナ、にくらしい」豆「ハヽヽヽヽ、夫婦喧嘩の仲人は、後で憎まれねへ例なしサ」玉「それだつて、強く押へ付けるものヲ」豆「サア息繼に、一ッお飲んなせへ。ハヽヽヽ」玉「ヲヤ、槃さんは直に寢るのかノウ、後生樂なこ。エ、槃さん、モシ旦那鳥渡マァお起きなさいヨ」ト搖る。槃「ム、〳〵、マァ些と斯うして置いて呉んな。」豆「夫んなら左様してお置きなせへ。ドレ私も歸りやせう。」ト、立ち上る。此の時慈姑も歸り來り、慈「イヤ〳〵、旦那がまたお醉ひ被成つたか。」玉「慈姑片を鎖めてお寢。私も寢るから。」と、例の通り戸締をして、母は二階へ行きければ、お玉は槃兵衛を搖り起して、玉「サア本當にお寢ヨ。風を引くわな。」槃「ム、ムム、引、豆八は歸つたか」玉「モウ歸つたヨ。サア一服呑んで目をお覺し」槃「些とばかり寢たかノ。」

ト、陽氣に當つたねえ。ナニ、何だか知らないが、急腹でお上りだからサ、私やアまた心配を仕なが
ら飲んだ所為か、一向酔はないヨ。ノ繁さん、お前機嫌が直つたかエ。ヱ、何の事たな、俺が飢
ゑ腹でも立ちやア仕まいし。夫れでも先刻は、何だか腹を立つてお在でおやんないか。夫れとも、
最う私に飽きたのかえ。ナニ、お前はお侍さんでも、私の好きな男でないよ。又お前に惚れたらうなさと、
お千代さんといふ立派な内儀さんの在るのを、承知で惚れた私だもの、そんな水臭い大胆ぢやアあり
ませんから、お前様も左様思つて下さい。ナニ俺だつても、何も浮氣ぢやアねえ、いつも云ふ
通りさ、若しお千代が悔しい事を云やア、暇を出して、お前を女房に入れようといふ位だものを。この
上は実に、「口は重寶とやら云ふだねえ、何様してお前様が、アノ可愛いお千代さんを出して、私を後へお
入れなはるものか、そんな氣休めはお云ひでない方が宜いわ。」繁「ナニ、妻もねえ、何の為に氣休め
を云ふものかエ。夫んならお前は、モシ入れたら何様する。」「ア何様してといつても、左様でもおや、私の
本望だわね。この死んでも宜いわ。」繁「そんなら今日に成つて来ふから。」「否何様しても、お千代さんを大事に
して下さいなはるがいい。そんな退屈した時にや、此處へも御出でなさいまし。」と繁三郎、左様なら然そ
と云ふと、お千代〳〵といふけれど、俺アそんなに惚惚けちやア居ねえ。夫れに彼奴が悪い事をし
たから、俺ア二三の縁を切つてしまつた。ナニ、惚れた云はねエ。此の上は、お里さん、お前も心にて、一緒に

ッと實が入れば、お玉は心に笑みを含み、まづ九分通り狂言が、甘く行つたと歡べど、故意と惱りせし容子にて、玉「ナニヱ、お千代様が淫奔をしたとえ。」寅「左様サ。」玉「何をおしだえ。」寅「ナニ、そりやァ後で知れるわな。」玉「そして、もう出してお仕舞ひのかえ。」寅「左様さ、俺が直に叩き出さうと思つたけれど、爺父が何か料簡があると云つて居るから、マア爺さんに任して置いたのさ。」玉「夫れぢやァ、爺さんが仲人で納まるだらう。」寅「馬鹿ァ言ひねえナ。他の事とは違ふわな。」玉「左様さねヱ、なんぼどうもそれがあつちやァ濟みませんねえ。」寅「お前また俺が宅へ這入つてから、他の郎に淫戯つちやァならねえぜ。」玉「まァ、私やァそんな浮薄者と見えるかねえ。可哀相に、お前様と斯うなつてからは、ホヽヽヽ唄の通り、雄猫でも抱いた事はありませんものを。」寅「附いても居ねえから、何うだか知れやァしねえ。」玉「附いて居てせへ、そんな事が出來るぢやァないか。ホヽヽヽヽ。」寅「コレサ、左様僻まねえでも、宜いぢやァねえか。」玉「アレ、左様ぢやァないよ。何でも能くノヽ氣にお當てだねえ。」寅「ナニサ、ツイ謝り〳〵。」玉「左様おいきに折れておくんなはりやァ、實に可愛いヨ。」寅「イタ、、、ヱ、酷い事をするなァ。ドレ此方でしめ殺してやらう。」折から雲居を翔る鴈の聲、遠く聞えて、漾々と更け渡る。

娘太平記操早引三編巻之上　終

第十三回

表の潜り戸を、からりと開けて、「お玉さん、宅かへ」と訪る、聲に、中仕切の障子を少し開けて、顔を突き出し、玉「オヤ悔らした。誰だと思つたら傳さんだね。お上りな」傳「上つても能いかえ。」玉「何だネ、をかアしな人だノウ。いつも無言つて上りながら。」傳「ナニ此れも例と違つて、蕩々々歩行かれやアせん」と云ひながら上る。玉「何故また、蕩々歩行かれないのだえ。」傳「何故と言ふかあるもんか。皆お前のお蔭だアな。」玉「何故、私が何うしたえ。」傳「へ、お玉さん、其儀にとぼけて貰ふめえ。アノ、お前に頼まれて、俺が體にかけて、無えもしねえ悪名が附いて居るだらうぢやアねえか。」玉「ム、お千代さんの一件かえ。」傳「コレサ、そんな餘所々々しい事を言つて居ちやア詰らねえぜ。今朝も八百屋の瓜助に聞いたが、繁さんが其の事を強勢腹を立つて、昨日お千代さんをば、何處へか遣つてしまつたさうだ。俺も只は置かねえと言つてるさうだ。勿論それやア俺も當惑の前だから、今更拒かる譯はねえが、だれにしろ、やアお前、約束の前を早くしてくれねえければ、誠に困るわ」玉「早くと

上げたいが、實に此の頃はネ、モウ生憎だッちやァないョ」ト「箕サン、實に此の頃はもねえもん
だ」ト「他人に大切な事を頼むからにやァ、お前の方でも、豫て覺悟して居て呉れるが宜いぢやァねえか
え、今になつて左樣のゝを突かせられちやァ、俺一個いゝ自棄だァ、馬鹿々々しい」ト「ヨウお臣さん、
今も云ふ通り、モウ俺ァ此の近所にまごノ\しちやァ居られねえから、是非今日は辨へて呉んねえ」
「其りやァお前、私が處は叶かないから、モウ、二三日お待ちョ　昨夜も繁さんが來たけれど、その一
件で口へこそ出さないが、モウ〳〵、氣むづかしく、腹を立つて居るから、中々丸印なんぞの事は、噫
にも出されないから、困るわネ」ト「フム、左樣か　そんならば、何うしても出來ねえかネ」ト「左樣
さ、今日はむづかしいネ」ト「むづかしかァ宜いにしやせう。夫れぢやァ俺も身の簡を立つて、明日
から活業でも始めようと」ト「またに想る緒を引留め、玉一文お前腹を立つのかえ」「其の一件を繁さんの
方へ、自訴けようといふのだらうが、夫れぢやァお前餘り埒らないぢやァないかネ」「左樣して見ると
私も詰らず、お前だつて何も立派な男にもなるまいぢやァないか」「立派にならうが成るめえが、
へこ、大きにお世話だ」ト「ヨウ放して呉んねえナ、面白くもねえ」ト「其樣に言はずと、宜いぢやァな
いか　夫れならネ傳さん、私が此處に些とばかりあるから、マア是れを上げて置かうから、後は二三
日お待ちなねえ」ト「左樣お前が解つて言やァ、何も俺ァ無理は云はねえ　左樣して養話ばかり貸し

て呉れる」。玉「左樣サ。たつた一兩はッきやアないヨ。」傳「餘りだなア、切めて三兩も貸しねえな」玉「三兩ある位なら、始めッから口を利きはしないわっ」傳「何の人ヲ、お前十兩やらうといふ約束だぢやアねえか。」玉「そりやア私が、八百屋へ乘り込むやうになつたらと言つたんだわ。」傳「モウお前、乘り込む一段に成つて居るぢやアねえか。此の位な大望をするのに、八兩や十兩ぢやア安いもんだ。[illegible]れに絲目を付ける事はねえわな。」ト、此刻の論判を聞きかねてや、お玉が母は仲の間に、苧を紡んで居たりしが、隔紙を開けて出で來り、母「傳さん、よくお出で。コウお玉、先刻から聞いて居りやア、僅かな事でかれ此れと云ふ容子だが、夫りやアお前が十分惡いヨ。俺ア此間中からの話し合ひを、聞いても聞かねえふりで居たけれど、今傳さんの云ふ通り、八百屋へ這入る一段に成つたのは、お前何と思ふか知らねえが、全く傳さんの骨折に違ひないのサ。是れから先はお前が胸一ッで、繁さんとの相談もあらうといふものだが、[illegible]慣れた人の事、夫れにその一件で、[illegible]日陰者にした[illegible]だから、何樣にもしてあげねばならねえ處だが、[illegible]傳さん、今も聞かさる通り、此の[illegible]が不都合だと言ふから、[illegible]何うでも[illegible]許へようか。[illegible]今日にも此れで間に合はしてお呉れよ。その代り、二三日の中にやア、此の[illegible]と約束をしてくれた通り、許へて上げさせようわネ。」傳「ム、よしく。」慈母の[illegible]に[illegible]呉れりや[illegible]

どうか俺が強請にでも來た樣で恰好が惡い。ハヽヽヽ。」甚「夫んならお玉、お前其處にあると言つたのを出しな。こりやァ俺が死金と思つて、大事にして置いたんだけれど、お前の方で出來る開貸して置かうコト、結構袋から一朱銀で二兩把り出し、都合三兩にして、甚「サァ傳さん、よく改めてお出でエ」傳「アイ、このやァコト、實ハ金を見せ、食指にて、其方此方と三度つゝつき、直に腰掛の蔭しへござらノ」と入れ、傳「そんなら、ふた三日の中に、お頼みだぜエコト、笑みを含みて立ち上り、鼻唄うたうて出て行けば、母は其の後を見送りて、小聲になり、甚「全體お前がわりいわな。十兩遣らうのなァのと餘り約束が大層過ぎらァ、滅法界な。」玉「アレサ、左樣言つて置いて、甘く往つたら、五兩も投けて置かうといふ氣だわネ。」甚「ハヽヽ、彼の男が、そんな手を食ふものか。お前は碌に知るめえが、彼の男は、近頃ちつと縮つて居る樣子だけれども、全體惡奴だァな。本來いつて見ると、此處等に居られる體ぢやァないのサ。」玉「オヤ左樣かネ。始めて聞いたヨ。夫れぢやァお構者とやらかネ。」甚「ム、左樣よ。餘程な惡いことがあつてノ、この土地を構はれて居るけれど、マァ隱れて居るやうなものサ。夫れでも御上のお慈悲で、活業をして居られるのは有り難えのサ。」玉「ムヽ、左樣いふ身狀の人かネエ。夫んならノ、繼母、モウ私の方の一件も、實に彼の人の言ふ通り、九分九厘までは狂言が附いて居て、最う彼の人が居なくつても宜いから、ツレ、いつも稽古に來る荒砥さんはネ、名高い青砥

様の御家中だから、アノ人を憐んで、此の土地を追拂はせようぢやアないか。左様すると、もう此の後、かれ是れ言つて來る氣遣ひもなし、其をよすれや、不都合だと思ふにや、わるい人を憐んだッけ。首尾能く八百屋へ乗り込んだ處が、何故その横曲にやら、實アノヘで五月蠅がらう、困つた事をしたッけと、實は後悔して居る處だから、左様なると、こつちはするのも宜いぢやアないか、そりや、お前よく氣が付いた。それなら大方、隣にや藤さんが來るだらうから、お前其處を立に僕に離しなさい、俺がまた、腑から長鼓を叩くまい、隣子を遣ふ内に、はや日は間けて晩に、「油屋でございっ お油よろしう。」

今しも宵に入りければ、毎夜の如く、どや〳〵と入り來る男の弟子、互に長所を競ひ合ふもの共、八や權やの交際は、三尺帶に手拭を、腰に挾むが職人の風俗、道樂者これにあれ、鳴物にも合はぬ高調子、銍にも合はぬ濁聲で、三年三月皆しんでも、上目使ひの白暇に、大音聲力まかせ、つたエ、自分では此節、師匠は甘き酸く、最初は手輕にたのしみ、酔ひが廻れば後を引き、二升三升三筋の曲彈、とう〳〵稽古所の制禁には、聞き覚え文句や端來節、其の外時の流行唄を、彈く所からして、遣はれたと、當時さんな日暮は通はず、師匠の方から時々出稽古に取られてならぬといふ、ともかくも世間並にかなりする。かくて日は、彼の蓑砥何某といふ

る人にむかひ、髪結傳吉が素性は、もと如此々々のものなれど、今此の土地に徘徊するは、君上を恐れぬ所爲なりと、ずゐぶん悪しく言ひ做しければ、荒砥は聞いて、主人荒砥左衛門は、世に聰明の賢人といはるゝ處に、髪結傳吉その罪有りながら、この土地に隠れ居るは、官人の威光うすきに似たり、きう〳〵小吏に言ひ付けて、傳吉をとらへさせ、その罪を糺す可しと言ひければ、お玉親子は心中に悦べど、故意と涙聲を體にもてなし、悪者にもせよ日頃から、心易き彼の傳吉、きびしき罪に處しぬやう、お執り成し下されと、口と心は表裏の、その陰悪を較ぶれば、傳吉にもなほ増さはいへれど、人の盛んなる時は、神佛もまた咎めなきにや、不義の富貴を極めけり。扨ても髪結の傳吉は、お玉が方より三兩の、金を取つて大きに悦び、心會ひたる友達を集め、飽くまで酒をうち喰らひ、或は賭博に夜を明して、心のまゝに振舞ふ程に、かの金もはや殘り少なく、もつとも二三日の其のうちには、また後金をまうけ取る可き、心だくみにいさゝか患へず、兎角して二日三日過ぎし處に、親しき友なる甲乙が、二三人口を揃へて、元來貴様は、此の土地を構はれて居る身分なるを、かくれて住居する由を、荒砥様の聞きつけて、今度きびしき命を下され、貴様を捕へて問答所へ、曳き來れとの事により、此處は手前を荒はさんとて、昨夜よりして、貴様の在家を此處彼處と尋ぬるなり、若しうか〳〵として居らば、たちまち縄目に及ぶべし。些とも早く身を隠せと、相

毛に精のつきしといふ、譬への如く嘲笑して告げれば、傳吉聞いて驚き騒ぎ、聊かの罪にて所を拂はれ、隱れて其所に住居するのも、我の身には限らぬを、何とて左様に騒しきぞ、然にあれ早く身を隱さずば、災ひまた近きにありと、思ふものから取り持つべき、調度衣類もあらざれば、其のまま其處を走り出で、先づいづくへか往くべきと、思案すれども當はなし、また知人のかたへ行きて、聞けば嚴しき詮議にて人相書までも廻し、尋ねらるゝ由をいふにぞ、傳吉ますく驚き周章て、いづくへ行くとも此の形容では、道のほどさへ氣づかはしと、剃刀とつてくるくると、天窓をまるく剃りたる、硝子鏡に影を映して、すゝ、これにては氣づかひなし、通りものゝ傳吉も、たれかとお殊勝の坊さんとは、おもひ掛けない新道心、これもの奉加はお主が殘念、それさへ取りに往かれぬ身の上、まゝよ、田舎はまた住み善からうと、小うた唄うて夜にまぎれ、いづくともなく行きにけり。

第十四回

雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立つて徘徊すと、白居易が昔も思ひ出られて興はあれど、猛風膚を劈きて、寒さに堪へねば火燵に這入り、壁に掛けたる三味線とりて、音も爽かなる爪

彈ぎに、一人心を慰むるは、又閑情の深くも有るべし。斯かる處へ表より、松「お玉さん、眞猫だネ。」ト、言はれてお玉は三絃を止め、玉「オヤお松さんかえ。お這入りナ。」松「邪魔にやァならないかえ。」玉「イヽエ、ちつともお差しなしだヨ。」松「そんなら這入らう。サアお前先へお這入りヨ。」ト、連れの男にいふ。男「マァ這入んねえ。」松「ムヽ、大分御遠慮だねエ。夫れならごさへ這入らう。」ト、言ひながら障子を開けて這入り、松「オヤ、唯一個かえ。」玉「アヽ、一個で寂しくつてならなかつたわ。よくお在でだねえ。雪は澤山降るかえ。」松「アヽ、そんなでもないわ。オヤ何樣したらう。」ト、後を向く。玉「誰ご來たのかえ。」松「アヽ、私の情人を連れて來たよ。ホヽヽヽ。」玉「オヤ磯さんかえ。珍らしいネエ。」ト、表の方を向き、大きな聲で、玉「磯さん、何だネ。早くお上りナ。」ト、言へども返事なし。お松は驅け出して、松「オヤ、何處か往つたヨ。」玉「何樣したんだのう。歸りやァ仕ないか。」松「ナニ、歸る事ちやァないヨ。大方小用でもして居るだらう。」玉「夫れでも、磯さんは誠に實があるねえ。私が知つても、最早丁度三年ばかりになるネエ。」松「アヽ、出入四年といふもの、アノ人の世話になるがネ。此の頃は彼の人も、些と左前だから不可ないわ。」玉「左樣かえ。夫れでも根が丈夫だから、動きひきはなからう。」松「ナニ、左樣でもないのさ。番頭が誠に惡者でネ、彼の人が他へ出て十兩遣ふと、店でまた十兩なくなるといふわけだから、たまらないわネ。」玉「お前また宅へ這入つて、何かの

取始末をおしなら宜い。丁度磯さんも内室はなし」磯「左様いく位なら、言分はないが、まさか左様も出来ないから。」玉「ナニお前、磯さんせへ其の気なら、訳はないぢやァないか。」磯「親類や何かで種種むづかしく云ふさうだから困るわネ。だれでもかう/\此の頃は、焦れッたくつてならないから、磯さんが来ると、ツイ悪いと思ひつゝ、無理を言つたり、無暗に焦れたりするもんだから、ナゼ、お前は何様かしたさうだ、其様に無理な女ぢやァなかつたがと、不思議がつて居るから、宜いぢやァないか。」玉「左様かえ。そりやァお前が悪いヨ。あんな善人を苛めちやァ冥利が悪いわ。」といふ処へ、表を開けて入り来るは、今噂の磯次郎、ずつと通りて、磯「お玉さん、真に御無沙汰。」玉「是いお見限りだねェ。たれでも、いつも御噂ばんで御目出度う」磯「お前、何処へお出でだ。」玉「ナニ、丁度其処まで。」磯「其処までもないもんだ。実綺かなお顔とんといたので、何えなしに名残して居たらう。イヤ好かねえ。」磯「マアお玉さん聞いてくんねえ。此の頃は何だ此様な事でも出来たのかァ知られねエが、磯逸アノ通り、私を籠めて許り居るよ。」玉「ナニサ、此の頃の方にやァ何もないけれど、夫れがお前さんの方に、何か出来たからの事であらうと思ふ……」磯「大不自由だ」玉「ヲヽ御勝手。女は其の贔屓はねァ仕ないネ。お玉さん……なすに、贔屓といふ評もないか、どうも私は考へて見るに、男ほど浮薄なものはないと思ふわネ」磯「マア、それやお左様だわ。其の中にも磯さんはネ、浮

薄の問屋だヨ。何故と云つて御覧。先頃もネ、私の所へ来る髪結さんの梳人を口説いたッサ。夫れがどんな嬢だかと思ふと、漸う十五歳ばかりになる、痘痕面の女児をサ。ホヽヽヽ。斯う見えても、何様に梵論貫だらう。」磯「コレサ、其様に悪く言はねえもんだァな。是れでも、死ぬ、死なうと云ふ者も、一個や半分は有るのサ。」松「フム、そりやァお楽しみだネ。そんな馬鹿者は、今の代世界にやァあるまいと思ふがネエ。」磯「処が、浮世は廣いの。」玉「オヤ／＼、お前方ァ、私の所へ此の雪の降るのに、夫婦喧嘩なしにお出でか。大きに御苦労だッけネエ。」幸「ハヽヽヽ、違へねえ。玉お玉さん、こんな奴を嚊にでもしたら、何様に喧しからう。私が一言いふと、五言六言七言八言、九言十言で返すから困りものヨ。」兵「へヽ、私よりやァ、お前の其の口が喧しいわネエ。」ト、いふ處へ表を開けて、男「ハイ、お誂へ。」ト言ひながら、岡持の中より、煮肴と鴨鍋を出し、一升徳利を置いて行く。玉「オヤ、彼の人、そりやァ間違ひぢやァないかエ。」磯「オットよし／＼。いま私が誂へて来たんだヨ。」玉「オヤ左様かえ。お止しならいいに。」松「私のうちの人も、此處らは随分氣が利いて居るネ。」ト、夫んならお燗をつけよう。お玉さん燗銚子は何處だえ。」玉「アレ、そりやァ私が出すヨ。」ト、是れより三人火鉢の側に團まつて、暫く酒宴あり。種々の雑談に時を移すと知るべし。幸「時にお玉さん、お前もいよ／＼繁さんの方へ、お輿入れと極つたさうだノ。」玉「イヽエ、だれにお聞きだ。」幸「へヽ、

そりやア蛇の道は蛇だからな。」○「眞實かえ。早く左樣なると宜いねエ。」「何うしてノヽ、そんな事はないヨ。」「些と夫れでも、お前其の心算で、繁さんもお千代さんと別れたと云ふ話だものヲ。」「ナアニ、そりやアネ。お千代さんが何だか惡戯があつたさうだから。」「まア、左樣かノ。」「ナニ夫れにしても、先の女房が居なくなりやア、仔細なしだからな。」「早く極めておしまひナ。お前の氣にも緻合はない。」「何を馬鹿々々として居られんだナ。」「私も早くしたいけれど、お繁さんもあるし、此處で繁さんの自由にもならない譯だから、じれッたいわ。」「幾ア、ノ、あんな老爺さんが何と言つたつて構ふ事はねえ。早く乘り込みなせエな。」「お繁さん、お前達の事だと思つて、左樣お言ひだが、其んなお前もまた、親類で何と言はうか、森嶋が不承知だらうが、俺はないさおみなされることか、出來さうなもんだねえ。」「些とナア、左樣揚足を取つておやりなさいな。」「俺と繁さんとは違ふわねえ。」「俺は歸つてる通り、養子の身分だから、左樣は行かねえわさ。」「其れに繁さんなんざア、お繁さんは眞實だから、他から見ると如何でも成りさうなものだと思ふけれど、又左樣も行かないさうでネ、何だかてノヽくして居るわ。」「私が今回逢つたら左樣言はう。」「お千代さんが承諾をして出た譯なら、矢の事お前を早く入れて、」「と見ると言はねえおやア可笑しいねえ。」「それでもまア、お千代さんに執念でも居るのだらうと思ふヨ。」「なに、左樣でもあるまいがやアないかえ。」「まア、屹度夫れに違ひない

「ヨウ、金儲さんは、お千代さんに惚れ切つて居たんだものナア。」まつ「ハ、、、、、。兎角女といふ奴ア、何様に通女のやうでも、愚痴を言ふやつサノ。」まつ「ナニ、愚痴でも嫉妬でもないが、夫れに違ひないノ、ト、隔心なき友達の噺は、互に遠慮なく、又杯の重なれば、自らなる高調子。折から潜戸がらりと開けて、ずッと這入る八百屋の半兵衛、半「何も彼も聞いたく。」「ヲヤ磯さんお久しう。」お松さん、お揃ひで何様で御座いますね。」半「イヤ、お前様マアびつくらおさせだね。出し抜けに來てサ。」「左様だらうく、俺が居ねえと思つて、直様に悪く言つたノウ。」半「皆、表で聞きやした。」ト、言ひながらお玉の側に坐る。半「実にモシ、一別以来だネ。持ち合はせを一ツ。」「ハイ頂きませう。今日の雪に珍らしい、マア何うしてお出でなすつた。」半「ハイ、歩行いて參つたのサ。」「ホイ、これは御挨拶。どうも近頃婦人の口が悪く成つたには恐れるネエ、磯さん。」いそ「左様サ。口も悪いが人も悪いヨ、外面如菩薩で各々に美しい優しい顔はして居るが。」たま「ヱヱお巨さん、方人が出来たと思つて、徐々悪く言ひ出すから宜いぢやアないか。ホ、、、、。」いそ「知れた事サ。是れからア漢士が二個になつたから、そう言ひ合つても負けねえぜ。今までぢやア兩個して、私一人を何様に苛めたらう。」まつ「餘り苛められて居る風でもあるまいねエ。ホ、、、、。」いそ「磯さんを苛めたか苛めねえか知らねえが、俺がことをば強勢悪く言つたぜ。」まつ「マア、嘘ばつかり。お前様も餘程な邪推者だヨ。ネエお松さん、私が案さ

んの事を悪く言ひはしないネエ。一「然うサ、、悪くいふ處か、今上で何樣に忙惚けて居ろうう」「夫ハ

ハ、、、合點の程ハまさも、すんと昔の流行唄だ」「サアレ可笑ッしま幸さんだ　お前樣其實竈

樣にお成んなすつたね、左樣は成りたくないものだねエ」「夫りよいと私が申たよつて言ひますか、

こう繁さん、早く此の樣に寢を宅へ入れるや、何樣で御座いやすと。竈も此度是れお松をいよいよ

くれる積りですか、サア、、此月の内に在ッた時から、あの道った　堅う良人を通に

教へれたら、物にね、三浦見が大きいから、まで慣かれ勢すゑ、、、、、「怖いといい日

だうヤ、、煙管で打へ貰やうる其れから御用、顔だ、もう古い物語にお要り處け、見ると

もたい。夫れで、何樣も其處等中から評判ねへ。なれる。それでお幸さんは、幸さんが折節深

めに言つてくれるなら、世間でもおしなっ紛らすことともなく、本當は仕すないって　幸サ、、御

かも口が。左樣言つてお嘆んなさるのは、實に宗旨を合の無い、大分の人、其れで情さ、、大分

通の仕事がしたい。「それや、實にもっとしてからの仕かは何處で引っ掛って居るか」「いや私ね

まあ、お前さも成つても、ま千代の事件で、と論は言った心を聞くのか、利ですけ此

の辯罪かすなにや、、懐古をあけて確かになくて若や分からない土、青年組の苛々へ泣かせたで、

ト、、然る處傳吉は、此の頭を取りつて嘩となつた、、夫をお持て嫁となすつた、今泣かせし者、被

ふよし。其處で老爺も些と當惑の容子だから、私が言ふにやァ、夫れ御覽じろ。傳吉の身に過りのないものが逃げる筈がない。モウ／＼夫れで一も二も入らない譯だから、お千代をば此の離縁狀をつけて、田舍へ返してお貰ひなせえと、三行半を書いて老爺に渡したから、モウ此方は此方の勝手次第。何れ近い内に、お玉を入れると極めて仕舞ふ積りサ。」磯「ム、成程、夫れぢやァ老爺さんの念も晴れた理窟だ。」磯「お玉さん、マァお目出度う。お前なんざァ誠に羨ましいねえ。思ひ通りに成つて。」玉「お前も早く左樣おしなねえ。」繁「私の方は、左樣手輕くは行かない譯だものヲ。」玉「夫れならネ、繁さん、私が明日行つて、老爺を說き付けよう。善は急げだ、風の變らねえうちが好いよ。」ト、思ひ寄らざる磯次郎が乘氣になつて勸めける。御意は吉野の櫻餅、甘き言葉に繁兵衛も、お玉も倶に膝すり寄せて、頼めば磯次郎は承知して、夫れより半六に逢ひ、お千代が不義せし由、其の面當にもなる事なれば、お玉を早々後添に迎へて然るべしと、詞を盡して勸めければ、半六今は詮方なく、兎も角も繁兵衛が心に任せ、萬事は宜しく頼むとの事。然りながらお玉は氏素性も、定かならぬ女の事なれば、直に後配とも披露し難し。先づ／＼客分同樣に引き取り置き、その上にて世間への弘めは、何樣でも成る事といふにより、磯次郎は其の由を心得て、繁兵衛にも逐一話し合ひ、またお玉母子にもよきやうに談合して、吉日を選み、お玉は繁兵衛が方へ引移り、母は元の所に居て、孤獨住みの樂な生活萬

團吉兵衛が仕送りにて、何不足なき暮しをなしければ、差當り何不足なかりけり。

娘太平記操早引三編卷之中 終

娘太平記操早引　三編巻之下

第十五回

山田守るそほづの身こそ哀れなれ。秋果てぬれば、稀に訪ふ人さへぞなき小部屋のうち、お千代はここに預けられ、姑とは名のみ、血脈にはあらぬ舅の妹なれば、朝な夕なの氣配ひ、平生に事の塞がりし、三度の箸は取りながら、食さへ細る切なさに、顔の色さへ例ならず、うつら／＼と送る日は、算へ盡きねど舅の方より、今に於て善悪の音信なきは何事ぞ。此の身の證明の立たざるにや。若しさもあらば奈何にしてか、身の潔白を他に知らせん。思へば悲しき身の上と、先の先まで兎や角と、案じ過すも無理ならぬ、女心の不便なる。

抑も此の家の姑と云へるは、八百屋半六が妹にて、名をば沖瀬と呼び做しつ、米問屋の作兵衛と云へる者の方へ嫁入りしけるが、沖瀬が三十四五の頃、作兵衛は世を去りけるに、子といふ者のあらざれば、養子して後を立てんと、半六など倶々相談しけるに、作兵衛が親類にて、藤八と云へるものは、心善からぬ男にて、作兵衛が世を去りしを幸ひ、米問屋を我がものにせんと、此の相談に

不便ながら、神瀬も未だ年若なれば、他方へ嫁入らせ、作兵衛が跡式と、我が子藤太郎に継がせんことせしけるに、神瀬は之を承け引かず、列女の跡を践まんことは、自然もあれば兎も角も、夫れに違背はあらねども、再び縁につく事は、思ひも寄らずと云ひ放すに、藤八が心には、神瀬が此處の家に在りては、萬事につけて邪魔になれば、かれ是れと云ひくるめ、此の長谷寺の境内へ移らせ、下女と下男を附け置けども、切り詰めたる宛行にて、萬事不自由勝なれど、神瀬は老母に事へつゝも、是れも時節ぞなりと、艱難を氣楽にすんなりの、世の憂しみと月を送るに、それ天道に違ひつるを嘆く、恩に驕りし、悪に報いし上の罰、藤八が強慾にて、押領したる他家の遺産を横に領け、聞物の端に献して宗門に…其の罪を宥めたりしが、其の程に藤八も、見と云ふ者あらざれば、養子をせんと思ふに付け、折節我が手に入りたりし、宗門の枝太郎、其の子次郎は役に立つなりと、表向きに養子と披露し、内證にして我が身を悦びて、次郎の郷助と云ふ、次郎八に讓りしかど、次郎八は、己が養子の藤次郎といふに其の跡を繼がせ、とて藤八は何時迄も、其の他事に紛れたれば、暫く保見を願むとて、其の名を繼を許せるにこそ、藤八に縋りつゝ、或は酒色の席に見世て、田舎藤子を勧めつゝ、隠居同然の宛行を、年々に減ずれば、神瀬は大きに悲しみて、養子藤次郎を呼びつけて、理非を言ふ事もなかりし、罵声に藤八がことなかりしと、叱りつけ

程は、久しく隠居の安否を問はず、いとも疎遠に送れども、彼の繁兵衛とは合口にて、交はりも深き故八百屋の方へは音信れて、扨こそ今度も磯次郎が、お玉の事を彼是と、半六へも云ひしなり。賣卜人の聲「安倍の晴明ひとり占ひ、當時當用身の上の吉凶、願ひ事、望み事、夢判じ、夢の見徳、走り人、待ち人、失せ物は即座に知れる、算木をつけて十六文」ト、高聲出して呼び歩くを聞きつけて小舎より、お千代は徐々と立ち出でて、下女のお兼を呼び、千代「アノお兼どんや、今賣つて來たものを、一ツ買つておくれな。」かね「ヘイ／＼、又お前さん、種々お氣をお揉みあそばして、困つたもので御座いますネエ。あんな物が何の宛になりますものか。お止し遊ばせば宜う御座います。」千代「マア、中らなくツても能いから、アレ、モウ遠くへ行つたぢやァないか。」かね「そんなら、マァお心のおせに召して、占つて御覧じまし」ト驅け出して、彼の占ひの本と算木を買つて來り、行燈の前へ廣げて、かね「サァ、御覧遊ばせ。」千代「そして、このやァ何様するんだねえ。」かね「アノネ、斯うで御座いますヨ。マァ此の算木とやらをよく頂いて、願ひ事なら願ひ事、何でも各々の思ふ事を念じて、木の上へ投げますのサ。左様して、この書へ合はせて、其處に書いてある字を讀んで見ますと、叶ふか叶はないか知れると申しますが、ネエ、左様うまく中りはいたしません。」千代「夫れだから中るも八卦、中らぬも八卦と申すぢやァ御座いませんか。」お、、、、。」千代「夫れでは、宛にやァならないかネ。」

金「何樣してお前さん、これが宛になりませう。それだから、私はこんな事は嫌ひで御座いますの
よ。宜いと思ふ事でも、萬一惡いと出ますと、氣に懸りますものネ」「それはまた左樣だネエ。それ
おやァ私も止しにしようか。萬一惡く出ると厭だから」「イヤお止し遊ばせヨ。矢張りお氣の揉める
種で御座いますわ」「ま、、、、。」「イヤお兼や、お前はいつも宜い元氣で誠に羨ましいヨ」「何うした
ら左樣いふ氣になられるだらうネエ」「又私の樣に、先の先まで考へて、苦勞にするのは眞に損な性だ
と思ふけれども、何樣も質性だから仕方がないわ」「ですが私ヤまた、今まで苦勞と云ふは、何樣な事
だか存じませんわ。是れも大方馬鹿の中で御座いますう」「ま、、、、。」「然し、お前樣のやうな目に逢
ひましたら、嘸苦勞で御座いませうけれども、ナニ、またお前樣が私なら、そんな非義非道をいふ
良人なら、先よりか此方からおさらばノヽで、また程の宜い實のある、情の深い人を良人に致します
わ」「假令惡名を附けられましたって、此方の身さへ清ければ、何にも怖い事も、恐ろしい事も御座い
ません」「私ゃァそんな無理難題をいったり、人の癪に障って騒ぐ樣な人は、假令男振が業平の樣
で、金の中に埋って居るやうな人でも、其は大嫌ひ、ネ、厭な事かなこと、身をぶるノヽと慄はせて、
お千代が顔をじっと見るも、かれや是れやの話を聞いて、所詮くづれと思ふから、お千代が心を勵ま
して、在所へ歸り相應の、所へ再び緣付かば、雙方ともによからんと、思ふ言葉の端々は、お千代も

それと推量し、實に尤もなる詞とは、思へど左樣は諦める、事さへならぬ温厚しさ、女兒育ちの身の上には、是れに越したる大難の、またあるべしとも思はれず、胸に迫りて人目さへ、恥ぢぬ涙を堰きかねて、はらはらと落つる膝の上、手早く拭ひて莞爾と、笑ふ眼元に露含むは、いかに切なき心根ぞ、想像やるさへ哀れなり。「千代ほんにお前のいふ通り、それに些とも違ひはないけれど、私も今は兩親もなし。たつた一人の兄樣も、一昨年の秋辭世つて、今は從弟の桑太郎といふのが、後を續つて居るけれど、誠に心意氣の善くない人で、私は宅に居る時分から、仲の惡い從弟だから、たゞほんの親家といふ名ばかりで、一年に二度か三度、手紙の遣り取りでもする分の事、疎々しく成つては居るし、其が斯ういふ譯になつて見ると、いづれ始終は親家へ歸る樣になるが、夫れも一通りの事なら詫方もないけれど、ヤレ密夫をしたの、淫奔をしたのと、惡名が附いて見ると、假令舌を嚙んで死ねばと言つて、阿容々々と歸られる義理でもないと思へば、實に私は宿なし同然で、繁さんの所を追ひ出されて見ると、往き所のない身分サ。そんな事も、委しく知つて居たから、よく〳〵糺しも仕ないで、繁さんが腹を立つて、今出て行けとお言ひのは、餘り邪慳かと思ふけれど、又能く考へて見ると、傳吉の容子といひ、どうも私の邪推かは知らないが、何でもお玉の細工に違ひなからうと思ふのサ。それだけれど、夫れを言ひ立つて見ると、また嫉妬だの、ヤレ惡名を消さうと思つて、罪もない者に罪

を[illegible]と云はれて見ると、全く私の身詰りになるから、ヽア[illegible]になつて、傍に[illegible]
れと気が揉んで下さるから、お任せ申して置くけれど、[illegible]、日増しく[illegible]
つて、[illegible]何うしたら宜からうと、気がいら〳〵して来るよ」[illegible]至極御尤もで御座いま
すが、[illegible]云はば、お[illegible]御座いますから、此様な事になりました。」千代「そりやァお前が云
はずとも[illegible]私が又[illegible]、[illegible]、[illegible]
日頃[illegible]お気に入らないと[illegible]、人があるからだと、能い[illegible]
にして、追ひ出されたのを[illegible]やァ御座いません。アノ繁さんが
お[illegible]さんと[illegible]に、[illegible]
これを構はず[illegible]置を遊ばしてするのだから、[illegible]、[illegible]に[illegible]
成りますから、それを申す[illegible]
お繁さんの様な[illegible]、[illegible]世間[illegible]、[illegible]好し、裁縫は好し。
事に於ては、[illegible]の端までも[illegible]して、[illegible]、[illegible]か。
[illegible]、真に申して[illegible]、[illegible]加減に
冷評しなヨ。何ぼ各々の身にかゝらない事たッても、除り気楽に[illegible]、[illegible]、

お兼は莞爾笑み含みて、兼「コレ、左樣何も彼もお氣にお掛け遊ばしちやア否で御座いますョ。ナニお前樣を冷評しますので御座いませう」ト、若い同志の物語は、喜怒哀樂も交雜にて、詞の文の後前の、揃はぬも又あどけなし。折から姑の歸りしかば、噺は他に移りつゝ、お千代は秦山の音信を、今日か今日かと待ちにけり、

第十六回

憂き事のある度毎に身を投げば、深き溪こそ淺くなるらめ。是れは昔の言の葉にて、それ人情の赴く處、今も昔も變りなければ、身の憂き時は命さへ、捨てんと思ふも理なり。されば お千代は此處にありて、朝な夕なに半六が、善き音信を待つのみにて、他に用なき身なればや、事に紛るゝ間もなく、只其の事の胸にのみ、塞ぎて今は病となり、うつら／＼と起きもせず、寢もせで暮す小舍の中、いとゞ心も結ぼれて、添ひ遂げられぬ縁なら、一層死んでと世を喞つ、唯一筋の心根は、哀れぞ增る初夜の鐘。折から沖瀬は隔襖を、そろりと開けて内に入り、沖瀬「どうだえ鹽梅は。些とも宜いかノ。お前の病は不殘氣から出るのだから、前後に構はず、些と保養でもすれば好いけれど、奥山へ淨瑠璃でも聞きにお出でと云つても、それさへ否だと言ふから困つたものだ。勿論お前の身になつて見れ

ば、夫れも無理はないけれど、たんぼ女でも、左樣氣を狹く持つちや、いけないわねえ」丈八「ハイ有り難う御座います。私も左樣存じますが、どうも若旦那のお氣に入らんとか、又私の樣な不束者で、お間に合はないとか言ふ事で、離縁と被仰るなら詮方も御座いませんが、無いもしない名を付けられましたのが、誠に殘念でなりませんから、其の惡名の拔けない中は、死ぬには死なれず、何の因果かと思ひますと、誠に[illegible]いで參つてなりません」ト、問なく〳〵に村時雨、枕の上にははら〳〵と、落す涙のいぢらしさ。娘の淵瀨も貰ひ泣き、「[illegible]まア困つたものさねえ。お前に[illegible]したら、又伜がせる種だと思つて、今日までは默つて居たが、どうも私も苦勞になるから、實は此の間樣子を聞きに行つて見ると、其のお玉とやら云ふ女が、宅へ來て居る樣子。ハテナ、此方の片も付けないで、どういふ譯だかと、兄さん（牛六を云ふ）に聞いた處が、大きに兄さんの思ひ入れの違つた事があつて、困つて居なさるのさ」ト、聞いてお千代は胸にどつきり、悋氣は自ら嗜んでも、扨は父子（卜六[illegible]）が同樣になり、無き名を負はして追ひ拂ふ、夫が[illegible]第一に[illegible]て、秦山の[illegible]思と見せたるも、昔言ひ交せし[illegible]言とは今こそ思ひ白糸か、小首傾けて此の日頃、音信もなき中[illegible]もなき人の心は斷く[illegible]の、[illegible]き[illegible]の情なしと、思へばいよ〳〵寒かる[illegible]を、押す力さへ中々に、弱り果てたる面持を、見るに心も氣の毒、繼る思ひを取り直して、[illegible]まア、其の譯といふは、兄さんの心では、何でも[illegible]に違ひはあるまい。

左様して見れば傳吉を、酷い目に逢はして私したら、自分が悪いが分解らうと、それならいゝ下さい話して、頼んだ處が傳吉は、どういふ譯か逃げてさうで左様して見ると汝様が、有つたに違ひない、から、當惑いと離縁して、お前を後へ直さうと、嘉兵衛が言ふのも道理で、それには中に立つ人もあり、成らぬともいひかねて、またあの〳〵客分同様に、こゝに日前から來て居ると、聞いては私も落膽して、お前が心の真直なのをも、兄様に能く話して、假令離縁に成れまでも、其の悪名を濯ぎ拔くやうにして、おくんなさいと言つては來たが、肝心の傳吉が居なく成つては、此れを證據に詮明を立てようにも、いふ下排の者が無く成つたやうなもの。たれだか〳〵、お千代、能く聞きな。悪くなければ吉もかならず、さんな事があらうとも、悪氣を出さず正直に、守つて居れば良天様のお恵みで、決して悪い事はない。假令明日が日離縁に成つても、お前が悪くないと云ふは、此の私が知つて居る。今斯うして、不自由の生活をばして居るものの、お前一人の孝成行は、どうでも仕て遣らうから、思入れ氣を強く持つて、早く病氣も癒るやうに、氣を取り直して居なせとこ一ト、眞實見する言葉の露、お千代は聞いて嬉しさに、又も涙ゝ一滴、いと頼もしくは思へども、又つく〴〵と思ひ返せば、此の姑とても良人の血統、今は弱もあれ縁の絲の、切れては此處にべん〳〵と、世話になりて居られもせまいし、傾み切つたる素由さへ、心の變るは人の平生、況して姑御は女の事、血統を捨てゝ他人の此の身を、世話

にせんとは約束なしと、先の先まで案じ入りたる濡れ身に請合ゐ、さはやと思ふ人さへも、長良の舘の椅子、朽ちて甲斐なき思ひには、いとゞ病も増す毎、窶す姿も日に添ひて衰へ行くこそ哀れなれ。姉の病勢は心を付けて、お千代が心を慰めつゝ、努めて事の眞實なれど、病は氣欝の症より出でて、稍稍に重り行けば、今は等閑にも捨て置き難く、醫師は元より加持祈禱、或は名を醫學士と、頼みならぬ手當にも、病の勢ひ強きにや、何れも少しの效目なく、此の程はにや他も煩らす。それに半六にも言合して、お千代が國家たる桑三郎へ、委しき譯は逢うての話、まづ大概の由を知らせて遣へが宜からんと、文認めて表書は、半六が名を書いて、密かに届け遣はしけるが、甲斐太郎も素にて、來る事も叶ひ難く、萬事宜しく頼むとの、返事の文も簡單にて、並ての通の書状を、寄越しにければ術もなく、又半六は世間の手前、兼ね病が見捨てぬ事なれば、お千代に對面させて、諸事萬端とお家とのみ、陰に離れず種々に、看病すれど日に増して、痛み少なき様子にもあれど、熱はとて呼ぶ可き處處もなけれど、宜くは從が心細さは、何に譬へん由もなく、見る慰めたるお千代が見ては、不思に溢の先さへ暗りて、斯くなる時に精人は、一日も早く歸り行きて、實に覺束なくなりしかば、早速御在宅へ人を走らせ、半六に内々報らせ、後の事をも語らふに、親家よりとしては、萬の事まさに頼むとの事なれば、今まに請合するにも及ばじ、日を追うて、當座の手當をするが肝要なれど、お千代が手へは渡さね

ど、藤兵衛より離縁狀を、出したる妻の事なれば、八百屋の寺へは葬られず。沖瀨が寺は本寺よりして、掛け合はざれば承引すまじ。殊に葬送の營みも、謂はば內證の葬ひにて、こと大層にもなし難からん。如何にせんと語らふに、倖借下女のお兼が寺は、此處よりして程近し。されば寺へはお兼が姉と、云ひ拵へて葬るならば、手輕に物も費はんと、云ふに依りて其の意に從ひ、卽ちお兼が親元へ賴み、其の翌日の夕方に、長家の中乙五六人、其のなかに年長なる、人に萬事の世話を賴み、由井の鄕なる寶玉寺へ送りける。然れば、寺にては方式の如く、經を讀み引導わたして、さて此の寺は一向宗にて、死者は荼毘の煙となす。宗門にてありければ、鑑札をうけ取りて、蟇が谷の火屋へ昇き入れければ、隱亡は出でこれを請取り、こゝでも廻向の經など讀み、ほどなく日も暮れければ、隱亡は庫裏に行き、隱亡「サア、鈍寥起きろ／＼。客人が御座つたぞよ。」ト、呼び起されて欠伸のびをし、目をこすりこすり出で來るは、年頃二十許りなる、色黑みたる大の男が、天窗に手拭卷きたれば、僧か俗かは知らねども、名を鈍寥と呼ぶからは、さしも賣僧と思はれたり。人々を見て會釋をし、鈍寥「客人はたつた一ツかネ。此の頃は何ういふもんだか、箆棒に暇だなア。モシお前方は何處で御座いますえ。」長家の人「ハイ、私共は長谷の地內さ。」鈍寥「フゝ、夫れぢやアちかいネ。マァ一服おやんなせえ。いまに火屋へ入れやせう。佛樣は男か女かネ。」長家の人「アイ、女も女、しかも若い美しいのだ。」鈍「ハ、

ハ、、、うちへ言ひなされ、いくらうつくしくっても、死んだ者ア聲は出さねえ、たゞにえ、並焼かえ。」

與一ア、、左様か。」與三たんなら、どうぞ親爺を一寸お呼びなせえ。」兵衛「へい、、、、親爺にね

えられたは、そして一歩の二歩のと出すやうなものもやアねえ、唯し些少の手間で、一寸お上げなすっ

與十三人を、施主の三四人もついて來たかい、それと定まってのやいかねえ。」與「そりやア、こ

りやア横目ぢやアねえわえ、其家の後で、拵へた、來た人はかうした、い、、、、一寸、聞かうか、お

えたと、その前何でも言う御座んせ。しかし一寸でつまらねえ、、、、田舎へ出て、、、、、は

ひこがら、夜の若衆が引續けて、原の中へ行く時に、此處の人も俺にへ参、門口まで行かう二本を

渡し、また隠亡の前を通りて、、、、、、これで龍う、おしまひに、又

私等が骨寄せに來やせうから、頼み申しやす、、、、新墓所なんどに行かう、保護の爲に、

小塚原へかゝり、千住へ出れ、指ヶ谷を過ぎて、、、、、、由緒か、向かう、、、野蒼

の途の畑田から、見れば背しいですれど、早く喪帯した、これと、、、なりくく

て御空は鏡を持ち出で、傍にかけたる鍵を引い、切り裏返しには紹なに、また棒、、、死社、

片仮名に東ね、畠田の畦に建め杏の、また清、、花、、、をしめ、まあ、、、傍

もクしくこんな一ぴ吹かれた、これからもこの世の思でもあらうから、其のあたり人はなし、

口説いて見る氣にもならうけれども、水より冷え體となつちやア、あゝ南無阿彌陀々々々々々。」ト、言ひつゝ、兩手をさし入れて、桶よりぐつと引出し、亡者の顏をつくづくと、見て居たりしが呆れ顏、「ハテナ、どうも此の佛は、見覺えのある顏だ。勿論生顏と死顏とは、相格のかはるものだが、イヤ何樣見ても違へねえ。併しそれにしちやア、觀音樣の地内だと云ふのも合點が行かねえ。ハテナア。」ト、腕を組み、暫く見詰めてありけるが、「何樣見ても八百屋の娘、お千代さんに相違ねえが、何樣いふ筋で、地内から送られる譯になつたか。こりやア必定あの一件から、勘當されて離縁になつたのだらう。」ト云つた處が田舍にやア、頑固とした親類もあり、地内に居ようはずがねえがナア、そのやアやア兎も角も、畢竟云はば僅かな金に目が眩んで、器量といひ、氣性といひ、十人勝りの貞實者に、惡名つけた此方の罪、忽ち廻つて其の金を、たつた二兩遣ふうち、土地にも居られねえ譯が出來、おまけに天窓をへこへこと、格好なしに隱亡の、下働きとは氣が着かねえ。其れさへあるに此の死骸を、また俺が手にかけて、燒くと云ふなア、ハテナア不思議な因緣だわえ。コウお千代さん、堪忍しなよ。さぞ、お前死ぬまでも、俺を怨みに思つたらう。其れと云ふもお玉めが、骨折賃をしつかりと、遣らうといふから慾に迷つて、證文を拵へたり、簪まで盗んだり、惡方書いた身の情ない、コレ此の姿になりやした。」ト、生きたる人に物いふごとく、詫言しながら手拭取れば、さも恐ろしき毛毬栗天窓、

見ドレ、そんならばと、また上り、頭を子と抱き擁へて、頭の髪をはらりと切れば、切らるゝ娘にお千代は驚き、はッたと合はし鋏の竹、死罪の法に自然、叶ひしものか、と一遍、親子涙を拭き上げて、見まゝ、気が付いたか、蘇生つたか、お千代々々と二、三、呼ばる、娘の耳に入り、眼を開きく見開いて、四辺見したる此場の有様、親子しつゝ語りまし。二人も手をひ我にたち、見定め頭くは元もなほ此度は誰ア奴の情に、たまたま上はいかにもせ、と嬉しげに涙ぐんで只蘇生つて居った様な、何ぁるか有難さ。今気もしうかの持ちなき、よく御人お千代は心さ、もんさい死にしても来たのぢや、それにしても不吉ノる、そもじうお前に冥途の懺悔する、ただ懺悔抑け不足いて、死んだ体まで胡乱する者だ、是非動しもやうしに、親の前よりも先に罷る、仕業なゝも道理なり。畢竟お千代が縁談より、こゝろ起は発頭にてる、再四辺に嘆しい空、全篇の趣向を知らるべし。

娘太平記操早引三編巻之下　終

だれ戯作の本意たるや、勧善懲悪の理を明らかにして、漢文字に暗き婦人女子、童蒙の教へに設けしものゆゑ、且當時時好に協へんとて、或は荒唐無稽の趣向を巧み、專ら人情世態の、穿ちを旨として、いとゞ馬鹿らしい事をまをすと、北里の言葉其のまゝに、猥りに書いて風流下り、故人の作意に反くものから、わかき人は意気だと褒むれど、[illegible]の年には、好むものと出来、一理なきにはあらざれど、其處に作者の用心あり、[illegible]これを見よといはれても問き、[illegible]のあやしくれは鶴、つゝまれ處に鑿き一言、教訓の心を持たせて、[illegible]同子作の苦心、さる、意をつけて見たまへましといふ

于時已亥の仲冬

松亭主人戯題

娘太平記操早引四編巻之上

東都　松亭金水編次

第十七回

今川了俊が壁書にも、よく主人の愛する處を見て、其言に順れといふ。貴とる處、人の好む處ある時は、必ず其の道を好む友を愛す。例へば碁盤を好む人は、必ず碁客を友にす。或は詩作る人は酒徒を友とするの類い、これを以て知るべきなり。されば八百屋兵衛は、このごろある身代の語をまとて、鼠の手代と云ふ事ありして、五兵衛へ入れ替、世間の口を塞ぎには、其一話ある者を撰みて、内実されたる名ある、其目で働く事にて、大概の御りんとどめる者、とある役僧の座敷隣に、若い女中の臥所は郡い、小間の他は女中の事なく、朝夕寝ると早起して、身を拭ひ場所、されば下女に持ち、運び立て、朝飯が済むか、たがひか、自由を恐れて……

若者半六は折に觸れ、見聞につけて氣を痛め、目前に見る有樣や、耳には老爺が噂しにつけ、謡はれたる心地して、自ら叔ば世間のきこえさへ、まるしも其さる兩個が行狀、同樣したものと毀譽ましし、身にも苦勞になり出で、日暮に氣を痛めるとは、知るやしむ時の俄樣へ、猥褻話に今更に、否がなけれど風俗を上品にしやうと陰言に、下女や丁稚が口の端にも、いゝわけにさへ端たなき。折から來る淀幾次郎が、二世上りだけし円熟は顯者、いまでは地味な女房に、惚氣の話も目に立たぬ、やうに目立れど何處やらが、意氣でくつきり垢拔けしは、其者の果ことと知られけれ。幾「ア、旦那草臥れた。お富さん、歸つたよ。ア、今朝神樂坂に出て、來たかへしちやいけない」富「ヲヤ、左樣か。六なさい、御存知だお茶にでもいいと、此處の書をもつて、老爺さんが居ないと、ふつにどんだかいけれども、與吉も何だか嫁うして來は來ても、何とお思ひやしまいかと、氣になるの」主「そ、そんな人ぢやアない。まことに嘗つまらないのさ」主「まア、いやなネエ。また私の繼母まで、なんにも構はない者はありはしないわ」い人だわ。しかし老人といふものが、氣樣だわネエ」主「左樣。私や新姉の繼母でもあるか、誰か主「たれでもさ。……、繁さんが歸れば好いノウ。」主「今に歸るだらう。アノ、磯さんは何樣した」主「その來る筈だが、何したかネ。……アノお花さんお萬お聞きで……お千代さんが死んだ事を主「オヤ、左樣かえ。さつぱり知らないわ。アノ孃は田舍へ歸つたぢやアないか」主「オヤ……田舍へ

は行かないで、[illegible]のやうな者で、此方の老爺さんの妹ださうだ。ソレ地内の[illegible]

ネ。」玉「フム、、私や、何だか[illegible]

私を恨んだこつたらうノウ。」松「恨んだもく、いまに化けて出て、[illegible]

と[illegible]、怖い。」玉「アレサ、おしやれでない。[illegible]

ぢやアないか。てんぐが淫奔をしておいて、そりや[illegible]」[illegible]

一念といふものは、怖いものだから、何ぞ法事でもしてお遣り。」[illegible]

松や。其方一寸往つて、一升徳利つて来な。左様して、刺身[illegible]茶碗[illegible]何ぞ[illegible]

云ふのだヨ[illegible]で宜いわな。そしてお三や、[illegible]

[illegible]

お前、其の時に居合はして、膽を潰して歸つたものチ。」土「嫌なお千代さんだのウ。馬鹿々々しい」松「夫れが怖さァ、私に金を五兩ばかりお寄越し。」土「左樣すると、如何するエ。」松「夫れを寺へ納めて、法事をするから。」土「夫んなら、直に法事をしても宜からう。」松「ナニ、お前が直にしちやァ利かないとさ。」土「すりや、誰が左樣言つたエ。」松「ハイ、夫れがネ、それやァあの、ネ、其、だれかが左樣言つたヨ。」土「アレ、お巫山戯でない。お松さん嘘だネ。」松「マァ、なんでも宜いから、五兩寄越しなヨ。さうすると、化けちやァ出ないから。」土「ム、遣らう／＼。今に淺草の市で買つて來て。」松「お前も大概だネ。何故自己の交際ふものは皆こんなだらう。」土「何樣だ。」松「人が惡くつて、口が達者で、食へないものは一疋もないからサ。」土「オヤ、呆れ切ツたなァ。アノ可愛らしい口から、おそろしい事を言ひ出すヨ。」松「すネ、、、面目ねへこつた、、私やァ大層醉つたさうだノウ。」土「ナニ、まだそんなに飲みもしねへで、今日は宅の老爺さんは居ないから、心配なく飲みなヨ。」松「すネ左樣か。夫んならお前、また早く左樣云つて呉れりや宜い。何樣に心配して居るか知れやァしねへ。」松「すネ、、。夫れでも心配をするのかヨウ。馬鹿らしい。」松「ナゼ、其樣にふざけやァしねへ。」土「誠に大人しいわ。サァお燗が出來たヨ。」松「マァお前お飲み、私やァ、モウ醉つた。」土「今ッから、可笑しな、お松さんだ。何ぞ肴を言つて遣らうか。」松「左樣さ。私も左樣思つて居るが、今に繁さんが歸る

か、磯さんが来るか、其の時にと思つて居るのさ」ト、待てば影さす磯次郎、庭口から内を覗いて、

五「條さんは留守かえ」「オヤ磯さん、先刻から待つて居たわ、サア、早くお出でな」「お前さア何處を

素見しておあるきだネ」磯「是れでも、まさか用もあるまいネ」「不思議だねえ、ト、、、、」磯「夫れ

よりかノ、お玉さん、不思議と云へば磯さんが、時々真面目な顔を言ひ出すが、然しや如何も可笑し

くッてならないわ」磯「何様に可笑しいかネ、夫のやア妙な事を言出すと、種々なことを言ふしいネ」玉「な

んだ、僕にあんまれノーと云つて、何にも角なしかネ、幾度御身の傍へ寄付かない様に、其様な様子の處口はい

りやあ話まらねえ」玉「お前が然うして心配を見たい、何ぞ事のにかこうと思つて出来たのに」磯「

い心意気だ」玉「私が斯ういふようと云ふ相談か、また、お玉さんお聞きなさい、それお前が可哀さうだからい

かネエ」玉「先方に左様に思はれて居て、私が居た日には何になります、私はそれに居つてゐるか」磯「ナニ、僕が云は

う」五「何か宜い事があるかネエ」磯「磯さんに貰らつた事があるかネエ」五「富然だ」玉「何うぞ、宜しう、それだと

對へなならぬ苦勞な噺さ、何か言ひ付けてやると、那方から来る主人の要兵衛、それでて、お茶を差しましたよ」

先刻からまアお玉さん、然うやア勝手し何かやしたらどうするよ、時にお玉、何にもねえ、とさ、トいつて、磯

さんが左様いつておやりのだネ」玉「然う、其人が、其んな事で酷い事を言ひますが、僕に云ふと陽を開いて居る

ら、甘くいつて其の上に、お玉の話しぶる様が宜いさネ、ト、、、、御肴を云ひ出すと、五郎は喜しいよヲす、

好かない、私やア蒲焼ぢやア何様も嬉しくないネ。」与「ム、左様々々、お前は餘り好かないネ。」「其こそ
の好かない物だ、嬉しがらせるから奇妙だらう。」与「ハヽヽ、嫌ひなもので嬉しがらう譯がないわ。ネ
ヱお松さん。」松「ム、酔つた／＼、お玉さん左様ぢやアないヨ。横がつくからの事だアネ」与「イヤ
左様かネ、まア、ツイお[illegible]。諸事此處で往くから理窟ッぽいといふ事サ。」玉「ナニ／＼、理窟ッぽい。
ハヽヽヽヽ」与「夫は何だ。ふた男女二手に分つて合戦するのか。」玉「イヽエそんな野暮は止して、お玉さん
三味線でも弾きねへナ。」松「アレお止し。」与「何故々々。」松「夫れでもお前、お千代さんが死亡つただ
ぢやアないか。」与「ネヱ、嘘々々。死亡つたのうだと言ふ噂さ。よしや死亡つたにもしろ、ナニ構ふも
のかナ。」[illegible]さん。」玉「知れた事サ。全體旦那が餘り人が善過るから困るヨ。疾うに田舎へ遣つて
くれると言ふのだけれど、ヱヽ／＼として置くもんだから、打てば響くとやら、此家の事なんぞか、
種々な事を聞て甚だ中位サ。」与「左うすりやア夫れだから、私が斷らうして遣入つた事も何もかも、お千代さんにや
ア知れて居ますのかネ。」玉「ア、左様サ。不殘知つてるとヨ。夫れに姑御が先頃來て、見て行つたから簡
抜けだ。」与「當然し、だから知れる方が早くつて宜いのサ。あゝ云ふ始末で出したんだから、これ見よ
がしにお玉さんを入れたんだ。ノウ左様ぢやアねえか。」[illegible]「左様サ／＼。思入れ見せつけて遣るが宜
いわネ。」与「當然し、向うが其の男と夫婦にでもなつて、りうとして居る事なら左様だけれど、傳さん

はて頂が仰わす、自己は親家へも歸られないで、他の厄介に成つて、頗つて居て見れば、實は餘り可笑しうございます、元より己が懇切みにて、道を擬ひし文盲に育ちて、頗ふと聞けば今更に、空論みしく思ひつゝ、言葉に綺の色を見せて、樂只次郎、お時等には、自己が心の優しと知らする所為の時、實に御前の言葉にも、皆お玉が擧動なり、斯くことなしとて、偶然と知りつゝ、四人齊しく膝を合はせて、暫しつ噺を談む中に、早くも此度の頭となる、猶しも丁寧に遊び出させて、鼓りまる老爺の半六、見るまりんさは嬰を出し、……、老爺さんは何とうか……、命を煩いて半六は、其處へ對り親次郎と、お時お玉に少やうと見て、……しい、年にはそれだけ取りたくないもの、若い時は何事も大緩で、先づ胃はぱ道り放し、だれだけに若も妨ないか、今年年とつて見ると、前や後か能く見えて、……ことは出來ぬ……、……年は色んなと心配なんで、能い様なものなれど、他を老父様と……には、少し前から是三ついて……ことについての相談、親子の義を結びしようか、……には未だ彼の事、……、……、老年にして一旦たから、晩契も寄に入らねテ一蔵じ吾らも、先づに約らし、人の心に添ひぬやう、無りとてしやんと打つ所に、……こたへるべし、

第十八回

當下、磯次郎は形容を改めて、「モシ老爺さん、此間お願み申しました、内々の事は何樣で御座いませう。まだお噺し下さいませんか。」「ナニサ、アイ、今日既にその事で往つたのサ。」「ハ、ア、左樣で御座いますか。其りやア大きに。」「イヤ處が、種々と面倒な譯もあるのだが、マア大概は談じも行き屆いたのサ。」トいふ顔を見て磯次郎は、莞爾として手をつかへ、「夫は大きに有り難う御座います。何樣して中々一通りの掛合ぢやア、所詮むつかしい譯でござりますが、爺父も藤八も、全く貴方に免じて得心致したので御座いませう。」「イヤ、お前方の前だが、この孃（此はお松をさしていふなり）が心操は兎もあれ、最初町藝者をして居たと云ふものだから、さすがに磯次郎が女房とは、披露がしにくいといふのは尤もな事サ。左樣いふと、コレ此處に居るお玉な、どこにも鄙く譯だが、私等が僅か瓜茄子を商ふ身分でせへ、斯うして表を張つて居て見れば、裏店小店の女兒を、ナニ夫れと嫁にする事も、マア出來難い樣な譯でネ。」トいふ折、丁稚の芋松が敷居の傍へ手を突いて、「モシ、アノウ、米屋の藤八樣がお出でなさいました。」「ヱヽ、ナニ藤八殿が來た。ハテナ、何ぞ又風が替つたか知らん。夫んなら俺が子舍にしようか。然し此處でも大事あるまいが。」「イヤサ、何なら、お前さんの、お子舍に被成つて下さいまし。」

今に磯さんが上げませう。」三「夫んなら左様ョ、お松や、お客を俺が[illegible]へ案内して、お茶でも出して置け。」芸「へイ〳〵」ト、出でて行く。

そも〳〵、此の藤八は、半六が妹婿、米問屋伊兵衛が世嗣にしたる藤次郎の実[illegible]にして、藤次郎が後見同様の番頭なりしが、此のお松が未だ娘にて在りける時より、深く思ひ初めて、[illegible]にもと目を付けたりけれど、お松は磯次郎と云ふ[illegible]、藤八の事は[illegible]知らざりしが、早後々は其の情人は、磯次郎なる事を知りて、何卒磯次郎を追ひ払ひ、お松を手に入れんと、磯次郎が養父なる次郎八は、砂浦新田といふ所に、隠居してありければ、是れへ行きて、種々磯次郎の事を讒言したれども、終に追ひ失ふ手続きにもならず、種々と心を配る折から、半六が来りて、お松は元[illegible]のことにして、身の上こそ正しからねど、心操は中々に、然る可き人にも増りて、貞節なる事は云ふも更なり、良人を思ふの真情深くして、磯次郎が妻にするとも、聊か[illegible]しからぬ女なれば、今度は、自己が娘となし、改めて磯次郎が[illegible]に相成、[illegible]は其の家に[illegible]、次郎の[illegible]にあれば、是れへも早速相談したるに、[illegible]ければ、此の上は婚姻の、[illegible]させするの一段、それは[illegible]、何卒其の[illegible]を定めるが肝心、素性系図を[illegible]と、むつかしく云ふは、ずんと古風の[illegible]、其の方の[illegible]、當

人の氣操の好いのが第一と、理を盡したる詞の上に、半六が娘分にして送らんとあれば、是れも亦否むべき言辭もなく、藤八は澁々ながら、私に於ては仔細なし。次郎八殿が何といふかと、其處へ詞は濁して置けど、肝心の家元なる、沖瀬も承知の上とあれば、早變更もあるまじきか。然るにても、左様なりては都合の惡き事多しと、猶種々に惡巧みして、卽ち今宵半六が方へ來り、今日、段々噺の趣を、砂浦の隱居へも物語りしに、次郎八殿の申さるゝには、八百屋の隱居の取扱ひといひ、殊に娘分にして嫁入らせうとの事なれば、兎角いふ可き理もなけれど、他方の噂には、殊の外の惡業なりといふ風聞もある事、先づ兎も角も隱居所へ、當人を呼び置いて、五七日も容子を見受け、其の上にて、實に半六殿の詞に違はず、將來家の爲ともなるべき婦人ならば、最初は娼妓にもあれ唄女にもあれ、夫等の事には強ちに構ふ理もなし。養子なれども大切の、株式をも嗣がする儀次郎の、氣に入つたる女を女房にすれば、自ら家内も治まる道理、猶々目出度き事なれば、早速に改めて祝言も整ふべし。先づ／＼砂浦の隱居所へ、お松を逗留に寄越すべしとの事なれば、可成事なら今宵直に、私と同道致して參りたきものと云ふに依り、半六は案に相違はなけれど、藤八が詞といひ砂浦の隱居も尤もの口上、かれ是れと云つては却つて宜しかるまじ。その言葉に從ひ、幸ひお松も此處に來合はせての事なれば、藤八に連れさせて、砂浦に送るが宜からんと、その事を

皆々に囃し、何でも物事の早く納まる方が宜からんといふ。

「[illegible]成程、随分おもしれえ趣向だなア。」次「夫んなら、老爺次郎八のことなり [illegible]

うか。」松「俺も、それが宜からうと思ふのサ。しかし当人は何と思ふか。」次「お[illegible]

か。」松「マ、、そりやア往きもせうが、ネエお玉さん、連れが連れだから恐れるノウ。」玉「ム、[illegible]

なう[illegible]事はないわネ。夫れにお前、[illegible]様の内[illegible]んと極つて[illegible]、主人ぢやアないか。」松「そ

りやア[illegible]」ト、[illegible]石女の決し兼ぬるは、かの[illegible]

いと[illegible]、恥を掻かせし事[illegible]

そ、言はね[illegible]胸の中、[illegible]

笑しなものとは思へども、彼は[illegible]

ひき当てて、夫れ[illegible]行き、[illegible]次郎八

[illegible]

往く[illegible]、仕すましたりとぞく／＼歓び、[illegible]

[illegible]急ぎ行く。遠寺の鐘を

[illegible]

晝だにさこそ暗からめと、思ふばかりの細道を、行くこと十町ばかりにして、冠木門のありけるが、藤八は聲を掛け、「藤「オヽ其處だ／＼。ちつと待つて居て呉んなさい」ト、腰より合鍵と覺しきものを取り出し、扉の際に切り拔いたる、穴より腕を押し入れて、カチリ／＼と錠を開け、「藤「サア／＼這入んなせえ。」ト扉を開き、「松「カウと、玄關も大層らしいな、何にしろみんな寢たらうから、都合が惡い。」「藤「マア／＼此處から入れやせう。」ト、又傍の木戸を開き、内玄關とおぼしき所の戸を開け、お松を駕籠から出して其處へ坐らせ、駕籠屋には賃錢を拂ひて歸しける。お松は此處に居て、宅の樣子を見るに、其の構り武家屋敷の如くにして、磯次郎が隱居の住居とは思はれず。玄關には槍掛けなどをかけたる體、なか／＼町人の家にはあらず。さてこそ藤八に誑られて、此處へ誘引はれたりけるかと、今更胸のどき／＼して、四邊を見廻し居たりけるに、やがて藤八は奥より行燈を提げ、片手に煙草盆を持つて來り、「藤「何樣だ。お松さん、怖かつたらう」「松「アイサ、何だか氣味がわるかつたよ、そうして此處が磯さんの老爺さんの宅かえ。何だか大層だネ。」「藤「ナニ、此處は俺の屋敷お心易くする、請負のお下屋敷だァ。鈔浦の隱居所までは、まだお前二十町もあるから、今夜往くといふ譯にもならず、道も物騒だから、マア／＼此家へ落ち着いたゞだァ。いまに夜着や蒲團を持つて來るから、ゆるりと寢て、明日鈔浦へ往かうさ」「松「左樣かえ。そんならまた明日出て來ればよかつ

たネエ。お前アまた跡は知らず、そんなに違ひはないかと思つたわ[illegible]、清浦といふ

なア、何處だか知らないのかねエ。馬鹿らしい[illegible]、たれでも知つて居らア[illegible]今夜

中に往き着くことの出來ねへのも、みんな承知さ。なにそのやアお前樣と同伴だから、ちつとも氣遣

ひはないけれど、何處も旅ででもありやアしまいし、知らない所へ泊るのが嫌にするかと宜かつたのに。

磯さんも磯さんだ。こんなに遠かア遠いと言つてお呉れなら、今夜出はしないものを。ことに、あれが鬱

み、これが[illegible]る、其の心根の[illegible]は、嬉しさ[illegible]も知らぬ間、[illegible]大樣[illegible]日出お宣あつた

のコツ夫れに他の者とならよからうけれど、道連が藤八と云ふものだから領承腹だらう。ナニ、お松さ

ん。何がお前の氣に入らねへかア知らねへが、座敷の勤めで居る時分なら、俺にやア實に情ねへぜ。

ところが何の因果だか、どうもお前が好くつて爰へ[illegible]のさ、[illegible]いまくしいと思ひながら、

冷つこい金を運んで見たが、唯の一晩でも、優しい詞をいはれた事もなし、其れから世間の取沙汰に

も、この藤八郎は[illegible]だと、聞いて見るも[illegible]と、其の九分通が、[illegible]か、今日は何う

した[illegible]、引合はにやアお前を連れて、田舎の[illegible]になつたのは、年頃日頃の念願が、叶ふ時節の來た

事か、と清浦へ[illegible]、[illegible]には往き着く筈を、[illegible]、此處は名に負

ふ人[illegible]、別莊守[illegible]、心易きに泊らせて、[illegible]其の[illegible]、[illegible]日前にうと[illegible]

手次第、ハイ早く寢て語らう、ト、傍の押入引開けて、取出したる夜着布團、藤八手自敷き伸べて、二ッ枕の船底は、水漏らさじとの謎なるらん。藤八はお松が手を執り、藤「コレサ、何を其樣に案じいで居るのだネヘ、今いふ通り、お前故には白子屋の丈八おやぢネヘが、箔屋町の燈籠佛へも日參り、柔の平内が大石、枕橋へも願かけて、どうぞ／＼も口癖に、徒跣參りをせぬばかり。その深切を、ナア此れお松さん、ふつゝとは斷らうと洩れ分けて、見れても罰は當るめえぜ。ト、力任せに抱きすくめて牀の上へ引きあげる。お松は今更箇の時、逃げたくとも逃は無らず。然ればとて年ゆかぬ、生娘處女のやうに無わけは人に笑はれる。萬事だつて、に如くはなしと、心を定めて莞爾笑ひ、松「前方から、しておお前樣の御深切は、實に嬉しう御座いますが、彼さんと彼樣なつて見ると、どうもお前樣と又斷うとは成り難う御座います。殊に今回親さんの宅へ、這入る樣になつてお見なさい。愈々濟まないおやぢありませんか。然しそのやうな譯かはすとも、お前樣も御承知の事だけれど、ハイ一通りの事ではない事は、分疏らないから言ひますが、決して惡く思つてお呉んなさいますなヨ。折角こんなに深切にいつておくんなさるものヲ、そんな譯でもないことなら、お前樣何しに彼是と言ひますものかネ。大それこそ直に、ハイと言ひたいけれど。ト、おもはせぶりの挨拶は、猶も男に氣を持たせる、仕打も流石それ者の流れ、然して外すは手練の魂膽、それとは知らで藤八が、反ね付けられても戀りずまに、猶濡

れけゝる夜半の聲、鐘左近くなりにけり

娘太平記四編巻之上終

娘太平記操早引四編巻之上

娘太平記操早引 四編卷之中

第十九回

お松は召使藤八と、首尾好く隙を拵へ、此の場を遁れて、砂浦へ送られんと思ふから、手籠を欺して種々をはかれど、砂浦へ送るといふは、元来の計略にて、お松を此處まで誘ひ出し、自由にせんとの目論見ゆゑ、夜が明けても日が暮れても、中々此處をば立ち退かず、餘りの事にお松はあきれて、さァ〳〵藤八さん、是れまでに言つても、得心のないと云ふは、お前も餘りぢやァないかネ。左様出来ないなら、おきにするいと言ひますわネ。然してマァなんにしろ、砂浦とやらへ送つてお呉んなさいナ。昨夜は宜いが今日もまた、彼方へ往かないといふ事が、萬一磯さんの方へ知れて御覧なさいナ、私も濟まないけれど、お前様だつても、餘り宜い事もありますめえに。「…か、、、、それやァ一々御尤も至極ヨ。實が實は砂浦へ送つて行くといふのが、先づ大虚言サ。お前としんみり噺をして見たい許りで、衆人を甘く騙かして連れて出たんだナ。コウお松さん、悪く思ひなさんな。それといふのも彼様お前に惚れぬいたから起つた事で、俺もお前を掠んでした訳ではなし、これ程までに骨を折つて、

事ことのりやア命にも、身にも懸るは百も承知さ。然うして見れば藤八も、滿更惜くも有りやすめえ

ネ、言はれかゝれば今更に、お松は何と爲方なく、一層の事に恥しめて、若し腹を立たば立て、所詮此の身を汚されては、生きても居られぬ此世の義理合ひと、覺悟は極めて居ながらも、惣次郎より兼て聞く、この藤八は惡漢なれども、砂浦の隱居が氣にいりにて、萬端彼れが此の儘に、以前から朝夕の、暮しまでも計らふしふ、若し此の男の恨みを受けては、此の身は兎もあれ惣次郎が、中に陷らんは必定なり。如何にしても言ひ拔けて、後にこそ計られと、漸う胸を押鎭めて、莞爾と笑み、

『さればやア御前様の御深切、いまに始めない事ながら、私もモウ嬉しく思つて居ますけれど、こんな腹目に成つたものだから、終に一度、御前様の、自由になつた事も有りませんから、定めし憎いお思ひだらう、と察して居た處を、憎いとも思召さず、矢張昔のやうに、何でこれと云つても厭な顏もなさらず、實に餘程な深切でなくツちやア出來ない事と、今更お前様の心意氣に感心しましたから、誠に〳〵と言つて、今まで一御禮も言はうと思ふと、又生憎で、誠に焦れツたい程が有りますから、ヘイ、、、、、、できよの積りでといふことを受合ふと、といふ鉅欺であるか、大それた事だらう』と、トヽ左様おつしやる氣の毒だな。私にこそ眞面に左様だから聞えわから、二月經たんなら何様も、仕方がねえから、五日でも六日でも、然うも通常に仕やうが、今一ツ言はれたつて、まさか左様も成るまいぢやアないか、左様

此様なるのはナア、磯さんも不思議に打つて、砂浦へ聞き合はせてでも御覧なさい。其れこそ大変で、お前様も私も宅へ帰る事も出来なくなるぢやァ有りませんか。」藤「ヘン、出来なくなりやァ帰らねえ許りさ　京大阪へ往かうが儘、お前と両個で稼ぎ喰ひ、些とも困りやしねえ。ナニやァお前の了簡次第で何処でも世をかけて、用ひけるなァ仔細ねえのス。」松「マア、そりやァ能く〳〵の時さ。ナニ私だつて、未だ老いぼれた身ぢやァなし、お前様一個位過しかねやァしないけれど、左様為つて見ちやァ、身も蓋もないからサ。」ト、飽くまでお松に欺かれて、よもや、虚言でもあるまいかと、思ふも矢張り自惚の、手前感より物事を、仕損ずるものなりかし。斯くて其の日も暮れければ、藤八はまた酒肴を取り寄せ、莊守の人を招き、終夜酒宴なしつゝ、其の翌日の晝は過ぎても、さらに帰る気色も見えず。お松は独り気を揉みて、帰る可き由を藤八に、催促なれども合點くばかり、なか〳〵帰る気色もなければ、然らばと衆人を酔ひ潰させて、続けて出るこそ上分別と、頓て又杯を改めて、様々にもて強ひる程に、藤八も莊守も、昨夜よりの酔ひが出て、舌も廻らぬばかりに酔ひて、各々に肘枕して高鼾に伏しければ、時分はよしと裾引き上げ、お松は此処を忍び出で、門の外まで至りつゝ、見ればこゝなる人の谷と、聞きたるのみにて何方を指して、往くべしとも知れざれば、唯茫然と佇みて、・たれぞに道を聞きたやと、見れども門邊に人もなし。日ははや西に傾きて、冬の日の暮れ易さに、此處

にも暗くなりたれば[illegible]

事にもあらず、あてこともなければ足に任して、先づ[illegible]出でゝ、四五町許りも來りし折、

[illegible]と聲かけて、追ひ掛け來[illegible]藤八[illegible]此方に立つ[illegible]

地藏の、後に隱るゝ其の折から、きよろ〳〵[illegible]

留むる。アレヨト逃ぐるを逃さじと、捕へる手先を[illegible]

[illegible]

等しき藤八が、威勢鋭く追つ掛け廻し、遁れ堅田に病む鴈ならで、[illegible]心地しつ、今は足さへ

竦縮みつゝ、[illegible]に藤八に捕はれて、[illegible]度は如何なる憂き目にや、[illegible]の瞳に立つ波の、胸も碎く

る思ひなり。[illegible]處に磯太郎は、半六[illegible]、且はお玉が勸め[illegible]よりて、[illegible]には[illegible]れど藤八に、お倫を渡

して遣りしより、兎に角心の落ちつかず、第三日目の暮頃に、人[illegible]のみて[illegible]浦の、[illegible]が方を窺ふ

に、お倫は[illegible]

に、[illegible]

[illegible]

の血走りて、日頃親しき[illegible]四人[illegible]

入屋敷のたれかれまで、其處か此處かと探ねたり。それは休置此處は彼の、蟇が谷なる燒場のさま、幽かに聞ゆる鐘の音は、無常迅速の境をしらし、聲高やかなる稱名は、頓生菩提を導くなるべし、しだいに更ける夜嵐は、松の梢を吹き過ぎて、霰まじりのひと時雨、小笹が上にはら〳〵と、哀なる音と倶にこれ、さびしき境の碑なり。其の時傳吉の鈍宗が、抱き起したるお千代の亡骸、[illegible]蘇生に驚きて、猶もしつかと抱きしめ、「お千代さん、氣が付いたか」ト、四邊を見れば幸ひに、亡者へ手向の茶碗、生憎水は唯一口、これでもまゝよと鈍宗が、お千代の口へ口移し、背中をたゝけば又蘇び、「……」と言ひつゝ眼を開く、はや大丈夫と鈍宗が、抱き上げつゝ火屋を立ち出で、住ひ來る己が部屋、塵は四隅に堆く、爐に折りくべし奈良柴の、煙るをやをら吹きつけて、お千代を寢かし滿身をあたゝめ、宵より支度せしと見え、五合徳利を其の儘に、折り焚く柴の燗酒や、外に酒器はいの葉に酒掬、是れぞお寺の惣菜か、鈍宗手づから茶碗へ注いで、先づ二三杯傾けつ、鈍「どうだお千代さん、氣が確りしたか」ト、言はれてお千代は此の時に、全く正氣のつきたれば、眼を突いてやうやうに、起きあがつて四邊を見廻し、千代「モシヤ……」ト暫時考へて、千代「此處は、モシ何處で御座いますエ……、何だか怖らしい。」鈍「アハ……。怖らしい處か。今までの事にこんがりと燒く處だつたハ、、、、、」ト言はれて漸う心付き、そんなら此の身は死んだのかと、問ふに鈍宗その次第を、逐一

語りましたれより、おのれが身分の顛末まで、事細かに物語り、畢竟いはば僅かな金の、欲しさにお前に悪名つけ、註文通りに仕果せたら、其處でお民が慾心萌し、此の身の悪事を言ひ立てて、土地所を追ひはらひ、手前はいうくと楽をして居る。それも是れも因縁づく、いま更かれ是れ言ふでもないか、あまりと云へば憎い奴、居所在所に迷はして、吼面するを見て遣らうと、様子を聞けば、それから後、お前も宅に居なさらず、かうして見れば居たり一緒で、いつその事はお民から、頼まれた狂言だと、云つた處が初まらず、時節もあらうと待つうちに、思ひがけない今夜の時宜、あなた[illegible]かと思ふほど、合點がいかねば[illegible]ト、いふにお千代も不審は晴れず、それ成程地内へ[illegible]けられ、何かの事を気病みにして、迚も命は助かるまいと、此身から覚悟をし、[illegible]後生を願つて居たが、死んでお前の手に掛り、[illegible]かれようとは[illegible]不思議な、それなら何卒[illegible]、お前も左様いふ心なら、私を連れて八百屋へ行き、一伍一什を[illegible]して、[illegible]の[illegible]、お民親子を追出し、お前の怨みも晴れるは眼の前、何卒さうしてお呉れなさいト、聞いて[illegible]、[illegible]、夫れにしても夜が明けると、長家の甲乙が[illegible]、其の時お前が此處に居ちやア、何や彼や面倒だ。其の上[illegible]つ若輩、雪女郎か八州の、[illegible]女の様な[illegible]をして、[illegible]いらや宿から[illegible]、[illegible]つて[illegible]へも寄せられず[illegible]、宜いわお千代坊、此處にありあふ古[illegible]、[illegible]ではあらうけれど、[illegible]との間の

辛抱したぞへ。陽氣に消す功、これおやア又一狂言書けるわへ」ト、葛籠の蓋取り除けて、お千代をそつくり抱き入れ、「苦しい目があるならば、遠慮なしに言ひなせへよ。」まだ氣力が戻らねへから、我慢なしのや、身に害なア、と見掛けに似合は恋しき言葉は、何處やら氣味も悪けれど、逃れも一つ日延した揚句、今は何といふとても、露ほど恋を何りそのと、自ら心を取り直し、葛籠の内に膝を屈め、再び已むる身持かへ、紐容易を結び合はせ、やつと背負ひて暗夜へ、表のかへ出で行きけり。

第二十回

片側は川、片側は柳と杉との植込に、中には小徑のさらさらと、足に障りていとせまき、道の行く手に向うより、三四人連れに提灯一張、たれさへ心の光たりけるや、暗き火影を後から、△「ソレソレ、提灯持、餘り早過ぎるぞ。なんだか狭い癖に、種々な根株が有るから、歩行かれやアしねへ。」六「左樣さ。コウ篦棒に曲路いおやアねへか。そして臺が谷へ行けば、橘としたし當りが有るかのう。」口「何さ、どうも橘として當りのあらう理窟はねへの。唯忠れも氣休めヨ。」●「コレコレ、たんなら一層の事に、進下のくのお松權やアの事、と遣いかせば宜いに、」口「左樣言ひなさんな。竊盜の身になつて見ねへ、どんなに氣が揉めるか知れやアしねへのさ。」△「余慮アノ奴が、氣が利かねへおやアねへか。手

「其ぞやであるのでし、逢に出して来るに宜いわな。[illegible]エ、思ひの外先が好[illegible]て、[illegible]寺とやらか
しなすつたかも知れねえ。ハ、、、、」一同口同音に[illegible]と共に、[illegible]の[illegible]して行く先より、葛籠を背負ひた
る[illegible]の時に、手拭で面を包みて、四邊をきよろ〳〵見廻して来りしが、立止り、[illegible]て、たよつと御
無心で御座りやす。」ト、言はれてぎよつとしたれども、大勢なれば力強く、[illegible]「何だえ」ト、立
ら出まれば、か何[illegible]シ、[illegible]して[illegible]を[illegible]るのか、[illegible]
[illegible]て、[illegible]る血が出る様だ[illegible]、[illegible]れて[illegible]の爪先と[illegible]くの[illegible]て[illegible]、[illegible]ひたる[illegible]
[illegible]に[illegible]、[illegible]されのこ[illegible]折しも、[illegible]い[illegible]の[illegible]に、心[illegible]、[illegible]に[illegible]を
[illegible]て、[illegible]の指より出る血を、[illegible]んとすれと[illegible]、[illegible]のとして[illegible]とつて、[illegible]
引[illegible]て、指を[illegible]へる折から、[illegible]人を[illegible]の[illegible]、[illegible]はさしつのと[illegible]く、[illegible]
みしては、[illegible]のみと[illegible]れて、人を[illegible]は[illegible]つ、[illegible]を出す人と[illegible]、[illegible]の[illegible]は、[illegible]の
[illegible]の[illegible]を[illegible]し、[illegible]と、、この[illegible]、[illegible]て[illegible]すと[illegible]、[illegible]を出す、人を[illegible]え
[illegible]の、[illegible]、[illegible]つ[illegible]る[illegible]を、[illegible]と[illegible]し[illegible]て、[illegible]、[illegible]
女だ[illegible]い[illegible]、[illegible]と言つた[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]、[illegible]小[illegible]、[illegible]
[illegible]人[illegible]て[illegible]く、[illegible]ね[illegible]葛籠の中のが、萬一俺達の探ねるお松様[illegible]、[illegible]。

左様思つたヨ。」「何と夫んなら、彼奴を捕まへて、糺して見ようぢやァねえか。よしや間違つても夜中に女を葛籠に入れて歩くからにやァ、どうで彼奴も曲者だァ。構ふ事はねえ」「ム、左様ョ〳〵、此処等が思ひ付け處だらう」「サァそんなら早くしねえ。闇漢々して居ると、何処か往つてしまはァ」「サァ衆人早く来ねえ」ト、彼の悪漢を追ひかけて、後へ戻れば悪漢は、この大川に渡したる、橋の中央へ差かゝりしころ、後より追つ付き人々が、「コウ〳〵、待ちねえ、お前に聞きてえ事がある」ト、呼びかけられて、振返り、「ヘイ、なんだえ」ト、立止れば、「ム、何だぢやァねえ。先刻傍で聞いて居りや、葛籠の中で女の聲、どうも合點が行かねえから、態々後へ歸つて来たんだ。此の葛籠の中に居るなア、お松さんといふ女だらう。夫んなら早く此處へ出せエ」ト、蓋にかゝれば悪漢が、「ヘイ、ナニそんな女は知らねえ、先の辻番で聞いて見ねえ」ト、言ひも終らず行かんとするを、人々は目配せして、葛籠の紐へ手を掛けて引戻せば、よろ〳〵と二足三足後退り、癪と急き立つ悪漢が、目をむき出して、「何をするんだい。放しやァがれ」ト、なほ足早に行かんとするにぞ、さてこそ曲者、それ遁すなト、前と後に立ち塞がれば、悪漢は背負ひたる葛籠の底へ手をかけて、「コウ、五月蠅え唐変木ぢやァねえか。俺を背負つて歩かうか、其方達の世話にやァならねえ。邪魔ァするな」ト、振り上ぐる、拳を丁と受け留めて、葛籠の紐を曳と引く。引かれて怯むを附け入りて、纏を外さ

ば取り遣り、暫時爭ふ有樣に、祇園牛頭天王の祭禮に、神輿を舁ぐが如くにて、彼方へ引けば此方へ引き寄せ、宙に釣し肩にかけ、右往左往に爭ふ途端、葛籠をはたと欄干へ、當てると見えしが逆に轉りて川へざんぶと落したり。あつと呆れて雙方が、足踏みかけつゝ伸びあがり、見れども見えぬ暗き夜に、水の音のみ蓼々たり。是れでは旦那へ分解なし。此の坊主を縛し上げ、連れて往て詮議と、云ひさま取り付く兩人を、捻ぢ倒さんと揉み合ふ處に、[illegible]を沈まして毬栗や、兩足すくひて引き倒せば、得たりと上に乘りかゝり、[illegible]しおきて手繩をかけて、ぐる／＼卷に縛し上げ、引立てゝこそ行きにけり。斯かるべしとは露知らぬ、お玉は[illegible]、目ざして[illegible]、丁稚と下女が[illegible]を[illegible]は有、其處へ此處と[illegible]、[illegible]十夊がけを照らして、夫婦が[illegible]、[illegible]れ果て、人の噂に聞いた時も、[illegible]り、尙[illegible]、[illegible]苦にすれど口へは出さず、其の樣子をご覽ひ居る。されば お玉が我儘に、誰咎むる者もなければ、善き事にして日々の行跡、法に過ぎたる振舞あり。心合ひたる幇間、豆八呑太郎を呼び寄せて、或は酒を飲み、或は[illegible]、[illegible]、[illegible]

なつて、ある夜半兵衛と二人して、宵四ツ頃までの酒盛に、此方ノ、酔ひの能き機嫌、半兵衛は其處へ寢轉びて、手枕して居るを、お玉は揺り起し、「もし、旦那、本當にお寢なさいまし。何んだねえあればかりの酒に、お前様酔つたのかえ。弱いねえ」「ウム、ノウ〳〵、起きるよ。ア、どうも酒を飲むと不精になつて、横に轉る。寢にするのも否だ」……、、、、、横になつて居る……にして見て居ようかつ……、これを擽ぐつたいヨ。そして半兵衛が見て居るやうな……、何の構ふ、もの當然だもの……其ハ、左様厚かましく出りやア仔細なしだけれど。「それだから早く床へお出でなさいヨ。私やア最う其様に世話を焼かせちやア厭だヨ。」「ヘエ、、嫚しい女だ。寢たかア、早々と一人で寢れば宜いこと、言ひながら起きて帯を解き、蒲團の上へ行きて寢轉ぶと、お玉も跡から行きて、屏風をぐいと引き、玉「何だえ。一人で寢るえ。お有り難う。一人でつつ位なら、此樣に氣を揉みはしまいに。お前様には、そんな顔に似合はない恐ろしい邪見だネエ」半「ハ、、、、、、慾に限りなしさ。又俺が樣な奴に優しい者はあるめえと思ふぜ」玉「ハ、、それやァお千代様にやァ優しかつたか知らないが、私にやア餘り優しくもないやうだネエ。アノ、モシ、夫れと言へば、お千代さんは、本當に死んだのかえ。」半「俺も委しかア知らねえが、確か昨日死んだとか云ふ樣な噂だつけ」玉「オヤ左様かえ。可哀さうにノ……嘸私の事を怨んだらう。ま、厭だ」半「何も恨む譯もねえのさ。そんな事を言ひツこ

かしく」面白くねと慶だ」と云ふ、そんなことにはならないよ、警察でそうしてやらうと先頭申上げ、往

二、死ぬ死ぬといふ中で、善いの可愛いのといつて、結局離縁した夜に、品物での事もありましたよう

ないか」「それや、お前、一緒なら苦労なら、夫婦に成つて添ふならば」「それと信頼致つて居た事

もあるだらう、な、働うなつて仕方がない、他人よりの大事なもし、それと言ふ事なつてゐられたの

した中で、他人より優しい言葉にして、私の気性だといふ者が言ふ、なほ嫌はれて、ふさと思ひ

言のだね」「迷惑しておくんなさい」と、覚悟して顔を上げ、愛を強る顔を着る上で、私の言

指に突く、本当に帰りませうと云ふそんな事が私のですから気持ちだつて言ひもつたなと言

この家に居る様だよ」と、静かに云つて、いい顔をしたら、お前様もこの際、すつかり

私が言出すのは止めだ、天下御免と云ふものを少しばかりでも可哀そうに貰ふ上で、許して居る

私なものですよ、何にも云はないで此の一事であるから、彼に下れた仕事では、〇〇〇〇

として〇〇として働いて居るといふ、私の此の持つ写真がなつて、これを見てくれと思ふから始ま

る一」御家の「二人の前途」といふ事の支度といふやうな事になつた、と何とも未だ

だらう、良いぢやない」と、夫婦になるなら、世間の人にも其の様に思はれる事だ」と、人言ふの

くない様にあれもこれも好かない、品物にかかつた「好いて好ずる世界だ」と夫、と、其の様に何でも

と、俺ァ泣くヨ。」玉「ア、、泣いてお見なさい。娼妓衆なんどは泣くといふとお客が澤山あると言ひますから、お前はんもお泣きなら墮落が澤山出來ますだらう。ホヽヽヽ。」繁「ハヽヽヽ、違へねえ。然し、なの○○なァ他が嬉しがるけれど、野郎の○○○ちやァ納まらねえ。」玉「ナニ左樣でもありませんのサ。今夜はお前樣○○でお見なさい。」繁「ム、○○○／＼ドレ。」玉「ア、アレ痛いヨ。何樣おしのだェ出拔けにサ。アイタヽヽヽ。」繁「ナニ其樣に痛くもあるめえ、ハヽヽヽ。」玉「他の痛いのなら三年も堪へるのかえ憎いヨウ。」繁「まさか夫れ程に惡氣でもねえわナ。」ト好いた同志が○の中は、實に賢きも愚かなるも、其處に差別はなき物にて、人生娛樂○○の一事に止まる故なるべし。かかる處に、下女が取次ぐ聲と共に入り來るは、別人ならぬ磯次郎が、屏風の外へ胡座をかきて、磯「アヽヤレ／＼疲勞した。」ト溜息を吐けば、繁兵衞が、繁「大分遲く出かけたノ。何處へ行つたのだ。」磯「據なき次第さ。と云ふも他ぢやァねえが此間の晩、ソレ藤八がお松を連れて出掛けてからネ、砂浦へは往かずサ。尤も藤八も夫れッきり影も容も見せねえといふ譯で、打捨つても置かれず、其處で今朝ッから人を雇つて、東西南北を驅け步き、何う探しても一向知れやせん。」繁「左樣か。そりやァ騷動だ。それぢやァ藤八が虛言かね。」磯「左樣見えるのサ。」玉「オヤ、怪しからねえネ。全體藤八さんが、お松さんを彼是お言ひだといふことは聞いて居たけれど、まさかねえ旦那、そんな事もあるま

いと思つて、アノ晩もお松さんを勸めて出したが、悪い事をしたッけねえ」ト[illegible]「ナニ、そりやアお前の所爲でもなく、仕方がねえ。まだ婆が谷の方へ出した一粒が歸りやせんが、所詮まあ知れめえヨ」[illegible]「なんにしろ、馬鹿な理窟だなア。そりやア爺父にも左樣言つて、明日の朝は、此方からも人を出しやせう。そりやア左樣と、まあ何處へ連れて行きやしたらう」繁さん、駕籠屋を尋して御覧じたかエ」[illegible]「エヽ、如才なく糺しやしたが、人が谷あたりで、屋敷へ送つたといひやすヨ」[illegible]「それがお前、手がかりなりやアねえか」ト、繁兵衛お玉も諸共に、胸を痛むるばかりなり。

娘太平記四編卷之中　終

娘太平記 四編巻之下

第二十一回

江戸ならば隅田川ともいふべし。こゝは鎌倉片瀬川、その往昔は大河にして、海より汐の入りければ、西行法師此處へ来て、

浦ちかき砥上が原に駒とめてかたせの川の汐干をぞ待つ

斯く詠じられしとて、今も口碑に殘りけり。夜も更けわたる亥刻前、岸邊を通る荷足船、櫓をぎりゝりと軋らして、往くか歸るか其の中には、五六人圓座して、話しながら行く船を、岸の方にて聲高く、「オーイ、オーイ」と呼びかくる、聲は確かに女と思しく、こなたに乗りし船は、四邊も凄く物寂しきに、呼びかけられて船中には、聲を靜めて寂寞と、岸の方を屹と見れば、十日の月しろ、やや山の端を離るゝ故、その容形は定かならねど、若き女の唯一人、賤しからざる風俗にて、「もしし、どうぞ其處へ着けておくんなさいヨ。後生だから、どうぞお願ひだヨ」と、泣き聲を出して呼ぶほどに、舟は聞けれど不便なので、其の容子を聞かんとて、やがて水棹を取り直し、岸へ着け

跡から追手のかゝるもの。

ナニ其様（さんな）事ぢやア御座（ござ）いません。成程（なるほど）お前様（まへさま）が左様（さう）仰（おつ）しやるのは、些（ちつ）とも無理（むり）のない処（ところ）だが、実（じつ）は斯（か）うで御座います。ト、彼の藤八に誘はれて、砂浦（すなうら）へ往きまして、帰りに宿へ帰れば、夫れから後は斯様々々と、一伍一什を残らず話し、其れで、ナニ何も隠しませんから、昔から悪人が斬ね無くつて斯うして置いて彌（や）は出しましたが、逆に逃げ去り、無念で、何処（どこ）を何様か探して、来て見れば此（こ）の川端、道で聞きたいにも人に話す、夫れにまた憎くつて、どうせうと思つた処（ところ）、誰か来たから見知の事に喜びましたので御座いますが、聞いて漸く安堵はしたけれど、茲（ここ）に相違の藤八が、道に聞いたる挙動を、心に憎いと思ふ悪、串六は煙草をつけたが、『何ア、さう早く切つたのだノ、よしよし、夫れにやア仕方がある。ウン今夜は俺が先へ、同伴に往くがいゝ。』と言つたが、是非に私が確しう御座いますか。余り不思議だから、私の方でこそ、お前はんが狐だかなんかないかと思ひましたつけ。」「ヘエ、、、」実（じつ）その為、どうも此処（こゝ）で逢はうとは思はれねえから。」「左様（さう）、真直に左様で御座います。然しお前様（まへさま）、今夜（こんや）に何処へお出でなさつたんで御座います。」「ヘイ今日は少し都合があつて、大磯まで往つた処（ところ）が、大分遅（おそ）くなつたから、是非泊つて往けと言つたけれど、拠（よんどころ）他と違つて、ツイ土地へ泊つて見ると、いゝ年をして遊びにでも往つたかと、思はれるのも癪だから出かけた処（ところ）が、サア暗くつて一足（ひとあし）も歩かれねえから、據（よんどころ）なく乗合船（のりあひぶね）で、此（こ）の川筋へ出たのサ。」「ヘエ、左様で御座いますかえ。」

ト、試し穴から往く内の、此處へ渡りし大橋の、下へ來りしその折から、上ではばた〳〵人の音、喧嘩と聞ゆく聲高に、言ふ事は分らねど、五六人の事ならんと思ひし時に北方の欄干より、綱を打かけて舉げ下すに、確かに人と鎗中には、聞き覺えて[illegible]、折しも綱へばつたりと、落ちるを見れば、人にはあらず、いと大きなる[illegible]、縄を十文字に掛けし上より、鎗頭は縄の所へとり付けて、舟へ降上げ、[illegible]、何やらするんだ[illegible]。[illegible]此處へ來て舟へ、作り[illegible]、鎗の袂へ寄せて、見れば出迎へる人かに、右と左へ散るかに、なりて一人も居らざれば、鎗頭に[illegible]して、[illegible]へ捨て[illegible]して、何處へか[illegible]るね[illegible]見えず[illegible]、川へ打捨つて[illegible]て、[illegible]折、[illegible]と[illegible]何だらう、[illegible]、それより[illegible]に[illegible]、[illegible]に、[illegible]、鎗中一[illegible]、唱ふる人さへある中に、お松は[illegible]とい[illegible]代が面差、[illegible]、人まで[illegible]

すと聞くなれば、固より無実を生前に、明す事さへならずして、遂に病に罷世りたれば、其の一念の妄執にて、我に怨みをいはんため、かりに姿を顕はしたる、ものにやあらんと思ふにぞ、猶怖ろしさも増しぞ、心静めでは叶ふまじ、と懐より出す水晶の、数珠の目なす額の汗を、押拭ひつゝ揉み立てゝ、「南無や精霊頓生菩提、この世はかりの夢の宿、縦令無実を身に受けて、明すよしなく終るとも、心の誠は仏ぞ知らん、即身成仏疑ひなし、心遣ごす冥土へ往け」といひつゝ、数珠を揉み立つれば、女は其処へ平伏して、わつと一声高く泣きしが、稍あつて頭を上げ、蟲に等しき声を出し、「是れはまあ貴方は半六様、何故して此処に」ト、摺り寄るを、よく／＼見ればお千代に違はず。気味悪けれど半六は、漸と心を落ち着けて、「ハテどうも合点が往かねえ。其方は一昨日死んだ筈、殊に昨日も寺へ遣つて、葬式の煙になつた者が、此処へ来よう筈がない。迷つて出たか。」ト、いふを聞き、千代「左様思召すも御尤も、是れには段々容子があつて、私は蘇生り、此処へ参つた其の譯を、お聞きなされて下さりまし。」ト、それより焼場の一伍一什、傳吉坊主が悪念発起し、私を連れて八百屋へ行き、お玉が始末巧みの話を、お前様へお話し申し、両側が証明を立てるとて、葛籠へ入れて背負ひ、此処へ来た時往来の、人に葛籠を倚られ、争ふ機に落されたが、川には丁度船があり、又其の船にお前さんが、乗つてお在で被成るとは、願うてもない私の仕合、しかし肝心の傳吉坊主が、此処へ行

つて仕舞つても、矢張り證明が立ちますまいか。」ト、またも悲る、野の菊の、霜夜に弱る風情より、始終の話を聞くよりも、お松は忽ち顏を上げ、「[illegible]お千代さん、お前樣は蘇生つてお在でなさる[illegible]今お話しの容子では、なにから何までお巫さんが、あんな惡い人に[illegible]をして、然よう惱い心意氣、左樣とは知らず今の今まで、私はじめお前さんか、惡いとばかり思つて居ました。左樣いふ譯なら是れから直に、あのお巫を連れ出して、お千代さんを元の通り、お下屋へ上げ[illegible]いふと直ぐ、お[illegible]は翌朝さて、[illegible]くまれ、お松のやうに、思ひも寄らぬ事なれど、何の事も無い[illegible]たゞ他より、一度ならぬ[illegible]を拔いたれど、[illegible]所爲になりて、しかし他は通れぬ習ひだが、それに就いちや、宗祖の家や、病頭家にも弔を讀ませ、ことに[illegible]高下あるに、[illegible]こゝに長崎の一人も、[illegible]お千代さんに[illegible]、またはお松の身もとの、ことさら[illegible]で聞きなれば、[illegible]らねど、[illegible]の[illegible]、いと奇しくも思ひけり。兎かくするほどに、[illegible]みな[illegible]の[illegible]へ[illegible]て、[illegible]を[illegible]、[illegible]人の[illegible]、[illegible]てゐ[illegible]に、お千代[illegible]の上にて、[illegible]と、其の[illegible]、[illegible]あの[illegible]、氣力もすぐ[illegible]里[illegible]、[illegible]しがた、[illegible]、[illegible]も、[illegible]、[illegible]は是れ[illegible]、[illegible]

か、元より白き衣類にて、人の怪しむ事もあらんと、上着を脱ぎてお千代に着せつゝ、手を曳き腰を押しなどして、またゝく間に來にけるが、こゝに半六がむかしより、心安くする人あれば、これ幸と門を敲き、如此々々のよしを大略語りて、お千代を此處にあづけ置き、おまつを連れて家にかへり、紫兵衛やお玉には、お千代がことを曾て言はず、たゞお政が身のうへのみ、有のまゝに語りければ、二人とも大きに呆れ果てて、半六をにくみけり。斯くて其の夜も明けければ、半六は遽はしく、お千代をたのみし家へ往きて、やうすを見るに變ることなし。先づすこしは安堵して、やがて近邊なる醫師をたのみ、養生の藥をもらひ、四五日も經つ程に、氣力付きて食事もすゝみ、心も定かになりにけり。

第二十二回

鹿を追ふ獵師は山を見ずと、昔の諺にいふ通り、お玉は此家へ乘り込んで、世間の事には心もつかず、唯己が身の榮耀のみ、日を越え月を經るまゝに、驕りにのみ長じつゝ、人の妻たる道をも知らねば、その自墮落は止む時なく、奉公人をば犬猫に、ひとしく思ひて憐みなく、舅に仕へる禮さへ知らず。されば始めこそ紫兵衛も、色香に引かれて何事も、惡くは見えぬ欲目にも、今はやう／＼疎ま

しく、藤か後悔の色はあれども、今更為方なければ、先づ其の儘に置きけるが、此の程こそ然ば浪浦へは往かすとて、磯次郎に金を持たして、人を頼み請わせ、得手折か父半六が、之然を連れて歸り來つゝ今宵の始終を語々と聞けば人を欺きて、又も連れ行かれ間に、磯次郎へ知らせければ、此れも早速來りつゝ、先づ其の無事を歡びて、半六に一禮なし、又藤八が人目無人の宿を憚りて、此方に人を走して竹屋の許を、藤八にそその由を告げ知らするに、次郎八も頓ての別懐にて、藤八を離して住居ありと、それより彌々を持しけれども、彼もこの安心なし居たる間に、お駒は何時も危ぶみ居しれば、扨こそ其へ知れたのと、凡ての始めから其のとゝに、逸早くなし其の儀は、更に行方も知れずと又も重くして、四五日を經にければ、お千代は早速て宗助に、聞わけもなしにければ、半六は先に此のことを、密かに兵衛が許に告けしかば、お駒に云ひ含めて、直にこの屋を出でしかば、お駒は其にも語る由なく、いまだ其の儀を知らさりけり。さて半六は其の中に、其の儀ありとて、お千代お蘭が惣を以ては、惣吉が妻と成りし頃より、其の時にはと、吾もこと來た時には是まで、お千代は今其の身もなれば、其をとこそ我が身かと、輪廻我が三郎、一日毎日く日々と、是くす資産を、何時までか其のまゝに置かれんと、隱を定めてお駒を、彼にも其の事を知らせて、れば、お駒も顔にてお千代が許へ、聞けど聞くことも叶はず、今は詮方なく取りはからひて

こそは萬のこと、なんに限らず相談相手になつて、お玉も八百屋へ入れしが、この時お玉を疎み果して、顔を見るさへいと憎く、思ふ折から半六より、斯うノヽしてと頼まれしは、幸なりとおもひつゝ、「この間お松が來て見れば、お玉は秦兵衛と對座にて、例の如く酒飲みながら、「オヤお松さんか、能くお出でだノ。お前この頃は嬉しいお見限りで、ちつとものお出でないネ。」「エヽ、これでもいろいろお用があるから、其所に遊んで居りやア居られないよ。」「ソヽ、人の女房になるにやア、左樣ならなくツちやアいかねえからノウ、ナ、俺ア厭だぜ。」松「ごりやアお前なんぞは、半さんの樣な優しい人を良人に持つて居るから、それでも宜からうが、どうして世間の普通はさうは往かないヨ。」玉「ナニ左樣かへ、それぢやア私は、よつぽど後生が宜いのかノウ。」松「いゝ醜か、お前のやうな惡黨が、一生かうして居られれば、お天道樣はないと同じ事だわ。」玉「オヤお松さん、可笑しく云ふねエ。私が何が惡黨だエ。そんな事を戲談にもいつてお呉れでない。氣障な。」松「ナニ、戲談なものか。また惡黨にやア違ひないものヲ。」玉「アレサお松さん、つひにない今日に限つて、そんなに惡くいふなア、どういふ譯だエ。何ぞ惡い事があるなら、これが惡いと明に言つてお聞かせな。わちきやア他樣に、そんなに惡く言はれるやうな覺えはないよ。ネエ秦さん。」秦「どうだか、俺にやア知れねえ、まあなんでも男を迷はせる事が上手だから、どんな惡業をしたか、それも知らねえのサ。」玉「ヲヤ、御前樣までが

其様に悪くおいひなさんな、母様お情ないわいなア。[illegible]様お言ひなさるから、妾がいつて聞かせたから、一
寸よくお聞きなさりませ。あゝ、聞かせてくりやう。[illegible]の事、何様[illegible]て、お好
儀さんになりたいからといふて、[illegible]とかいふ悪所へ売られたので、お千代さんに行かれもしない悪
名をつけて、聟さんにならせなさつても、何様な性根[illegible]お千代さん[illegible]それを首
尾にして、死ぬ事に極めたは、そんなに思ひつめうと思つたは、夜この外に[illegible]、ひとりと
巧みし悪計を、如何にして聞き出しけんと、聞けば[illegible]、[illegible]
て企だつたと思つたら、馬鹿らしい、おれがそんな事を知るものか、[illegible]
から、此の[illegible]はそんなものおやぢかい、新参の千代さんが、[illegible]、出て[illegible]
へ入つたから、さうした悪口をいふ人や、あるかと[illegible]、それを種に[illegible]、
述懐を聞かせ、これ此の書[illegible]に明白な証拠もある、此の[illegible]を出でなさい、[illegible]お千代さんが[illegible]、所詮
今度もしに違ひばかりをするいゝ。左様、あのや、這入ねえ、[illegible]自分[illegible]たも
ので[illegible]とうお聞き、さしてお話し、お前さんの事を聞かねえ[illegible]、[illegible]俺が
ら聞いたこの[illegible]十人の前で恥をかゝせ、[illegible]知らないと
お千代さん、此の頃別れたのだらう。[illegible]口だ[illegible]

あるのかえ。」繁「もう宜いおやァねえか。お千代は死ぬし、傳吉は居ず。今爭つた處が仕方がねえ。」松「アレ、繁さん、お前まだお玉さんに魅かされてお在でだネ。何も私やァ憎まれ口に、こんな事を云ひ度くはないが、聞けば聞くとッて涙が滾れる樣な譯だから、モウ是れッ切り交際はないとお言ひでも、構はない氣になつて言ふからさうお思ひなさい。人に慾のない者はないけれど、人の命にも關はる程の事はしたくないものサ。」繁「モシお松さん、お詞の中だが、人の命に關はる程の事を、私がしたとお言ひのかえ。」松「アイ左樣サ。」繁「そりやァ何の事たえ、心易立てでお言ひかは知らないが、私やァ人殺しの科人にされちやァ、其の分にやァされないよ。何時私が人を殺したえ。サァお言ひ、サァ言つてお聞かせ。」ト、膝立て直して眼に角立て、摑み懸らんとする勢ひ。折から次の室に聲高く、「其の證據人は此處に居やす。」ト、言ひつゝ開ける障子の音、ぬッくと立つたる毬栗天窗は、容姿こそ變れ髮結傳吉、流石のお玉も惘として、言句も出でず目戍りつめる眼の前へ、傳吉は跪坐り、傳「お玉さん、お久しぶりだネ、何日ぞやお前に賴まれて、繁兵衛さんを巧く騙り、お千代さんを追ひ出させた其の御褒美の約束違ひ、青砥の官人へ吹ッ込んで、追つ拂つたも知つてる筈。それからどうも仕方がなしの、青道心が身の上は、蟇が谷の隱亡と、成り下つたもお前故だ。夫れからお千代さんの一件は三編の下の卷と、四編の中の卷に委しくあるから、それを看なせえ。さて私も葛籠をば、必定川

へ落したと、思つた故に、いよ／＼なア、折角蘇生つたお千代さんを、又川へ落すといふも、能く／＼の定業だ、然し是れおやア又片便りで、仕方がねえと思つたが、聞くべき噺を搾き出しちやア、もう稼場へも帰られず、毎晩此処を徘徊いて、若手によつたら又一遍、悪玉でしけ込んで、金を借りるかそれでなかアア、突き出さうと腹を据ゑても、まさか一旦自己が身の、悪事を能くも思ひ返して、善心に返つたものを、今更又もとの悪形に、たち戻るも如何かしてまア、ようと思いて居たが、悪玉退へ一件六さんに、お目に懸つて動靜を聞けば、お千代さんも達者だと、聞いちやア此方の心も雲晴れ、其の時雨に留合はせて、始終の話を聞いてみれば、お前に恋慕の望みだといふ、お慈悲を御様に立てて、其の黒白両に参りやした、僅かな事に眼が眩れて、悪い事をしたお詫、人間でねえ此の身體、皇天后は恐ろしいこと、両手を出のば縛兵衛は、聞いて喫驚身を顫し、まア今の話で聞いて見りやア、お千代に云く私はなえものを、どんなお手か悪討で――二ゝ――命とたと言つたとも、妻が厭んさの作言が――いふにお前は悪をなつて、そりやア、傳吉さん、何故お前の身をつまゝなくなつたと言つて、人に縄を掛けて、自己ばかり宜い子にならうとしなさるか、お前がさう云やさアね、此の合せし、見る宅き落さうとしたつても、へゝ、此のお爲さんは、さんを手でいくのをやアさ悪難いやアいゝと、落ち付き払つた面魂、容形に似合はぬ大膽を、陰で聞く中の爲にたしく、輿の家なぞさんりと開けて、お千代が

手を曳き立ち出る半六、お玉を青眼と睨めつけて、「半六、コレお玉、其の樣に口怜悧しく言譯しても叶はぬわえ。默つて居されし。化の皮は顯はれたわえ。それといふも繁兵衛めが阿房から起つた事、親でも子でも片手打ちの、裁断はならぬ天下の大法。サア二人共出て行きをれ。」ト、鋭き怒りに二人は仰天、お千代は既に取縋り、「千代、夫れでは私が濟みませぬ。何ぼ此の身の言譯がたつても、夫を追ひ出さしたと言はれしは。」ト、詫ぶれど聞かぬ老いの一徹。身の過りにお玉は元より、繁兵衛も爲方なく、共に立ち出る門の口、五足六足迪り行く。此方に佇む一人の男、ずッくと其處へ立ち出でて、「コレサア、お玉遊い／＼。手前が悪事の段々を、共に聞いて膽が潰れ、疎み果てた人畜生、半六さんの下知を受け、手前のお母が隱居所も、今追つ立つて戸をあけた。サア一緒に何處へでも、足の向く方へ行きやアがれ。」ト、突き飛ばされてひよろ／＼と、お玉に縋る母親と、顔見合はせて互に愁傷。されど今まで種々に、巧みし譯の顯はれては、流石に白きを黒きといひ、横紙破りのお玉母子も、今は中々言句も出でず。繁兵衛はこれを見て、「やア、お前は磯さんか。」「アイ私だ。」「サア是れからお前の腹を、聞いた上で仕方がある。お玉母子と同伴に行つて、切ない生活も好いた同志と、やる積りならそれでよし。若しも先非を改めて、親爺へ詫びをする氣なら、及ばずながらやつて見よう。」ト問ひ詰められて、「實はお玉が悪計は、今夜初めて聞いたけれど、日頃の身持に此の節は、弗々愛想

が盡きたやら居るが、出でうと言つたは彼是と、むつかしからうと一日送りに、して居た處が今夜の話で、愈〻呆れて色戀も、一向冷めてしまひやした。ならうことなら此節へ出、再びお顧み申したい。二人共夫れに、愈〻違ひがなくば、ならねばどうでも骨を折つて、詫言をして見せう」と、半兵衛を連れて引返り、お玉母子も己が身の、悪事思へば今更に、漸く涙の露時雨、頼む縁の千鳥足、縋る道の仕々、塗る跡さへ、日頃の行跡を悔むものから、誰ありて世話をする者もなく、種々縁ごして果てたのと身や。さても磯次郎は、半兵衛を引連れて、八百屋へ来たり、親父半六に種々ぞ噂を語れと、半六はなほ承知せず。種々むつかしく言ひ折から、お樹が千代を供々に、絨きて詫言をなしければ、よれに免じて漸う許し、さてこの由を内證なる嫁の長話にも知らせければ、内證はお千代が疾くも生を聞いて喜ぶ事限りなし。かくて半兵衛お千代が中は、以前にまして睦まじく、親半六に能く事へて、孝行をなしにける。かくて後半兵衛は、磯次郎が志を感じ、住吉の隠居へ話し聞かせて、軈てお松を磯次郎と、改めて婚姻させ、両家益々榮えける。されば千代は一旦の、恨は有りと言ひながら、善心に立歸り、傳吉坊主が功にて、其の赤心も顕はれて、再び、妹背の縁を結び和合たる事なれば、と、三子を與へたりければ、傳吉の鈍愚は、喜び受けて納め、是れを長途の路用として、諸國行脚に出でにけるが、年數を經て歸り來つ、住吉の片邊に、草の庵を結びつ、生涯行ひすま

しける。

娘太平記四編卷之下（大尾）

辰巳清談
梅之春

梅之春初買の序

瀧に凍の重頭は、土堤の南風[illegible]、[illegible]くとは情の下紐をやはらん[illegible]の[illegible]北面は、中田圃の雪封じて、寒うざんす[illegible]の[illegible]南枝花始めて、開くは郭の初紋日、今[illegible]の昔を慶[illegible]す、通ふ神代の春とも謂ふべし。[illegible]人来と告げて、初衣裳の麗かな[illegible]色を含み、[illegible]花の[illegible]を急いで、初仕[illegible]に、松の内の景色を整ふ[illegible]の客の装[illegible]る春風[illegible]水誘ひ連れしは恵方の蛤大黒舞、[illegible]をつくねて、[illegible]大門[illegible]、[illegible]代[illegible]、[illegible]おめでたうとしかいふおいらん。

[illegible]は、今より二十余年[illegible]、[illegible]もなくなりければ、[illegible]心にかけしかば、[illegible]の中に其の筆[illegible]

いよ式亭が追纂の餘り、此の枝の花の作意にゆかりも有れば、頓て寫して序の代りとはなすものならし。巻をつらねバ、四方の看官心得たがへして、必ずしも故人の文を掠めたりとなさしめ給ひそ。古今を不論親疎を不撰、他の文章がゆかしさに、斯かる所爲をなす事なれバ、宥し給へと願ふにこそ。

天保九戊戌年月良辰

爲　永　春　水　誌

北里元日のけしきは風流ならず初著の衣裳二日の支度にて其のせはしなき體は大晦日の如し。

女藝者の宿下りに等しき他所行のみぞいと珍らしき風俗なりけり。爰に玉樓しら玉の名吟に、「引明けや今年の烏去年の星。」と詠みし時刻を待ち兼ねて里を早出の美人達多かる中に、わけて愛敬深き唄女お玉、今日を一世の晴と出立ち、いそ／＼と足を早め堤を下りて、程遠からぬ春寺の、白觀音の裏と思しき長屋へ至り、針業女師の宅の障子を明けて、「お[illegible]さん明けましてはお目出度う。」「オヤ、オヤお玉さん、能くマア其様に早く支度が出來たね、最う[illegible]にいつてお出でかエ、オヤどうしてマ[illegible]うして、早く此方へ來ようと思つて何様に急いだらう、卯の刻をうつ時分に目覺たものだから、家の内義さんに叱られたワ[illegible]一年に一度の宿下りだものを、寅の刻に起きても能いじやアないかネ[illegible]それでも氣がわるいからだわネ、[illegible]今朝に限つて起さずに目覺されるには[illegible]當然だネ、小言をいふだけお野暮だ。[illegible]野暮といへば早く[illegible]がふじやんねエ、[illegible]お出でないカネ。」[illegible]最早先刻から二階に往つて[illegible]いてだヨ。」[illegible]左様かへ、[illegible]私が來たのに無言つて[illegible]在でだねえ、寝てお在でかね。」[illegible]味線を弾いてお在でだヨ、[illegible]左様か[illegible]憎らし、狸だヨ、二階へ往つても宜いかエ。」[illegible]、宜い、

どこへおいでゞない、今日は終日お前と七さんに貸切だから、そんな事を言はずと、七さんが待兼ねてお在でだから早くお上りよ、ネ、エひよつと情人でも連れてお出でたと気の毒だわネ」「イヤ、ネ、最う嫉妬の言ひ初めだねえ、かはいいのはお前一人だと洗浚けてお出でだから、受引顔をおしなんななさいよ」「ハイ〳〵、受負は先払ひだよ」、とんだ下紙使だネ」「まア憎い気だねエ、嘘にも嬉しい」と笑顔笑ひ、いそ〳〵して二階へ上る。

「七さんなぜ黙つてお在でだ、お座さなねえ」「しかし、引ねむい〳〵だれだ、まア旦那だもないもんだな、人の心も知らずに」「一人の心と花の露だよ」「ヲヤ洒落處おやないヨ、これ〳〵乾達はで来たのに、何様に気をもんだか知れないヨ」「先の情人が放さねえでか」「ヲヤまたかした事をお言ひだねえ、何處にそんな者があるえ、ヨウ〳〵言ひなさいな、お前さんこそ諸方へお出でだから、お楽しみの所は出をだらうけれど、今日は仕方なしに義理で爰までお出でだらうから、實にお気の毒だわ」「そんなことを言はれるとしんに悲しくなりますわ」「ヲヤ、嬉しい事だ」、緑起でもねえ元日だぜ」「一元日からなぜ気をもませるだ、たま〳〵だから安閑と逢はうと楽しんで、お生憎が佛島へ回住に参らうといふのを、やう〳〵嘘を吐いたり何かして勿體ない妙見様へも参らないで、あくせく〳〵として急いで来たのに、じれツたいねえ」「又今年中気をおもませだらう」「實にお前がやア命も續かない

様に苦勞していましたわ」「ふん、苦勞は互ひだ、」「[illegible]お前のいひ草ぢやないが[illegible]
え、此方にもいふ事がある。」「[illegible]、何かいはれる事が有
りますまい。しかし静かにしれません、澤山あるから段々に考へて言はねばならないが、まア、お
にも見れない[illegible]落度があります[illegible]まア早く言つて[illegible]
一昨日の日暮の女が[illegible]まア左様でございます[illegible]
うちへ歸つてからは思ひ入れ恨みを言つてやらうと[illegible]其様に[illegible]
ますと[illegible]女[illegible]無理[illegible]一昨日から[illegible]を持つて來た[illegible]
思へつて逢はねばの[illegible]能く[illegible]ないと今朝も自家で[illegible]
長く長く待つて居て、行が明くと直に自家の方に[illegible]仕方がない[illegible]
他人の身分ほどは[illegible]ありませんと[illegible]見希[illegible]
へて見にいたのに[illegible]何様に心配[illegible]
薄感付いて居ますから、[illegible]立分別[illegible]
いや／＼[illegible]お前[illegible]の[illegible]
ね、譬令[illegible]日[illegible]此[illegible]心[illegible]

ハテ斯う言ふのがあるぜ。ちよつと三味線を弾きな。」玉「アイ」ト直に三味線をとつて爪弾をする口舌の中に色氣の合の手を交へ、一向に取締まらねどお互に惚れた人情にて、他見で看れば何の譯もなきに、泣いたり笑つたりするが愚癡しいと思ふなるべし。左樣思ふ人は人情に疎く、萬事に早く老込んで勸善懲悪の草紙をそしり給ふなるらんか。」玉「ヲヤヲヤお嘲ひなさるねえ。」七「マア待ねえ、エヽ、ト何だつけ何だつけ、左樣々々、小聲にて、

〽「ほれたのしやくりで口舌はすれどそれも惚惚ける癡話のたね。」

玉「オホヽヽヽ、嬉しいネ。」七「まだ斯ういふのがあるヨ。」

〽「いきな男に浮薄なされかけて解いたるしゆすの帯。」

「ナニサ氣障だねえ。」七「なに氣障でもあるめえ、若しそんな事があると唯は置かねえぜ。」玉「そりやア大丈夫でございますヨ。私の我慢者は他人が知つて居ますわ。」七「松公に大そう無法を云つたさうだの、言ふ事を聞いて遣ればいい、餘程好男だぜ。」玉「イヽエ、たとへ業平さんとやらでも、田舍源氏の光氏とやらいふ好男でも、惚れは仕ませんヨ、浮薄で憎らしいと思ひながら、お前さんの事ぢやア勿體ないが、親のいふ事も、主人のいふ事も無理と聞いて居ますわ。」七「そんな自分勝手を思ふものぢやアねえ、親は大切主人は大事、隨分年季の明くまで辛抱をして勤めるがいい。」玉「今にも年が明

く樣にかえ、能い氣な事をお言いだね。私なぞはだましてまで置いて、又二十日目にお出でのか……たと
へ何と言つてお聞かせでも私には逆はずに居る辛抱は出來ないよ、惡いものに見込まれたと思つて、
かはいがつておくんなさいナ。併しお氣の毒でございますネ。しかし又お蔭で腹を立つよ、マア左樣は
言つたものの此方だつてもお前樣おやまア他人に面皮をかいた事も有り、何樣して暫時も逆はずに居ら
れるものか、此の末とも此方に恥をかかせる樣な事をしてくれてやア困るたぜ。それは最う私に
限つては野暮なお説には構ひ人もなし、何ういふ樣なお前樣と樂うたつてかね、無論とやらの呼も聞
えたのでありますから、他人が完全するのを聞いてもお今をやア無理と仰るなさいませんか、實に今までは
他人が情人の噂でもすると嫉らしい氣障な事を言ふと思つて居ましたが、實に惚れて居るとヤア他意
けたくなりますねえ。とヤア嬉しいなぜ、それだから素人が惚情とするふだに、ヤア素人とは何で
有りますエ。ヤアお溶い素人に對眼にするといふ事さ。ヲ常らしい、御自由しなしておらに、マア左樣
な事堪忍して上げませうね。ヤア嬉にて萬下を拔いて居る。ヤア明日は年始に出なくつてはな
らず今夜は夜通したから疲れた、そうして丁度お前樣で春らははアね、此方は人に賴んで一寸ら
……ヤ、私も少し夜々にお前と歓ヶ明りましたから、又晦日の遠い
座でございますな。左樣上一年の言葉で年も中ながら大晦日に年始にでも

「あんまり表が賑やかで有りましたから、妓生と見て居ましたら、太神樂のお狐さんが來て、既に捕へるところでありましたわ。」「左樣か抱き付かれゝばよかつたに。」「まア、いやらしいそんな事でもあつてはい付きません。」

これは昔より年越の夜に太神樂來り、狐の面を冠りて郭中を廻る。此の狐に抱き付かれると、其の年の内に懷妊するといひ傳ふ。嘗し衆人御存じなれど遠國の御客に告げ奉るのみ。

「さうさう、今の鐘はなんだ、未の刻かなア。」「ほんに今日は別して日が短いぢやアありませんかねえ。鐘を突く人は寺に來りさかない人ばかりねえ。」「そりやア、いゝ、また忌々しい事をいふぜ。鐘を突かれまでも、日の暮れる時に日が暮れて、夜の明ける時には夜が明けるわな。」「ほんにそれでも時が知れると氣が忙しくなつてなりませんのさ。」「ほんにことに惜らしい程日が短い樣だ。明日はまた彈初で寅の刻から起きますから、お休みなさいましでござりますね。」「これ〳〵御遠慮なしに爰へ寄なさえ。」「それが否なら又其の話をして上げようか。」「まあ、また人じらしな節まつた憎らしい。」ト しらをお組てかなへたら、い指をそこして見る「まア、ヽ、鳴つた〳〵。」「ほんに太鼓の音が仕ますね、太神樂が下へ來ましたのかえ。」ト「左樣、今に狐が上がつて來るぜ。」「ヲヤ、郭の内ぢやアあるまいし。」ト「ヲヤ外でも狐の面を持つてある〳〵太神樂が驚入るまるばかり」トいふ中に、太神樂の太鼓の音、ドコドン〳〵、エヽヽ、ヲヤ御目出度うございま

[illegible]御前様をなを[illegible]様子や[illegible]大将に賑やかに[illegible]

[illegible]頭に上つて来て」[illegible]驚かしらや[illegible]強に抱き付かれる中に」

[illegible]

八分方[illegible]初夢[illegible]六道中[illegible]

●本[illegible]

辰巳情談　梅之春卷之一

江戸　爲永春水著

第一回

「鶯の聲が枝頭に弘めの春、其の東雲の空で鳴きつゝ／＼ほう／＼／＼[illegible]若潮が汀を[illegible]しだ[illegible]
と五町の町をふれ歩行く、若潮と印の担桶は、揚屋町の[illegible]より出づる[illegible]にて、若湊を揚ぐる繁
の其俤、他所にはあらぬ京の宿、里の賑はひはじめ、仲の町の店にひけ、是れぞ世上の元日にて、
睦月の初日影、まだ明けやらぬ[illegible]の雲に隠しゆかしの[illegible]指したり、曲輪の中の町茶屋が軒並提灯は、
咲く二階と[illegible]が積上げた松竹梅其の光景いさぎよしさは座に並せぬ花の座敷にて[illegible]の紫[illegible]はや
十き階座に、聞くも目出たき書画は、長江の[illegible]新春面、[illegible]富貴草の岩根に、富本の[illegible]、
江戸節と中節の流の其の時世を得顔の錦の春は、言問の客[illegible]が、男女の悲喜を世に互に[illegible]なたゝる時、
はしても勝て朝日の光照すのほ、はや立る門の[illegible]、実用しあれば[illegible]化を[illegible]し今年の[illegible]、

揃への仕事師衆先を揃ひ、仕着施の番子を晴着となしたる若者、又不寝番なんぞ五六人宛附き添ふは、さも厳重なる風俗なり。軒に連ねし松と竹、青々として竹藪のごとく、千里を遠しとせぬ三枚の駕籠は、初買の客引きも切らず、虎の威を添ふるとがみ達打連れ入り来る。千差萬別群集はいはん方もなし。爰に何階にか二階なるか、とりわけさゞめくおもしろさ、表の方には招かれて二階を見上ぐる大黒舞、すでに名寄をはじめける。

作者曰く、大黒舞のきりふ花盡しの文句など、二三十年以来次第々々に略して、今いふところは片言の如し。されども氣短なる人情につれて、これをとがめず。爰にも略せし儘をしるして置くのみ、かならず作者を難じたまふな。

たゞ今咲いたり〳〵、女郎衆のさいた簪は、花笄はの梅櫻、開き初めたる早咲は、ほかにはあらじ此の里の御女郎衆の初買、サア大盡舞を見さいナ、御きかんはたゞレ〳〵ヨイたアレエ引　誰とはおみおかたのイニしッ〳〵、ゑどこにござッてヨイ玉屋にかくれなきこともおかめや、しら玉の君さまがドッと賞めていはうたァ、サア大じん舞を見さいなァ、ドットほめていはうたァ。東西々々、アノ白玉の君さまが大盡舞が花盡しにて賞めまんしよ、牡丹の花の太夫にて愛嬌さくは菊の花、花が見たくば此の御里へ申を通りし御君さま、君さま繁昌と祝ひたてまつります。白玉さまの御祝儀として新狂言二葉繪

き曾我對面序幕はじまりさやう、カチ/\/\/\」

是れより曾我狂言よろしく察したまへ、さて狂言すみて例の壽。

大「千秋萬歳千箱の玉をさゝげん」トいふ間に往來の見物「ヤンヤ/\」トどよめき、また/\大黒舞に付いて行く跡に、三「此際は錦繍はしく女護菩。」三「音松は何度能いねエ」三「イヤモ一ツお前惚込か」

△「宮古さんよしておくれ、情人に叱られる」三「イヤ/\物落早々のろけぞめか。」才ぞう「モシ旦那大そうな贔屓だやァございませんか」三「左様ヨ大変な若旦おやァ此のくらゐ入はねえの。」才「左様でございます。」宮「人聚衆なすこと蟻のごとし」三「ナニ/\大分騒いことを云ふネ」宮「此の方青表紙をはじめましたネ」三「きのふから道中から蟻の曲つ青表紙だらう」才「何分左様でございませう」三「また貴樣までか」三「アノお前さん音吉の方を見たか」才「ヘイ/\まだ見ねエ」三「何さん音吉の方も呼んでおくれなましイ」三「ナニなんだネ、此の上は呼ぶにゃ少々遠慮なしだコ」三「今に此方が大黒舞でもして見せよう」三「宮古さんと呼ぶさんなら此人前はだしい」才「東山の書慣おや、大當のやらかしたい」三「へ、宵から皆うるさうございます」三「全體宮古の先祖は山下、出たといふ事だ」三「そして旦那様るな事を御しやいます、これでも私の先祖と申しまするに勿體ないくらゐ」三「まア竹生島辨才天の御由來。」新造「アレサ宮古さんが才藏、早々して御見せなさまし」宮「

イエいたしますめえ、旦那があんな事を仰しやるから。」女げいしや「オホヽヽきつい御立腹だネ。」才「立腹よりいツ服して何ご始めようか。」宮「よからう〳〵、ドレ〳〵お支度被成らうか。」女げいしや「ハイ才蔵さん思ひざしたア。」才「まア〳〵お押へ。」宮「第一其の杯は誰人から戴いたのだ。」女げい「エこれかえ、餘りお前がた多辯舌つてお在でだから、私が宮古さんの前にあつたのを拾つてネ、チットはやらせようと思つてサ。」才「ナニ杯に氣の付く事はお染さんに限るネ。」宮「杯ではねえ、酒好きだらう。」才「サア〳〵一杯きこしめして憚りながら旦那へ一ツ獻じませう。」才「サア〳〵宮古仲直りに肴な遣らう」ト才蔵宮古の二人へ肴をとりながら、才「才蔵は仲人役だ。」ト宮「イヤこれは有りがたい。」才「山や豆腐といふ洒落はよろしくないの。」才「サア大變だ、山吹色に猫古し有りがた山猫。」才「よくはいらしいも今はねえぜ。」宮「エーーごございます、しかも一清元の浄瑠璃にか。」宮「エ左様先くなりを被成つちやア能い洒落や地口は出ませんぜ。」才「イヤ洒落も地口も今のよりか古いのが能うございますネ、マア昔から能く人の口の端に。」才「コレ〳〵又何か老人の言ふのを覺えてならべたてられちやア御免だぜ。」宮「左様々々才蔵が聞き覺えて居りますのは、谷中能い所池の端、合羽でござれや雪隠。」才「ナニ〳〵まだ能いのが幾等もありやす、エヽ。」ふり「アレサそんな小事とも、わからない事を言ひなんせずと。早く何ぞお始めなんしヨ。」才「ハイ〳〵成程御尤もだ。此の洒落の時分を此方も知つて居ると、仕な

突いて歩行くのだ」「真イヤ／＼左様でもあるめへ此方と違つて其頃は繁昌時代で若いからと此間左様言つたおやすねえか、しんぺへでいへ流行頃は俺が二十三四の時分にはやつたといつて聞かせたおやすねえか、此方が老年に聞いたらば四十年程以前に流行つたといふから、左様して見ると其方はことし六十四五歳になるぜ」「ハヽヽ、夫れにしては少し若いので」「ヘヽ／＼それは餘りだ」「ハヽ餘りでもねえヨ、随分年たけに見えることよ」「そんな事をいはずと御そして呉てよこし」「アト常道丞はさもなる事のやうに雑聞雑をしれ、と早く酒を運ばしてネ」「ハイ／＼真まのふしたて、真まつ最初にいたしますのは、旦那様がた御酒でございますかと、欲張しい所作振、お初さん左様、キャク／＼女子とも三味線弾きて キャク／＼大そう賑だねへ」

是れより若蔵宵には南人排合の研究とふる気楽さ人の手のさの事、い春、此家のみなみな家毎にふし面白く思ふ聲聞心となりて、其の隣にしも気楽さに、既に見渡すことなれど、裏表ある隣の家屋は、ちうにらないと聞れ商ありし

第二回

爰に何屋の裏なるか、貸長屋の隣の家の障子をあけて這込む年若の頃は十一二、またたてさなわく、身なりも何分なし

「ナニ、預けて来たから宜にせつないヨ、茶碗を貸してお呉れな」トいへば、此の家に来て居た二十ばかりのいろをとこ、土「エ、ぶしやうな女だノ」七「今茶を呑んでる處だ、其處の引出にあらァな」土「アレサ出すのが面倒だからサ」七「マア、サア仕方がねへ貸して遣らう」土「アイ有り難くもなんともないネ、アノ老女さんはヨ」七「今曉町まで往つたよ」土「そんならお前さんが留守居かへ」七「氣のきかねへ役だが、其方が故だと辛抱して留守居をして居るのだ」土「左様かへ御苦労な、嘸お淋しかつたらうねへ」ト嬉しさうに莞爾笑つて男の顔を看る」七「先刻呼びに遣つて聞かれるかァなかつたか」土「イヽエお客は寝てしまつて、次の間で案じと存んで居ましたところだから」七「今日は一文字屋のしまひか」土「アヽ、お店の」七「お店とは」土「アノ路井のお店の衆で贔屓仕舞サ」七「左様か、あすこの家は路井のお客ばかりで、他の客は嫌ひといふ事だが能い様だのか」土「アヽ、お店ばかりで澤山でございますのサ、左様して見ると路井屋は大家でございますねへ」七「そりやァ日本一の商人だものナ、文嘉の神棚にやァ路井大明神と崇めて朝晩燈明を上げるといふ事だ」土「そりやァ左様と座敷の都合に能いねノ」土「アヽ、長八さんの言ふには、客人の寝て居る中泉湯へでも這入つて、支度でもしてお出でといふから、丁度いいと思つてお松さんと何かと同伴に其處まで来て、家内へ歸る風俗をして、又此方へかけて来たもんだから、何様に胸がドキ／＼仕ますだらう。それにもさ揚阿町の裏へ這入るのは、何だか氣兼でございますネ

それならまア安心[illegible]一寸宜うございます[illegible]頼んで來[illegible]

しておかん、あの縁が宜い時分には呼びによこして[illegible]

たゞそれたら[illegible]相談を[illegible]おくんなさいまし[illegible]

[illegible]だけの[illegible]意地惡[illegible]

[illegible]

[illegible]

仕やうがあれば、それだけの[illegible]

んのことは目をつぶつて[illegible]

[illegible]一方通り[illegible]

[illegible]

ミイく間が悪かアなかつたかヱ」三「ヱエ、エエよかつたヨ。」米「左様かえ、それでも此處では心遣ひだから二階へおあがりな。又お糊さんでも來るといけないから」一「ハイ、左様仕ませうと、七さんお出でなさいな、私やア先へ往きますヨ」七「アイく、しかしにくらしいねえす、ゆだい是非だに、性悧にでもなつて居るのかね」一「何時お爺よせ被成つたヱ。ナニいいといふ事ヨ。落つこつたね、私ア陰にゐたねえ。」一「お前の外には誰もやアしても落つこつた事はございませんヨ」七「フムかいく御端なさい」一「お辨さん樋の所にあるから出しておくんなさいヨ」一「アイく今日は入らないヨ」と下駄をひかから、二階の上り口から顔色にて、七に早く上れといふ思ひ入れをして居る折から、表の方にて商人の聲、

くわし賣「うまいの根元はくれでございとすウ引

大きなる籠を荷ひて諸方を歩行く菓子賣なり。それは扨置きお糸と七三郎の始終はいかに、次の巻より辰巳の段を讀みて佳境に入るべきのみ。

清談 辰巳 梅之春巻之一 終

辰巳
清談 梅之春卷之二

第三回

[illegible]

梅の匂ひが氣になりますねえ」ト「ほんにノウ能い薫りで[illegible]

玉「ヤレ／＼ほんに、、、、」七「なんだ、様の障子が少シ明いて居るから、ぐるりだァナ、ヤヤ／＼梅の匂は此地からだヨ。コレ物干に梅の鉢植が此様に開いてゐるア。」玉「ヲヤ／＼ほんにアレサはやくお姉さん、誰ぞ覗いて見るとわるうございますわネ。」七「ナニ其様にこはがる事があるものか、むつかしくなりやアお前の母御にははなして置いた通りにして仕まはア。」玉「何様ぞ左様したいもんでございますねえ、どんな苦労をしても宜いから此の土地を離れて、お前さんと一所に居る様に早くなり度うございますわ、左様なりましたらばさぞ。」七「帯を出して。」玉「エヽ」七「なかなか気になるだらうしい。お前も慾張つて自業を稼業が気にならねば少許位借金をしても直に済まされるノ。」玉「嬉しいだらうね。」七「左様したら又自由に外出が出来るから油断がならねえ。」玉「何が嬉しくつて其様ノ\此の間おやアお前さんに似た人ならば格別の事、他の人を見ると何だかもう人の様には思はれないわ。」七「ハヽヽヽ、いいかげんに人を馬鹿にしねえナ。」玉「アレサ御の冗談なんででも遠くから背後姿を見てお前さんだと思つて早足に追つ付いて覗いて見ると実に否な貌の人や、些ともお前様には似ない人だから悔しくなつて見ると化物の様にも見えますのさ。ホヽヽヽ。」七「つまらねえ事ばかりいふぜ、そりやアいいが下の老婦さんは毎月を左様いつて呉れねえか知らん。」玉「いふはずさ、なみ両宴の給玉「ナニ私やア最うかへりますヨ、またあまり長くなるといはうございますか。」ト帯をしめにかゝ

ある七三郎は取つて歸へはうり出し　ト其樣にうろたへて歸られねへでもいゝぢやアねへか。一ト
お前さん樣をお立ちゆかしと　其知れた事さ、近頃ぢやア家へより早く歸る算段へ首をかしげて居なけりや
ならねへ程な事になるだらうなア。來ねへけりやアいゝ、此の宿は茶でばかり來たのだから、[illegible]して膝
お酌も皆かねへぢやア、いゝぢやアねへかい、もう歸るがいゝ、[illegible]
ニア待てよ、おくれ[illegible]いゝ[illegible]、[illegible]に[illegible]其樣に[illegible]
おまへ[illegible]でこういふ[illegible]下にも[illegible]
ト誰がそれやアそうしといふ事だから、早く歸つて、[illegible]
やかましい、いゝぢやアねへか、私の[illegible]
ト[illegible]
[illegible]
うて[illegible]文[illegible]七三郎[illegible]
それと[illegible]其樣にすると後へ倒するわト。一ト[illegible]下に[illegible]
ト性がこはいはな[illegible]
扶て[illegible]小兒を叱る樣に。一ト涙をすぐ[illegible]すれッからしの[illegible]

和の方がいいぢやァねえか、泣きむしめエ」ト抱き寄せられしお玉は嬉しく、玉「アヽ、引ことはかつた當座に腹を立てなすつたと思つて、まだ胸がドキ／＼しますわね」丹「何のおいらだつてはどんな風か、うそつきい」玉「アレサ本當でございますヨ。コレ御覽なはいヨ、こんな動悸が仕ますわね」ト丹三郎の手を持ちそへて其の身の胸を押へさせるにぞ、丹「大層な動悸だ。手をはね返す樣な動悸だ」ト云ひつゝも能い藥があるからやらう」玉「ナニ藥はいりませんでも宜うございます」丹「それでものまして遣らうかえ」玉「ホヽヽヽ、否ですよ」トいふ中に丹三郎は藥の紙包を出して、丹「サア此の丸藥をのみなよ」玉「何の藥だえ、實に能い匂ひがいたしますネエ」ト口にふくみ、玉「今しがた酒の醉ひのしたのは、鉢植の梅許りかおやァございません。此のお藥の匂ひでございますね、實に氣が晴然と致しますヨ、何といふ藥でございますえ」丹「これかえ、これァ酒の醉ひを醒ましたり、毒を消したりする妙藥で、其の外萬病に利く良藥だから、お前に所持して置かうと思つて買つて來たのだ、まア第一匂ひ袋の代りにもなるぜ」玉「それは有りがたうこ。何處のでございますえ」丹「其の能書に詳しく書いてあらアナ。此の頃ぢやァ通人も持つて居れば、御殿方の女中衆は不淨除だといつて貯へて置くさうだ。お前なんぞは無理な酒も吞んだり、持病の癪もあるから、絶えず懷中して居てくんな。苦勞になるから」ト藥包をお玉に渡す。此の節はさらに浮いたる氣色なくさも信切なり。僅かな所爲なれど

も、細新聞が人情の秘傳なり[illegible]

報の[illegible]なんなと、批評する看官は、いよいよ[illegible]の人情[illegible]にあらず、心ざしは[illegible]の果を[illegible]つ

て嬉しいと思ふが頼もしき人といふべし。

叔もお玉は七三郎が今には[illegible]

[illegible]

此に彼等の駒下駄がございます、どうぞ呼んで下さいまし、[illegible]

へ顔も出しはせんかといはれてきまりがわるくし兼ね、気の毒さうにて、初「ハイ、モウ今にお民さんは今お湯でだつけが、何時の間に二階へおあがりだか、ヲヤお初どんいッそふくれてゐなさる」ト煙草をのみに初「今ちよツと小用場を貸して呉れろと言つてお寄りだッけが、ヲヤ彼方の離れ座敷にも二階へ往きなさつたらう。」ト、いはれて一階の方へ向いて、聲大きく、民「お民さんお迎ひにおまうしたよ、お民さん早く下りなせえ、客人に仕舞はれた體で正月のひまな内から樂遊でゐられちやア、たんだ面顔もや致しませんからト悪口をいふ其の中に、お民は早々二階から下りて来り、お初に向ひ、民「ヲヤお初どんさう思つてくれるな、今お直さんの所で此間頼んだ常磐津の進物のことで相談に寄つてさ、歸り掛けに小用に寄つたのだわ、一寸宅から人でも来たかえ」初「ナニサお直さんの宅にも小用場はあつたッけ。ナニサ言譯は後にして家業が肝心だ、早く往きなせえ、男と女の入れ籠の小用場もねもんだッへ、明日の晩だ、お金を出して抱へて置く他家の芸者を我が物にして、餘り氣がいい。」民「明日の事も大概知つて居らア、今にへじめを見るだらうが、マア早く往きな、近頃まで煙草盆の掃除も仕ながら、其の間から内裡と茶碗を出して喰ひながら、衣類の綻びだの縫上げが下りたいと、他に世話ばかりやかせた兒女の癖に、やう／＼座敷一ッか二ッ賣る樣になつたとつて頭女顔も押しが強え。」トまぶしめは身にあやまりがある故　民「お初どんたんと恥をかかせなさいよ、いいぢやアないかえ、正月から縁起で墜へながらもくやし、

もねヱヨ。」玉「こんな所へ来て居るのも縁起がよくもあるめへと、[illegible]えんぎが能いかも[illegible]

い。」玉「ア、悔しいヨウ。」ト襦袢の袖をくはへる。はつ「ナニ何が悔しいのだ、其様に[illegible]、宅へ

帰つてから旦那か内室さんの前で此方がいふ事が無理か、お前のいふことが無理でねへか、理非を付

けやせうすべく。」玉「イヽエ、いくわネ、[illegible]しい。」はつ「ソウ、[illegible]が[illegible]しれねへ。[illegible]、随分此の

宅もさわがせるのさ。」[illegible]を[illegible]込んで遠慮なく、お玉をはじめ老女も七三郎[illegible]

に、[illegible]る[illegible]しなる[illegible]。お前はさすがに[illegible]、[illegible]人を[illegible]、[illegible]の

只の下女にいとはしてなく、[illegible]下りる[illegible]、力なく/\[illegible]下[illegible]を行く、[illegible]立つ下

女おはつ、はつ「サアはやく往かねえかナ、のろつくせえ嬢だせ、[illegible]、用事[illegible]

をつけようか。」玉「お座しきへ行くわネエ、まことにやかましいヨ。」はつ「いふがわるかァお座敷を

よして旦那[illegible]、[illegible]其[illegible]にいそ[illegible]、此方[illegible]

ト[illegible]小声にいふ[illegible]一[illegible]口を[illegible]にお上へ[illegible]かいいことを[illegible]

[illegible]にいふごとく、此の[illegible]物はかへつて[illegible]人の[illegible]、[illegible]の上の七三郎[illegible]

悔しさ[illegible]なかなかく、[illegible]人をそねむにする[illegible]のなかれも[illegible]、[illegible]、此

の後いろ/\内談してお[illegible]、いたることとはなりぬ。

第四回

夕されば汐風寒み、陸行の客の通ひ路もはや絶えて、一の鳥居の影物凄く、折節聲のするものは、茶飯豆腐の御膳籠、その賣聲と佃より和歌町歸る素見の鼻唄、いと寂しき眞夜中を、平氣でぶら〳〵櫓下から中裏の方へ行く男、其の名は吉五郎大きな聲にて、

「お染はじつと顔を見て、そりや何いはんす半兵衛さん、伊勢のもどりの相宿が、結ぶの神の引合せ、二人が鹽冶の御家來で、幼年時からなま中に、手習までも一ツ夜著、枕並べて寢たれども、立てし誓ひは破られず、四海波風治まりて、和ぐ國も異國も、かはらぬ戀の路芝や、たどり〳〵て來りける、二人の商人柴折にかゝり此處明けて貰ひませう、左樣いふ聲は白藤さん、そもや二人がなれそめは、四ツ谷で初めてあうた節、好いたが因果末かけて、變らぬ中の睦月に、祝ひかなづる舞扇、千代に八千代の壽こめて、深き契りぞたのしけれ。」

吉「ア、引今夜は何だか寂しけれだ。」●「オイ〳〵吉ッ子何處へ行つた、中裏の使か。」吉「左樣ョ、汐留まで遲く遣いれたァ。」●「左樣かその代りに唄女衆の文なら高直と取れるだらう。」吉「ナァニ取れても夜は小遣へが入つてならねえ。」●「アハヽヽ、そりやァおめへが、天麩羅の立喰ひや何かをするか

らだ。」三「それだつて春ふき喰はずにも歩行けねえものを。」●三「左様サ、ヤ寒いと猶小遣へが入るナア。」吉「最う買喰ひ今年は止めらア。」●三「トいつても其の節になると又喰ひたくなるぞ。」

吉「それ其の時のうろたへ者には誰がした、みんな私がただるからッ。」

●「アハヽヽ、相かはらず出たらめの浄るりがお株だネ。」三「左様サ、癖になつて止められねえ。」

トまたも[illegible]浄るりの調子はづれにうたひつゝ、中裏の木戸へ這入る。二人は自身番の横町へ曲り行く。さればの路のかきがらしろく光りて、犬の聲も夜風にかすみ、しんしんとふけわたりたる和歌町の往來、只一人の人影なく、折から森本の二階にて、

「ツイ染めやすき郭の水に「もしおいらんもしへと言つた斗りで跡先は、結ぶ[illegible]の辻行燈の影で一夜はたちあかし、「格子のもとへも幾度か、遊ばれるのは初めから、「心で承知仕ながらも、もしやと思ふこけおもれん、君のかせがうは口ばかり、[illegible]なるほど、かわいゝ「吹けばとぶよな日雇でも、お屋敷さんのお部下で、中[illegible]折ら[illegible]にうきよのたしのきやれも[illegible]に[illegible]、[illegible]とらかしこき御代に住む、お江戸めぐみぞありがたき。

●「由様サ、お前の番だよ。」[illegible]「エヘヽヽ御遠慮なしにおたんと語りなさいましな。」●[illegible]「エイエ私やア否、お浚ひの席でやアあるまいし數ぞ語つたつてよいぢやア[illegible]、[illegible]私が聞くから語りなせえナア」

ト調子を合はせて、中ぶしのよびき、●「サァお客よりお前に勤めて、一中節を弾いて上げるわネッ」由「何様して／＼、一中どころかまだ一中だからなか／＼お座敷ではッ」●「オヤ／＼其様に外見でない、今夜ァお前の情人の榮さんがお出でないからなかしな聲が出てもよいわネサァ／＼ッ」旦那「どうして／＼、由次郎の一中節は、越中と覚えた人の聞くにはよからうが、ヤァ今夜はお預けに仕ようッ」由「モシ旦那、これは餘りな御あいさつネ、何か由次郎に御意恨でも。」旦「アハヽ、意恨ぢやァねえ意見をいふのだ。此間此方がお前の留守に寄ッたらば、お前の所のお熊さんが左様言ッて頼んだもの、何様そお座敷でひよつと一中節を語ると申したらば、よく／＼御意見を被成つて下さいましエ、現在お前に惚れて居る内儀様の耳へさへ、小言同然に聞えると思はれるものヲ。」●「オホヽヽヽヽ、能い氣味だねエ」ト笑ふ聲さへ小夜ふけて、手にとる如く聞ゆる軒下。菜めしや「御膳お豆腐でございヽ、このやァ寂しくなつて来た、最う今に亥刻だらう、とんだ事をたのまれて大きに苦勞をするやつサ。ドレチヨットド下の方へでも下ッて居ようッ」ト獨言いふ夜商人荷籠かたげて立ち上る。折も此方の中裏より後前うかゞひ驅け出す女、夜目にも知るゝ唄女の姿、小褄をたかく取り手も足も雪より白き美しさ、それに似合はぬ冷草履の新しきを音せぬ様にはきたるか、但し見番にあづけ置く駒下駄かとられぬ隠密の私用と見えたり。菜めしや「モシお旦様とやらかネッ」長「オヤ誰人エ」菜めしや「ハイナニ河岸でお前さんが夜更に

出て来るはずだから、氣を付けて迯つて来てくれろと仰しやいましたから、先刻から此處に待つて居りました。わづか一町か半町でも夜中には不用心でございますに」上「オヤ左様かえ嬉しいねえ、それおやアちよいと見ておくれな」米「サア〳〵まゐります」ト荷をかつぎ、お玉を先へかけださせて、後より見送り横丁の方をさして急ぎけり。そも〳〵路次より驅け出したる、お上といへるは如何なる女ぞ、これ則ち穏が窪の藝者なりしお上なり。いつしか彼處をいとまをとりて此の里へ来りしなり。もつとも手輕き事にてはなしと知るべし。上「七さんお前様何をしてお出で被成るんだエ、私やア此様に苦勞をして驅け出して来るのに、唯お表を開けて家内へ入れたばかりで、些とも構つてもおくれでないねえ、今夜ア来ちやア悪かつたかエ」七「左様さ今夜は少し待つて居る女が来る筈だから、それで種々昔ッから氣をもんで居るんだア」ト いはれて驚きとは思ひながら、油断ならずと氣にかゝるは惚れた弱み、萬一そんな事がありは仕まいかと胸にさはるのみ、上「まアそりやアわるかつたねえ、それおやア折角来たんだけれども、お邪魔になるといけないから私やア直に歸りませう」七「大師の際を立つて出口へのけども、七三郎に平氣でかまはず彼の手元に居るのは、お上はいよ〳〵悔しく、其の出でんと思へども、今更歸るも否なる故、しれ〴〵と中戸の際より臺所を見れば、七三郎は云た様の上へ茄子瓜其の外の漬物をならべて細かに刻んで格外雜交のかう〳〵をこしらへて居る。これはお玉が好

ぶりなれば丁寧にこしらへして、みりん酒醤油塩だしを側へ並べ置き、やう〳〵に拵へ終るに仕付けぬ業をして、情人に嬉しがらせた仕業が、五味珍膳のもてなしに増る、また世帯なれざる壮年同志は、此の様な事が楽しみになりなどするものならんか。七「ヤレ〳〵、面倒なもんだ、此様に手間がとれるのでは商売にはなられねえ」ト言ひながら手足の膳へ、種々なる菜物肴をごた〳〵と載せて夫婦の座へ持ち来り、七「サアお茶を入れてお飯を食べようぢやァねえか、お前の好きな排合のかう〳〵に大骨を折つたぞ、日中の中に買ひ集めたり貰ッたりして、何様に苦しんだらう、糠味噌のない宅でこしらへるのだから寔に大さわぎをしたァ、この香物には餘ほど有りがたく思つてくれねえぢやァ悔しいぜ。」玉「オホヽヽ、私にそんなにさせるといつてかえ」七「知れたことョ、お前なればこそ夢にも仕たことのねえ事をするのだァ。」玉「まことに有りがたうおそれ入りますョ」ト嬉しさうに につこりとわらひながら、すこしふさぎたるやうすにて、玉「堪忍しておくんなさいましョ、私のある故になじみもない此里へお出でなすつて、何かに不自由をなさるのは、不残私がわるいからの事でございますョ。」七「なんのそりやァおたがひだァ、仲の町を引かせても、おれが働きがねえから、また斯うして気がねなことをさせるのだ。」玉「そりや、最う見捨てゝさへおくんなさらないければ、私が身をくるしめる位は何とも思ひァ仕ませんョ、それだけれども何様でたがく、彼家の抱へにはなり度くないねえ。」七「エそりあァ案じねえがいい、

来月は仕払の金と外に借りた五両との元利金は返すから、それからでは難渋して居ても、きつと
しも取るまいといふ話だ。向うにも色を付けて置くから、金の利は安し、今[illegible]にして
やらうかと、何様とも工夫して遣りたいね。市場でも翁様は素人衆(?)だから、またお前の事も大略
知つて居るから、三ツ[illegible]の、お前屋へ達[illegible]だから、斯うして来るにも何様に気がねだか知れ
ませんわ。ト石様だらうね、また其[illegible]草加[illegible]、[illegible]翁の色気の有[illegible]ね。
から、[illegible]、[illegible]が[illegible]と[illegible]、[illegible]しいねへ、[illegible]だといつ
て、わつちにはいて来られる[illegible]が[illegible]うして[illegible]女が[illegible]一人で歩行くにや[illegible]とんだ
形でもして、道の用心をするがいゝ、此方はお前の夜中に一人でくるのが苦労で、[illegible]ならねへから、
今夜も[illegible]に[illegible]いた[illegible]、それだから[illegible]外へ出ると、[illegible]つけて[illegible]達つ[illegible]
[illegible]のりや[illegible]お前[illegible]た[illegible]、細つて居るのだ。此[illegible]の[illegible]に[illegible]や[illegible]が来て道
に[illegible]る前に、[illegible]に[illegible]と[illegible]の[illegible]、あの[illegible]に[illegible]る[illegible]の[illegible]の
来て[illegible]つた[illegible]を[illegible]て[illegible]、[illegible]、[illegible]へ[illegible]と[illegible]した
騒でお[illegible]と[illegible]れ[illegible]、[illegible]つて[illegible]、[illegible]して[illegible]い[illegible]
[illegible]、[illegible]は[illegible]、[illegible]の[illegible]にあるといふ[illegible]

辰巳満談 梅之春巻之二 終

辰巳情話 梅之春卷之三

第五回

前編末尾に開く言ふも三編と三編とに、限ある紙數を接ぎ、續記する毎に、それこれと二人の人目の附けがたき、皆ある男女の上を、編毎に前書をなす事は、作者の名人とはなれど、左程に珍しき事の絵目、彼の作者たるには[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]の根據を仕込み、[illegible]の事にても尚ゆとれ知れず、[illegible]の間に[illegible]こゝ、其場所から[illegible]に、[illegible]と、人品の[illegible]しよきの[illegible]なるべし

(○暦より餘程間のあり花盛り　春駅)

(○短夜やあり〳〵殘る篝の火　素伯)

「ヲヤ〳〵嬉しい、何時の間にか柱隠の出來ましたね、夕べ今朝の[illegible]」[illegible]

の言ツ、今し方眞河の東七さんが持たしてよこして呉ん被成つたのだものヲ」 よ「オヤ葉利眞の東七さんがネ」 七「左様ヨ、アノ素伯様の所からお呉ん被成つたのサ、それはいいがお前の方で彼の一件の金子が出來ようかノウ」 よ「エヽ、何卒して拵へる氣だがネ、いやならしに借りるのだから、お客のお方でも懇意の人でなければ話しても言無甲斐、そのお客を待つて居るかネ、是非今日か明日はお出でになる筈なのだが」 七「左様か何卒お出で被成つたらばよく頼んで呉んねえ、約束は今日までに三兩溜めてものだから、今に催促が來やアするだらうに、今お前が此處に居る中に來たらば、今日は留守だと云つて呉んなヨ」 よ「アイ、左様言ひますヨ」ト云ひながら湯上りなれば、鏡臺を出して化粧にかゝる。七「アノお目付きもねえ事を聞く様だが、お前は仙さんといふお客の座しきへ出た事があるか」 よ「ハイ仙様とネ、何處のお人でありましたッけネ」 七「アノそれは天満町の材木問屋の旦那ヨ」 よ「アヽ、左様々々氣の輕いお人で、よく冗口を云つて居るお方かえ」 七「ムヽ、左様ヨ、隨分萬事に行届いて居るが、奢らないで温厚しい人サ」 よ「アヽそのお方ならば、此間山の松本で講釋様が引合はして呉れましたが、アノ何だとサ村下の山口へ多分遊びにお出でで、お筆様といふ意氣な妓が馴染だといふ事で御座いますわ」 七「左様ヨ、併しあの仙様も家内には美麗しいお内儀さんがあるし、秋葉町のは實のあるなだといふのに、邪見らしく取扱ふお筆さんが慈愛いといふは、何様したものだ

か」「ミイ、ナニ、それや、お前様のお言ひの事だが、酒をお好き不好きで御座いますかネ、私が丁度お前様に嫌がられて邪見にされるのを、思ひ切つて僕へないで同じ様に言ふと同じ様にするのでネ。ハイ、左様いへば此方も同様に、気が間違つて居るのだネ、下にも面白い人が出来て、ハイ左様ならと言はれるかも知れないのに、私共を捨てて此処へ来て若い者の世話にするのも、他人が笑つて居るだらう」「ネーお前様、ネーたつた一つの事を言つてお気に入らなくつて済みませんが、お前様に一寸お聞申すが、此処の親父殿の事はお前が一寸言つて居なければ、[illegible]の頭から私は居なくつて此処へ来た世話をしてお気に入らなくつて[illegible]、それに又一日でも構ひやしない、お前様のお心だから、此方の親父殿の心持で、お前様に目をかけて呉れる様に一同はあるまいと仰言るのでございますんか。」「なア、酒の好きなのも、お前様で御座いますで何で逃げ廻つて、此方を用心するか知らないが、ネ人様の事は御前様でも、地下に居つても知れないが、其様な取扱ひを仕掛ければ其様に真面目をお言ひのお気にならなって、私が何が出来ますか、私も此方でございます、憎らしい事を仰しやいますの」「憎らしくは最初に慈愛がつて呉れないければいいのに、今になつて憎らしいといふから、他に慈愛い人が出来たのだと言ふのでございますよ、何ぼなんでも、何様でも可愛がつて呉れるの、それは、本望だと思つて居ますが、何時迄も他に入れないのが不足なのでございますが、下見ますよ、少し、さし、

と他見がさせるを仕ようといふ心配もないから、気ぶりもある様でも實は難でござりますね」ト　それで黙つて止せば、何ぼ此身を見下げたつて」ト　イヽエ左様でもありませんかねヱ　紅白粉を付けて化粧を仕ないでもお前様は見下げてはお見へ成るまいといふ心持で居ますといふことでありますね」ト何もいふが前後の言葉が種々に變るのに、安心して居られねえ」トイヤ何様ですか、又白粉が濃く付きすぎたら、構はずさ落して、紙で取る様にして気をもむを、七三郎は火鉢の灰を掻きこんで火を積みながら「ナニよいと見て、サアもう落すまいと思ひねえ、其様に濃くしては仕ねえよ、は薄化粧を振向いて、莞爾と笑ひ「サアそれでも此土地で素女が付けるのは、こんなではあるまいがもの」「白粉は濃いと気はねえますね」トそれ見なさえ、他人が何といつても構はないといふ口の次から、そんな気になるするでは無いか、他人は何と言つても、此身が白粉の濃いのが好きだから能いではないか」「ハイそれ左様ならば今日は此儘で置きませう」ト今日ばかりの此身が言ふ通りで、後日にはまたさからふのかえ」「イヽエ、毎日々々濃く附けますよ」ト笑ひながら、紅を附けて鏡臺を仕舞ひに掛る處へ、表の方に人の音すれば、七三郎は次の間へ隱れ入る。女「ハイ、御免なさいまし、七三さんの所は、此家で御座いますか」「ハイ、留守で御座いますが、何方からお出でなさいました」ト言ひつゝ立つて障子を開け、來りし女の顏を見て、「おや、お初殿かえ」と言つた限り、顏色を變

くして上れども、遂に來たりて、江戸に留め、卿此のお評は、[illegible]三郎の智を知りて、僅々
と称賛をなしける故、[illegible]の目付して彼の鬼を、七三郎と云ふ下か立出て、[illegible]
ある事になりし事なれば、お陸は[illegible]の様に思へ、[illegible]
もう[illegible]、此間は気しく逢ひなし[illegible]
左様ですか、[illegible]
[illegible]二世の中と云ふ[illegible]
に[illegible]。それだから[illegible]
まい上皇てに居られ、それも[illegible]直臣にお留守か[illegible]
ま一左様ならず、それだから[illegible]
うすっ、お前とんなの[illegible]
[illegible]
に[illegible]
お[illegible]
吉原の奉公人[illegible]、共とも知らな[illegible]

被成るのだえ」「イヱ今か今当時はマア七さんの知つてお在での金貸の欲兵衛様の所に居ますョ、それだから今日は其の名代に、七さんへの貸を取りに来たのだわ」ト言はれてギックリ、お襖の陰に聞き居たる七三郎、呆れながらも息をこらして忍びける。「ヱマアそれでは、お前は欲兵衛さんのお内儀さんになつて、掛取りにお出でたのかえ」「はア左様さ、お気の毒だが、今日は是非居催促をして行かないければならないのだわ」「マアマアそれでも今日は[illegible]ないから、マアふしようして帰つてお呉れな、何れ此方から七さんを上げようわね」「イヱサ、ヱヽヲ二何時になつても宜いから待つて居ませう」「手間の使おやァあるめえし、留守だといはれて、ハイ左様ならばと帰られるものかネ、そして七さんも飽きなしでいいわネ、他人の金でお前の身が自由になる様にして、こんな家に二人仲能くして居ながら、借りた金は返すめえと、そんな勝手許りしては、他人が承知しないわネ」「何でも今日は済みかたにして貰ひますのサ」ト言はれてさすがに隠れて居ても、其所へ堪へ兼ねたる短気の生得、七三郎は次の間を立ちいで、「モシモシお初殿か、何しに来たのだ」「ヲヤマア先刻から隠れてお在でのかえ、大概左様だらうと思つて居ました」「ホンニ欲兵衛が左様申してよこしました」といひながら、懐中から証文と請取書のおよび帳を取り出し、「ハイ今日三両およこしなさるお約束だから、うけとつて来いと申しました」トいはれて見れば証文の事、腹立ちながらも人が違ふから掛合

ひみせぬといはれもせず、悔しながらもお絹に向ひ、もし〳〵、お前は欲兵衞さんのお内儀さん
になつたのかえ、それはマア不躾ながらも仕合なこつたネ、トヽトヽ欲兵衞さんに左樣いつてお呉んな
せえ、いづれ最う三日に一度はうかゞひ、三何樣も左樣は出來ませんヨ、急に私のおでも差支へた事があ
つて、私が困つた所へ無心合力にさへ遣るくらゐだから、此二冊に合はして貰ひ申します、左樣や
三度の金には、お上さんの顏で無にでも出來さうなものだ、嗚呼しい神や佛のおたてで、二度ばかり
しても誰へ答へがいいのか、あゝまでも二人を目の下に見下しあぶせる樣子、七五郎はいよ〳〵
悔しく、ヒョッとお絹さん、あんまり人を馬鹿にする樣な事を言つてくんな、欲兵衞さんに貰つた金
は相應に利を付けて置いたのだ、ナニ五日や十日遅く成つたとて、ちつとも失禮ばかりはないとなると
いかい、ネーニ左樣かネ、ウシ損をするは此の世の中にすむものゝこつたといひますね、先月の晦日まで
にゆこいた返濟が出來ずば、お前さんの殿さん、お前さんが押して入ると言ふでしやう、今日までは
ますが日が延び過ぎて居ます、史たとへ左樣であつたとしても、是が出來ずとあつてトヽつれていても
やこうはいと實に存着しますから、此所を如何いふ、些方もちと喧嘩しかねる七五郎は女氣、此の座の最中
ある眞川の藤七俳名素伯は聞きかねて、其の座へこそは立入りける。

第六回

入相の鐘に花ならで、人々散りて物淋しく、花は静かに色深く、月あきらかなる彌生の中旬、梅若塚の念佛供養果て、往来の稀なれど、こゝに隅田の渡し船離れてはてしなく暮に近き頃、牛島返る乗合の中にまじりし一人の娘なるが、前後を見かへりつゝ、思ひありげに溜息を吐いて、浅からぬかあれし風情、此方の闇より月あかりにすかしたる者ありしが、彼の娘にむかひ、男「オヤお前さんはお梅さんかえ、そこいらにいたかえ、ト声かけられて驚きつゝ、同じく月影に男の顔をすかし見て、うめ「オヤ〳〵七さんかえ、私ヤもビックリしましたわな。七「私も最前からハテ似た娘が舟に乗ると思つたが、どうも日の暮れたのに、お前が一人で歩行く譯がないと思つて居たが、よく〳〵見ればお前らしいから、言葉をかけたのだ。うめ「左様でございますか、お前様は何處へお出でゞありますえ。七「ホンニ久しぶりで、此邊の方へ来ましたね、急に寺島の別荘へ茶番狂言の手傳ひに頼まれて行くのさ。シテお前はまた今時分、何處して独身でお出だえ。うめ「アノウ私はネ、急に實正の宅へ行くんでございますが、田甫道がさみしいから、行けませんわ。ト左も困りし様に察せらるれば、蒸愛相に思ひしゆゑ、七「左様かそれは大事だノウ、此方がお近所まで送つておげようて、トいふ中に、はや船は須田の棧橋に付

き、おのがさま〴〵別れ行くこと、「ノウお前の竈田の宅は、堤を下りて直だッけかノ」トいへども背後で返事をせぬゆゑ、振返り見れば、十間餘り後にて、お柳は俯き居る風俗なれば、七三郎は立戻りながら、「どうしたのだ、足を痛めたのか、ヲヤ血が出るの、何で切つたのだ」ト聞けばお柳は涙聲にて、「ハイ今切つたのでは有りませんヨ、先刻此方の旦那が叱るとき、腹が立つて居る足元へ、腹立ち紛れに手に持つて居た刀物を投付けたので、此所へ當つて切れたのでございますヨ」ト懷より紙を出して血を拭ふ「どうしても非道事をしたノウ、トもかく見せな、これは大層な疵だ、何樣しても汝時だからそんな事ではいけねえ、痛むなら能いから痛うしなさい」トいひつゝ手拭を竪に引裂いて、疵口を巻いて遣ながら「大分血が出たらしい、手拭で勿體ない、そしてはどうかでございます」「ナニ手拭くらゐ惜しくはねえが、お前の母親も餘り無法なことをするぢやァねえか」「イヽヱ私が惡いから、叱られるのでございますのサ」トいひながら片足をひきずるやうに歩行く、「ヲヤ疵口を強く結び付けたから、足の筋が縮るかの」「ナニ、ヱヽ宜うございますヨ」ト遠慮して頭へ歩行かれもしないは、恥かしいのも忘れてか、何心なく七三郎に手を引かれて、辿りうと隅田堤の下に降るとしも、誰も人が通らないから、背中へ負つたら、その好な足が痛くなくッて宜かろうッ」トいへばお柳はにっこり笑ひ、「ヲヤ何うしてそんな事が出來ますものかネ」そして思ッて

いけませんヨ。」「じ[illegible]とさせんなかはいられない體が重いものか。しかしお半は能過ぎる縹緻だけれど、長右衛門が此頃では締まらねえノウ。」「ホヽ、お前樣の樣な、若い好漢の長右衛門がありますものか、私がお半では田舎者がお半になつた樣でございませう。」「どうして／＼杜若其處除けといふのだ、ソレ又蹴爪突くわネ、それだから負はうといふのに。」「イヽエそれだッつても小兒ではあるまいし、大人形容でからに負つて御覽なさいな、人が笑ひますわネ。」「それはいゝが何處迄だッけの。」「イヽエノウ、蓮花寺から二丁許り先でございますが、お前さんのお出での所が此邊ならば、最早こゝから一人で參りましても宜うございます。」「どうして一人で遣られるものか、不用心な。しかし蓮花寺の先ならば、向う越をして來たが宜かつたらうのに、なぜ此の渡しの寂しい所へ出て來たのだノウ。」「ハイ左樣しますと跡から誰ぞ追駈けて來た時、直に見付けられますから、態と他人にあはない樣に、此の路へ來ましたのでございますヨ。」「ムヽ左樣か、それぢや夜半の養家をば逃げ出して來たのかネ。」「ハイ、餘りいぢめられて、迚も彼養家には居られませんもの。」「ムヽ左樣かノウ、ふだん近所四家でも左樣いつて居たつけ、なんぼ金のある家でも、彼の内儀に朝夕價付けられちやア、男でも女でも辛抱しては居られねえ、此の度のお柳さんは能く辛抱して居る。彼の嫁の樣な温厚しい娘はない、容貌はよし直ではあり、最早お柳さんも慈愛がらない道では、重ねて

養子を貰つても、治まることはないと噂をしましたッけが、案のごとく、お前もむつかしく、此吉をならべし離縁させたのかえ。ドツト石橋が折れてゐるから、其の足で落ちるやうなもので大變だ、すべ／＼お月様を雲が隠して途中が暗くなつた。これは嬉しや、それに此の通りは畑の堀根だから田甫より卑つて足元が暗くッて歩行きも悪い。もしもし辻の出端が通ると溝へ落ちるよ」「ヲヤ〳〵、泥水へはまつてはいけませんなア」「ト此身が好滴だと零落して貰ふければ、左様甘くは行ぬそれえまし。ヲヤ／＼、お母さんが零落で、今ぢやア番頭と夫婦になつてお在でだと、間西の家で聞きましたわ。モシ番頭さんな事を言つたのう。ヲヤ、才兵衛さんになつて、磯八さんに聞きましたヨ」「ヲヤ〳〵、二重ばつかり、出放題を言つてお前を欺かした日だ。それはいいがお前は實家に兄弟でも四五分あるから、彼方の家へ貰はれて行つたのかえ。ドツト此方へ曲るのだ」「イヱ私と云ふ處はありませんで、外に兄弟はありませんわ」「ムヽ左様か、それでは今、實家の跡目は、お前の妹さんに聟でもとつてあるのかへ」「イヽエ實家では兩親がありませんで、叔母さんは和中へ嫁に行ッて居ますのさ」「ハヽア、左様か、それぢやアお前ばかりかへ。ここへの安くすむだらう、名は何と名義ノ」「ハイ私ア實家に居た時分は於春といひましたが、當時ぢやア粂吉と名乗ますヨ」「ト左様か、粂吉さんかお前し村上さんが、マア〳〵それぢやア、お末の目と同じ事だ。マア最う運

寺だ、此處から何様行くのだ。」りう「オヤお前さんおかげで早く來ましたね。是れからは最早氣が丈夫でございますヨ。」七「サア／＼そんなら先へ立つて歩行きな。思ひの外に早く來た、我慢をして歩行いたらうか足が痛くはないか。」りう「イヽエ其様に痛みはしませんヨ。」トいふ時、初夜の鐘の音ボオヽ、ボオン。七「オヤ春の夜とはいひながら、最う戌刻ださうだ。」りう「ホンニお前さんのお出でなさる所へ遅くなりましたらうねえ。」七「ナニ／＼それは止しても構はないが、婦多川へ歸るのが大變だ。」りう「アノネ私の家は爺ばかりで、誰も氣のつまる者は居ませんから、穢くッて宜くば御止宿んなさいな。」七「ナニ何様して氣の毒でそんな事が出來るものか、サア／＼早く送つて行ッてからの事サ、ヨヤサヤ其の路か。」りう「この家の後の所が私の家でございますわね。」ト先に立つたるお柳の姿、まだ肩縫上の身幅さへ、狹き處女の心から、錦の里を振捨てて、寂々しき母の折檻に、合ふよりまさる古里の、荊竹の根たどりつゝ、藪の下枝をかき拂ふ、賤が伏家も、實の爺の住ながが便りの胸の中、妨嫌家へ七三郎を、伴ひ行くは歳のかね、外見かざりなき處女の情、案内知つたる我が家の門、苗種物の類品など、柴戸のはしらにかけたる札、緣日歩行の植木屋の、貧しき體と推察はれたり。

辰巳清談 梅之春卷之三 終

春色梅之春二編之序

梅もやゝ春色調ふ月と梅、籬の中の上品から、野の花の其の匂ひなき後、夜に宿す夜半の月、隅田の渡しの乗合に、水棹の雫濁るゝかと、看せし丹生の植木、縁日物の根なし草と、思への外に義範も踏をつけたる花の頃、郭の夜明けの松湯にて、読き捨したる初編の三冊、至り世の評判よく、聞いて書き次ぐ此の巻は、春も盛の桜時に、茶番も其の間抄に、逢ふ時の趣向意匠、古風な野暮の狐火に、新奇な綴る可笑しさは、二三回前の向ひ柳枝の翻新作、世の通を交に行燈、面影な娘女に通好子男、強欲老婆は通人に、月の北里と辰巳の里の、両夜の外な楽しに、其の色を移す梅の香、汝千の桃の舞生の桜、仲之町あり仲町有り、一人芸妓四枚目、粋の方なる人情を、外に分別はすがた二流、二編四篇の巻を重ねて、一部の趣向模擬の大意、前後に違ふことを能はじ、なをさと自画なす所に、ういきに尽くに似たるべき噺。

ある時はありのすさみにつらかりし

澤山さうに見給ふな、狂訓亭が古今の粋案、寛永一代の人情から、前代種世来の作意、豈一流と称して可ならずや。

梅之春二編之序

于時天保十己亥三月

江戸戯作者　狂訓亭　爲永春水誌

辰巳
講談 梅之春卷之四

第七回

再說七三郎はお園を實親の家に送り屆け、歸らんと云ふを、お園は押留め「モシ七三さん、お待ち被成いまし、今に爺が歸つて來ますから、御禮を申上げて今夜は泊つて行つて被成いまし、よ、私も久しく實家に居なかつたものだから、爺は今が嬉しいのでせうよ、何うぞ左樣してお泊り被成いよ」「もうお前をこれだけ送つてお前を實家へ屆けたからには、明日又來ると聞かれない、それに私も今夜は、ちと家の者の叱言を喰はぬやうに早く歸ると云つて出て來たから、それは遠くへ來たけれども、只歸りがけに寄るといつて出て來たのだから、實家が何と云つても歸らなければならない、母が宅へ午刻時分までに歸らないと、嘸ぞ心配をして居るだらうから、何卒今夜は歸してくれ、然しまあ、其の中には爺が歸るには違ひもあるまいから、氣を付けて待つて居るがよい」と帯を締め直して、立歸らうと支度をすれば、娘氣に只何と云ふも悲しくなり、涙を眼に浮め、「それなら何樣しても、お歸んなさるのですか」と、男の顔を見る時、

て、歸りもされぬ世の人情、色にも戀にもあらざれども、常から知合ふ互の氣質、お柳は實父の貧しさゆゑに、養女と成りて戀が窪の鬼若松とか聞えたる小格子同樣なる後家の許へ、三年以前にもらはれたるが、其の後家お棚といふものより、金を實父の正作に與へて、お柳を養女とせしかば、活業がら癖として、娘といへど金を出して抱へし女といふこゝろが有るのみならず、お棚が生得邪見非道のもおまへにて、鬼と呼ばれる綾瀬の名目、許嫁ぎしより夫にまさる強慾者。哀れといふは露ほども知らざる悪婆なりけるゆゑ、わづかな三人の抱への女郎が負つさいなみ、娘お柳も氣にかなはぬ事などあれば、打たゝき悪口雑口、傍に聞く氣疎さ、日毎の悪對、隣家近所の人々も、お棚が悪みお柳が憐みて、不斷噂は絶えざりしとぞ。されば お柳は此のゆゑに、養子家を逃げいだし、實家に歸り來て隠れど、貧しき父は年老いて其の身一ツの活業に、夜をふかしても歸り來ぬ、渡世のつらさを思ひやり、また便りなき我が身の上をはかなく案じて、七三郎の優しき心を頼もしく力となしたき胸の中、くよ／＼思へど言ひ出す言葉も出來ぬは、年行かぬ悦惚少女の情なり。「ヲヽお柳坊お前泣くほど獨りで居るのが否なら、何樣も仕方がないから、爺の歸るまで居て遣らうが、其の代り澤山御馳走をしなヨ」ト笑ひながらいへば、お柳も涙の笑ひ顔、「アヽ眞正にかえ嬉しいねえ、ドレお茶を拵へて上げるから、些と其處へ横におなんな被成いな、サア枕を上げるから」ト戸棚をあけて探し出す、

油染みたる小枕の、更紗の切れの處々に、色氣もわからぬ塵埃、揃うて折りし當紙を、幾度となく折りかへせど、汚れし反古の外なければ、四邊を[illegible]て紙袋の中から[illegible]しを引きさいて、[illegible]て上に載せ、「ハイ[illegible]これでもマア枕にして下さいまし。何けなくなつてありますけれども、紙が何處にあるか知れませんから」ト差出せば、[illegible]寢ようと[illegible]、違い時の[illegible]へ行くと、同じ[illegible]へ[illegible]て、[illegible]も[illegible]ますが[illegible]、[illegible]だけれども、[illegible]だらうと、[illegible]がいゝ[illegible]を折らくへて、[illegible]の[illegible]、[illegible]して、[illegible]もつれ[illegible]しても見[illegible]、[illegible]いて遣らう。お前の髪が灰だらけになると行けない。」ト[illegible]へ[illegible]、[illegible]ざいますねへ、[illegible]ツくらくツて、[illegible]でござい[illegible]ませう[illegible]の[illegible]でございます[illegible]平次[illegible]、[illegible]人[illegible]平次とも行かず、高橋には向かず、[illegible]何方も仕方なしに、壁の崩れから竹槍をもつて出ようといふ役にでも遣つて[illegible]、[illegible]ら、夜風に傳へ[illegible]四つの鐘[illegible]」ト[illegible]あんまり鐘が近く

聞えて、私やァびつくりしましたわ。」与「左様サ世間がしづかだから耳を突き抜くやうに聞えるア。それはいゝが断りして居る処へ、鬼若めからお前を尋ねて来て、此身が居るのを見たら、また此身にむづかしく言つてかゝるだらう／＼ト いはれて、お柳は気の毒さうに、「ほんとに左様いたしたら、何様言ひませうもしれ、誰ぞ来る足音がしたらば、お前さんには何処ぞへ隠れてお貰ひ申しませうかねへ」ト 当惑顔の其の処へ、裏口の戸をがらりと押明け、しづかに這入つてお柳がそばへ、「サアお柳さん直に郷へ帰んなせへ、母御が何様に腹を立つて居なさるか知れやァ仕ねへ。サア／＼、間道につれて行くのだ」ト 立懸ればお柳は悲しく身を飛び退きて、七三郎の背後へ廻り、「ソンナラ今夜は此方の宿に用があつて来たのだから、明日帰ると左様申してお呉んなさいまし」▲「イヤ／＼左様はならねへ。私等ァ厳しく言付けられて来たから、何でも直に連れて行かなければならねへ。爺に用があるもよく出来た言草だァ、好男と二人で、是れから味く遠くへでも逃げて行かうと思つてからに。サア／＼早く歩行びなせへ」与「モシお前は若松の使か知らねへが、夜中に娘子どもを連れて来るのに、一人で来なさつちやァ途中が不用心だァ、殊に此家の親御も留守だから、此の娘をお前に渡しちやァ仕られねへネ」▲「へ、他人の娘を引出して来て、渡されねへも蟲が能いやァ、何でも直に連れて帰るから、今此の娘が惜しくば表向で貰ひに来なせへ」ト言つゝ表の方へ向き、▲「サア／＼

衆人が家内へ這入つて此の娘をかつぎ出して彼下つし、殿押人が居るから直には動かれない、聲をかければ五六人、どや／＼と押入つて、七三郎を突倒し、お梅を前に引据ゑ、口に手拭押當てゝ、聲も出させず田甫道を、後構はずに連出す。七三郎はこれを見て、菅谷よりの難ひとは、かね／＼承知のならずもの奴等、たしかに樣子をかぎ付けた、惡人どもの所爲ならん、いかにしてもお梅の難儀、見すてらるべきかと、尻引からげ後を慕ひて驅出す、其の時月は雲にて、雨雲しだいにおほひさへり、さッと降り來る春雨の、風さへそうていとゞ佗しく、田圃の間の細道を、いそぎ行くへの足元、逃げたも追ふもはかどらず、餘りに雨のはげしさに、さすがに惡人どもも、其方此方の百姓家の、軒を尋ねてかゞみ居る、其の中にしも娘をかかへて、惡事にする思ふ奴と見え、お梅をかつぎて只一人、仲間の奴等を出抜きて、麥を引替へくる紛れ、隱れた際は幸ひに、一さんに、其の隱れる藪の中、さぐり／＼て藪の中へ、押分け入つて幸ひに、荒れはてたる古堂の、前にお梅を下ろして、暫時雨の晴れるを待つに、お梅は目を手拭にて、しばり付けられ、手を押へられ、泣くも泣かれぬ悔しさは、何にたとふるものもなし。「ヤイお梅さん、そんなに悲しい顏をするだらうか、俺こそ惡い氣でお前を此處まで連れて來たのではねえ、前に渡し舟で渡つた時から、仲間の奴が目を付けて、此の仕組をしたのだ。其事を毎晩見にいつて、お前の事も知つて居るから、友達のねたみだくみ

を聞いて、お前がかはいさうに成つて、わざとその中へ加はつて、それから雨を幸ひに、客人をよいて瞞けぬけたのだ。ノ、よしかえ、情切だらう、其處で又お前に相談があるやす。マァ此の手拭をとつてやらう。ヲレノ\かはいさうに。しかし口を利くと彼奴等がまた來るから、しづかにしなヨ。ト手拭をとき、さぞ口元が痛むだらう、非道い事を仕やァがつた、此身がやァないぞ、まことに色氣のねえ情を知らねえ奴等だ。トいたはる風情はいよ\／\ます\／\、氣味悪けれども、聲さへもたたぬお柳が心の中、夢か現かわきまへず、身を震はして居たりしを、彼の悪人は猫なで聲、なほしつすかしつお柳をとらへ、なほ得手勝手の理を付けて、すでに慢りなる行ひにも及ぶべきありさまゆゑ、お柳は振拔け迯けんとすれば、いとゞ手荒く引ッとらへ、今「エ、此の女ア情の強いべら棒だァ、コレ能く聞けヨ、何樣でうぬは若松を迯出したからには、身に疵を付けられて、女郎にされるか、他所へ賣つて遣られるかするのだァ。そんならばコレ一度や二度は、他人のいふことを聞いても能いおやァねえか。何樣しても否と言へば、此方も依怙地だ何樣するか見やァがれ。ト手込めになしてかゝる。折しも此の家の壁の音、ドロノ\ノ\とくづれかゝり、何やらによつきり顔を出せば、お柳はアット倒れ伏す。かの悪人も驚きながら、崩れし壁のかたを見て、フロアト一聲一さんに、迯げて行くこそ嬉しけれ。

第八回

此の時雨晴れ忽ちに、雲間を出づる月の影、其の圓くにもめかゞやきしが、夜の白星の軒下を、遁出したる惡人は、こはかなはじと遙かに背後を振向き見れば、霜枯し蘆の間より、顯はれ出でし両個の、顔は確かに見とめしが、其のおそろしきものすごさ、大和稱にこそ戀慕きて、今まで見れば手を上げて、此方を招く姿にて、ものこそいはね追來る様子、惡事を働く奴にも似合はず、臆病者にてありけるが、是れを見るより驚き出し、尻もちついてふるへわなゝき、遁げすりながら片息に、たゞハア／＼と泣き出す面、命拾を遂げて行く。又此方には彼の両個が、而するにあらで攫むがごとく、なると思へば自然に、顯はれ出づる二個の男、気も狂しき聲を振り絞り、●もし／＼兄上さん／＼、コレサ気をたしかに持たつしやい、此身達に今の場の働きせねばならぬ、お前の難儀を救つて遣り度さから、兩個の人数を出して衣服を剝ぎしたのだ。」と言はれても身にはこの二個の、脉をふく／＼精神がるに、何れもしやれた人なにて、其両個の様子とは似もつかはる息子風、少しもおそろしき所なく、よハイ夫れは有難うございます。」と漸くいへと、まだ顛倒に心をくだかれ、途方にくれるも無理ならず。「イヤ／＼姉さん、お前は又此身達が此樣な所に居るから、變に思ふたらうが、我等は今日此の先の寺

の別莊へ、茶番狂言に頼まれて來たのだわえ。今の幽靈は回向院前の宮川で損料を出して借りて來たのだ。流石に人形でも、泉目吉が細工だから、あの奴も眞の幽靈だと思つて逃出しやァがつたのだ。ノッレ見な、幽靈の首ばかり、跡は綜で遣ふ様にしたのだョァハヽヽ。こちらも雨に降りこめられて居る處へ、お前を彼奴がかついで來やァがつたから、息を堪らして樣子をうかゞつて居たのだ、よしかわかつたらう、サァお前の宅を教へな。とてもの事に送つて上げよう。ト優しく言はれて、お梅は嬉しく。ヲヤマア／＼それぢやァお前さん達は、何處かの別莊へ茶番にお出でのでありましたかえ。アノ七さんも確か其處へ行くとお云ひでございましたッけが、其處でございますかえ。●ナニ七さんとは神明町の七さんか。當時は和歌町へ行つて居るぜ。ニウニア、その七さんが、先刻出に茶番の事をお言ひでございますヨ。ニハァ左樣か道理で格戸の旦那が其の話だつけ、それぢやァ友達の七さんの知つて居る事ならまんざら知らねえ顏は出來ねえ、サァ／＼早く送つてあげよう。ト介抱して居る其の處へ、七三郎もお柳を案じ、かれ是れたづねて折よくも、今此の道へ來かゝりて、月の明りによく／＼見定め、ヱお柳さんか。ニウニヤ七樣かえ。トいへば二個の人々も、●ヱオヤ七さんか何樣して今時分に此處へ。ニイヤこれには大變な事があつてネ、それで此の娘の跡を追つて來たのさ。ト柳の身の上を、あらましはなし聞かせるのみ、さすがに東の氣質とて、友達づくの好みも深く、

「イヤ／＼それは大きな目に出合つたノウ、併しお前のはなしの分解では、今日から此の娘の宅へ連れていつて遣つても安心なるめえ。」●「左様サノウ、それこそ又今の奴等がどんな事をするか知れねえ、何でもの事に七さんの家内へ連れて行つて遣るがいいぢやァねえか、左様すれば此方達も送つて行かア。此の茶ばんの道具が、日吉の方で明日早く入るのでねえと、別荘へ届けて来る筈だが、明日返して貰ひ度いと言ふに付いて、今夜直に宮川へ置いて帰るつもりで持つて来たが、是れも日吉に渡せば何も用のねえ身分だから、宅へ帰らずに連れて行つて遣らうぢやァねえか。」「それは有り難い、それぢやァ何様ぞ左様してお救なさいまし。」ト○の気持ア入れつと道が遠いけれども左様するか。「エーハヽヽ誠にお気の毒だけれども、どうぞ左様してお救なさいまし、左様しますと私も丁度都合で、に逢つて、何かの相談をして貰ひますから。」「ヲヽ成程ノウ、粂吉さんに逢ふには能い都合だ。」「それならば少しも早く小梅の方へ出て、舫でもしたら一寸置つて、」「アヽ何おやァ遠いから、其の嬢さんから舟宿へ寄せて遣やんなせえ、此方は途中へ寄りもするし、歩行くがいい。」「イヤモシ舟賃のある時はで急ぎやせう。」「アヽこの娘も素足だが、それぢやァ行けねえ。」「イヤもう此の娘はいゝさうだから背負つて遣るがいいぢやァねえか。」「草臥れたら猶此の娘も背負つて遣るわな。」「イヽヱ何様して其様な事を勿体ない、素足でも痛くはございませんヨ。」ト云ひ然し按摩も苦労をして気色も悪から

うから、背負つて遣らう。」ト、遠慮するお柳を背中に負ひながら、路を急いで歸り行く。斯る間に彼の惡漢は五六人にて有りながら、何故お柳を見失ひ、跡をも追はざりしか、後々噂に聞き傳へしは、一寸眞のはなしなり。そはいかにとこれを聞にしるす。されば、雨の止みし後五六人一所へ寄集まり、惡甲「忌々しい雨で大しくじりをしたぜナア。」甲「左樣ヨ、出し拔けに降出して困らせやアがつた。」乙「ハヽヽ、只今雨がふりますと天からお斷りがあるものか。」丙「そりやアいゝが、あの野郎は何推したらう、娘を連れて行きやアがつて、一人好事を仕やアがるも知れねえぜ。」甲「左樣さ〳〵、些とも早く探し出さう。」丙「アレ〳〵〳〵、向うの通りに、確か女と男の影が見えるぜ。」丁「なるほど彼に違ひねえ。」甲「サア〳〵早く來やれ〳〵。」ト驅出す路の横筋より、忽ち並ぶ箱提灯、先を揃うて行列の、足並揃ふ御同勢、お供「ハイお脇寄れ、待し〳〵」惡者「オヤ〳〵大層なお供だナア」惡乙「イヤこれは大變だぜ、アレ見や五町續くか、六町續くか知れねえ。又た御駕籠も見えねえぜ。」惡丙「こりやアいけねえ、此の御通行を待つて居たら夜が明けるだらう。」甲「餘りな供廻りだぜ、ソレやう〳〵に御駕籠が見える。」乙「なんと構はず供を突き拔けようぢやアねえか。」甲「ホンニさうだナア、夜だから逃果せられるだらう、間を見て向うへ驅け拔けよう。」ト言ひ合はせつゝ五六人、一度にお供を横切つて、走り拔けんと飛入るを、捕り押へたる御供の面々、狼藉者ぞ不屆奴と叱り懲らして突倒

すれ、悪漢どもが無法の働き、さすがに酒興の狂人と、勘辨あつてお切捨てにも、なされぬ御武家の御仁心、それとも知らず無理無體に、争ひ／＼詰寄けんと、騒ぐ處へ御乗物、間近く來りてお駕籠より、鶴の一聲、殿さまは威高き體にて駕籠の戸、引明けさせつゝ半身を顯はし給ひ、此の體を御覧あつて、「静まれ／＼、家來ども、まて控へい」ト仰せにハッと重立方が、地にひれ伏して畏れ入る。「この一くさ／＼それたる壮人共、町家の者には稀なる働き、不調法は背き難けれども、只今のその手練、武家をも相手に無刀の戦ひ、天晴なる事と存じ、聲をかけたは別義でない、其方達を不殘召抱へて遣はさうが何様ぢや、奉公仕るか」ト仰せにハッ／＼ト御請さへ、おそれ多いの言葉も出でず、うつくまりたるばかりなり。お供頭と見えたる御方、「コリヤ、冥加なる殿の御意、御請をいたさぬのか。何様おやく／＼」ト「この一奉公致さば五人の者へ、新規に百石づゝ頭に遣はし、弥又只今より供奴の中へさし加へ、下屋敷へあかり置して、内を申付ける役義を、首尾よく相勤め手柄を致さば、二百石づゝの加増を遣はすぞ」ト重き仰せに悪漢共も、鼠に心も虎となりすましし気ぞりにて、もう一身に余りましたる御意のほど、庭にわり離い住合に信じたてまつりますト、言葉の中に随喜へ、殺せて持はる衣類大小、直ぐと着替へて御供を、仰付けられ我なから、立派に出立もしなさはしう、定めを合んで行列に、並ぶ月夜の悪法師、如何なりけん下屋敷へ、お供はすれど何様やら、知らで當なき二百石、

加增の沙汰も樂しみに、御下屋敷の御門を入り、新たに下さる御長家へ、休足仰付けられて、御酒御肴も山海の、美味珍膳を下されて、呑み倒れしが曉の、烏の聲に目を覺し、四邊を見れば秋草の塲際、裏門の方の草原に、木の根を枕の春の夢、互に呆れて顏見合はせ、苦笑ひなぞしたりける。

○是れなんお柳が女なりける植木賣正作が、年來信心なしたてまつる、三圍稻荷の神力にて、かかる奇瑞のありしならんとは、後々思ひ合はする事あり。それは次編を讀み得て知るべし。

諸土ける道まだ寒し春の風　　笑訓亭　爲永春友

門人の一句を備へて、迎ひ島の景色をつゞり、足らざりし文をたすく。看官お柳が野道にたゝずまされし心の中を、作者の筆に足らずとも、よろしく察して其の情を哀みたまへかし。

辰巳
清談
梅之春卷之四　[illegible]

第九回

むかし唐土に玄宗皇帝と申す天子の在しけるが、その始めは随分かしこき君なりけれども、楊貴妃といふ美人のゆゑに依つて、臣下の為にかゝるしめられ、宗廟を亂され、すでに御命も危かりしが、再度御運をひらかせて、忠臣の功むなしからず、以前の如く天子にならせられたれども、楊貴妃に死別れたまひしゆゑ、四百餘州ありといふ富貴の御身も、彼の美人楊貴妃の世になければ、天子の位も甲斐なしと歎かせたまひしとぞ、實にも美しき女は、人の為に恐ろしき仇敵に極まりしものなるべし、たとひ愛する處の美女の心様、直にやさしくとも、その故に種々と思ひも付かぬ他人の恨みを請けて、災ひの發るものなれば、愛する人も寵愛せらるゝ人も、よく／＼用心して慎み捨てにせし。○きけば春水が、近年著したる中形本に、醜婦なる美人の事をしるし、好色なるに似たれども、男に對して不實なる女を一人も記せし事なし、男一人に惚れたる女が、二人も三人もありとしるせし[illegible]ど、醜婦にて淨け、災ひを發す様なる事をも作らず、只々男の為に操を守り、[illegible]を著して夫婦と

なり、たゞ吾家本妻圍女睦ましく語らひ合ひて姉妹の如し。斯くてこそ實の美人ならずや。顔容のみ實はしくとも、男に不實をする女は、鳥獣にも劣るべし。因に依つて楊貴妃の一代を、畧鈔して巻をひらく童男女のために、意見の端とす。本文ならぬに退屈せず、猶一二枚の古事を辛抱して讀ませ給へ。

再び云ふ彼の楊貴妃と聞えしは、唐土の土地にて、弘農といふ所に住居ひたる楊玄琰といふ者の娘なり。其の母親が或時楊の木の下に晝寝をして居たりけるに、楊の枝より餘る下露が落ちかゝりて胎内に宿ると夢を見て妊身になり、其の生まれたる兒が楊貴妃なれば更々凡人の類にはあるべからず。天人が假に下界へ化現れしものか、生質の美麗しき姿は繪に寫すとも筆に及ばず、本朝に似せてこしらへるとも、自然の愛嬌を寫す事かなはず。されば此の楊貴妃が親許に居たる時分は、諸方の王侯から乞し上げて呉れろの、すぐに息様にするのと仰付けらるゝもあれば、町家の息子は、地面を五ヶ所十ヶ所を持参して、聟になり度いの、楊を親に地面を十五ヶ所と金を三千兩遣ろから嫁に呉れろのと、言込む者朝から晩まで絶え間もなければ、其の言訳に倦果てて、留守を遣ふ日の多かりしが、貴にも両親が大切にしたる甲斐ありて、天子の御聞に達し、忽ち后妃に召出されしが、民間にありし節だにも、見る人毎に恋慕ひをさせたる程の娘が、綾錦の此の上もなき衣裳を十分に着飾り金銀珠玉の

髪の上には好みを盡して野暮ならず。こゝにおいて玄宗皇帝は、其夜楊貴妃を寵愛あつて、片時も側をはなしたまはず。誰もの花なさに、傾くと思ひたまふやう、世の中の美人紅粉面に粧ひ、身に羅綺を著たるは、みな假の嬋娟にて眞の美質にあらず。楊貴妃は其の傾のこしらへものにはあるまじ。同じくは腐を纏はし、素顔のまゝの美しきを見度きものなりと思召して、驪山宮といふ御殿の庭の温泉を、又新しく普請を仰付られて、宿場の湯を數多水晶の下を一に流入で、温泉の色のごとくになして、楊貴妃を入湯させて御覽あるに、白く清らかなる肌膚のうるはしき體、月にも花にもたとへがたく、自らなる薫か含の薫りを、霽鬟に結ておろ行きは、雲容の額を拂いて湯に交へたるが、嬌客を湯に立てたるかとあやしまる。それよりいよいよ御寵愛深く、楊貴妃の兄弟は、天子の寵田つまりたよりに遙かに昇り、富貴なる事は百萬石の上にも越えたり。こゝに其の如くなるゆゑ、楊貴妃の兄御楊國忠といふ者、宗の郭しく賤しき性質のものなれど、此度寵愛に長じ、上にも下にも遠く、宰相武運雖すつ彌へたる筋にはなけれども、只に星御をなにおいて、主役に取立てられ、我が馬を並ぶ蹴となり、我意をふるひしかば、上下ともにこれを恨み、後に恥かしばつて、國を亂したる、非器の輩國はなれ者を、事を仕ずと聞えければ、それを國をうて覺を樂む中に、下らざる侘婦女が前に立たずと嘆言されるかばしこに、この御身の其時ふとひて、五十餘國の大軍を引率れて、都の方に向ひ攻

宴といふ山に陣を張つて居たりしが、元より大將となる度量なければ、只道理もなく力身ちらして、酒を喰ひ尊大に引付けし、軍の事は夢中でありける處へ、敵に攻寄せられ一戰もせず追立てられて、し千里關より國を遁れ吐蕃に攻められ、命からがら都へ逃歸りしが、面目なければ味方の中に逃げたる者、國忠に連れて行きし者を一萬人程引捕へ、其の首を切つて敵の首をとりしと僞り、都にて獄門にかけられし故、其の親類兄弟縁者の人々悔しく思へど、楊國忠の勢ひに恐れ、口出さずにありける所しも、安祿山といふ大名惡心を企て、楊國忠が非道を征伐すると言立て、軍兵を集め招きければ忽ちに七十萬騎の大軍となり、楊國忠を恨む面々先に進んで都へ攻登り、勢ひ竹を割る如くなれば、天子の軍兵は悉く逃去り、哥舒翰といふ大將許り忠義深く防ぎ戰ひ、玄宗皇帝に向つて、今はもう大内にはお在で被成れませんから、蜀の國へお立退きなさる樣にと教へ申す故、是非なく天子は楊貴妃と俱に、五雲車に乘つて逃落ち給へば、楊國忠も周章へて、逃げる御供の中に加はり落ち行きしが、安祿山は後より追付き、既に危くなれども、天子の御供さらに動かず。これに依つて天子は御車の内より、何故ぞと御尋ねありければ、御供の軍兵口々に、此の度の大變は楊國忠が奢りを極め非道を行ひ候に付いて發りましたる軍なれば、はやく楊國忠の首を刎ねて、天下の人心を安くなさるべしと申し上げる中に、はや敵の軍兵ども近付くゆゑ、是非なく楊國忠を御供の人々の願ひに任

せられしかば、諸軍勢よりこぞつて楊國忠を馬より引きおろし、戈の先にさし貫いて一同にドッと笑ひを催しけるが、是れを妃の楊貴妃は眼前に御覧ありて一族を悲しみ給ふのを、心荒き軍兵ども、なほ是れとは申せしも、心の裡には楊貴妃なれば、これをも除き下さるべしと申し上げたり。天子もこれをば許し給はず、后も恐れて、天子の御膝にすがり付いて、歎きたまふを、遠國より勤番に登り、此の御供に加はり居たる武士の面々、情なくも容赦なくも、天子と御同車の楊貴妃をば左右車の中より擢み出し、大道に投付け馬にてこれを蹴ころしたり。其の中に諸軍勢に天子の御車をいそがせ、後陣の人々は安禄山を防ぎ、やう〳〵に蜀の國といふ所へ、逃げ延びたまひしが、彼の忠臣家徐歓は俄の事ゆゑ、一旦は敗軍をなしたれども、また〳〵國々の軍兵を催促し、五十萬騎におよびしかば、郭子儀の人々を合はせ、八十萬騎の大軍となり、遂に謀叛の大將安禄山を打亡ぼし、蜀の國より玄宗皇帝を呼びかへし参らせ、再度天下をもとのまゝにて治められけれども、玄宗帝はたゞ楊貴妃を殺されたる事をのみ悲しく思召し給ひて、楊貴妃の殺されたまひし、馬嵬といふ所を通らせられたる時も、堤の草の露を御覧ありて、去年の秋この所にて、情なくも楊貴妃をうしなはれたるを悔みたまひて、一入哀れにも不便の最期なりし事よ、たとへ再び天子の位に上るとも、楊貴妃なければ、何かあらん甲斐はなし」と種々に歎かせられ、位をば御子の肅宗といふにゆづり、其の年の中に楊貴妃の事をこがれて

崩御あそばしたり。されば其の以前楊貴妃と玄宗皇帝のおん中睦ましかりける節、七月七夕の夜に、牽牛織女の星の契りの幾千代も永久變らぬを羨みて、在レ天願作二比翼鳥一在レ地願爲二連理枝一と誓ひを立てられたまひしと言傳ふ。さあらば一念五百生繋念無量劫と佛の說かせたまひしごとく、生きかはり死にかはり、天上人間の世はいふも更なり、禽獸魚蟲と生まれ變りても、愛着の迷ひをはなれたまふことかなはぬ、罪深き御契りありしとなん。それほどにまでおぼし召しても、天子のおん威光ありながら、此の世の緣のいと薄く、途中にての死別れいと口惜しき事ならずや。これ何故と尋ぬれば、妾の兄の惡きに依つて斯樣の事のありしなり。遠き昔の物語なれども、今の婦女子の身に引當てて、他事と捨てたまふな。よく／＼讀み解け得心あらば、自然身の爲ともなるべし。さて此の次の條下にしるすは、彼の正作の處女お柳が温厚行狀のはなしにて、右に說きしるしたる楊貴妃によく似た事がありながら、處女心のあどけなく、前後不見のおもむきならで、用心ふかく身を愼み、哀れに感心する傳をくはしくせり。

第十回

くめ吉「玉八さん寔にいろ／＼おやかましうございます、堪忍してお呉ん被成いョ、そしてマア七さ

んがお柳のおかげで、ひどい目にお合ひだと聞いたから、わちきやアモウお氣の毒でならないわ」「ホンニナア其樣にひどい目に出合つたといふでもないヨ、それだから、いい鹽梅に渡場で、お柳さんを七さんが見かけたのはね、左樣でないと、そんな目にお柳さんが出合ふか知れないのだよ」「ヱヽナアそしてまた娘を悪人が引出して行つた道中に、じう人のお友達がお在でで、助けてお貰ひ申すといふは、手前勝手に言つて見ると、何ぞ深い因縁でもありますのかと思ひますわ」「ヱヽナア、大かた左樣だらうわネ、それは左樣とお柳さんなどは、ハテ何樣仕ようとお思ひだネ」「イヤモウまた何樣といふ料簡もありませんネ、今に追が來たらば、よく相談を仕て遣らうと思つて居ますネ」「ヱヽ一七が左今にお出でだらうネ、今晩七さんが、彼方の元家へ来てお在での事を知らせに、使の人を上げたらばネ、實に嬉しさうに禮をお言ひだよ」「ナニ、左樣であらうネ、たしかに若樣からは、お柳の家出をした時をいつて行きましたのネ、それに此柳に越案に逢はずに此住家へ來たのだから、さぞ案じて居ましたらうわ、其所へ知らせの使が出つたものだから、安堵しましたので、嬉しい顔をしたと思ひますヨ」「ナニそして何處かの寮は行きましたかネ」「アイ、今しがた、七さんと連れて行つたのでし行きましたわ、南へ北から、下駄が、傍に付けて来るといふ心持で、用を好んで行つたのであるますヨ」「ナニナア左樣かい、何樣せうね、其樣にナニ七さんに心配をかけて氣の毒だね、

トはなしの處へ、正作は生質いたる正直律義、彼の若松からむつかしく談じつけられ、是非もなしと他人の隠して呉れるのを、親身の口から其の行方を、明白につけて作ふ養家の後見東若松の澁九郎、正「ハイ御めん被成いまし、七三郎さまのお宅は此方でございますか」玉「ハイこちらでございます」正
くめ「オヤ／＼爺かえ」ト言ひながら粂吉は立出でゝ、障子を明ける。澁九郎はちよいと小陰へ隠れて家内の様子を窺ひ居る　正作は粂吉の顔を見て、正「ヲヽ、お粂か、何様して此處へ来て居るのだか。此身アお前が若松から逃出して居なくなつたといふので、何の様に迷惑をして困つた事だらう。實にむつかしく言掛けられたから、若松の人を同伴に連れて来たアナ」ト言ひつゝ玉八に向ひ、正「ハイこれは御免下さいまし。貴孃は此家の姉上様でございますか。私は寺島の正作と申す親父でございますが、今朝ほどはお使を被下いまして有り難うございます。殊に娘を種々お世話被成つて下さいましたと承りましたが、實に御深切に有り難うぞんじます。何卒旦那さまへ宜しくお願ひ申します。そしてアノ娘を、私にお渡し被成つて下さいまし、養子に遣りました先のお人が、こゝへ同道で参りましたから、直に其の人に渡して遣り度うございます。其の約束でその人を連れて参じましたから」トいはれてお玉は當惑し、粂吉と顔見合はせしが、流石に苦界の掛引を、見様見眞似で心さかしく、料簡つけて、玉「オヤ左様でございますかえ。ノウ七さんがネ、今朝お前様の方へ使をば上げましたが

ぬ、他人さまの御飯を家内へ置くのは、少しの間も心配だからと申して、先程あの子供を連れて申し

て、お前さんの所へ参りましたが、途中で行違ひに為りましたらうと存じましたから来ました、就ては

それはこれらとた、お上に寄らぬ者もの、最早の心を借り、小川の義備で東日から、七三郎へ此の事

を知らせに行きて今時分、家内へ帰るたとまのから、何しにお帰り、又た何の用事で何の要目かと遣

されては、此の時分は御家の事も三郎の旦那は先祖の墓に往もし、まあく私も尚様の様なことして居る

ますので、ございますが、只今此の七作さんは存じませんには、お嬢の此方へ参って旦那さまに見せてとお

ら、旦に附き添ふて家中をした事、此方まで他人の嫁を、一度でもお出でなさいますと二階へと

皆の方に、断然して其れのみと段々と詫言をいはれますに付いて、先づ私も何事なく、連れて帰らうと

存じて参りましたが、又此方にも居りませんと申しやっては、お正作さんの申された言も違ひます

して居りますまする位でございますが、私どもの方で其事を云って、お駒さんを斯う旦那様との件

でう、さうして行って居ったとございますといはいたしまして、鬱ぎ九郎兵衛で何ぞのくさへは

まで、一昨日、それに別業へ行って参りませうには、此節は兼れる者に出作さんの所へ参じますが、しかし直

然へお駒の情の事なれば、其の一件を承知して居りて、七三郎さんにお眼にかかり申して、其始末を付け

ないければ済みませぬから、何分お駒を連れて下さいまし、私をおまかせして御手前で、七三郎に

り獨言、玉「ハア、何だか怪しい仲間だ。」ト佇む中に、正作もいとまを告げて立出つる。我が娘なる粂吉にも、親しく挨拶なさざるは、倶に疑ひをうけまじと、澁九郎への遠慮にて、唯正直の氣ばかりか、他人と彼これ爭ひて、理非の差別をするやうな氣質ならねば、澁九郎の、苦々しき言葉を恐れ、玉八へお柳の世話になりし禮を、念を入れて言ひもせず、そこ／＼にして出で行けば、背後見送りて粂吉は、氣の毒さうにお玉にむかひ、くめ「玉八さんさぞ氣にさはるだらうけれども、堪忍してお呉れヨ。」玉「オヤ何をえ。」くめ「ナニサ私の兄が餘り馬鹿で、他人さまへろくに挨拶も出來ないで、此樣にヤァ七さんやお前に苦勞をかけて置きながら、平氣で妹を若松へ引戻される料簡で居るわネ、餘り齒がいい樣だね。それだから自分の事ばかり用心をして、お柳を若松へ歸してさへ仕舞へば、苦拔けをするといふ氣だわネ。」玉「ナァニ左樣でもあるまいがネ、たしかに今來た奴が、お前の親御さんを嚴敷くおどかして掛つたものだから、如彼正直な氣で、とりこしらへもならず、在りの儘に、お柳さんが此方にお在での事をも、言つてお仕舞ひのだから仕方がないヨ。それは左樣と、早く七さんとお前とで、能く相談を被成な。今欺かして歸したけれども、お柳さんの歸つたのは譃だから、又あの澁九郎とかが取つて返して此宅へ來るヨ。其の時には急度むづかしくいふから、それを能い鹽梅に挨拶する都合をして置かないと行けないヨ。」くめ「ホンニ左樣だねえ、何樣したらば宜からうか、私の智慧では

なか／＼皆へお付かないヨ」ト話しの途へ出掛た、何かいそ／＼間口より、文三八さんお宅においでか」「ヲヤお粂さんかへ、お這入りな」ト言はれねと言はなくつても、急用があつて推参したから這入らなければならないが、まア／＼粂さん能お出掛に鬱ぎいでお在でだヨ」「ナニネ今日お吉さんは何の事で気をもんでお在でだネヱ」トいつて粂さんお上りな」トまア昨日お吉に暇を遣した美しい娘は、客様すんの一件だといふ事だがネヱかへ」「まア、あの娘の事に、皆の胸をむしやくしやさせて居るからネヱ、業変さうだといつてネ」ト左様かへ、此家は又ある騒ぎ事に持つて勧めさうなやうだネヱ、何しろで来たこだつたこ」ヲヤ〳〵皆の気もちはおやすくないヨ、噂にもしか、つまり所が出来て、今お時さんと膝を並して帰る最中だわネ」ト何か何しした噂を聞くね、あの娘に情人がある噂、秀主がある噂といふ分別ではあるのさ」ト言へ、是は吉原様ではないか、首尾に行つて見たが家を駆出して来たんださうだ、それに付いて面倒な事になつて居るのだ」トまア、訳をいはなくてもいゝとは、近く気をもむ亭主は私もさ、あちらの家に帰つて、親方もさぞ用心して居たかね」「何だネ、〳〵ふの出たその娘にして見ると、前の事は何も私も承知して居た」「ヲヤヽ此噂で、あつちの家が居るいて見れば、利口さん所へ七さんが連れて行きましたわ」「ナニ、それも承知で七さんが所へ、物お分りになるだらうよ」「ヲヤ、左様だけれども、今は済んで来るつもりだから、まア／＼そのやうなお連れて」ト夫ヨリ

ヤなぜ其様に急迫なのだえ。」長「米さんお前アノ誰に用があるのだえ。」米「ヱヽナニ此の米太さんの御用といふは別儀でない、彼の娘の事について早急に。」長「アヽソレそんな洒落所ではないヨ、何様したら宜からうと當惑して居るのだから、お前も能い智恵を貸してお呉れな。」米「なんの智恵も相談もいるものか、あの娘に情人がなければ直に面白い話しがありやす。それで此身が驅出して来たのだアネ。」長「ヲヤ實正にかえ。」長「何様仕ようといふのだえ。」米「ナニ情人がなければ、此の米さんが情男になつて遣らうと思つてサ。」くめ「オヤ／＼憎らしい米さんだねえ。」米「イヤそれは戯言だが、實正にいいはなしがあるヨ。」

辰巳情談 梅之春卷之五 終

長唄講談 梅之春巻之六

第十一回

「ヲヤ〳〵とふりくる夕立に、雨具は備けれど、私が為には[illegible]の内、暗や暗[illegible]行く夏の客。」ト[illegible]なる[illegible]の新唄は、此の時流行る[illegible]の、座敷に絶えぬ客人の、酒の相手に座を持つて、[illegible]調子は[illegible]のお席、いや[illegible]さんお前はよその[illegible]を私にさしてよくんなはいましヨ。」梅「ナニ〳〵、私の拵へたのは面白くないから、傳次の[illegible]を何か[illegible]し、[illegible]の能く出来た唄だ。」いや[illegible]嬉うでございますか。」ト言ひつゝ[illegible]の傳次、[illegible]は[illegible]せて、[illegible]をおもしろくのみて、三味をんちよく弾き、[illegible]の上手通家のひいき多し。）にむかひて嬉[illegible]、「や、[illegible]傳さん[illegible]してむくなよ。[illegible]を[illegible]こしらへた[illegible]はなしサ、[illegible]が出たのに[illegible]つたのだ[illegible]」といふ時、[illegible]る[illegible]の[illegible]、[illegible]、三[illegible]下に[illegible]き「[illegible]傳[illegible]の[illegible]だから[illegible]お頼ひ申してお笑んなはいナ。」傳「ム[illegible]然うだ[illegible]、[illegible]て居た」といひながら、[illegible]の耳に[illegible]けば、此の[illegible]は[illegible]

すごし、肱を枕に横に倒れるゆゑ、傳次が囁くはなしも半分は夢中なるべし。傳「お曾女さん私が承知して居るから、早くお歸んな被成え。」そめ「然うかえ、それぢやア何卒お願ひで御ざいますヨ。」傳「大丈夫請合ひ、兎喬さんが萬々一、お前が早く歸つたと言つて腹をお立ちなさりやア。」いね「其の節やア、傳さんは知らない顔サ。」まア、、。」傳「又お稲さんが、お株の惡態が始まつた。」いね「ナニサ、何時私が惡口を言ひました。」そめ「サア何時お聞きだ。」傳「此間聞きました、眼と耳ばかり正月ならば、誰でも所爲なんぞと當こすり被成つた事がございませう。私は實にも御尤もだと思つて聞きやした。」いね「エ噓ばつかり、それは姉さんでございますヨ。」「すや〱わたしがこんな。」傳「そのよな言譯を。だれより私が否ならば。」いね「なんだね傳さん、お前は三味線とおけで能いにおしナ、清元は兎ても二傳「燒いても喰へねへかえ、犬にでも遣つて仕舞ひやせう。」いね「お曾女さん兎喬さんには私が然う申すから早くお歸んなはいヨ。」そめ「あり難う。大れでは何卒宜しくお願ひ申します。」ト生得きたる温厚しさは、容易く筆にも記し難し。發明にて半可通ならず、お客は元來連れの人にも、實意の挨拶自然と表はれ、古今の美人といふにはあらねど、愛敬ふかく媚しからず。何となく可愛らしき賢女なり、などと今更いはずとも、折江町のお曾女といはば、衆人御存じの娘なるべし。

斯くてお曾女は杉坂の座敷を出でて立ちかへる。折から又も兎喬の俳諧友達、巻山をはじめ藝者

二三人、聖なる宿る席へとつれ〴〵と入り、魚のかゝりし素材の旨を見させ、吟味は一間室の南、時節に叶ひし流行の、料理は名にすふ杉坂の、意六殺れに心を用ひ、客の腹へ上手と、はまるを穿つは料理番の働き吉が庖丁の冴えなり。

主「コウ〳〵番山さん、賑やかにするのはいいが、騒々しくしては悪いぜ。」番「はい、かりこか、もう承知だが、町で来の三味線を弾くのは騒々しくはならねえ。それに時節によって、客があるりやす。第一此の杉坂の主人が心懸といふは、寺内の騒ぎをさせぬ、役者は一仕舞って、騒ぎも立中も使はず、刻世帯の様にして、お客のお気性は不調法な事柄の無いやうにしないのに、意口でなくな遠でなし、しかも無駄なそは少しもないやうなのに、気隙を打ちはしこりもあ構をさせたりはしない、といふ心がけだよ。」まるたる料理茶であればこそ、素人のいきごとはそのか、思ひ出つて迄書くたる料理だから、然うでござります。」言ひながら、手を両に分け、構造の三味線の音の寂たるを肖

喜吉津南宗都日戦上大入鼎下尚金三大入下

十一世大國子 立 宮 著

ござの三やこに名も高き東京の津名門なるその、ふりしたはれて、名のりしは、いとかなしう心はに、こうへ

めしにかと、ゆくりなく醉ひの餘り笑ひの種にひじりの歌おもひ出で紙墨の費えをなし侍りぬ。

　極樂はいうくの方とおもひしにすぎさか下の丈六かかど

ト讀み下して「なる程面白い文章だ」、杉坂下が是れを珍重する心では、少し俗事を厭つて極く好情に會席をして、時節禪家の茶の湯でもするお客を設けて、淨齋の料理なぞでも爲て樂度いといふ願ひとおもはれやす」ト言ひながら庭の方を見やり、筆と硯の形を彫りし石燈籠の古物を賞めなどして程なく醉ひ伏して眠る。

實に身のほどを知つてたのしめば、酒は百藥の長にして、世の憂き事をわするゝ長生の養ひなるべし。此の時々景と傳次は暫時席を去つて跡には娘と藝妓のみなり。

トッチリトン、の小唄の出たらめ、文句「唐と日本のしん場のウ河岸イで、鰹が一本家根船で、おれがさした酒なぜ呑まぬ。老女「ホヽ此方へ寄と、此のおくしやうめ。大峯富士山湯殿山、日毎夜ごとの歩詣で、お湯があるからお茶が出る、ドッコイ遣らぬと背後から歸りは夜さくら日吉丸ッ」●「ホヽヽ、餘りごた交ぜだねエ、そして不殘有る文句を二三交ぜるのだから、かへつて紛らはしくつて覺え難い樣だねエ」●「アヽ、私も最初に聞いた節は、なかなかおぼえられさうもなかつたがネ、幾度も唄ツたら、漸と間違はないやうに唄へて來たわ」●「ナニ誰か唄ひ出したんだねえ」●「アノネ此間落し

ばなしの噺へ、お客と同伴に行つたとき、[illegible]といふのが[illegible]たョ。
ニヤ司馬龍太郎といふのは、醉客と男とはなしをするのは上手だ[illegible]一たいお客は
陰で細可く唄ふわ。そして艶治郎風がないから能いョ。」●「わたしは龍齋の京家だから面白いよ、
モウ〳〵可笑しくつてあんまり笑つてゐたら、[illegible]それに從いお客さんは何處
へ連れてだいすョ、[illegible]
[illegible]
[illegible]日露威光
[illegible]は
いゝ[illegible]●[illegible]、可
此際に勤め惜しみをするだらうノウ。少し口が[illegible]▲[illegible]
所の座敷が少し詰ゝと、[illegible]腹つたつていやがる[illegible]●[illegible]木
足を出したるん。●[illegible]
[illegible]▲[illegible]大ぎの傳次さんが[illegible]
もんだ、所が出来たんだョ。」▲「オヤ〳〵然うだ[illegible]

の多き中にて、土地の名代評判高き芳町の田中屋のおちやらと聞えたるは、年は行かねど流行娘、いと美麗しき姿にて、次の座敷へ入り來る。だれ世の中の通不通、好風と野暮との理論を聴くに唯各の好き不好き、心々の思はくにて、その賞めるのも頼みにならねば、又譏るのも當にはならず。然はいへ自然と土地がらにて、娘の風俗衣裳形婀娜なる者の多くあり。其の中にして他の目に彼こそと思はるゝには、連れ他人に勝れしことのなければ、叶はぬものぞかし。爰に次の間へおちやらを伴ひ入り來りし客は、年齢三十七八歳、人品よき大家の旦那にて名は嘉兆といふ温順しき人なり。和歌町の米太夫と東賀の二個附添ひて、萬端隙しからず。座敷の體最も奥ゆかしく見えたり。然れば名にあふ唄女のおちやらは、座付き賑やかにて酒宴の興を催す事、なか〳〵他の唄女の及ぶ所にあらず。生得の容儀美麗しく愛らしけれども、行状正しく好色なる所爲を愼み、花やかにして浮薄の事なければ、萬客ひいきをせざるはなしとぞ。

さて這の嘉兆が座敷の體を、つゞけて説くときは、同じ風情の長くして、看官に倦きの欠もあらんかと推量り、酒宴の賑やかなる席をしばらく三篇に讓り、是れよりつぎの一回は思ひがけなき田舎道の最と寂しき場を、一幕綴りて看官を變へたり。然ればとて、此の卷に續かぬ事を記すにはあらず。直に三編を讀みたまはゞ、忽地前段十一回の嘉兆一黨が話のつゞきも解り、また婦多川の樣

八笑吉が一件も這箇に説きつゞく様に記したの、是は為永が一癖にて、いつも話を半途で止め、それから外のはなしを説きて、外の話が又以前のはなしの続きとなするのなり。必ずしも看官の倦みを頗くし給ふなといふ。

第十二回

浪速に何處と知られねども、八軒過ぎの軒に、又と同じと思ひて聞けば、爰は人の知る居間の、富士の[illegible]はくべる桶の火に、「燗を取をさせて」と、ものゝ噂さへはなし聲、○口▲○●口をけ合ひの口なりにて飲み給へ。●「ヘイ吉やい、菜食はうまくいかないか、もつと精しゃア」▲「馬鹿ア言へ、たつた今で一分と腹で二杯によこ」▲「コレ喰れるぞ、また三篇も貼へでも、ひでかへりやすかつたう。」▲「遊へなしョ。コウ濁酒を小半合買ふから、肝煎が一件をうけで喰んねエ。とういふ仕[illegible]よいぐらにお妹へはなしな野郎といふにやア、また主人お前はお前の情と気の毒はまいし、口ぐ[illegible]ませんか、わつちア年が明けたら、お前はその女房にしておくれな、そうすると毎日毎日精進しで、[illegible]子や揚物の喰ひつくらをしたいかれとぬかしやアがるから、おれも剛気にやア、[illegible]して手前を女房にするから、案じるなと言つたら、又女郎のべらぼうがいふにやア、嘗に嬉しいヨッサ、そんならど

うぞ前祝ひに、今夜團子か揚物をお買ひなといふから、我がいふにやァ、よし／＼其のくれるなことを仕かねる我ぢやァねえ。」と言つて財布から錢を四百文出して投げてやつたらの、嬉しさうな顔をして女郎の言事を聞きねえ、オヤ情人は氣めへもんだョと、もつて往きやァがつたぜ、どうもこてへられねえ。」●「あきれた色深だァ。」○「コウ手前達やァ、恍惚はまァ後に仕やな。夫れよりは先刻跡の立場で見掛けた、二人連れのツレ一人は若衆一人は二十歳ばかりの頭巾を冠つて居る尼ョ。」□「オオそれ／＼、ありやァなんでも只ものぢやァねえぜ。」▲「左樣ョ衣類の樣子から頭巾のあんべいだやァ尼の樣だが、何にしろ美麗しい婦女だつたぜ。」▲「そんなら此の海道へ來るだらうか。」○「來るとも來るとも、先刻立場で茶を呑みながら、南畑村へはどう往くといつて聞いたから、何でも此の道へ來るにやァ相違ねえ。」▲「づつしり分前のあるといふ譯かノ。」○「左樣ョづつしりともいくめえが、まあ兩人の身ぐるみはいでも、餘程にやァならうし、路金も少とはあるだらうし、尼だから金にやァなるめえけれども、美麗しい婦女だから、此の人數でまはりの／＼小佛として見ねえ、ずゐぶん霜枯の仕事にやァ上首尾だらう。」ト話す折から向うより、田畝づたひに、此の原へ夜道を急ぐ二人連れ、一人は尼に今一人は、まだ前髪の美少年、杖に縋りて足引の、山の端出づる月かげに、顔見合はせて涙ぐみ、少「お前さんさぞ御足がお痛うございませう。こんな事と知つたら、跡の宿へ泊ればよう御座

いましたに、立場とやらで聞いたら、南畑へはおつき一里か一里半だと申したから、ちつとも早くとぞんじてねえ」 尼「左様サ、どうせ斯うやつて出たからにやア、怖いこともおそろしいことも、かまはない氣で居ますけれども、ついぞ見たこともないこんな野原を、たつた兩人で夜夜中歩行くのは。」にトはなし中途へ後の方、すつくと立たる惡者共、惡者「コレお前方何處まで往くのだ、送つてやるからどうぞ酒代をお呉んなせえ」ト言はれてびつくり驚きしが、弱身を見せてはゆかじと、心をしづめて、尼「それはお前がた、酒代なんぞとお言ひだけれど、私どもは修行の身だから、どうも持合はせがないから、堪忍してお呉れヨ」トわつはに言へど、ぶる〳〵とふるへる足を踏みとめかね、兩人は顏を見合はせて、透があつたら逃延びんと、思ふ氣色を見てとる惡者、惡者「イヤサ衆人が這處へ來て、お願ひ申すが能い、我達許りおやァ下さらねえヨウ」ト、口の下より六七人「ヨウヨウ」といらへて出で來れば、兩人はなほも胸轟き、何といはんもすきだつ涙、狭き野の霧と、共に消えなん心地なり。若衆は怖さうも忘れ、ヲイ此樣に先程から、譯を言つてあやまるから、どうぞモウ堪忍して、見逃しておく呉んなさいまし」 尼「ナニしあの少年がいふとほり、どうぞ堪忍してお呉んなさい、今にわたしどもの身の上が元の樣になると、お前がたの名を聞いて置いて、たんと酒代でもさしあげるから」 そして私は出家の身だから、今はどうもあげたくつても、何品にも持つてはゐないから。」 惡者「なんだ

出家の身だよ、夫れおやアおやうざいい、私共がよつてたかつて、念佛講をしてあげるから、こうを往生する様に、慈愛がつてお呉んなせえましイ、手前達にも跡で樂しませるから、其の若衆が邪魔な仕やアがると面倒だから、そこらの木へでも縛りつけて置けつこ、言はれてうなづく二三四人、若衆の簱へ立寄つて、縄をかけんとする處に、いつの頃にか後の方、十六七ばかりの娘を連れし、町人風の一人の旅客、今この若衆に繩をかけんと、立むかゝりたる悪者が、襟がみつかんで二三間、らんどりうたせて投げ退けたり。こちらのかたにも五六人、尼をとりかこんでりふじんに、手ごめにせんとする處へ、またもや後の辻堂より、あらはれ出でたる其の人は、屈強なる一個の男、尼が上帯引きほどき、己が面をあらはにして、兼て語れ寄らんとする悪者が、手をねぢあげてつきのんだり。折しも月は雲に入り、急に降り來るむら雨に、一寸先も見えぬ闇、衆人これに途をうしなひ、右と左へわかれざいに、命からがら逃げ行きけり。若衆は尼を尋ねつゝ、あつちこつちとかけまはり、七八町もたづねしかど、尼の行方の知れざるに、其の身もいたくつかれしかば、四隅見まはすむかうのかた、萱屋根ふりしひとつの社、神か佛かしら壁も、落ちてあらはす破小舞、爲にからくむ竹縁に、暫時と腰をうちかけて、あゝ何處へ逃げてお出でだらう。さぞ難儀をなされだらう、と、案じられることだと言ふ折からまた雲をもる月影に、後を見かへる堂の内、ひそ／＼泣き居るひとりの娘、若衆はぞつ

くりしたりしが、心なしか娘の顔を、つくづく詠る気味なるにぞ、ものをも言はず、しばし見詰めて居たりしにぞ、娘も若衆の顔を見て、少しは落着し有様なり。

作者曰く、必竟これなる娘と若衆と顔を見合はしたるは、又いかなる訳かあるべきか。其は次の巻をよみて知るべし。

春色梅之春巻之六 終

辰巳満談 梅之春三編序

そもこの草紙は北方の、佳人が元日の未明に、薮入にふする鶯の、初音の告げに二日の若湯、五町の郭を觸れしより、大黒舞の聲まで寫して、彼の由東風の穿ちにも、まだ見ぬ花の色香を傳へ、遠く辰巳の河岸にも送り、實に稀なる梅の一枝、餘の木に勝れる名木なれど、自暴の初編を出せしが、第一の巻の一冊でも得難き里の所趣向またあるまじき作意にあふれしが、野暮には不解作書故、更に珍重の賞譽を聞かず、さりとて二編三編と、裏をかへさば面白い、野暮となれて面白き、世にもてはやさるる事もやと、作者をひいきの文溪堂が、得意へ上手の青び口、直も利者の新板なりと、進めて撰く、曲亭の丹誠、首尾を一時に揃へよと、急ぐか漸く元氣となん、寧ろ人しく無理にこじつけに、作りあげたる梅の春、最早一枝にて實を結ぶ全編とはなせり

狂訓亭　為　永　春　水　誌

辰巳清談 梅之春巻之七

第十三回

世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬と、變るならひを變らじと、誓ひし言葉はなけれども、定め難きは男女の中、互に思ひ思はれて、實と眞が有りたから、届かで長くこがれつゝ、はては過ぎさるむかしとなり、只なつかしと年月を、はかなく送る身の上を、哀れと知りていとほしむ、人もなきこそ悲しけれ。爰に龜戸村の片ほとり、畑と田の裏の方、植木の垣の其の中に、雅俗をかねし庵あり。主人といふは年齢二十の上を多くも越えず、人品けだかき尼にして、色いと白く眼元口もと可愛らしく、聲は鶯の音色にも勝して艶しければ、自然と愛嬌溢るゝ如く、あつはれ此の婦人の世にありて、黒髪の艶やかに、紅粉の化粧こまやかなる節は、いかばかりか美麗しくはなやかなりけんと、噂せぬ者もなかりしとぞ。當時斯くの如く世をいとひて、寂しき所に住居はすれど、這れを見繼ぐの縁者のあればにや、何不足らしき事も見えず、十四五歳なる少女一人を使ひ、折節は物縫ふ女なども來りて、庵の内賑はしく、三味線の音も晝夜絶えざる事あり。今日も晝より客來りて、晝すぎ頃

まで遊びしが、最とさゞめきたる女連れにて、隅田の花見の催しにや、田圃傳ひに出で行きしが、跡には尼の寂し氣に、溜息を吐いて居る處へ、止宿に來て遊び居たりし二十四五歳の女、（尤も此の尼の爲には目下と思はれたりし）勝手の方より茶の煎花をこしらへて持ち出で、女「モシ貴孃へ、お茶を入れ直しましたから召上りまし。」女「オヤ涙を落して被爲入るのかえ。」尼「イヽエ、ナニサ、アニ餘りお客の會釋に退屈したから、血の道氣で涙が出たのだヨ。」女「然うでございますか、併し今日のお客ではちつとお心惡うございますノサ。」尼「ナニヤ何故エ。」女「なぜと仰しやるけれど、お出店のお孃さんが今日のお衣裳やお髪の上の花美な事を御覽じましたかえ。」尼「アヽ、見たヨ、何も花美で似合はないといふ程でもないわネ、容貌が美しくつてお在でだから、歳より餘程若くお見えだヨ。」女「ナニサ然う仰しやるから私やア、貴孃のお心根が齒がゆい樣でございますわ。」尼「ナニサ何がえ。」女「イヱ外ぢやアございません、貴孃が其樣に法衣して、世の中を捨ててお在でなさるのが、悔しいほど惜しくつてなりません。」尼「ホヽヽヽ、何をお言ひかと思へば、不理窟事をいふのだネエ、私がこんな姿になつたのは、昨日や今日の事ではなし、今更どうなるものかネエ、夫れだから賑やかな所に居ると、世の中の事が羨ましくなつて惡いによつて、こんな所へ引籠んで、他人に逢はない樣にして居るのだわネ。」女「オヤ今更何樣も詮方がないと仰しやるけれども、貴孃はまア今年幾歳におなり遊ばします、此の春漸う二十一ではございま

せんか、何程お死去りなさつた啓次郎樣の御追善だからと申して、啓さんもモウお死去り被成つてから、今春は四年になるではございませんか、一周忌が過つと他所へ生まれ變つてしまふと言ふ事を聞きましたから、最早啓さんは他所へ生まれてお出でなさつて、今年は三才ばかりの小兒でございませう。」尼「サヤウ／＼然うだらうかネエ、夫れでもお寺のネー、」ナニサ貴孃は、お寺の和尚さまの言ふ事を、眞に承けてお在でなさるから行けません、お寺は職業だから、他人に勸めて坊さんに仕たがつたり、後生だの前の世だのと、種々の事を譬へ言ふのでございます。夫れはマア眞正の事にもしろ、貴孃のお身の上は、只啓さんとはたゞ縁の御約束許りで、また御婚禮をなさつたのではなし、一日でも同牀にお眠つた事はなし、貞女をおたてなさるにも及ばないでございませんわね、不吉な事を申す樣でございますが、啓さんが殘つて、貴孃が先へ死くなつておしまひ被成つたら、此節まで啓さんが獨身で坊さんになつてお在で被成いませうか、今年で二十二か三にしか成りは被成いますまい、互に惚れてお在でなさつたからと申して、男子の心で何しに義理をたつて、女の爲に十八や十九歲で出家になりますものか、其の當座こそ悲しいとか、いとしいとか言つても見れませうが、一生涯女房を持たずに居る男が、廣い世界に二人とも在つたら、夫れこそ年代記とやらにも書き載せられませう、眞正に貴孃の貞女をお立て被成るのは、誰も賞人はございません。」ト、、、、、然う情なく言つてお呉れでな

くつても宜いわネ、私が尼になつたのは、他人に賞められようといふ氣ではないヨ、只啓さんのお死去りなさつたのがおいとしくつて、悲しくつてならないから、直に死なうと思詰めたのを、斯うして尼になつたのだから、可憐さうだと思つてお見んなねえ。」與「サアそれがお愛しいから、私が此宅へ上る毎度に、何卒お心を取直して、世の中へお出で遊ばす樣に仕度いと、申すのでございます。今昔樣がお髪をお生やし被成いまして、島田にお結はせなさらうものなら、何樣にお美しくお似合ひ被成いますだらう。それこそ御本家の御兄イさんでも、御隱居所の御母堂さんでも、お悦びなさるのが目に見える樣でございます。御兄弟三人の中で、女の御子は貴孃ばかりおやゝございませんか。其の御身を澤山さうに、尼になつて被爲入るのが母御さんへ御孝行になりますか、能くまア考へなさつて御覽じまし。斯うしてお在でなさるお姿を、折節御覽なさる母御さんが、涙をおとしてお泣き被成いました事は、幾度だか知れません。何卒意地をお張りなさらずに、人並の御姿におなり被成いましなネエ。」と還俗をすゝむるは、何樣か道ならぬ事に似たれど、信實の心から斯くの如くに言ふなれば、又憎むべき事にはあらず。暫時ありて、是はまア、、、、お時どんが私をひいきにする心から、其樣に言つてお呉れのだけれども、此樣に、世の中をはかなく思つて、後生の事ばかり考へる樣になつて居るから仕方ないわネ、それにまた此頃から、異な夢ばかり見て、いよ／＼萬事否になつて氣色

が悪いヨ。」「さうさ、ヤどんな御夢を御覧じまして、其様に氣色が悪いとおつしやるのでございます。」ト、聞かれてかし言葉なく、鬱氣ぎし様に在りけるが、「ムヽノヤお前だから隠さずに言ふがね、アノウ去年の秋、父上様のお寺参りに行つた事があつたつけネヱ、「ヱヽ、ヱヽヱ、アノ田舎のお寺へでございましたかえ。」「ムヽア、然うサ、難波田のお寺へ参つた時、途中の旅宿に止宿つた晩ネ、實にマアノ怖ろしいこはい夢を見たのサ。」トこれより前に書したる六の卷十二丁め、狼の所の一條を、くはしくお時に話し聴かせければ、お時は其の物語を俯と聴いて呆れたる顔色になり、「ヱヽ「マア〳〵、たゞれがお夢でございましたのかへ、さぞ怖うございましたらうネヱ。」「ムヽアノネ、たれが些とも夢の様でなくて、雲助だの悪漢だのゝ顔も、狼の顔も、娘と通り過つて前髪の子を助けた町人の顔も、未だに能く覚えて居るし、そして其の夢に見た前髪の子には、旅宿つた旅宿を翌日立つて、四五丁行くと則ち夢に見た辻堂の前で逢つてネ。」「さう、イヱそれはおやア夢だか何だか分解りませんネヱ。」「ムヽア私も逢つたその節は、前髪の顔を見たら吃驚して、又夢を見るのかと思つたがね、先でも何とか思つたさうで、私の顔をしけ〳〵と視たつけがネ、私も氣味の悪い様な心持になつたから、供に連れて行つた與助と定殿を前後に立たせて、難波田の方へ歩行いたがネ、其の前髪は其處に佇んで居たりけが、供の人を待合はして居たのだと見えて、アノ、難波田のお寺へ参つて、父御さんのお墓を拝んで

居たらばネ、モウ／＼誠に愕りしたヨ。」　とき「オヤ何ぞ出ましたのかえ、日中だから幽靈は出は致しますまい。」　尼「ホヽヽヽヽそんなものぢやァないヨ」　とき「そして何でございますエ。」　尼「アノ何り途中で見かけた前髪がネ、亦お墓所へ參りに來たヨ。」　とき「エイお父さんのお墓へございましたかえ。」　尼「イヽエ外のお墓へサ。」　とき「然うでございますか、夫れからお歸りには、路連にお成り被成いましたのかえ。」　尼「ア、先からものを言ひかけたから、途中話をして歩行いて、夫れから松山の笛弓稻荷さまへおまゐり申すと言つたらば、其の少年も信心だからお參りをすると言つてネ、其の少年の供も二人私の方の供も二人、兩方の人數では六人になつて、モウ些とも怖い事もないから、同伴に稻荷樣へお參り申してからネ。」　とき「オホヽヽヽヽ、些とは面白うございましたらう。」　尼「ア、その少年の供をして來た次郎どんといふ人が、寔に氣輕な人で、可笑しい事ばつかり云ふので氣散じをしたわ。」　とき「オヤ／＼マァ妙な事でございましたネ。そして半分は夢で、半分は現然といふのは寔に不思議でございますネエ。」

作者曰く此の書二編目下の卷半冊十二回の段は、尼の夢と心得たまへかし。彼の十二回の末に夢といふことを看官に告げたてまつらず、文段にもゆめらしき體を綴らざりしは、腹稿と筆執りし門人のゆき違ひ、校合の謬りにて、數十種の新版ゆゑ、全く春水の麁漏によつてなり。御ひいきの諸

君、よろしく見ゆるしたへと、願ふものなり。

斯くてお時は夜食の支度など調へて、主の尼に備ふる用意なして居るころは、普門院の鐘入相を告げ、庭に咲き亂れたる櫻花の、ちら〳〵と縁側へ散りしく風情、閑清なる事いはん方なく、他視にこれを眺めなば、庵主の尼の體相はいかに。

これもまた入相の鐘にちりやせん外山の梢咲き初めにけり

と詠まれし樣にはあらずして、花の姿を蕾の時より、我から嵐にさそへかしと、日陰にしぼみし尼の心根、哀れにも亦歎かはしけれ。

第十四回

再說お時は豫てより、心に思ふ由あれば、夢のはなしを幸ひに、いと打解けし風情をなし、とき「お八重さまえ。」（尼の娘のときの名なり。今の名は智信尼と云ふ。）尼「オヤ何故以前の名をお呼びだエ。」とき「それでも貴孃を他のお比丘尼さまの樣に、佛門名を申してはお似合ひなさいませんものを。夫れは左樣と、先刻のおはなしの美麗しい前髮男さまは、何處のお方でございましたネエ。」尼「アノウ私は其の時聽かなんだがネ、與助が聽いたらば、親川のお酒の問屋で大層なお家だと言ふ事てあつたヨ。」とき「オヤ然うでございまし

たかそして其の御方と途中の旅宿で相宿を被成いましたらうネヱ」トいはれて、お八重はおもはず顔を赤らめ、八「アノお稲荷様から歸りに、河越といふ所の旅やへ、同伴に止宿つたが、何様も私がこんな姿だから、私も先も遠慮して、別々の座敷に止宿つたのだから、必ずあしく察してお呉れでないよ」こき「ホヽ、何様して私が悪く存じますものか。其の時私が御供致して居ると、貴嬢が何と被仰つても、無理に何して上げますわ。」八「まア何してとはエ。」こき「アレサその美少年と貴嬢と情人におなんなさる様に、いたして上げますと申すことサ。」八「ホヽ、何様してマアそんな事が出來ませう。刎體ない罰があたるわネヱ」ト口には言へど、心の底には、其の人の俤眼前に絶えぬ思ひは、過ぎ去りし夫と定めし啓次郎に似たるも迷ひか、それよりは十層倍の好男と思ひそめたる身の上も、下節と撫でし黒髪を落して、今は情ない愛想盡きし首の上、悔めど返らぬ薄命、此の世に出でし甲斐もなき、因果な事と此の程は、くよ〳〵愚癡を繰り返す。折しも我より歳上なる、縁者の娘が花見にとて、今日立寄りし花た姿、流行小袖の色好み、他視も花の盛りぞと賞めそやすのを聞きしにつけ、此の身もなま中世を捨てず、元の姿であるならば、何あの嬢などに負けなんやと、思ひもせしが然ありとも、自惚ならぬ天然の、美人にあれば髪なくとも、心を惱まし彼是と、言ひ寄りし男も少なからず。されば、お時が種々と、打解け語る艶言に、菩提の道は何處やら、忘れて除けし春心、溜息を

叶くばかりなり。とき「ネエお八重さん、貴嬢は何と思召しますか存じませんが、母人樣への御孝行に、モウ〳〵過ぎた事なれば捨ててお仕舞ひ被成いまして、何卒今一度世間へお出で遊ばす樣には出來ませんか、後生願ひも義理立ても、母御樣の御心を安堵させ申してこそ、神佛のお心にも叶ひさうな事でございます。まだ同牀もせぬ人へ、貞女の道の操のと、古風な堅い事を仰しやつても、未來とやらから啓さんが、お嬉しいお返事か、お禮の沙汰がございましたか。寔にヤ、緣の下の力持とやらでございますよ。夫れよりか世間には善人も好男がございますから、何れでも貴嬢の御氣に入つた人を選りとつて、御緣をお結び被成つて御覽じまし、御母さん初めお兄上さんも、御親類も御一同に、御安心被成る事、何卒お心をお直し遊ばして、然う被成つて下さいましよ。左樣遊ばすと私も何樣にか肩身廣く、花見や芝居の御供なんどして歩行きたうございますよ」ト、モ、お前樣の然う有つてお呉れでも、この何樣も先刻此宅へお寄りのお賤さんの樣に仕度しくはなられないわ、をしいネ」ト言ひかけしが後を言はず無言つて居る。とき「オヤ〳〵貴嬢もまアお氣の弱いも程がございますネ、ナニア、お賤さんが、何樣にしてお化粧を被成つて、他樣飾してお歩行きなさつたとて、貴嬢が今でも島田にお髮を遊ばして、お振袖をお召しなか、夫れでなければ何でも花美な、衣類をお召し遊ばして御覽なさい、お賤樣が及びもない事でございますよ。第一貴嬢はお賤さんより、お顏から一切もお下ではございませんか、實

正に貴孃がこれから、お娘御さまのおすがたにおなりなさいますと、たれこそ戀煩ひをする男だの色狂氣になる男だの、人死だのと大騒ぎでございませう。」尼「ホヽヽ、そんな馬鹿をお言ひでないヨ、誰人が私の様な者に構ひ人があるものかネ。」ミき「イヽエそんなに卑下なさるには及びませぬ。今でも貴孃を戀慕ッて居る人が、幾人あるか知れやァ致しませんわ。それは左様と、只今貴孃が何か言ひかけて、お止めなさいましたが、何だか後を仰しやいましたネ。」尼「ナニ何でもないヨ、只ネ何様しても私は縁付く様な事は思ひ切ッて居るヨ。」トいふをお時は倩と、聴いて考へ居たりしが、彼の南畑の旅の事、夢と現の前後の事、何様やら其の時お八重の心に慕はしくもなりし處、尼の事故詮方なく、其の身を恥ぢて言ひ出さず、過ぎたりしあとに今も猶、其の人ならではと思ひ詰めて、いよ／＼世の中をはかなく悟る心底ならんと推量したるの氣、ミき「アノゥ私が考へ付きました事がございますがネ、貴孃のお心は私の考へ付いたことに相違ないと存じて申しますから、必ず／＼私にお隱し被成いますナヱ。」やへ「ナニ幼年時分からして、側に居てお呉れのお前だから隱しは爲ないヨ、何だかャア言つて試てお呉れな。」ミき「ホヽヽ、何様もお隱しなさりさうな事だこと。」やへ「ホヽヽ、何だかお言ひなネヱ。」ミき「然うなら申しませうがネ、アノウ河越でお逢ひなさつた親川のお方なら、御夫婦におなりなさる氣がございませうネ。」ト言はれてお八重は悔りし、顔赤らめしが紛らして、やへ「オヤマア思ひも

つかない、何様してそんな事が、思ッたとても及ばない願ひだわネ」と言ば、「エ夫れは貴嬢のお心一ッで、及ばないとあきらめて、迚も世の中へたちかへッて男を持つならば、其の節の若旦那ならば、元の姿の花も飾らうが、然も出来難い事だから、一生涯男は持つまい、やつぱり尼になつた容形で居ようと、思召してでございませう」ト星をさしたるお時が詞に、お八重はいとゞ恥かしく、思へどさすがに隠しかねて、心の底を語らひける。

是れよりお八重の物語は、猶永ければ次の巻を看るべし。

辰巳清談 梅之春巻之七 終

辰巳清談 梅之春卷之八

第十五回

夢の浮世に見る夢の、思ひがけなき正夢あれば、偏屈なる悟り顔も亦人情に疎しといはんか、爰に觀川とかいへる町に、大黒屋幅右衛門といふ酒問屋あり。主人は三十七八歳にて、俳名を嘉兆と呼び萬事に行屆いたる通人なりしが、一個の男子ありて幅之助といひ、今年は年齢十八歳なれども、生得病身の為か、世の常の子供より容形も小さく、殊に物やはらかな氣性にて、顔かたちは些とやさし過ぎる風俗、色白にて眼すゞやかに、口元かはゆらしく、若衆で居れども、娘の子なるべしと思はぬ者はなかりしが、此のほど何やら氣病にて、頭に角髷ぐ風情ゆゑ、家の血脈の一人子なれば、兩親の案じ大かたならず、かねて出入のお醫者に懸らせ、久しく藥を用ゐれども、一向に驗もなく、日に増し元氣は減じつゝ痩せて、漸々に色青ざめ、いと覺束なき大病となりしかば、家内の驚きはいふも更なり。親類緣者出店の人々、毎日に見舞ひ音信れて、彼處の醫者此處の療治と、種々に相談し、彼是と心を盡せども、更に其の甲斐あらざれば、如何なさんと評議しけるが、其の頃武州松山に、寄田稲荷

大明神と申し奉るは、靈驗利生あらたにて、祈る處の願ひ成就せずといふ事なし、殊に別當何某は神德を盛んならしめんと、大志願をおこし、日護摩の修業怠らず、講中の息災延命を祈られしが、大黑屋の親類礫川なる伊勢屋吉右衛門といふ者來りて、福右衛門にその御利生を物語りければ、福右衛門は信心を發し、倅福之助の病氣全快を祈り奉らんと、代參を立て護摩修行の願はなしが、其の代參の者歸り途にて、旅の出家に出合ひ、それより路連となり、不圖福之助の病氣の事、赤松山なる箭弓稻荷へ病氣全快の願掛に參りし事を話しければ、彼の旅僧は歩行きながら指を折りて、占卜を考へる體なりしが、代參の男にむかひ、旅「モシこりやァむづかしい病氣だねえ。」代「ヘエ左樣でございます、先づ勞症の樣な樣子で、兎角に氣が鬱情ぐと申しますから。」旅「イヤノ是れは然うではござらぬ、全くこれは邪祟がして居るので、中々藥ばかりでは治る日はないから、その邪祟を鎭める樣に被成るが宜い。」代「ヘエ夫れぢや、お加持でもして貰ひますのでございますか。」旅「[illegible]く加持祈禱をしても、雙方の心のはれる樣にして進ぜられないければ、此の病氣は治らないて」代「ハテそれは些と解らない事でございます、邪祟があると仰しやるかと思へば、雙方の念のはれる樣にしろと仰しやるのは、何樣いふ理由でございますか。」旅「成程夫れは解らないはずおやが、煩つてゐる當人には知れて居る事だテ。しかし恥かしがつて、他人にははなすまいから、誰に心置きのないのに、

内々言付けて、當人の胸に思つて居る事を聞かせるが宜い。又近頃見た正夢か、凡夫の料簡に醉はないに依つて、ます／＼迷つて病氣にもなつたのだ。先方も氣病にして居る念が自然と通じた因縁事、なか／＼一通りの病人でないから、何れ家内へ歸つたらば、兩親に言ひ聞かせて、先づ病人をば東の方の閑清な所へ養生に遣つて置くが能い。左樣すれば當人の迷つて居る念も屆き、的然の存念も遂げる樣になる道理があつて、夫れから緣を引いて家内和順の嫁も貰ふ樣になる事が出來る。しかし此俗が言ふことを疑つて、家内にばかり病人を置いては行かぬ。これも箭弓の御社の御告げだと心得て、かならず麁畧に思はつしやるナ、後々思ひあたる事が有らうから。代「ヘイ／＼、これは有りがたうございます。貴僧はこれから何地へお出で被成いますか、相成りませうならば、私の親方の住所の親川へお立寄り下さいまして、右のお話を委しく主人に御聽かせ被下います樣に。僧「イヤ／＼夫れには及ばない事サ、唯當人に言ふには、夢に見た尼の事も、娘の事も、前世の約束事だから遠慮をするに及ばず、恥かしいと世間を氣がねせず、他の願ひも叶へる樣にと言聞かせるが第一ぢや。代「イヤ私は是れから其の事に付いて、隅田の三圍まで行かねばならぬから、貴樣と別れ申さう。ト言ふかと思へば、忽ちに板橋の宿の東の端より田圃道へ曲ると、直に旅僧の形は消えて影も見えず。箭弓參りの大黒屋の手代と岡への鳶の者は、互に顏を見合はせしが、凡人ならぬ旅僧の告げし詞は、是れ偏に松山

さまの御告げならんと心付いては勿體なく、亦氣味わるくもなりしゆゑ、遙かに河越の方を伏拜み、路を急いで觀川の家に立歸り、福右衞門夫婦に萬端委しく語りければ、倩と途中の事、旅僧の旨趣を考へ、まつたく箭弓稻荷の御利生の御告げに相違なしと、尊み愼んで、彼の旅僧の言ひたる如く、福之助をば婦多川の、千葉といふ所へ別莊をしつらひ、女、男三人程を付けて病氣の保養をなさせんとはかられ、其のもよりにて心利きたる人を選みしが、幸ひ嘉兆のひいきにする米太夫を思ひ付きしかば、此の度の事を巨細に語りて、萬事米太夫に任せ頼み置き、嘉兆の內儀お鹽といふ福之助の實の母は、日每の樣に通ひて看病し、醫師も一人までかゝり居る。同前に見舞ひ療養おろそかならざりけるが、ある時米太夫は福之助の氣を慰めんと來りて、床の側に種々と浮世ばなしなどして、氣をはらさせ居たりしが、今日は例よりも病のなやみなき樣なれば、折よしと思ひ、米「トキニモシ若旦那、お前さんやァお心の中に、物を考へてお在で被成つて、夫れが御病氣の始まりぢやァございませんか。そして亦その事を夢に御覽じて、かれ是れと苦勞に被成ると聞きましたが、慥かに然うでございませうネ」ト言はれて福之助は愕りし、福「エヽ、思つて居る事を夢に見たとえ、何樣してそれをお前が知つて居るのだらうえ、今まで私が誰にも話して聞かせた覺えはなし、亦夢に見た理由は當人の此身にさへも解らない事だから他人に話の仕樣もない事だが、寔に奇妙だノゥ」米「何樣も不思議でござい

ませうネ、だれだから萬事私に打明けて被仰いましナ。當時古風に戀煩ひでもございますまいが、何かお氣に被成る事がありませう。何でもお隱し被成らないで、お話し被成えまし。憚りながら米太夫が身に引請けて、どんな事でも働きますぜ。亦お前さんの事だから、傾城や娘の事ならば、向うで氣を揉まうといふ男振でお在で被成るし、金銀に御不自由な事は夢に御覽じる事もあるまいし、何でも氣やみに被成る樣な理はないはずでございますぜ。是非今日は思召しの有る事を、私に明して下さいまし。」ト實意をもつて、米太夫が只管に說きつくれば、福之助は起直りて、「福」それほどお前が深切に言つて吳れるのを、隱して居るも惡いから、過去つた事のはなしと、近頃見た夢の事を話さうから、必ず笑つて吳んなさんな。」「米」ナニ何樣致して、お聞き申す程で笑ひますなんぞといふ不實な事がありますものか。何卒委しく被仰つて下さいまし。」「福」そんならば話さうか、馬鹿〳〵しく永い事だから、退屈をするだらう。」「米」ナニ〳〵長い續きものが流行りますから、成たけ長く十編までも、續く方が宜うございます。」「福」ソレ其樣に雜言すから否だ。」「米」イエ〳〵これは不調法眞平〳〵、サア老實に聽聞致します、ひとへにお願ひ頼み上げます。」「福」コレサ勿體ない富士講の事なんぞを、洒落に言つちやア惡いわな。」「米」ハイ〳〵然うならば、モウ〳〵正然とつゝしんで承ります。」ト、いへば福之助は少しく笑ひ顏の元氣も出て、過ぎにし事を語り聞かせる、そのおもむきは物語に話させかた

きすがなれば、在りける儘を書き綴りて、鶴之助の詞にかへたり。

かついふ、そも／＼此の物語は、二編より以前に記き著すべき段なるを、こゝに至りて書きつれば、兒女子達は讀みわけがたくも思召す事ならんか、初編より追ひ／＼に讀み出す卷を繰り返し、てらし合はせて見給はれば、解らぬ事の多くあり。本作者の筆癖にて、當時の人情に當る所は、いつも夢か芝居の旨趣に綴りて、本文の助けとせり。抑此の人情本といふ草紙の一流をおこし、爲永物と御評判御ひいき蒙りしより以來二十年、毎春新板發行書肆々々に數百部なれば、やゝともするときは八文字屋の古きが種にほじくなり、淨瑠璃本の趣向を借りたくなり、歌舞伎の正本を用ゐたくなる事あれど、人情一家の風調を改めず、只々今の世の中にありさうなる事を綴りいださんとすれば、古きを捨てて新しきにうつる事なし難く、止む事を得ずして、聞事に夢てふものゝ補ひとせり。看官作者の拙きを咎め給ふなと願ふものなり。

第十六回

再說鶴之助は米太夫に、事巨細に夢の旨趣を語りければ、米太夫は不審しくは思ひながらも、鶴之助に打向ひて、「ハテ不思議な事でございますネ。しかしながら其樣にお思ひなさつても、今が師

時といふ譯にやァ行きますめえが、時節さへお待ちなせえますと、夫りやァ譯はございません。夢といふものは、五臓の疲れとか申しますから、兎角不快がわるいと存るもんでございます。それだに夫ればつかりくよ／＼と思つてお在でなせえますと行けませんヨ。ナァニ婦はそればかりぢやァございません、廣大世界でございますもの、それに似た婦人も幾等もあります。私が見付けたらば藝者だらうが處女だらうが、早速お世話を致しますから、マァノ丶氣永に被成えましョ。ト迷ふ心を鎭めしは、通か不通か知らねども、有繁蕗兆の氣に入りとはいはねどしれて眞成なり。福之助も始終を聞いて居たりしが、いと信切なる言葉を悦びて、「然う深切にいつて呉れるから、何でもお前に任せるからどうぞ野暮な者だと笑つて呉んなさんな。是れも深い因縁か因果だらうヨ。雄子らしくもねえと自分ぢやァ思つても、何だか氣にかゝつて忘れられねえ。「なんのお前さん、そんな事を思つて宜いものかねえ。夫りやァお前さんばかりぢやァねえ、世間にある習ひだから、若輩時にやァ誰しもあたりめへでございますのサ。夫れだから淨瑠璃の文句にも「如何さま是れは然もあらん、景清ほどの勇士なれども、更に色情は思案の外トあるぢやァございませんか。あれ程強い勇士でさへも、婦女に心を惱ましたぢやァございませんか。昔でさへ然うでございますものを、當世は猶のこと誰も笑ふ樣な無意氣者がありますものか。ト種々と心を慰めければ、福之助も莞爾わらひを含みながら、「夫そう

に故事來歴を引出したノウ、今ぢやァ時代物は流行らねえぞ。」米「それ御覧被成え芝居や狂言でさへ古めかしい物はすたつたぢやァございませぬか。夫れにお前様は亦河越のお寺參りにお出で被成つた時、途中の辻堂の前で顔を見合はして、夫れからお寺のお墓の前で再度顔を見合はせて知己の樣になつて、そして一夜同じ旅宿の家へ止宿り合はして、其の前の晩に夢にも見た尼と娘が戀しいとは、餘り古風な物語にもなさゝうな事で、珍らしいと申し度いが、芝居の狂言になんぞすると、些とも見物には解りませんぜ、私が此樣にお聞き申しても、夢の所と夢でない所と同じ話が續くから、即時考へましても、何處が夢で、何處が眼前に在つた場所だか、まぎらはしい樣でございますハ、、、、」ト笑ふ處へ、侍女の蔦といふ十五六歳の娘茶を煮花にして持來り、愛想なふくみ茶をさし出して勝手へ立ち行くに　モシ餘程可愛らしい娘でございますネ、私はモウ色氣を捨てて、此の頃は桑門の樣になつて居りますから、女はいつかう眼に付きませんが、此方の下女はよつぽど宜い婦でございますに、大方旦那のお氣に入りでございませう。」當「イヤこれは御挨拶、お前の御意にいつたら媒妁を仕ようかネ。」米「イヤそれは寔にもつて有りがたいが、しかし不釣合でございますから、先づお断り申して、面でも冠つて參つた時に致しませう。此の面で情男になると、敵役の樣で看官にわるく言はれますから。」當「看官ァわるくいつても、婦さへ得心なら能いぢやァないか。」米「しかし女で承知す

ればいいが、ものとむつかしい相談だのう」米「イヽヘヽヽそれは情ない御挨拶だねヱ、最う少し能く生まれたら、こんな事はあるまいものを、なぞと言つて氣がもめやすのさ。時に旦那これは然うと私は此暇乞に致しませう。」藤「大ぞう急ぐぜ、是から直に妾宅といふ洒落かね」米「イヽエ最う情男も閙がしいものでござえます、女せへ見れば狂氣の様になつて口をかけて見ますが、兎角首尾よく参りませんハヽヽ、あんまり長話に遅くなりました」トいひながら、煙草入や煙管を仕舞ひ、暇乞ひして立歸る。

古今和歌集に在原の業平朝臣の戀歌に、「見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠めくらさん」と讀だけれ、思ひ焦れし甲斐に、はれぬ月日の武藏鐙、かけて誓ひし神佛、其の御利益かあるならば、末は夫婦となりおほせ、中睦う添ふが樂しみと、一途にこがれしこゝなりける。米之助はさまで／＼と、米太夫に慰められけれど晴れぬ心の夕月夜、雲間を漏れて縁先へ、映る風情は木ならならで、思ふ男かと徒思ひ、増る直夢幾あやらで、戀と色との二筋に、迷ひし故か、煩惱の闇に今はかまれて、解くも解かれぬ蔦かづら、すがりて松の甲斐あらば、今ひと度の面影が、移る様なる水鏡、ひかるる木の間の月影が、さして差しこむ胸の疾、是れも惑ひのひとつから、發る事こそわびしけれ。「モシ旦那さんエ、何を其様にふさいでお在で被成いますのでございますエ、些とは御保養なさい

ませんよ、貴君の御不快がなほ[illegible]悪く[illegible]ますと、いけませんヨ。早く[illegible]お成なすつて下さいましと、向

島だの観音さまだのへ、私が御供[illegible]参りますから、何卒お早くお[illegible]なさる様に、

神さまや仏さまを朝夕拝んで居ります」[illegible]お前も諸共心配して呉れるのは、寔に忝いけ

れど、何だか此身の病気は、[illegible]今日は[illegible]気色が能い

から、明日にでも[illegible]能くなるだらう」[illegible]左様仰れば[illegible]御気色が宜しい[illegible]でご

ざいますネ。それに今晩はお月様が[illegible]と致しまして、午刻よりもあかるうございます。アノお

池の[illegible]能い時は、[illegible]でございますね[illegible]月に

かしい[illegible]、今夜は月の[illegible]るがいいヨ、併し情人でも供つて居やアしねえか」

[illegible]、私はそんな事は存じませんヨ。貴君の[illegible]事でご

ざいますかエ。」ト聞いて[illegible]

[illegible]事もあるわし[illegible]美麗しい青くと、當世捨て[illegible]野暮[illegible]れ

かえ、マア少許した處が[illegible]人には[illegible]合ひだ[illegible]

[illegible]餘り羨ましいから、[illegible]いて見たのサ、些と此身も、お前の[illegible]何と

思つて呉れる氣はないかネ。」[illegible]「オヤく[illegible]私風情が勿體ない。[illegible]貴君には、[illegible]

てお在でなさる情女がございますぢやアありませんかヱ、だれにそんな憎らしい事を被仰ると情人さんに言告けますヨ。」トいはれてさすがに福之助は、まだ縁をも結ばねど、宿世の因みあればこそ、夢てふものも頼みとし、米太夫にさへうち明けて、笑はれ種をかたりしものが、縱令その人戀しとて、今側近く介抱人に、頼みしお蔦に戯れて、言ひては浮薄の不實にて、なるべき願ひも破れぬべし。また然なくともこれまでに、兩女の婦を慕ひながら、その本意遂げずお蔦に言ひより、若し淫奔をするならば、これも大事の他の娘を、疵付けるに當る不屆ごと、心で心を禁めるは、適れ有りがたき若者なりけり。福「ハ、、、戯言を實事にして腹を立ちなさんなヨ　サア／＼最早行つて寐なせえ、夜が更けるヨ。」トいふ折から、月かげは雲にかくれて庭もせの、木の間も暗き朧の空、子の刻の鐘さやかに響き、遙かに按摩の聲總嫁蕎麥の聲、いとゞ寂しく聞ゆめり。そばや「蕎麥ア引　うイ引。あんま「按摩引針引。」鐵棒ガラン／＼／＼。

辰巳情談　梅之春卷之八　終

辰巳清談 梅之春卷之九

第十七回

我が戀は知らぬ山路にあらなくに惑ふ心ぞわびしかりけるとは、實に此の歌のごとく、戀路に迷ふ時にこそ、夢か現の差別さへ、なくて忍べば、鳴かぬ螢の身を焦す、思ひは猶も十寸鏡、移れば變る世の中に、變らぬ物は戀の道、昔も當世も貴きも、賤しき者も別ちなく、互に忍ぶ文字摺りの、亂れる心亂穗の、招く芒にあらねども、振向く笑顏の有情しさは、いとゞ增りて手弱女の、姿をゆかしく思ふなるべし。爰に巳八と七三郎は、お柳の事や何やかや、語るも互に睦ましく、惚れつ惚れにし中なれば、斯くもあらんと思はれたり。巳八は七三郎の傍へ寄りて、巳「アノネお柳さんの事は、どう仕たら宜からうかネエ。」七「然うョ此身も誠に困つて居るが、隱して何處へか當分の中、置いてやらずばなるめえョ、如斯に姉上が來て賴むから、今更突別しても遣られも仕めえぢやアねえか。」巳「ほんにネエ、粂吉さんもどんなに困つて居なさるだらう、度々私にたのみ被成るからネエ、まさか捨てゝも置けないョ、何卒四方八方が治まる樣に、早く仕てあげたいネエ。」七「どうも然う早くは行かねえわ

す、自然と相談が仕なくちやァいけねえノサ。夫れはさうと最早何時だらう。今日早く起きたせゐか日が永いやうだノサ、未だ日暮にやァ餘程間があるかナァ。」玉「何故其様に日が暮れるのをお待ちだヱ。おほかた情婦でも晩に来るのかえ、それぢやァ追出されないうちに、私は何處へでも行つて仕舞ひますヨ、お前さんの傍をはなれちやァ、私は生きて居る氣はさら／＼ないから、淵川へでも身をなげて死んで仕舞ひますから、何卒可愛相だと思つて、香花でも手向けてお呉ん被成いましョ」と涙を袖にて拭ひつゝ、さめ／＼と泣きければ、七三郎は玉八にむかひ、七「何だどうか仕たかヱ、死ぬの生きるのと誰と死ぬんだエ、おほかた外に情男でも出来たんだらう、夫れだから種々の事をいつて、愛相をつかさして、此身と縁を切る氣かネ」玉「ナゼサ／＼ソゥ何をお言ひ被成るんだエ、私がゆめにも思ひも仕ない事をネ。さういふ譯ぢやァありませんヨ、お前様の心を引いて見たんだヨ、堪忍しておくんなさいヨ、ネ／＼これからは、決してそんな事は言はないからヨ」七「コレサ其様に正氣になつて騒ぐ事はねへわな、此身が方でも、不安心だから氣をひいたのサ、婦といふものは、いくら正直いと言つたつても、毎日／＼傍にばつかりも居ねえからの事サ。」トいはれて些し心も鎮まりて、完爾と笑ひを含みて、玉「私やァ何様に氣が揉めたか知れないヨ、アノお柳さんとでも、どうか仕被成つたんだと思つたわネヱ。急地にお前様が其様事をおいひ被成つたからネ、これ御覧な胸がどき／＼するヨ。

七「エヽどうか仕被成つたとは聞き難いぜ、何をどう仕たんだエ。」五「アレサお前様も言葉咎めをお仕だネエ、ついそれは私がいひそくなつたのだヨ、堪忍してお呉れなネ。」七「エヽ餘程むしがいいなア此身が方に些とでも誤りがあると、目くじらをたつて置いて、自分の事は卿斯通りだア、時に胸の動悸は卿何だエ。」五「モウ／＼私にやアわからないヨ、何だか種々な事をおいひだネ、最う先刻に能くなつたわネエ。」ト自分にて胸へ手を入れて見て、覚悟をひを催しつゝ、五「オヤ／＼未だ其處が動くヨ、七さん少許御覧なさいなネ。」七「へ、エ此身が看たつて能くもならねエノサ、誰ぞ情男に直して貰ひなせえ。」五「實がないネ、チヨイとお前様でなくつちやア、早く直りは仕ませんわネ。」ト互に嘻ましく笑ふ折しも、近所の者と被察て障子の外より、覗ひながら出し抜けに、五「不義者見付けた、其處動くな。」五「オヤ／＼悪る偽たヨ、誰だと思つたら吉どんか、いやな聲色だネ」吉「アヽ餘り急いだから出來損つたノサ、聲色にやア餘程骨折つたもんだが、年を重つたら歯が抜けたせゐかひどく悪かつたア」五「まア未だ歯の抜ける處ぢやアあるまいヨ、若い癖に。」吉「イヤモウ有り難い壹升買はうかネエ」五「アヽ、壹升でも二升でもお買ひヨ、正實だから」吉「夫れアさうとちつと用があつて参りやしたが、姐さんが愛想が能いからとりふと忘れたア。」五「何だエ正實に用があるのかネ。」吉「左樣旦那樣が然う被仰つたが、何卒浦元の稽古本を借してお呉んなさいまし。」吉「ほん／＼肝心の御用はいつでも後

廻しだネエ。他の人だと否だけれども、お前の事だから貸して上げるヨ」ト清元の本を取つて遣ると手にとり戴いて、吉「アヽ有り難やかたじけなや、是れさへあれば我が願ひも成就」 土「ホヽ、お止しッ、聞くにどんなに骨が折れるか知れないヨ」 吉「然うかえ、そんなら歸りやせうヨ、ハイ左樣ならば」 土「マア最うお歸りかえ、早い仕舞だネホヽ、、」 吉「歸るといふと大層に御機嫌だァ」 土「ホヽヽヽ憎いくらゐだヨ」 吉「これぞ則ち親ゆづりサ」トいひながら出で行く。七三郎は先刻より此の事を聞いて居たりしが、可笑しさに莞爾して玉八と顏見合はせ、七「ハヽヽ、何だかつまらねえ用だナア、彼奴のお蔭で惜しい處を幕にして仕舞つたナ」 玉「ほんに能い氣なもんでありますネ、人の心もしらないで戯言ばつかり言つてからに、私なんぞはどうか如斯氣に終日なりたいもんだネ」 七「何時でも如斯氣ぢやァねえかえ、人にばつかり氣を揉ませて、自分ぢやァ情人のことやなんぞを思つて居るもんだから、仕る事為す事が手に付かねえヤァ」 玉「アヽ、正實にお前樣の樣な情男があるとネ、氣がもめて〳〵命も心も短く成る樣でいけないネ」 七「道理で無闇に贅つと思つたら、その此方は御斷りかネ」 玉「アレサ左樣ぢやァ御ざいませんヨ。お前樣が浮氣だからネ、他にでも情人が出來たらうと思つて案じるのだわネ」 七「ハヽヽ、口と腹とは大違ひだらう、當世はそんな事が流行るから」ト話の折しも前向うの二階にて、「後に尾上は伊太八が、顏つく〴〵と打詠め、私と云ふ者ないならば

ば、かうした身にはなられんすまい、親御さんの御勘氣も、皆私がしわざぞや、あひ初めてより一日も、烏のなかぬ日はあれど、お顔を見ぬ日はないわいなウ、しげ〳〵あへばおやどのしゆび、合悪しきは胸にしりながら、すいたが因果つかのまも、そばゝ離るゝがいやまして、朝のかへりもまだはやい、もういッぷくとだきしめし、其のことのはがいつゞけと、ながゐりしの為におまへの身、あだとなりゆくかなしやな、許して下んせ八幡と、手を合はせ伏しながら、思はずわつと泣き出す。」ニオヤ氣障だヨ、なんだか私が身のうへの様で、悲しくなつておもはず涙が溢れるやうだネヱ」＊「お前が尾上とかこ」＊「主藤の自惚だネ、それだが遠にも思斯直實のある情に、蕪べてお笑れたから嬉しいヨ、何う卒彼様に七さんも私が澤山可愛がつて、かたいにす浮氣なこともなしに、氣を揉ましておくれでないヨ。」＊「オツト夫れは此身のなでいふ事だアっ浮氣な傾城商売だから、世間にいくらも好いた男があるもんだから、ひよんな事でもして、此身の面を汚穢さねえ様にして呉れるがいいのすっ」ト互に顔を眺めつゝ、内輪も口説も脇餅も、惚れた中とて仮初に、可愛さまさる嬉しさか、積り〳〵て沖の石、人こそしらね乾く間も、身をしる雨の涙々と、泣くも涙のむら時雨、時ならなくに沾然と濡れにぞぬれし濃いなかは、濱の眞砂の數々や、掛き蓑の雨毛に、墨き世の中とこそ知られけり。當下丹次郎は家の事も案じられ、それに付きては種々と相談もありけれど、抱への身なれば氣もいたいたしく、兎に角安堵

たらざれば、否やでん左右なんと思ひしか、先づ七三郎重八にも語らうての上にてと、心をこたゞ此の家へ来りて、門の障子を開けて、「ハイ御免被成いましヨ」ト此の声を聞き付けて、重八は粂吉と察しければ、「オヤ粂吉さんかへ、サア〳〵お上り被成いヨ」これはよくおいでなさいましたネ、粂吉は種々と過ぎにし事の譚陳べて、火鉢の側へ坐りて笑みを含みながら、気の毒さうに七三郎に向ひ、「モシ〳〵七さんエ、お前が事に付きては、誠に心配かけましてありがたうございますヨ、何卒能いやうにお頼ひ申しますト「モシなあに其様に案じ被成る事はねえわネ、人の世話ァ他が仕なくつちやアする者がねえわネ、なんでも此身に任して置きなさるがいゝ」「ハイ〳〵ほんニ御深切に被仰つて下さいますわ、おほかた深い因縁で有りませうかネエ、彼の通り錦は律義ばかりで益にたちませぬから、お前様ばかりが便りで有りますヨ」トことばすげなく勝手をいふも、嬢女の心あはれに思はれけり

第十八回

卯蔵也若松の凄九郎は、寺島の正作が許へゆきて尋ぬれども、お梅の行方一向に知れざるゆゑ、是非とも七三郎が方か、妹の粂吉の所街にて、隠し置くにちがひあるまじと推量しければ、再度婦多川の方へ赴りて、その動静をうかゞひゐたりけるが、七三郎の方にては、油断ならずと思ふに依つて、

和歌町の家にお柳をおかす。園庄の四ツ目といふ所に、心やすき者ありて、其の家はしかも田畑の人りましりたる、百姓の家の間にて、餘り人の往來せぬ所なれば、世を忍ぶに便りよしと心付きて、當分はお柳をあづけおき、其の間に鬼若松の方の掛合ひもかたづけんと、隠して頼み預けしを、讒九郎は露かも氣が付かず、四五日和歌町のあたりをうろつき、餘り尋ねあぐんで、五日目の夕方、五ツ目の友達の方へ行かんと何心なく、四ツ目の田圃を通る折しも、お柳はかくと知らずして、近所の家の搗風呂へはひりに行き、かへり路の眞中にて、讒九郎と丁度行合ひ、これはと驚くお柳をば、目早く見付ける讒九郎、「ヲヤヲヤお柳さんか、いい所で出合つた、何處してマアこんな所に、うろうろしてるんのだ」ト云はれて、お柳は驚きとぶるき、遁げ出さんとおもへども、一筋道の左右は泥濘、詮方なければ立ちどまり、「ハイ少シ用があつて、此の近所へ來て居ますから、今ぢきまた郭へ歸りますヨ」ト言ひ紛らして行過ぎんとするを、袂は引つとらへ、「マアマアそんな平氣な事をいつて濟むものかか、おらア若松の内おやア大騷ぎだぜ、サアサアすぐに連れて行くぞ」。「マアマア、私やア寶庄の旦那に然う言つて、斷つて此地へ來ましたから、あなたと行かずと宜うございます」「ナニ旦那人殿に頼まれてお前を連れに來たのさ」ト云ひ、「出會かた、しれた事、なに横なする事はねえわノ。サアサア此寺と同道に歸りなせエ。來ねエでも私が□□やうか」と止遍に偕たいか

ら、どうぞ置いてお呉れ、よい時分には私が獨りで歸るからネ、良人にも然う言つてお呉れヨ、お案じでない、姉上の所に居るから、明日にでもなつたら歸るわネ。」しぶ「ナニ其樣に便々として置いて能いものならば、態々尋ねて來やしねえわナ。そんな事をいはずとおれと一所に歩びなせえ。」柳「イヽエたとへだれでも否だものを。」ト落つる涙を袖にて拭ひ、苦しき胸をおさへつゝ、暫時應へもなかりしが、灘九郎は怒氣面にあらはれて、なほ／＼聲をあらゝげ、しぶ「コレサこの柳女は泣く程かへるが否なのか。」柳「アヽ、私は歸ると活きてはゐない。」しぶ「エヽ、この孃は聞譯のねえ、顔に似あはぬしぶとい女だナア、サアきり／＼歩かないか、最早日が暮れらアナ。」トお柳が手を取り無理無體に將いてゆかんとすれば、お柳は聲をもたてず忍びなき、しぶ「エヽ、じれつてえ、性の強い孃だア、否なら踩縛つてでもつれて往かにやアならねえぜ、まだこんな手緩い事をやアねえヨ、きり／＼あるかねえと斷うだぜ。」ト手をひどく握る故、柳「アイタヽヽ、どうぞ堪忍しておくれヨ、往くから。」しぶ「サアそんならあゆびねえナ。」柳「アイヨ。」ト應へはすれど、心はすゝまぬ歸り路を、先へひと足迹方の、事のみ思ひ出されて、往くもゆかれず歸りなば、辛き責にあふならんと、心迷ひて胸も轟き身もわな／＼、落つる涙は八ッ目の、袖にも漏れて轟々と、聞ゆる鐘は利勘寺の、御法の聲と諸共に、諸行無常の響きさへ、五臓六腑にしみわたり、思はず涙潸然と、降りくる雨の音さへも、時にとつては寂寞しく、篠

をつくかと思はれけり。折しも向うの衢道より、あらはれ出でたる駕籠かき共、互にひそ／＼私語きて、點頭きながら立ち並び、かご「モシ旦那樣下直くやりませうがお乘んなさらねえかえ。」ト問ひかけられて僥倖と、獨り笑みつゝ悦びて、しぶ「イヤ駕籠やか、いい處へ來て呉れた、何程でも遣るからやつて下ッし　イヤしかしながら此の通りの依古意地者だから容易の事ぢやアいかねえ、みんな手をかして呉んな。」かご「ハイ／＼」ト手とり足とり駕籠へ入れんとしたれども、聲たてられては面倒と、澁九郎は手拭をとりて、お柳が口へさる轡、泣くにも聲は立てられず、たゞ茫然としたりしが、お柳は駕籠へ打乘せられて、何處へゆくかと思へども、手の縛めを荒繩に、からめられたる苦しさは、たとへていふべき樣もなし。しぶ「イヤ大きに御苦勞々々、誠に氣骨ををらせやアがつた。」トキニ鬼若松へ直に遣つてくんな。」かご「ハイ／＼承知致しました。」トいひつゝ走りて行きけるが、思はぬ道へゆかんと仕たりければ、澁九郎は後方より聲をかけ、しぶ「コイ／＼其方ぢやアねへ、どこへ往くんだア　コレ／＼ヤイ／＼」トいへども聞かず行く故に、漸う追ひつき、駕籠を駐めんと仕たりしが、又も出でたる二個の倅兒、聲をもかけず澁九郎が、襟首摑んでなげ出し、何方へなるか逃げさりける。澁九郎は暫く息をも吐かず悶え苦しみしが、漸う心も付きければ、彼方此方と見廻すに、お柳が往方一向に知れざれば、周章く向うより、近所の者と見えて二個連れ、　△「コレ旨いナ、先刻の婦は餘程美麗

いやさ、どうか我等達も油断のに思はれて見たら嘸嬉しからうなア。」●「ナ、もう恍惚か、其の顔おやア及ばぬ鯉の瀧登り、則り醜い婦が相應だア。」▲「おきやアがれ、己が顔ア何だ乞食を見る様だア、眼は窪んであるし、お負に鼻は低し云分はなしヨ。」●「コウ／＼そんなに悪くいつて呉んなさんな、これでも情人の三四人はあるぜ。其の情人が聞いてみねえ、嘸々なくだらう。」ト遂に寝て居たる犬の尾を踏むゆゑに、キャン／＼／＼。」▲「それみろ、己が情人がなくわハ、、、、」●「こゝまで出て待つてるたんだらう、信實らんだネナ。」▲「さうヨおめへの情人は毛が抜けていけねへノー」●「ナ、たんだネ。」▲「犬の事ツアハ、、、。」●「アハ、、、。」トキニ斯ういふ話があるやす。きのふ我等が國のおさんがおれが事を斯ういひやしたア。」▲「何といひやしたネ。」●「されば、おまへはんは意氣な人だがネ、私は此の間から焦れて居ます、けれどどうも言ひ出し悪いから、今まで無言つて居てゐたけれども、これからは情人になつて可愛がつておくれヨト言やアがるから、ム、よし／＼といつたッけれ、嘸悦つて居るだらう、おらアもう歸るぜ。」▲「正眞か。」●「しれた事サ、何と随分いゝ色事仕だらう。」▲「ヨ、市村か紀伊國やの様だア。」●「イヤコレハ／＼御挨拶。」トはなしの半ばへ、以前の濡九郎は横あひから、▲「サイ／＼何時だネ。」▲「ア、偽り仕たア。」●「盗賊だぜ。」▲「ワア男。」ト走出し逃げんと仕たる故、しぶ「コレサ／＼情ない盗賊ぢやアねえわさ。」●「ア、然うかえ、我等また盗

賊だとおもつたァ。」ト兩人胸をさすりて、亼「コウ吉やィ昨夜の今時分だらうかナ。」●「コレ〳〵そんな戯言を言つちやわりいぜ。」亼「それでも俺にやァ知れねえわナ。」トいふ時は、はや雨もやみて、月は雲間を出でけるが、亥刻の鐘ゴン〳〵〳〵ト撞き出しければ、澀九郎は指を折り數へて、しぶ「ム、最う亥刻か、ァ、飛んだめに逢つたァ。」ト呟きながら、痛手を堪へて後方の道へこそ〳〵と、後をも見ずして失せたりける。二個の者は嚮うの方へ往きながら、ドヽ一亼「月は婀娜にて田毎に移る、主の誠はいつ〳〵か。」●「イヤ〳〵まだいいのがありやす。」亼「なんといふのだ。」●「ないたばかりで涙は見えぬ、うはべばかりか時鳥。」亼「なるほどこいつァいい。」トいふ聲も遙かに過ぎて、寂しさいとゞまさりけるが、跡は夜風のそよ〳〵と、草木の音のみ聞えけり。

作者曰く、此の末お柳が話如何とならば、卷を替へて見給ふべし。これより四編は心を轉じ、氣を飜して、作者の胸の機械は、故きが種を新たに直して、目出たき滿尾とするものなり。

辰巳情話 梅之春卷之九 終

辰巳清談 梅之春四編序

なにはづに咲くやこの花冬籠り、今は春べとさく梅は、花の諸木の魁にて、既に花の兄とはいへり。是れこの册子は狂訓亭が、一世の戯墨多かる中に、勝れし丹誠の功を累み、枝を撓め培ひしこと、手に手を盡せしもの故に、樹ぶりのよきはいふも更なり、匂ひも殊に濃やかに、一輪ごとに婀娜と艶なる、色を含みし咲きわけの、まだ若なる少女あり、開き初めたる盛りの花、早すがれたる年増ぐもありて、その情態を穿ちたるは、實に中本のさきがけにて、ほかに儔もあらし山、櫻の花のたよわきより、なほ詠めある梅の春、四編は四月結局の、實をさへこゝに結びとめしは、梓書の本意とやいふべからむ。

應需 積翠道人松亭の北窓に書す

辰巳
清談 梅之春卷之十

第十九回

東安樂寺は、寛平菅原天滿宮の別當信祐といへる人、天神の靈告によつて、延喜執行のとき、公の御邑しを蒙りて、勸請あられし宮居にて、天國の御劔飛梅の若木なれど、疑ふまじき靈寶なりとかや。

因みに曰ふ、世俗童の諺に、天國の劔を拔き放す時は、雷雨烈しく止む事なし。これによつて、鞘より少しも拔き出す事を忌み恐るゝと言傳へたり。是れ天國といふ名を、聞に親める稚に心得、且は天拜山の虚說を、實事とおもふ童蒙の言ひ出したるまでの事にて、笑ふにも足らぬ虚談なれども、幼兒の爲に其の事をいふ。夫れ天國とは刀鍛冶の名にして、神代の物といふにもあらず、神の授けしといふ品にもあらず。抑天國は、人皇四十二代文武天皇の御宇、大寶年間の刀鍛冶にて、大和國宇多郡の住人なり。その弟子に天座といふ上手あり。もつとも天國は、日本刀鍛冶の名人十七人の中の一人なれば、名作ものにはあれども、雷雨の事は取るに足らず。但し今天保十二年

より千百四十年の昔の古物の事なれば、珍重なる鬮にてはありけり。

夫れは扨て置き、天満宮の此処に鎮坐ましますは、二百餘年の事にして、東に知らるゝ名所なり。春より夏にうつる頃は、藤の花房美しく、池のあやめを咲き乱れ、水にうつれば紫の色のさゞ波書くがごとく行路かたしと救への鷽か、登り下りの反橋は、心丸かれ角あるなと、意見し給ふ御利益ぞ、甚せしもの欺境内の、時は粋なる参詣の、中に近頃遠からぬ、住居とはいへ朝夕に、歯度詣でて中門より、百度をあげる一人のみ、朝は江湖上で戸が開けさる暁頃に参詣し、夕がになれば、人の見まわきがたき黄昏に、ならさで参詣るも百日許り、早満願の日なりけん。例より遅き人もなす、百度をあげて御門をたち出で、「とお八重さん甚あ心がせきましたらうネエ。」「ヤア、ヘお前が是非とお言ひだから、無理にお参り申したがネ、夫れでないと百日目の今日になつて、参りそこなふ所であつたヨ。」「さうさ然うでありますネエ、深草の少将さまとやらではございませんが、九十九日目で出来そこなつては悔しうございますわネ、何でも今夜断うして百日目で、一日もかかさずにおまゐりなさいましたから、急度御願が、願ひの通りになるに違ひございませぬヨ。」「ヤア然うだと誠に嬉しいけれども、これまで長い間に、すこしも断うだといふ手がゝりがないから何様もネエ。」「ヱ夫れはお前さんの料簡違ひでございますヨ。實は私が先樣へ参つても、出来る様に致しますけれども、

何と申しますにもお前様のお髪が延びませぬのに、先の若旦那にお逢はせ申すのが否でございますから、其の儘にして置きましてございますが、最早此の節の様では、どんな美男に、お逢ひなさつても恥かしくはございませんヨ。明日あたりは入髪をして、島田に結つて見ませうかネエ。」ヤヘ「ヤレ／＼何様してもまだいけないヨ、入髪をしても、髢をかけても、髷のお根になるやうには届かないものヲ。」ト言ヘ、エ少し油を餘計に付けますと、大概は聞く物でございますヨ。」ヤヘ「オホヽ、何様して、まだお／＼いけないものヲ」ト言ひ急に空が闇くなつて參つた樣でございますネエ」ヤヘ「アヽ、ネエ雨でも降つて來ると困るから、急がうネエ」ト天神橋を打渡り、我が家へ急ぐ河添ひの、田舎町家に商人家の交りし路の向うから、あわたゞしく馳け來る人影、お八重とお時は心おどろき、片脇へ寄り樣子を見れば、驅け來るものは十六七の娘にて、白き素足の裾高く、背後のかたを見かへりながら、息もたゆげに走りつゝ、小石に爪突きて漸う起上り、あたりを見まはし泣きながら、袖を顏にあて行きたゝるを、小かげに伺ふお八重とお時、生得やさしき心から、仔細も知らねど、年ゆかぬ娘の夜道に泣く顏を、見れば哀れに察しやり、囁きながらお時は立出で、言葉をかけんとする折しも、にはかにサア引と降り下る雨、娘は先へも行きかねて、茅家の軒に走入りて、さもかなし氣に空を見あげ、又お八重とお時を見つけ、心に驚く體なりしが、女二人の外に又、人影なければ安堵して、ト言こ

ありましたら雨でございますネエ。」ト言ハイサ急に降出しましたから困りますネエ、お前さんは何處よでお出でのでございますか、日の暮れましたのに只お一人か。」ト聞かれてさすが娘氣に、當惑せしか、隠さずに言ふがましとや思ひけん、「アノウ私は實父の家は寺島でございますが、他所へ止宿りに參つて居りました、其家から近所の風呂へ參つた途中で、怖い目に出合つて、逃げて參つたのでございますヨ。」ト涙ながらに話説しける。

そも此の娘は、お柳なりとは知らせ給ふべき事ながら、彼の澁九郎が途中にて引捕へ、駕籠に乘せし處、路を違へてかつぎ行くゆゑ、澁九郎は是れを咎めける折しも、悪漢らしき者どもが出でて、澁九郎は投倒され、かごもろともに行方なくなりし體は、此の前九之卷に記せし如し。さてお柳は澁九郎に捕へられしは、現なき樣になりて、背後の方を見返れば、多くの狐火飛違へて、其の陰に澁九郎何やら獨言を言ひつゝ、驅けまはる體に見えしかば、夜道の野中怖ろしけれども、捕へられて東若松へ連行かるゝが否なれば、只當もなく逃出し、左ッ目の方より此の所まではせ來り、降出す雨が緣となり、お八重お時に身の上を、尋ね問はるゝ事とはなりぬ。

こま「まア／＼それはおやアお前一人で寺島へお出でては、また何樣いふ難儀が出來るかも知れないヨ、ネエ八重さん左樣ではございませんか。」やへ「アヽ、ネエ、何樣して此のお娘御ばかり、そんな遠い所

まで怖くつて行かれるものかネ、この孃子さへ否でなくば、ドレ私の家へ連れて行つて、今夜はとめてお上げな。そして明日甚助にでも送らせてお上げな」ト實に温和しく育ちたる、大家の娘の慈悲深く、隔て心のなき事は、あり難き氣質なるべし。同じ心のお時も優しく、時「アノネお前さん私共の所は、このお孃さんと私となか中が一人、甚助どんといふ御飯炊が一人、都合四人限りで他には氣の置かれる者はないから、御遠慮なしにお出でなさい」梅「ハイ有りがたうございますが、お氣の毒でございますから」八「ナニ些とも遠慮をおしでないヨ、袖振合はすも他生の縁とやらでございますから、心配を爲ないでお出でなさいヨ」ト進めるとてもお梅の身は、行先それぞとさだめかね、當難を除れたる途中の事故、願うてもありがたかるべき僥倖、嬉しき譬へあるものもなく、是れまた親の信心する、三圍稻荷の御利益かと、思へば先刻の狐火も、斯かる所へ導きたまふ御恩惠にてありぬらんと、心の中に念じつゝ、梅「左樣ならば何卒お供をして」八「ナニ、氣がねをせずにお出でなさいヨ」トいふ處へ、提灯を手に提げ、傘を脊負ひたる男、前後左右を見廻しながら、來るをはやくも見とめるお時は聲をかけて、時「オイ〳〵、其處へ來たのは甚助さんか、お八重樣は此處にお在でなさるヨ」甚「ハイ〳〵、お傘を持つてまゐりましたれど、最早止みさうになりました」時「ホヽニ小降りになつたネエ、路はわるくはあるまいネエ」甚「ハイ私は素足でございますが、お孃さん

はたしか、東下駄をおはきなさつてお在でなすつたと存じましたから、お傘ばかり持つて参りましたが、路はから〳〵して草履で歩行かれますネ。」やへ「夫れだやァ直に参らうネエ、オヤお前は素足で痛くはないかえ。」りう「イ、エナニ、宜しうございますヨ。」甚「アノお時様の下駄を持つて参りました。」みき「ナニ私はこの駒下駄で能いから、その下駄を此のお娘に貸して上げてお呉れナ。」甚「ハイ〳〵。」とさし出す下駄を、お柳は氣の毒さうに、りう「イエナニ、足がよごれて居りますから、素足の方が宜うございますヨ。」みき「アレサ汚れても能いからおはきなさいヨ。」ト甚助に言付けて、足を拭はせ、無理にはかせて伴ひつゝ、頓て庵へ連れ歸り、情深くもいたはりける。

第二十回

斯くてお柳を七三郎の方より頼まれて、預り居たる家にては、お柳が近所の風呂へ行きて、其の儘歸り來らざるゆゑ、俄に驚き騒ぎて、此處彼處を尋ね探しけれども、一向に行方知れざれば、氣の毒ながらも其の事を、七三郎の方へ言送りしが、其の夜は既に子刻過ぎにもなりしかば、只粂吉の方へ知らせたるのみにて夜を明し、粂吉は其の夜粂本の座敷に出て在りしかば、案じながらもすべき樣あらざれば、是れも同じく夜が明けて、七三郎の方へ來れば、はや玉八も來て居たりしが、玉「オヤお粂

さんかえ、マア大變だネエ、お柳さんは何様したらうネ「イヤモウ寔にモウとんだ事で、お前様や七さんにまで苦勞をかけて、私やアお氣の毒で何様かとおもひますわ、憎らしい嬢でございますヨ」「イヤニサ夫れだからといつて、彼の柳女に咎はないヨ、マア何處へ連れて行かれたらうネエ、若松の方の奴が見付けて連れて行つたのか、夜だから人違男にでも盗行はれは為まいかネ「イヤナニ慥かに藤九郎とかいふ奴に、見付かつたのだヨ」「ハテ何にしてもマア可憐さうだネエ」「イヤ七さんはモウ今日人を頼んで來て、柳女の様子を聞糺しに行くと言つて、誰人様かに行きましたよ」「マア然うでありますか、お氣の毒だネエ」「ナアニ七さんは然う言つて居ますわ、たとへ若松で何とむつかしく言つても、金さへ都合へて遣ると落着くから、何卒其の算段を仕度いものだと、工夫をして居るから、何様か能い様に掛合ふだらうがネ、肝心のお柳さんが居なくツちやア仕様がないネ」ト案じ入りたる折柄に、急いで來る米太夫、門口を入るより早く奥へ通り、ヤアいかに案内の者共慌んで來れ、其若松より討手に向ひたる某は、否身吟三郎張安と名乗る者、お柳といふ美女を此の家にかくまひ置く由、穏かな注進、サア尋常に渡すまいか」「ヤレヤレ米太夫さん、何だネエ聲色所ではないヨ」「ナニネ、なぜノ」「ヱエ何故おやりでないヨ、お柳様は昨夜居なくなつたわエ」「ヱエ、ナニ實正か、嘘だらう」「イエアレサ嘘ぢやアないヨ」「ナニお柳が居ざるによつて、七三郎が人を頼ひに出で行きし事などを

委しく語れば、米「イヤハヤそりやァ行けないのウ、實は柳女の事について、妙な一件が出來たから、實に僥倖な話だとおもつて、驅けて來たが居ないと聞いては落力だ。何卒して此方へとり戻し度いものだノウ。」トいふ所へ七三郎は立歸り、七「イヤ米太夫さんお早う。」米「ハイお早う。」七「アノネ米さんが、能い事があるといつてお出でだが行けないネエ。」七「ナニお座敷なら粂さん、お前もマア行くが宜いわナ。」米「アレサ私だちの事ではないヨ、お柳さんの事でサ。」七「エ米太夫さんが見かけた出でもあるといふ譯かネ。」米「大ありサ、併し肝心の本尊樣の行方が知れないおやァ何にもならねえ、來た。手掛りでもありやすかえ。」七「ナニ一向どうしたのだか、仔細のわからねえのだから困りきりやす。那孃に限つて男をこしらへて逃げるやうな事はノウお玉。」玉「アイ、何樣して那のお幼稚が、そんなはたらきが出來るものかネ、お粂さんの前だが、他の事の格構なのに合はせちやァ、あの道はまだねつからだものを。」米「マア、さつぱり意氣地はありませんヨ。」七「トキニ米さん、柳女の事について宜いはなしとは、マァどんな譯だネ。」米「その僥倖な話といふは、誠に奇々妙々な因縁で、申さば神佛のお引合はせといふ樣な理窟サネ。其處でお前樣方や柳女にも話して、悦んで貰はうと十分思つて來た處で、斷ういふ譯だから、すつかり思入れが違ひやした。先づ其の相談が究れば、鬼若松の方の立會ま、何も世話なしに濟んで、實親の正作さんまでが、浮みあがるといふものサ、と云つて先の

旦那が六十ばかりの隱居爺さんで、柳女を妾にするとか聞ひたいとかいふ相談なら、私も否や角目を利き、ら為ねえけれども、其の旦那といふは、さる大家の息子株で、お柳さんも慥か一度、顔を合はせた事があると云ふ事だが、其の息子さんがおつりきな因縁で、柳女を女房に仕たいといふ譯サ、處でその息子が何様いふ人品だといへば、男振が素敵に美くつてまあ譬へて云うて見ようものなら、田舎源氏の光氏を當風俗に畫たのだから、急度柳女の氣にも入るにやア違へねえ……とはなしの折から、門口より「ヱヽ一寸と物がお聞き申したうございます、此の御近所に七三郎様と被仰るお方はございませんか」七「ハイ七三郎とは私だが、何方からお出でだ」使「ハイ私は當井戸の別莊からお使にまゐりましたが、七三郎さまにお目にかゝりて、此の文箱をお手わたしに為て來いと申付けられました」七「さうかい」、黒塗の文箱をさし出すを、七三郎は手に取って、其の上書を讀み見るに、

七三郎様　　御存より

玉八様まゐる

七「ハテナ、お玉と此身が名前で、御存じよりとは誰だらう……中を御覧ずると……分りませんが、他人に知らさない様に、内々でお願ひ申します。貴君は七三さんに違へございませんか……七……七三郎

は私に相違ないが、何様も龜井戸にはー」使「お心あたりがなくとも、お頼み申しますヽト言ふより早く使の男は、使「ハイ左様なら」ト帰り行く。米「サアノヽ御存じの當人を當てゝ見なさい」七「イヤ米太夫さんの逢ひ者かネエ。」米「イヤ是れは迷惑千萬、何此身が知るものか」七「イヤもしお柳が越したのではありませんかネエ」米「さればサ柳ならば、状箱へ入れて仰山に越しさうもないものだノウ」七「何にしてもマア早く中を開けて御らんなさいナ」米「しからば夫れにて内見あられい、七三郎の外は何れも次へ立去りあされい、ドレノヽ」七「すまぬ、此様に苦労の中で、お洒落でないよ、気楽だネエ」米「たとへ苦労だといつて、此方等が素人のやうに、苦労を表向へ知らせる様ではいけないわネ、何でも悪事を為なければ、世の中に怖ろしい事はないヨ、たとへ少々災難があつても、程なく除れる様になりやす。先づ状箱をあけて御覧じろ、私やア何でも吉事沙汰に違ひないと判じやした」トいふ中に、七三郎は状箱の蓋を開き、中より手紙をいだして見れば、

七三郎様　柳より
御おもし様
お米様

七三郎様　御もとへ　　亀戸村　八重内　時より

七「ヤ米さんのいふのが當つたぜ」米「ハイ、これは知れた事サ、これでも花井観光の弟子で、人相見色一代の吉凶」七「オホヽヽ、またはじまつたネエ、夫なら待乳山へ行つて、観光さんの名代をお勤めナ」米「ハイ大きにお世話」トいふ時七三郎は、二本の手紙を繰りかへし、七「ヤヽこれは有り難え、まア安心だ」米「オヤ／＼然うでございますか」七「二人が連れて行つたので有りますエ」七「ナニ二人でもない、此の手紙の様子では柳女一人で駆出して行く途中から、女の連れが出来て、お八重様とお時さんといふのが、可憐さうだといふ事で、お時さんといふのが介抱して、昨夜は其處へ止宿めて置いて、その宅から今の男を使によこしたのだ」米「ヲヤそれはマア嬉しいネエ、そしてお柳さんは何故預けて置いた家を駆出したのだらうネエ」七「それは柳女の書いて遣した文が委しく分らないが、何でもマア近所の風呂へ行つてかへりに、澁九郎に捕まつた處が、狐火が何様かして助かつた。夫れからお八重さまとお時さまの御蔭にて、昨夜はそのお家に止宿めてお貰ひ申しましたから、御案

どへだされまじく」トしてあるから、先づ別條なしに其處に居ると被察るのサ。」米「それぢやアヽア此上も早く其の家へ往つて、能く禮を言つて、請取つて來るが宜いではないかネ、先刻の話もあるから、私も同伴に行つて上げよう。」トいふに此の座の人々は、互に安堵の顏色になり、悅び言葉に盡きずして、米太たヽと七三郎は、支度を調へ、急いで龜戸へおもむきける。

斯くて龜戸のお八重が庵へ、米太夫が到るに依つて、福之助の願ひも一時に叶ふ、一奇談松山稻荷三圍の利益にひらく梅の春、はや二卷にて實を結ぶものなり。

辰巳清談 梅之春卷之十　終

辰巳清談 梅之春卷之十一

第二十一回

再說七三郎と米太夫は、龜戸村なるお八重が行きて、世話になりたる挨拶を、丁寧に言ひ演べて、お柳にも逢ひ、昨夜よりの事を委しく聞き、思ひがけなき幸ひとなりしを悦び、尙亦お八重とお時が深切に相談して吳れるを、願うたり叶うたりと、思ふゆゑ、米太夫に相談すれば、米太夫は先刻より承知と見えて、米「いづれにしても、御深切にあまえて、お柳さんを此方へお願ひ申して置いて、落著くのは早く仕やせう。それに亦此方のお家の事も、何樣か私に御用がありさうだから。」七「コレサコレサ米さん、餘りそんな不躾なことを、言つては惡いわナ。」とき「イエナニお心置きがなくツて宜うございますョ、ヲホヽヽヽ。」米「エイ私は米太夫でございます、以來何分御ひいきをお願ひ申上げます。」ト何やらせはしく言ひちらし、七三郎を伴ひて、庵を出づる歸り路、七三郎は步行きながら米太夫に向ひ、七「トキニ米太夫さん、お前は何だか彼家の家をこじつけて、輕々しくする樣に思はれたから、袖を引ツぱつて知らせたけれども、お前は平氣で、柳女を彼家へあづけ一ト먼置くつもりにするし、

彼家でも深切に止宿めて置いて遣らうといふから、此身の家内へ連れて歸るよりも、安心だと思つて歸りはするものゝ、些と押しの強い爲方だから、今暇乞ひして出て來るのが、餘程氣の毒でならなんだ」丹「ナァニ少しもその心配にはおよばずサ」丹「ナニそれでも氣の毒らしい樣だノウ」米「なる程此身の心の中を知らないから、然う思ふも尤もだが、少しも氣の毒に思ふ理でなし、實に古今稀代妙不思議といふ事がありやす。此の一件はなか／＼、お前に話しても聞きわけられまいと思ふやうなことがありやす」丹「ハテナ夫れはマァ何樣いふすぢの話だの」米「まア前後畧して話さうがネ、私の出入場の旦那に、嘉兆さんといふお方がありやす。其の若旦那に福さんといふのが有つて、此の節繼續ひで隱居所の方に居なさるが、其の事に付いてお柳さんを世話をして遣らうと思つたのサ、處で今の庵へ行つて看ると、實に悔りしたから、能い鹽梅だと心の中で悦んだのョ」丹「ハテ解らねエ詞だねエ、悔りして心の中の悦びとは思ひがけなく、金でも拾つた樣だノ」丹「ナニノ、かねを拾つたとてもすぐに此身のものにしては濟まない、かへつて邪魔にはなるとも、悦びにはならないのさ」丹「イヤむつかしく詞とがめをするぜ、夫れはマァ何樣でも能いが、内心の悦びといふは、俺室の娘が戀情な目遣ひでもして惚れた樣子に見えたかの」米「イヤ／＼そんな水の向け樣をしたといつても、米太夫が夫れに乘つて自惚れるものか、然うではない律儀に妙な事がありやす」丹「ハヽア左樣か、そ

しても其の理は」米「一體大樣の風俗は」七「花ァにも優る」米「コレサ〳〵、其樣に茶にしては否だよ」七「イヤ、何のお前が前言へ方言口を言ひ出したではないか」米「ナニサ〳〵方言ではない、老舌の事だァナ」七「それだつても、一體そさまの風俗はと言ひ出したおやァないか」米「アイサ左樣だッけかノ、それは此身がわるかつたから堪忍をして異んなさえ、肝心の一件を話すからネ」七「その一件といふは」米「曲尺六尺の事サ」七「ヲヤ〳〵、戯言はもう能いにして、氣の安堵く樣にして異んなせいな」米「おちつく樣には、黒丸子か針治でもして貰ふがいゝが持合はせて居ないから、萬金丹では何樣だらう」七「アレサ酒落てばかり居ては行けねえ、實正に道理をはなして異んなよ」米「それほどに氣にかゝるならば話さうが、何ぞ美味でもふるまふかえ」七「ム、承知々々」米「アイ〳〵、、、頓上でん〳〵かえ」七「コレサ性急な〳〵、地口を言はないとも、早く言つて異んなといへば」米「ハイ〳〵忙しない人だネ、語つて聞かせん能ッく聞け、抑これは松山の豹弓稲荷の神徳にて」七「ヲヤ〳〵否な聲色の素地を聞かせずとも、後生だからお噺咄の一件を」米「アレまア今いふ松山の稲荷樣と、三囲の社の御利益に違ひない事が最初で、此の米太夫が頼まれて居るのだから察しなさんナ」七「ヲヤ〳〵お前にはわかるだらうが、此身には些とも解らねえ」米「ナニサ〳〵解らねえといふ事はない、實正にいつては斯ういふ話だァネ、トヽトヽの米太夫は、大黒屋富屋の息子龜之助が夢に見た、甲と此を抛損てに及ぶ事、

亦松山稲荷へ代參におよびし男が途中にて、旅僧にをしへられし一條、福之助が河越の路の辻堂にて顔見合はせたる尼の美麗しき人相、其の時同じく夢に見たる娘の人相が、お柳に似て在る故に、福之助の方へ縁を結ばせ、戀情を鎭めさせて遣はさうと思ふ心にて、お柳の身の上を尋ねし事を委しく語りければ、七三郎は膽を潰して、七「イヤ、それはマア奇妙不思議とも、何ともいはれない話だのウ。」米「ところが、今夜の庵へ行つて見ると、尼でこそなけれ、近頃髪を生やしたといふ旨趣の庵主の風情人相が、若旦那の好み通りで美しいといふものだから、何様も奇妙な事ではないか。」七「ハヽアそれはめづらしい事だノウ、何卒夫れに違ひなければ能いが、思ひの外庵主では無くつて、御亭主の立派なのが有るといけないノウ。」米「イ、エそれは大丈夫、此身が鑑定に些とも違ひなしサ。」七「然うかノウ、いよいよそれに違ひなければ、何様したものだらう。」米「急度違ひないけれども、正可に直さま言ひ出されも爲ないから、今は何事なく歸つて來たが、是れからその福さんの所へ行つて、此の始末を話して聞かせやす。然うすると若旦那が大願成就といふ心持になつて、氣から出たやまひはたちまち治りやす。其の時になつて取りはからへば、相談が調ふに違ひないが、お柳さんを夫れまで隠して置いては法がかけるから、何でもはやく若松の方へ談じつけて仕まはなければならないテ。」七「さればサ、實親の庄作さんが難儀をするので、粂吉さんも弱つて居るから、何卒その所をはやく治めて

遣り度いものだ」 米「イヤノ\/\、それには能い相談がありやすヨ マァ\/\此の一條は兎も角も、私にまかせて置きなせえ、何れお前の世話深切の甲斐もある樣にはからつて上げやせう」 七「然うだと誠にありがたいネ、私も今更面倒だといつて捨てられはせず、亦彼は如彼な弱な気質だから、彼女の事を案じて泣いてばかり居るのを見ると、可愛さうでならない」 米「ホンニ\/\餘り可憐さうがつちやア惡からうネ 何樣もお前、は婦人に孝行で困るネ」 七「ナニサ然うでもないわネ、親が気質が能いばかりで薄情だから、米吉もお傳も他人を使ふのにて難しいのや、否とも言はれないわネ」 米「イヤ其の言辭にくいノ\/\、他の事を可愛さうだの不便だのといふのは、多くの身の上に付いていふものだぜ、若い婦人が、美麗しい顔に些とばかりの難儀しても、可憐さうがる人が多分あるけれども、六十か七十になる老女がその難儀する事が多分あつても、可憐さうだといふ人は些とばかりもない樣だからいけないぜ」 七「マァ\/\左樣うに此身を悪くいふノサ」 米「ナニサお前の事に限つていふのではないわネ、只人情が然うだといふ事サ」 七「それは何處も昔から然うだがネ、庭訓にも七小町の旨趣を案なせえ」 米「なる程盛衰の事を思ふと、世の中の哀れを知るのが第一だネエ、誰しも自分の容色の能い時には他を賤しめ、自分ばかり尊く\/\とまつて、慈悲も情もない人は、零落れた時に他人が餘計に憎がるネエ」 七「何しろ男と違つて女といふものは何樣しても徳なものだぜ」 米「ナニそれはマァ顔

容が美麗しいと、行状が悪くつても西へ行き東へ巣を替へて、五度も七度も身を立て直す事が出来るけれども、花が散つて見なさえ、ヤレ／＼あれが何屋のお職を勤めた女だとさ、然うぢやァあるまいと見る人が顔をしかめる程、否な老婦人になつて見なさえ、婦人が得だか損だか知れないネー。夫れから小町の歌に、

　俤の變らで年のつもれかしたとへ命に限りあるとも

米「誰でも知つた歌ではあるが、心に留める氣がないから、何年も若盛りのとほりだと思ふのははかないネ」む「アレサそんな心學の様な事をいふと、聞くものが倦いて否がるわネ」米「ヲツト合點、今つから流行におくれちやァならねえ。ハ、、、、、アハ、、、。」

第二十二回

やへ「アノちよいとお時どん」とき「ハイ御用でございますかえ」やへ「ナニネ用といふほどの事ではないがネ、お柳さんは何様したエ」とき「ハイ只今お庭の畑へ、菜を摘みにお出でございます、今日はそゥお三どんが居りませぬから代りをするといつて、何様によくお働きでございませう。寔に甲斐甲斐しいお娘でございますわエ」やへ「オヤ／＼然うかえ、可憐さうに餘り用をしてお貰ひでないヨ。

道理で先刻から私の側にお出でないと思つたわ。」ヨネ「ニヰ、私がお出しなさいと申すのに、今まで働きなれたから、従容としては居られないとお言ひでございますものヲ。」ヤヘ「美麗しくお在でだから、衣裳にも風俗にも構はないでも好意に見えるネエ。」ミヨ「ホンニ然うでございます。貴嬢の首髪を下してお在でのと、柳女子の衣類の麁服のと、同じ事でございますわ。何でもマア貴嬢のお髪を島田に結つて上げ申して、お柳様に貴嬢の以前著したお振袖を著せて看たうございますわ。」ヤヘ「ホヽヽホ、私は髪を結はずとも能いから、お柳さんのお化粧をして、私の振袖がまだとかすにあるから、彼服を著せて御覧な、私が著たよりかも、お柳さんの著た方が能く似合ふだらうと思ふヨ。」ミヨ「イヽエ然うではございませんわネ、貴嬢と競べては、迚てもお柳さんが上に立つ事は出来ませんがネ、不躾ながらお柳さんのお身分がらゐで、お柳さんの様な人品の宜い娘は珍らしいぢやァございませんか夫れで私が、お振袖を著せて看たいと申しましたのでございます。」トいふ處へ腰元男甚助が、甚「ヘイ、お風呂が沸きましてございます。」ヤヘ「オヤ然うかエ、いまにお這入りなさるヨ。」甚「ハイ、それからおやア、米も澤山に搬込んで置きましたから、能いほどにしてお遣ひなさいまし。」私は先刻權仰の仕付の買物に出て参じます。」ヤヘ「アイヨ左様おし、私が承知だから、案じずと行つてお在でな。」甚「ハイハイ」ト言ひながら出で行けば、ヨネ「それおやァ、私は風呂へ這入らうかネエ。」ミヨ「イヽエヤヤお

髪を揃へて上げますから、その後時でお風呂へお這入りなさいまし。」やへ「オヤ〳〵毛がとゞくだらうかネエ。」とき「まだ些とむづかしうございませうけれども、一日も早く島田髷に結つて上げ度うございますもの。」やへ「オホヽヽヽ、然うして居るところへ、母人さんでもお出でなさつたらば、何様せうネエ」とき「イヽエナアニ母御さんが被為入つたとて、うれしがりこそなさいませう、外に何と被仰いますものか、そして去頃御本店へ参つた時、私が貴孃の事を委しく母御さんにお話し申上げて置きましたから。」やへ「オヤ實正にかえ、いやだねえ、何故お前はマアそんな事を母人さんに然う言つてお呉れだ、はづかしいネエ。」とき「なんのマアかまひますものか、御本店ではお母堂さまばかりではございません、お店の若衆でも出入りの職人衆でも、貴孃が然うしていらつしやるのを、餘り惜しい事だ、千人の中に一人とあるまいといふ美麗しい御容貌で在りながら、尼になつてお仕舞ひなさるなんぞとは惜しい樣だ、第一親御樣へ御不孝だ、何卒お氣をお取直しあそばして、世に出る樣になされば能いと、衆人が言ひくらして居りますものヲ、なにを恥かしいと思召す事がございますものか。」トそれよりお時は蓑かけかもじを、何時に調へ置きて取り出し、お八重の髪を島田髷に結ひ上げたる、妹と脊の縁を今日ぞ初元結、命なが掛諸白髪と、野暮な姿にあらずして、あらたに剃りし中ぞりの、色さへ青き新藁を、綾に組みつゝ根に結び、解けて逢瀬の橋渡しも、なさでは置かじとお時が丹誠。」とき「サ

ア、合鏡をあそばして髷の恰好を御覧じまし、自慢を致す樣だが、餘程よく出來ましたから一ト言
はれてお八重は莞爾と、向ふ鏡の影清き、花の笑顔を此の年頃、深山の谷の霧晴間、晴れぬ心に埋れ
木と、なりて久しき我が姿に、春を迎へし思ひにて、照らし合はせる黒髪の、艶潤はしき毛筋まで、
揃うて出來たる嬉しさは、何に譬へん娘氣の、昨日を昔と忘るゝまで、あどなく見ゆるも可愛らし。
やへお時やお前の丹誠で誠に[illegible]とき「お美しくおなんなさいましたらう、[illegible]、其樣に
お可愛らしいお娘御さんにおなり遊ばすお姿を、ヤア賽の河原へ遣り申す樣な事を、進めたお寺の坊
さんが憎らしうございますわ」やへ「そんな事をお言ひでないよ、一旦お寺のお弟子になつて、
法體したものが還俗すると、佛さまの罰が當るといふのに、お寺さまの事を惡く言つては猶惡いよ」
とき「エ、神さまでも佛さまでも、親御さまに叶ひますものか。世の中にお主樣を蔑畧にしたり、親
御を麁末にして佛さまを大事にする人が幾人もございますが、料簡違ひではありませぬか。親類縁者
の困窮するを合力は爲ないで、お寺の普請金を餘計に出して、孝親だとか世話人だとかと、立てられ
るのを嬉しがるのは、名聞を好むので、後生にも功徳にもなりはいたしませぬ。殊に貴孃は母御樣の
御秘藏で、何卒末永く御繁昌をなさる樣に、御幼少い時から[illegible]へ御願がけをあそばして、御報賽
の節なんぞは、笹湯の日まで母御樣に[illegible]なさつて、萬年橋の[illegible]の稲荷さまへ、日參をなさ

いました。其の節は貴孃が御年七歳で、私が十七歳の時でございましたから、能くお覺えでございませうネエ。ト言はれてお八重は眼に涙、心の中に倩と、過ぎ越し方を思ひ出づれば、今やお時の詞には、百層倍の親の恩、成長らせて老いて行く、其の身の便りと爲す頼みに、苦勞苦辛の朝夕に、育てられたる恵みをも、心付かねば發明風俗で、後生願ひの操のと、尼になりぬる不孝の罪、諺に言ふ證文の、出し後れとやらで有るけれど、此身を堪忍して貰うた上は、今までの悟りがましい行ひを改へ、若やぐ娘の風を粧るも、親の氣休めと思案ながらに風呂へ行く。お時はお八重が浴室の方へ行く後背おけを見送りながら、溜息を吐き居たりける。

夫れ佛法の教へにて、一子出家すれば、九族天に生ずと雖も、我が神國の掟には思ひもよらず、人の子としては、成長の後養育の恩報じに、父母を介抱して養はずはあるべからず。昔唐土の老萊子は其の身年老いて猶兩親あり、ある時鏡に向ひて、我が姿の老衰したるを見て思ふやう、かくの如く衰へし此の身を看給ふ兩親の心は奈何ならん、我が子さへも老人となりぬるに、産みたる親の此の身の體はいか許り、老いさらばひて見苦しかるらん、命の程も覺束なしと、嘸悲しくや在すらんと心付きて、髮鬚を黑く染め紅白粉を彩色りつゝ、いと初弱めく衣類を著し、踊り戯れ見せしかば、兩親は嬉し氣に、我が子又若やぎたりとて、嬉び樂しみしとなん。誰か傳ふ是れ則ち二十四孝

の一人なる老萊子が畧傳なり。此の一條を看ても、兒女童男達、其の身をおとなしく榮え暮して、親御達の心を安んじ、孝行の一事とし給へかし。

さてもお八重は湯に入りて、一間に在つて化粧する折から、お柳は野菜をこしらへ、勝手元を片付け居たるを、お時が代りて湯をつかはせ、是れをもすゝめて化粧させ、衣類を出して手傳ひながら、とき「サアお柳さん此のお振袖を著て御覽なはいヨ」りう「オヤ〳〵何樣致しまして、私がそんな、マアお振袖を著られますものか、オホヽヽヽ」とき「ソレサお柳さんそんな事を言はないで著てお見ヨ、急度お似合ひだから。私は其の代りこんな花美なのを著るヨ」ト加茂川染の中形を著て、娘風の大形の帶をやの字に結び、やへ「サア〳〵早くたれをお著ヨ」トお時と二人にて遠慮するお柳の衣類を脱がせ、無理に振袖を著かへさせて、帶を結び、前と後から風俗を取繕ひ、とき「眞に能くお似合ひでございますネエ」やへ「ほんにまアノ、可憐らしいお成りの事は、わたしが前年著た節よりは、はるかに勝つて能いヨ」りう「アレマアあんな事を被仰いますヨ、何樣して私の樣なものが、貴孃の御著用樣にうつりますものか」とき「イヽエノ、お八重さまもお柳さんも、誠にまア〳〵何ともかとも言へやうのない程、お似合ひなさつてお美麗しうございますか、マアそのお形容で今日は終日お遊びなさいましヨ」ドレお晝の御膳を上げませうネエ、今檀か甚助どんも歸りました樣だから、御肴を取りに遣り

ませうネ、今日はお八重さま貴孃の御誕生日でございますョ、何の事はない、お生まれかはり遊ばしたも同じ事てございますネエ、オホヽヽヽ

講談速記梅之春巻之十一　終

辰巳情話 梅之春巻之十二

第二十三回

まア旦那お内儀さんへ言葉も、夏の中は例の涼み船、今様の欄間で逢ひ初めてから前々る此方に聞く二人、互にまア心意氣な、すいた源の露ふくむ、米吉はじ三郎に向ひ、まアじつに今更にまア言ひ出してもいけない事だがネ、此の事が私れに知れたらば何様せうかと、まア知れるもしれぬが、爲十藤八が氣どつてやかましく言つてゐるは、その時は何様でも諸者は仕舞はねへ、御推察ふものかナアまアさんお無理なお言ひでない、お前様は外の稼業でお様な言ひでも、私がお玉さんへ濟まないア、小松平兵衛の師匠場の丈夫を聞く度毎に、お玉さんへ言譯がない思ふと、胸へせまアと悩んだ位でありますが、姉の事を身に引受けて深切に、お兄さんのお前様が、種々と言ひの義理立てはかの事へた日には、悪い気がすて、何だとお前様が腹をおたての時は何にもいはれまい。お前様の身にも障りも仕ませうか、お前の事があるだけに、今更にまア別れ事になつては濟まないと、ひとつ心に思つて居たが、藤八さんの氣もお前さんのお前様に、思ひ出して今は有て見れば、其の事しつても、商法の義理

な知らぬ、斯うなつて嬉しいながらも、お巳さんがお前よりは餘計に、お柳の事を苦勞にしてお吳れの中で、私がさア大事のお前樣と不義をしたかと、お巳さんに思はれるのが面目なくつて、死なうかとも思ひますわ。」ト愚癡な繰言泣きかこつ、恨み言葉を七三郎も、聞いてさすがに氣の毒なれば、七「然ういはれては、何分此身が面目ない事たけれども、お柳女の事の相談に付いて、その美麗しいお前と幾度も、顔を合はして見た日にやア、どうも男の悲しさで、無理を言ひ出して、お前を迷惑させる氣にもなつたらうぢやアないか、此身が無理に斯うした情合にしたのは、重々惡かつたけれども、此身に限つた事ではない、お前の容貌に生まれ付いたのが惡いから發つた事だから、誰人でも只置くものか。」ト、言ひしを何だまア、私がこんなに苦勞をして理由をいふのに、些ともお前樣は取りあげないで、そんな程の宜いことを言つて、女を嬉しがらせて置けば、濟むと思つてお在でぢやア悔しいねえ、何樣でこれがお巳さんに知れずには居ないから、言ひ出されて面目を失ふよりか、私の方からお巳さんに言ひ出して、謝つて置かうと思ひますわ。」七「エヽナニコレサ、大變な事を言ひ出した。巳八にそんな事を言つていけるものか、夫れで無くつてさへ、氣むづかしくつてならない奴だから、眞平御免だ。」ト「、エ何樣しても知れない樣にはならないから、早く知られる方が氣が安堵いて宜うございますわ。」七「フムウ夫れぢやア否でならないが、妹を世話にして貰つたから、詮方なしに返事

〔玉八〕なしたが、些ともはやく離別て仕まひ度いに付いて、何の事もないのに、即時言ひ出してお玉と喧嘩をさせるつもりか。夫れ程否ならば何様も詮方がないから、覺悟を仕ようわナ」ト玉「すヤお前様もマアそんな氣の短い事を言つて、腹をお立ちだヨ。何程妹がお前様の世話になるからといつても、私の心にお前様をごく/\否だと思つた日には、玉八様といふお内儀様の在るのを言ひ立てに、何様でも退れて言ふ事を聞かずに仕舞ひますわネ。元はといへば私の心にも、玉八さんが羨ましいと思ふ最中へ、お前様が可憐がつてお呉れの樣に言ひ出してお聞かせだから、後悔をする種だと知りながら、お玉さんへ義理の悪い事を仕出来すのだから、お前様の様に軽々しく覺悟も思限りも出来ますものか、一旦斯うなつた上は十分に逢はれずとも捨てられまい、愛想をつかされまいと、取越苦勞をする心から、大事をとつて玉八さんに、些とも早く言ひ出して、其の代りにはどんな事にも、玉八さんの事ならば、此の身を惜しまず仕ようといふのでありますわネ、それを察し心もなく、顯はれて面倒になつたらば、私をば只突き出して仕舞へば濟むと薄情でお在でおやア、私一人が可憐さうではありませんか」ト戀の慾でも玉八をば、義理に言はず、されば迚て男を思ふ深切は、義理の中にもやはらかく、離れともなき戀慕の情、言葉少なに愛敬もこぼるゝ庭の草の露、西に入る日の紅に、照らして赤き糸吉の、顔は殊更麗はしけれ。折から來たる瀬九郎、出抜けに門口をおし明け、家内をねめ廻はしなが

ら、まア〳〵此間は、よくお出はれて、二人は驚きつゝ、七「ヘイお出でなせえまし。」藤「エ、トキニ七三郎さん、此間中はいろ〳〵と正作さんの方を掛合ひましたが、何でもマア お前さんが、一旦途中から連出して来なすつて、夫れ限りお糸の行方が知れないで見れば、お糸と七さんの方が何様かしたのに違ひないから、お前の方へ掛合つて呉れろと言ひなさるから、再度此方へ参りましたが、お気の毒だけれども、お糸さんは、斯うして七さんのお内儀さんに成つて居る様子なり、お糸の体の事で見れば、是非とも、お前さんの掛りだネ。實の親の正作さんの了簡で突やしたから、お糸を貰はれたしなさるとも、亦夫れ相當に養子金でもやつて、育てられた親の挨拶をするとも、料簡を付けてお呉んなさえ。近所でも七さんの噂を聞きやア、長八さんといふのが本妻で、お糸さんは妾だとか情女だとかいふはなしだア、那耿町で指を折つて、人先へかぞへられる美麗いのを、二女も三女も楽しんで居るくらゐでは、お柳さんの養育金を拵へて出すくらゐは、何でもござりやすめえ。お糸さんも然うだア、世間で情人だと知つて居られるお七さんの離縁になる事なら、妹の身の上のことだから、一働き為ずばなりやすめえ。「ト四邊へ聞ゆるやうに喚きちらして居る處へ、歸りかゝりし長八が、家内の様子を窺ふとも、知らねどモ一が、粂吉は他に聞かるゝ事を憚れ、「モシ〳〵お前は妹の事で、若松から頼まれてお出でなら、其の掛合ひをするのは聞いたが、何だか俺と七さんとが情通があるなんぞと、他聞の悪い事

を言つてお呉れでないト一言アハヽヽ、其樣に隱しなさんな、此間中お柳の一件で久しく此土地に隱れて居て、何も角も聞いて居らア、此間も七さんの事で、珍川のお客を不首尾ぢやアないか。然ら其の客に七さんの文を拾はれたぢやアねへか。それは何も此方の構つた事ではないが、潔白らしい強情をいへば、まだ證據があらア、しかしそんな事は何も角も、お柳の返答は何樣するのだ一ト言るをり、から、裏口の障子を開けて入りきたる米太に、ウカ／＼と遲九郎の側へ行き、エヽ／＼先刻から門口で聞いて居たが、お前は何處から賴まれて、若松の掛合ひに來なすつたのだネヱ一ヘヽ、お前は何だ今時分横合から口を出して、ばか／＼しい、エヽばか／＼しいと、是れ其方は何にも知らずにお柳の掛合ひをするなんぞと、僞讒を言ひに來やアがつたのだネ、エヽ早く歸らないと、只は置かないぞ、ふてえ奴だ。エヽギヽ／＼何が大變のだ、そして僞事たア何の事だ、合點が行かねへぞ。エヽハハヽヽコレ其樣に騒ぎなさんな、鬼若松の婆々は舊い悪事があらはれて、四五日以前に、お代官さまへ引出されて、いまにお仕置になるさうだ、其のうへお柳の身の上は、委しく總が篷の大庄屋さまへ聞けて、お調べも濟んで、實親の正作さんに引渡して被下つて、若松の家は潰して闕所になつて仕舞ひやした。卽時に三味線草が生えるのだ。アハヽヽ、コト言はれて、悪者郷九郎も南無三、最早其の事があらはれたるかと驚きながら、猶負惜しみの言譯を言ひならして居る其の處へ、表の方に人

宿し、格子戸明けて入るお民、其の背後からごろ／＼と、立入りきたる二三人が、羅九郎を引捕へ物も言はずに連れゆきけり。「マア、私やア何様に吃驚したらう」「ネヽ私も實にこはかつたわ」「何様したのだらうネヱ」「ナニサアあいつは羅九郎といつて、是れまで種々の悪事があるさうだから、それで今の様に連れて行かれたのだ」「ヘエヽ、さやう／＼、然うかネヱ、能い氣味だネヱ」「私やア先刻表まで歸つて來たら、何だか家内でごた／＼言ふ聲がするから、そ聞きをして居たら、米太さんが來てお呉れで、静かになりさうだから、最う宜いと思つて格子を明けて這入ると、背後から彼の人達が續いて這入つたから、膽ア潰して胸がまだドキ／＼言ひますわ」ト言はれて再度驚く糸吉、七三郎もドッキリ、彼の羅九郎が高聲に、言ひたる事を玉八が、定めて聞きてあるならんと、思へば心を惱ましけれど、まづ知らぬ顔に紛らして、「ヨヽお玉早かつた／＼」「アヽ、船へ行くのが止めになつたから能い鹽梅に早く歸られたわ、糸さん出番の衆は止めになつたのかネ」「アヽ、明日になりましたわ」「それに先刻ちよいと煮花屋へ出て、それから亦お柳の事で、ネ、ヤツトこゝへ寄りましたわ」「然うかネ、米さん毎度大きにお世話さまで」「ホンニ米太さんが來て呉れなさらないと、羅九郎にまたごたつかれる所であつた」「ホンニ能い所へ來てお呉れであつたツけネヱ、そして東若松の事は實正の事でありますかえ」「ハイ實正です。私は嘉兆さんに、若旦那の話をして、兎も角もお柳さんの身のうへ

を正作樣の方へ返させようと思つたから、嘉兆さんに金を借りて、鬼若松へ養育金を遣る氣で總が窪へ行つて見ると、先刻言つた通り、鬼若松は潰れて仕まつて、お柳さんは實親の正作といふ者が引取つたつもりの證文を庄屋樣へ出して、何もかも濟んだといふ事を委しく聞いたから、直に尋ねて行つて、正作さんに逢つて聞いたら、實はお柳は玉八さんといふ頭女衆の方か、姉のお糸の方に居ませうが、私に引取つたつもりに仕てしまへと言はッしやるから、然う爲ましたが、まだ七三郎さんの所へ知らせる間がないから、然う言つて遣りませぬか、お柳に何樣しましたネ、苦勞にはなりますが此樣に年が積つて、意氣地がなくなりましたから、何卒何もかも思ふ樣に出來ませぬと、涙を落して言ひなさるから、お柳さんの居所を委しく言ひなさつて、夫から姉さんの方の一件も相談したら、嬉しがつて、何卒お糸と御相談をなさつて、よろしく御願ひ申しますと言ひなさるから、必ずお案じ被成いますなと請合つて來やした。」とイヤそれはマア、私が後までも殘らず落着けてお歸んなさつたのだネ何とも御禮の言ひやうもない事だ。」玉「實にネ私や、夢ではないかと思ふほど嬉しうございますわ。」玉「ア、ネエモウ／＼七さんも私も、お前樣にたのまれ甲斐がないといけないと思つたが、嘉さんのお蔭で、實に安堵する樣になつたネ。」ト互に顏を見合せ

第二十四回

再説向島の草庵には、お梅が戯れの様にはからひたる、漸々お八重に心を改めさせ、母親へ孝行なさすべき手段を廻らしが、是れも宿世の縁なるか、河越道中のはなしが世を惜しむ種となり、無常を思ひし常住に迫れ、引返したる娘気に、うつればかはる人心、今日は逆せたる髪の毛に、蓑をかけたる島田髷、お柳と同じく化粧して、商女にもしろきし二人の姿、少し婀娜過ぎて、賤しくはなけれど、かと思はるゝ姿は、振袖を寄せられたる人品能く、自然と野暮ならず、また生得は美質しけれども、餘り温順すぎて、野暮らしくはあるまいかと思ふ所のお八重をば、当世様の洒落たる少女の風にこしらへて、縮緬の好意なる衣裳を着せて、髪も流行の結びかたなれば、下情な様で自然と人品勝しからぬ、二人並んで居る時は、いづれを上と見なつべきこと。真にお八重を梅の花とたとへては、縮緬が香の匂ひを添へたりといはれ、お柳を梅とたとへては、朝桜の露をふくみし風情を添へたりといふべし。お時は看惚れて莞爾笑ひ、これはまア／＼御両人ともまアなんと、何様にお美麗しうございませう。そして何様なお顔が似てお在で被成つて、御姉妹の様でございますネ。ネヱ／＼お時さんかへて、世言にもきこえた事を被仰つては、いやでござゐますヨ。何様して私がお八重様のお身足へも追付く

さますものか、勿體ない。ヲヤ〳〵アレサお柳さん、そんな事をお言ひでないヨ。私こそ野暮らしく、、、お前さんの鄙で可愛らしい所には、何様しても叶ひませんから行けませんヨ。ヲヤ〳〵アレサ、貴嬢までがそんな事を被仰つて、私をおいぢめなさいますヨ。イヽエ然うではございません、實事でございますヨ。ホヽホヽ、、、、兩方で其の様に卑下をなすつて、互に貫めッ競をしてお在でなさつても行けません、何でも御兩人ながら娘評判記とやらが出來ますと、西と東の大關でございますヨ。そのお美麗しいお顔で在りながら、お八重様は此のお頭巾を召してお衣を着して居ようとは、餘り情しい御料簡ではございませんか、何程お美麗しくつても、島田髷で被居入るのと、此の頭巾を冠つてお在で被成るのと、何方がお似合ひなさるか御覧じまし、今に鏡をお目にかけますから、ネエお柳さん、ホヽヽ笑ひながら、お八重に御納戸茶の縮緬の御高祖頭巾を冠らせれば、お八重はそのまゝに冠り居て、ヤアモウ〳〵、、、、お柳さん私にやア坊さんの方が似合ひますヨ。イヽエ然うではございませぬヨ、モウ〳〵幾年までも島田髷で被居入いましヨ。トいふ折から垣根の外にて、ヤヽ是は御覧じろ、ホヽ若旦那、違ひございますまいネ、アレ河越の道でお逢ひなさつたのでございますよ。トいふ聲たしかに聞えねど、案内を知く人のあるけはひを、はやくも察して縁側の、障子をしめるその所へ、柴門をおし開けて入り來る壯年、這入口へ來て横を向き、[illegible]ハヽヽヽ御免なさいまし[illegible]

人でございます」ト出迎へば、次郎「エ、引 私は往來の者でございますが、若旦那が此のお庭の外で
急に病氣が發つて難儀いたしますから、何卒此の御緣側の端を、少しの間御貸しなさつて下さいます
樣にお願ひ申します」とき「オヤ〳〵然うで御座いますか、途中の御病氣では嘸お困り被成いませう、
御遠慮なく此方へお連れ申してお出でなさいまし、お湯も沸いて在りますから、お藥でもあがるなら
ば直に上げますヨ」トやさしき言葉に、彼の男は大きに悅び、次郎「それは有りがたうございます」左
樣ならば少しのあひだ、何卒お願ひ申します」ト木戸の外へかけ出し、程なく此の家へ伴ひ入る、其
の病人は如何なるものぞ、是れ則ち此の庵のお八重が心に慕ひ焦れたる、親川の嘉兆の倅にて、隱居
所に病を保養して居たる幅之助なりければ、障子の內より透見をしてありけるが、お八重は愕りし、
やへ「オヤ」ト言ひつゝ驅け出でんとせしが遠慮して、お時にひそかに囁けば、とき「エイ然うでござい
ますかえ」ト走り出で、とき「サア〳〵些とも御遠慮は入りません、マア此間へお出でなさいまし」ヤ
レヤレ嘸御難儀でございませう、併し御持病ならば直に治まりなさいませう、マア少しお氣をお休め
なさいまし、何ぞお藥のお持合はせがございますかえ」ト いろ〳〵しんせつに世話をすれば、幅之助はさしたる事もなき故に、氣の毒になり 幅「イ
イエ病氣あがりでございますから、少し逆上せて惡い樣なばかり、最早大きに快氣さうでございます
から、お構ひ被下いますな」トいふ所へ、お八重は奧の方より立ち出で、恥かしさうに幅之助の側へ

來り、ヤヘ二さぞ途中でお困りなさいませう。こゝに梅の雪と申します胸の開くお藥がありますから、お上りなさいませんか。」ト差出す所へ、お柳は茶椀へ白湯を汲み來る。福之助は卽時出來合ひの虚病ゆゑ起上り、福「これは存知がけない御介抱になりまして。」ト言ひながらお八重の顔を見上げ、福「貴孃は慥か先だつて松山の箭弓稻荷さまの途中で。」ヤヘ二「ホヽヽ貴樣は難波田の、お寺でお目にかゝつてから。」次郎「その時お相宿でお慰みに、落話をいたした次郎吉で。」ヤヘ二「オヤ〳〵ホンニ然うで有つたつけネエ。實に不思議な事て、又お目にかゝりますネエ。夫れぢやァ猶更の事、お心置きなくお休みなさいまし。」ト言ひながら福之助の顔を從容と見つめ、何か思ひあり氣にて、ヤヘ二「マァお大事になさいましヨ、卽時に又お心よくお成りなさいましたらば、ゆるりとお目に懸りますから。」ト奥に入れば、福之助は飛び立つ樣におもへども、病のゆゑに保養を頼みて、此の庵へ入りながら、直さま心よしとは言ひ難く、暫時苦痛の體にもてなして休みける。

これはいかにといふに、米太夫の話を聞きて福之助は、お八重お柳を片時も早く見まほしさに、次郎吉といふ心の知れし男を連れて、此の庵の樣子を看に來りしが、次郎吉が俄に思ひ付きたる勸めに依つて、虚病を發し、側近く寄るはかり事をなせしなり。

斯かる事とは露程も知らず入り來る米太夫、七三郎も粂吉も、玉八もろとも、お柳に逢はんと相

談もなし、此の程お柳が世話になりたる返禮の心にて、種々の土産物などを持參し、先づお時を呼び出し、先だつてより長く厄介になりしお柳の事を、衆男女一同に禮を演べければ、お時も相應に會釋して、「ヲヤマア誰人もお上りなさいまし、サア＼／此間へ」トいふ時しも、福之助と倶に來りし次郎吉は、かねて米太夫と心易ければ、勝手の脇から立出で笑ひながら、次郎「イヤ米さん此間は」米「オヤ＼／次郎さんか、珍らしい所で逢つたノウ、全體今日か明日、若旦那の所へお見舞に行かうとおもつて居たのだ、何樣だネ續いてお全快いかネヘ」ト言へば次郎吉は米太夫を小手招きする故、側近くすゝ寄れば、次郎吉は米太夫の耳に口何やら囁くを、米太夫は聞きながら、米「イヤハヤそれは呆れた若旦那だノウ、ドレ＼／夫れならばお目にかゝりやせう」と米太夫はまた＼／お時に内談すれば、お時もかねてお八重の戀人なりし福之助の事なる由を告げる故、米太夫はいよ＼／驚き、福之助の方にてのみ慕ひし女と思ひの外、お八重の方にても深く心を惱まし居りける、難波田の寺參り奇弓稻荷へ參詣の途中の事、全く前世の約束にて、神と佛と引合はせ故、斯かる戀の路の發りしものなるべしと感心し、元來座持の上手者なれば、互に恥かしからざる樣に其の席を取持ちて、頓てお八重お柳福之助次郎吉お時を片側に居ならべ、七三郎玉八粂吉を片かはに置きて、何れもうち解けて語合ふ樣に面白可笑しくとりはからふ、米太夫の働きは何事にもつくせぬ骨折にて、此の席にては第一の大役なら

んか。斯くて七三郎と米太夫が何時の間にか談合し、誂へ遣りたる料理の数々龜戸の茶屋より持ちきたれば、これよりいとゞ賑はしく、目出度き酒盛とはなりにける。

此の後お柳は福之助の本妻となり、お八重は福之助と契りを結び深き中となり、母親も承知なれど、親類に彼是評判を爲らるゝことを恥ぢ、殊に一旦啓次郎といふものに、夫婦の縁を結び、其の人へ貞操を立てゝ、尼となりしものが、今更福之助の本妻となるは、福之助に恥を與ふるに等しく、不貞なる所爲なりとて、無理にお柳を本妻としけるが、お柳はお八重を姉と敬ひ睦まじく語合ひ、一年の中に、一月か二月の間の外は、離れて住居し事なく、大方はお八重と同じ所に住みしとぞ。又亦七三郎は戀が窪の實家へ歸參し、玉八を晴れて女房とし、玉八は粂吉を嫉妬せず、始終むつましく姉妹のごとく交はるなど、只一席には說きつくしがたく、何れも目出度き咄のみおほかりしとぞ。

猶此の外に杉坂の座敷にて、嘉兵衛が酒宴の禮、その席の唄女のこと等、說きをはらざる條下もあり。かつ正直正作が身の治まり、笠森稲荷と三圍の稲荷の御利益霊験等、此の草紙に說き盡さゞる事は、近き日の中に拾遺として發行すべし。こゝには要を摘んで、早く卷を治むるのみ。

辰巳清談梅之春卷之十二（大尾）

閑情末摘花

閑情末摘花の敍言

末摘花は源氏物語の巻の名にして、近曾柳亭の大人が妙案の筆削に、江湖の婦女子皆暗抄して、奇なりともてはやし、珍なりと稱讃す。然るを今こゝに著せる末摘花といふ趣向は、聊か源氏にかゝはらず、かの芭蕉翁の名句に、

ゆくすゑは誰が肌ふれん紅の花

實に紅花園中に花開き、明ればゆくゆく陽に輝きて色を爭ひたるも、摘に摘まれて商賈の手に渡り、終に絞りて美人の口紅となる時、何方の人の肌にふれて、何方の男子の情を受くるや、半點の朱唇萬客嘗むと、唐人もいひけん、現に婦人娼妓の第一なれども、その行方の定まる事なし。嗚呼妙なる哉翁が秀吟、こゝに於て人世の一期盛衰がこれに似たり。おもふに配は下賤にはぬに配ふといふのも、往昔より人の口碑に傳ふる所、得て寓言とするにあらず。されば彼の秀吟を種として、例の人情世態を綴り、題を花といふべかりしを、末摘花と題せしは、博識のかす戯作者流、白面の書生、看板赤手拭、高くとまつて言ふには、侍はすとしかいふ

于時天保己亥、やよひの市に題す

松亭主人誌

閑情末摘花 初編卷之上

東部　松亭金水編次

第一回

むかし／＼の狂歌に、屁に寄する月といふ題に、「すかしみればひるかとぞ思ふ武蔵野の草木をわけて出づる月影」と詠じたりしは往昔の、野原でありしその様を、想像りたるものぞかし。今はそれには引變へて、家根より出でて家根に入る、月の都はまだ見ねど、かゝる繁花は須彌の四州大千世界の廣しとも、又有るべしとは思はれず。然るが中にも人々の、幸と不幸はあるものにて、一夜千金を抛つ大人客あれば、軒に佇みて一錢を乞ふもあり。これ人間世の景勢にて、榮枯盛衰は廻り燈籠に等し。されば富貴も誇るに足らず、貧賤もまた悲しむべからず。こゝは名に負ふ横濱町、往來もしげき宵月に、晝より明き軒の下、眞暗になる人だちは、十七八と思しき女兒、手拭目深に面影の、見えぬだけ猶ゆかしさの、聲にしらする愛嬌に、節も細かき浄瑠璃の、三絃の曲さへいと妙なり。「き・エ　エ　モシ

甘く語れねえ、此の聲を持つて門付をせずとも、何樣か成りさうなものぢやァございませんか。」「左樣サ、あれこそ諸藝とも生まれ付きと見えますネ。」「ナア、アレお松さんお聞きョ、アレ彼處の所が甘いぢやァないかネ、私のお師匠さんが、どんなに喧しくいふか知れないけれど、誠に〳〵出來なくッて困るヨ。」「ヲヤ左樣かえ、私ちやァ、お對だねえ。」「アレ馬鹿をお言ひなねえ、節の出來ないお對もないもんだねホヽヽ。」ト仇口々に門付が、跡にひきそひ動也々々と、だれかだれと聞いて行く。折から來かゝる一個の通客、年齡二十三四にて、夜目にはしかと知れねども、色白くして脊高く、眼元口元いやみなく、何樣やら氣轉も菊五郎か、壯弱にも劣らぬ風俗、衣裳は宜しく推察あるべし。跡に引添ふ連れの雄士は、供にもあらず友達ならず、出入の者と思しきが、名をば久次と呼ぶなるべし。かの旦那は後を振向き、「ヲイ〳〵久公々々、でえぶ足が遲いな、何樣しただ。」「ハヽヽヽ、今ネ、泥水の中へ飛込みました、どうも月を背にして歩行くといふやつァ、兎角泥水へ這入りやす。」「左樣か、紙をやらうか。」「ナニサ〳〵手拭でふきました。」「氣があへを見せるにやァまだ早いぜ、ハヽヽ、い。」「實に百三十二文切立ての手拭サ。」「コゥ烏渡聞きねえ、ナント、まア美い聲の門付ぢやァねえかノ、年もまだ十七位だ、八とはなるめえ、顏は手拭を冠つて居るから、一向見えねえけれど、コウ聲の宜いといふもなァ一割徳だの、何でも美しからうと思はれるぜ。」トいはれて久次は立止り、

しばらく聞いて居たりしが、驚きたる顔なりして、「モシ旦那、この鋏を持つて門イとは何様した、
でございませう、師匠なするか然もなかア、諸事へ何処にでも出て御覧なせえ、強気なもんでござ
えやすがサ、併し思ひの外面が変して（たへんといふ事なり）おまけに蚯蚓不死（といふは庖丁の跡の事なり。蚯を打つてもその穴にはひりゐるゆゑ、死なずといふこととなり。）がすてきで、二度と拝まれねエ御面相かネ。」「何様だか知らねえが、何にしろ可愛さうな
事だのう」「ハ、、、、亀角旦那様人には御不便が悪りますネ」「マア何にも左様おやりねえが、之位な
鋏を持つて居る様に、門イとは随分果敢ねエだやアねエか、實にお前の言ふ通りヨ、己がお出入の
ソレ佐々木さまの奥で、浄瑠璃をよく語る女兒があるなア、殿様のお側にお世話をして呉れろ。尤も縹
致は能いほどの事はねエが、其ニへ耳すれば大概な物で済むだらうと、實はお年寄に恃まれて居るか
ら、油断なく気をつけるが、なかなかねエもんだ、今の門イの面はどうなんで、何者の娘だか聞きてエも
んだがよ。」「ヘエ、左様いふ事なら我漢篤い見をせうで」「ム、左様だがノ、種々な事を言付ら
れもして、萬一出来ねエ時にやアわるし、夫れよりかマア面を見てえものだヨ。」「ヘエ、一寸行つて
見て来ませう」ト言ひながら駈け出すにすれて、其處に寝て居る犬のおどろいて起きるキャン/\
「ナニ、いふまましい、ネイかんにしろ」といひながら、彼の人立を押分けて、門イか側へ行く、
旦那は此方にイみて、暫く見て居る。間程たつて、□は□へ駈け来りて、旦那

見屆けましたが誠に恂り。」旦「なぜだ大變か。」久「大變にも何にも辨天樣の、モウ一ぺえ美麗しいのでございやす。」旦「フン甘くいふぜ、左樣委しく知れるものか。」久「處がぐつと側へ寄つて見ると、子供が短な竹を持つて、門付の側に立つて居やすから、その竹を私がそつと持添へて、彼奴が冠つてゐる手拭へ引掛けて置いて、オイ／＼子供除かねえか／＼といふと、子供がひよいと除く拍子に、竹の先へ手拭を引つかけて、やう／＼お開帳と成つたから、側にやァ居るし、夫りやァモウすつかり、靨が幾許といふ所まで見やしたが、淨瑠璃よりか又縹致の方が、三十段も宜うごぜえやすぜ、實に恂り仰天サ。」旦「ハテなたんなら彼樣に非業にして居さうもねえもんだノ。」久「左樣サ、其處が一圓分りませんが、ァノ慈母が思ひの外不通もんででも有りやせう。」旦「慈母といへばお前所を聞いたか。」久「ヤァあんまり女兒が美麗しいのに恂らして、ツイ忘れやした。」旦「ハヽヽヽ夫れぢやァ何にもならねえ。」久「ナニ造作はねえ、聞いて參りやせう。」トまた驅けて行き暫くして歸る。旦「度々御苦勞だの、どうだ言ふめえ。」久「エ、初めはもぢ／＼して、イ、エ私共は何處といふ定まりもございません等と言ひますから、これさ慈母、此方も心なけりやァ聞きもしねえ、殊に寄つたらお前方母子が出世の小口にもなるだらうから、言つて宜い事なら言ひなせえ。」ト深切らしく言つたもんだから、夫んならお話し申しますが、下谷の釜崎町で、古著屋と鐵物屋の裏に居りますが、去年爺父が死亡りまし

てから、引續いて私が病氣。何やかやで暮しかたも出來ませんから、據なく女兒にこんな賤しい業をさせますト、ほろりと涙を溢したから、私やァ可笑しな心持に成つて、早々引つくる返しやした、エ旦那、何でもありやァ富家のはてでございやすぜ、その證據にやァ慈母の言語つきが極つたものでございます。」ト云フニ、左樣か、世には薄命な者が幾許も有るなァ、嗚呼夫れを考へると、實に遊びも面白くねえやうだ、久公おいらァ是れから歸らうヨ。」「へい、、、旦那が無常を感じてへ、ハ、、ハ、夫れを云ふ日になりやァ、三ッ蒲團の上で天鵞絨の夜着に包まつて居る名妓も、元を正して見ると、善哉賣か夜蕎麥賣の女兒も有りますぜ、夫れはそれ是れはこれで、衆人備はつて居る事だから、何も門付の慈母が、涙を溢したからと云つて、遊びを止すにもあたりますめえ。」遊人があればこそ郭も立派に立つてゐるといふものサネ。」「其處もはや一理なきにしもあらずさ。」「何樣して爰から一里あるものか、僅か半道ばかり、サァ〳〵急ぎやせう。」ト少し寒さし嚙さへも、久次が傍に引立てられ、急げとはなき道すから、世間話も差合ひなき、往來もたえぬ浦面通り、過ぎて駒掛町、はや廿道へとさし懸る。こゝに彼の門付は、軒から軒へ傳ひ行く、一錢二錢の合力を、貰む内には美い聲を、賞めて一段望まるゝ、是れを其の夜の所得として、カチ〳〵カチの拍子木は、常にはあらで家々の、戸をしめるの拍子につれ、集會ひし人のばら〳〵と、散れば後には門付母子が、三絃を袋に

入れ、家路をさして歸り道。よね「慈母さん、お前腹が空りはしないか、今夜は思ひの外に善かつたから、些とは遣つても宜いわね、お蕎麥でもお汁粉でもおあがりでないか。母「左樣さ、少し腹も空つた樣だが、お前は何樣だえ。よね「私は誠に腹が宜いから食べずと宜いが、おまへ空腹じやアお上りョ。母「イヤ〳〵それ程でもないから、サア早く宅へ歸つて、若し何なら お茶漬でも食べようョ。よね「そんならサ、ソレ彼處に天麩羅があるから、あれを買つてお出でな、母「ナニ仕舞ひ際だから負けてくれるョ、早くお買ひな。母「ナニ私ばかり食べるのなら何もいらないわな。よね「アレサ澤山あれば私も食べるわな、早く行つてお買ひでないと、ソレもう仕舞ふョ。ト親にやさしき女兒が心根、嬉し涙に曇る母、殘りしものを買ひ集め、竹皮につゝみて持つて行く。程もあらせず我が家の路次へ、入りて出る娘が差覗き、母「おや、お米今歸りましたョ、何樣お寒かつたらう。よね「はい、早かつたね、お里さんもおむすめは一所か。よね「はい、いま淨水に往きましたョ。母「はい、それでもまアあの兒が、歲も往かねえで感心だねえ、どうぞ早く天運の順環る事があれば宜いねエ。トいふ中母は錠を明けて這入り火を打付けると、よね「マア無理燧を持つてお出でな、義理の惡いこと。母「ハイ〳〵、モウ付きましたョ。トいふ內女兒のお里は淨水場より出で來り、里「オヤ モウ燈をお付けたね、ドラお茶を沸かそう、おまへお飯をお上りョ。トお里は手早く消炭を、摑んで入る、風呂火鉢へ行燈の火を付木に移して、はや吹付ける吹竹の、直

た心に色かへぬ、操はあれど造化の、いかに悪くて母一個、娘一個の身を過兼ねる、娘の辛苦は頼な
々た、息まる日さへあら浪に、揉まるゝ船にも似たるべし。[illegible]無母様、お茶が沸いたからお飯をお
上り、[illegible]天麩羅屋はマア何様したらう、大根卸をおこさない杯よ、是の八百屋へ往つて来
よう」母「[illegible]大根も何もいらないわナ、そして八百屋さ[illegible]」ト、[illegible]内お里は駈出し、
八百屋を起して大根の折れたのを買つて来り、[illegible]老婆が家にある、山葵卸を借りて大根をおろし、
[illegible]お上り、卸したけると、何様に甘いか知れない[illegible]何かも何まで、お
前が左様優しくして呉れるから、」母「その今夜に死んでも残る事はないが、只日々苦労になるのは、
何卒してお前を人並にしたいと、只夫ればかりが黄泉の障りだ。しかし今夜ノ、話は耳よりな事があつ
たヨ、[illegible]先刻アノ兒共が[illegible]をして私の[illegible]引かけた時、何だか
若い人がお前にこそ、[illegible]何處の人だか[illegible]何處の人だか自己も知らない
かい、お前の宅は何處だといふから、先には隠して見たが、萬一すると出世の小口にもならうかと
と、深切に云ふから[illegible]知らない人に宅をお云ひでないけれど
能いネ、萬一尋ねてでも来られると、[illegible]聞が悪い[illegible]、お前もまだ少ないのう、と
うせ門イをして歩行く位だものを、構ふ事はないわナ。」さう云ふ夫れはさうと[illegible]母さんの所に

から久しく便りがないと様だネ、達者でお在でだらうネ。」丹「左様サ、自己も鳥渡往かうと思ふが、この形容だから晝は往かれず。夜はお前に附いて出るもんだから、久しく容子も聞かねえが、達者で居るにやァ違ひないのサ。何様かすれば人でもよこすだらう。」ト、其の内母親は夜食も食ひしまへば、きさ「サアちつとお寢轉び、足を叩いて上げよう。」丹「ナニ今夜は宜いョ、お前こそ草臥れたらうに。」きさ「ナニ私は些とも草臥れはしないが、老年の足ぢやァ彼様に歩くと草臥れるわネ、それにぶら〳〵歩くのは猶草臥れるものだョ。」ト、母を寢させて腰を揉み、寐入るをまちて母親が、褥へ這入りて夜を明かす。宿世いかなる罪報にて、縹致も藝も人に超え、昔の賢女烈女にも、恥ぢざる氣象のありながら、浮世のさまこそ是非なけれ。

第二回

鐵棒の音チャアラン〳〵〳〵。火の用心さつせえませう、二階を廻らしやりませうト、五丁を廻る其のころは、はや深々と更けわたる、此の樓上は三浦屋とて、名代は朽ちぬ繁榮に、客數多しもある中に、かの通客と久次の兩個は、こゝに久しき馴染ありて、宵より上りお定まりの、座敷もすみて牀に入り、はや一寐入いつしかに、引けの拍子木耳にもいらず、子半刻久次は目をさまし、「アヽ、引大層

酔つたさうで、前後もしらず熟睡しにけりだ、ア、モウ何時だらう。」久次の相方は番頭新造にて竹川といふ。竹「フン お株ヨ、来るとぐう／＼寝てしまひだ。ホンニ私の方で思ふ半分でもないから、にくらしいッちやァないヨ。」久「何時だといふのに、その挨拶はしねえで此言かァ、老婆さんを女房に持つとくちやかましい。」竹「すヤきつい事ざますネ、なぜそんなら こんな老婆さんのとこへ惚れて来さつしやるのだエ。」久「こつちぢやァ惚れねえけれども、手前が命にかけても呼びたがるから、不便だと思つて来てやるんだ。」竹「すヤマアちよつと、きつい手前官だネ、そりやァモシ何處の妓女衆の事ざますエ、よもや私ぢやァありますめえ。」久「三浦屋の竹川といふ妓女さ。」竹「フム左様ざますか、道理で、私やァ主に惚れる様な罪はしまへんものを。しかしアノ久次とかいふ人にやァ、些とばかり迷ひましたわ、夫れも昔の事ざますヨ。」久「昨日は今日の昔なり、大方今ぢやァ其の人も否に成つたのだらう。」竹「へイ御免遊ばせ、そんな薄情者ぢやァ有りませんが、先でこそあきの宮島廻れば七里とやらざますから、氣がもめのお富士さんざますヨ。」久「ハヽヽヽヽおつうしやれるな、そんな言草を何處で聞いて来た。」竹「此間仲の町の寄で柳橋に聞きましたヨ。」久「うそを吐く、そんな古イ口調を柳橋なんぞがいふものか。」竹「ホヽヽヽ、お前様も古い者になりなさつしやればいゝ、眞實は此間座敷の客人が左様云ひましたから。」久「その聲色か、おきやァがれ。だいりやァ、さうと、寝る前に薬を喫へたが、頓に来て居るだら

う」旦那が一人でやつて仕舞へもなさるのさ」竹「アヽ、先刻清鶴様の座敷へ遣らして置きましたヨ、鳥渡見て来ませうか」ト廊下へ立出で、彼の清鶴が座敷を明けて屏風の外から、竹「妓女エノヽ」ト呼べども回答なし。「モシ、米さんエ/\。」ト呼ばれてふつと眼をさますは、久次が連れの通客にて、名を米次郎と呼ぶものなり」米「イヽノヽ竹川さんか、何の用だ。」竹「アノおいらんはエ」米「ム、よく寐てゐらア、何ぞ用なら起さう。」竹「ナニネ先刻から臺が来て居ますが、久さんも今やう/\目を覺して、その事を云はッしやるから、だれで聞きに来たんでござますヨ」お前様まだ上らッしやらないのざますかえ。」米「ム、まだヨ、だんなら久公も連れて来ねえ、始めよう。」竹「すヤノ\みんな冷めて仕舞ひましたから、鳥渡温めませう」ト、清鶴が次の間にある火鉢へかけて温める。此の内久次も来りて遠慮もなく屏風を引除け、久「イヤハヤ呆れ切幕ト、/\拍子だ、御両所共怪しからぬお勞れだネ。モシおいらん清鶴様、サア/\こりやア何様したもんだ」ト、いふ聲耳に入りて清鶴は、眠さうな目を細く明けて枕を擡げ、「エ」何ざますえ、モウ夜が明けましたのかえ、まだ早うさますわネ。」米「ハハヽヽヽ大笑ひ/\、今ッから夜が明けられちやアたまらねえ、モシおいらん其様に勞れたくねえネ、」米「コウ起きねえ、是れからまた一杯やらうと云ふのだ。」きよ「オヤどうしますはうオホヽヽヽ、私やア寐惚けたさうだヨ」ト起きかへりて、我からあきれたる體に、次の間から竹川が大きな聲で、

笹「おいらんエ、まァ尿でもして眼を覺してお出でなまし、今甘い物を拵へてあげますから。」[illegible]「ヤヤァ堪忍しなましなねえ、さつぱり知りませんものを。」久「ナニサ勝手元は私の女房に云ひつけましたから夫れでよしサ。まア一ッ始めませう。」ト、是れより四個車座に臺を上りまきて、暫く酒宴となり段々醉ひもまはる。

作者曰く、この座敷兩個ともに深き馴染なれば、宵に上りし座敷の樣も、大方是れに同じといへども、その酒宴の趣をば省きていはず。引け過ぎに至りて有樣を記すは、宵に上りし時も馴染なれば、心易く打解けて、種々の洒落もあり口説もある所は替らざるに似たれども、宵の座敷には藝者も上り、或は振袖雛妓禿など、それ〴〵に纏ひて附從ひ、酌をもする。是れ遊所といへども作法あれば、先づは甚く打解け難き所あるに似たり、深夜に及びては相方の外に人なく、手自酒肴をとゝのへ、相互に酌をなして、外見も飾りもなきにより、却つてその情濃やかにて、かかる閑靜の所にこそ餘情も深ければ、こゝの趣をしるすのみ。

笹「オヤおいらんは大層醉はつしつたさうで、いい色でありますヨ。」[illegible]「左樣でありませうヨ、此間久ア引しく止めて居イしたから、直に廻されまさアねヨ。」米「ほんになア、一個で呑んだ樣だ。しかし自己もモウ醉つたヨ。」笹「米樣お飯をお上んなましな。」久「コレサ野暮をいひなさんな、爰へ來てお飯な

んそを喰ふといふ法があるものかな」 久「ナニサツト旦那、モウ一ツ持合はせを」 米「モウ實にいかねえヨ。」 竹「モウ否だと云ひなますから止しなまし、おまはんの樣にまた幾許呑んでもしやァ／＼として居る人はありません、誠に憎らしいやうざますヨ」 久「へ、同じ憎らしがられるなら、おもいれ呑んで憎がられた方が得だ」 竹「ヨツテまた、夫婦喧嘩がそろ／＼始まりかゝつた、コレサ犬も喰はないとすウ」 竹「マアおいらん聞いてお呉んなまし、私が惚れて居る弱みへ付けこんで、何樣にいぢめますだらう」 久「アレ譃々、私こそ番一いぢめられて居やさァ」 米「ハ、、、、こいつァどつちが何樣だか分らねえ、久公も餘りいぢめられてゐる風でもあるめえ、しかし女にかゝつちやァ思ひの外弱いかも知れねえ」 竹「他の女にやァ何樣だか知りませんが、私のいふ事なんざァ茶にして居て些とも聞かず、何ぞといふと不便だから來てやる／＼と言つていぢめますヨ」 米「そりやァ竹川さん男の辭さますヨ、米さんなんぞが則ち左樣でますもの」 米「ナニサァ／＼段々此方へお鉢が廻りかゝつた」 久「エヽシ旦那、不便といへば實に先刻の門イの女は不便でございやすねえ。あんな美しい面を持つて居ながらヽヽ」 清鶴や竹川が顔をじろ／＼見ながら言ひだす故、米次郎は是れを聞いて、人前あれば止せともいはれず、久次が貌を見て眼で知らせても、久次は甚く醉うたれば一向に曉らず、久「ありやァ旦那何樣かしてお遣んなさるが宜いこと」言ひて心づき、我とわが唇の端を爪りて、久「ハァサ今夜御揚

のお菜おやァなかつたがネエ、清鶴の顔を見れば、清鶴は完爾として、ヲヤ久さん私に御遠慮は有りませんから、澤山お話しなまし、どうせ米さんのやうな浮薄者を、おそばにはしませんから宜うございますヨ。ト、ハテナおいらん、其様に言ひなさると自己が氣の毒だ、何か私が米さんに浮氣でも働いたやうで、實に濟まねえことを。何も其様に言譯をしなさる事は有りませんやね、そりやァ男の名聞とやらでございますから、十人でも百人でも情合をこしらへさつしやるが能いけれど、門行の女とは違ひやありませんかネエ、實に呆れけへるヨ。久、コレサお前たちやァ何を言ふんだな。自己が何時門行の女を何様したことだな、馬鹿々々しい、久公も能い加減にしやれで置きねえ、どうも此の女は活業柄に似合はねえ悋悋者だから、話しねえ事を種々と言つて居る様で困るヨ。トいひ、どうせお前様のやうな通りもんぢやァありませんのさ。其の替り一旦斯うと約束した事は、女だからも何處までも通すといふ怜悧さまでがございます。ト、少し怒りを含みし様子に、今まで四個瞠ましく、酌しつ酬へつ笑ひ興ぜし、この事しりけて暫くは、無言となりし折柄に、竹川は少し笑ひて興が席をとりこなし、まア何様何だねヱ、折角衆人が心持よく醉つて居るものを、譯も分らない事を言ひ出して、米様に心持を悪くさせたり、おいらんを寒がせたり、夫れだから酒も能い加減に飲んで居なましといふのさ、誠にいけない久さんだヨ、米さんもおいらんも、洞空久さんの生酔だから、堪忍して機嫌を直してお

くんなまし。」花「ハ、、、、ナニ自己ア何とも思やア仕ねえのヨ、元來一向種のねえ譯だものヲ。」きよ「ナニ竹川さん、其樣に氣を揉みなさんなヨ、何も久さんの惡いのぢやアありませんからヨ、又私が何を腹ア立つたの寒いだのしますものかネ、男の事たものを、どんな事でもするが宜いぢやアありませんか、ネエ米さん。」米「馬鹿アいふなヨ、ありやア久公が隨意放題だアな、ハ、、、、」竹「サアサア久さん内へ歸つて寢なましな、私やアこゝを片付けて跡から行きますから」ト下子をとつて久次を次の間へおしやれば、久次は廊下をぶら／＼と、おのれが部屋の方へ行く。竹川はこゝの喰ひちらしをとり納め、臺をつぎの間へ引出して、竹「ハイ〳〵これはおやかましう、たんとお休みなましヨ」ト、屛風を引廻らして出てゆけば、米次郎は横になり、煙草を呑みながら、米「サア寢ねえか。」きよ「アイ。」と云つたばかり俯いて居るゆゑ、米次郎は清鶴が顔を覗きこみ、米「其なんだ何樣した、今の事で塞ぐのかヨ」きよ「ナニしとだれしきい事で塞ぎやアしませんが、お前樣も何處の何某と云はれる體で、そんな者と情合に成りたがらッしやるかと思ふと、實に悲しくなりますわ。」米「ハ、、、、馬鹿に付ける藥がねえとはよく云つた、ありやア此方へ來る道で、聲の能い門付を賞めたから、久公が醉つたまぎれに云ひ出して、お前に氣を持たせたんだアな、よしや自己が其の聲に惚れたつて、何處の者だか知れもしねえものを、何樣なるものか。」きよ「夫んならその女の宅が知れりやア何樣かする氣かえ、猶

[illegible]

閑情末摘花初編巻之上 終

[illegible]

閑情末摘花　初編巻之中

第四回

山茶花や日あたりのよき四疊半、冬とはいへど小春日の、長閑けさまゝに蝶々の、連れに後れて只一ッ、つれなき命ながらへて、花の露すふ有様を、つく〴〵詠むる米次郎が、世を感じての獨言、アなる程なア、この蝶々を見るに付けても、世間といふものは形ないものだ、溫かいうちは羽ぶりも強くッて、一ッおれに五ッも六ッも飛びあるいたものが、だん〴〵何處へか無くなッて、よく〳〵命強い奴が一ッか二ッ、この節まで殘つてゐるけれど、ヲヽはやこれも大概行止りが知れてゐる。春に生じて秋に死ぬ、誠にはかない命だと、人間の目から見えるけれど、また人間の身の上を、天地から見る時にやア、蝶々よりもまだはかねえわけだ、それに惡く慾ばつて、人の目を掠めたり、又は盡かたりをしても、錢金を設けようとするなア、實に愚かな話だ、しかし果敢ねえ身だから氣隨にするがいい、ナニこの馬鹿々々しい、窮屈な否な思ひをする事はねえと思ふと、惡い道へ這入るから、左樣いふ氣も出さず、何卒程よくして、人にも強ち憎まれねえで、一生を送りてえものだ、惜しい欲しい可愛い

といふたら、なにか煩悩だと知りつゝ、根が凡夫の浅ましさにやァ、悟る事が出来ねへ。ト、口の内にてつぶやく折、中働きの女、勝手より駈け来り、「旦那さまへ、北里の大黒屋（屋なり）トいふ若者が参りまして、鳥渡お目に懸りたいと申します。」「ヲヽさうか、此方へ来なせへト言ひな。」「アイ〜」ト立つてゆく。程もあらせず大黒屋は、小さな風呂敷包みをさげて縁を廻りながら、「ヱ、旦那御機嫌よう。ござりまし。此間はきついお見限りでございます。エヽ此間もお手紙も二三本遣りましたが、度々あがりま御遠慮で、お門でお待つて居りましたが、[illegible]さんすで名残（[illegible]トいふ詞の事）お、私共の家内へお怨みたらだら、たれの来る今日は晦日でござりますので[illegible]。卿若様、しかし今日等は長閑でござりぶら歩く方が、宅に居るよりやァ気が晴れるだらう。私なども此間中から、種々商売用が多くって聊か風流気なし、只管慾ばかりに拘つて居やすから、、ト「ヱそれが又肝心でございます。無躾ながら貴君は感心でございます。御商売は御商売、遊びは遊びでと、区別けてなさるから能うございます。どうも私共が渡世にいたしながら、餘り凝つて万事を打捨て遊びなさるお方がございますと、宅のお方々は有り難い様なものの、ア、其の後先心配でなりません。夫れよりか定宿へ長く入らつしやるお客さまのほうが、まア第一安心で能うございます」「ナニしかし左様いふが、遊びでもいかのやッぱりにやア面白くないから、私なんぞも二三年跡まではすこし凝つたもんだつけ、ハテ左様々な

今の清鶴さんの所へ入らツしやり始めにやア、繁々でございましたネ、其の時分から見ますと、今は誠に御辛抱でございますネ」花「伯父を無くしてから私もぐつと氣が折れて、マア辛抱人になつた積りサ、それに此の節慈母は居ます」大「ハア何處へ入らッしやいました」花「姉の縁付いた方に病人があつて、久しく泊りに行つて居るから、夫れで何樣も宅も度々は明けられねえのサ」大「それだから度々上ッても宜うございましたつけ」花「所が私の慈母は、自慢だがやァねえが頗る通りもののサ、何處からどんな人が來ても、終しかやかましく云つた事はねえ」大「夫れだから、櫻川の伯父や、茶利屋なんぞが達者な時は、不斷來て遊びやした、慈母とも大和合だッけ」大「へエ、左樣でございますか、そりやァ慈母さまは通人で入らッしやります、エテお老體はやかましいもんでございますがサ、其處で當時日の出の櫻川さまの若手なんざァ參りませんか」米「不殘心易くするがネ、此方が虛名といふもんだから終に來やせん。勿論辛抱氣になつて見りやァ、來られねえ方が能いのサ」大「ハヽ、實に左樣でございますネ、時に旦那、こりやァ清鶴さんから、是非々々急にお屆け申せと被仰つて遣はさいました」ト袱をとき中の袱紗包より、菓子の折と文を二三本出す。花「アイ大きにお世話でございやした、何だ大層なお文だネ」大「四五日跡から屆いて居りましたのを、一同に持つて參りました。昨晩遣はさいましたのはこのお文でございます、何だか鳥渡御覽じて、一筆御返翰を」花「ナニノ

夫れにやァ及ぶめえ、何れ都合して二三日の中にやァ出かけようと思ふから、左様云つておいてお呉んなせえ」「ヘイ、左様なら左う申しませうから、是非入らしつて下さいまし」「あゝ、出かけやせう」「時に一杯あげてえが、今日は生憎人が出掛つて行届かねえから、帰りに何処ぞで一杯やつて行つてお呉んなせえ」ト、紙につゝんで百円遣ると「ハイ／＼これはどうも、へい／＼夫れならもう私はお暇、何ぞ他に御用はございませんか」「まア急も何も出かけやせうから」「左様なら、お待ち申しますトそこ／＼に帰りゆく。米次郎は菓子折と手紙を引寄せ「なんだか大そうに書いて遣したな」ト独言をいひながら封を切り、縁側へ背を向けて、一心に読んで居る折から、裏の息子清之助といふはまだ漸う二十歳位の弱官なれど、一體大人しき性質にて、學分行徳に務せしも、この秋頃のころ二三度遊びに行つたまゝといふは、弱官にあつけらしき生得なるべし。此の日徒然なれば裏庭の切戸を開けてこゝへ来り、米次郎が後の方より、「米さん何か一心に書面だね」といはれて慌し、「へ、ア、誰だと思つたら清さんか、無断千萬な、案内もなく他の庭へ来てからに」「ヘイ、先刻から頼んましよお頼みましよと幾回も言つたけれど、學問に氣をとられてお出でなさるから聞えないのだ」「ナニ人さ、これやァ眼で見てゐるから耳は留守だもの」「マア〳〵此方へお上り、そして能い菓子を貰つたから、お開きとしやうと、菓子の折を開ける。清之助は縁側に腰を掛けて、「夫は何よりだ」「まア

ナニこりやァ去るお屋敷から到來さ」清「淺草田圃で、四方に堀のあるお屋敷だらう、ハヽヽヽヽこれア清さん、お前もウ彼處へ行く氣はねえか。」清「なぜ。」米「アノ花の戸が私の行く度に、連れて來てくれ〳〵と、五月蠅ほど言傳をするぜ。併しお前の樣な大人しい息子を、唆しちやア惡いと思つて無言つて居るけれど、此間に私の行く時、もウ一遍行きなさらねえか。」清「左樣さ。」ト不承々々に挨拶する。米「どうも清さんは、貴色よりやア地物が能いといふ容子だね」清「ナニ地者處か、何にも出來やアしませんが、私が一晩歸らねえでも、爺父や慈母が案じて、夜終寐ねえでゐるといふ事だから、それを思ふと一向遊びになりませんからネ」米「イヤどうも歳の行かねえに似合はず感心だ、まあや、歳に眞實の所だ。」ト云つてゐる折から、米次郎が妹の蓮世、年も二八の色盛り、兄米次郎にそつくりと、二ツに割りし瓜實顏、眼元の情口元に含む愛敬しほらしく、柳の眉に富士額、手さへ足さへしなやかに、何不足なき美人の最上、しと〳〵としてこゝに來り、「もし兄さん只今歸りました。」米「オヽ、早かつたノ、何樣だ病人は能いか。」蓮「そして慈母さんはまだ歸んなさらねえか。」米「アイそうも快くないさうで、もウ四五日泊るとよ。」蓮「アレ清さんよく入らツしやいました。アノ急いで歩いたら、歳に逆上せましたね。」米「姉さんの方へお出でか、彼處までは餘程あるから御疲勞だらう、サア〳〵まつ御召替でもなさいまし。」となせ一ハイと一ト立つて納戸へ行き、不斷着になりて出で來り、」米「ヲヤ美味さ

いものがありますネ、絹庭羅でございますか、[illegible]食べた、そして[illegible]そこに煮花を[illegible]
入れて差上て呉んなナ[illegible]三助が入れて上げませう、[illegible]たれてもお前は草臥れたらうから[illegible]ニ其様に草臥れはしませんヨッ、ト云ひながら、袋戸を明けて茶碗を縁側へ持ち出し、火を起すこと遠世さんはお茶の入れやうがお上手[illegible]出来はしませんけれど、[illegible]お袖といふ年久しく勤める下女にて四十前後の女、奥の事は萬端この下女が世話をする故、大家にていはば局やくと見給へ[illegible]が入れますると、見ず人が[illegible]いでたまらないと申しますが、私が入れますか[illegible]何様しても年寄の入れたのは澁いネ、私もお茶の濃いのは嫌ひサ[illegible]時に遠世さん此間教へてあげた事は出来ますかへ[illegible]ネ、誠におぼえかしくッてなりません、私は餘程不器用だと思ひますわ[illegible]鳥渡した事だけれど、始めは皆左様でございますネ[illegible]清さんに何を教はつた[illegible]の折形でございますかへ[illegible]私も碌に知らないけれど、慰みに教へてくれと被仰るから[illegible]そのくらゐ能い、女は是非知らなくッちやならねえ事だ、よく身に染みて覺えなせへ[illegible]お前の折つたのを見せなせへ[illegible]可笑しうございますわ[illegible]から、絹紬に[illegible]畳紙を持つて来な[illegible]湯が煮立つた、[illegible]お茶を入れてからにしなせへ、これ[illegible]の煮花を[illegible]ら、[illegible]かの菓子を食ひながら、種々話して居る所へ、下女のお袖、手函を持つて来り、[illegible]旦那さま大津屋から参りました。そして使の小僧が口演でも、只今早く入らしつて下さいましと申しました。

米「ム、左様か。」ト手紙を披き見ながら、米「袖や、其れぢやァ着物を出して呉んな、ナニ悪いのでも宜いよ」ト早々に着かへ、米「そんなら清さんゆるりとお遊び、そして袖や、例の通り留守をたのむぜ、若し日が暮れたらノ、提灯をもたして迎ひを越して呉んなヨ」ト、是れも遁れぬ商売用、そこ/\にして出でてゆく。

第四回

清「ドレ私も帰りませう。」をちせ「アレマア宜いぢやァございませんか、急に寂しくなりますから、モウ些とお遊びなさいましナ。」清「それでもお前さんと只両個おいでは、お否でございませうから」をちせ「左様おつしやいますけれど、何だか斯ういふ折、縁側の隅の棚がゴト/\と鳴りて、なにやら落る音がガタ/\/\。遠世は驚き、「アヽ怖い、なんだらう」と云ひながら、清之助が膝を両手で確と押へれば、清之助は又遠世の驚きたるに吃りして、清「アヽ何だネ、遠世さん、お前が急にひよいとお飛付きだから、私もマアそれに吃りしたアね。今のは大方鼠が何か落したのだらう、この昼日中何が怖いものかネ、誠に臆病なお人だネエ」ト云ひながら縁側の隅をのぞいて、清「ソレ御覧、竹の花生が落ちたのだネエ、ドレどうしたらう、割れはしませんかネエ」ト其処へ行き花筒を取りあげ、

まつ「何ともございません、誠に否な鼠だねヱ」ト元の座へ来り、「清様、女蝶男蝶の折形は、どうでございますネヱ」「御婚礼のお準備かへ、そりやアお前が折らすと済みませう」「そんなら否な清さんだヨ、私が何時婚礼をいたしますヱ」「何時だか知らないけれど、兄さんのお話で這日聞いた事が有りますからさ」「そんなら何をお聞き遊ばしたヱ、兄さんがどんなお話をいたしたか、左様云つてお聞かせなさいまし」「どうして滅多にやア云はれません」「そんなら清様、其様になさらすと被仰いましたねヱ、私が何処で、縁付くとでも申しましたのかへ」「ハイ」ト云つたばかり庭の方を向いて煙草を呑んで居るゆゑ、遠世はすり寄つて、「そんなら憎らしい清さんだヨ、ナゼ被仰らないと断りいたしませう」「ハイ、閨房の咳りしたるこそいゝにかゝれば、清之助は笑ひ出して、「何サ、云ひますノ」「そんならネヱ、だんだんお被仰いまし」「何サ、お前さんのお婿様は、上州前生とやらにきまつて居るから、モウ近いうちに彼処へお出でだと、兄さんがお云ひなさつたから、夫れでさ」「一寸や遠ばつかり、一寸まア二遍たものか、前生はお前の叔父さんの所で、お婿さんは従来同志だから鴨とやらで、お前は嬉しがつてお倚でだといふ事たものネヱ」「イヽエもう」ト、いはれて遠世は顔を少し赧くなし、「ヱ、呆れた兄さんだ、なんだつてそんな事を他にお話しだらう、一旦遠いとさへなひまネヱ、他の人がやアなし、断うしてお顔のものでも心易いから、そして明日か明日にも彼処へお出でだと、直に知

れる事たものチョ。」をちせ「いやノヽ、私は何様してそんな所へ參りは致しませんわ。」清「夫れだつて過日もお壻さんが、當地へ仕切を取りにお出でだと言つて、こゝへ寄んなすッた時、お前は何様にそはそはして嬉しがつてお在でだらう、脇で見てゐると可笑しい様だものチ。」をちせ「ハイノヽ何とでも仰しやいまし、どうせ貴君のお口には協ひません。」ト、其處に取散らしたる折形の紙を手早に片付け歯をキリヽト噛みながら、涙をほろりと落す　下女のお袖は用ありてかこゝへ來しが、遠世が貌の本生ならざれば訝りて、そで「お嬢さん何様ぞ遊ばしましたか。」をちせ「イヽエ。」ト言ひながら脇をむき、襦袢の袖でなみだと眼をふくにぞ、清之助は氣の毒さうなかほをして、清「お袖どん、大しくじりサ。」そで「何でございますエ。」清「わたしが桐生のお壻さんの事を言つたつて腹をお立ちだから、誠に氣の毒でならねえ、お前跡でよく詫びごとをしてお呉れ。」そで「ホヽヽ、左様でございますか、まだお年が入らッしやらないものだから、戯言をも眞にお受けあそばしますのサ、左様でございますかネ、若旦那とは清之助をさして云ふ　何様いふ物かお幼稚時からお約束の、壻さまを誠にお嫌ひ遊ばしますがサ、他様なら宜いけれど、御親類だけ今更變改もなさり憎いとつて、慈母さんも兎角夫ればッかり氣にして入らッしやいます。然もなけりやァ此の春上州へ行らッしやる所だけれど、御當人が餘りお否がり遊ばすものだから、延びノヽに成つて居りますけれど、彼處からは度々御催促があると申す事でございますヨ。」

満「なぜだらう、私共が見ちやア、随分しつかりとした好い男だと思ふが。」そで「左様サ人品の能いネ。」をらせ「アレお袖、モウ／＼其の話は止してお呉れ、アヽ氣が塞いでくるからヨウ。」そで「ハイ／＼申しますまいすネ、、お娘さんがとつて詮方のないものだ、オヤ／＼モウ七ツ坊主がまゐりましたネ、成程時雨月のなかの十日とつて日が短いぞ、ドレお夜食のお菜拵へにでもかゝりませうかネ、勝手の方へ立つて行く。跡には両個が對坐ひ、満「遠世さん、悪い事を申してお氣にあたつたら御免なさいよ。」をらせ「オヤ私こそ無躾な、他様の前で腹を立ちまして、嘸貴君は仂ない者だと思召しましたらうネ。」満「ナアニ左様はおもひません、誰しも氣に入らない事をいはれると腹がたつわネ、しかし何も私がお前に腹を立たせようとして言つた譯ぢやアないが、むかうの所にこんな美しいものを、縁とはいひながら上州あたりの、田舎の嫁にするのは惜しいもんだ、昔唐山で王昭君とかいふ、夫れは／＼實に美麗しい女を、胡國と言つて此處でいはば、蝦夷か松前あたりの人の、妾にやつたといふ事があるが、夫れによく似よつて居る、苦々しい事だ、併しながらお前が進んで行く氣なら詮方がないが、何様だか知らんと思ッて左様言つて見たのサ。」をらせ「モウ／＼否な事だな。そして私やアあんな色の黒い眼の大きな、そして可笑な言語の人は誠に嫌ひでございますわ。」満「フム眼の大きい男は否かえ、夫れぢやア私なんぞも人並より些と眼の大きい方だから、マアお前のお氣にやア入らない形だ。」をらせ「ア

レヽ眼が大きいに寄りけりでございますヨ、貴郎なんぞのお眼は誠に宜うございますわ。」淸「ヘエ、左樣でございますか、ドレ一升買はざアなるめえ。」をちせ「アレサ眞實でございますヨ。」ト、ちろりと見る目に含みたる、心の情あらはれて、ぞつとする程愛敬の、身に染み渡る戀の風、互の胸も轟きの橋の行桁こなたより、渡し初めたる飛驒の内匠、うつ墨繩の一筋に、思ひ焦るゝ處女氣や、赧らむ顏にさす夕日、猶照り增る瑞瑞しい、花の莟の露の玉、留めても落ちんその風情、淸之助は遠世が顏をじつと見つめて、淸「お前そりやア眞實かえ。」ト、いはれて有繁恍惚氣に、をちせ「アイ。」ト答へも俯く顏こその後は互の言葉もなし、暫くありて遠世は鬢の後毛をかき撫でながら、をちせ「今お袖の足音が致したぢやアございませんか。」淸「ナアニありやア猫か何かだヨ、お袖は勝手の方に居る容子だ。」をちせ「ヲヤそれは宜いが、わたしやアまア何樣いたさうねえ。」トすこし驚く風情、淸「なにを何樣したンだえ。」をちせ「この折形の疊紙をコレ御覽なさい、此樣に皺にいたしましたヨ、これはモウ能くなりませまいネエ。」淸「ナニ綸だから少し濕りを吹れて、なんぞ重しを置くと直るだらう。ドレ私が能くしてあげよう。」ト、淨水鉢の邊へ持ちゆき、口にて霧をふきかけつゝ皺を伸して、淸「これをお前の居つてる下へ些との間敷いてお置き、左樣すると直るから。」をちせ「まア勿體ない字の書いてあるものを。」淸「それでも今。」をちせ「アヽレサ、あれはマア知らないでいたした事でございますものを、マア、宜い事があ

ります、咄の間の雙六盤を重しにいたしませう」「イヤそれは奇妙だ、しかしお前のお尻程にやア重しが利くまいハヽヽ」をさせ「否な清さんだ、私は其様に臀が大きうございますかえ。」清「ハヽヽ大きかアないが、重いといふ事サ」をさせ「イヤサ可愛さうに、是れでも朝や晩は何様に働きますだらう。」ト、いふ折しもお袖は勝手より來り、「モシお嬢さん、お夜食にいたしませうか、アノ何にもございませんがお舅の若旦那も御同所に、御膳をあがりましたら」清「イヤ遠方のことだから、御膳でも頂いて歸らうかハヽヽ、何私やアもう歸ります、大きに永遊びをしました、宅に些と用もあつたつけ。」ト縁側を下りる。をさせ「清さん、マア宜いぢやアございませんか、ネヱ先達ての晩に來様が歸んなすつた時分に來ませう。ハイこれはおやかましう」ト人目繕ふ眞面な挨拶、切戸を開けて歸り行く。お袖は勝手の方に向ひ、をさで「おさはどん、モウお嬢さんのお膳を持つて來なネ」ト聲かけられて中働きの、おさはは膳を持ち出づる。お袖は後を振りむきて、「ヲヤお給仕は私がするからよいヨ、お見世の者のお飯の世話でもして遣んな、そして八助どんは齒が惡いから、お香々を細かに刻んで附けておやりヨ」ト、いはれて「ハイ」ト勝手へ行く。お袖は四邊を見まはして、達世が膳の向うへより寄り、「モウ何時ぞは申さう／＼と存じても、折がなくツて申しませんが、先刻も貴娘が苦々しいお顔で、上州の事は話もいやだ、寒いでくると仰しやいましたが、マア其様におイヤでございますかえ。」をさせ「アノ何だね、私やア否でならないヨ。」

さァハァネそりやァお前さん無禮ながら、お我儘でございますぜ、ヤァなぜと被仰つて御覽じまし、貴孃がお彼處は慈母さんのお家元ぢやァございませんか、其のうへお爺さんが屹とお約束遊ばして、貴孃がお七歳の帶解のお祝ひの時に、彼處からお結納も參つて居ますし、今更變改のならないのは、御承知でも入らッしやいませう、夫れを貴孃がかれ是れと、御料簡違ひを被仰ると、御迷惑なさる者は慈母さんお一個でございます、お舍兄さんは刀禰のこッたから、先頃もそんなお話の時、夫婦合ひの事ばッかりやァ脇から押付けて行くもんぢやァねえ、否だといふなら何樣かして斷るが宜いなんぞと仰しやつた事もありましたけれど、一通りなら左樣もなりませうが、中々この御縁ばかりは、左樣自由には何樣もなるまいと存じます、夫れを貴孃が何でも否だ〳〵と仰しやつて見ると、慈母さんのお貌の立つ所がございませんで、ヤァ第一不孝と申すものでございますぜ、貴孃はお幼稚時から私がお育て申して、ヤレ女大學だの今川だのと、本も種々お讀み遊ばして、女の身は斯ういふものだといふ事も、お辨へあそばしながら何樣した事でございませう、親のためには身を賣るものもあり、また他の妾や圍女になつて、親を過すものもございますが、その氣に成つて御覽じまし、田舍でこそあれ桐生の機元で、此方の御身上よりは十倍も增したお暮しだと申すこと、其處の御新造さまにお成り遊ばせば、些とも御不足はないぢやございませんか、たとへ何が何樣であらうと、此の御縁ばッかりやァ、御變

改遊ばす譯にやア參りますまいから、能くとつくりと御料簡遊ばせばお宜うございます、不斷の御發明にもお似合ひなさらず、誠に分らない事でございますねへことト、お袖が己身の言の葉に、何と回答もなみだ川、おもひそめてし新枕、變るまいぞや變らじと、誓ひし口も乾かぬに、お袖が意見省し夫れと、推量しての事にやと、聞に就ても切なさに、思はず涙を浮めて、さし俯きてぞ居たりける。

閑情末摘花初編卷之中 終

閑情末摘花　初編卷之下

第五回

商人いこゑ「甘い〳〵、白菊甘酒でござい。」ト呼んで行くを、こなたの路次から年齢十六七の女兒、垢れたる袷の上に、木綿の半纏を引つかけ、松坂嶋の前垂を懸けたるが、黒棧留の鼻緒をすげた、溜塗の下駄をはき、大きな夜食茶椀を持つて驅け來り「モシイ〳〵甘酒やさん十二錢がお呉れ。」甘酒うり「ハイハイ生姜を入れますか。」女「イヽエ入れない方が能いヨ。」ト甘酒を買つて路次をそろ〳〵と這入る時、こなたの裏家の内儀が、腰障子を六七寸ばかり明けて、顔を出して居たりしが、内儀「お里さん甘酒かえ。」さと「ハイ慈母さんが好きでございますから。」内儀「よくお前はいつも〳〵慈母を優しくしてお上げだネヱ、ホンニ今の若い者には珍らしいヨ、そして昨夜から慈母は鹽梅がわりいとお言ひだツけが、モウ快いかえ。」さと「ナニ持病でございますから、強いことはございません、モウ起きて居ます。」内儀「左樣かえ、そりやァ宜いネ。ドレ〳〵お前、そりやァ茶椀一ぱいで熱からう、サァお盆を貸してお上げよう、是れへ載せて持つてお出で。」さと「ハイ有りがたう。ナニいつも買ひましてもこんなに

は有りませんが、今日のは何様かしてまことに一ぱいございますから、持ちにくうございましたわネ
内「ヱ、甘酒やさんが來かゝるを見ましたネ、大かたお前に墮落でもあるだらう「ヱヽ、、、そんな事かも知れませんヨ、このやア誠に有りがたう、是れおやア持ち宜うございますわ「ト、宅へ持ち行き甘酒を、母のおみきに進める折しも、一個の男彼方此方見まはして居たりしが、こなたの家の門に行み、「ハアニシチト物をお聞き申したうございます、此の裏にヱ、、アノ名は何とか言ひましたツけが、繼母と女兒御と兩個で居る内がございますかネ「ト、問はれて其處の内儀が「ハイ、向うの宅も繼母さんと女兒御ばかりでございますが、どうも貴君がたのお尋ねなさらうといふ人達ではございますまい「ト、いふはこの男の身なり立派故、なか／＼お里の宅へ来る人なりとは思はねばなり、聞いて男は聲を低くし「イヤそれでございませう、その女兒がをり／＼門へなんぞに出ますかネ内「ヱヽ、そんなら向うでございますヨ「ト、教ふる聲も狹き路次、戸にとほる様に聞ゆれば、お里母子は眼を見合はせ「ヲヤ誰だらうネ、繼母さん私は一向聞きなれない聲だが、門へ出る兒だと云つて聞いて居るヨ「是こそ左様さネ、おいらも知らない聲だ、ちよつと覗いて見なト、いふにお里は座敷へ片足下して腰障子の破れ目よりすかし見て、見ても知れず不審の顏色、折から外にて咳ばらひ、エヘン「御免なさいト云ひながら、障子をがらりと明ければ、母のおみきは出で迎へて、「ハイ貴君は何方からお入らつしやいました「ト不審さうに顏を見

れは、男は莞爾と笑ひ、男「何様して私を御存じはない筈だ、私は白羽根町の福見屋米次郎といふ者でございますが、今日わざ／＼お尋ね申したには些とばかり譯の有る事、マァ御免なさい」ト上へあがりこがゝれば、母は竈の前にある手帯をとつて、母「是れはモウ汚い宅へ、何の御用かはぞんじませんが、アノ召物が汚れます。コレお里や其處の臥坐を出して敷きな」米「サァニお構ひなさんな、厭ふ様な着物でもありません。」ト其處へすわり紙入れを出し、中から紙に包みたる物を取り出して、米「何ぞお土産でも持つて來るこだが、從者はつれず殊にお宿もしつかり知れねえ譯だから、餘り不躾だが、是れで何ぞ肴でも買つてお呉んなせえ」ト出すは定かに二朱銀四ッばかりも有りと見えたり。おみきはいよ／＼不審貌にて、米次郎が貌うち守り、母「ハイこれは何か有りがたうございますが、何様も私の方に一向覺えもないあなたから、こんなものを戴きましては」ト押しかへすを、米「左様云ひなさるも尤もだが、私だッて斯うしてわざ／＼尋ねて來る位だから、些とばかりの土産物を上げるのだわね、遠慮なしにとつて置いてお呉れ、だれでねえと跡の話も出來ず、私もすぐに歸らにやァならねえ」母「デモ何だかお氣の毒さまな、併し何かお話が有ると被仰るなら伺ひませう、サァこれはこゝへ斯うして置きませう。」ト片脇へ寄せる。女兒お里は此のうちに、茶椀は灰にて磨けども、磨きかねたる土瓶の尻、焚火にかけし薫りの、光るばかりに付いたるは、いはねどしるき貧家の様、

見なさへ哀れ増すなるべし。。。誠に召上られにいたさまいか、お米を下に出し、米次郎は、手に取りながら眼が鏡ばせ、よく〳〵見るに先の夜に、久次がいひしに一點たがはず、三十二相備りたる、誠の美人なりければ、心に彌〻戀へを催し、世の間へには弟様へ、實の下りしといふことは、この女兒の事なるべしと、思ひつゝまづ煙草を呑み、暫くありて母にむかひ、米「もシ慈母、私が來たのは外の事ではねえが、此間の晩横濱町を通つた節、門イの淨瑠璃をちよいと立ち留ッて聞くに、聲と云ひ節と云ひ、實に感心なものだ、此の藝を持つて門イをせずともの事だらうアねへかと、連れの男と話し合つて行き過ぎたが、呉々も惜しい事だ、何樣云ふ身分の人かァ知らねえが、事に寄つたら何樣な引き立て樣も有りさうなものだと、夫れに付けても誰か何れねえかやと、困ると云ふと、連れの男がそんなら私が聞いて來ようといつて、お前に聞いたら此處に居なさるとのことと云ふから、と成程左樣いふ事がございましたッけね、エ、夫れでわざ〳〵此處まで入らしつてトさつたのでございますか、誠にモゥ御深切さまナ。」米「其處でマア早い所か、この娘は旦那でも有りやすか、またお前の連合は何樣な仕なさつたかえ。」ハイお話し申せば長いこと、わたくしどもも元より斯うした身分でもございませんが、十年ほど以前、私の連合が浪人いたしましてから、是れといふ家業は知らず、やっとばかりの貯へも、段々喰ひ盡して難儀の中に、去年の流行病で死去りましてからは、御覧の通り母子

の両個、何を仕ようにも本錢はなし、年齢になる娘の兒、能い旦那でも付けるが宜いと、勸める御方もありますけれど、こんな身形になりましちやァ、自己が世話にして遣らうと仰しやるお方もなし、それ故お恥かしい事ながら、娘が果敢ない藝を便りに、漸うその日を送つて居るのでございます。」ト話すうちにも涙ぐむ、おみきが顔をつくゞゝと米次郎は詠めやり、米「フム、そりやァ誠に難澁だネ。しかしいい兒があるなら今に左團扇とやらになられませう。」みき「ホヽヽヽ、どうぞ左様なりませずとも、一生の中に些とばかりも、安心致して死にたうございます。」米「夫んならネ慈母、私が口から直にいふも可笑しいけれど、何と左様いふ譯なら、アノ兒を私が當分世話にして上げようぢやァないか、又其の内に能い目でも出來て、お前方が出世になるといふ事なら、幾日何時でも左様お言ひなせえ、一旦斯うしたからといつて夫れを妨げる様な事はしねえから。」みき「ホヽヽヽ、夫れはまァ御深切さまに有りがたうございます。併しながら形こそ彼様に大きけれ、まだやうノヽ十六でございますのに、他のお兒御たちと違ひまして、世間を見た事はございませず、定めて何かが不器用で、どうもお氣に入りますまいヨホヽヽヽ。」米「どうせ年の往かねえ娘だから、萬事いき屆かねえのも承知さ、それでお前がたが得心ならば、マァ第一此處にやァ置かれねえから、急に能い店でもたづねて、引越す算段からしにやァならねえが、慈母何樣だらうネ。」みき「ハイ私しに置きましちやァ、隨分有がた

く存じますが、しかし彼の女がなんと申しますか――ヱ左様サよく相談して御返なさい、何れ又近い
中に来ませうから、モ一ト聞いてお里に母親は、此方に招きて眉をひそめ、モウアノ方が折角深切にお、
言つて下さるけれど、私にやア何様もイイと言ひ憎いねエ、なぜと言つて御覧、マア第一何處のお方
だか知れず二ツ三ツ馬鹿を言ひなら、町所から名まで名乗つてお出でなさるのに、アノ處があるものか
ナニ三ツたんならマアそれにした所が爺さんが達者な時分も、斯ういふ旦那があるノ、アレ斯ういふ
妾の口があるのと、言つてお呉れの人も有つたけれど、爺様が堅い気象だから、たとへ親子三人露を
啜て、橋の上に寝ればとて、女児を囲女や妾にはしねエと言つて、断んなすつた事があるぢやア
ないか、夫れに死なつてまだ一年も経たねエのに、何程切ないからと言つてそんな事に成つちやア、
爺の遺言を背く様な物ぢやアないかネエ、しかしお前がたつて左様したいとお言ひなら、それでも嫌だと
強情を言ふのぢやアないけれど、成らうなら私も人の懸念ものに成りたくもないからネエ、成程、
お前に左様言はれて見ると一言もねエけれど、自己ア又、折角アノ方が深切に言つてお呉んなさるか
ら、左様したらお前も楽だし、私も又些とは鬱陶気の休む事も有らうかと思つてネ、マアそのやア今
は宜いがネ、他の話を聞くに囲者稼業の者の果敢ないものはないッてネ、なぜといふに、假令儘せで
も旦那の気に背いたら、夫れッきりにされようか、亦捲ない人間が有つても、無心を云つたら愛想

を盡かされようか、鳥渡舞へ話しに行つて居ても、旦那の來た聲がすると、狼狽へて歸らにやァ程か悪し、實に朝晩の氣兼が、姥女よりやァ餘程悪いといふことだから「ハヽヽ、ホヽヽヽ、そりやァ先にも寄り此方にもよるのサ、何も左様極つた事もないわな、しかしおめへの氣が濟まざァ、度々お歩ばせ申してもお氣の毒だから、今お斷り申してしまはうヨ「ト米「左様さネ、しかし折角御深切に言つて下さるものを、氣の毒らしいけれどねえ「ト密々話せど眼と鼻の、間より隘き家の内、米次郎は聞きとりて、米「モシ慈母、お前方の話しあひも大方は聞きとりやしたが、成程歳に似合はねえアノ娘の心操、實に感心しやした、全體私の方でも友達か何ぞを恃んで、お前方へ話しあひを仕ようかと思つたけれど、モシ萬一不承知な時にやァ、暗闇の恥を明るみへ出す様なもの、それよりか直談にする方が物解が能いと、今日は思ひ切つて來た譯だから、出來ても出來ねえでも其處に構ひはございやせん。しかし慈母の前で言ひ憎い口上だが、アノ娘が今の心操を聞いて見ると、猶々慕はしくなる様だ、夫れなら直に私の女房に貰ひ受けてと云ひてえが、サテ世間といふ物は仕憎いもので、假令元は何の何某といはれた人の末にもしろ、當時斯うして居なすつて見ると、往昔の由緒もマァ隱れて居るやうなものだから、何様も親類やその外でも不承知だらうし、マァ〳〵何様か仕様が有りやせうから、お互に時節を待つて縡をするが能からう、いづれまた近いうち來ますから「ト立ちにかゝるを引きとめ、

まア誠にもう、折角御深切に被仰つて下さる所を、彼是と申してお氣の毒様でござります。何様かまた、致し樣もございませうから、便りも少ない私共母子の事、お目を懸けられて下さいまし、そしてこのお土産はまた重ねての節頂きませうから、ドウゾ是れはお持なすつてお出しを下にもとい。す、トなんのつまらねえ義理だてを云はずと、なんぞ兩個が好きな物でも、買つて食べてお貰ひなせエ、トにげ出す如くに出でゆけば、氣の毒なれども詮方なく、後で親子が其の土産を、披いて見れば二朱金四ツ、久しくあはぬ山吹の、花や一時に嬉しくて、につこり笑ふ母と兒が、心のうちこそ嬉しかなけれ。

第六回

抑も一升金一升と喩へしは、繁昌の地の美稱、萬商賣の賣買の群も、集りて聞ゆるは、今日ぞ十月中の十日、蛭子の神は其の往昔、賣買商賣利益の道を、教へ給ひし緣故により、今に至りて商人の、尊ひ祭ると聞き傳ふ。されば、此の日福見屋の米次郎が家にても、惠比壽講の祝ひとて、日中の程より親類緣者、又は出入の者までも、皆呼集會ひて座敷をなせば、その間にまり一席を列ね、席の左右しからぬの、軽き會釋もいつの間に、膝も崩れゝ酒宴の樣、折から明なる鰐きこえて、宇もあまり文句の

下、一は、古びたれども廢らぬ座興、狐けん酒齣摩でお出で、二三折詰その果ては、手拭かぶいと頰冠り、身振聲色郎席茶番、達世が子舍に脱棄てたる、鹿の子の割帶に縫の、小袖を一寸借衣裳、大平の盃左右に持つて、獅子とうでんの舞樂の砌、牡丹の花房匂ひみち／＼、大きんりきんで引込めば、叶と譽めたる聲の下、旁りはせじと爺々蹻折、富士のしらゆきや朝日でとけると、踊り出したる伊勢音頭、にぎはひ增る酒宴に、夜も早亥刻か子刻ごろ、やう／＼客も歸りしかば、かの杯盤をかたづけて、臥房へ入れば米次郎も、母のお柚も甚く醉ひ、そのうへ客の會釋に、勞れて直に熟睡りたり。かくて邸の淸之助も、日中よりこゝに招かれて、酒宴の席に有りけるが、元より深くは飲みえぬ酒を、相の押へと樣々に、強ひつけられて餘儀なくも、辭退しながら醉ひつぶれ、せつなきまゝに座を立ちて、かの四疊半の小院に、人の居らぬを幸ひと、倒れたりしが前後も知らず、熟睡なしたる高鼾を、下女のお紬が聞きつけて、起せど更に正體なければ、蒲團を掛けておきたりしが、達世は是れを頓く知りて、母と兄とが寐入るを待ち、靜と臥牀を抜け出し、彼處へ行けば行燈の、火も絶えだへなる薄明暗咳拂ひさへ袖の中、靜かにこれを搖り起せば、淸「ム、ム、ム／＼／＼」ト云つたばかりに寢返りするを、又動搖つて耳に口、をちせ「淸さんやお起きョ。」トいはれて氣のつく淸之助、起き返りて眼を擦り、淸「オヤ私やア此處に寢て居たかえ。」ト背と心得大きな聲、をちせは口へ手をあてて、をちせ「アレ

「サそんな大きい聲をおしでない、衆人の眼がさめると大變だっ」ト聞いて一心をおしこためし、一寸夫れお
や何時の間にかお客も濟んだネ。」をちせ「ア、モウ衆人先刻歸りました、お前さんはマア眞に寢坊だ
ネエ。」蓋「大層に醉つて一向知らないヨ、ナニ何時だらう。」をちせ「ア、大かた丑刻でも有りませうヨ」
蓋「そして御母樣や兄樣は寢たかのう。」をちせ「それだからサ、宵ににおしと申すのサ。」蓋「オイ／＼承知
だ」トいふ中達世は其處にある、煙草盆を引寄せ、煙草をつぎ行燈の火で付けて出した手に
取りながら、「ヲヤ行燈の火で煙草を呑むと願ひ事が叶はねへといふぜ。」をちせ「オヤ左樣かえ夫んな
らお止しなさい」ト手早に引つたくりて、稍しる煙の中へはたく、蓋「アレサ氣の短えノウ。」をちせ「夫
れだつてもと願ひ事が協はねえとお云ひだからはたきましてネ、ただ夫れさへも氣に掛るのでこれは
氣が揉めて、何樣したら宜からうかと、苦勞でなりませんもの、モシお前さん苦勞は御座
だ」をちせトいふうちにもネ、私やア何卒と斷うしては居られないと思ふ事が出來ましたわ。」蓋「そ
りやア何だか氣になるナ、何樣いふ譯だエ」をちせ「其他の事ぢやアない、なんぞといふとお前がおぶ
りの稼生のわけサ」蓋「お前彼處へ往かうといふのかエ」トいへば、左樣いふ氣になられますと、此
とても苦勞はないけれど、お前さんと斷はならない譯で、イヤいやでなりませんものを、竹と夫つお
やア假令殺されたつて行きはしませんけれど、まだお前さんの御體の爲なくば、涙をホロリと落して、

淸之助が顏を見つめ、涙「誰ぞ達て往けとでもいふのかえ」「そらサア、一昨日も慈母樣が申すには、これ遠世お前いつまでも子供の心持ぢやァならない、モウ十六といふものだから、早いものなら子持になる人もあるぞ。夫れに桐生の事を云ひ出すと、涙を溢さないばかりに否がるが、此間も叔父さんの所からの手簡に、遠世が事は何樣するのだ、全體春中越す積りを、段々延び〳〵に成つて今において何の沙汰もないが、察しるに遠世が親の手元を離れ兼ねるか、但し他に何ぞ蟲でも付いて居るかの中だらう、畢竟他人ではなし、叔父と姪との中、殊には佛が トいふはをちせが父おやをさしていふ。存生の時、堅い約束をもしたものだから、倅にも言ひ含めて、一日一日と指を折つて待つても何の沙汰もないとは、餘りな仕方だ、早々に送つて來るが宜い。もし夫れも彼是と手間どるなら、自己が迎ひに行かう、春中此方へ引きとるつもりで、親類は勿論近鄕近在の知己の人へも、それ〳〵吹聽もして有るのを、斯う延引しては埒もない爺だと、人に後指をさされるも面目ない。但し又遠世に蟲でも付いて來をらぬといふ事なら、まだ婚禮こそせね、結納のとり換はせをしたからにやァ、此方の嫁に相違もなし、いはば密夫だによつて、時宜によれば遠世が首でも持つて歸らにやァ、倅の喜六を初め親類其の他の前へも言解がない、こゝをとつくり勘辨して、當人へも言ひきかせ、又米次郎とも相談して、早々に挨拶さつしやい、ト言つて來たがお前何樣する氣だ、全體桐生の叔父さんは、物事偏屈で、捌きの惡いおつ

かしい人、その上に爺父と借と約束をしてあるといふもんだから、どんな事が有つても變改は出來ないヨ、ホヽヽ此の手紙で氣が付いたが、親は馬鹿なもので、まだ子供だ〳〵とおもつて居るけれど、若しまた萬一他に云ひかはした男でもあつて、夫れで桐生を否がるのかヱ、よもや左樣ではあるまいと思ふけれど、是ればッかりは何ほ親でも知れず、聞いても云ひもしまいが、若しまたそんな事でもあると、お前ばかりか、私も兄さんも、只ではすまない程の分解、こゝの所をヨウク考へて、往くとも往くまいとも、二三日の中に挨拶をしなせえ、ト言はれた時の私の切なさは、何樣でございましたらう。」ト顏色變へての話に驚き、清「その時なんと言つて置いた」ちせ「なにも其樣な事はないがネ、何樣も田舍へ往くのが誠に否だから、とばかり言つて置きましたが、また明日あたりは何樣する、何と挨拶して遣らうと、慈母さんに責められるは必定、マア何樣したら宜からうねえ。」ト萎める花の顏ばせを、みれば思へば胸をのみ、痛めて更に思案は出ねど、切羽詰りし兩個が身の上、清之助は胸をすゑて、清「親兄の爲身の爲だから思ひ直して桐生へ往くとするが宜からう。」ちせ「左樣しても宜いのかえ。」清「よくねえと云つて何樣するものか、そりやア叔父樣の手紙の通り、いはゞ密夫だから露顯れて見りやア、兩個ながら縛り首は當然だ、命が惜しけりやア切れ仕舞ふより外はあるめえ」トいへば遠世はすつと滑寄り、「それぢやアお前は命が惜しいから捨てたいのか、私は又斯うなる始めから、

ッ、萬一知れて、桐生の方からむづかしく出れば、その節は死んで仕まはうと覺悟して居ります。併し私のお蔭で、お前さんにまで難儀をかけちやァお氣の毒だから、モシ私が死んでもお前さんは達者で居て、思ひ出した節は、何樣ぞ廻向でもしてくださいまし。」ト云ふより早く顏に袖、泫然と泣き伏せば、清之助は溜息吐いて、清「お前もおつゥ僻言をいふのゥ、他の娘に瑕瑾をつけ、夫れ故その娘が死んだのに、どの面さげて許容々々と生きて居られるものか、マア義理づくはさておいて、お前に別れて片時も、生きて居る氣はねえから、お前死ぬなら死になせえ、おいらも跡から追着いて、三途の川とやらは是非一所に渡らねえけりやァならねえ。」をち「どう考へ直して見ても、私はモウ生きてはゐられませんから、彌お前がその氣なら、迚もの事に手にかけて。」ト女兒心の一筋に、思ひ惱みし胸の闇、膝にとり著いて、わつと一聲身を震はせるを、見るだに辛き清之助は、遠世が脊を摩りッゝ、清「實にお前が其の料簡なら、自己もしつかりと覺悟を極めた、左樣して見れば翌明後日と、日を延しても同じ事、今ッから直に何處ぞへ行つて、見ッともなくねえ樣に一所に死なう。幸ひ今日は夷講で、兩個ながら衣服も著かへ、嗜みの脇差をさして來たのも、是れで死ねと蟲が知らした事だらう。コレサァ早く支度をしなせえ、ドレ帶でもしめ直して。」トいふに遠世もたちあがり、しごきに縊る高端折、母と兄とが臥房の方を、物は言はずに伏拜む、是れ今生の暇乞ひと、思へば涙はら〳〵と、晴

き火影も猶闇く、渾身震へて歯も合はず。清之助も支度をなし、是跡で見れが知れたなら、さぞ御母さんや兄さんが、私を憎く思ひなさらう。」をちせ「それはお互ひお前さんの、御兩親も私をも、」跡は聲さへ打ちくもり、そろりと明ける緣側より、裏庭傳ひ切戸口、忍び出でゝ、四邊を見れば、月は稍にありながら、早明けわたる東雲の、かはい鳥も鳴きわたれば、兩個は眼と眼見合はしッゝ、思ひの外に夜が明けて、都合は悪き事ながら、今更宅へは歸られず、兎も角もして今日を暮し、このゆふぐれを死出の首途、見とがめられぬそのさきに、手に手を引き合うて走りゆく。

作者金水曰く、往昔の諺に、風來らざれば樹も動かず、船押さざれば水濁らずといへり、人情の元より放蕩ならねど、一回不正の門に入りては、再回是れを改めがたく、殊に色慾の春情に於ては身を喪ふも珍らしからず、これ人間に其の身あることを知りて、父母の遺體といふ事を忘るゝが故なり。或人の詠吟に、

我が身より惜きものはなけれどもおなじ父と母とがかたみとおもへば

いとあさ〳〵しき言の葉ながら、身を慎むの一助となすべし。

閑情末摘花初編卷之下 終

末摘花二編之叙

予此の雙紙を編る時、友人来りて難じて曰く、それ稗史は固より無用にして、紙墨を費すのみ、更に益とする所なし。然ばれ童蒙輩をして、善に導き悪を懲し、忠臣孝子義夫節婦の、行ひを説くをもて、世教の一助となすなり。然るに往々淫に陥り、由しなき人の害ある事なく、たゞ一人の孝女あるのみ。是類にしても猶世教に、益ありとすべけんやと、問尋しつ、所謂に當れり。然りと雖も世態を知らず、将作者の用心や、知らざるに似たるかな。遠世清之助が淫奔なる、父母を捨て遠く走れば、其の根矢よりも厳かにして、背者の恩に日々に遁れ、夫には誠を尽して、その身を侵さる事を嫌はれて、命はたゞに諾する真似して、命を断さんとするの類、實に淫奔不孝の者、置るゝ所なしと雖も、一個罪障消滅し、且過ちを改めたれば、後々は奈何にやならん。未だ結尾に至らざれば、その顛末を知るべからず。又粋次郎は清潔か、色を愛で香を慕ひて、無欲の黄金を寄せども、恥を捨てずよく斉ふ。こゝに於て罪なきに似たりと雖も、同胞のことに就きて、大いに苦心す。これその報といふとも可ならん。ここに房中はその心、孝にして且貞なり。其母に事へて違ふ事なく、よく父の遺命を守る、貞女の亀鑑といふべき身も、薄命にして時を得ざれど、かならず花さく春もやあらん。是等を以て勧懲の、助け

けにもさらば奈何にといへば、友人點頭いてユハイ左様ならば二
于時天保十一年如月雨中徒然の物語をそのまゝ序言に換ふるのみ

松　亭　主　人　誌

閑情末摘花　二編巻之上

第七回

山谷通ひの馬の跡に、蹴あけしものか泥町と、呼なしたる堤の下、いと些少なる茅簷、用心きびしき軒並び、ほがら／＼と東雲の、明けゆく空に朝がへり、下駄に雪踏に足音の、高く響きて騒はしき、折からこゝへ来かゝる両個「ちよツトマアレ満つたんこゝでございますヨ」「ウフム、建屋といふ宅だのこゝがおまへの元つかつた女中の宅かえ」「さうさネまだ寝て居ますのかネ、朝寝坊だねえ」「ヱ ハ、、、、、、遠此方が早いから左様思ふけれど、例もお前さんぞの起きるのは、辰半刻時分だ」「今朝はあれ見な、まだ東天様が、ちらりと出た計りだものネ」「さうさネ。それ私も又大層おそいかと思ひましたわ」「ヱ 陽気の春だけれど寒いから、、漂泊して居て、他に見られても聞が悪いよをさまヨ、お敲きなさいヨ」「ヱ 何こゝの宅に違へないかネ」「又他の宅でも敲き起すと面目ないネ」「さうさネアニ建屋に違ひありませんヨ」「ヱ よし／＼」ト建屋へ足を踏んかけて、トン／＼／＼と叩くとお頼み申しませう」トいふ声を聞付けて、内より戸を細目にあけ「ハイ誰様でございます」トいふはこ

の家の女房にて、以前福見屋に仕へし下女、名をば[illegible]はといふ者なり。彼方此方を見廻して、おや[illegible]さん見つけ[illegible]まア〳〵、お嬢さんよく入らつしやいました。そして大層お早く、昨晩北里へでもお泊り遊ばしたのかえ[illegible]、些と用があつてネ[illegible]何處から其様な[illegible]お澤はそれと見てとりあへず、態と氣のつかぬさまにもてなし、[illegible]左樣でございますか[illegible]〳〵お上んなさいまし[illegible]戸ふ絞りあけ、鍵を外しばかりにし、落ちる跳橋これぞこれ、粂路の橋にあらずして、中は綺麗な兩側お部には、[illegible]最中の樓なるべし。通世は先へ立ちて緣側へ上り、[illegible]寢込みへ參つてお氣の毒[illegible]お前さん、お客を澤山致します時は何日でも斯うでございます[illegible]二階ひながら、蒲團を手ばやく疊み、[illegible]お嬢さん、こゝは今掃除を致しますから、[illegible]〳〵二階へ入らつしやいまし[illegible]、そしてお連れさんが有るのでございますか[illegible]其のお方も此方へお上がりなさいましなといひつゝ清之助に對ひ、[illegible]些との間、二階へ入らつしやつて下さいまし、今にお火を上げます[illegible]お座敷は私が片付けますに[illegible]朝ッぱらから、上んだ御厄介になる事さネ[illegible]御邪魔をさせ[illegible]通世樣こゝおやア邪魔だ。二階へ行きませう[illegible]そんならおさきはお二階へ行つても宜いかえ[illegible]といひながら[illegible]人もろともに梯子を[illegible]〳〵[illegible]、眞暗だ[illegible]こゝへ寢よう[illegible]、草臥れた樣だ[illegible]お前も草臥れたらう[illegible]、内を出た時は、實

に胸が悩々して、足がぶる〳〵慄へましたッけが、もう大きによくなりました、今頃は皆人が、
[illegible]萬一此處まで[illegible]
[illegible]
でも滅多に氣は付くまいが、[illegible]
[illegible]
[illegible]清之助が[illegible]清之助は手を[illegible]
に苦勞させたり、恥をかかせたり、不埒な自己が所爲だから、さぞ憎いと思ふだらう、堪忍しなさい
自己も[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]不埒な自己の[illegible]
[illegible]
ん[illegible]、清之助が[illegible]肋の邊へ兩手をかけて縋るを、清之助は[illegible]、兩手をしかと

押へ、眞ア慄つた〳〵。まだ朝飯前だから、そんなに體を搖ると、ひよろ〳〵するヨ。」をち世「すヤ弱いねえ、私なんざア。」清「そりやアまた女と男と、同樣になるものか。」をち世「なぜえ、男は女より か不殘強うございまアす。」清「他の人は何樣だかしらねえが、自己ア性質が弱いせゐか左樣はいかねえ。若し弱くツて御不足なら、是れから丈夫な人をお見立てなせえ。」をち世「アレ又そんな氣障い事をお言ひだヨ。私やア他の人は否でございます。」清「フヽうまくいふ。それでもお前此間も見てゐれば、郭の若エ衆の、ア、なんとか言ツたつけ、アノ色の白いソレ少し薄痘痕のある人と、何だか嬉しさうに談話をしてお在でだツけ。」をち世「オヤ〳〵、何日私が、誰とそんな事を致しましたエ、サア言つてお聞かせなさいまし。私やア今までお前さんより他にやア、男と對坐ひで噺を一席したこともありませんものを。お前樣こそ先頃お淺草の時、何處かのお娘御さんと、竝んでお在でなすつて肩を摺付けたり、股を衝突いたりして、時々顔を見ちやア、莞爾々々と嬉しさうにしてお在でなすつたぢやアございませんか。彼は何處の女兒御でございますエ。そんな事をば棚へあげて置いてからに、眞に憎らしいヨ。」ト膝の邊を爪れば、清「アイタ、、、オヤお爪りだネ、覺えてお在で。」トいひながら、遠世が太股一滿極い邊を、人差指にて突けば、をちせは嗟つと飛び退きて笑ひ出し、をち世「アレサ私やア、こそばゝつちやア否でございます。」清「其樣に退げる事もあるめえ、モウ〳〵探りはしな

いかなマアこゝへ來なヨ」ト立キつゝとかえて眺しておいてお探んなさると可きませんヨ」ト並ナ二人を、可愛いお前の香がることをするものかネ」ト手早く円標の棲をおさへて引きよせる。當下はしごの音、トンノ／＼と聞えて、下より來る女房お澤が、煙草盆を片手に提げて、片手に長羅宇の煙管を持ち、「エヽオヤまだ眞暗でございますネ。つい氣がつきませんなんだ」トいひながら、二階の戸を繰明ければ、障子へ當る旭の影、晃々と瀧明くも輝けば、「ナニサ、ヱヽ大層遅いやうだねえ」トエイ、エこゝの二階は東向きでございますから、夜が明けると直にお天道様が當りますヨ。實は今まで戸を明けずに置きましたのは、私の心意氣でございますわネ、、、、ト、圓信が顔をじろりと見れば、遠世は恥かしさうに、「エヽ其マレ否な、お澤だねえコトネ、そんな譯じやアないわネエ清さん」ト清之助の顔を見る。「御、ハヽヽ、モウ何様に首肯するが宜かろうヨ。何と言つても言譯はないねえから」「エヽオホヽヽヽ、左様サ、また斯うしてお若いお圓信が、朝霧掃つて入らッしやるのは、神合がないと被仰つても、そりやア承知致しませんヨネヽヽ、併しお前さん方は、何日お宿をお出遊ばしたのか存じませんが、曖昧母様や、お兄イ様が御苦勞になさつて入らッしやいませう」「アヽ其處でネ、内室さん、お前に折入つてのお頼みがあるのだがネ。よもや此處等まで尋ねて來もしまいが、萬一尋ねに來ても、イヽエ此處へは來ないと言つて置いてお呉れな。たとへどんな事が出來たつて、けつしてお前

い苦勞にやアいけねへから「エヽハイ〳〵、マアそれやア申しても置きませうが、些と困つた事がございますヨ「ナニサお澤なにが困ることだえ「イヱサ此間もお兄イさんが、北里へのお出でがけだと言つて入らツしやいましたが、例でもすいと二階へ入らツしやいますから、モシ萬一そんな事があると、間が惡うございますネ「ムヽ左樣サ、そんな事があつちやア申しわけがねへ。夫だが、併しお世話になるなア今日一日だ。晩方にやア向島の方へ巣を換へるから、お氣の毒だがそれまで置いておくんなせへ「ナニサ、ハイサ、それやア何日までお出で被成つても宜うございますが、只今申した一件が些と氣になりますのサ「イヤ夫はおれが請合だ。何處ぞ他へ往きませうか「サア他へ往くと言つても當日中困らアな。たしか米八が來たら來た時の事サ。どうも詫方がねへ「ハテサア今日寄入らツしやりもなさいますまい。又入らしツてもどうかして、二階へ上げ申さない樣に致しませうヨ「ドヽ何樣か宜いやうにお賴み申します「ヱヽモウ御膳でもあげませう。お前さんが御酒を上りますか「イエモウ、エ、私やア、イヽエそれでも些とばかりお聞なさつて貰はうぢやアないか「ト俵より二朱金を一ッ出し、此内室さんこれで何ぞ、一寸したものを買つておくれ「ハイ〳〵、まだお飯は何も出來ますまいから、玉子にでも致しませうか「イヤ何でも宜いわネ、しかし飯の精をつけても困るネ「アレサおかれさ、おふざけでない「ナニヨネヽ、、、お妹さん、精のつくのは宜いぢやアございませんか「ト言ひつゝ立つて下へ行く

程なく銚子の肴を持下ろそへ、一人が膳を持つて来り、これよりお浮を對手にして、暫く酒宴なす

みたほどに、はや亡刻過ぎにもなりぬべし。折から下に人音ありて、きやく〳〵騒ぎ立てしが、ひく〳〵、

聞きつけておすはは、階子の間に耳をよせて、よく〳〵聞けど、何だか聞き分けられない様だから、

立つて下へ往けば、雜用に雇やりけ、障子を細目にあけし、一層お明すはは道で、それもうこ

ざいやす。といふより、お連れを行きたれ、何でござります。お辨さんはやうやう二見當で

ございますね。死亡とは上んでいますとも。お樣はお早くやすか。大層お急ぎで

ございますね。今日は當ないと御同伴なさい。道の所でございませんや。お腹が有つてね。

まあ一寸と大變とはネ。お前様のお宿のお取込んでございますか。お前さんの宿の様子を

ナニネ、何様なすつたのでございますネ。ミシ御病氣ででも。とその貴公は知りなさるめえか、

らぬ顔をして、聞けば氣治は貴公のあたりに、ぬたなし汗を拭き、一同で、他の方でもねえ、貴公見

親の嬢さんが家出して、大騒ぎ。たれとも知らず、此の間から

種々の詮議をされてあるから、先刻番所へ届けたが、今朝からまださうした咄もあねえから、

お騒ぎだらう。お袋様さんは無闇に泣き出して、それで此様もの湯にも入らないので、

調子といふもの、宿の様でもつないで、一種で若嫁にしてそこでたまるのを見ると、實に氣の毒でなされ

えから、ドレ夫れなら私も探しに出ませうと言つちやァ見たが、大概心當りの所へはお宿から人が出るし、探し所もねえが、米さんが被仰るにやァ、萬一泥町の龜屋へでも行きやァ仕ねえか、先頃俄の時分、連れて行つた事があるから、宅は知つてるし、內室さんは原遣つた女でこゝろ易いから、賴んで往くめえものでもねえと被仰るから、夫れで大急ぎで來たのス。遠世樣が此處へ來やァなさらねえか」ト聞いてギツクリ顏色に、覺られじと氣を沈め、さよ「そりやァマア、何樣いふ譯でございますねえ、他にお對手でもありましてのことかねエ」く「左樣サ、鄰の息子さんも、昨日米さんの宅へ、夜講に呼ばれてから、宅へ歸らないといふから、モシひよつとその人かも知れねえのス」さよ「オヤマア遠世さんもまだ御兒さん方の樣に思つて居りますが、モウ情合戀をする樣にお成んなすつたかネヱ、早いものだネ、、」夫れは左樣とマア大變でございますネ」ト知りつゝ他を欺くは、己が心の惡かしき、ものにはあれど餘儀なくも、明けていはれぬ時宜なれば、斯く挨拶をばするものから、流石背の主人たる、人の苦勞と聞くからに、穩かならぬ胸の中、自然と顏へ彰はれぬべし。

第八回

二階の兩個は箸を置き、顏見合はせて息を飮み、かの縫箔屋の久治が口上、聞けばさてはとて胸先へ

釘を打たるゝ切なさに、遂世は思はず眼にうるむ、涙を襦袢の袖で拭き、聲を低めて清之助が、耳の傍へ口を寄せ、きよせ「アレお聞きなさいョ、繼母さんが眼を泣きはらしてお在でだよ。まだ死んだか活きたか知れないでさへ左樣だから、眞正に死んだといふ事をお聞きなら、何樣にかお歎きだらうと思ふと、實に今食べた飯が胸に塞へますよ。尤もそりやァ私の宅ばかりではない。お前さんのお宅でも、爺さんや繼母さんが、さぞ按じてお在でなさいませうと思ふと、夫れも誠に氣になりますわ。」清「そりやァどうせ騷いで居るのサ。私だつて親に歎きをかけるのが嬉しかァねえが、何樣も斯ういふ破目に成つて來たから詮方がねえ。お互に不孝の罪は、未來でもその未來でも、消える樣があるまいと思ふョ。」きよせ「ネンネ何樣したら宜からうかと思ひますわ。」清「そりやァお前初めつから、その位の騷ぎは知つて居らァな。今更夫れを聞いて膽を潰す程なら、今ッから宅へ歸るサ。久治に連れて往つて貰ふと、丁度いいぢやァねえか。」きよせ「エ、ヤァお前さんもいい氣然だねえ。今阿容々々と歸られる位なら、何にも氣を揉みは致しません。何ぞといふとそんなやぶれかぶればかり言つてゐるに、人に氣をおもませだョ。」清「ナニ氣を揉ませる積りぢやァないが、マア左樣いふ理窟だらうぢやァねえか。」きよせ「お前さんは男だから理窟もよく御存じで、濟ましてお在でなさるけれど、私やァ左樣な事で、あんな話を聞くと、寔に悲しくつてなりませんョ。」ト泣かじと齒を嚙みしめても、堰き來る淚

せきあへず、思はず知らず噎せかへる、聲聞かせじと顔に袖、あてゝも漏るゝ涙聲。久治はだれとも氣がつかねど、幾もつ噺のたとへにて、お澤が耳には入るものから、思はず二階の方を見上げて、それと誦らぬ咳拂ひ。きよ「イヽエ、最うたれだから、年頃にお成んなさると、男でも女でも、お心遣ひでございますのサねえ。アノお孃さんなんぞは、實に貞やかな大人しいお性質でございましたのに、何樣いたした事でございませう。」久「譬への通り思案の外かネ。私なんざア固來從端な人足だから、他の事はいはれねえハヽヽ。」きよ「お前さん今もつて三浦屋へお出でなさいますか。」久「エヽ、左樣さ、折節はネ。」きよ「アノ孃はまた、とんだ實明ものでございますネ。」ト態と大きな聲をして、紛らすお澤が氣あつかひ、折から二階で、なるせ「私やアいつそ今死んでしまひたうございますよ。」久「何だ確固な見た樣な事を言ふぜ。どうせ死なにやアならねえ體だから、晩に死なうとさ。」さは「私は熟々考へますと不測でなりませんわ。なぜと言つてお見なさい。お前樣とついした事から斷うなつて、闘所に死なうとまでは、夢にも思はない事でございますものヲ。」トまたすゝり揚げ兎に角に、涙聲きは女子の平生。思ひかねし清之助も、倶に涙の露けさに、手を交きて居たりけり。お澤はやう／＼久治を歸して二階へ來り、きよ「聞えましたらうネ。」由「アイきこえやした。右に就いてなおせさんが、この通りの懸歎で實によわるのスヨ。」きよ「ホンニ陰ながらも左樣存じますヨ。お兄イさんは刀劔のこと、それ

に兄妹となりますと、お前さんの前だが、お互にそれ程にや、悪はないものでございますけれど、親御様は又格別で、お内様が嘆、御苦労を遊ばしていらっしゃるだらうと存じますと、猶に一ト入おかはいゝ、涙を雨雫と落せば、遠州はこれを見るからに、憐憫まさる面ざしに、やゝしばし貝殻へうち伏して、暫し立ても咽返るを、お澤は肩へすり寄つて、モシお聞なさいまし、お悲しいは御尤もでございますけれど、是れも不運、因縁づくとやらでございますう、真面目に承つて申す程に、さぞお寂悲しいと思召すなら、先から親御様の御修羅な通りに遊ばすが、宜いと申すのでございます。其處が弱気の寂いとそれら申す譯で、仕方がございませんから、何卒この末を御賢察で、仲よくお暮しなすつて、そして御姉弟をなさるのが、何様でものことですから、必ず悲いなどと御問ひなさらないやうにしてくださいまし。と一ト筋に言甲斐なしとおぼして、その赤心に愧たらうか、思へば又も此世に、未練たる、涙の泉、乾く間こそなかりけれ。

斯くてその日も暮れ果て、暗時にもなりければ、両個は密かに相談し、ここもとを逃れて、命ならぬに捨れなとの、日を重ねればとの中に、遂に遠国へ引分られ、今更に逃ずる術もなし、他に実は入れられて、世に住む甲斐もなきうちに、先だってしまはれば、勝って取戻し、頓て、お澤には遠国なる婚前の方に往くべしと、俄かに計りて、彼を迎へて田舎道、

辿り辿りて五六町、こゝは端芝の郷にして、相善寺といふ寺の大門、左右は松柏生ひ茂り、今は千種も枯れ果てゝ、霜に殘れる菊一輪、移ろふ色の邂逅に、見ゆるも哀れ世間は、何れか秋にあはでや果てん。」折しも告ぐる寺々の、鐘も無常を告げわたり、はや遠近も見えわかぬ、誰彼時といふまぐれ、兩個手と手をとりかはす、是れぞこの世の愛別離苦、見とがめられぬ其の中にと、樹々の茂みへ入るさへも、屠所の羊に異ならず。

萬「まアこゝまでは來たものゝ、モウ死に前が近くなつたかと思ふと、男の身でさへ心細くなるからお前はさぞ悲しからう」ならせ「アレモウそんな氣の弱い事を言つてお呉れでない。昨夜宅を出る時から、死ぬのは覺悟して居ますれけれど、先刻お母さんが泣いてばかりお在でだといふ噂を聞きましてから、何だかモウ氣が弱くなつて、何樣したら宜からうかと、哀しくつて成りません」ト又繰り返す苧環の、縺れてとけぬ胸の內、淸之助も淚ぐみ、「其幾千言つても返らぬこと、お前ばかりか私にも、兩親のある身の上、嘸お歎きなさるであらうと、夫れを思へば哀しいけれど、今更いふは愚癡の至りだ。サア遠世樣何にもいはずに覺悟の通りこゝで死なう。」ト兩手を把つて諸共に、顏見合はすれば我知らず、潸然と落す戀水の玉、その玉の緒も今こゝで、切れるは何の因緣ぞ、死んで未來は蓮葉の、一ツ臺に座をわけて、住むとは言けど此の世にて、九尺二間の寥住居より、猶も鬱悒き業にもやと、

いと淺はかに思ひとる、幼き心緒さらに、哀れます穂の尾花、かきわけて兩個は坐り、これぞこの世の別れかと、物をもいはず手に手をとり合ひて、暫し涙にくれけるが、「何時まで言つても同じ事、人の來ぬまに覺悟して」と、兼て準備の脇差を、抜いて手に携へてやう〳〵と、鯉口四五寸ぬきかければ、逢世は忽ち雙掌を合はせ、南無と唱ふるその折から、閃々と光る提灯の、明りに兩個は悸として、身を潜めてさし窺ひ居る、かくとも知らで來懸るは、年は五十を過ぎて、六十に近き一個の老爺と見るも、鼠色の着附衣、裾短なるこの上に、紺無地羽織も木綿の帯を、細身なる締じと、目深に頬冠りたる、古提灯を右手にもち、左手に杖を突立てて、往くに歩むさま徐、心細くも時々、念佛聲ふ〳〵進みしが、兩個を見つけて立ち止りに、足を留めて灯打振し、まづ、「これ〳〵若い衆」と言ひかけて、此方へ立寄り、提灯上げて顔を照し、兩個が顔を覗んとするに、兩個は面を見られじと、暗き木蔭へたむけるを、翁は立ちよりて、「ハヽア今の顏が相對死をしようといふのかと見付けてまたお若いのに、何樣いふ譯かは知りませんが、夫れは大きな御料簡違ひでございませう、短慮をなさるからにやア、言ふにいはれぬ分解もあり、切羽詰つた事でないとは、聞かずとも知れて居るが、定めてお兩親もござりませうが、相對死をしたとお聞きなされたら、マア、どの樣にお歎きなさると、察してもお親が悔い、若いお前の前後見ずに、可惜命を亡くさんで、世間には理がある事で、又が互の間

いて見れば無理といはれぬ所もあれど、死ぬ程に思ひ詰めたら、たとへ野の末山の奥、どんな所に住居して、手鍋はさげるとまゝに、濯洗濯賃針線、又は畝の根を掘つても、活業はできるもの。畢竟各々の働だと思ふのが料簡ちがひ、親から貰うた大切な、體へ瑕をつけてはならぬ。又親々の亡い後にも、それは親御の形見の體、一生満足で置かにやならぬと思つた日には、指の先でも我儘自在にやならぬ。君相がこんな形容をしまして、不孝驕慢事を申す様でござりますが、私の良人は少しは學問もいたしたもの、平常はなしに致したのか、時にとつての聲色つかひ、たゞ今も左様ではござりませんが、主を見も知りもせぬ老女が意見、兩個は胸にこたへつゝ、何と回答も差支草の、花なになくにこなたなる、衣紋におきて涙ぐみ、「何處のおかたか知らないが、段々の御意見は、とつくりと聞分けて、今更後悔仕ますけれど、一個ならず二個共、親を捨てゝ死にに出て、又阿容々々とは歸られず、知音知己親類へも、行く事ないれば死ぬより他に」老女「仕方がないとは不躾ながら、そりやア險い御料簡、私共の言ふ事が、お耳へ這入つて先非を悔い、死ぬまいといふお心なら、食ふや食はずの私共でも、人の命の助かる事、當分お世話を致しませう」と世に信實なる詞を聞いて、遠世も不覺の涙にくれ、「何處の誰様かは知りませんが御深切の其のお詞、身を切られるより切ない御意見、一々お前のお言ひのが、理でござります。成らう事なら生きて居て、親へ孝行したいもの」と聞いて老女は打

點頭き、やがて両個を伴ひて、西をさしてぞ急ぎける。

閑情末摘花二編卷之上 終

閑情末摘花二編卷之中

第九回

何くれとなき甘美い物を擔ぎて「今日は宜しう」と賣步行く人、北里の禿が片言に、「宜敷やさん」と唱ふるよしは、近曾北郭の粹書のうちに、こと〳〵しく書かれたれど、この青樓に遊ぶ人は、各合點の事なるべし。故人京傳子が青樓の、晝の世界を錦の裏と號けられしこそ妙案なれ。かの宜敷屋の來るころにや、しかも其の日は雨ふりて、簾子にうつる日の影なければ、屏風の中は猶さらに、旭は高く昇りても、いまだ黎明の心地ぞすべし。什麼こゝは三浦の樓上全盛清鶴が座敷にて、客は福屋の米次郎、雨降ゆゑの逗留ならん。折から部屋持の竹川、今起きてやう／＼湯へ這入つたといふ面持にて、濡手拭をさげて、清鶴が座敷へ來り、屏風の外から、竹「清鶴さん起きて湯へでも往らッしやらねえかエ。何ぼ昨夕久しぶりで逢はしつたつて、其樣に勞れちやァ、見ッともないうございますヨ」ト大きな聲で起すのが、耳に入りて目を覺し、きよ「ナンダ竹川さんか這入んなまし、今朝は又大層に早く起きたノ騷々しいヨゥ」竹「ホ、、、、早いもたいもんだえす。モウ宜敷やどんが先刻來て仕舞ひま

したものヲ」ト一嘘を吐きたまし」ト言ひながら起き返り、枕元の煙草盆の火入へ手を翳して見て、

ヨ「竹川様後生があるが、聞いて呉れなましな。座敷の子供はまだ起きて来ませんかノ。」[illegible]なんだ火でおますか。ドレ私が入れて来てあげましやう」ト[illegible]と異き、内に見て少し前の思入、[illegible]なんであらう[illegible]」ト一寸、なぜ其様に声を潜[illegible]でござりますか[illegible]ヨ「米様だつて誰にやア、口留も仕なさすな」ト[illegible]、「[illegible]様ちやア、あのよへんが、[illegible]女郎さんは、皆帰りしつたと思つて居ましたが、[illegible]ト火入を持行き、次の間の火鉢にある火を入れて来れば、米次郎も[illegible]、[illegible]ましたね。ナニまだ其様でもおますまいに。其処へ[illegible]ましてさ[illegible]、お前は[illegible]に[illegible]よしく来なさませんよ、何様ともしつたのか[illegible]を聞きに来ておくれと頼みましたけれど、[illegible]お客衆が落合つて、ツイ来ましなんだと[illegible]、「何だか宅に[illegible]居られませんなんだ」ト[illegible]様さんまア、文様[illegible]して居なしつて、[illegible]おますかえ。道理で此間から[illegible]さんが来ました[illegible]、[illegible]すると悪いからと言[illegible]ますから、[illegible]所か、馬鹿気た事で気を病んだ[illegible]

て仕往た所が、死生さへ分らねえ。一首でもヤア何様したんでえせう。何だかお前様のお妹御さんか男と楽さしッたんぢやアありませんか。主人様ア、どうで自己が咄したから其の位な道化に仕てうたふのサハヽヽ一首なんぞはまアお前様に実にお安いことで有りますヨ。ネ左様さ、実にお若いから遊戯が大好きだハヽヽ一首ッしきやア、お両様、左様言につしやるけれど、同じ遊ぶ中にも種々にしてつしやるから言うことでアネ、又今の頃では遊戯をいさつしやるは不様なら、それサア賢いのおやア有りませんか、馬鹿らしさア。ネヱ清衛様ニ一よ、ほんに左様さまね。ちと明と仕まれて遊戯をしないやうな人には、夫れこそ軽ッくるしくッて、噺が出来ませんよネ。一首をして遊戯をしないのは、想像がないくつて、行渡りが悪いのでありませんかネヱ。夫れより余を仕て、自己稀得を頼んだ。夫れでもお前達が後来男の児を持つたら、コレ遊戯をいそいで往くと可かねへ、と言ふだらうハヽヽ一寸見ても私やア左様ぢやア有りませんねヱ。金の工面をして遊戯に遣りますわ。自然私も其の気でさアすと一寸ハヽヽヽ大笑ひだ。当下になつて見てやりてえヤア。コウ夫りやア左様とヤア。宜い起きて、酒でも飲んだ時でも食ふがやアねえかい。早次の間へ今ずお銚子が来て居ますわ。サア左様かい。そして何ぞ甘美い物を誂へて遣んなよ。今に家族が遊びに来るだらうから、大盆を附けてやんなヨ一寸ちやア子供には何様したんだのうと清花挨拶し　さんはまだ寝て居るかノウ。一首中キ今湯に這

「ハイ」と居りましたわ、」とうその例でもなくもや〳〵とお睦、少し居て、「来いへ〳〵、ご入り

できまする花定の家を仲町へ出でゝ行く、折から客をうつの前川許、迎をも待たで又大橋に渡つて来

た。「そしてはそんな聞きなさいまし」と、と贈水をとつて来ませう、こゝへ出直し」と懐にて、歌舞伎の懐紙を持つて来た、

婦人の下より蝦蟇の面を出し、楊枝の房を添て出張れ、喧しく出し、料理屋に参りませうか、俺と

参ね、雨に際し、ないと答へて、若かる所へ十日〳〵と会ひ名妓は最勝、おつと立寄て

、思ひきつに、お依さん、言葉で、秋は所々の客を迎へて、これ床の間を寄せて、それを掛けされず、随筆

と詠られて、嬉しかる饒穣あり、ここに権妻やもの情に、相日を待ちて見ゆるなら、青中を成

かけ、綺語し、或は詩人の素人として狂言に浮かべて、こゝの中つ言葉のおちぼ、又語可して不可として

以前を流行に致しましよとして、其儘にも其儘へ二日も出し、或は三藏して、人を集めるに至る衆を、

泊か、茶の昔をふれて事に情趣を寄せ、近頃はいと多いなりと云ふが、此の家の裏山に、一端の湖に流る

とけれど、大方楓に眺めあれば、来賓と称して、一人より二人に、お客様みつき、みやこの花、さぞ

面白かつた。」それを言ひ、雨と言ひ、とつけるあはやみ、花はぬれつつ、あまりに

南花さんと言ふぞ付けて眺めましたし、またそれぞれ

、たまたま、日頃の京都にて、其の事の後へ、何うか

盃にて、取散らしたる盃洗鉢、客は曳摺りて廊下へ出る。この時清蔵は小楊枝を使ひながら、其の上に坐り、煙草をつけて出し、「米さん昔日お前様にも申した通り、そのお年になると、館に年が明けますがネ。お前様いまでも私を何様かしてお見んなはる気かネ。勿論知つて居さつしやる通り外に断うといふ客人はなし、お前様許りお客だけれど、又今度の取込で何かで、左様も往きますまいが、それ段々と先が短くなつて来たから、實に氣が揉めてなりませんわネ。全體は春のうち出ると、都合が宜うござますけれども、ネ、左様ネ、確かに月の朔に明けるのだつけノ」米「二十五日でござますがネ。それ十七八日の頃かい、見世をば引かせますわ」清「左様か。なんにしろ間の悪い運だよ、今度の春きに就いても、餘程遣つたから、夫れにお前へ往方が知れねへといふもんだから、ヒシ萬一川へでも這入りやアしねへかと言つて、網打を頼んだり、六人（これは網にて雑魚をとるをいふなり。）を雇つたりして諸所を探したから、人知れねへ金が入つて居るのサ、然もなけりやア暮に片を付けると、正月の節から仕舞ひから、祝儀だの何のかのと、無益な事がなくつて宜いけれど、マア成丈自己も都合して見ようヨ。」米「二間様にしてもこゝで正月をすると三十両は入りますから大變でございます。夫れにまた勤める體さますから、内證でも金を貸したがつて、ヤレコレと言ひますけれど、私やア我慢して些とも借りませんのネ。」清「マア借りねへが宜いのサ。」一トし両個語らふ睦ましさ。雨は頻りに部屋々々も、唯寂寥として下

座敷に内藝者が淺ひの三味線に聞とれてもの寂し。當下廊下をさや〳〵と、急ぐ足音耳に響きて、清

花が座敷の、障子を明けて女が錦「清花様、アノ料理茶屋の御通行おやアおわりませんか。」ト云ふに、清花

は火鉢の側に本を見て居たりしが、[illegible]お前は[illegible]の、[illegible]の内[illegible]でございましたか。[illegible]ハイ

左様でございます。[illegible]

くら、左様申してお呉んなさいナ。」はな「アイ。」ト立つて上の間の扉を明け、[illegible]の由をいふこ

「左様か、何の用だか此方へ通して呉んな。」ト言ひつゝ[illegible]の上へ[illegible]を迎へ、お清は[illegible]の

外へ坐り、さは「旦那よく入らッしやいました。[illegible]御通行でお[illegible]でございまして」

きよ「オヤよくお出でだネ。清花様火を一ツ呉んなましっ。」さは「ナニお構ひなさいますナ。」[illegible]の

に何の用だ、そして今日居るといふことがよく知れたの。」さは「ナニ[illegible]

聞達[illegible]から[illegible]御神上[illegible]、[illegible]

事は昨夕からお歸り被成らないが、[illegible]直にやア歸られ

れ[illegible]お[illegible]て來て[illegible]か、そりやア御苦勞

だ。久次が何の用だ[illegible]、今朝お[illegible]で[illegible]、[illegible]様が被御るに

やア、[illegible]郎に[illegible]けれ

ぜ、此の間の取籠で、吾儕も色々苦労をしてゐる中といひ、店の者の前へも恰好が悪い。若し往きたか、密に往つて、朝も人の目に著かない中、帰つて来ればまだしもの事だが、目付たんでもして見ると、ヤレ何様だの斯様だのと、他の目が煩くつてならないから、ノウお前居所を知つて居るなら、御苦労だが左様言つて直に帰つて来る様にして呉んな。雨は降るし気の毒だが、駕籠にでも乗つて往つて来てお呉れと、慈母さんが御看病まで、お心配を遊ばしたさうでございますから、其の事をよく言つて、お連れ申して来てくれ、往きがけに駕籠も誂へて呉んなと被仰いますから、ソレで参りましたヨ。名妓え、今お聞きなさる通りでございますから、何卒今日は直にお帰し申してお呉んなさいまし」ト「ハイ左様か、馬鹿々々しい。マアまあ何にしろ久公を此方へよこして呉んなよ」ト出されても私が往くよりも直にやア帰られず、左様して見ると慈母様へ言訳がないからと、被仰つてでございますから、マア今日は直にお帰んなさいましな、ネエ名妓」ときく「慈母様が其様に気を揉んで居さつしやるなら、直様に急いで帰んなましよ。サア帯でもお締めなまし」ト屏風にかけてある帯をとりて出す。米「ム、帰るから、マア其様に急がねえでも宜いわナ」きく「ナニ宜かアありませんよ。私がまた悪留めでもする様で悪うございますから、サア早くお帰んなまし」米「アイ、其様に帰したがる事はねえ、今に帰るわな」ト少し急腹のおもひ入れなれど、清鶴は猶急き立つていふ程に、お澤も側から口を添へ、

やうやうこゝを立出で、泥町へ来り、久前に逢ひ、猶も委しき噺を聞くに宅の事さへ按じらるれば、駕籠屋の来るを待ちかねて、白羽根町へと帰りゆく。

第十回

[illegible]競をするこころ、早き日の足や、世の[illegible]にも時雨月の中旬に心なき[illegible]ひそといふ[illegible]は、現に陽日の[illegible]最中なるべし。殊に商人[illegible]まだきより、人の出入荷物の[illegible]引、得意の[illegible]、晴雨を厭はぬ開しさには、一日の暮[illegible]事、隙間とも思ふべし。是れ活業の平常に[illegible]、人世一[illegible]の勉めなるを、其の業に[illegible]り要を伸[illegible]、身の好き楽しむ無用の事に、日[illegible]財を[illegible]、[illegible]愚[illegible]なる人といへ[illegible]、終には[illegible]の罰を受[illegible]生を誤るなり。世間の[illegible]、もし此の本を[illegible]はゞ、能々心著[illegible]給へと、例の[illegible]婆心を言[illegible]のみ。斯くて米次郎は家に帰り、[illegible]り密りと、自己の宅へ入るさへも、[illegible]見られて縁側も、常[illegible]は踏まぬ下舎の中、朝夕使ふ[illegible]、[illegible]燵、蒲団被り[illegible]、尚行末の[illegible]どを、思ひ出して居る程に、[illegible]下女のお[illegible]来り、[illegible]ウお袖、[illegible]は何[illegible]

何様したんだ」「イヱサ何様もしはなさいませんが、お前様も亦餘りでございます、昨晩は宜いにも致せ、今朝お早く歸れなされば宜うございますのに。」米「それだつて大變な降りで、歸られめえぢやアねえか」たき「夫れは左樣でも慈母樣が、自己はソヲ知らぬ振もして居ようが、何分店の者の前が濟まないと被仰つて、夫れで久様をお頼みなすつたのでございますのサ」「ニ夫れもお孃樣の一件でもなければ、一日やそこらの事を左樣は被仰いませんが、まだその事で種々氣を揉んで入らッしやる所でございますから、猶の事お腹をお立ち遊ばすのでございます。」米「そりやア至極尤もだけれど、ナニノ一日許り、そんなに騒ぎなさらねえでも宜さそうなもんだ。」たき「そりやア御前様の御勝手と申すものでございます、慈母様も種々苦勞を遊ばしますから、お氣を休めてお上げなさいまし。」トいひ捨てゝ出て行けば、米次郎は跡見送りて有繫に己が身の行状の、善からぬ事を顧みて、兎にも角にも鬱ぐなるべし。かくて其の夜も初更過ぎ、店には番頭が格子の中に、帳面を繰展げて筆を啣へて、はたはたと算盤を彈くは、その日の出入勘定なるべく、若い者暗き片隅にて密々と噺すは、一切遊びの恍惚ならん。調市行燈を取卷き、手習雙紙を枕として、淀川ならぬ夜船を漕ぐ時は、額の眞黒になるを厭はず、九々を忘れて叱らるゝは、算盤の稽古と見えて、稍に世間も鎭まる頃、母のお植は徐々と、米次郎が子舍へ来れば、米次郎は見ておき上り、物をも言はず膝の上に、手を置いて坐つてゐる。お

柚は傍へ座をしめて、柚「ウ米や、お前は何時歸つた。」米「ハイナニ先刻歸りました。」柚「左樣か、私やァ一向しらなんだ。斯う言つたらナテ憫いとも思ふだらうが、お前がまだ前髪のうち、爺父さんが死去つて、夫れから後は私の丹誠で兒供も育て、苗の事も彼是と世話をして居たが、有り難い事に今までは、他に後指をさされた事もなく、暮した所がサア今回、遠世が事に就いちやァ、夫れ見たか女親の甘い育てで、あんな事が出來たと、言はれるは知れた事。當人は覺悟の上、假令死なうと活きようと、構はねえかしトいひさして聲曇り、うるむ涙を指で拭き、柚「只他に言はれるのが殘念さ。それにまたお前までが、居續をして歸らないなぞと言つて見ると、意他のなひ草、それもいはば伜が行屆かないからの事さ。といふは他でもない、お前もモウ二十三といふものだから、疾に嫁でも娶つてやる筈を、獨りで置くものだから自然とそんな事も出來る譯さ。夫れも氣が付かないではないけれども、扨どうも長短不齊で相當な嫁もなし、成らう事なら遠世を側に、遣つて、と中頃に貰つたら家内も靜かで宜からうと、思々遠くなつたのだが、遠世もあゝいふ始末になつて見れば、私も他に望もなし、是れから何でも取急いで嫁を貰はにやならない。お前も亦他に入れたいなぞもあるなら遠慮なく言ひなさい、寧しい妓や唄女なぞやア、まア第一親類内で承知しまいが、其の他ならたとへ卑賤の兒でもいいから、人物次第で相談が出來るわ。」なほ進んで早く居間にも安堵させ、お前も取締つ

いやそれにやアならねエ。それにやア後生の方は何樣したら宜からうノウ、又近くうちに何處だノ、と、催促をして來るにやア違ひないが、まさか缺落を仕ましたとも、言つても遣られめえかと思ふが、まア左樣さ、それに死と當惑でネ、昨しどうせ何日までも、隱しだては出來ますめえから、在體に言つて遣りませう」專「始終はしれるにもしろ、餘り不取締のやうで私の言解がないから」長「全體遣世がこんな事のない先から、桐生へ往くのを否がつて、神や何かにも數囘左樣言つたさうでございます。それだから私やア出來仕ないと言つて、此の事はございません。又唯一個の妹を、上州の桐生だのと、そんな遠い所へ遣らねエでも、近い所に幾許も遣り所はあります。それを餘り貰付けるものだから、つい不料簡を出したのだらうと思ひます」專「そりやアお前も知つて居る通り、他人なら遣りは仕ないけれど、兄樣がたつて貰ひたいと言ひなすつて、お絹樣との約束だから今更變改も出來めえといふ昔氣質で、是非俺達へ往けと言つたのだがなア。マアマアそりやア百遍言つても死んだ兒の年で、仕方のない事だから仕方はないが、何でも是れから内外とも、頼みに思ふはお前達許り、是非取締つて貰はないぢやアならない。夫れに就いちやア縁の一段だが、若し又お前の方に、心當りもない事なら、此間話の番頭の、噺した縁女がどうか宜ささうにも思はれるから、相談を仕掛けて見ようか[illegible]に甘きにはあふまいが、若し又無理な縁を組み、遣世の樣な事あらば、これも亦苦勞の種と思ふものか

る前後に、心を配る母の扱ひ、實に恩愛の情なるらんか。米次郎はこれを聞きて、已に深く[illegible]かは
せし、[illegible]もその氣性、平常の女に[illegible]り、情も深く、[illegible]しくもして、いと[illegible]しく思へども、[illegible]
らねと母が一言、然はなくともと打明けてば、親類へも語り[illegible]して、位にといへば[illegible]の、[illegible]
るお甲のみ、これが心の[illegible]は、ただ何ごとも[illegible]、[illegible]に、[illegible]果敢な
き手一ツにて、母を養ふ孝行律儀、その上先頃世話にして、[illegible]其の時にも、女の道を[illegible]
へてか、断りいひし志、今の世にはまた珍らしき心操を感心して、其れなる妻に其の口で、言つ
たら得心すべけれど、何をいふにも餘りの困窮、親類中は勿論にて、聞きて不承知するならんと、その
儀に[illegible]か、[illegible]でも[illegible]た、女があ[illegible]人の、詞に就いてお里が事を、噺して見んか
と[illegible]、[illegible]には、[illegible]て、今は[illegible]もしれず、[illegible]面
この[illegible]にて[illegible]へ人に[illegible]れば、[illegible]人に[illegible]。たれ等の事も知らずして、漫りな事
と言ひ出さば、[illegible]子の[illegible]でも[illegible]、と[illegible]ふも[illegible]へは出さねど、近い中に[illegible]へ[illegible]て、お
甲[illegible]は、[illegible]、[illegible]て、[illegible]の[illegible]、[illegible]とお
すと、心定めて[illegible]けり。[illegible]、[illegible]この[illegible]、[illegible]るに、
米次郎は[illegible]、お里が[illegible]、[illegible]

聞ます、連者と怨まんか、それも又気に懸れど、其の中年の明けたらば、宅を持たせて不自由なく、養ひ置くも易き事なり。まう其の時は其の時よと、諸大方に胸を究めて、一日二日を過しけり。爰に清之助が世の二個は、既に死なんと覚悟の折から、何処の人かは知らねども、いと深切なる詞に逢ふれ、悲しき中にも互に、何れを善しとも胸一つに、究めかねれども死を止まり、老女が跡に引添うて、十五六町も行きける時、老女は其処なる路次口にて、暫時裏長屋の南側に向ひ、「さあさ私の宅はここでございますが、誠にまア膝を入れる許りの狭い家、近頃続く薄命に、毀れた所もたれなので、畳は是が引張り、寒い所と思召しも、お恥かしうございます、不肖なすつて些との間、お在でなさるが宜うございます」ト路次を這入つて裏長屋、二三軒目の破障子、見落とあければ立出づる、女児と見えて十七八、いとも優しき声音にて、「なぜまアまア、お帰りかえ、大層に遅かつたね、余りだから其処等まで迎ひに出ようかと思ひましたわ」「オヽ、ハヽ、こんな老婆が遅くなつたつて、些とも案じはないのさ。是れでも命を持つて居るとノウ、夜路も怖いけれど夫れはなし、又勾引者もなし」「まアまアお嬢様か同伴にお出でだね」「其の嬢さま、路からお連れが出来て、御同伴に縋つたのさ」「なるほどまア、まア左様かえ、それおやまア路が暗やかで宜かつたね、道理でお前が平気でお在でだと思つた。サア貴方がもマア一寸とお上ンなさいまし、と申した処が誠に穢くつて召物が汚れさうでございます。サア行燈

さげて其處にある、風呂火鉢をおしよせれば、清之助は會釋をなして、「ハイ／＼お構ひなさんな、私どもは不圖した事で、慈母様のお世話になりまして、此處まで御同伴に參りました」むすめ「左様でございますかえ。よく／＼まアこんな所へお出でなすつて下さいましたネエ。慈母何處のおかただエ」はゝ「エこのお方か、マア種々心解があるから今に話さう」むすめ「左様かえ、サア皆様此方へお上りなさいましヨ」トいざなひ「左様なら御免なさいまし」ト兩人ながら上へあがれば、娘は茶を汲んで出し、傍が風俗を熟然と見て、不測らしき思入れなれど、當下母は煙草を喫ひ付けて、「マア、すこし／＼」綾瀬は直の樣に思ふが、歩行いて見ると餘程あるのネ」はゝ「アヽ隨分遠いの、何樣いふ事だつたエ」むすめ「ナニサ矢張世話にしようといふだけなの」はゝ「オヤ左樣かエ、好かねへ、だれでも人の世話をする人のいふにやア、直に內へ入れると言つたつけネ。又世話になる彼なら、あんな寂しい田舍へ借しに往くものかネ」むすめ「左樣サ。餘り馬鹿々々しい事ヨ」はゝ「そして今更他の世話になつて何樣しても歸られない、それはなぜと言つて御覽、其の後一向お出でなさらないし、惡い極まりものか、先頃アノ白井樣の家主とやらが、態々來て深切に言つてお異見なすつたのを斷つて、今又別の人の世話になつちやア、義理が濟まない。何程アノ方が知らないからと言つても此方の心が恥かしいから」むすめ「其の前にも言に老年の樣な事をいふ懷だ。併し左樣心を持つて居れば間違へはねえのヨ」ト母子が話の中娘は御ふねエ、

白羽根町の米さんとは、さても似よりの事なるかな。殊に女兒が言葉の端々、かかる貧苦に似もつかで、正しき性質と思ふから、自然と恥ぢるその身のうへ、面目もなき心地せり。斯くて母親は清之助と遠世が始末を女兒に語り、まづ二三日附置きて、其の上に詮方もあらんと、いふに女兒も兩個が身の、果敢なきを想像り、いと懇にもてなしつゝ、兩個が心を慰めて、こゝに舍藏ひおきにけり。
作者曰く、こゝに出せる女兒といふは、彼の濱崎町の貧家の女兒、門付のお里なり。後の條を看て知るべし。

閑情末摘花二編卷之中　終

第十一回

貧富は自から天命の、然らしむる所といへど、也有善人に貧しきが多く、悪人には富貴が多き、左様いふ理合はあるべからず、天道様も聞えぬと、言うては天を怨むに當る、これは其の身の生まれつき、又が前世に貯蓄を、湯水の如に遣つた報で、斯うした貧乏するであらうと、善事己が責めて、いよいよ苦みを積む時に、皇天決して捨て給はず、終に後々は富貴となり、栄ゆる身となるは必定この所御請が請合ひなれば、世はすして勉むべし。扨も違世と諸共に、薄命なるお里母子が、憂き心に思ひつつ、今日明日と暮す程に、間來便しき里の暮し、見かへる心痛をしつつ、違世は何かにつけ、身として在りける間にも、貴代なして衣に換へ、その日々々の入用に、充てあるものの年月暮り、更に貯もこす、推して食をへば身の皮を、剝ぐより外に詮方なく、お里母子もこの事を、いとど鬱悒く思へども、己が口つへ糊うと、喰ふや喰はずの身備には、他に為るべき便宜もなく、両個の人が苦境を、見るに忍びず思へども、又いかにとも術なければ、其の儘に過ぐる程に、両個は固來身につきし、帯と

ても多くはあらざれば、早苗之助が下着の小袖、これより外に代なすべき物のなければ、是れを賣りて僅かの錢に換へたるも、殘り少なき霜夜の黄菊、これから後はいかにして、兩個が命を繋がんと、言ひ出しても涙迫る、折から遠世は風のこゝちと、打伏したりしが次第に重り、五六日も立つほどに、箸さへ取らず枕もあがらず、大病となりしかば、請之助は初めより、傍を離れず看病し、母とお里も心をつけて、餘る事大方ならねど、常は深窓の下に養はれて、暑さ寒さの折々は、その隙々に手あてをして、育てたる身を今更に、頃は霜月半ばに近く、透間の風も身に染みて、夜着を重ねて寝てさへも、薄寒けき木綿の、小袖一ツを身に纏ひ、夜もそれなり轉び寝の、温められつ温めても、曉近くなる頃には、互の肌の寒え返り、明けるを待ちて早々に、折焚く柴に渾身の、甘ゞ事さへ多ければ、終に病となりたるなり。心からとはいひながら、いと勵はしきこの有樣、今宵もお里は母とともに、かの活業に出でゆきて、寂しさ増る家の中、請之助は遠世が寝たる、傍に居りて脊を撫で、請「どうだエ、些とは宜いかの、先刻こゝの叔母が、お前に食べさせろといつて、梅がえでんぶを買つて來て與れたが、當下はよく寐て居たから無言つて居たが、何樣だ湯漬でも食べて見ねえか。」とほせ「イ、エ何にも食べたくはないの。ア、切ないの」請「夫れでも左樣何も喰はずに居ちやア悪いわな。チツト我慢して食べて見ねえ。」とほせ「ホヽ、私は何の因果だらうね、物心を知つてから、三日と寝た事はないの

に、這回はマァどうしたんだらうか、この樣子ぢやァ、まだなか／＼五日や六日には快くなりさうも
ないが、定めてもウ小遣や何かも有りますまいネエ。そんなことを思ふと、猶々氣がもめて鬱いで來
ますから。」道「ナニノつまらねえ、病氣の時は、そんなことに構ふもんぢやァねえわな。役に立たず
とも、己が斯うして居るから案じなさんな、夫れに懇田もお里さんも、親類とつてもなく、深切にし
て吳れるから、何樣か簡樣か出來らァな。」をち「まだお前樣には左樣申さないけれど、金神お甲樣と
內證で相談して、私やァ山本の矢場へ出ようと思ひましたヨ、左樣すると一日に、一兩宛とやらのお錢
になるから、マァ兩個で食べるだけはあるといふ事だから。」道「ハ、、、、、何樣しておめへそんな事
が出來るものか。夫れこそ大變だ。」をちせ「なぜエ。」道「何故といつて、今の身で大勢の人に顏を曝し
て居られるものかな、それこそ親兄弟の面を汚すのだ。」をちせ「左樣かネエ、そんなら夜ばかり出ても
宜いぢやァないかエ。」道「今時分夜見世があるものかな、そしてよるだつて同じ事だァな、ハ、、、、
マァそんな事を苦勞にせずと、マァ／＼早く快くなる樣にしな、斯うして煩ふといふのも、貧に親の
罰、一ツには今まで溫かにして居た體で、俄に寒い思ひをするもんだから、夫れでだ。自己といふ惡漢
がなけりやァ、立派にしてお孃さんで居るものを可愛さうに。」トいひかけて、心弱くて一滴、ほろり
と落せば生憎に、こちらへ振向くその縮笑、遂世が頭へふり亂る、鬢の後れ毛さへなまめかしく、浦之

助が實の誠に、それをば細き指をもて、拭ひもあへず己が眼の、しめる睫をそと拭いて、「マア、アレサそんな事を言つてお呉れでない、悪い競べおやア、私の方が餘程悪うございます、夫れに叱かれてお前樣に、此樣に苦勞をさせるかと、思ひ出すと涙が一ぱいになりますヨ」直「マア〳〵そんな事をいひツこなし、兩個が悪いからだ、マア〳〵湯が大層沸え立つた、サアお飯でも食べて見な」ト元より貧き家なれば、膳も茶碗も暇りもと、手ごへ伸せば用の足る、これもまた重寶なるべし」直「サア飯をよく蒸したネ、熱いうち食べな、ドレおこして遣らうか」米「アイ食べられれば宜いが」ト起き返り、「ヲヤ〳〵よく叔母がでんぶを買つて呉れたのだネエ、お鮎もあるあいに氣の毒な」直「サア〳〵とんだ甘うございますね」米「お前さんもお夜食にお上んなさいな」直「さうで私やアこんなには食べませんから」直「ムゝ、跡で食ふツ、まアお前ア澤山食べなせえ」米「そんならネ、態とお替りを仕ませうかネ、お飯をおよそいおやア、否でございますヨ」直「ムゝ、そんなら盛る真似をしようか」ト又湯をかけてやる、遠慮はおし遊ばさず、ドレヤアお前さんも一所にお上んなさいヨヤ」直「ナニ自己は先刻喰つたから、まだ腹も減らねえ、まア上れ夫でも一個おやア寂しいから、又連れがあると其の具合で、澤山食べられるかも知れないから」直「夫なる程其處もあるかネ、ドレそれなら」ト茶碗をもち、此方へむきて飯椀り、箸をとりても片隅に、好うのこるは半杯にも、足らざる飯の數の目、それを遂

世に曉られじと、格子の裏でそつと窺ふ、心配らしき病人に、胸騒がせじの相談は、猶口濃きを噂なら[illegible]

んか。折から門口瓦落裏とひきあけ、千種の股引結城木綿に、七つ時分の羽織着て、小ごき風呂敷包を

脊負ひ、敷居の内へ片足いれ、まアといひつゝ内を見廻して、エ、こゝは信六さんのところでは」

立エ、信六とエ」[illegible]「左様さ、[illegible]お前さんといふ風体の住居」[illegible]「エ、それは此方でございます」

お前さんは何處から。」男「ハイわたしやア北里から参りましたが、今夜でも留守かへ」[illegible]「ハイ留守

でございますが、何か御用だか、何なら私へ左様仰いましたら」男「[illegible]北里の三浦から手紙

を持つて参りました。どうぞお歸んなすつたら、これをあげてお讀んなさるやう」と一通の手紙を出す

清之助はとりあげて、「御苦労さまお里でえ、秀より、として在ります、たしかにうけとりました」

男「左様なら申します」ト男は門口へわかれと連て、足早に歸りゆく。此の時座敷には此方の為

きて、[illegible]北里の三浦屋たと[illegible]「左様さ」「一冊いふ番な名だねと」「一冊いた箱、最後は

おめへ、米様の往く妓楼だから」「[illegible]左様だ[illegible]其處から又何様して[illegible]手

紙をよこしたらうねエ」「秀よりとしてあるから、何れ女にや違へねえが、心易い人でもある

だらう」「[illegible]今宵は怪しおこたりしや、この頃に大き違ひ[illegible]聞きし[illegible]折[illegible]帰りの様には

この家の母子[illegible]清さんお歸りかつたらう[illegible]違様さんは[illegible]ございます[illegible]

「ハイ有りがたう、何様かね大分宜い様でございます。」をらせ「おやをばさんお歸りかえ、先刻は美味いもの を有り難う。」母「ホヽヽヽ、何様だお飯でもお食べかへ。」をらせ「アイお蔭で甘美く食べました。」きさ三「そりやァ宜かつたねえ、また些とばかりお土産を取つて來たヨ、慈母ソレ今の物をおあげな。」母「左様左様、解しこりやァつめたいから何様だかね。」きさ三「私やァ隨分宜からうと思ふけれど。」ト母が袂より出す衛門ツ左ツ、達世が枕元へおいて、母「若しも冷くつて、否だと思ふならお止し。」をらせ「ホヤ〳〵とんだいい熱梅でございますネ。」眞「お止しなされば宜い、實にお前様方に錢を遣はせちやァどうも氣の毒でならねえ。」きさ三「ナニたつたそればかり、マァお心配なしに上げてお喫んなさい、慈母一ッおその庖丁ごつ。」眞「ナニ私が取つて來ます。」ホヽニ北里から來たといつて、このお女がとゞいてをります。」きさ三「オヤ左様でございますか、有り難う。」慈母姉上さんの所から女が來たヨ。」母「左様か、久しく往かねえが、變る事もねえかお前讀んで見な。」きさ三「アイ。」トいひながら、封じを切つて讀下し、きさ三「何もかはる事はないが、種々相談したい事があるから、是非二三日の内に來てお呉れと言つて來たヨ。」母「左様か、どうせ自己も都合して、往かうとおもつて居た所だから、二三日のうちに往つて來よう。」きさ三「左様しておくれな、モウ先は近くなるし、大方氣を揉んで居なさるだらうから。」ト母子が話說を察して見れば、お里が姉は三浦屋に、勤めの身とは聞かずと知れたり。身の薄命の是非なけれど、大

れを委しく聞かれたら、有繋面なくや思はんかと、母子の心を推察して、清之助は問ひもせず、其の儘に過ぎにけり。

第十二回

人窮して巧みをなすと、古き女にはいふめれど、清之助と遠世の両個は、原有福に育ちし身にて、心からなることの貧苦、いと堪へがたくは思へども、人をも恨まず巧みもなさず、唯己が身をかへりみて、後悔はすれどもかひなから、それも最初から覚悟の事、今更嘆くべきならず、只悔しいはその初め、露之の郷で死んだなら、かかる憂き目はあるまいもの、然りとてそれをいふ時は、人の情を仇とする、意味に當れば両を地には、その無造さへも言ひかねて、胸に包みて日々に寒さつつ、遠世は殊更私の性、先のことまで種々と、思ひ迫れる身の禍、それはなきこの娘脊目、砕けて夫を待つのみ。今宵も母子は酒業に、出でたる跡には只両個、遠世は肩より気持もよしとて、蒲團の上に起き直り、風呂にかけたる土鍋の蓋ひ、煮ゆる粥減を見返る様子にて、なまよはせどもはらぬ世帯、何はどうして斯うしての、工面も今は盡き果てて、清之助は吐息つき、遠「コウ遠世、お前も段々快い様子で、うれしいとはいふものの、モウ何にも賣る物はなし。トいつて他に稼ぎは無し。この二三日は丸ッきり、此處の

母子が枡を當に、手を組んで居るけれど、知つての通り彼の母子も、間の宜い晩か二百か三百錢、間がわるいと五十か六十文、諸色は高し各々の、世過ぎが中々むづかしい。夫れを知りつゝ兩個が、喰潰しても居られめえ、今夜見りやァお里孃が、半纏もねえ容子、自己達に聞かせたら、氣の毒に思はうかと、そつと曲げでも仕たのかと、思へば猶々胸が痛くつて、飯も咽へは通らねえ、何とマァ何樣したら宜からうナァ。」をふせう「アイサ、私も此間から種々と考へちやァ居ますけれど、實に思案がつきません。所詮親類や何かへ、斯うと明して無心をするといふ譯にもいきますまいから、いつその事ネエ清さん、此間聞けば、お里さんの姉樣が、三浦屋とやらに居るとの事、其の手蔓で私を北里へお遣んなさいな、左樣したなら何ぼ縹致が惡くツても、十兩や十五兩にやァなりさうなもの。其のお金でお里さんや慈母にも、いままで厚い世話になつた禮もしたり、またお前さんも身形でも拵へて、何樣か仕法をお附けなさいナ。エヽ、惡いかエ、エ清さん。何だネ、其樣に塞いで居ないで、マァ相談にお乗りなネエ。」淸「マア、そんな事をいつて吳んなさんな、自己胸が一ッぱいになつて、何と挨拶をして宜いか知れなくなるから。」さら「何故エ、お前さんも氣の弱い、私やァ始めから命までお前さんにあげて置くのだものヲ、其の位な事は何とも思ひは仕ません。夫れがなぜ氣にでも當つたのかえ。」淸「ナニ氣にあたる所ぢやァねえ、お前が、よく／＼なればこそそんな氣になつたか。是れといふも

不殘自己が科だと思ふから、實に可愛さうでならねえ。」をうせ「そりやァ左樣思つてお呉れなら、誠に嬉しいがね、左樣許り言つて居たつて果てしもないです、一日延びれば一日だけ餘計に苦勞をする許りだから、マア跡は兎も角も、左樣する方が宜いぢやァないかネ」「そりやァ當座の凌ぎにやァ宜いかも知れねえが、自己不承知だア、お前一個に苦しまして、その金で自己が樂をしちやァまア第一人情が濟めえぢやァねえか。然うしてお前の慈母か兄樣に、勾引だといはれても言譯の仕樣がねエ、たとへこの儘渇命なといつても、そんな事がさせられるものかへ。」「それだからこそ猶更お前を何樣しようとお思ひだエ。」蔦「何樣といつて、實に當惑するばかりで、一向料簡が付かねえけれど、自己一人ならト言ひかけて口籠る、顏を覗き込み、「そんなら自己一人なら何樣かしやしたか、エヽ、もう言つてお聞かせなさいナ。それおやア私が斯うして一所に居るのが、邪魔だとお言ひなさるのかい、もし又私が邪魔になるなら今も申す通り、端から命まで投出して居る私だもの、何樣でも致して仕舞ひます、サア何だか言つてお聞かせなさいナ」ト言ひつゝもしや其心の底を、つくぐ見れば面瘦せて、昨日に變る今日の窶れ、その他の衣かこの身さへ、いかに醜くなりつらん、朝夕影を映したる、鏡もこゝになきものから、久しく顏を見るよしも、なかく\に恥かしき姿形になりにけん。人の心は花染の、移ろひ易き物とさく、日來は萬信實に、優しき人も世につれて、變るは常のならひなり。今は此の身を

疎ましく、思ふが故の言葉かやと、愚癡の僻みも貧の癖。あられぬ先の事までも、苦勞になるは女子の氣質、兎角に付きてさきだつは、涙の露の玉霰、拭ひもあへぬを清之助は、見るより共に涙ぐみ、清「コレサ其樣に泣いて呉んなさんなヨ。それぢやァ猶々自己の氣が模稜して、何樣して宜いかわからなくなるわナ、今自己一個だと仕樣があると云つたのは他の事もあァねえ、實はこの近所の居付地主の宗で、自己を是非壻に貰ひたいといふさうだからサ。」をらせ「オヤ左樣かえ、そんならお出でなさいよ。」清「左樣すりやァお前は何樣する。」をらせ「私かへ私やァ又お前樣に捨てられりやァ、捨てられた樣に何樣か仕ませうわナ。」清「何樣か仕ませうぢやァ譯らねえ、詫言でもして宅へ歸る氣か。」をらせ「何程私がいくぢのない女だつて、清さんと一緒に出たら、捨てられたからどうぞ宅へ歸りたいとも、いはれませぬぢやァないか。」清「夫なら何樣するヨ。」をらせ「何樣といつて他に仕樣はないから、私もまたお前樣の眞似をして、こんな二本一籥でも宜いから、女房にしてやらうといふ人でもあつたら、緣付きませうサ。」清「ム、なる程、こいつァ面白え、お前がまた左樣いふ氣になつて呉れりやァ、實にありがてえ、いはばお互に出世といふものだ。しかし眞裸の花嫁に、花壻でも治まらねえものだに」をらせ「併し蓼喰ふ蟲も好き〳〵とやらで、裸がいいといふ人が有るかもしれないから。」清「其處が世間は廣いもんで隨分あるのサ、いよ〳〵左樣極つたら話すが、向う横町の質屋の息子がお前を見て、あ

んないゝ女兒があゝして置くのは惜しいものだ、ナーシ自己が女房に貰れるなら、下着金の五十兩位は
出すと言つたさうだから、マア早速その質屋へ掛合つて見よう、マア何にしろお前の身から先へ片付
けねばならねへ、氣が揉めてならねへ」トいふに嬉にすこしお前様の身を先へ片付けてお仕舞ひなさい
よ、世辭でなくツてねへ、私は否ですよ」丑「自己の世話をしてもいゝ、マア今此の近所の
居所を替たとお言ひなさいまし」米「エヽそれやア質物は十四五年も前から、それだか
ら先に行くと急にやア來られねへからお前の落付を見て行くがいゝよ」ト構はないで
おざいと申すのに無にしてまアお聞きなさいまし、それを私が申し断つたといふ事は、近所でも評判
知つて居るから、お前様が斷りしてお出でなさいまし、一人で金利を計算しなやア知れませんでしたが
あつたらお前様から先へ身をかたづけてお貰ひなさいまし、女郎同士ではいふを聞きて清
之助は心の裏に點頭きつゝ、清「ム、たんならお前のいふ通りに仕よう、然し何に就けたてもあると
「トレ遠方だと斷るだのと面倒だから、この身で直に嫁にやるのです、自己は否だと斷るから、駈落でも
したやうに、身持にさる所に、ト言つて貰ふのさ」米「アヽ否なのですよう、そしてお前様は何時お出
でたと、あの様な御新造でもない、様にしたのか、世話人の口まで行つて置いてせえ、その通り
この伊勢屋あたりへ、何にいつたさうでとも言ひなさいまし、して置いて下さいな、お前だけれど

斯うなつてから一所に居て見ると、互に未練が發つて惡いから、些とも早い方が宜いぢやァねえか」とほよ「ホンニそれも左樣だねェ。どうで別々になるものヲ、半日や一日、一所に居たつても、仕方はないねえ。夫れだが清さん、どうぞ近いうち鳥渡來てお吳んなさいョ」清「何故もないもんだ、私の身が何樣なつたか、尋ねておくれでも宜いぢやァないか」とほよ「そゥ斯うなるからにやァ夫れも否かねえ」清「ム、逢へねえノヽ、樣子を聞きに來よう。夫れにしてもお前些とも早く緣付きなョ」とほよ「アイヨ」清「ドレたんなら往つて來よう。イヤ、しかし是れッ限り歸らねえかも知れねえ、そんなら隨分達者で居なよ」ト立上ッてしめ直す、帶の長さに引替へて、緣は短き妹と背が、いかな緣切れでも、きれぬ互の信實を、不圖した風の誘ひ來て、あおりに靡く靑柳の、いとゞつれなき心の底を、互に疑ふこの場の時宜、淸之助は立ちながら、遠世が方を打見やり、思ひあり氣に吐息つき、はらりと落す一雫を、見せじと指で拭きとりて、その儘門を出でんとすれば、當下遠世は顏をあげ、とほよ「淸さん」清「エ何だ」とほよ「モウお出でかえ」清「何時まで言つても同じ事だ、近い中に急度來るから、何卒それまでに何樣なりと、お前の身の片づきをして置きなョ」出て往くにもたればッかりがどうも苦勞になつてならねえ」とほよ「そりやァ些ともお案じでない、私が身は緣付くとも、宅へ歸るとも何樣でもするから」清「左樣さへ聞けば安堵するァ、ドレ邪魔の這入らねえ中、世話人の方へ往つ

て見ようと一ト思ひ切つて建切る障子、遠世は今更氣も狂亂、わつとばかりに平伏して、暫しは歎きたりけるが、氣を把直して起き上り、棚の隅なる硯箱、思ひに積る塵打拂ひ、立つも慵く手近なる、土瓶の口から次ぎ入るゝ、茶殼交りの硯水、撮み兼ねたる缺墨に、汙るゝ指を手拭で、涙と共に拭ひつつ、在合ふ鼻紙かいとりて、さら〳〵と書く文字の關、鴈は歸れど又來る、秋こそはあれ今死ぬる、身は又いつか歸るべき、と彼の文とつて顏にあて、聲も惜しまず歎きしが、漸くに心付き、涙拂ひて獨言、「エヽ、引 モウ泣くまいと思ふけれど、自然と涙が出る、斯うなるも不殘親の罰、道ならぬ事はせまいもの、後悔は先に立たずと往昔の人の言つたは有理、此方が斯ういふ氣とは知らず、賺し果せて能くしたものと、嘸清樣は心の裏で、嬉しく思つて聟入の相談をして居なさるだらう、思へばホンニ強顏い心から、左樣ではない是れはしたの、人の謗りは[illegible]身の罪、お祖師樣やお釋迦樣、この世はこの身の不幸から、人並でない死樣を、致しましても來世へ往つたら、可愛さうだと思召し、お救ひなされて下さいまし、[illegible]

閑情末摘花二編巻之下　終

閑情末摘花三編之序

色好まざるをのこは、玉の巵の底なきが如しと、記せる書はわすれはべるも、おさ／＼知りて口すさむ。これど色を好むとは、容貌美の情にて色香を愛づるの謂にはあらず。凡そ物みな色あり、僧者といへども文辭に色あり、三界無色の聲にも、言葉の色は勿論にて、色衣を著るを本とす。常寂伽藍にも色を飾らねば、本尊さまの有がたからず、神社も多くは彩色ならずあり。衣服は元来色をもて、貴賤上下の等をわかくる。且色に互の情を含めば、顔色をもて心を知る。これぞ萬事色なければ、ならぬといふも此の事なるべし。作者固來野暮にして、色の色たる所以はしらねど、聊か古人の糟粕を擬して、口繪にちよつと色を見せ、色香に耽るゝ婀娜の、一興ともなれかしと、色なの褒めし事を、へゝるも猿が人真似にて、名人の聲色なりかし。

庚子の仲秋

松亭主人誌

閑情末摘花三編卷之上

第十三回

こゝはこれ白羽根町の裏側、三間半の庫裏に、蝸見屋といふ暖簾をかけ、傍を見れば庭先か、黒板塀に黒鐵の、忍びがへしも嚴重にて、見越の松の年々に、翠竜なる常磐の色、棚のすみとに高野槇、石燈籠につく苔も、數代傳へし物ぞとは、いはねど著きもの古び、根府川の飛石を傳ひて松の下へのき、吉米次郎は褄を着上け、ヲヽ大分下枝が惡くなつたノウ、コウ藤や、鹽むきやが來たら、蛤を買つて、ソノ汁を掛けてやつてくれニ、ハイ／＼、松には蛤がようございますか。ヲヽ左様さ、むきみを漬けた水が妙に宜いのサ。全體蛤といふものは、種々功能があるネ、自己等が何様も時寒いでならねえ時に、蛤の鹽むきを喰はうもんなら、忽地元氣が出らア、ハイ／＼、ヲヽサ否大旦那様だ、ネヽエ貴君にもどうぞ宜い嫁をおあけ申したいものでございます、此間も御隱居様が熱と被仰いますのサ、何卒米にも、早く嫁を貰つて預けたいのだが、さて何様も了度能いのはないもので困るヨヽ先頃彼の兒の方に、心當りでもある樣な事を、云つた事も有つたつけが、ドレも何様したか、ヨ

シ有るならあるといへば、随分貰ッても遣るのにと被仰いましたからネ、旦那さま早くお目つけなさいましナ、しかし妓女衆や、また唄女活業でも致した者ぢやァ往きますまいけれど。」米「その心当りがないでもないけれど、何も今まで情合のあるといふのぢやァなし、白規定面だから、まァよく話し合つて見ねえぢやァ分らねえ。」亀「たんなら猶の事でございます、早く誰様かお頼みなすつて、御掛合ひを遣ばすが宜いぢやァございませんか。」米「左様サ、話し合つて見ようヨ。」ト主従はなしの最中に、何やら店に喧々と聞き馴れぬ人の聲すれば、米次郎は耳を引きたて、米「何だナ、大分騒々しい。」亀「左様でさネ、ドレ覗いて参りませう。」ト駈けて行きしが程もなく、馳戻りて其處へ畏み、亀「アノ旦那さま大變でございます。」米「何だな仰山な、誰ぞ何様かしたのか。」亀「イエ〳〵アノ桐生の旦那さまが、誠にお可愛らしいお嬢様をお連れなすつて、入らしつたンでございます。」米「エ、あの桐生の叔父様がか。」亀「ハイたしかだれに違ひございません。」米「左様か、なるほどそりやァ大變だ、今時分何しに出かけたかしらん。」トいひながら店の方へ遽しく出て往けば、米次郎が叔父穀富屋萬右衛門は、上州桐生にて絹縮緬の織元なれば、この家よりは一倍も、増りし豪家の旦那株、娘のお蕊といふなるは、今年十七の花盛り、衣裳はもとより自分もの、好みにまかして江戸風に、今日を晴着と花造仕立、父が後に從ひて、徐々と來る奥の口、米次郎は見るよりも、米「これは叔父さんよくお出でな

さいました、さぞ御道中がお寒うございましたらう、サア／＼まア此方へ。」里「お前さんも変りもない
か、御母は何様だエ、持病も発らずか。此の頃はめつきりと寒くなつたノ。」米「ハイ左様でございます、
コレ綿や、早くお火鉢を持つて来な。」里「ハイ／＼、これ／＼長松どんお前はお供の衆へ、お茶を出して
呉んなヨ、ナニサ／＼、おまへもお初どんも其様にさよう／＼お客様許りを見て居ないで、付けないヨ、
早々と火でも起して、お茶でも入れるしたくをしにやアならないはな、ヤア其処の針箱や何かを其方へ
片付けなヨ、コレサ／＼、よく気をつけた長松殿、針箱を持つて行くのさ、そして其が有る
から危ねへヨ、アレサ／＼それ／＼顔だつ事は何にかけ、小さいぞ少しのしまア其処へ、鳥渡来や、
自己が茶台の菓子皿を持つて来な、そしてお茶を早く出すよう。」米「ハイ其様に構ひなさんな、他
人の客ぢやアなし、今日は継母は何処へお出かけたのか。」里「アイ寺参りに往くと云つて出ましたが、モ
ウ今に帰りませう。」米「左様か、其処でこれは真の咄だが、実て江戸を見度いといふ願ひだが、サ
ア其の出るのはどうも手重だから、ソレ／＼と延しておいたが、今度は此所迄連れて来ねば、それやアなら
ねエ分にはなつたから、急の事で出かけたのさ。」里「ヘエヨウ夫は、お前様でございますネ、実て其
にはして置られませぬけれど、遠いものだからまだお目に懸りませんが、さぞ待遠しい事に、ナゼ
お初にも二十だつたが、ばかり年は何やら口のうち、顔さへ少し赤めたるも、さ、た、何だ由出しだか

ら、形は大きくッても稚児で往けねえのサ、是れから追々通人に、仕込んで貰はねえけりやアならねえ」ネーハ、、、、娘の児は、何でも内端が宜うございます。」萬「通人だと、又たそれだけ親や兄弟に苦労を懸けるから、則ち野暮な方が増しかも知れねえハ、、、、」ト打笑ふ。その一言が米次郎の胸にギックリ、遠世が事を聞かれたら、その返答をいかにすべしと腹の裏、いとゞ穏かならざれば、世間談に紛らして、問ひかけられぬ口先をするも心苦しき物なるべし。折から帰る母のお梅、この景色に少し驚き、梅「オヤ〱この寒い時分に、何様してお出でなすつた、オヤこの娘はお嬢でございますかエ、大きな能い女児に成んなすつたノウ、丁度此方の遠世。」ト心づき、云ひかけて「叔母さんがお在でなら、嘸お歓びだらうのに、寿命と言つて詮方のないものだ。」まア〱私とした事が何だらう、御挨拶もせずおにサ。」萬「何も改まつて挨拶にも及ばねえのサ、まア〱、お息まで宜い、私も随分丈夫だとはいふものの、近頃は大きに弱く成つたヨ、今年などは別して寒さが、身に染みるやうだ、何も夫れにはわざ〱出て来ずとも宜い事だが、サテ何様も左様運び〱にもならねえ体だから、詮方なしサハ、、、、」萬「ホンニ先頃中から、度々お手紙も参つたから、再度したお返辞をもしなければならない訳でございますけれど、此方にも種々の事といふを聞きかけ、萬「マア〱その噺は跡で宜いと、コウ〱お稲私が供に左様言つて、その上産物をこゝへ持つて来て呉んなせえ。」稲「ハイ〱。」ト立つて往きしが、

程なく持ち来るは、白紬二疋白龍門二疋丸右衛門が前へおくに 丹「アイ〳〵お世話〳〵。扨この箱納は私の土産、龍門はお滝がお土産だヨ、何ぞと思つても此節は不自由で詮がない。」丹「オヤ〳〵こりやアまア お止しなされば宜うございますに、とんだ綺麗に織りますネエ。」丹「十州も追々功者になつて能く仕ますのサ。」米「左様サ、この首輪なんざア、丸で京織だっ」といふ中、袖の計らひにて、近邇の仕出屋より、持込む料理三種四種、吸物までも取揃へ、ハイお肴へと持つて来れば、お滝は銚子待設けし口取吸物硯蓋、それ〴〵に並立てて、座敷へ出せば丸右衛門父子、お滝母子は酒をの話に時を移しツヽ、固より親しき親類ゆゑ、遠慮もあらず打解けて、その日も暮に及ぶ頃、丸右衛門は七八寸の帯ひを解して此方を見やり、丹「扨お両個にチツト、話があるといふは他でもない、造作の一件だが、先づ前から隠居してもテレ、ソレ前の婚約の二番でも三番でも、ハイ合点の往かねへ事で、大方例の気質で御断一何でもはまだ一向のこと、それで斯う遅くなつたが、然しテモ御袋は大概な男子にも増つた気性、どんな事を言はせても、コレ〳〵と断つて居る風も、アイ〳〵とお世辞にサア仕様もあらうかと、直に我を入る遠しこ、近所では様子を聞いた時が、道理は表向の嘘に違ひなくて、亡き往々がしれないといふ事、ソコテ道理だそれで要明に、左様して見れば此方、来る気遣ひもなし、またまた来ようと云つても此方で断つた、其處が他人づくの縁談なら、夫れで済まうがといふ處、ナニ親類の中で見れば左様も往かず、畢竟造世

を私が嫁に貰はう遣らうと約束したも、俗にいふ兄弟は他人の始まり、段々縁も薄くなるから、其處で遠世を貰つて見れば、重縁に成つて孫子の代まで相替らず親しからうと、後々の事までも、想像つて極めた事だが、まゝにならぬは浮世の習ひサ。二[illegible]イエサその事で私はモウ、お前様に申譯が一無有りますめえ、そりやァ云譯がねえ筈さ、年齢になつた娘の兒、油斷をすりやァこんな事の出來たがるは當然だ、夫れだから去年の春以來、早く此方へ越すが宜いと、數囘云つて越しても、兎角手放すのが否と見えて、夏になつたらノ秋が過ぎたらのと、頓々仕舞は大不出來し、夫れも宜いが桐生の町ぢやァ、遠世が嫁に來るといふのを誰しらぬ者もなし、懇志くする人達は、江戸の嫁御に何樣なすつた、些とも早く迎ぶが宜いと、いらざる世話も世間の慣はし、その挨拶にも殆ど當惑、と云うて許方もなし、病氣だとか死んだとかいい加減に云つても置かう、惡事千里と喩への通り、惡い事は知れ易く、定めて追々風聞が、知れるには違ひなし、私も桐生では何某と、五本の指を折りきらぬ、目に這入つた家の名を、不所存な娘のお蔭で、他に後指をさされるが、死際の妄念だ。ト苦みきつたる叔父の顏、無理はなけれど今更に、云ひ並べるは愚痴の至りと、思ふものから米次郎は、また氣の毒も彌倍して、暫時は詞もなかりけり。

第十四回

當下米次郎は泣みを含んで、ヘイエヘ其處でございます、左様被仰られると、言譯がないからとつて、惡口が大抵氣に障んで居りますけれど、いまに仕方はしれず、母方がないとは云ふものゝ、ますか數度松前へも往きますあとでも、なんでも何かの愛して、畜人を見當の衣裳、坊主にでもして、お両様への、言譯を仕度さもんだと、其の當座は勿論の事、此の頃とてもたしかに、滿方の様さすると様ます二一思ふそのやうに米が申す通り私はモウ／＼陰亡なつて、役しても滿足でない實だと、猶く／＼なりませんのサ二一思ふ一箇所後に立たねど悔たら、坊主にして鎌倉へ、尼寺へでも遣るが宜いのサ、併議の一杯こそせねば、親と親とが約束すりやア、此下總はこの玄蕃に一般、良人を持つてる身のくせに、男狂ひは微尼だ、他の娘や兒共とは譯の違ふといふ事を、常々から言聞せ、嚴しくしてに置いたら此所で、陰り可愛がの蟲さして、可惜處女に惡名つけ、何にも知らねえ嚴さに去て泣かせてせハ、、、こんな馬鹿をさしい事はねえの一トお袖をじろりと睨こに、見つゝ、嘆ずる言葉の端々、快からす思へども、玉垣村たる人といひ、殊には目上年寄の、心に障ぬを本意にあらず、と思へばこゝを軽…の、、、辭を低くし召に角と、思ひ慰むれば萬右衛門も、心っ中けしや従容と笑ひ、ホヽヽヽ然

れは暫時いつても、跡へ歸らない事だから、まアそれで宜いとして、こゝにモウ一ツの相談があるが、則ちこゝに居るお滋の事だが、今までも諸方から、嫁に呉れノ養女に呉れのとうるさえ程言つて來るが、ヤレノ\遲くもない事と、それなりけりに仕て置いたが、今度斯う云ふ理になつて見ると、倅が嫁は何様有つても、是非他人から貰はにやならず、左様して見れば、自然縁も薄くなる道理で、故人になつた先代米次郎が父を云ふなりと、話し合つたも無になる理、其處で急に思付き、孫の事とも思つたが、そこはまア米次郎は、當時嫁を探す最中だ、萬一脇から極ッては埒明かずと、思つた故に氣も急かれ、まア何事も措いて此の孃を連れて出て來たのも、お千世が話は二の次で、實はお滋を米次郎に、娶合はせたら互ひの安堵と、それでわざ／\來やしたのさ、何様だ御袋左様するが、宜いぢやアないか、ト思ひもつかぬこの縁談、無理はなけれど早速に、諾といふの回答もなし難く、殊に米次郎が心には、深き望みもある事にて、たゞ只管に呆れつゝ、叔父が顔の色見詰めて居れば、母のお峰もこれを察し、聽て居ホヽ、とうち笑ひ、峰「それはホンニ、お前様の思召しは御尤も、しかしながら縁談ばかりは、他の事と違ひまして、女は勿論男とても、一生に一回の事、互によく／\得心の、上でなければならぬ事、親の威光で無理無體に、押付けてもならぬは勿論、最も他々の話と違ッて、被仰る通りの重縁にも、成ります譯でございますから、其處は至極よいけれど、互に會ふのも今日始めて、米も何と申すか知れず

またお遊ばうが料簡も、何と思ふか知れねえけれど」ト半ばもいはせず、ネ「コレ御袋や、そりやア他人ゞく、一通りの挨拶といふものか、米次郎の気は知らねえが、私が身には何事も、不便な子が心次第、親の料簡で配はしてやる良人を否だの応だのと、気随をいふ娘がやアござんせんトいふとお前方に当る様にも聞こえようが、どんな男子に配はせようと、どんな嫁を貰って遣らうと、親の料簡ですることをとやかくいふのは子の不埒、その児の始末が出来ねえ様なやア、親の役には勉まらねえ。其處で何様だア、御袋よりか猫様が肝心だ、米次郎ぜへこの娘を女房に持つ気はないかエ。勿論田舎の不意気者どうで鉄漿も化粧も、吾業にして居る娘なれバ、彼の様にすつきりと、綺麗にやア往かれめへ、其し家政に水によふ、水道の水で段々に、磨き上げたら能くもなろうが、譬へ今のは悪いらうが、何うして連れて来るからにやア、私が一生宜いで貰はにやア、親の上の名様き道具、モウ返答をして下せえ」ト遠世が始末を言にかけ、叔父の衝で押付けられ、するは返す言葉の出、米次郎は暫くあつて、「土竜が叔父さんの被仰る事、否と申すではございませんが、困ッた事には此の間、或人が世話をして、両親をば遣りませんが、七八年前になりましたから、たれも下地は所詮に何故でなりぬ」たとへ許婚のなくつても、嬉しい血類から、許嫁といふ事ではて断りやア、随分たれで断られる、況して許婚といふは、何様せうとも此方の勝手」まだ其は左様でもござりませうが、男の口から

極めよせうと、云つた詞を今更反古には。」糸「ならぬといふならその世話人へ、私が逢つて断らう、ハヽヽ何の造作もない事、その世話は何處の人だエ、町所と名前を一筆、かき付けて越しなせへト飽くまで利かぬ叔父が強情、實は少しの當もなき、當座遁れの事なれば、名前を誰といふ由も、中中に差詰りて、兎角にこれをいひ紛らせば、母も側からさまぐ\に、詞を揃へて何れにも、相談の上挨拶せんと、まづ〳〵今宵は久しぶり、機嫌直してにこやかに、寛み給へと賺しッヽ、食事を勧めて萬右衛門親子を此方の座敷へ休ませ、お糸は密かに米次郎を、此方へ招きて聲を潜め、糸「お前マア嬢を貰ふのはいやか、田舎者だからどうせ綺麗ぢやアないが、左様言つてまんざら捨てた㒵でもないノサ。」米「ハヽヽヽ貰ひ拾ふ程でも有るめえハヽヽヽしかしそりやア兎も角も、私やア叔父さんの、心意氣が氣に喰はねえネ、成程爺父さんが存在の時、約束をしなすつたにも違ひあるめえから、遠世を早くやらねえのが、悪いといふ日にやア悪いかも知らねえが、當人が否がるから、ツイ遅くなつた内に、斯ういふ始末になつたので、私共に罪はあるまいサ。」糸「ナニ左樣許りでもないのヨ、親兄が附いて居て眼を睨かれたので、いはゞ此方の不調法だから、何といはれても仕方がないわネ。」米「夫れだつてお前、其處が親類ぢやアねえか、斯ういふ事に成つて、嘸叔母や兄貴も面目なく思ふだらうといふ、察しがなくッちやアをかしくないネ、彼の娘は能いにもしろ、私やア叔御の料簡が氣に入らねえから

何と言つても緣を組む氣はないかえ」丹「夫んなら何樣も無理にとは言はれないが、お前又實に約束した娶があるのかえ」米「ハイ、ハイ、お前に相談もしねへで、私一個で極めるものかネ」丹「夫れぢやァお前何樣する氣だ、叔父樣はァ、いふむつかし屋だから、氣をおやァなか／＼濟まないぜ」米「夫れだから急に、この娶お約束した娶で、これが叔父だとか兄だとかいふ人を拵へて、叔御に直談ごせるのサ、其處にやァ又私の口だもありますから。」丹「それなら宜いが、又隣へも先へも往かれ樣な事を仕出しなさんなヨ。エヽ、もう／＼何だのかだのと氣の揉める事ばッかりで困りきる」米「何も其樣にお案じなさる事はございません。それやァ叔御が達引きなされば樣に私が仕てしまふから」丹「何樣でも宜いから早く片をつけて呉んな、自體叔父御も斷りたい人ヨ、お前樣にやァはないで下さい宜いものネエ」米「ナニ、ノ錢が些と許り古臭ると思つて、押開を拵へて成振りつけて居るのだから、宜い氣になつて居るから、大きな面ばかりして無地評が好いなんだ」丹「其樣に惡く言ひこうした聞えるわな」米「ナニ聞えたつて宜いわネ」丹「マア／＼そんな役にも立たない事は何樣でもいいから、今の事も早く仕たヨ」ト雜先後の成行を、思ひ廻すも女の氣、密々と話し合ひて、この夜は揃を更け行けり。

斯くて惡る朝になれば、萬右衛門は米次郎に向ひ、そは其約束してある嫁の親類に會つて斷りをいふべきにと、早く呼び來れと、しきりに責むる故に、實は米次郎も當惑しけれど、暫く

に出なべきにもあらねば、彼の鼠鞘屋久次が叔父の太助といふ者、年齢といひ人物も卑しからず、殊に掛合事などは、よく心得たるものなれば、まづ是れを頼まんと、米次郎は太助に如此々々の由を語り、這般いふ趣に掛合ひ呉れよといふに、太助も迷惑には思ひながら、日頃久次が世話になる旦那の事、否ともいはれねば早速に受合ひ、やがて米次郎が家に来り、萬右衛門に對面して、私が姪のお甲といふもの、兼て米次郎と情合あるにより、這回表向嫁になすべしと、相談あらまし取極めし處に、其許の女兒御を、嫁に送らんとの事なるよし、左様になりては、此方の姪は邪物になりて迷惑いたす、殊に其許の女兒御は、かねて約束といふにもあらず、這回おし付けてのことなれば、破談に致し、此方の姪をおくられねば、私が一分もたたず、また姪も一生の身分に拘はる事なれば、何といはれても其許の縁組はさせませぬ。」ト、種はなけれど米次郎と、云合はしたるこの場の掛合、延引きならず云ひかけれど、萬右衛門もまた強情もの、中々頓に承知せず、「たとへ情合があるにもしろ、それは互の淫奔事、表はれて祝言の、弘めなければ内證の事、此方は血縁の遁れぬ中、左様はさせぬ」ト、いふ程に、この論中々納まりかねて、果てしなくこそ見えにけれ。

閑情末摘花三編巻之上 終

閑情末摘花 三編卷之中

第十五回

戀すてふ、わが名はまだき立ちにけり、人しれずこそおもひ初めしか、と、われならなくに、次郎に心に思ふお里が事を、まだ戯言に情合といはせ、叔父が方なるお滋が縁談、結ばんとしけれども、兎に角噺の縺れ合ひて、頓には中々片付かず、されば雙方とつくりと、勘辨したその挨拶といふので、其の日は太助も歸り、萬右衛門も澀々と、奥の座敷へ入りければ、先刻より窺ひ居、陰で聞き居たお滋が怨襟さは、何に喩へん樣もなく、父が顔を見るよりも、わつと一聲下に伏して、「こんな事なら來ない方が幾干宜いか知れません、私は又とうに、叔母樣と相談が、極めて有る事と思つたから、近所の友達にはそれ〲に、暇乞ひまで仕て來ましたに、今さら先で嫌はれたと、云つて宅へは歸られず、何樣したら宜うございませう。」ト泣き女兒の心には、消えも入りたき風情を、見るにつけても萬右衛門が、胸は張裂く親子の情は、固來賢愚の差別なく、吐息を吻きて其處へ居り、萬「コレサお滋、なにも其樣に力を墜す事はねえわな、たとへどんな事が有らうと、此方は親類先は他人、其樣

が不承知なやァ、何處からでも貰はせねえ、氣を強くして居るが宜い、遠世が事もまだ種々と、云ひてえ事もあるけれど、存分な事を云つては、其方の爲にも能くねえと、控へ目にして居れば、皆揚つて何だかだいと、餘り氣儘な母子の奴等、義理も法も知らねえ者に、そればかり氣も無くなつたが、斯ういひ出した此方も意地づく、殊に田舍の知音知己、出入のものや奉公人へも、皆其れ〳〵に披露して、めでたづくしの餞別を、貰ツたからにやァことわられたと、云つて今さら歸りはされず、邪が非でもこゝの宅の嫁にしねえけりやァ濟まさぬえ」トいふ顔お滋はぢつと視つめ、しげ「私も種々と考へて居りますが、たとへお前様が親類の、威光をもつて押しつけて、先を破談にさせましても、所詮私はこゝの宅に、居る事は出來ません。何故といふに、肝心の頼みとする米さんに否かられ、憎にする叔母さんに、氣に入らないで末始終、どうせ納まりは致しません、左様して見れば此のうへに難題を掛くやうなもの、どうぞそれより私の、願ひが一ッござりますから、どうぞそれを許してお呉んなさい。」トいふに萬右衞門點頭いて、萬「成程なりやァいふ通り、良人といひ姑までに、出て往けがしに扱はれるを、知りつゝ縁も組まれめえが、願ひといふのは何様いふ譯だ。」しげ「他の事でもござりませんが、今幾回も言ふ通りで、田舍へは歸られず、こゝにも居られないと、云つて見ると偏一ッの寄所もなし、兼て聞きました鎌倉とやらの尼寺は、私の様に身の上の、詮方のない者が尼になつて、居

る所と申す事、其處へ參つて尼になり、一ツには慈母さんの菩提を弔ひ、また一ツには爺父さんの息才で長壽をなさるやうに、また一ツには家の繁昌。その三ツを佛樣へ、朝夕願ふを務めとして、居つたらいつそ良人を持ち、舅姑小姑の心配をするよりも、遙かに增した氣樂な暮し、どうぞ私は些とも早く、左樣致し度うございます」ト思ひ切つたる女兒が詞を、聞くさへいとゞいぢらしく、思はず溢す淚を拭いて、萬「田舍育ちの馬鹿律義な女兒相應のその料簡、ハ、、、まだ／＼、尼になるにや五十年も早い、そんな馬鹿を云はねえで、自己が宜い樣に仕て遣るのを、氣を永く待つて居な。兒の惡い樣には親が仕ねえ、些とも案じる事はねえ」ト兒を賺す親の心さへ實は沈吟に興業、心の裏にいと覃き計較をするなるべし。

作者曰く、萬右衛門は敢て惡人といふにあらず、遠世の始末は、米次郎母子の行屆かざるに起れば、斯ばかりの叱言はいふも道理なり、唯叔父の威に誇り、女兒を米次郎に強ひて娶合はさんとするの一條は、老人の癖にして、我慢のなす所なり。世間斯くの如きの老人間々あり。然れば弱冠もまた我慢ありて、終に不熟の基となる、互に信義當然の理を守る時は、この惑ひなかるべし、殊にかく我慢は五常を毀ひ人情にも悖る、よく／＼愼むべき事にこそ。

こゝに、東海道川崎の宿のこなたなる、大師河原平間寺の本尊、厄除弘法大師の靈驗、殊に新にし

て、貴賤道俗の男女、この所に歩みを運び、渇仰の首を垂れ、身の災厄を攘はんと欲する者、年中日毎に引きもきらず、抑この大師の謂れを尋ぬるに、弘法は諡にて、生前の名は空海といへり。桓武天皇の延暦二十三年に唐土へ至り、其の後歸朝して紀の國高野山を開き給へり。かくて空海、眞言宗弘法の爲、諸國を遍歴して四十二歳の時、武州橘の郡に至り、一祝官の家に宿りけるに、其の家に一人の女兒あり、空海に戀慕して日暮口説くといへども、空海は出家堅固の人なれば、敢てその心に從はず、女兒はますます思ひ焦れ、命をかけしいひ寄る程に、空海殆ど當惑して、今宵人の寐定まりし時我が閨へ來よといふ、女兒は大きに悦びて、その夜の更けるを待つ程に、空海はそれよりして、家の内を見廻すに、農家の事なれば、麥を搗く杵ありけり、これ屈竟の物と思ひわが閨へ持ち歸り、たゞ宵の間に己が像を、かの杵に刻みつけ、夜着の内へ押しいれて、密かにこゝを脱け出でたり。斯くとも知らで、夜も深けたれば、女兒は髪ふり化粧して、空海が閨へ忍び行き、見ればその人はあらずして、夜着の内には麥搗く杵に刻みたる像のみなれば、餘りの事に呆れ果てしが、忽地狂氣の如くになり、彼の杵に刻みたる空海の像を抱きつゝ、其處ともなく迷ひ出でて、矢口の渡しの漲る水に、身を投げて死にけり。それより年經て漁人の網にかけて引きあげしが、牡蠣殻多く著いて有り、是れを本尊として本閘寺を建立なしつゝ、かの女兒の菩提を弔ひしと、後の人の傳ふる處は[illegible]、

夫れをば知らねど、俚俗の如此いへり。故に四十二の災厄をば、殊さら守らせ給ふといふ。この日はしかも霜月の二十一日の事なれば、彼の大師の命日とて、參詣の貴賤常日よりは多しといへど、日は短く、殊には騒がしき折なれば、春秋の如くならず。こゝに、縫箔屋久治は日頃より、この大師を信心して、月毎に二十一日には必ず歩みを運ぶにより、今日も朝まだきより立ち出でて、平間寺に參詣し、歸路に赴きしが、川崎の此方なる、耕地の土橋の朽ちたるを、心つかで踏みければ、發矢と折れて古溝の中へ、轉ぶ機合に足の爪を、蹴かきて甚きに痛みければ、まづその傍の茶坊へ立ちより、藥など付けて休みけれど、痛みは頓に止みもせず、斯くてあるべき事にもあらねば、其處を立ち出でて、渡しを渡り大森へさしかゝるに、冬の日足のすりげなくて、はや晡時になれば、思ひの外に遲くなりたり、駕籠に乘られんと遠近を、見れど生憎駕夫も見えず、心ばかりは急かれても、足の痛みに自在を得ざれば、竹を拾ひて杖となし、辿り／＼歸る程に、鈴が森の此方なる、鮫洲の邊にて日の暮れたり。名にしおふ鈴が森は、十八丁の磯際にて、善からぬ犬の多くあり、殊に追剝など出る由は豫て聞きたることもあれば、達者すら覺束なきを、足さへ自在に動かねば、如何にせんと心を痛め、こゝらに泊る家あらば、泊りて翌寛さと、歸らんものと思へども、漁師などの住居多く、宿かるべき手段もなければ、心を定めて歩みつゝ、月頃日頃の信心に、大師の利益あるならば、鈴が森はまだ愚

か、猪狼の多く居る、山路を往くとも仔細なし、斯ういふときこそ信心の、徳もあらめと自ら曉して、心細くも唯獨り、鈴が森へと差懸るに、上には松の梢颯々と鳴り渡りて、吹く風膚を通し、岸うつ波は、耳を驚かして、いと腥さ臭のするは、馬死捨場と思はれて、凄き事限りなく、宵暗なれば唯一足の、先さへ見えぬ覺束なさ、幽に光る沖の漁火も、波に搖られて或は隱れ、遙かに聞ゆる狗の聲は、彌魂を消すなるべし。久治は覺悟の身ながらも、頻りに胸の打騒ぎて、前後を見返れど、生憎宿飛脚の提灯だに、見えねば、今は弱り果てて、佇みしが又思ひ返し、一心不亂に南無大師遍照金剛といふ文を唱へ、五六町來にければ、早人里へ今少しと、漸く心の易く覺えて、足の痛みも打忘れ、猶その聲をはり揚げて、遍照金剛を高らかに、唱へながら來る處に、思ひもよらず傍より「モシ／＼」ト呼びかけられ、思はずきつと飛退いて、眼を定めてよく見れば、まだうら若き女の容子に、愈怪き聲を震はし、久「エ、何だお前は正眞の人かエ。」女「ハイ私はお前樣に道をお聞き申したうございます。」久「何だかどうも氣味の悪い、狐狸の所爲ぢやァねえか。」ト暫し視つめて居たりけり。

第十六回

當下女は近く進み、女「モシこれから鎌倉へは何樣參ります、御存じならば何卒教へて下さいまし」

「エヽ、鎌倉エ、お前異な事を聞くなだなア、此處からはまだ十二三里あらア、彼方へ向いて早々と往きな。」ト只一言に言捨てて、氣味惡ければ見向きもせず、此方へ來れば又呼懸け、「モシ〳〵、私は何もそんな、妖怪ではございません、チット譯が有つて鎌倉へ、參り度いと思ひまして、暮方に宅を出ましたが、御覽の通り只一人、途は知れず暗さは暗し、誠に怖くツてなりませんが、思ひ立つた一念で、漸う爰までは參つても、五六町手前からは、人の家も一向なし、松の風に浪の音、渾身が震へて一足も、體は先へ出ませんけれど、其樣に遠くはあるまいと當推量は大きに違ひ、十二三里もあると聞いては、脚力が脱けて歩行かれません、何處のお方か存じませんが、何卒貴郎のお情で、今宵一夜を明しまする、旅店でもあるならば、お連れなすつて下さいまし。」トいふも涙の震へ聲、いと便なくも見えければ、この時久治はこの婦女に、聞いて見れば哀なる事を細りて、心に安堵し膽を撫で、「ハヽ、實に然やア膽を潰して、未だに胸が躍をする、何だといふ事かと思つたら、お前も旅寢人だが、お前男でさへ氣味の悪い、この鈴ケ森を徐々と、歩行くのは感心だ、私は今日足を痛めて、思ひの外に遲くなつて、どうせ今夜までは歸られねえから、品川へ泊る積り、大んならお前も一所に泊つて、明日は宿場から、駕籠を頼んで乗つて往きなさるが宜い、見りやアびた〳〵跣足で、さうして鎌倉まで往かれるものかね。」「全體私は田舎者で、江戸へ參つたは今回が初めて、豫て噂に聞きますには、江戸から鎌

倉は誠に近い、達者の人は日歸りにも致すといふを聞いたから、其樣に遠くはあるまいと、ツイ碌々に聞きもせず、途へ出て通りの人に聞きましたらば其の人が、ム、鎌倉はツイ其處だ、急いで往つたら夕刻前には、行き着くだらうといひますから、段々寂しくなるにも構はず、爰まで來たんでございます。夫れぢやア先刻教へた人は、女だと思つて馬鹿にして、嘘を吐いたんでございますネ。」久「ハヽヽ、お前そんな形をして、いきなり鎌倉へは、どう往くた、ぞといふものだから、嬲まれたのだハヽヽ、」女「左樣でございますかネヱ、憎い人だノウ。」久「だれでもサ、お前樣の樣な、深切なお方に、お目にかゝつたのは、まだしも僥倖でございます」久「ハヽヽ、これから先へ往つて見な世に何樣だらう、私やア一心に大師樣を念じて、命からゞ爰まで來たア。」女「私は田舍育ちでございますから、隨分寂寥しい所は其樣にも思ひませんけれど、連れはなし道は知らず誠に心細くなりましたヨ」ト噺しながらに先に立ち、跡になりて歩行く程に品川の宿へ着きければ、久治は相應の宿を見たてゝここに泊る。旅合のありさま、何方も同じければ委しく記さず。扨湯に入り食事もすみ、久治は草臥足を摩りながら、久「コウ處女樣お前はまア何樣いふ譯で鎌倉の何處へ往くのだエ。」女「ナニ些と。」久「ハテサ隱す事はねえわネ、私が察しるのに尼寺へ縁切といふ理窟でもあるめえし、夫んなら鎌倉に好男子が居るといふでもあるめえし、何樣も分らねえが、マアしかし縁切らしいネ。」女「ナヽニそんな譯ぢやアございません」久「夫んなら何樣したンだな。」

女「まア、、まアまアまア、おやアなア、眞實に聞くのだ、假初にも斯うして連れに成つて、一所にこの宿へ泊つて見ると、何事と言つても私の懸合ひだ、それだから些たア道理を聞いて、承知して居ねえぢやアなりませんえ、又たいてその分解がいはれねえば、無理に聞かうともいふのぢやアねえが、其の換り宿の亭主に逢つて、この女は斯ういふ條で、ここへ一所に來たばかり、何も己の連れといふ訳ぢやアねえから、お前方の料簡で泊めるなら泊めるがよし、斷るなら斷んなせえと、言つて仕舞ふ分の事さ女「マア〜何卒、そんな事を言はないでお呉んなさいまし、只一晩でいいから、どんな事がありますものか。久「今どうしても〜一晩は愚か、半時だつても等閑にやアならねえ、それとも斯う〜いふわけで一人旅だしたと、嘘を吐きつこなしに云ひなせえ、夫れで宜ければ、またおなさい、譯を申しますから、他に話してお呉んなさいますなヨ。」久「ハ、、誰にいふものか、又言ひたくつても誰も居もしねえもの、、、、〜話して聞かせナ。」女「私はお滋といひまして、在體寄生の者でございますが、今回伯父と同様に、江戸の親類へ参つて、其處の宅の嫁になる積りの處が、こんな田舍者だから、衆人に否がられますのを、伯父が無理に押付けようと申しますから、迚もない縁と後で言つたところ、本始終治まりもしますまい、と言つて田舍の方は江戸の親類へ嫁にいくと、暇乞しましたのを、今更歸られはせず、どうぞ私を尼にして下さいと、申しましても伯父は聞きませず、それに今日暮方に

遣書をして、一人駈けだしたのでございますトいふも漸う恥かしさに、顔を覆ひつ口の内で、よく聞きとれぬ處もあり、久治は始終聞きはして、ムヽ、ハヽ、ア異な譯だネ、良人の縁を切つて尼寺へ往くのは當然だが、縁が結ばらねえと云つて、尼寺へ往くのは新しい、しかしだれに逆ひなくば、何も今盛りの年で、世を捨てるにも當らねえサ、但し思ひ初めたお方より、他の殿御と寝る事は、われが否をといふ理窟か、畜生めこいつア、エヽ左様ぢやァございません、従弟同士でございますけれど、今まで逢つたことはなし、思ひ初めたの染めないのと、そんな浮薄らしい事ぢやァ有りません、ムヽそんならまた縁の事サ、世界に男は澤山だ、殊にお前の縹致を持つて、ナニ縁付かうと言つて見なさい、貰人は降るほどあらア、斯ういふ自己始めか、お前の方でならうとせへいへば、直に女房にする氣だらう。」『ナニ、ソレヤ嘘ばツかり。」『イヽエ嘘でねえ、そんならァ女房にして呉れろと言つて見な。『嘘か實か、ヲヤヽヽ、オホヽヽヽ、おやァねえわな、なんぼ年が往かねえとつて餘りだ、まァお兄になることは出して、自己が意見につきなせえ。」『それでも何様致すのでございます。」『ナニ斯ういたすのサ。」しげ「ア、レ私やアネ、何故だか足が痛い／＼と思ひましたら、こんな豆が出來ましたヨ。」久「豆ならば水を出すと能くなる、ドレ出してあげよう。」しげ「アレサ突つついちやァ否でございます。」久「夫れでも突つつかなくツちやァ、能くはならない。アレサまァ靜として居なヨ。」しげ「オホ

ホ、疼つたい、そして其處ぢやァございませんといふのに、アレサ。」久「エ、御出な聲を出すせ、お前、豆を突つついて呉れといふのぢやァねえか、どうせ始めは些と痛いから、我慢をして居なくッちや往かねえ、その代り跡ぢやァ何樣に能くなるかしれねえ。」しげ「それでも餘り不躾。」久「ニお前た夫婦の中で、不躾もなにも入るものか、まア手を出さずに居ねヱ。」しげ「アレサお前さんと夫婦ぢやァございませんし。」久「おめへは左樣だらうが、自等はその氣だ。」しげ「そんな事をお言ひなすつて、後でお困りなさいませう。」久「ナニちつとも困らない。」しげ「ア、アレ痛い、オヤ水が出ましたネ。」久「ソレどうだ痛みが止んで、宜い心地になつたらう。」しげ「ホンニねえ、誠によくなりました有りがたう。」久「萬事この通りサ、本道外科なんにも知らず、器用に性質いた男を良人にするお前は、餘程な仕合せもんだハい。」しげ「ほんに左樣でございますネ、どうぞ今回の世には、氣轉が能く性質いて來て、お前樣のやうな實のある、器用な人を良人に致しませう。」久「お前も此處にいるのは氣休めのもんだハ、今回の世もねへもんだ、他にはない氣を揉まして、ナニ／＼モウ寢やせう、ドレ／＼今日は遂になく草臥れた。」しげ「さうしてもお足をお痛めなすつたからでございませう、ドレ些と御恩返しに、足を揉んであげませう。」久「ナニ／＼勿體ねえ罰があたる。」しげ「ソレ御覽なさい、だからいはねえことといつておいて、また罰があたるとお言ひなさるぢやァないか、夫れでモウお前樣の虚言は知れ切つてをります。」久「夫

れお前、お前正直に、私と夫婦になつて呉れる氣か。」しげ「お前さんおいやでござりませう。」ト、又八「なに思はせぶりの言ふもんぢやァねえ、ヤアレ／＼、行燈が消え懸つた、鳥渡掻き立つてお呉れ。」しげ「アイ、オヤ誠に短い燈心だ、チヨツ／＼／＼、エヽ／＼こりやァ往けません。」トつい灯を消して真暗になる。しげ「誰ぞ呼んでつけて貰ひませうか。」又八「モウ○るのだから燈火はいるめえ、餘程氣の利いた行燈だ、サアお前も○○。」ト隘き臥房に只二人、誰に憚る人もなく、醜といふ猫に鰹節、牧馬息下に釜の番、たとへ金佛石地藏、木で造つた閻魔でも、唯はおかれぬ今宵の景物、直に人宜しく寝し給へ。かくて其の夜も明け放れ、馬の嘶き驛路の鈴の、音も冴えわたる朝まだき、二人は起き手水をつかひ、朝飯すみて立準備、久治は熟々思ひまはすに、人品といひ容子といひ、賤しき者の兒とは見えねど、國生の者と聞きたるまでにて、親の名もいはず江戸の親類、何處の誰といふ事もいはないで見れば怪なもの、何處からどんな尻の來る、女兒か知れねえが、今さら逃げても仕舞はれまい、縁が出來たら出來た時、何樣でもなるうと腹をすゑ、まづ旅籠屋を立出すれば、お滋も今は鎌倉へ、行くべき念はすらりと失せて、どんな身元の人やらら、それは知らねど男振、意氣で實ある心に惚れ、どうぞ見捨ててお呉れでないと、紋切形の口上も、流石粋惚子の花娘、うち連れだちて磯際に、左手は八ツ山御殿山、右手は遙かに安房上總、見渡る海面を、眺めて歩行く牛町の、足は遅く

も忘らず、行くが肝心金杉町、あだなえにしを結びしは、神の誓ひの神明町、恋は苦労が露月町、幸苦辛橋打渡り、嬉しき今日を京橋と、二人が中の中橋も、往来近くなる程に、お滋を其處に待たせおき、久治は宅へたゞ歸りて、かゝる果敢なき處女に出逢ひ、不便なれば兎も角もと、連れてかへりし事のよし、母の沖津にもの語れば、沖津も元より情深き、老女にてありければ、早速に呼び入れて、見れば何ぞや由ある氣の、女児なればいとゞ哀れ、まづ休ませて來歴を、委しく聞いた其の上で、詮方もあらんと思ひつゝ、其の日はこゝに止めけり。

此の後お滋が一件は、またにかゝりしと洩されたるを、忽ち久治と契りをなす事、いと浮薄なる樣に見ゆれど、固來處女の心盛く、且嫌はれしを憤りて、既にかくなんとせしなれば、途にて逢ひし男に靡け、その志を献じたるは、其の道理なきにあらず、人々作者が咎め給ふな

開橋末摘花二編巻之中 終

閑情末摘花 三編卷之下

第十七回

昔鬼子母神に千人の御子あり、その中一人を隠されて、忽地惡相を現じッヽ、夜叉の如くになり給ふと、古き話說に傳へたり。况して萬右衛門は數もなき、女兒は何時か家出して、跡に遺せし書置には、果敢なき浮世を感じッヽ、尼になるとの文體にて、親の許しも受けずして、斯う我儘な計らひを、嘸な憎しと思すらうど、恥を厭ふの心から、惡しくな汲取り給ひそと、いと細々と書いてある、これが記念か情なし、まだ裝さへも盛りには、ならの都の八重櫻、咲きも揃はぬ身を持ちて、翠の髮を薙拂ふ、心の底のいぢらしと、あるにもあられぬ思ひの纏、さらぬだに米次郎母子の心を恨むのなり、いよ〳〵ます〳〵怒りに絶えず、まづ遺書を披きおいて、米次郎母子を呼び、斯うなり往つたも其方衆が心得の惡いゆゑ、三十里の旅がけに女兒一個を捨てには來ぬ、行方は知れた松ヶ岡、些とも早く呼びもどし、嫁にせぬならせぬ樣に、彼女が身の納まりを、つけて貰はにや合點ならぬと、いきり切つたる萬右衛門、お杣はそれ見て悔りし、短氣にも程がある、たとへ嫁にはしないとて、血肉を

分けた親類中、田舎へ歸る事がならずは、此處に增ッたよい所へ、緣付く日は幾干もあらう、女兒氣の只一途とて餘りな思ひきり、殊に一個で鎌倉まで、道の程さへ覺束なし、何は兎もあれ追つかけさせ、連れ戻した上の相談、些とも早くと店の者、心利きたる男に言ひつけ、旅支度さへそこ／＼に、お滋が跡を追はせけるに、待つ身は辛しと人のいふ、今か／＼と音信を、きかまく欲しさに今日も暮れ、翌となりても沙汰なきは、どうした事と案じられ、夜も眠らぬ第三日目、追人の者は歸り來て、松ヶ岡まで往きたれど、絕えて知れずといふにより、お滋は呆れて言葉もなし。これを聞いて萬右衛門が、然らば遂に渾身も極えて、いかにせましと思ひしが、斯くなりゆくも兵次郎、門下の者が我儘にて、親類の好みを思はず、義理も法も辨へぬ、不覺よりしての事なれば、女兒一個を無くした者の、彼奴等にも又困らせて、腹癒せんと思案をなし、先づ柴田も兵次郎もなんと思ふか知らないが、遺書にはこの通り、婿に嫌はれ出に精えれ、今更宅へも歸られず、其れ故に世を捨てて鎌倉へ行くとはになると、立派に書いてあるけれど、追人を遣れば途にないといふ、シテ見れば迎へたので、萬一淵川へ身でも投げたか、但しは馬鹿者に捕まつて、思ひの外難儀でも、して居る事かそれも知れず、トいうて少しも當もないのに、迷子を呼んでも歩かれぬ、何れにしても娘を捨てて、家出した不孝な奴、骨を折つて探すにも及ばれまい、彼者に就いて昨日來た人助さんのお話の中、萬一なもかし

情合のある事なら嫁に貰ふも宜いが、今回改めて太助から私が女兒に貰ひうけ、そして此方の嫁に仕ようと左樣すれば不所存な女兒を一個打捨つても新たに儲ける一個の女兒、私もそれが却つて安堵、ト米次郎やアノ太助を早く呼びに遣つて下せえ、その一條を掛合つて早々に片を付けよう、夫れではお前方の氣に入らねえかは知らないが、三ッに一ッは私がいふ事も聞いて貰はにやアならねえ。」といふを今更無下にもならず、然ればとて太助を呼ぶは、いとより易き事なれど、其の後はお里の容子も知れず、若し萬一緣付いたら、異したものと腹の中、穩かならねど兎も角も、まづお里が容子を聞き、渠さへ承知の事ならば、仔細なしと思ふから、支度忽々に吾が家を立出で、濱崎町へと急ぎしが、折しも冬の日足は早く、行着かぬまに暗くなりて、その方角さへ定かならず、殊に先頃只一度行きたる儘にてよくも覺えず、彼方此方と徘徊れど、何れも同じ草屋の樣、問はんとすれど此の邊は、明店の多きにや、火の影さへも見えざれば、尋ねわびて先へゆき、又跡へ立戻り、霎時は其處に佇みて、胸に行くてを考へつゝ獨言、米「ハテナア、何でもこゝに違ひねえと思つたが、どうも暗くツて分らねえ、萬一町内が違つたか知らん」トいひつゝ見やる向うより、チリン／＼／＼そばウ／＼と、くる風鈴蕎麥うり、米次郎は驅け寄つて、米「モシ／＼こゝは濱崎町かネ」蕎「エー濱崎町はモウ一町先へ往つて、右へ曲ッた處でございます」米「ハ、ア道理で知れねえ。アイこりやア」ト言ひたから聞いた

まゝに急ぎ行き、右へ曲れば左側は、杉か槙木か生垣あり、こなたには寺と見えて、垣の上より如竈
如竈と、塔婆の頭五輪の屋根、見るさへ凄きにかさ／＼と、風のまに／＼聞ゆるは、柏の葉のそよぐ、
なるべし。米次郎はまたあきれて、これは狐か狸めに、騙されたのかハテ不思議と、獨り心にうち笑
ひ、引つかへさんとする折しも、かの生垣に身を寄せかけて、立つたる男を目早く見つけ、道を聞か
んと立寄れば、彼の男は足早に、こゝを去らんとする有様、異な奴と心に點頭き、「もし／＼、ちと
物を承りたうございます。」トいはれて男は振返り、「ハイ私かえ、何でございます。」「モシ濱崎町は
こゝかね、先刻から尋ねやすが、どうも知れないツて困ります。」「ハイ左樣で、此處等は知れにくい所
でございます、モウ半町程前の横町でございます。」「ハイ、たれおやまア大きに來過ぎた、其處
にお里と云つて、門付に出る女兒を、知つて居なさるかえ。」「ヘイ、」ト暫く考へる、をりから米次
郎は男の傍へ、つか／＼とすり寄つて、「ヤどうも暗くつて分らねえが、お前は清之助さんぢやアねえ
かえ。」聲が聲に生寫しだ、もし違つたら御免なせえ」トいはれて此方は驚きし、「ヤ、さうだ、お前は
米さんか。」「ハイ、私も先刻からよく似た聲だと、實は怪しく思つて居ました、お前さんにお目にかゝつち
やァ、誠に面目次第もなく、薄情な私を憎い奴と、恨んでお在でなさるだらうが、何事も皆因果だ、ど
うぞ堪忍してお呉んなさい。」「なにさ、お前さんがお悪いのぢやアなし、堪忍するも仕ないもないのさ。」

萱堂は女だけで、なんぞといふとつまらねえ、愚痴ばかり並べるから、私が種々氣休めを云つて置くのさ。しかし何處にどうして居るか、さして貯へもあるめえ、さぞ困る事だらうと、實に案じねえ日はなかつたが、だれでもマア／＼息才で居なすつて宜い、然して遠世も一所に居るのかえ。」清「左様さサ。」米「何處だえこの近所かえ。」清「問はれては猶口隠り、明々地に斯うともいひ兼ねる、心をさつして米次郎が、「清さんお前も氣の弱い、全體私の方へ内證で、實は這般々々いふ所に居ると、知らしてでも呉んなさいやア、今まで斯うして置かず、又些とやそつとは貢ぎも仕ようし、何様か斯様か譯をつけて仕舞ふけれど、何ないふにも、一向音信なしといふ物だから、詮方がねえ、見りやア何だか寒さうな形だ、さア／＼何にしろお前方の、居なさる所へ同伴に往かう。」清「左様云つてお呉んなさると、叱られるより餘程怨樸い、實に吾儕が悪いから。」米「アレサ今更に成つて、善いも悪いもいらねえわな。サア先へ立つて行きなヨ。コレサ清さん、何を其様にもおど／＼して居るのだな、だれともまた遠世が身をどうかさせたのかえ。」清「イ、エどうして、全體食方に差詰つて、彼の女が口からも何様か仕ようと云ひましたけれど、だれがやア猶々済まねえから、そんな事は出來ねえと云つて居ますのサ。」米「夫んなら宜いがやアねえか、マア何處だへこの近所かエト延引きならず詰られて、清之助は溜息を吐き、米ア、吾儕が不甲斐なく、こゝに彷蕩いて居たばかりで、お前様にお目にかゝ

れ、今の樣に云はれて見ると、否ともいはれず應とも云はれず、實は思案に餘ります。」米「トいふは又何樣した譯ネ、吾儕にやァ一向わからねえ。」浩「藪から棒に斯う云つちやァ、お譯りなさらねえ筈だ、まづ段々の入譯を聞いてお呉んなさい、實は兩個して出る時には、どうで逢はれぬ世間の義理づく、死んで仕まはうと覺悟して、出は出たがその中に、夜が明けかゝつて人目も繁し、夫れから泥町の龜屋へ行つて、その日の暮れるを待つて居て、死にに出た羽芝の鄉、圖らぬ人の意見にて、身を助けられし始終、夫れよりお里の家に居て、朝夕積る物思ひ、唯一錢の才覺も歎きに沈む兩個が難澁、見れば見るほど哀しさつらさ、遠世が形の見すぼらしさに、皆わが身から仕出した所爲、斯うして居れば倶々に、饑ゑて死ぬ他はなし、畢竟この身があればこそ、遠世にも幾許の、難儀をかける不便さに覺悟極めたる今宵の仕儀、可樣なをに欺き嘲し、遠世にわかれて立出でしはこの身を捨てん計らひなり。この身がなくなくば遠世が身の上、他に世話して安樂に、世を送らんは必定と、思ひ定めて前に[illegible]、と、態と時節を言ずにいひ、家を立出で一朝に、早く死なんと思ひしが、此處まで來たれど[illegible]、唯後髪を引かるゝ心地、我にもあらで立出で、前へあゆむも[illegible]、人の噂に心を引かれとまたもに呼返され、圖らずお前に逢つたのは、嬉しい時で遠慮さへトいふに夜寒の聲は齒吹の鐘を果てて、二度目に一圖に死ぬ[illegible]で出た所へ吾儕に合ひ、死に後れた殘念さ、さりとて今さら無理もねえが、

いはばまだ皇天樣に見捨てられねえ處だらう、他に仔細の有るではなし、モウ〳〵死ぬにも別れるにも及ばねえ、夫れは宜いが遂世が料簡、お前は騙し果せた積りでも、彼女が心には何と思ふか、どうも吾儕は氣づかはしい、些とも早く行つて見よう。」「夫だんなら左樣致しませうか。」ト先に立つて行きながら、清之助はふり返り、「夫でお前さんがお尋ねなさるのは門付に出るお里といふ、女兒の宅だと被仰つたが、今日まで世話に成つて居るも、お里と云つて母子の暮し、門付に出る女兒、萬一それではありますまいか、どういふ筋の御用が有つて。」「米「ハ、、、その譯は跡で寛々、ハテどうも思ひもつかぬ不測な事も有るもの。」と、いひつゝ、路を急ぎけり。

第十八回

見るがまゝに、頓て消えゆく埋火のはかなき世をもたのみけるかな、と拾遺集の員外に被せられたり。遂世は苦勞のその中に、良人の心を汲みかねて、虚言か眞言か知らねども、その身の出世と聞くからには、夫れを止めんよしもなく、變り易きは人心、最初は水性で相惚れの、たとへ死ぬとも別れはせじと、契り堅めし言の葉も、今の貧苦を忍びかね、月ごろ日頃の恩愛も、忘れ果ててや入壻の、世話する人のあるならば、其の身は其處へ往かんといふ、心の底の薄情さは、いふに言葉はなけれど

も、畢竟この身が在る故に、憫見るもさ良人の零落、さう快く諾ひて、出し遣りしその跡では、這樣と覺悟を極めても、これが此の世の名殘かやと、思へばいとゞ咽返る、涙の瀧をとゞめかね、心も細き燈心の、暗き火影に書きのこす、たゞ一筆はこの日來、世話になりつるこの家の兩個、お里母子へ禮心、やう／＼に書き果てゝ、一息ほつと太息を、つく／＼思ふ身の果敢なさ、これも不幸の親の罰、たれをかは恨まんと、胸なで卸して立ちあがり、お甲が手匣の上にある、剃刀をとり出し、既に死なんとしたりしが、思ひ返して獨言「ア、これはしたり早まつた、此處で死んでは、お里さんや慈母に難儀が掛る。今まで種々と深切に、世話になつたその上に、死んだあとまで彼是と、厄介かけては重々罪、何樣して死ぬのも同じ事、委しい事は遺書に、いうてあるから夫れでよし、死んだ骸の見られぬ樣、いつそのことに大川へ、ア、夫れがいい／＼。」ト獨り點頭き剃刀を、元の所へ仕舞ひつゝ、徐々出る門の口、心は急けど病上り、足捗らぬ路次の暗がり、ばつたり行きあふお甲母子、「ヲヤまア遠世さんぢやないか、何處へお出でだ。」ト思ひも寄らず、遠世は悔りやゝ口ごもりて、とせ「なアに鳥渡其處まで。」トいひツ、摺りぬけ出でんとするを、母は遠世が袖を控へて、母「何の用だか知らないが、まだ鹽梅も快くないに、出歩行いては惡いわな、買物なら吾儕が行かう、清様は留守の[illegible]マア／＼宅へお出でヨ。」とせ「ナニ直に行つて來ます」[illegible]「何だか異變なねへ、お前ついぞ出た事もな

くつて、何ぞ清さんと、喧嘩でもおしぢやアないのか、マア兎も角も宅へお歸りヽヽト抑留められて詮かたなく、俱に歸れば行燈掻きたてヽ、お甲は遠世が顔を見て、さヽ「オヤお前何様おしだえ、そして清さんは何處にお出でだ、何でも私が異變だとおもつたに、案の定をかしな顔をしてお在でだヨ」ヽヽ「ヱヽ大か私共が苦しい中に斯うして居て、氣の毒だとか、なんとかいふ處からの事たらうが、此間も申す通り、迚も貧乏人のこつたから、いいお世話はならないでも、まさか食べずに居る様な事はないから、決して氣を揉ますにお出でないといふのに、お前様方はおわかいといつて餘り遠慮が過ぎるから、揉まないでも宜い氣を揉んで、ホンニ益もない事サ。」さヽ「そりやア慈母のいふ通り違ひないのサ、私共が宜い様に仕ますから、有無の事なしぞに、些とも御構ひでない、今夜もソレ御らん、おまいと其處まで行くと、酒宴をして居る家が有つて、呼込まれてネ、種々好みが出て、此様に夥目を貰ッたから、モウ／＼寒いのに早く歸らうと言つて、まだお前やう／＼戌刻になるかならずだけれど歸つて來たヨ、斯ういふもんだから何も案じる事はないわネヽヽト錢九六百手拭へ、包んだまゝで其處へ置く。遠世は、兩個が信實の、平素に變らぬ言の葉を、聞くさへ胸の塞がりて、詞も出さず眼に泛み、涙を拭いて居たるにぞ、お甲は何やら氣に懸り、清之助が見えぬも不測と、遠世に對ひさま〲と、問へど明地に回答もせず、母も俱々不審しきに、遠世が顔をおつと視つめ、ヱヽ何が吾儕共の留守に仔細が

有つたにやァ違ひない、吾儕共の仕樣がお氣に入らないのか、胸におちないことがあるなら、物は當ツて碎けろだ、這樣々々だとお言ひなさいな」コレサ勿體ない、お前樣方の仕樣の宜いのわるいのと、そんな事がありますものかネ」「其んならまた何樣おしのだエ、聞かない中は氣になるわネ、ァ何樣おしのだかお言ひなさいヨ」ト問はれてもまたいひ兼ねて、暫しは案じる果敢なさ事の限りぞと、思ふも至極道理なる、折からお甲が目早くも、見付け出したる封じ文、ヲヤ何とお甲さまお袋樣遠世より」トやさしの文ははつと不審顔、遠世ははつと魂をぬけ、ァ、それはト把らんとするを、お甲はとらせず、行燈の傍へ躙つて封おし切り、讀み下して仰天し、ヲヤ何だとへ、清さんは婿に往くと言つて出たから、私は死んで仕まひます、今までは種々とお世話になつて有難かたい、お禮をしたいが今の身では詮方がないから堪忍しておくれ、トこりやまア何樣したんだエ、なんだか私にやァ一向わからない、遠世さん何樣いふ譯だネ、泣かないで言つてお聞かせな。エ、阿母何樣したんだらうネ」ト左樣ナ自己にも分らない、其れならば先刻遠世さんが庭に出る處を、蟲が知らしたか例になく、どうも宅が案じられ、早く歸つて宜かつたネ、トして遠世さん何樣したんだエ、清さんが何處へ婿に往きなさるのだ、なんだか夢の樣な事だネ」ト、早くお言ひなさいヨ」ト右と左に母と子が、すがりて樣子を尋ぬる程に、今は包まんやうもなく、在りし次第を

遂に、噺してその身の胸のうち、いふにいはれぬ縡譯まで、細かに解いて涙ぐみ、おせい「それで私も何處へか縁付く樣になるかと、お前も早くその世話人とやらの處へ往つて相談おし、と言つて快く出して遣ッたが、ナニ私がこんな形で、何處へ縁付かれるものか、胸の中ぢやア死ぬ積りに覺悟を極めたから、又後で何樣したかと案じもなさらうし、萬一清さんが、容子を聞きに來まいものでもないからと、哀しい中で一寸一筆、書き遺して出た處、お兩個にお目に懸つて、又死にそくなつたのでございます」ト始終を語ればお兩個は愕り、さと「オヤまア清さんも何樣したんだらう、誠に氣樂だネ。お前もまたなんぼ左樣お言ひだからと言つて、アイと言つて出して遣る事もないぢやアないか、またれにしても死ぬにやア及ばないわネ、清さんが愈そんな不實をおしなら、此方も其の積りで、これ見ろといふ樣に成るが宜いぢやアないか、ノウ慈母、たとへ身形は何樣でも今旦那をとらうとか、またし相應な處へ縁付くとでもいふときは幾干もあるだらうね、ハイ清さんも日來に似合はない思ひの外憎い人だねえ、そんな人に情を立て死ぬのがホンノ狗死とやらだわ、馬鹿々々しい」トお里は今更清之助が、行狀を疎み遁世には、力をつけるその言葉、母は傍にてつくづく聞き、母「左樣だがノお里、吾儕は何樣も合點が往かないと思ふヨ、勿論人の氣はその時々で變るものだが、清さんにおいちやア、それはあるまい、何でも是れにやア何樣とかいふ思入れがあるだらう、ハテなんにしても困つたも

のだ、そんな話を此上でも吉備が知ると、及ばずながら仕様もあるけれど、然して清藏が出て往ったのは先刻の事かえ。」「ハイ、日が暮れると間もなくさ。」「それぢやア此の近所にでも待たしてある氣遣へもなし。」「ミヽ何故また然う、お前までどうしたんだらうと思ふんだ。」「さうさ吉備の様が違ふかは知らないが、悪くすると、マア困つたものだねえ。」と案じ貌すると、「ほんとに、何でも聞かせたら、私も何様も氣になるかえ。」「まアお前方は若いから、何でも物事が素直で、他が瞞うといふ事を受けになるが、自己の様に老年ると、先潜りをするから、間違ふ事もあるが、また當ることもあるのさ。」「それだから、清さんは直ぐに、聞きに行くのがおあせりでありませうか。」とうち頭の考へでおりやうと云ふ在様であるまいとお思ひのやうにも、何様したんだらうネエ」と此のとき際に清之助が身を案じ侘ぶる面體に、すべて年比が遠慮の挨拶、主人顔を見合はせて、しばし詞もさ折から、門口格子を引きあくる、音にひとしくふり向いて、「ヲヤ清さん何處へお出でだ、誠に人にやア氣をお揉ませだョ悄い。」「なに……婦達もいい加減にお為なさい。直に遊山にが、大変な仕出來ましたのさ。」「全體嘘だらう、私も最前は精神がない出ていたが、思ひも寄らねえ方にお目にかゝつて、のつ引きならぬ歸つて來たのさ。」「何だか知らないが、マアすよく〜お歸りだ、私やア貴君に案じた」といふを聞きかけ清之助は傍を向いて會釋なし、まず

ナこゝでございます。」米「左樣かえマァ先へお上り。」清「夫んなら御免なさいまし」米「ム、成程此處へ來てやう〳〵知れた、先頃來たのもこゝの宅、ハテ不測な事もあるもの。」トいひツヽずつと上りにかかれば、遠世は夫れと見るよりも、はつとばかりに胸轟き、顔を火影へ反ければ、お米母子も見て悔り、さてはや貴君は先頃入らしつて下すつた、白羽根町の旦那ではございませんか、清樣のお心易いお方でもございますか、マァよく入らッしやいましたネエ。」清「ホンニ旦那先日はモウあり難うございました。夫れッきりお出でがないから、大方この娘の氣隨をお腹立ちだらうと、不斷お噂を申して居りますのサホヽヽヽ、何かエ清さんと御一所にかへ。」清「アイサ此の方が遠世の兄樣で、米樣といふお方サ。」米「ヘヱエ、左樣でございますかエ。遠世さん兄さんに御挨拶なさいましナ。」清「さぞ面目なく思召すだらうが、モウ斯うなつちやァ詮方がございません。旦那エ、何卒お叱りなさらないで、何樣かしてあげて下さいまし。」米「ナニノヽ今更叱ッたッておつ付く譯ぢやァねえ、コウ遠世マァこゝへ來な、お前どうした大分痩せたノ、定めて種々苦勞もあるだらうからハヽヽヽ、心がらこそ身は賤しけれど、アヽ、手前の言ふ事ばかりいつて禮もいはねえ、今道々清さんに聞けば、既に死ぬ處を慈母が救ッて夫れから是れまで世話に成つて居たとの事、頓から左樣と知つたら仕樣もあつたけれど詮方がねえ。其處で今夜は據ねえ譯で、此方へ態々出かけた處が、ツイ道を間違へて彼方此方徘徊いて

不圖清様に行き過ぎて、たゞ〳〵譯を聞いた處が、斯う〳〵いふ係合で死ぬ覺悟で出たといふ、其の時遠世の挨拶からが、餘り器用に出來たから、這般も確かに死にでもする、料簡でもやアあるめへかと思へば思ふ程氣にかゝり、急いでこゝへ來て見れば、マア無事で安堵した。」○「私共が最う此と遲く歸ると、大變が出來る處でございましたが、夫れでもマア何事もこざいませんで、お互に僥倖、イヤモウ若い方の短氣には困りますネ、、、。」米「何から何までお前方の深切、實に有難う嬉しいネ、たゞそれにつけてもお前方に、折入つて噺したい、大事もあるけれど、今此の所は往來だから、今云ひ出しては餘り延びるから、四編の始めにいひませう」腰より出す煙草入、「まづ一服やらかさう。」

閑情末摘花三編卷之下 終

閑情末摘花四編之叙

予此の冊子を見はしてより、僥倖にして看官の御眼鏡に協ひてや、また此の文編は出でぬとしの、催促稀の筆を援くことはすれども古風な顧へながら、趣向は聊か古風によらず、背も下も裏にも優き、たの人情に變りなしとて、いうて仕舞へど無一物、本來空な根なし草、其處に何用の妙案古寺、執筆別傳の教へも、この假字書を解す事は、九年面壁の達摩様でも、青界十年の娼妓に如かず、吉原諸兒の瞭覽ふ、まだ見ぬ浮世の人情本、紫女清少が筆作に、その香逼くして俗におちず、ここに於て春町喜三次、その他山東式亭等が、始めて滑稽を唱へしより、今其の道の益盛りて、世に流行はるゝ事識んになり、西に九州薩摩あり、東界も輩の住家なりす、北は松前根山まで、京師子を稱して、皆なから中の都を知り、且人情によく通じて、千里の外の郭言葉、鎌倉北條の中が言まで、聊ては壹人に參への趣を寫す昔か代や、文華に咲花と共に開きて、千歳も變らぬ春の色を、壽き言す事如是。

皆庄のはつ春

金水道人誌

閑情末摘花 四編巻之上

第十九回

これ八幡大菩薩は、和漢無雙の宗廟にて、上一人より下萬民に至るまで、信仰の頭を傾け、家内安全息災を、祈るに應じて靈驗あれば、その第一は宇佐の宮、第二は山城男山、其[illegible]鎌倉の、鶴岡八幡宮、江戸の地にその名さへ、豊かなりける富が岡は、殊に繁華の土地にして、娼家は軒を並べて[illegible]の賑ひ絶えず、唄女は紅の裳裾を翻し、客のまねきに應じて[illegible]時は、[illegible]山におらねど、百様の網に入る事を樂しむ。こゝにその頃名に高き、平平といふ[illegible]は、料理の獻立に心を盡し、商を巧みにして、[illegible]は東都の第一[illegible]の亭に居る者は、年齢五十餘りの[illegible]、[illegible]所在肴を出して、[illegible]り酒のみ庭を眺めて、人待佗びたる趣なりし、斯かる所に[illegible]見廻して、この亭へ入來る人は、[illegible]の叔、茶坊の女に案内させて、すつと這入つて腰を屈め、

太「イヤコリヤ誰様かと存じましたに、白羽根町でお目にかゝつた、桐生の[illegible]萬右衛門[illegible]、見れば唯お一人で、ハヽヽヽお樂しみでござりますナ。」萬「これは／＼太助殿能う早う來て下さつた、[illegible]

マア此方へ。」太「唯今お手簡を下すつて、何か急御用の趣、併しお名前を福萬とばかり故、ハテ誰樣かと一向解せず、モシ人違ひではあるまいかと、存じたなれど使の男が、何でも私に相違ないと、申す故とり敢へず、間違つたら儘のかはよと、お使と一所に出て參りました」萬「まア早速のお出で辱い、まア／＼一ツ。」ト酌す杯を、受けつ酬へつ暫時は、酌交してほろ／＼醉、萬右衛門は懷より把出す小判二三枚、小菊の紙へ疊に包み、太助が前に擱いて、萬「時に太助樣、今日態々こゝまでお招き申すからには、當所に名高い唄女とやらでも、呼びまして御馳走を致さねばならぬ處だが、種々お情み申したい、內用が澤山あり、他の者が居ては邪魔、其れ故お酌を呼びもせず、甚た寂しい對座ひ、これは餘り不躾だが、お酌の代りに進上します、用向きが濟んだ跡で、何れへなりと氣晴らしは、夫れは又その時。」トいはせも敢へず額をなでゝ、太「イヤこれは萬右衛門樣、思召しはあり難いが、此方でこそ種々と、無理を申すも浮世の義理づく、夫れさへあるにお心配を、頂きますは山から里、どうも理が違ひます。」ト押返すを再押返して、萬「イヤサ理道は兎も角も、是れはこゝのお酌の代り、ハテ彼是と義理堅い、畢竟緣を結んで見れば、お前も吾儕も鰯の鱓を、煮た鍋の汁とやら、生臭い中で纔かばかりを、辭退は却つて此方も迷惑、マア／＼こゝ」ト無理無體、膝へ被せれば滿更に、慾くはあらぬ山吹の、色と慾とは人心を、惑はす物の最第一、太助は頂いて受け納め、再び杯を取上け

て、遣つたり取つたり對坐し、時に萬右衞門は膝すり寄せ、サテ話といふは他でもない、兼てお前とも相談した、緣女の一件さ、吾儕も一人の娘を亡くして、種々に氣が揉めるから、夜も碌々寝られはせず、段々考へて見る處、米次郎めが僞者といひ、またお前の口吻といひ、何でも丸で急拵へ、そのお里とやらいふ女兒も、在る事か無い事かと、疑つて見れば限りもないが、何の彼のと故障をいふは、お滋を斷る手段とは、見拔いておいた吾儕が眼力、シテ見れば米次郎と、お里と馴合があるといふのも、お里はお前の姪だといふのも、不殘お前と米次郎が、仕組んだ僞だと言つたか、何と詫びはあるめえ、と圖星をさされて太助は惱り、顏赧めて詞もなければ、夫れと曉つて心に點頭き、萬一謀計は眼前の利潤たりとも、終に神明の罰を被ること、三社の御託宣にあるとおり、定めてお前は米次郎から、頼まれて餘儀もなく、よし、と言つた事だらうが、夫れ故お滋が家出をして、今に一向行方は知れず、若し又萬一身でも投げたか、首でも縊つて死んだ日にや、何ぼ吾儕が佛心でも、打捨つちやァ置憎い、神樂所へ出て見れば、お前は遁れぬ罪の合ひ、如何咎が懸らうも知れず、ハ、、大それた則ち神明の御罰を蒙るといふ處ぢや、しかしながらいはば吾儕の娘が不埒故、まさか死にもせまいと思つて、今日までは捨てて置いたが、いよ〳〵お前方が、腹を合はして不埒をした事と聞いては、どうもその分には捨ておかれぬ、せめてお滋の居所へ、頼んで女兒が行方、はやう聞かれね

ば安堵ならぬ。」始めの容に引きかへて、歯を切りの悔し涙、はら〳〵と振落し、座をたゝんとする袖袂に、太助ははつと駭き恐れ、身を縮まして傍へすり寄り、「イヤモ御腹立ちは御尤も、今更何と申さう様もござりませんが、その理合をお訴へに、成りましては實に難儀、米次郎様が彼御方には、叔父の女兒を義理づくで、嫁にせにやア濟まないが、田舎育ちの不意氣者、何様かして斷りたけれど、さて本人の強情者、中々一通りでは得心せぬ、何卒遠様いうて異れと、折入つてのお頼み故、聟の久治めが日來から、御恩になる旦那の事、有繋に否とも申されず、こんな事に成らうとは、夢更知らず受合つて、嘘言を實と言紛らし、見も知りもせぬ兒女をば、自己の姪と名をつけた、その罰やら此の體容、貴方が正直な心から、圖星をさされて一句もなく、尻尾を出した妖損ひ、イヤモウ旦那こゝはまう、格別の御勘辨で、御訴への一段は、四五日御猶豫下さいまし、久治めにもこの始末を、具に話して人をも雇ひ、何でもかでもお滋様の、行方を探し出しませう。」ト顔の汗を拭きながら泪も憫めでや情まで、眞青になる内氣な老夫、想像るさへ痛ましけれど、此方は女兒を亡くしたる、その恩愛の遣瀬なければ頭を左右へ打掉つて、「イヤお頼み申しますから、吾儕も兒の事だから如才なく、是れまで行方を探したけれど、知れぬによつて氣を揉む譯、知縣所の御威勢で尋ねたら知れやせう、又何れその内に。」ト言捧つて立つを引留め、猶様々に詫言すれば、漸うに顔を和げ、「夫れ程までには

つしやるを、可かあるといふも大人氣ない、それなら知縣所への訴へをば、まづ暫く見合はせようか、その換り極く内々で、お前に頼みたい事があるが、それを承知して呉んなさらうか。」主「どんな事か存じませんが、身にさへ協つた事ならば、何なりとも致しませう」萬「いや／＼、それに違ひないかネ、跡で否だといはれると、吾儕一人が甚だ迷惑。」太「決して否とは申しません、マア被仰つて御覽じまし。」萬「夫んならば言ひませうが、サア思へば思ふ程餘り腹の立つた這囘の始末、この雪り返しに粂次郎を、チト困らして吾儕が腹を、霽ようと思ふが、それにつき、お頼み申す吾儕が方人、といふて喧譁口論、打つの敲くのといふ事ではない、マアその趣向は斯う／＼おやぢ」トひつたり摺ひ耳に口、萬「ナ、ナ、何と隨分面白からう、其處を一番甘くやつて、ギウ／＼といはして見たい、何樣だエ承知して呉んなさるか」ト其の謀較を進むに、聞いては今更否ともいはれず、太助はしぶ／＼點頭いて、太「ハ、ア成程宜い御趣向、そして困らしたその跡では、粂次郎樣がお願ひ通りに」萬「イヤ夫れは臨機應變サ、いよ／＼お前承知なら、その段取に取懸らう、今から緒を拵へて」ト頭で兩個はこゝを立出で、或旅籠にて密謀を、仕立てさせて暮移り、大川さして漕出する。

この謀較はいかなる事にや、この座中に別人なく、殊に緒を斷たれば、知る者絶えてなし、後々の回にて、前に解きわくる、看官心をつけて、讀み給はん事を願ふのみ。

こゝに三浦の清鶴は、米次郎が方に種々の、混雑ありとも知らざれば、此の打絶えて音信なきを、心の裏に不審りつゝ、定め難きは世間の、人の心の花なれば、昨日咲きと見し枝も、けふは雪とぞ庭に散る、殴られなされば、三年が程の馴染にて、身の行末を語らひし、中もいつしか秋風の、はや立ちそめしものにやと、思へばいとゞ哀しさに、日毎夜毎の物思ひ、殊に年季も今僅かに、なりにし身には然るべき、客も新たに出来はせず、若し米次郎に捨てられて、再度の務めをする身とならば、いかに悔しく恨かんと、先の先まで種々に思ひ過しが積り、種となつたる女子の情、この四五日は心地も悪しとて、部屋にのみ引籠りて、遂さへも取上げず、鬱々とせし夕まぐれ、初會の客の来たりと聞いて、若者が呼び近へけ、「こう何だ馬鹿らしいノウ、見る通り病気で引籠んで居るのに、なぜ初の客衆に出すのだエ、遣手衆にも左様いつて断つて呉んなまし」若「イエサ斷うでございますハ、、ハ、アノネ御病気だと申して再度まで断りましたけれど、其の客人が何でもお前様でなけりやアならねエ、もし何なら座敷許りでも宜い、縦令何様に取離して居ようがそんな事にやア構はねエから、是非と被仰りますさうサ、夫れで茶坊でも、折角ア、被仰るものだから、さしたる御大病といふではなし、宜からうかと申して参りましたハ、、、「ヱ何だか異な客衆だノ、初に逢ひないかエ」若「左様さ」「其んな人だネ」若「其れ私も見はしませんが、なんでも余程な年のお方ださうでございますヨ」

清「左様かヱわからねヱノウ」豊「万更悪い客人でもありますまい、折角左様被仰るんだから、お呼びなさるが宜いぢやァございませんか」清「此の頃は淵へも這入らず顔も此様に散らかつて居るし」豊「そりやァ御病気だと、断つて有りますから、些とも構ひませんわネヽトいひさして出て行く。

第二十回

兎角する中に冬の日の、さのみ気なければ忽地に、暮れて輝く銀燭に、昼より賑はふ郭の常、清鶴に病気といへども、流石に色を引女の、今宵初めて進み見る客に、かかる姿の恥かしと思へば座敷の振袖雛妓に、髪の乱れを繕はせ、薄く粧ひする白粧も、東都に名高き坂本の、仙女香とは知られたり。斯くてその夜も戊刻頃、茶屋が送つて来る客は、年齢五十余りにて其の風俗も鄙しからず、連れは四十をこゆるぎの、五十に近き男にて、諸共に清鶴が座敷の真中に座をしめて、茶坊よりの附添ふ三弦の、唄女も左右に座を連ね、揚間末社はなけれども、茶坊の女児がとりなして、陽気に賑ふ其の中に、早引付けのお定まり、お召替へして立出づる、清鶴は和合の、竹川が部屋へ来て、余所には惚気る雄子の噂、暫く時を移す程に、はや引け四ツもおほしくて、座敷々々も静まれば、寝巻姿で清鶴は座敷へ来り、豊「モウ寝なましたかヱ。」清「まだイヽお前の顔を見ないうちに、何様して寝つかれるものか、

初會から名ざして來た自己だ、一人で寢るといふがあるものか、ヱヽしかし淸鶴さん、病氣だといふのを無理言つて、迷惑でもあらうが、爺父と言つても宜い年で、此樣に慕ふ吾儕が胸を、汲みわけて呉んなさい」トいひつゝ、客は起きかへるを、淸鶴はおしとめて、「ヲヤマアレさ左樣して在でなまし、何樣いふ因縁か私の樣な者を、夫れ程思つて呉んなますは、誠に嬉しうごさりますヨ」トいひながら吸ひ付けて、猶も煙管の雁の火で、仄かに見たる淸鶴が、顏や容貌の艷やかさ、莞爾したる愛敬は、明たらしの目もと目もと、實にや命もなんのそのと、思ふ心が枕方に、ある紙入を手早に開きて、紙に裹みし白銀と、黄金交りを密と捻りて、客「餘り馴々しいやうだが、こりやァ小遣ひにあげやせう」ト出せば莞爾手にはとらず、「ヱヽお有りがたうござります、しかし初の客樂に、こんな物をお貰ひ申しちやァ惡うごさりますから、マアお商樣の方へ預つて置いて呉んなまし」客「何故々々、吾儕は此の通り田舍客で、御當地の容子は知らないが、年に老つても客は客、たとへ初でも僅かな小遣ひ、貰つたとて誰も寄るまい、是程を遣つたつて病氣で居るお顏を、いぢめようといふ理ではない」淸「ヲヤマア左樣思召してゐやす、猶お氣の毒でごさりますね、何も左樣いふ譯ぢやァありませんがネ」客「有りませんなら何の譯か、これやア一番きき雨だ」トいふと何だかお顏と、喧嘩を仕に來た樣だ、ハヽヽヽ」淸「マアよい加減にしねへ其處へ入れて呉んなまし」ト衣帶をふくつて入らんとするを、客は合點と反ねおきて、客「ハヽヽ入れ

お入れ心変ハ入れて見たがいゝ、好男子から鼠頭巾の様な屁が来るわ」「ヲヤ好かねえ、昨夜何日好男子の、様子をして來なましたエ。」「実はな今宵好男子の名代として罷り越したのさ。」「ヲヤ左様でござりすか嬉しいね、然してその好男子は、何處に居なますエ。」「在所は東都の吉原裏町富見屋の松次郎、ソレどうだすつぽり當つたらう。」ト聞いて清紅思ふ様、此の頃絶えて音信なきを、何様した事と案じたに、先では此方の氣を疑ひ、心引きたこの客を、よこせしものかと心づき、急に形を改めて、「其の松さんの事を、何様して知つて居ますエ。」「今それや、知らねえで何様するものか、全體お前を見そめたのは、この三月花の時分、その時直に上りたかつたが、イヤ待てこゝが思案場所、先は全盛の立派な娼妓、此方は田舎の皺くちや爺、とても面白く往還は出ぬ。しかしながら金さへ出せば、身うけをするといふ訳もある、しかし娼妓衆はそれゆゑに、好男子を持たねば叶はぬ、大金を出して身請して、すつぽり遊せてでも、往かれて見ると、老年の癖に彼の様はと、笑はれるのも癪しいから、よく内證を聞き糺してと、たれかれに種を探つて、漸う聞出した好男子、浅草田町へも人をまはして、容子を聞けば富見屋へは、近々嫁が来るとの噂、それ見ればお前の事は、まだ疎々になつたらうと、其ればつかりがお心の楽しみ、ハヽヽヽ、世間は異なもので、こんな美しい娼妓に、惚れられても嫁を貰つて、他に女房持つ人もあり、宜い年をして孫子の前へ、恥を曝す、狂ひ出す爺もあり、ハ

ハ、、其處が浮世だなア。」トいひながら、煙草くゆらす其の顔は、屏風のうちのほの暗く、確と見えねど此の人の、いふが眞實の事ならば、如何はせんと胸の中、燃ゆる火焰に照らされし、顔は紅葉か、おら時雨、瞼に潤む泪を袖と拭いて、「貴方ハもう久しく馴染んで來さしつたから、憎くは有りませんけれど、左樣かと言つて彼の方は立派な人だから、女房に成らうの何のといふ氣はありません。縱令思つたつて、及ばぬ戀とやらで、ありませんから。」「夫ハ、、、痩我慢、満更左樣でもありますめえ。」「夫すと、反對さねへ。」「ハイ\/それに違ひがなくば、直にお前の身うけして、連れて往くかア」と言ふだに、嬉しきことに左樣なれば嬉しいが、噺ばかりぢやア往けませんわ」ト有繋なの果敢なさは、他の言葉に逆はず、程を合はすが身の勤め、笑うてつらき夜もありと、古き小唄に謠ひしも、その實情を得たりといふべし。斯かる處に連れの客、聲かけながら障子をあけ、「まつとも人も見合にして、魂膽最中なしかね、今小便に往つたから、一寸お見廻ひ。」といふ聲聞いて此方の客「ヲ、太助様、まア這入りな、魂膽といふ理ではないが、相談も大方濟りました。」「ム、成程實は今一寸立つて通りかかつた初會から身請の相談、イヤ好男子は違つたものね。」トいひつゝ屏風を引きあけて、片手に提げたる行燈を、蒲團が傍におき、「ヲヤ\/如斯暗くツちやア、噺が見えねへ。」「ヲヤレ\/花嫁に間違ゐくしちやア。」「噺も顔が見えねえと間の悪いもんだハ、、、」時に喜右衛門さまくれた様、い

ふい、ふ[illegible]の枝を横引きと洒落[illegible]、[illegible]、[illegible]面目次第もない[illegible]、[illegible]して[illegible]へ、たつて行く氣でも無いといふから、にんなら吾等が[illegible]ことと、[illegible]、[illegible]は宜しくお頼み申す。」太「まづ〳〵夫れでめでたい〳〵、[illegible]は先刻内々で、[illegible]女房[illegible]、遣手に掛合つて見ました處が、その年季も[illegible]、[illegible]、又當人の出世にもなる事でございますから、成るたけは[illegible]れし、[illegible]身代の[illegible]で、百兩なら手を打つと[illegible]申すことで[illegible]、[illegible]百兩で[illegible]買ふで、[illegible]つて[illegible]、[illegible]、[illegible]早々[illegible]、[illegible]相談[illegible]も、[illegible]は[illegible]、[illegible]邪魔[illegible]、[illegible]はお[illegible]つても、[illegible]る中には、[illegible]、[illegible]とはれて[illegible]、[illegible]手前に、[illegible]世間で[illegible]、[illegible]段々[illegible]兩[illegible]ございます[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]申す、[illegible]の心[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]誰かの花[illegible]、[illegible]、[illegible]心[illegible]人に、心中[illegible]出世[illegible]なるべき身請の相談を、[illegible]年季[illegible]明け[illegible]、[illegible]若[illegible]、[illegible]浮かむ瀬も[illegible]、[illegible]の身を川竹に、[illegible]年[illegible]、[illegible]親に[illegible]安堵[illegible]

か、斯ういふ事のあつたなら、これもまた奈何にせんと、千々に砕くる胸の中、途方に暮れる体からなりしが、漸くに心を取直して、人の行方と流れの水の、定めがたきは世のならひ、まづこの人の詞にまかせ、一回身請させて後、また詮方もあるべしと、思ふものから忽地に、莞爾笑うて膝すりよせ、「何だか最前から夢のやうな事でありますネエ、お前様がた今の話は、本當でございますかえ、實ハ、、、宜い年をして、お前を騙して何様するものか」「それとはいふものの寝耳に水、不測を打つも尤もサ。これにや一寸子細があつて、兎も角もお前を受出し、この旦那が世話になさるか、時宜に依つたらヤお前が深く、いひ交した人の所へ、行くやうになさらうか、マアマア何でも悪くはねえ相談だ」ト聞いてはいよいよ訝かしき、事にはあれど細小は、頼みさへある心地して、まづその言葉に任せけり。

斯くて翌朝になりければ、改めて茶坊を呼び、いよいよ清鶴が身請の相談をとりきはめ、百両の金を渡して證文をとり、且抱元へも茶坊よりその事をいひ送り、傍輩姉女郎への置きみやげ、又は心易き唄女を初め、太鼓持へもそれぞれに、祝儀を贈り振舞ひをなして、いと花やかに清鶴は、郭の苦界を今よりは、背かれたりとする身の上を、羨み思はぬものもなし。さて萬右衛門は清鶴を受けだしたれど、さし當りて住居さすべき所もなければ、彼の太助が計らひにて、待乳山なる片傍に、いささか知音の者を頼み、暫く此處に預けおき、入用萬事は萬右衛門が、とり賄ひて不自由なく、送る

につけて此の事を、たゞ一筆も知らせたく、思ひにけれど米次郎への、通路は堅く禁められ、心ならずも今日と暮し、明日と明して居たりけり。

閑情末摘花四編巻之上 終

閑情末摘花 四編卷之中

第二十一回

嬉しき事の諭へには、地獄で佛といふ事あり、現にや少しの後先にて、二個は地獄の客としも、なるべき所を[illegible]の、おん計らひか神佛の、護り給ふか清之助は、圖らず米次郎に行きあひて、命を隕す閑もなく、遠世は[illegible]のものに怪しめられて死を止まり、俱におち合ふお里が家、面目もなき身の過ちに、消えも入りたき心地して、遠世は火影に身を反け、また清之助は首を[illegible]、[illegible]ひ出す言葉さへ、なかなかに耻かしく、且[illegible]しくて人知れず、落す涙を大指の、腹に拭ひて[illegible]情、お里親子は米次郎が、遠世が兄と聞くからに、不測の縁に驚かれて、唯茫然たるばかりなり[illegible]次郎は膝を改め、[illegible]の者に對ひ、[illegible]を混雑で、何から言つて宜からうか、[illegible]、胸がどんちやんする、[illegible]から先へいはふ、今遠を[illegible]に、委しく聞いたお前方がお兩人の深切で、清之助が[illegible]、今日までお世話になるといふ、是れも何かの因縁だらうが、いはば遠世が[illegible]、[illegible]で居る、顔を見て安堵はしたが、不躾ながら見請けた處が、[illegible]でもないお前方、来

い月日の食客はさご迷惑で有つたらう、違世も違世さん、私の方へ、内證で言つて越したら、何樣か仕やうも有つたらうに、左樣とは知らず昔年分では、無邪智の清さんの、離間にかゝる色の接けで、假でも死んだに違ひないと、窗に出た日を命日にして、茶湯回向をしたいな、、、、、斯うして見れば馬鹿らしいが、早同胞さまた別段で、人の前では不埒者、憎い奴だ死んでも宜いと氣強く言つてはゐるものゝ、蔭ではすゝり泣く事の有、彼が下道具の他へ、見るにつけても無理か、愚痴を吐きも無理ではないが、親を捨つた世間だと、窗に浮いた日は一日もなかつた事はないが、斯うした噂には清之助、違世にやと云ふ噂覺え、甥ひたはさう身の罪の、報いかしらと又悲しんで、其へ御見舞に清之て、達も伴すら遠慮なく、お町様子も貴汝等、陰のおこゝは膝下の寄せて、二三人、二人の事に就きすると目を申し窘しましても、清さんにも違世さんにも、無理申しましたけれど、假令勘當なさるとても其はと言つてゐましても、こうして御同胞で御座をされるといふと窗に寝て、決して世をお捨りなさるまいと思つて見れば御無理もないから、達つてと責めも致しませんが、たゞ困つたは切ない暮しで、母子の者でゝ、やうゝゝと、食ふや食はずの瘦身上、中々お相國の事までは、何樣思つても届きませず、最初はお誂な衣服やお髪の上のお道具や、一揃ひも代なしに、その月々の米の代、小遣ひにもなさつたのを、何卒左樣はさせないと、氣を揉む許り詮方はなし、とうゝゝ今では御覧の通の見る影も無しいお形、

仕廻やアつき果てて、お互に死ぬ料簡、それとも知らず何の活業に、出ましたお留守に此のしだら、まことに思へばお前様が、また達世さんお兄さんに、御懇意なさいまし、お若い時の無分別は、世間に毎度あり勝ちの事、出来た事は是非もなし、是れまでの御料簡が、肝心でございます。ことに只一言に聞されて、達世はやう／＼進みいで、旦那さへも目のうち、米次郎も娘が形の背にかはる面影に、ようく諫められて何にもいはず、紙入より出す金子の、高をはたいて一両余り、懐紙に包みて出し、米新ういふ事とも知らねえから、今夜は持合はせが少ねえが、まア是れを上げて置いてから何ぞの足しにしてお呉んなせえ、両側の書類や何かは、又親類で何様か仕ませう。然して清さんや達世も左様だ、各々の身分はおかねえ考へねえで、些たア親間物の苦労も想像なせえ、そ[illegible]斯うして居所も知れたからにや、自己が何様かして遣るから、左様思つて居なせえ、一トいはれて両人は泣くばかり、お米さは金を頂いて、ト「左様ならまアお預り申して置きませうねエ、お里や何かなしともゝゝ、貴方がまお金がなうに、御酒でも一ツご[illegible]まア／＼それは翌日の事さ、全体今夜出かけたのは、お前方に折いつて、相談したい譯が有つてサ。ト「オヤまア左様でございますかねエ、近頃もお気の毒な、猶々御深切に仰つて、下さいましたも聞入れず、無理な腹立でもあらうかと、常住お噂をいたして居りました十一處が今回は是非ともに、聞いて貰はにやア、[illegible]ト是れより福生の萬右衛門が事、お瀧が家

間の事、遂世には相生に結縁のあること、夫れに付いて様々むつかしく、據なく久治が叔の太助に頼み、お里も兼て情合ある様に、いひ做したる事までを委しく斷し、其「といふ條あひで、餘り手前官の様だけれど、左様も言はにやァ遣限が付かねえから、枡様に言ひ出すと、叔も顧るむねェ者だから、夫れならその女兒を自己が養女にして、連もの序に婚禮までさせて賦らうと言つて、何分困らせるだらうぢやァねえか、ナニお里さん實に迷惑だらうが、今の譯で困るなら、お前やァ假に吾儕の姪合になつて、その太助といふ人の姪だと、言つて居て吳れねえか、勿論叔も養女にするからにやァ、父子の盃でも仕ようといふだらうし、又婚禮まで濟ませねえければ、ならねえといふ日になると、表向は勿論雙方の華もそこがそれなんでも濟むのだから、そりやァ不躾な儀を頼込んで、お前方に苦勞は掛けねえが、世間の女兒供と違つて、義理の堅い性質だから、そんな事を言つて、淫奔者になるのに否だと言はれると、大不首尾だハ、、、。併し父子の盃を仕ようが、また婚禮を濟ませようが、それやァほんの表向、當座遁れの頓智だから、娘が明日へ歸つて仕まへば、夫れではそうでもなる事だ、自己がやうな者でも、不肖して配つて吳れる氣なら、夫れでいさらくさらなし、否だとおいなら其名ばかりで、内證に今までの通り他人同志、モシ何なら兄妹分にでも成つて、何の心配ない、お前方、混して妹が大恩になつた事は忘れねえから、何ぞの時に相談相手、そりやァ否とは言はれまい、何と叔母

こゝの所を、とつくりと噺合つて、どうか左様して呉んなさるめえか」ト一伍一什の長噺、聞けば聞くほど無理にもあらず、殊に米次郎の嫁となつたらば、願うてもなき女児の仕合せ、これに越したる事あらんと、母のお政は飛びたつばかり、嬉しけれども、お申が心の、未だ知れねば速かに、承諾せんも了簡にて、女児の顔をじつと見やり、「コレ今彼方の被仰る所、ホンニ嘸お聞きなさるだらう、お前はマア何と思ふエ、承知ならば早速にお返辞をして、彼方にも安堵させ申すが宜い、併し蔵の裸蟲、人並に婚礼でも、させようとすれば大事で、其處はいかにもお氣の毒だが。」トマア左様なると歳に宜いお礼、なんぼ何でも着換への一ツや、帯の一筋も持つて居れば、お噺をするにも仕宜いけれど、何をいふにもこの儘で、寝衣にもならない衣類、一から十までお世話になるのが、何だか私はお氣の毒だネ、しかし斯うして達世さんとは、姉妹のやうにお心易くなるし、そのお兄さんの所だから、何卒此方で貰つても、置かれる事なら嬉しいけれど、トいひさして見る母の顔、母も倶々吐息をば、呻くものへ、かの心の歎ぎ、いはねど顔にあらはるゝを、米次郎は見てとりて、「モシヤ今いふ通り、その一件なら案じなさんな、どうせ好いた女房を持つのに、着物もあり持参もありと、そんな甘い口は噛にもねえから、ハヽヽ、そんならお前方は、その譯を承知して呉んなさるかエ」「ハイ／＼、寔に左様なのでますれば、私共の大仕合せ、アノ達世さんも清さんも、段々のお噺をお聞きなさいましたら

か、思つて見ると御縁といふものは、不測おやすでございませんかね。」と言ひまた左様成ると私やア
何様に嬉しうございませう、御禮ぼうから左様思つて居ましたは、お里さんは私共と違つて、器量は
よし藝はよし、親孝行で誠にいひぶんはないから、どうぞ兄様の御嫁にでもお成りなさると宜からうと、
此間も不意と思ひましたには、蟲が知らしたとやらでもありますかネヱ」「ほんとうに私共は下賤の女子
で、恩返しも出来る事か出来ぬ事か知れない身の上、せめて左様でもなつたなら、米様もお雪様も
何程か嬉しく楽しみ暮し、猶共も倶々嬉しいことか、恐懼ふ御詞には、現にや這般の可人か、地藏菩薩の顯化
に、取縋りたる趣きありて、見るもなかなか痛々し。米次郎はその身の望み、頭にかなひし事ながら
す、日來鍛せし妹と、清之助が無事なるに、一身嬉しさ思ひを懐して、その夜は別れ三日ありしが、
翌日にかりければ、金子を携へてここに來り、お里娘子を始めとし、達者清之助にもそれぞれに、時
の衣類を整へ與へ、且この住所の見苦しくて不便なる思ひにても有からすとて、頃に住居を探し求め、
忍ぶが岡を前に受け、いと閑靜に住みなしたる、町家のあるはあれは、すぐにこれを借りうけて、商
崎町より引うつらし、竈を始め世帯の道具、機を始め調度まで、家相應なる物を調へ、一同を睦く
お暇住居、きりふに因る今日の日は、これぞ奈何なる黄道吉日、お里娘子が日来より、信心する中での
仁心功徳、めぐり來れる應報輪廻は、善にも悪にもありと知るべし。

作者曰く、是れより米次郎は、太助を伴ひてこゝに來り、お里母子に對面さして知己となし、且お里を太助が家に呼びおき、萬右衛門を招きて養女の杯をさせ、夫れより結納の次第、婚禮の日を定むる事あり、それを悉く記さんは、くだ／＼しくて觀るに煩はしければ省きて記さず。看官の諸君これを察して、讀み給はん事を願ふ

第二十二回

白羽根町の福見屋にては、今日新婦入の準備とて、朝まだきより魚市へ、人をはしらせ料理の獻立、あるひは座敷の掃除、牀の飾りに蓬萊の、臺や古例の蝶花形、千年の松に世々の竹、めでたづくしの事よしく、さてその夕暮になりしかば、米次郎は衣服を整へ、まづ聟入に往かんとて、若漢と丁稚を連れ、箱提灯など準備に持たせて、太助が方へと出でて往く、程もあらせず日は暮れて、門毎に點す燭臺に、出迎への提灯など、みせの鼻にならべ照らして、米次郎が聟入より、歸るを相圖に途中まで迎ひに出んと見世の伴頭、あるひは知音出入の人々、待ちかまへて居る所へ、向うより來る三四人、こゝだ／＼と見世先へ、這入るを見れば見なれぬ人、跡に引つそふ一人の女は、年まだ二十四五たるか、その風俗は娘ともみえず、今宵の新婦とは思はれず、殊に米次郎もまだ歸らねば、嫁御の來べきや

うなしと、人々不審に目と目を見合はせ、取次者もなかりしかば、先に提灯持ちたる男、見世の框へ腰をかけて、男「私やアネ、淺草の者でごぜえやすが、旦那の內室樣に賴まれやして、こゝまで送つて參りやした、ハイ誰かにお渡し申しやす。」ト言ひ捨てて立つを仲頭が驅け出で、仲「ハイ何でございますか、此方にやア內室さんはまだございませんが、モシ門違ひぢやアございませんかネ。」男「ナニ門違ひぢやアございやせん、福見屋といふだア、山谷堀町に一軒ほつきやアねえ筈だ。」仲「成程福見屋は手前ばかり、ハテナ夫れぢややア今夜お約束の、お嫁御樣でございますか。」男「どうだか、そんな蹊蹊しい事は知りやせん、此の妓が送つて吳れと言ひなさるから、こゝまで賴まれて來たんでございやす。」仲「ハヽア、何だかどうも分らねえが、マア女中さんでも此方へお上んなさいまし。」トいはれて小褄とり形も、いとしどけなき優女、見世へ上れば其の跡に、佇みたりし一人の男、年齡四十五六なるが、その風俗は殊に麗しく、縞か小紋か見えぬまで、垢染みきつたる古布子に黒繻木綿の帶締しき、貧窶な着たるは借物といはでもしるき行丈も、合はぬ下には切口上、徐に謙下をつくねいて、仲頭の顔をながめて、「私は淺草待乳山の邊に住居いたす者でござりますが、是れなる婦人は當家の旦那、宗次郎樣と年來のお馴染、勿論只今まで勤めをいたしてをりまして、身も自由に成れませず、たゞ心に思ひながら延引致されましたが、幸ひ今回は仔細あつて、郭の勤めを引かれまして、兼ねてお約束の儀でもこ

それは、今宵押しかけて參られたら、いはば當家へ嫁入心、申さば模樣繪衣で、乘物ででも來られたら、萬一共に外聞旁、宜しい事は存じても、思ふ樣には屆きませず、この身その儘私が、何か違樣のこざる故、介添なり親類なり、二役三役の早代り、ハ、、、無調法もの何分お認り下さいまし。」ト數々ふ棒の大方は、推しながらも生憎と、人々互に見合はして、何と言ひ出す者もなし。作頭も只呆れ果てて、是れに答ふる術無きを、その儘奥へ通り入りて、見れば村親と萬右衛門は、両親の心にや、酒酌み交して居る樣に、朝比奈々の由をいへば、萬右衛門は聞くと等しく、妻の方を白眼みつけ、「ハ、、おつな奴が來をつたわい、さりや定めて馴染貰ひか、今宵の祝儀を嗅け込んで、物強請にでも來たのであらう、醜い奴め、ドレ己が、摘み出して仕遣はう」と、肘を張つて立ちに懸るを、村親は待てと押しとめ、「その人が貴郎の御推量に、違ひはございますまいが、其の女は兎も角も男が、一人附いて居れば、左樣自由にもなりますまい、たれか無理にと申したなら、先は屈強にして喧嘩仕かけ、今宵の來る先へ立つて、彼是するのも第一不吉、マア兎も角も私が逢つて、今宵は騙して歸しまして次郎に言ひ聞かせ、跡で何樣でも致す分か、靜かで宜いぢやアございませんか。」作「成程夫れは御隱居樣の、思召しつきがようございませう、却つて事が出ましたら、直樣には參りますまい。宜い、前がたが左樣いふなら、それや又兎も角もだが、金錢さへ約束をしたなら、その女に逢つて聞いて見

てエネ、又米次郎も餘りだ、振りこんで來ようといふ女の有るのを隱して置いて、他の女をなへくりと、女房に仕ようとは蟲がいい、夫れも自己一分で傳む事か、今夜の嫁は假初ながらこの萬右衛門が媒人好き、先には親も叔もあり、吾儕が自由にもならぬ義理づく、夫れをかねぐ知つて居ながら、ヨテ埓もねエ二十日を經過し、寄つても付かれぬ蠻勢なれば、母親はまア、これを寄り、これは晩でも分解の事、こゝで嫁が落合うては、米助の爲へも濟まぬ譯と、見世へもおこし是出で、容子を聞けば先の事く、米次郎といひ約束、それの爲來たとの口上のみ、他に仔細はあるまいと見ゆれど、何に仕ても折惡ければ、今宵は少し取亂しもあり、殊に米次郎も留守の事、歸つた上でとつくりと、相談して此方より、有無の返辭をしよう程に、今宵は歸つて下されと、いへど女は得心せず、逆つて來たれど、人の娘が歸るは固より當然、女は當家の嫁なれば、一旦閾を跨いだからには、その儘歸る事はならぬと、堅にかたも今宵の客すら、啣へこんでいふにぞと、思へば腹もたつた川、言葉を散らす押問答はいかにも事も數多あれど、饒舌とせゝつたれど、時刻を延ばさばその内には、嫁の所詰の來なべし、無分にして見れば人知らぬ苦を背から見はず道理、まづ今宵は花も餅も、斷して返すに如くはなしと、心を靜め此方よりして、何れにも後々に懸き樣にはせぬ程に、今宵は晩心の甘き留守まで一歸つて相談は、其の事にてもして下されといへども可なれ面を、すへエ夫れでお前さんの分は、直しう

もございませうが、私が二人置きましては、甚だ迷惑致しますゆゑ、遠縁とは申せども、困窮の中へこの女を差置きますれば、朝夕の雑費も多く、當家の旦那よりお頼みと申すでこそあれ、私方では預つたも同様で、さて／＼心配でなりませぬ、まア兎も角もこの婦人は、さし置いて歸りませう。」トいふ尾に付いて一人の漢子「アヽヤレ／＼吶々と、幾度言つても同じことだ、サア／＼參りませう、たとへ誰様が何と言ひなすつても、ひとりの女房を何時までも預つて置く筈はねへ、ドレ。」ト立ちあがるその所へ、聞き兼ねてや萬右衛門が、奥よりすつと出で來り、人々の顔を見わたして、萬「ムヽ、お前方は何か、この女が米次郎の馴染で、女房約束があるから連れて來たといふのだナ、斯う／＼女中お前はマア何處の何といふもので、何様いふ事で米次郎とそんな約束をしたか、言つて聞かせなせえ。」ト問はれて今まで何事も、他に任して一言も、出さでありしが當下に、漸々と顔を上げ、女「お恥かしながら私は、稚さい節から郭の勤め、名は清鶴と申しますが、こゝの旦那と深い約束、是非末々は女房にと、いふを苦界の樂しみに、長い年季を待つ内に、心がはりか此の頃は、一向足も遠ざかり、息災で居るかと一言の、問ひ音信もないのみか、聞けばどうやら脇々から、嫁御のお出でなさるとやら、それをお邪魔に參つたと、言ふではないが是れ限りでは、譯もわからず夫れ故に、身儘になつたを幸に、こゝに居るのは私が從兄、連れだつて參りました。」ト聞いて點頭く萬右衛門、何思ひけ

ん言葉を和げ、萬「ハヽア成程左右いふ譯なら、出かけて来たは當然、ムヽ成程無理はない、よし〳〵、自己が呑み込んだ、シテ今居る宅は何處だ、鳥渡書き付けて置きてえ」ト硯引きよせ筆を取れば、此方の男が進み出で、男「ヘエ當時私が方に差置きます、所は淺草待乳山、實下淺世の舊瀧元範と、お尋ね下されば直知れます」萬「アヽよし〳〵、それならば、不義私が呑込んだ、成程お前が言ふのが尤も、米次郎の仕方が善くねえハヽヽヽ、左様されちやア何分顔も立たぬ筈だ、何れ明後日、中には私が逢ひをする、まアそれまでは此の女や、預つて置つてくだせえ、聞けば困窮の中とやら、ソレ雜用の足前に、些とだけどこれを」ト渡すに、今金押面をいたゞきまして、そんなら旦那御任せの通り」男「サア早く歸らッしやい」ト言はれて三人諸共に、足を早めて立ち出づる、門引違へて入れ替り来る、米次郎は横を見て、小腰を屈め「ハイ只今歸りました」トいはせも敢へず白眼付けて、萬「ハヽア馬鹿息子お歸りか、自己ア今までこれ程の戯とは思はなんだが、今日といふ今日呆れ切つて、其方の戯はたまらねえ、誰方もねえがその戯気、見損なつた許りで、此の萬右衛門が順当な道具だ、耳順になつたこの正月に、東を切らして嬉しからう」ト思ひがけなき叔の言葉に、譯せねば道理の米次郎、いと不測なる顔をして、米「エ叔さん、そりやアまア、何様した譯でございます」トいぶかる傍より、彼の姉妹が、初中の始末を聞にいへば、此方も覺えなき事にあらねば聞くと、する面持に附込む萬右衛門いよ〳〵言葉も荒らかに、モゥ

らだ席が潰れよう、全體こゝへ留めて置いて、今に太助が嫁を連れて來た所で赤恥を、掻かして遣らうかと思つたが、段々親身の愛情で、ナニそれ程までには思ひ切られず、子の恥は親の恥甥の恥は叔の恥だと、涙脆さに費用まで、心つけて返したも、どうぞ何かを波風なく、納め度いとて仕た事だが、またよく〳〵考へりやア左様甘くも往くめえ。」トその詞さへ畢らぬに、提灯二張先に立て、中を床しき行粧の、跡には太助が黒小袖、麻の上下菱々と、この店先へ來りけり

閑情末摘花四編巻之中　終

閑情末摘花　四編巻之下

第二十三回

再説太助は最前の、戸をうち披きて徐々と、内より出づる花嫁が、その粧ひと風俗は、花に樽にこきまぜて、被るは雪の綿帽子、鳥渡褄とる爪先へ、こゝは末摘花の色、月の露たをやかに、打萎ある美女の、手をとりて奥へ入り、まづ休息と傍の納戸へ入れて太助は立出で、障を萬右衛門へ今宵の祝儀、千秋萬歳を述ぶる時、萬右衛門は額を撫で、聲低ふして太助に對ひ、さすれば近頃お前へ對し、いひ譯もない事が出來ましたゝ」ト聞いて太助は不審顔、まだ言ひわけのない事とは、ハ、、、、萬右衛門さま戯談ばつかり。」萬「イヤサ戯談處ぢやない、手短に申せば今宵の祝言、御覧の通り準備して、既にお前もお中を連れて、お出ではあるけれど、肝心な事はさせられませぬ、ともやア何様いふ譯でエ一言噺にもならない程、イヤハヤ大騒ぎ」太「何だかそりやァ大變だ、嫁入は、再回家へ歸らぬ記に、門火鹽花乗物さへも、背向きに出す程な事、たんなる左様な事にも、おふつとと御左右を下さりやァ、また何様か計方もあらうに、今さらそんな難題は、私共に恥をかかし

て、笑つて遣らうといふ思召しか、元來意趣も遺恨もなければ、まさか左樣でも有りもすめえがト小首傾ける太助が顏色、萬右衛門は吐息を吐き、萬一譯を御存じないならば左樣思ひなさるも無理ではねエ、既に米次郎がお前の方へ、壻入にまで行つた事、仲々以てお前方に、恥を搔かせようの笑はうのと、そんな事もやァござりやせんが、實をいへば私が麁相、ハイ一言もござりません。トいふ譯は他でもない、コノ米次郎の阿房めが、這樣いふ不埒千萬、吾も早呆れ切つて、開いた口が塞がれやせん」ト彼の放埒が一伍一什を粗〻話して吐息を吻き、「扨其處で太助樣、斷う申すも私に於て面目次第もござらねど、思ひも寄らぬ今の理合、どうせ蹤で彼是と悶着があるに知れた事、他の大切な女兒を貰ひ、剰へ吾が養女にして、緣を組むや否や、女出入が始まつて見れば、お前へ對し、親里方へも何分濟ます、勿論以前から米次郎と、お里どのに情合だとやら戀だとやら、聞いた事もあるけれど、そりやァ互の若氣で、吾等は何處までも知らぬ分、シテ見れば今回の一件を知りながら、緣談させては、人の女兒に瑕をつけ、慰み物にする同然、義理も恥も知らねえ男は、蛙の面へ水仕とやら、しやアしやアとして居るであらうが、吾はモツト偏屈者で、木は木竹は竹としにやア氣の濟まぬ人間、胸に落ねえ事はさせられねえから、まア今晩の婚禮は、お斷りと致してえま、跡で彼奴等が相對ずくで引ずり込むともどうするとも、そりやア勝手にするが宜いが、私に於ちやア不承知だ、其母も米次郎

も左樣思はつしやい。」ト踏み切つたる顔をしけん、詰めて太助は呆れ、太「エ、萬右衛門さん本氣かえ、この期になつて承知だの不承知だのと埒もねえ、故障なんか振込んだから、跡に悶著があらうとの御斟酌は無理でもねえが、夫れおやァお前の身遁ればかり、私共が迷惑にやァ、些とも構ひなさらねえのか、コレサ確りとお聞きなさい、お里は私の娘だけれど、お前の養女に遣つたからにやァ、是れからは先はお前の娘だ、たとへ米次郎殿にこそ、不念もあらう、不埒もあれ、お里に何の咎があつて疵物にさつしやるのだエ。」萬「疵物とはなにが疵物、婚禮をさせた上で、若し彼是があつて見れば、疵物にして返すの道理、それだから、疵物にならねえ前に破談にしますと」太「サヽそれでも疵がつく、たとへ盃はしでもしねえでも納采を受けりやァ、何處へ出ても天下晴れての夫婦ぢやァねえか、サァ其處はどうでござりますか。」萬「ハヽヽ大丈夫な理窟詰、一言やお前のいふ通りだ、夫れならば改めて今晩只今離縁にしませう。」太「左樣あれば是非もないが、お里の身分は何樣して下さるのだ。」萬「そりやァお前方の勝手次第、離縁をした先の事まで、私が構ふものか。」太「これは又萬右衛門さんのお詞でも有りますめえ、夫婦は合はせ物離れ物で、仕方はないけれど夫れに就いて養父と養女にも父子の縁を組んで、夫れまでも無にするのか。」萬「知れた事サハヽヽヽ」と嘲笑つた其當下に、太助はいよ／＼暗色變じ、折目高なる上下の肩さへふつと張る口惜腹、太「どうでこんな無法者に、義理

て、笑つて遣らうといふ思召しか、元来意趣も遺恨もなければ、まさか左様でも有りますめえがネ小首傾ける太助が顔色、萬右衛門は吐息を吁き、「ソノ譯を御存じないからは左様思ひなさるも無理ではねえ、既に米次郎がお前の方へ、聟入にまで行つた事、仲々以てお前方に、恥を搔かせようの笑はうのと、そんな事もやァござりやせんが、實をいへば私が麁相、ハヤ一言もござりません。トいふ譯には他でもない、コノ米次郎の阿房めが、遠慮いふ不埒千萬、吾も呆れ切つて、聞いた口が塞がれやせん。ト彼の清鶴が一伍一什を粗〻話して吐息を吁き、「其處で太助様、斯う申すも私に於て面目次第もござりませぬが、思ひも寄らぬ今の理合、どうせ跡で彼是と悶著があるは知れた事、他の大切な女兒を貰ひ、剰へ吾が養女にして、縁を組むや否や、女出入が始まつて見ればお前へ對し、親里方へも何分済ます、勿論以前から米次郎と、お里どのは情合だとやら、戀だとやら、聞いた事もあるけれど、そりやァ互の私ごとで、吾等は何處までも知らぬ分、シテ見れば今囘の一件を知りながら媒酌させては、人の女兒に瑕をつけ、賦ひ物にする同然、義理も恥も知らねえ男は、業の面へ泥を塗られ、しやアしやァとして居るであらうが、吾はチット偏屈者で、木は木竹は竹としにやァ氣の濟まぬ人間、胸に落ちねえ事はさせられねえから、まづ今晩の婚禮は、お斷りと致してえ、跡で彼等が相對づくで引ずり込むともどうするとも、そりやァ勝手にするが宜いが、私に於ちやァ不承知だ、然様ら米次郎

ら左様思はつしやい。」ト頻みきつたる顔をしげ〳〵詠めて木助は呆れ、「又さ、五右衛門さん本気かえ、この期になつて承知だの不承知だのと好きなまた、障子が振込んだから、肆に同意があらうとの御了簡は無理でも無いが、そればやア、お前の身通ればかり、私共が迷惑にやア、些とも構ひなさらないえのか、コレ確かと聞きねえ、お前は私の物だけれど、お前の義を立てたいにやア、是れからの先はお前のいゝのだ、たとへ木次郎殿にこそ、不孝もあらうし、不好もあれ、お里に後の苦労をかけて懸物にさつしやるのだらうに、今更お前とはなにか乾物、嫉妬をさせた上で、若し孫が出来てもあれば、乾物にして返すの道理、それだから、乾物にされる前に安堵にしますと」ト、ヤア是れでも乾分つく、たとへ「時は」してもしても勘弁を受けねえ、何卒出て行かねえ時はとか、すすむ其儀にはまでこうのなら言ふ、いさ文の不貞腐れ、これぢやあお前のいう通りだ、ただ〳〵是れは改めて今晩即今離縁にしませう」と云はなばあれはこれ申さうが、其身の手前もある故、然しては困ると今いや〳〵お前が持参金、離縁した先の約束で、とこ相応な…これは文五右衛門さんのお頼でござりまするも、夫婦は合ひ性の縁なれば、什否はなけれども、共に縁とは言ひ難き義女の縁にも父子の縁を親にて、それまで縁にするのも…、…ト木助にいふ…、…ト前にて詫ぶ…木助はいふさへ面目なさ、所詮離縁さるゝ上は…ふつと…かへす〳〵も…

踏むやうな所が間かねえ、今更これほどに言はれちやア、お里が親へ自己が済まねえ、そのいひ訳にやア継父がしやツ面、ふたことゝいつてやらねえ」ト拳を握めて立ちあがる。折から納戸の障子の間より甲、太助が後をしつかと抱き留め、「モシ〳〵、その腹立てるのはもう短気、まア〳〵待つてお聞なさい」「エヽ、邪魔な其処放せ」「イヽエ放しません、マア下にゐて私がいふ事を聞いてお呉れよ。成程お前のおいひもしも、叔父さんと高右衛門といふ薄情な人なれども米次郎さんと、縁を組めばこそ見にきますれ、その縁が切れて見れば、何にもいる縁もないといふもの、これもまた御尤も、聞方ならば、苛は分つて居るけれど、喧嘩のやうになつて見ると、私も一倍が困りますから、どうぞ気を直して聞かんして、お話をつけてお呉なさいまし。私も縁があつて是れまでになつたのも、たとへ米次郎様がどんな情ないこといはうとも、だれにやア斯とも言ひませんは、そういふ事ならこの儘で、こゝに居りたうございます」「イエ〳〵、左様はなりません。今も米次郎が手持の悪いは迄も知つて、彼の家にするも理たから、いはば私共が亀相だと、最初から一目置いて居りますれば、太助どのはその事身へ附けこんで、米次郎にしたから、お里が身分を、引受ける間のを、いはば米次郎は旧主といふもの」「イヤモウ、何か家徒だ。サアその家徒のわけを聞かう」トいふもや打つて懸らんとす。この時母は高右衛門と、太助が間へ割つて入り、「マアこれサ〳〵、其様に仰々しくいつちや、わかりませぬから、静かに夫婦が、成程高右衛門と米次郎が、夫婦

いかにしてお前方の苦情、先刻から聞いては居ても、扨私も切出して、断うといはれぬ両手の中、何様か評のつき次第、是らには女の料簡を、いはうと存じて居つたのに、左様各々に言ひたき儘を、言つては中々が纏まらない、私も種々考へてやう〳〵、[illegible]、これ忠次郎もよく聞けよ、若い者の事だから心得違ひもあらうと、皆手は親の私の事、大なり小なりこの家の、主となつて五人でも七人でも、家族や[illegible]も使ひながら、[illegible]ならこそ、必定なれど、[illegible]の不運の[illegible]、畢竟それ故今宵の喧に、不慮の難義をかけし事、日頃[illegible]の家まで、[illegible]せておいてこの悪さを、皆の人の言つた通り、兄を兄と思はねば、一生に暇をとやら、心の[illegible]では何と思ふか、先刻からのこの騒ぎに、[illegible]も居ず、[illegible]に[illegible]居るでもあらうなれど、[illegible]から見れば一筋に、[illegible]と他に[illegible]はれず、[illegible]、[illegible]、彼は私もあれこの様でさへ、[illegible]、[illegible]に[illegible]に、[illegible]て、よい〳〵揃つた馬鹿兄妹、何に[illegible]のつき果てて、呆れた口が閉ざれない、其の様な不所存者にこの身上は預けられぬ、[illegible]、何處へなりと勝手に出て行け、又一頃はこの家へ来かゆつて来た[illegible]の事、[illegible]といふ縁とても、[illegible]の世[illegible]の[illegible]、因縁、今から[illegible]、[illegible]たらう、[illegible]、[illegible]この家の[illegible]せよ、[illegible]一旦養子に仕

みすつた嘘言もたゞり、又助さんがお里の親御へ言譯にもなりませう。と陳ぶ言葉は理の當然、萬右衛門太助は心のうちに、男で遣つたりと歡ぶのみ。米次郎は萬右衛門等が、計謀とは夢にも知らず、今將斯様に諭されて、素より親は不審しけれど、この程なくしく音信ても、その上叢と未曾練で、窮したる事もあれば、年は明けねど何様かして、身儘になつたる幸ひに、來りしものゝ今合點ゆかず、更に又町にも折悪くて、三方四方の義理詰に、勘當の身となつたるを今更悔やれど詮方なく、この上を聞き分けて知音の人、その他出入の人々まで、口を揃へ詞を盡し、陳ぶ始めの萬右衛門らに、今の勘當の詫事をすれども、聊か聞き入れず、これでこの人々も間は悪けれど詮方なく、一人が歸れば又一人、濡をこして裏表、歸ればく今はたゞ蝕はいし、座敷も賑ひ、そのうちに、兼て祝儀の設けにとし、殿へたりし一叶の、たゞ渚に漁りし、一々て鯛の濱燒き、味噌吸物、二の汁も、肴と共にやさめられこの時お里ははふの淋つゝ、涙をはらひ一度に静め、一身に餘つたその恩は、ありがたうこざいますが、畢竟申さば私の知らぬ事とはいひながら、今宵の祝儀にその女中か、折節よ餘るよつて、其れはつかりで成たし、縋れて米次郎さまの御勘當、その上に私が側にも、恵事を申しましてお聞入れはあるまいから、夫れは詮方もございませんが、私の身にとりましても、良人は勘當其の身は残り、せうして此のお家が繼がれませう。私も倶々に、お退しなすつて下さいましと、いふも答ふ涙聲、

心の信あらはせば、聞くと等しく頭をふり、甚「イヱノヽそりやなりませぬ、一應は尤もらしいが、それは大きな料簡違ひ、米次郎との縁組は、叔さんが離縁にした、その女兒を私が兒にするのだから、良人を出して跡へ居ると思つては、理が違ふ、不承ではあらうけれど、米次郎といひ遂世といひ、人並ならぬ兒を持つて、苦勞に苦勞を重ねる私、どうぞ産みの母だと思つて、力を助けて下さいとお里が手をとり引きよせて、わつと一聲泣き入る母、お里は顔さへ上げ兼ねて、とこねにしばし伏し沈み、何と回答もなかりけり。

第二十四回

米次郎は圖らずも、勘當の身となりしかば、さして行くべき方もなく、まづ池の端へいでたりしが、お里が母と妹と、清之助に此の由を、委しく語れば人々は、唯一向に呆れ返りて、各目と目を見合はすばかり、何樣した譯のたゝりにか、佛の罰も知らねども、年來日頃の願望も、消えてなくなしはあんとする、その間もあらぬこの大變、夢ではないか夢ならば、早くさめよと思ふのみ、當下お里が母のおさきは、米次郎が噺を詳しく聞き、棚の小箱をひき下し、なかより取出す文一通、くりひろげて行燈の、影にすかしてとくと見終り、甚「ハテどうも不測な事がございます、貴君の今のお噺で、始

ゝて仰つた叔母の中、この清鶴と被仰るのは、三浦屋ではございませんか」と問はれて此方も不審顔、「へえ左様でございます、それが三浦屋に居た清鶴サ、勿論私が悪いから、斯ういふ事にもなつたので、叔母の怒るのも無理はない、しかし叔母の前おやゝ昔の馴染が、たとへお里が違つてゝ、それはそれに離れ、二世までの約束まで、仕た事だから是れ限り、打捨る積りは毛頭ないから、五ヶ年の期限の明けるのは、二月だと云ふの事、それまではやつと辛抱やつけて、僕が宜いやうにする積りの、御承知もこわふのみと喜び、斯ういふわけになつて見れば、放つておけないといふもの、「今度が来ないとが、お前を留めておいた所に、些たア臓があらうかと思ふの」ト聞いてこゝきは焼酎煮た、ホヽ雅た様なゝ、御袋さんの思召しにも、元發端を申して見れば、叔御様が使用地から、おいでといふ處もあり、……様をは万満に纏まりさうなもの、……其處で其の頃お申が御でございますね、此間急に心を起して、請出されると知つての文體、とりやゝ何にしても宜い事と、直に郭へ参りましたが、何か誠に意ない事で、……出ましたりの仕ゝ先と倒れましたから、お里と供を熊じて居つたに、また女を起しまして、不作の浦山、富蔵元町といふ館下前の、……に掛けられ、無事に居るとの事のふに、……す、其の處へ貴方がお出でで、お里が身分……お話から、ナンひつ……しの婚禮事宅と、これも……

されば、生した児よりも抱いた児と、たとへの通り取紛れて、まだ待乳山へ参りませんが、何様いふ事で貴君にも、御相談をせずに出しぬけに、お宿へ参つたかその料簡が、一向とわかりません。また其に身請の急場から、それさへに私共は、何様した事とお二人様で、不測に打つて居りましたり。陛下ながらもお世と違ひ、稚い時から彼の様な、人なみでない、お継母さんに、致させて置きませずば、酢いも甘いも承知して、ばくれんとやら古狸とやら、悪口に申す通り、定めて悪賢うなりましたして、何んな優しい心は、露程もあるまいか、是れも別り親の咎と、折節思ひ出しましては、涙の種となりました。今日の事も違ひまして、聞いてみればどのやうな、お心であるとは存じませなんだ、いふに言はれぬ御恩になつて、それつへ御不常との、さへ／＼児には存じませんに、老いの一徹涙然と、涌す涙の止め度なき。米次郎始め二人に聞いて始めて清鶴は、お前が姉とは思ひませず、扨て不測とばかりに、暫時はものもいはざりし。米次郎は熟々と、過ぎし此二日の事を、とつおいつ思ひ廻して、人の心と川の流の、昔に今と変り行く。これは珍らしからねども、清鶴が心立、賤しき務めの身にしては、直な者と察して思ひとりしは誤りにや、元正直の心でも人の善言を真に受けて、捨てられたりと一途に思ひ、積み重ねし恨みの根も、仇しに黄金にさせしこと、悪魔女に溺されず、生にも角にもさせの心根を、捨てゝ後に細もあると、それより遂世と流し動かぬ密かに揺きて斬う／＼とその術計を呑込

ませ、清鶴が文面に家の主は亦龍とて晝夜共地内へ出て賣卜渡世に宅には居ず、女房は針線に丁へ通へ毎朝より往きて、日が暮れねば歸つて來ず、日中は一人で居る故に、その時刻を計らひて來て呉れよとありければ、翌日中の中に計らふべしとて、まづ其の夜は休みつゝ、明日になりければ、遠世清之助は準備して、ちと出づるその跡より、米次郎は頭巾目深に、待乳山さして急ぎけり。斯くとも知らず清鶴は、思ひある身の跡やさき、案じ過ぎるも女子の常、夫婦はとうに出はらひて、唯獨り火鉢に向ひ、鬱々とせしその折から、表の方に女の聲、「ハイ御免なさいまし。」ト聞いて立ち出る清鶴が、障子の透よりさし覗き、「何方からお出でなさいました。」をちせ「ハイ私はアノ清鶴様に、お目にかゝりたくッて參りましたが、今日はお宿でございますかえ。」清「アイそれは私ざますが、お前様は誰様で何の用ざますエ、」をちせ「オヤお前様が清鶴さんでございますか、マア御免なさいまし。」トずつと上れば清鶴は、火鉢の脇へ遠世を通し、清「マア一ぷくお上んなまし、どうかお前様は見申した様ざますが知れませんが、誰様でございましたッけネ。」をちせ「私は白羽根町の米次郎が妹の、遠世と申す者でございます、大方兄さんから私の譯は、お聞きでありませうが、夫れから後は音信不通で居た處、昨日兄さんに逢ひまして久しぶりでの積る噺、段々聞けばこの間、據ない譯があつて、嫁を貰はうといふその前へ、お前が舞ひこんで來なすつて、郭に居たとき堅い約束が、あるからと言ひだから、マア其

處に居た人が、預つてお前を歸したといふ事だが、そりやァ正眞でございますかエッ」亘ァ、たゞ一通りに左樣お聞きだと、餘り仕ないなだと、おさげすみもありませうが、夫れには些と譯が有つて」おちせ「そりやァ成程譯もあり、又約束も有りませうから、何もお前が惡いといふのではないけれど、私の母は堅い性質で、どうも左樣いふことで見れば、嫁の親許方へ對して自己が濟まぬ、畢竟いはば米次郎が不埒からして起つた事、その取締が出來ないかと、他に蔑まれるも殘念だと、昔氣質の一徹とやらで、兄さんはその時から、直に勘當されましたツ。夫れで兄さんの言ひますには、清鶴さんと約束をして置きながら、沙汰もせず、他の女を嫁に貰ふには、義理の濟まない事だけれど、今回の事は否應のいはれない譯だから、仕方なしにまづ左樣して、清鶴さんが年明けは僅だから、其の節になれば別に宅でも、持たしておく積りに料簡を極めて仕た事だが、其の事を言はないのか、此方も無念とはいふものの、間拔けに振りこんで、來るといふは餘り大人しくもない、仕方だ、それにまだ分らないは何樣して北里を出て來たか、左樣して見れば年明けが、春だといつたは不確實で、實はこの節明けたと見える、夫れはまづ兎も角も、今回の事は一生にない、恥のかきあげ、それ生きて居る氣もねえから、昨夜直に大川へはまつてなりと身を隠さうと、思つて見たがそれもしかし、何時でも死なれるこの體、其樣に急ぐ事もない、然し逢つてその事を、只一言いひ遺したいと、先頃ちらりと

私の居所を、他に聞いたる心あてに、やう／＼探してその噺を、仕たからこれで氣が濟んだ、ト自己が亡後に、其方は宅へ歸つたなら、親御樣に此の事を、よく／＼お噺し申して呉れ、これがこの暇乞だと、直にたちのき駈け出して、一向往方が知れないから、萬一その怨みをいひにでも、此方へ來はしなさらないか、樣子を見たし二ツには、お前に逢つて噺も爲たさ。いよ／＼これなりに兄さんが、死んで見ればお前故、左樣して見れば私の爲には、お前は兄の敵も同然、その怨みもいひ度いけれど、その生死もしつかり知れず、早まつては笑はれ草」トきく度毎に清鶴は、頻りに胸を打つ轉ばかり、果ては顏色赤くなり、又案じては青くなり、思はず渾身も震へるばかり、遂世が顏をおつと見つめて、暫時は何の詞もなし。折から表に聲高く、「遂世何樣だまだ噺は濟まねえか、どうも案じられる樣さんの身の上、サア些とも早く泥町上手下、その他の心あたりを、無駄でも尋ねて見ざアなるめえ」ト障子を開けて差覗へ、片足踏込む清之助、遂世は後を振向いて、「なアせ」アイヨ些とお待なさい、兄さんが居るか居ないか、聞いて直にと思つたが、餘りな清鶴さんとツイ悔しいから一言二言、ト、それ誠にじれつたい」といふを聞いても清鶴が、身に置きあまる悲しさ切なさ、清之助は急き立つて、遂世を連れて出でんとするを、清鶴は立戻り「それには段々樣子も有る、言ひたい事も澤山ある、どうぞ聞いて」と取縋る。その清鶴が物語は、事長ければこゝに逸かれ。卷を換へて分解すべし。

作者曰く、清鶴が所爲は、皆萬右衛門が意中の計策、看官よろしく推量あれ。五編に至つて詳かにし、大團圓になすものなり。

閑情末摘花四編巻之下　終

閑情末摘花五編之敍

春月色勝如秋月色、秋月色令人悽慘、春月色令人和悦とは東坡が妻王夫人が詠嘆堂にて、春の月を觀て作れりといふ。抑月は大陰の精といふ事、よく人の知る所にして春秋の差別あるべき理はあらねど、是れを觀る人の心によりて、四時變化の情態あり。既に春と秋との爭ひを、ば、載して源氏物語にも見ゆあり。素顏自慢の夏の富士、また背撫りすじ／＼と、春風誘ふ水髮を、意氣とはいへど白妙の、眞白の雪の不二額、手拭もれし移り香の、綠髮の油納紙燥も、またそれ／＼の風情あり。凡そ小說稗史の類、或は人を怪惑せしめて、腸を斷つの條下もあれば、或日は和ぎ悦ばしめて、頤を解くの卷もあり、是れをよくとり合はすなるも、上手と唱ふ。もとこれ兒女子の伽草子綺の言葉の戯れなれば、故事來歷は固より隔なし、珍文漢語も亦無用。俗言卑語の當世風俗を、彼方此方と書替へて、新奇を古と競へども、足りは過不の自在ならねば、或は故人の跡を踏み、糟を甞るの其のさへ、免れがたき文段筆頭、さはれ看官に先後あれば、往昔を看ぬ少年輩には、是れまた奇なりとも一興ならん、殊に當世今樣の標の木の葉、積むとも盡きぬ新刊新製、甘くもあれば辛いもあり、よく嚼みわけて看給はん事を思ふ。

閑情末摘花五編之敍

辛丑の春正月松亭の南窗に筆を採る

作者　金水欽白

閑情末摘花五編卷之上

第二十五回

凡そ婦人の猿利根なれば、諸々の書に誡め、ことに奸は女の性の癖あるよしを譏りたり。よく愼み
よく思はざれば、かならず災害の元をひき出す。されば放心と他の詞にのりて、一生を過つ事あり。利害をよく〱嚼みくだきて、その宜しきに就く時は、更に後悔の憂へなし。當下清鶴は頻りに愁へて、まづ其の涙を押拭ひ、遠世が袖を引止めて、「マア聞いてお呉んなさいヨ、たとへ私は米様に、是れッ限り捨てられたつて、それを怨むの何のといふ譯はありません、三年此の方米さんの、お蔭で人並にして居た恩は幾許だか知れないものヲ。たとへ他から嫁をおとりだつて、何しに邪魔を仕ますものかネ、しかし斯う云ひましたら何故押しかけて來たとお言ひだらうが、その譯は斯うでございますヨ」ト思ひもよらぬ萬右衛門に、身受されてこゝへ預けられ、其の後萬右衛門太助の兩個口を揃へて萬右衛門は、米次郎が叔にして、この身と米次郎が深い中は、兼て聞き及びたる其の上に、娼妓に似あはぬ信實者、たとへ年は明かぬとも、折があらば身受して、米次郎と配はせんと、思ひ居たるに男氣の、

可愛い甥といふ位なれど、今度この叔父を始めとして、親類一同不承知な、女を嫁にするとの事、同意しても此の縁談を、止めさせうと思へども、元来當人同志の出来た中で、退引ならぬ訳なれば、仕て見ればさうでもあるまい、さればと云つてその女の親といふ奴が名うての悪者、娘を嫁に嫁して置いては、後日にする積り、左様いふ奴を相手にしては、往々々は家の仇にもなりかねず、何ぞ其處に故障の出ると、此れを御破談にさせれば、幸次郎が身に取つても仕合になる理窟、そこで何をと云ふので、それといはぬ身受をしたのは、みんな米が大袋とも、相談の上の事、たゞ然に依つて始めから、今日が日まで言葉をせず、他人同様にして置いたはこゝの訳、扨今夜は其の次第、いよいよ娶ると云ふ事で、今日はあの大取込、其處で強情をなしに来れば、それを故障にまづ今夜の婚禮は延びになる、左様して、跡で破談の掛合ひ、整つた上は其方を、そつくり嫁にするに仔細はない、然し自己が指揮をして、押しかけさせたといふ事は、噯気にも出してはならぬ、自己に逢つても、不見不知の顔で居にやならないと、始めに聞いた身受の入訳、もしもまた横なれども、たとへ親類は悪いにしろ、惚れて居た中で、内へ入れる様にきまつたを、私がわざわざ入れて、離しては名残り、親はさといふ義理も立たず、何うしたものと取付の、思案もつかぬその中に、早や恐くなる今から行けと、化粧するの意まだ私の縁、私に此は惚れた身の、余所の女と婚禮を、聞いてはどうも嬉しくも、思はぬと…の後は

から、ツイ出來る事と手輕く思ひ、連れたつて往つた白羽根町、來たら彼いへ斷らうと、萬右衛門さんの教へもあれど、まさか心にない事を、其の樣にいはれもせず、花龍さんに任して置いて、私は默つて居ましたが、陰で思ふ樣ではなく、婚禮準備のきらびやか、思ひもよらぬ故障が出て、嘸來これがと思つたら、理窟處かこの胸が張裂く樣で困な事と、後悔しても後れ馳せ、後から挨拶仕ようとの、萬右衛門さんが口上を、ヤレ嬉しやとほつと息早々に歸りまして、扨其の跡に何樣なつたかと、夜も寢られず按じる所へ、お前がお出でで今の噺、左樣して見れば萬右衛門さんの發とは丸で違ひ、三年此の方恩のある米さんを私の爲に、勘當させたのみならず、モシ萬一して米樣の、身に過ちがあつたならば私が手自殺した同然、マア何樣したら宜からうと、云ひも終らず平伏して、聲も惜しまぬ悲しみの、涙と倶に聲し居る、心の誠表はれて、見るも鬱悒き清蝶が、取亂したる傍の手匣、引きよせて出す剃刀を、逆手に持つて喉へ、突立てんとするを見るよりも、遽相に慌てゝその手を押へ、なにをすヤアヽお前何樣するのだエ。ト留めるを見るより清之助は、跳入つて剃刀を、捥ぎも言はず扱ぎ取つて、ニエ、危ない、何故又こんな眞似をするのだエ「ト」いはれて清蝶、涙を拂ひ、ニ何故とはマア餘りでざます、私故に米さんが、萬一死んだもしれないと、聞いて平氣で居られようか、脇から見たら狂氣とも逆上せたとも思ひなさませうが、各々の身に成つて見なさんし、何樣して死なずに居られませ

う、其れは最初から憎いとか、悔しいとか思ひ詰めて仕た事ならば、能い氣味と結句嬉しいかも知れないが、今いふ通りの身體さへ無ければ、慈母樣（米大尉の母を云ふ）や田鶴ちやんの否かる女の念を晴らして、私を宅へ下意でやるも、いはれた許りを眞言と思ひ、配つて見たいと日來から思つた念が屆いたかと、嬉しい樣で恐しく、又氣の毒にも思つたけれど、折角他の深切を、遠慮は却つて出世の邪魔と、斯ういふ事にならうとは、夢にも知らぬ白羽樣御へ、往つたが私の運の盡、堪忍して呉れなさいまし　ト永き咄話の其の中に、顏赤め、息は苦く成り、身を投げ伏して悔い歎くっ、當下表をばつと上げて、ソウ、分解つた夫れで分つた、日來よりした義とは、解つてゐる清鶴が、不測な事と思つたが、兩腕を組んで死ぬといはれて、心引きに來てみれば、案の如く他の曲尺、コレ、清鶴兒にはしれまい、ハヽヽ、馬鹿々々しい譯合だ、其の辭聞きつけ清鶴は、疑しい中に嬉しさの、覺悟だけに顏の見上げ、溜息をはつと吐いて、まアまア憎らしいねエ、私やア又本氣かと思つて、何樣に案じましたらう、實に斷うして居る家にあるさうなんだ、それおやア賊當でないといふのも、不殘言ひつまりやア賊ないで卸す筈へ寄め、其の賊當は正體で、附し今の話で聞けば何もかも分解つた、何でもそんな事だらうと黑吉は、十時ただが、、太助めも憊に引かれて、婦仰と一味合點だ、附し此の始末にさうでもならう、先づ差當つて身を出すに、手請の出來たは大當りだ、其處で清鶴まだお前の書を詰

すことがある、其の晩婚禮をしようといふ女は、お前が妹のお里サ。ートそれより細かに一什の事を
語せば、清鶴筆りして久々續く薄命に、親子三人が身の艱難、いふにいはれぬ難澁を、心苦しく思う
ても、あるに甲斐なき此の身のはかなさ。折々母が訪ひ音信れにも、それと察して小遣の心付けには貢
ぎても、女世帯のやるせなき、說話聞くさへ癪の種、早く身儘になつたなら、親子三人共々に乞食す
るとも傍に居て、暮したならば嬉しかろと、平生に思ひの絕え間さへ、泣いて苦界のうき勤め、人は
矢よりも早しといふ、其の光陰だに待遠く、年の明くのを算へても長い中こそあきらめよけれ、今半
年か一年に、なりていよ／＼もどかしき、月日のうちに身受され、歎く間もなかりしその、他の計較の
お先にされて、思ふお方はそれ故に、勘當の身と聞いた時は、其の嬉しさに百倍の、胸を痛めて義理
のために、死なうとまでも思ひしを、又引きかへて妹の、世に成り出づる其のお話、母さん倶に嬉しな
身と、なりしは千兩萬兩の、金を此の身に貰ひしより、嬉しさ餘るとはいふものゝ、姉が足らはぬ
心から、其の婚禮を妨げて、苦勞さするは什麼なんの、因果な端ごとまた繰返す、胸のはしがき有羽
搔、口說きても猶限りなき。米次郎は熟く聞いて、モウ何もかも不幸時節、愚癡をいへば果しも
ない事、斯う明々地に知れて見れば、此方にもまた仕様がある、今日衆人の來た事は、誰も知らねえ
から極内々で、サア白羽根町へ遣つてくれろと、朝に晩に萬右衛門さんと太助をおもい、れ貢付けたさ

ネ、その内にや、此方で、手筈をする事がある、身分の所は慈母ともよく相談して言つてよこさう、旦那はおそれだア、引此との間、大きに氣を打つたたア、ハヽヽヽ、サア清さん遠世も帶でもおほさねえか、久しぶりで一杯といひてえ所だが、左樣して居るうち、誰ぞ歸ると大きに間が悪い、サア些とも早く往きやせう。」ト急き立てられて清之助、遠世も倶に立ち上れば、今更名殘惜しまれて、歸しともなき風情はあれど、斯うして話する中にも、萬右衞門太助が來はせぬかと、犬が障子へさはつても、はつと脊伸に入口を、見かへる思ひも切なければ、留めんよしもあらずして、夫んなら衆人さん御機嫌よう、隨分息才でと暇乞、わかれ堅田に羣居たる、鴈の一連ぱつとたち、跡から崎の夜の雨、寂寥とこそなりにけれ。

是れより米次郎は、かの忍ケ岡のお里が家に、遠世等諸共に在り、お里はその夜より、白羽根町の福見屋に止まりて、鬱々と暮すと知るべし。

第二十六回

鉦を敲いて佛にならば、神田かぢ町はみな佛ト童の謠に唄ひしは、ぐつと今より昔の事、阿陀の功德か鉦打鳴らし、腰には一ツの鈴を提げて、チヤン／＼／＼チヤラ／＼／＼、紙屑買ほ、直をよく買ほ

ト鈍みたる聲をふり立つて、小路市中呼び歩く、現に世の中を茶にしたるは、安楽さんともいふなるべし。こゝは東府のまん中橋、關にはあらぬ中通り、表は格子の二間口、縫箔所と木札をかけし、二階は久治が針業場にて、蔦へ染の總模様、四時の英花鳥の彩色、手をつくしたる縫物に、氣根を籠めし後の方、徐々とお滋は茶碗と土瓶を持ちそへて二階を上り、しげ「お前樣はまアよく根が盡きませんネ、尤も桐生の親元なんぞで、種々の模様を織りますのを見て居ると、誠に精が潰れるやうでございますヨ、何樣して彼出來るかと思ひますわ。」久「ありやア私共の針業より猶大變だらうヨ、絲を織合はしてその模様を、すつかり見せるのだからむづかしさうだ、お前は桐生だ／＼と云つて、幾年關いても譜といふものゝ女兒だと明しなさらねえが、實勘へてみると、あんまり面白くねえと思ふぜ。」しげ「ホヽヽ、今に知れますヨ。」久「そりやア左樣でもあらうが、親も大きに案じて居るのサ、畢竟私が途で逢つて、不圖した縁か意地穢なか、ツイそれ異な情合に成つたもんだから、可愛くツて捨てるにやア捨てられず、一日々々と斯うして居るけれど、實を云つて見ると天から降つたか地から涌いたか、またどんな掛合があるか、知れねえ女兒を飼い氣になつて、のめけて居ても、餘り詰らねえと思ふのサ。」しげ「そりやア此間も申す通り私の身はネ、些とも氣遣は有りませんと申すのに。」久「そりやアお前の心持では左樣だらうが、よく聞かねえうちは、何だか此方で安心しねえやうだヨ。」

しげ「そして安心ならないから、出て往けば宜いとお思ひのかエ。」久「ソラまた僻が始まつた、左様思ふ位なら、些とも心配は仕ねえのさ、併しお前の方で、モウ飽きたから往つて仕舞はうと思ふなら仕方がねえ、とは云ふものの夫れも承知づくぢやァ放さないネ。是れお見、誠に美しい著物だらう、勿論こりやァ御殿方の召服で、われ／＼しきがこんな物は著られねえけれど、斯うして他の著類の縫模様なぞるに付けても、こんな美しいものを著せて見度えものだ、左様したらまた一段艶麗になるだらうと、實に馬鹿な事だが、今まではどんな立派な物を縫つたつて、終に欲しいなんぞと思つた事はなかつたが、此の頃は何だか女の著類が目に付いてならねえのョ。」しげ「フヽうまく嬉しがらせを被仰るョ、そりやァ大方門違ひとやらでございませう。」久「イヤ左様思はれちやァ埋らねえ、他に何が有るものか。」しげ「イヽエ夫れでも慈母様が、此間左様被仰いました、久治もモウ一頻りは放蕩で、碌に宅には居ず夫れに就いちやァ無理な借金もしたり、誠に困つたがマァ／＼此の頃は大きに大人しくなつて吾儕も安堵した、何卒早く嫁でも取つて遣りたいと思つて居る處だから、お前の身元さへ明して親御達も呉れようとお云ひなら、貰ひ度いものだと被仰いましたものヲ。」久「左様か當下お前何と言つた。」しげ「アノウ私は左様なりますと大きに宜うございますが、何様も私の様な不意氣な者では久様のお氣にやァ入りますまいと申して置きました、正眞に左様でございますものヲ。」久「左様

左様どうもお氣に入りません、斯ういふ中に成つてせへ身元も明かさねえ樣な、氣障いものは否々。」
しん「今にそれも明しますから、何卒左様被仰らないで、こんな者でも可愛がつて下さいまし。若しこれッ限り捨てられると、私は死んで幽靈に成つて出ますヨ。」トいふ折から表をあけて小僧の聲、小「ハイお頼み申します、アノ丁子屋から參りましたが、此間お誂へ申した、踊衣裳の縫物はまだ出來ましたかネ。」ト聞いて久治は階子を二三段下り、下を覗いて、久「ツイ種々取込んで居てまだ出來ません。明後日は急度上ります。」小「此の頃にお淺ひが有りますから間に合はないと困ります、今度は間違ひなくお頼み申します。」久「アイ／＼きッと間違ひは仕ません、何卒宜しく申してお呉んなさい。」小「ハイ左様なら。」ト歸る表にチヤン／＼／＼紙屑買ほ、直をよく買ほと呼んで來る聲聞きつけて、久「オイ／＼紙屑を賣りやせう。」ト言ひながら下へおりて、押入より呉服紙其の外種々の、反古を取出して、久「サアこれだ、正眞に直をよく買はなくツちやア賣らねえぜ。」かみ「ハイ／＼、御尤もには頂きません。」ト秤を出してかける折から端と眼につく筐の手跡、筐の中にあるを見て、久治は表へ立ち出でて、籠よりする／＼引出せば、日向半切二枚ばかりに、認めたりし手簡の反古、宛名は梶原萬右衛門樣、下は武さんやた助とあるに、叔の名前で手跡さへ、紛ひなければハテ不測と、下行許りを讀み下せば、合點のゆかねその文體に、まづくる／＼と卷納め、久「この反古は面白い手跡だから、私に賣つ

て呉れた、十六文許りに買はうて。」かよく「ハ、、、旦那も、とんだ物數奇なお方だねヱ。」くに「イヤサこれた鹿尾菜を、ぶつ溢したやうな手跡が好きサハ、、、、、」かよく「夫んならばこれは、首に頂きます、その反古はお負けに上げませう。」久「左様かエ、そりやア猶妙だ。」トいへば紙屑買は錢を置き、籠を擔いでチヤンく\紙屑買ほと行過ぐる。跡に久治は見世の鼻、かの紙屑の皺を延し、久「何でも叔父の手跡に違へねヱが、ハテ異な文言だ。ムヽ兼ておたの衣の白羽根町の一件、お里の方も段々と、手續はよく成りましたそれにつき清鶴も、いよく\婚禮の晩に振り込むやうの手筈實に妙計に御座候。ハテナ、甘く參れば米次郎殿の當惑、貴君の意趣を御晴らし被成候には御十分に御座あるべく候、いづれお滋様の御行方は、私も倶々探し出し申すべく候」ト讀み終りて又考へ、久「何だか一向解せねヱ清鶴と言ふはアノ三浦屋のか知らん、それが婚禮の晩に振込むとはハテ不測だ、またお滋様の行方といふのも異りきだわエ。」ト若しはそれかと心のうち、訝る後へ密つと來て、先より聞き居るお滋も悄り、しげ「ヲヤまアこれは不測だねヱ、何を隠しませう桐生の萬右衛門とは吾儕が親の名、それが何様してお前様の叔さんとこの様に。」久「ナニお前は夫んなら米次郎さんの親類、アノ遠世さんが嫁に往く積りの。」しげ「何様してそれをお前様が。」久「ハテ知らねヱで何様するものか。」トそれより福見屋へ出入の事、又は遠世が始末の粗話せば、此方も不測の思ひ、今回父の萬右衛門と、來た

時よりの一伍一什、詳しく語れば久治は聞き、始めて知つたるお滋が素性、さては左様かと呆るゝ許り、手を組んで居たりしが思ひ付いたる事や有りけん、獨り點頭くその折から、歸り來る母の沖津、門口あけて這入る顔、見るより久治は今こゝに、有りし次第を具に語り、かの反古をも讀んで聞かせ倶に訝る其のところへ、喔急來るは、別人ならぬ叔の太助、居るを遅しと母親の、沖津は太助が前へすわりて、物いはんとする景勢に、久治はわざと押し隔て、「叔さん何だネ、大層急いで御出で被成たネ」「イヤ些と氣の揉める理があつてョ」「そりやア何だか氣に懸る、マア何様いふ理でョ」ト問ひかけられて面無氣に、額の汗を袂から出す手拭でしぼ／＼拭き、「イヤ姉様も（久治が母をさしていふ）久治もまア聞いて呉んな、自己ア詰らねえ事を頼まれて、ウンと云つたが身の不肖、今更後悔千萬サ」ト、いふに久治もその母も、たれとは大方察しながらも、知らぬ顔して理を聞けば、太助はいよ／＼無面氣にて、彼の萬右衛門に頼まれて、箇様々々の較計をなししに、思ひよらずも其の夜より、米次郎は勘當うけ、お里は白羽根町に駐まりし、事まで委しく語りつゝ、「イヤ實に案外な譯で困りきる。勿論米さんを困らして腹を醫ようといふ萬右衛門さんの較計で、満額が身受から、何かについて一本半や、そこらの本錢をいれての所爲、とはいふものの米さんが、勘當されようとまでは思はねえが、其の場に至つてこりや、不殘狂言だとも言はれず心で後悔する許りだ、マア久治此の上何様したら宜からう、其方もお世

話になる旦那の事、實は此樣にする積りぢやァ無かつたけれど、イヤハヤとんだ始末になつたのサ」ト一什の噺に懐より、久治はかの反古を取出して、久「夫れぢやァ此の手筋に覺えがありませうネヽ」ト太助が膝の傍へ置けば、太助は一眼看て不審顔、太「ヤヽどうして是れが。」ト驚くを母の沖津も膝すり寄せ、沖「聞けば聞く程料簡なし、誠に呆れけへつた者だ、勿論左樣いふ理で見れば、萬右衛門さんとやらの腹立は、満更無理でもないけれど、兼て久治がお世話になる旦那といふも知りながら、何もお前が一味して旦那に苦勞掛けないでも、宜ささうなものぢやァないか、其の前廣に些とでも、噺があれば左樣はさせない、畢竟いはばそのお滋が家出をしたから起つた事、サァそのお滋は此の通り、無事息才で爰に居るヨ。」ト後に居たるお滋を指さし、沖「コレサお前が居ない許りで、夫れ程な騒ぎになつた、此處へ來た時何もかも、打明ければ早々に、白羽根町へも渡りをつけて、そんな事にはさせないものヲサ」トいはれてお滋は今更に、何といふべき詞さへ、なく／＼顔を低れて居る。太助は愈仰天して、太「ナニこの嬢がお滋樣とは、イヤどうも譃らしい、何樣もこゝに居るわけが。」沖「無ささうな所に居るから不測さ、其の理は這樣々々と、久治が伴ひ來りし事を、話せばいよ／＼驚く太助、太「斯ういふ事を知つたなら、氣を揉むには及ばぬ事、それは猶々米さんを、そのまゝにしちやァ置かれねえ、」沖「其處で米さんの居所を、叔さんは知つてお出でか。」太「サア夫れが知れりやァ仔細はね

え、大方忍ケ岡のお里が方と、推量をして居ても、自己はどうも云ひ憎い、夫れだによつて其方に頼み、米さんの在家を聞きだし、懺悔に罪も消えるとやら、何もかも打明けて、話を仕ようといふのだ」「ムヽいよ／＼左様いふ事ならば、忍ケ岡へ尋ねて往つて」「ト言ふ一時とも早く其の始末を、旦那に話してお身の上を、ノヽ久治や左様ぢやァないか」「ムヽドレ夫んなら往つて見よう」ト支度そこ／＼、わが家を立ちいで、忍ケ岡さして急ぎ行く。

閑情末摘花五編巻之上　終

閑情末摘花　五編卷之中

第二十七回

宮城野の、本あらの小萩露を重み、風を待つ如君をこそ、まてば甘露の麗かな、日和長閑けき小春月、今日は十まり七日にて、大慈大悲の靈場へ、歩みをはこぶ貴賤の群集、目川菜飯も田樂も、賣りきれりの掛札は、いつもかはらぬ繁花の土地、名さへさすがの廣小路も、宛然狹き往來の賑はひ、一料理屋の奥二階杉戸をひつたり建て切つて、内ぞ床しき兩個の客は、米次郎とお里なり、觴より霎時酒事にほんのりとせし眼の縁は、櫻海棠桃の花綻びかゝる其の風情、漢の語でいふ時は、今日不計愁眉を開くと、心に嬉しお里が、俤、又一段の愛を増すべし。米次郎は盃をさして、自己の胸を撫でおろし、米「ア、やう〳〵氣が落著いた、彼の時からして今日までといふものは、何だか氣がむしやくしやして、實に面白くも可笑しくもねえのヨ、夫れぢやァ慈母も、叔御が悔しんばうで、一乘法を書いたのだといふのは、推量して居る樣子だノ」さと「此間私にお云ひなさるにやァネ、お前も緣あつて折角來たものだが、知つての通りの理で、どうも義理が濟まないから、米を勘當して見ると、定めて

一日も斯うして居る氣は有るまいが、夫れもまウ些との内だから、氣を永くして居な、併し何に付けても困るのはお滋が身の上だ、今に於て風の便りもなし、實に生死せへ分らないから、こゝで誠に仕憎いのサ、彼が滿足でさへ居た事なら、何樣でも仕てしまふと被仰つてお在でなさるが、どうも其のお滋樣とやらの、行方はしれませんかネエ。」上「そりやァ繼母のいふまでもなしサ、また彼のお滋といふ少女も、なんぼ郷在の芋掘だと云つても、餘り鈍智ぢやァねえか、影をかくして他を心配させるにやァあたらねえ。」お里「すりや大そう惡くお云ひなさるネ、をとこ冥利につきますぜ。」米「何故々々。」お里「なぜと云つてよく考へて御覽なさい、お前樣に配ひたい〳〵と、それ許りを樂しみにして、三十里とやらいふ遠い所からお出でのを、否だの何のとお言ひなさるから、そりやァ私を他にしても何樣かする氣になりますアネ。」米「大違ひ〳〵、固來自己に隠れて彼とした譯なら、些たァ不便な所もあるけれど、全く左樣ぢやァねえ、此方の邪推にやァ、父子いひ合はして影を隠し、自己に難題を吹つかけた所が、夫れも何樣やら這樣やら、向うのいふ通りに仕上げたから、又惡巧みをして、遂々自己を逐出す趣向にしたのだと思ふと、實に癪しくもくやしし、小顏が憎くッてこたへられねえ。」お里「そりやァ叔さんは何樣だか知らないが、女といふものは、一回斯うと思つた人に捨てられりやァ、死ぬ氣にも世を捨てる氣にもなるのは、當然でございますから、まだ私は見た事もないお滋さんの事だけ

れども可愛さうだと思ひますわ。」米「何も斯うと思はれる因縁がねえのさ。」お里「オヤ口は重寶だね、また何も情合のないものが驅けだしも仕ますまいね、オホヽヽヽヽ」米「イケすかやァ迷惑さ。」お里「オヽ迷惑な事がありますものか、お前樣が餘り惡性をおしだから、種々な事が出來ますわ。」米「コレサ左樣おもはれちやァ實難澀だ、強面いお前に焦れて一年餘り、情を立て通したといふ自己だものヲ。」お里「夫れは誠に嬉しうございますが、またお前樣御如在もなくッて、何故アノ娼妓が、振りこんで來るやうな事を仕てお置きだかと、夫れがいまだに分りませんヨ、何でも餘程堅い約束をして、お置きなすッたらうと思ひますわ。」米「イヤその娼妓に付いては不測の因縁話があるが、マアヽヽそりやァ跡で寛りと話さう、オヤ燗がだいなし冷めた。」ト掌をチヨンヽヽと鳴らせば下ふより下女來る。米「ちよつとこの燗を溫めて呉んな、そして下に居る丁稚に飯でも食はして呉んな。」下女「ハイヽヽ」ト下りて往き、軈て燗を直して持つて來る。米「サア お里一ツ飲みな。」お里「私は誠に醉つて、顏が火々とします、さぞ赤く成りましたらうね。」米「イヽヤ丁度いい加減だ、先刻爰へ來た時は、何だか色が惡かつたから、種々苦勞をする所爲だらうと、實に可愛さうだッた。」お里「ナニね私は何かどうでも、宅に居ての苦勞だから宜いが、お前樣は夫れから何樣なすつたか、定めて忍ケ岡の宅へお出でなすつて、淸樣や慈母とも相談をしてお在でだらうとは思ひますけれど、便りをする事はならず、太助さん

も其の後一向寄付かないから、容子は知れず、今日は漸うの事で、觀音樣へ參つて來たいと言つて出ました處、思ひよらず斯うしてお目に懸つて、胸が下りましたわ。」ト「そりや、自己も胸が下つた、何樣して居るかと實に案じた、其處でいい序だから忍ケ岡へ往つて、惡性にも逢つて安堵させんが宜い、此の間から案じて居らアな。」ト三「夫れも宜いが、あんまり遲くなりは仕ますまいか、夫れにアノ丁稚が」ト「ナニあのやア宜いわナ、自己がよく言ひつけるから大丈夫だ。」ト三「そんなら左樣致しませうかネエ。」ト「サア早く帶でもしめ直しナ。」ト是れより勘定をすまし、こゝを立出でしが兎角に繁き人通り、殊に女の途はかどらねば、お甲を籠に乘せて、忍ケ岡へと急ぎ行く。こゝに遠世と諸之助は、米次郎が情にて、まづ暫くは安堵の思ひ、その間もあらで杖柱と、恃みし人の身の災難に、又も苦勞の憂き思ひ、身のなる果てを嘆ちつゝ、ひとり二階に差向ひ、密々にはなし其の折節、門口あけて男の聲、「ハイちとお恃み申します」ト聞いて二階を諸之助、下りつゝ見れば年齡、二十五六の如らぬ男、「眞何方からお出でなさいました。」男「アノ、此方はお里樣のお宅でございますかネ。」三「左樣サ、此方の女兒をお里と言ひますが是れも些と譯が有つて、此の頃は宅に居ません、繼母も今は生憎留守、何ぞ御用なら私に被仰り置いて下さいまし。」ト聞いて男は家の樣子、しみ〴〵と見廻しながら、男「モシ此方に米さんといふお方が、お在ではなさいませんかネ。」ト問はれて何と答ふべき、諸に

暫時さし詰りしが、忽地に思案して、清「左様サ、そんな方は存じませんネヽ、それは此方おやアございますめエ」ト猶里「ハテ何でもそのお里さんといふお方の宅に、お在でなさるやうに聞きましたが。」ト猶彼方此方を見廻して、暇乞ひしつゝ立歸る。遣世は二階の上り口へ、顏差出して聲を低め、をらせ「清さんアノ人は縫箔屋の久治といふ人だョ、わたいの宅へ出入でネ、にいさんなんどの遊び友達サ、何しに來たらうネ。」清「ム、ヲヤたれぢやアお里さんの叔分に成つた、太助の甥かエ。」をらせ「ア、其の人だわ」清「マア何しる知らねえと言つて歸したから宜い、大方その叔と何か較計んで、モウ一番はめにでも來たのおやアねえか。」をらせ「ナニ左様でも有るまいョ、兄樣にやア種々世話にも成つて居る人だから、ソレ先頃泥町の龜やの二階に隱れて居た時、私を尋ねて來た人サ。」清「ム、左樣々々、それおやアお前の所で、一回か二回逢つた事がある、道理で見たやうな人だと思つたッけ。」をらせ「ヤヤまた誰か來た。」清「ナニ慈母だらう。」トいひつゝ出れば門口を、ぐわらりと明けて米次郎、這入る跡からお里は莞爾、さと「清さん此間は。」清「ヲヤお里さん、どうして米さんと一所に。」をらせ「ヲヤ／＼姉樣かエ、まア何樣おしだ、誠に毎日々々噂計りして居ますわ。」さと「私もネ色々案じて居るけれど、自由に出る事はならず、氣計り揉んで居ましたわ。慈母は留守かえ。」をらせ「ア、先刻馬渡へ往つて來る所があるから、氣を付けてお呉れとお言ひでネ、何處かお出でだか、まだ歸んなさらないわ。」さと「左

様かえ、いけないネエ、滅多には歸れまいが。」專「ナニ其様に遠方ぢやァあるまい、然して何かェ直に歸るのかエ。」ミ「アヽ其様に手間を取つちやァ居られないわ。」とよ「何故ネ、今夜はお泊りでも宜いぢやァないか。」ミ「ネヽヽヽ泊つて御覧人不首尾だわ。」專「宜さそうなもんだネ、適宅へ来たわけなり、夫れに肝心の旦那が此方だから、否といふものも有るめえハヽヽヽ。」よね「ヲヤ遠世今日は丁稚の徳松が、お里の供をして来たから、今其に待たして置いたが、どうで隠れ遂せるわけにも往くめえ、此方へ呼ばう。」をふせ「ナヤ氣障なしいネ。」專「ハヽヽ徳松が聞たネ、彼奴年に似合はねえ發才さ。ナニもう破れかぶれだ、構ふ事はねえから、ほアと云つて仕舞ふが宜い、宅へ歸つて云ひせへしねえけりやァ宜い。」よね「そりやァ私がよく言付けやすよ、コレ〱徳松、此方へ這入りやこ」專「ハヽヽ」ト障子をあけて一座を見廻し、專「オヤお嬢さんにお職の若旦那様。」をふせ「徳松びつくりしたかエ、宅ぢやァ大方死んだと言つてお出でだらう。」專「こゝにお在でなさるなら、赤咲うに若様彼御は宜うございます。御袋様がお前様の事を、時々被仰り出しちやァお泣なさいます。夫れに知らん顔をして入らしつちやァ、不孝とやらでございますよ。」トいはれて思はず眼に濕み、涙を袢纏の袖で拭ひ、をふせ「ホンニ徳松一言もないョ、其な達の眼からさへ、不孝と見えるは皆私が、なればこそ時々に、いひ出してお泣きかなさる、有難いとはいはうか勿體ないと云はうか、まア譬も無い。」ト言ひ

つ、其處へ平伏して、泣くのも道理側で見る、清之助も倶涙、其の身の親の事さへに、遠く察して咽せ返る、忍ケ岡の夕しぐれ、しばし袂を絞りけり。

第二十八回

冬の日影のさりげなく、兎角する間に四邊さへ行黒くなるまゝに、米「サア／＼そんな愚痴をならべたつて、提灯持はあとへ立たず、後悔は先に立たずだ。コレ徳松此表町へ出ると、穴鰻といふ宅があるから其處に往つてナ、鰻を一歩二朱許りと、そして此方の角の酒屋で、宜いのを一升取つて來て呉れよ」とら「コレサその序に蠟燭を買つて來て呉んな。」徳「ハイ／＼、慈母はまァ何處へ往つたネエ、もうかへりさうなもんだ、宅へ歸るのが餘り遲くなるから、氣が急いてならないよ」米「ナニ今夜は歸らずとも宜いよ、徳松も一緒にこつちへ泊めようよ」ゑ「夫れぢやァ慈母さんが、また御苦勞になさいませうよ」米「と言つたところが、唯一晩の事だ。その代り跡ぢやァ雲の晴れた様に往く事があるかも知れねえよ」ゑ「左様いふ理なら宜いけれどもネ」とら「宜かァ今夜お泊りヨ、ネエ兄さん何なら徳松を先へ歸して、お甲さんの口上で、今日は宅へ寄つて遲く成つたからとまりますと、言つて遣つても宜いぢやァないかよ」米「ナニ／＼それぢやァ悪い、マァ／＼諸事自己にまかせて置きねえ」トいふうち徳

松も酒を買つてかへり、誂への鰻も来るゆゑ、衆人車座に並んで酒事となる。○「アレ遠世さんお前はなぜ其様に、私ばつかりおいぢめだヨ、誠にモウ〳〵酔つて、この通り真赤に成つてゐるものヲ。」○「何の姉さんは、不断はお飲みの癖に、今夜に限つてお辞宜ばッかりしてお在でだヨ好かねえ。」米「ハヽァきこえた、今夜は久しぶりで、話がたんとあるから、酔つちやァならないといふのだらう。」○「ヲヤ満さん身方見くるしく、遠世さんの贔屓ばかりおしでない、私が何時其様に酒を飲みましたエ、遠世さんは嘘ばかりお言ひだ、否だネ。」○「ネエ迂なものかネエ兄さん。」米「何ぞといふと白己に相談をかけられるにやァ困る。杯の遣取が種々むづかしいから、是れから何でもかゝる〳〵はし、押へッこなしと仕よう。」○「アヽンとんだ事を、お前様こそ夫れで宜からうが、何様して私共がその仲間へ這入られますものか。」○「そんならネ、米さんは一杯ツ。」○「何杯でも飲まうわな、○お里ちよいと爪弾でもやんなな、何だか寂しい。」○「餘り宜い氣前の様だネ。」○「何の構ふ事があるものか。」○「三味線を持つて来ませうか。」○「アレお止しヨ、今におつかあが帰つた時間が悪いから。」米「ナニ言訳は自己がするから、遠世ちよつと持つて来な。」トいふに遠世は三味線を持ち来り、○「ヲヤお里さん。」○「夫んなら宜いかエ。」米「宜いといふにナ。」○「夫れなら爪弾にしませう。」ト調子を合はせ、○「私がネ、こゝにゐるものの心意氣をちよいと唄ひませう。」○「、唄つてお聞かせ。」

苦勞させたりしもするからは、末にや寛やかういはしやせぬ

三「ネ、ネ遠世さんお前も左樣だらう。」をちせ「大きにサ、先頃清さんが何處か婿に往くと、言つて出た時の事を思ふと、マア此樣に苦勞して配はれもせず、剰へ婿に往くとは、餘り情のない事だと、その時の思ひは何樣でありましたらう、また跡でその心意氣を聞いて見れば、私を出しぬいて、自己一個死なうといふ覺悟は、うれしいやうで恨みな人だとも思ひましたわ」三「ホヽヽあのときは私も慈母も、ハッと思つて膽が震へたヨ、モウ一足遲くかへつて御覽、どんな騷ぎが出來る處だか知れないわ」をちせ「左樣して見ると、私どもは前の世に、餘程深い縁でも有つたかネヱ、最初は慈母に救はれ、再度はお前に助けられて、誠に命の親とやらだネヱ」三「イヤモウ、道ならねえ事は仕ねえものだ、お互に宅に眞面で居て見なせえ、こんな苦勞はねえのだ、是れも實に後來若い輩の能い誡めだ」米「コレサ／＼又そんな寒ゝ事を言ひ出したヨ、些と盞でも流行らせねえか」をちせ「オヤお燗がだいなし冷めました」三「ドレ爰へお入れ」遠「トキニ米樣お前は何だか平氣の樣子だが、どうも私共は今回の一件が氣に成つて、先刻も遠世と種々噂して居た所だが、又何樣してお里さんと同伴にお出でだか、夫れともお前樣その宅へお歸りかえ、左樣ぢやア有りますめえ」米「何樣して歸る處ぢやアねえが、お里には淺草で逢つてネ、夫れから同伴に來た譯サ、私だつて氣にならねえ事はないが、どう

も仕方がねえから、ツイ無法になるのヨ。」ト「ホンニ先刻知らねえ男がお前を尋ねて来てネ、跡で逢ふ

世に聞いたら、髪結屋の久治だといひましたツけ、何ぞお心当りでも有りますか。」ト「左様かエ、何

ら心当りといふはねえが、ハヽアまたおやぢが動かぬ居所を聞いたか知らん。」ト「だれだか、此方だ

と言つて、様子を聞けば宜かつたかネエ。」ト「ナニ何様でも宜い、モシまた誰ぞ来たら、こゝに居

ると言つて、何の用だか聞いておくれ。」ト既になかさに門口を、ぐわらりと明ければ遠世は在所で、

さまさま一世帯お帰りか。」ト言ひながら障子をあければ、隣のおかみ空畳として内へ這入り、ニエ「サア大分

賑やかだねエ。」トさうサ「マア、けふはまお亀さんがお出でで、マア早くお出でなさい、誠に遅いとつて、先刻

から来人が殺したわ。」ト「大きに手間がとれました。」ト言ひながら長めの火鉢へ頭を出し、ニエ「マア安

だ、コレサ、ヤ、御苦労をを。」ト「ヤア、置籠に来つてお出でか。」ト「ニヤア、もう縁も無沙汰で帰つたかネ

お客を一寸連れて来たのサ。」ト「左様かネ、何處のりかネ。」ト「お客の厄介を、、、、」ト「上総

国から先刻から待つて居たヨ、お前まア何處へお出でだ。」ト「よく来たネ、此間うちから来人さんが

大家じゃ。」ト「左様だらうと思つてやア待たれたけれど。」ト「マアそれもよしまして、ドレドレどうも。」ト「ま

た其の顔を見かへ、「マア、こゝへ出たゞ、置籠やその御苦労、ヱヱお茶でも飲んでお出で。」ト「おひな

から、上なれこと、お茶の請取か、晴毛はとして、其の夏も楽人、ト、とつこかとしてすつとにり、

つる「オヤ衆人さんお揃ひで。」をちせ「よくお出でだネエ、此の間は初めてお目にかゝつて、種々不躾を申しました。」清「ハヽヽ、面目ねえ、跡ぢやア私共をとんだ怖い奴等だと思ひなすつたらうハヽヽ。」つる「實にアノ時は、居ても立ちても居られましなんだヨ。」さミ「オヤ姉さんは衆人さんとお知己かえ。」みき「マァ聞きなョ、此の間遠世樣と清さんとお出でての、斯う／＼お言ひだから、實に死ぬ氣に成つた所へ、跡から米さんがお出でで、實は心引きだと聞いて、安堵したと言ふ噺サ、併し姉と言ひ妹といひ、一方ならない御恩に成りながら、また一方ならない御苦勞をかけると言ふは、何樣した事だかと先刻も其の事で兩個ながら泣いたョ。」ト此の時初めて米次郎が、馴染重ねし花魁にて、婚禮の夜に振り込みしは、清鶴なりときくものから、お里はいよ／＼愁傷して、姉と妹手を取合ひ、知らぬ事とはいひながら、他の言葉を信と思ひ、姉は妹が身の出世を、妨げたりしを後悔すれば、「悋氣は女子の愼みと、嗜んで見ても情なや、その夜よりして良人は勘當、腹黒きは遊女の、常とし聞けど斯くまでに、執念きものかと朝夕の、苦勞につけて妹は、姉を恨みしこの日來、神ならぬ身の是非もなし。」と互に絶えぬ繰言に、思はず時刻を過しけり。米次郎は兩個をなだめ、米「モウ／＼宜いわな、いくら言つたつてをさまらねえ譯合だ、互に知らねえ事は仕方なしサ。其處で又慈母にも、種々噺があるけれど、そりやァまア跡の事として、遠世まだ酒はあるか、是れからあつさりと飲んで、衆人寢るが宜

い。」なせ「サア、お燗が出来ました、慈母一ッ上ッて、清鶴さんにお上げなさい、嘸寒かつたらうネ、夜が更けたせゐか、いつそ戦慄として来たやうだ。」ふき「オヤ丁稚どんが睡さうだノウ、二階へ寝かしても宜からうネエ旦那」米「ム、左様ヨ、さア／＼徳松や其方は二階へ往つて寝ろ、遠世連れて往つて遣んな。」なせ「サア／＼寝るが宜い、尿でもして来たか。」徳「ハイ／＼、何睡かアございません」なせ「ナニ遠慮なしに寝なヨ。」ト二階へ徳松を寝かす。米「何とさうそろ／＼お片付として、跡は寝ながら寛りと噺さうぢやアねえかエ。」米「左様サそれが宜からう、サアお銚子切お前方両個で片付けな。」ト清鶴お里が前へおく。つる「マア お前様お上んなさいまし。」米「イヤ自己はもう宜い、お里酌でもして遣んな、久しぶりで。」つる「たれおやア姉さん、マアこのやはゞかわ。」さと「否ナ姉さんだネエ、お前の姉さんとは気が付かなんだヨネエ。」つる「たれでもお前は米さんの本妻だから、姉さんだらうおやアないかネ、、、」さと「マヤ堪忍してお呉れ、わたいは本妻ぢやアないわ。」つる「そして何だエ、お前先頃御婚禮をおしぢやアないか。」さと「イヽエ仕ようと思ふと、お前が邪魔をお入れで、たれに限りだもの。」つる「たれでもお前がお前はんの本妻でございますネエ、米さん。」米「ハヽヽ、何様だか知らねエ。」ふき「是れサ何を言ふのだナ、何かでも宜いぢやアないか騒々しい。」つる「オヤ、、慈母が本気におなりだから、可笑しいぢやアないかネ、、」さと「ヲシ相談がおつかしかア、何かでも一個引取らうハ

ハヽヽ」きさ「オヤ蟲の宜い清様だ、ソラ遊世さんがお出でだ。」をちせ「何だえ、何か悪く言つたのかエ。」いる「アヽお前様にモウ／＼飽き／＼したとお言ひだわ。」なおは「そりやア當然サ、疾うからネエ清様。」米「イヤどうも聞き苦しい、ドレ自己はモウ寝よう。」みき「サア／＼衆人お休みとしなせえ。アヽ草臥れた、ソレ見なモウ丑刻だわな。」火の用心の鐵棒チヤリン／＼／＼。

閑情末摘花五編巻之中　終

閑情末摘花 五編巻之下

第二十九回

斯かる處に外の方にて、音信ふ聲の聞ゆれば、米次郎は枕を擡げて、ヲヤ／＼、ありや久治の聲に似て居るが「ト聞いて側なる遂世は反ね起き、「ほんにネ、久治に違ひ有りませんわ、明けて遣りませうか」米「よく聞いて御覧、久治なら此方へ入れな」ト言ふ折又も頻りに敲いて、モシ／＼此方はお里様のお宅でございますかネ、ちつと御目に懸つてえ事があつて参りました、鳥渡あけてお呉んなさまし」ト言ふに「アイ／＼今明けますヨ」と手燭を燈して其處へ立ち出で、「ヲヤお前は久治さんかネ、」「ヘイ私ア左様、久治でございます、米様は此方にお在でなさいますかネ」「アヽ居ますよ」とお遂は何と言ひつゝ元落理と、戸を引きあければ、久治は遂世を見て惘れ、「ヲヤ／＼お前さんも此に御一所にかえ、夫れにしちやア晝來た時、お見えなさいなかつた、何うこりやアどうした事だ」「ヲヤまア」と、吃驚おしだらう、ナニ此方へお上りよ、そうかい、定めてさぞお待ちましたらうが、何様も翌と延されねえ心持だから、遅くは成つたが出かけましたのサ」「ヲヤ久公か、よく來て呉れた、自己もお前に逢つて種々噺

してえ事も有るヨ、サア此方へ來な。」え「旦那何樣なさいました、私やア今日お前樣の譯を聞いて、實に悔しくツて、夫れから直に驅けだして、こゝへ來て聞くと、イヽエ此方ぢやアねへと、何だか知らねえお方が、けんもほろゝの挨拶、夫れからまた宅へ歸つて、伯父をおもいれ詈さなくつたが、惡因も一所になつて、小言を百萬だん程並べましたら、伯父もたまらなく成つて、ヲレ此の通りでございますと、ト次の間に居たる、伯父の太助が手を捕へ、漸うと引出せば太助は、いつかぐる〳〵と、天窗を剃りし稚道心、米次郎は見て愕りし、エヽ何だ太助さん、イヤ怪しからぬ體體、夫れおやア久公何か自己への分解に、坊主になつたといふわけかえ。」「ヘイさ左樣さ。坊主にでも奴にでも、ならざアなりますめエ、段々わけを聞いて見りやア、お前さんから餘儀ない條で、お情の有つたを承知して、また萬右衛門さんと同意して、お前樣を罪におとし、翌が日は兎も角も、マアさし當つてお前樣を、宿なしにしたぢやアございませんか。私は固來の事、繼母も種々御恩に成つて居る事は、伯父も承知で居ながら、餘りといへばつまらねえ仕方、それで伯父も先非を悔んで、成程お前達に左樣いはれて見りやア、一言の言譯もねえ、米さんもさぞ自己を、憎いとおもつてお在でなさるだらう、その言譯は是れですると、髷をつかめへて根から帶つり、迚もの事にと剃刀で、ぐる〳〵坊主と成りました、モシ旦那え、さぞお腹も立ちましたらうが、伯父がこの通りの姿になりましたから。是れで何卒堪忍し

にお呉んなせえ。」米「コリヤァとんだ事だネ、勿論太助さんが、伺生の叔御と同意して、この始末にしたと言ふ事は、清鶴から詳しく聞いて、満更嬉しくもねえが、トいつて何も太助さんばかりが悪いのぢやァなし、其樣には思はねえ、全體自己がかなで、一杯叔御をはめようとしたのが、ツイはめそくなつたので、俗にいふ人とる龜が人にとられるといふ理ヨ、ハヽヽヽコ時に太助さん、それぢやァ却つて氣の毒だつたのヲ。ト太助が方を見返れば、太助は剃りたての天窓を、くる〳〵と撫で廻し、太「今久治から申した通り、私が不圖した心得違ひ、何卒御免なすつて下さいまし。」米「實に今言つたとほり、コリヤヤウ〳〵、清鶴もお里もこゝへ來な、太助さんが言譯にとつて、坊主に成つたァな。」ます「ヤ左樣でございますかエ。」ト奥より來れば、お里もきたり、さと「太助さん此間は。」太「お前に逢ふも面目ねえヨ。」久「お里さんも何卒堪忍して遣つてお呉んなせえ。」さと「ナニ私は左樣は言つても、いろ〳〵お世話になつて居るから、堪忍するのしないのは有りませんが、まさかこんな事にならうとはおもはず、實にァノ晩には、お前さんがたの仕組だらうとは思ひましたのサ。」米「私もネ、全體萬右衞門さんが餘りな人だと思ひますヨ。」さと「其處でネ旦那、叔父御の事は、まアノ、それで濟しましたが、ここに一ツ、古今稀代妙不測といふ理が有りますのサ。」米「ハヽア、そりやァ何だい。」さと「どうもサ、きつい草雙紙か、人情本にでもありさうといふ理サネ。」米「ハテネ、どういふ譯だエ早く聞しなせえ。」さと「先

頃ソレ例の川崎へ出かけましたらう。」米「ム、大師河原か、お前の氣象で大師さまの、信心を怠らねえのは是れも古今不測だ。」久「處が路で少々怪我をしてネ。」ト是れより鈴か森にてお滋に行きあひ、夫れとも知らで助け、旅篭屋へ泊りて契りしより、宿へ連れかへりし譯、やう／＼今日に至りて紙屑の中にある、手箇の反古より、お滋が身の上を明したる事まで一々語れば、その座に在りあふ人々奇異の思ひをなす内にも、米次郎は一方ならず歡び、米「ハテそりやァ稀有だネ、早く左樣と知りやァ、こんな混雜も出來ず、雙方圓く納まる處だつけが。」をちせ「オヤ左樣かえ怪しからないネエ、夫れぢやアモシ其の事を、白羽根町へお言ひか。」久「イ、エ今日の事だから其の間は有りません、マア些とも早く米さんにお知らせ申さうと思つて、夜中漸うして來る位でございますものヲ。」つる「久さん夫れぢやアお前樣一人が善い事を仕て居て、そのお蔭で衆人が氣を揉んだり、腹を立つたり仕たんだネ。」久さん竹川樣よりか恍惚子の方が宜うございませうネ。」久「ハ、、、、違へなし／＼、そりやァ擦れッからしのばくれんと、藏娘とは一ツにならないネ。」をちせ「オヤ強い恍惚だ、何ぞお奢り。」米「コレサ騒騒しい、其處での久公、叔さんも吾儕への言ひわけに、斯ういふ容に成つたと聞いちやァ、實に氣の毒でならねヘ、いはば自己の叔父御が軍畧から出た事で、マア太助樣の方の罪は輕いス、その輕い者が坊主になつて、本人にしやァ／＼さして置くも氣が利かねえから、何と斯ういふ方にして、些と困

らして遣つてサ、其の上でお滋もお前の方へ匿藏つた理を明して、何も角も一所に團圓めるといふ、理窟にしたら何樣だらう、その趣向はサア斯うだ――ト密々はなせば點頭く久治、太助坊主も掌を打つて、早速承知し夫れよりは、樣々の雜談に、夜も白々と明ければ、久治はやがて太助を伴ひ、白羽根町へ至りて萬右衞門に逢ひ、太助が密の愛をしも見せ、扨樣子を承れば、伯父が愚かな料簡から、お前に頼まれて、清觀が身受を初め、段々の惡巧み、とう／＼米さんを追ひだす始末の、加勢をいたしたと申す事、委しく申さずとたれは不殘御承知の事、サア昨日途中で米さんに行きあひますと、米樣が以ての外の氣色で、コレ太助、今から其方の宅へ行く處だ、淺草に隱して置く、清觀にも逢ひ又今日はお甲に逢つて、委しく聞けば萬右衞門さんと、貴樣との計略で、よく自己が居所立所に迷ふやうな事をしたナ、自己に何の遺恨が有つて、こんな目に逢はしたか、サア其のいひ譯をこゝでしろと、太助を捕へての大立腹、どうでこんな奴は相對ぢやア解らねえ、サア會所へ歩行べと、腕をつかまへて引摺られ、イヤ一言半句もなく、その事が發覺れて見りやア、重々惡いに相違ないから、種々誤つた所が一圓承知なさらず、たれでどうも仕方なしに、コレこの通り旦那樣の見なさる前で、くるくる坊主に成つたらば、夫れで少し心が解け、實に料簡違へだと云つて、髮まで剃つた譯なら堪忍も仕ようが、是れから何でも會所へ曳込んで、村中の頭御が始末をし、其へねえけりやアならねえと

云つて、狂氣のやうに成つて居なさる、夫れも尤もだがサテこの天窗ぢやァ、翌から商賣も出來ず、どうしたら宜からうと云つて、私の方へ參りましたから、見れば思へば膽が潰れ、種々理窟も申したけれど、跡の祭で役に立たず、マァ兎も角も此の始末をお前樣にお咄し申して、御料簡をお借り申さうと思つて參りました。」ト眞面に成つて詰寄せるに、思ひ掛けねば萬右衛門は、太助が容に悔りし、又一ツには此の事を知照所へ言ひたてられては、此の身も濟ぬと心の裏は穩かならねど、了得強情者なれば、少しも弱つた風を見せず、「夫何だ太助さんも、餘りいくぢのない事だ、あんな奴が彼是云ふなら、敲き倒してやれば宜いに、坊主とは情ないナハ、、、。そして氣の強ェ、自己が事を知照所へ訴へるとか、ヘン訟へるなら訴へて見ろ、現在の叔父に對して弓を引いたッて、誰が取りあげるものか、勿論太助さんに内證をたのんで、清鶴を振込ましたのは、些と荒療治かも知らねえが、こつちやァ唯一人の、女兒を無くして居るわけだ、此方でもそれを言立つて、彼奴に泡を吹かせてやらァ、馬鹿々々しい。」「イーエモシ夫れは米さんと、お前樣との込遣りで、申さば私共の知つた事ぢやァございません、今朝態々參つた旨意は、お前樣に惡巧みを惜まれたばかりで、伯父がこの為體、こゝの譯何樣なりと付けて遣つてお呉んなせえ、モシ又分らない御挨拶なら、米樣は扨置き私から、此の事を訴へて、お捌きを受けませう。」ト了得久治は東子、言葉尖く云ひ放せば、萬右衛門も今更に、當惑

しこそ居たりけれ。

第三十回

折から隔ての障子を開け、ここへ入来るこの家の母親、又市と友助に直立敬禮し、「何かの御話は次の間で聞きましたが、いまだ古曽の徳松が、聞いて来て此処で柳田氏、昨日と米次郎に會つた事、併ら父さんのいふ通り、伯父さんを慎みに思つて、右に如何様にも隠れるといふのを、確かに冴の事し、出る所へ出たならば、善いも悪いも明白なるだらうが、それは他人様の話、親子の睦しい中で、血で血を洗ふ様なもの、これにはさうした仕方もあらうが、いまは裁判所へ訴へては、少し役つても戻にますまいがし、穏便なしに御前のたらに、寛大な裁きであらうとは、承知しましたが、拠所なく済ませましたが、それで何もしまいかとて、不届にも本当な悪人等は、物でもいふやうてでございます。夫れ故にまうた…、世へ隠して其のわけを、荒々しく…ばかりとの事、此処で…最初は…お滋娘をきらつたから田舎に引こんで居りましたが、親父にも返さその娘の事を承知で居る様子、内所で呼出し、様々こまかせるといふは、能も非道な出来事をしたもの、これは何ごとでございませんか、あれが悪くば悪いやうに、其の非道を公に立てて、隠密なる上に長話…、其れは仕打ち人の利…失礼、そればかりに

目の、敵役でも仕さうなお計らひは、些と私ア其の胸にも落ちませんト始めて聞きし萬右衛門が、巧みの程の腹立たしさに、小膝を進めて顔見つむれば、萬右衛門は膝立直して、母「イヤ慈母無言つて居なせえ、發明らしく嘴でも、さすがに女の悲しさは、一を知つて二を知らねえ、畢竟アノ通りにしたればこそ、米次郎めは勘當で事濟んだ、理道を立つた日にやア、お滋が死ねば解死人に出なけりやならぬ米次郎、命冥加な奴と言ふ條、この叔父が慈悲の計らひ。」萬「何故又そりやア解死人に。」萬「知れた事サ、手を下して殺しこそせね、米次郎が我儘故に、お滋は憂を驅出して。」トいふを久治が引つとつて、母「ヤモシノヘお言の中ながら、其のお滋さんが無事息災で居た時は、何様なさるエ。」萬「何様するものか、吾が女兒の事だから、吾が引取る分の事。」母「左様して見れば米さん許りがつまらねえ。」萬「親の子を思ふは、誰しも同じ事、馬鹿な兒程可愛いと、譬への通りアノ嘘方の米次郎せへ、ヤレ米ヨ、ソレ米ヨ、と此の慈母が言ふぢやアないか、況してお滋は親孝行で、姿然な性質、夫れを亡くした吾が、心中推察して下され。」母「これは成程御尤も、夫れだから腹癒に、這般なすつたのも分つて居ますが、其の娘御が息災で居たら仔細は有りますめえが、其の時には米さんの、身を何様なさると申す事サ。」萬「娘は死んだに差ひはないが、もし萬一活きて居て、こゝへ歸つて來ればその時は、米次郎の勘當は吾が勘解して宅へ入れ、お里と配はせる分のことサ。」母「成程そんならそれもよ

し、其處で满鶴が納まりは。」 萬「アレハ高が刑妓の事、大金を出して身受した所だが、[illegible]ると云ふ
なら米に遣る、望みがなくば吾が引受けて、[illegible]行を付ける分のこと。」 今「其處で太助が[illegible]天窗は。」
萬「イヤハヤそれにやア チト當惑、シタがそれは當人の、料簡でしたことで、吾が知つた[illegible]でもない。」
久「イヤ知らぬとは被仰られまい、お惜みなさうけて[illegible]巧みの、手傳ひを仕たはかりで此の[illegible]、米様に
嫌はれて、お滋さんが[illegible]出したから、モシ死ねば米さんを解死人にするとて[illegible]つたが、太助の天窗
もその道理。」ト云はれし萬右衛門笑ひを含み、萬「イヤ貴様は年は弱いが、[illegible]仕のない[illegible]發者、成
程太助どのの天窗の蟲喝に一ツもお滋が無事なら、毛の生えるまでの手宛、日雨でも二日雨でも、
望み次第進ぜませう、[illegible] その代り[illegible]の行方が知れねえけりやア[illegible]の[illegible]、[illegible]りやア
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の取形もしどけなく、萬右衛門[illegible]
[illegible]

だれつたうてまいかね、今日は黒服つて參りましたが、他を言ふにも程が有りまさアね、伴様にも早くしてお呉んなましな。」ト云ひつゝ傍へすり寄れば、萬右衛門は今更に、母の見る目も恥しく、突退けて白眼みつけ、「ヱヽ此妓子供と云ひながら、餘り物を知らねえ奴だ、左様なる所だから其方から、催促をうけるものか、疾うに此方から片を付けて、安心してゐはやまく／＼だが、種々割れて清次郎は、この時から勘當だわ。」「ほんに此れは勘當とて、其れは又どうしたわけで。」ト云ふを傍から權藏が、よき折なりと婚禮のこの夜の始末萬右衛門が、對ての事まで言ひければ、清鶴は見開かへて、萬右衛門が何へ逆らひ、左様いふ事とは露知らず、深切ごかしに私を返し、それを越度に此れを勘當ごなれお前の心根、エヽ惜しいコト取返し、泣きつゝする所に、萬右衛門は又更に、當惑して言何も出す、諦は心に快く思へども其處は父母、清鶴を叱つたり、又賺したり詞を盡し、惡い事にはせまいから、まア歸つてと諭されて清鶴は立上り、暇乞ひさへ怱々に、駕籠に打乘り立歸る是れ清次郎と久治が相談にて、萬右衛門を困らせ且つ目を與へて、その意趣はらさんとの計らひなり

跡見送りて萬右衛門が、ハテまア今日はいろ／＼な馬鹿者の來る日だわえ、大袋腹が立つたらう。」ト苦り切つたる顔を見て「元はといへば清次郎と、遣手が悪いから起つた事、お前様許

り、恨む無理もござりません。」トいひも終ら[illegible]へ昇込めば、こりや又待ちや
[illegible]萬右衞門に目禮し、久「サア[illegible]
[illegible]高
右衞門は[illegible]はどうぢやと[illegible]出で是れ[illegible]
から高右衞門は[illegible]
取出し一通[illegible]
今まで[illegible]親子の[illegible]萬「ム、[illegible]
投げたが[illegible]すこの親父は尋ねて[illegible]故、今まで
[illegible]日々の難儀[illegible]
に[illegible]無事で居ようとは[illegible]忍び[illegible]
[illegible]かけした今更に、[illegible]
[illegible]通り、お慈悲さへ[illegible]
[illegible]母は元より[illegible]立町小路[illegible]
[illegible]伯父[illegible]の
心[illegible]忍が岡へ走り出し、

粂次郎へ知らせけり。[illegible]次郎は[illegible]、吉日を撰みて[illegible]をなし、清駒[illegible]忍が[illegible]家におきて、母諸共安楽に暮させける。こゝに於て萬右衛門と粂次郎の中は、元の如くなりしにより粂次郎は久治と共に[illegible]、[illegible]には、[illegible]ある久治なり。猶に深き契りを結びたる事なれば、今更改すべきにあらずとて、[illegible]久治が[illegible]、其の後萬右衛門数多の[illegible]を[illegible]へて、[illegible]に、日々繁昌しけり。然れば久治は折々見合はせて、遠世清之助が身の上を明し、母と萬右衛門に[illegible]、日清之助が[illegible]一ヶ[illegible]に、是れも早速相談整ひ、清之助は本宅へ[illegible]、[illegible]粂次郎が方へ引取り、久治が[illegible]にて改めて、清之助が方へ遣りければ、世の愛を[illegible]成りて、[illegible]萬右衛門は[illegible]者、[illegible]相[illegible]をなし、[illegible]の[illegible]として、[illegible]両ヶ遣り、日遠世清之助は[illegible]の[illegible]へ先頭の[illegible]して、数々の[illegible]衣裳をと遣り、此の一部に[illegible]合ひたる人々みな、たれ／＼に安楽の身となりけり、目出度かりける次第なり。

閑情末摘花五編卷之下　大尾

大正十五年七月二十五日印刷
大正十五年七月二十八日發行

（非賣品）

近代文學大系

第二十一卷

編輯兼發行者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社

右代表者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地　野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區内幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座[illegible]番
振替東京[illegible]番

